

令和元年 (2019年) 度  
国際仏教学大学院大学  
博士学位論文

チベットの長寿成就法  
——『チャッキドンポ』 (*lCags kyi sdong po*) 校訂・訳注研究を中心として——

指導教員 デレアヌ フロリン教授

仏教学研究科博士課程

学籍番号 15211

氏名 信賀 加奈子



## 謝辞

ここに学位論文を提出するあたり、ご指導を賜ったすべてのみなさま方に、真心からの感謝を捧げたい。

デレアヌ フロリン教授は、ICPBS に進学以来、指導教授として常に筆者をあたたく教え導いてくださり、筆者は今日まで無事学究生活を送ることができた。先生のご批判を仰がぬまま在学中に提出された拙論はない。仏教文献学全般にわたる先生の懇切丁寧なご指導なくしては、本論文を提出することも叶わなかった。あらためて深い感謝を捧げたい。

本論文の審査にあたってくださった斎藤明教授からは、*tshe/āyus* を始めとするチベット／サンスクリット対応語について、深い学識に裏付けされた貴重なご教示を賜った。落合俊典教授には、日本古写経研究所の研究成果を通じ、法天訳『佛説大乘聖無量壽決定光明王如來陀羅尼經』(T 937) に比定し得る写本の画像を閲覧する機会を賜った。筆者がここに試訳を提出するチベット語は、福田洋一教授(大谷大学)と Dorji Wangchuk 教授(Universität Hamburg) から、サンスクリット語は宮本久義客員教授(東洋大学大学院)と岩田孝名誉教授(早稲田大学)から、ヴェーダ語は後藤敏文名誉教授(東北大学)から、それぞれの時機に学んだものである。ここに謹んでご叱正を仰ぎたい。

ICPBS のご講義を通じては、Lambert Schmithausen 名誉教授(Universität Hamburg), Mudagamuwe Maithrimurthi 博士(Universität Heidelberg), Robert Thurman 教授(Columbia University), Paul Harrison 教授(Stanford University), Robert Sharf 教授(UC Berkeley), 末木康弘先生(ICPBS Buddhist Bibliography Project), 堀伸一郎先生(IIBS)といった諸先生方から、さまざま手法を学ぶことができた。

タントンギャルポについて、筆者は他の多くの学生と同様、STEARNS 2007 から多くを学んだ。Cyrus Stearns 博士(University of Washington)には、本論文執筆中、筆者の度重なる質問にご返信いただいた。あらためて深く感謝申し上げたい。学会発表等の機会には、Anne C. Klein 教授(Rice University), 三宅伸一郎教授(大谷大学), 根本裕史教授(広島大学), 西沢史仁博士(東京大学), 安田章紀博士(京都大学), Georgios T. Halkias 助教授(University of Hong Kong), Jonathan Silk 教授(Universiteit Leiden), Cathy Cantwell 博士(Oxford University), Jay H. Valentine 助教授(Troy University), Stéphane Arguillère 博士(Inalco), David Higgins 博士(University of Vienna), 伊澤敦子博士(東京大学)をはじめとする諸先生方から数々の貴重なご教示を賜り、また、ご専門の研究分野から諸資料をご恵送いただいた。H.H. Dargyab Rinpoche は、DAGYAB 1991 から図版を転載することをご快諾くださった。Karma Gongde 氏(Head Librarian of BDRC)は、筆者の質問に対し常に明快な回答と解決策を与えてくださった。Michael Balk 博士(SBB)にはツルプ版『リンチェンテルズ』の閲覧にあたり便宜を図っていただいた。

筆者は2017年10月より2セメスターの間 Universität Hamburg に留学し、Dorji Wangchuk 教授のもとで学位論文を執筆する機会に恵まれた。「明日死ぬにしても勉強しよう」(*nangs par 'chi yang bslab*)という、『サキヤレクシェー』の格言がタンカに掲げられた彼の研究室で、ニャンレル・ニマウーセルが発掘したと伝わる『サンリンマ』を一センテンスずつ、じっくり時間をかけて共に読みすすめられたことは、この上ない幸福であり、筆者は大事なことを数多く教わった。「きみたちのために魚を釣ることは

ないが、魚の釣り方は教える」と先生はいわれた。本論文においてどのような魚が釣れているか (或いは釣れていないか) ご叱正を仰ぎたい。Orna Almogi 博士 (Universität Hamburg) からは、ニンマ派の典籍の整理分類方法と八部教説 (*sgrub pa sde brgyad*) との関わりを学んだ。大事に書き留めていたその詳細は、本論文を急遽日本語で提出することになり、ここに収録することが叶わなかった。いつかの機会にこれを発表し、謹んでご叱正を仰ぎたい。

ハンブルク滞在中は、菊谷竜太特定准教授 (京都大学白眉センター) からはダーラニーについて、堀内俊郎博士 (東京大学) からは想定サンスクリット語の扱い方について、それぞれ貴重なご助言を賜った。同じく留学中でいらした Sonam Jamtsho 師 (rDzong-sar-bshad-grwa) には『チャッキドンポの作法並びに灌頂儀軌法』をあの美しい *Planten un Blumen* の日本庭園で幾度も読んでいただいた。Sebastian Nehrlich 氏 (Universität Hamburg) は、『Schwieger目録』をはじめとするドイツ語文献の読解にあたり、常に筆者を助けてくださった。

筆者は日本においても学友に恵まれた。Corin Golding 博士 (Oxford University) は、英訳研究の読解にあたり、常に筆者を助けてくださった。UC Berkeley に留学中の富永曜照氏 (ICPBS) からは、同大学に提出された学位論文 (GYATSO 1981) をご恵送いただいた。太田節三博士 (東京大学) からは、鉄という物質について高師小僧 (loess doll; Lösskindel) という新たな視座を賜った。

本論文が校訂・訳注研究を試みた長寿成就法『チャッキドンポ』は、チベットの伝統的な相承の仕方を保ち、一部の適正な修行者が実践するところの成就法として位置付けられ、いまなおその実践が厳しく制限されている。今日の文献学的アプローチばかりでは学究が困難なこうした事例に対しては、数年前に北インドのとあるお寺でこの教えの修学に必要な読伝 (*lung*) を授かる得難い機会に恵まれた。この契機を筆者に与えてくださった中沢新一特任教授 (明治大学) に感謝申し上げたい。

タントンギャルポは、彼の辞世に「生死輪廻などお笑い沙汰である (*dgod re bro*)」と詠んだと伝わる。この *dgod re bro* という言葉の意味について、Ngag-dbang-'od-srung-dgon-ta 先生と話し合ったことを、最後に書き留めておきたい。先生はこの滑稽さを、猫が鏡に映る自らの姿に飛びかかって遊ぶ可笑しな様に擬え、ご教示くださった。ここに提出する学位論文も *dgod re bro* と表現されるだろう、と鏡を見る度に思う。これまで筆者を支えてくださった数多くの方々の学恩を思い、これからも研鑽を積み重ねてゆきたい。

## 本論文の構成

本論文は、長寿成就法『チャッキドンポ』に関する論考となる第I部、その校訂・訳注研究となる第II部、そして、そのシノプシス等の補助的資料を提出する付録という3部によって構成される。この他、付録の後に文献一覧を付した。各部各章の内容は以下の通りである。

### 第I部 長寿成就法『チャッキドンポ』の形成と展開

#### 第1章 序論

第1章では、序論として、長寿成就法『チャッキドンポ』校訂・訳注研究の前提となる基本的枠組みを提示する。まず *tshe sgrub* (長寿成就法) の思想的意義やチベット大蔵経における長寿成就法の原典について調べ、長寿成就法『チャッキドンポ』の系譜を整理する。

第1.1章では、テルマとして発掘され、相続された長寿成就法の校訂・訳注研究を試みるにあたり、参照する必要がある先行研究について整理する。具体的には、次の4つの視座、即ち——(1.) 伝記に関する研究、(2.) 長寿成就法に関する研究、(3.) テルマに関する研究、(4.) <無量寿宗要経> に関する研究——という4つの視座を設け、これまでの先行研究が何をどこまで明らかにしているかを年代順に一覧にし、これらを概観した上で、本研究の位置付けを提示する。

第1.2章では、本論文の目的と方法を提示する。

#### 第2章 長寿成就法『チャッキドンポ』の概要

第2章では、長寿成就法『チャッキドンポ』の概要を、他の関連する諸資料と共に下記の順序で提示する。

第2.1章では、『チャッキドンポ』発掘の背景として、発掘者リクズイン・グウデムチェンの事績、及び、彼が創始したとされるチャンテルについて、主に彼の直弟子のセトン・ニマサンポが著した伝記『照射する陽光』に基づく概括を試みる。具体的な発掘の経緯、年代については、第2.7章(発掘)において検討する。

第2.2章では、原典研究として本論文において使用した『チャッキドンポ』の3本の木版影印本が収録されている集成類について考察する。

第2.3章では、第2.2章の考察に基づき、『チャッキドンポ』のタイトルと節構成について考察をすすめ、本論文において参照する箇所情報を確定、提示する。

第2.4章では、『チャッキドンポ』の記述言語について考察する。

第2.5章では、『チャッキドンポ』の起源、即ち、パドマサンバヴァが如何にして当該長寿成就法を会得したかについて考察する。

第2.6章では、『チャッキドンポ』がパドマサンバヴァによって埋蔵された経緯を、主に五濁悪世という文脈で捉えて考察する。

第2.7章では、『チャッキドンポ』発掘の経緯について考察する。

第2.8章では、『チャッキドンポ』が称える2つの功德について考察を行う。この2つの功德という構図は〈無量寿宗要経〉にその萌芽が見られ、この点を主に検討する。

第2.9章では、『チャッキドンポ』が〈無量寿宗要経〉からダーラニーを引用した可能性について考察を行う。

第2.10章では、『チャッキドンポ』を修習した結果、長寿に関する持明者となった成就者の具体的事例として、タントンギャルポの死生観を中心に考察する。

### 第3章 結論

第3章では、結論として、第1章、及び、第2章における論考に基づいて明らかになった点と、残された課題を要約して提示する。

## 第II部 長寿成就法『チャッキドンポ』校訂・訳注研究

### 第4章 長寿成就法『チャッキドンポ』テキスト、翻訳、詳解

長寿成就法『チャッキドンポ』の校訂・訳注研究となる第II部では、第I部に続く第4章として、『チャッキドンポ』の第0節から第4節までの5つの節 (§§0-4) を、校訂テキストと翻訳と詳解とに分け、順に提出する。各節の名称は以下の通りである。

- §0. (第0節)長寿成就法『チャッキドンポ』のためのはしがき
- §1. (第1節)長寿成就法『チャッキドンポ』より外なる成就法「貴重な壺」
- §2. (第2節)内なる成就法「チャッキドンポ」
- §3. (第3節)長寿成就法『チャッキドンポ』より秘密なる成就法「虚空の金剛」
- §4. (第4節)長寿成就法『チャッキドンポ』より奥義なる成就法「*Hri* 一字」

### 付録 (Appendix)

第I部 (論考)、及び、第II部 (校訂・訳注研究) の補助的資料として、次の7つの付録を提出する。

- 付録1. 長寿成就法『チャッキドンポ』のシノプシス (§§0-4)
- 付録2. 長寿成就法『チャッキドンポ』に見られる異体字の一覧
- 付録3. 長寿成就法『チャッキドンポ』に見られるダーラニーの一覧
- 付録4. 『力倆類考究』における『チャッキドンポ』の相承系譜
- 付録5. 『ダライ・ラマ5世の聴聞録』における『チャッキドンポ』の相承系譜
- 付録6. 『リンチェンテルズの目録と相伝』における『チャッキドンポ』の相承系譜
- 付録7. チャクサム流長寿成就法に関わる無量寿仏の図

# 目次

謝辞	....	i
本論文の構成	....	iii
目次	....	v
略号一覧	....	ix
図版一覧	....	xviii
表一覧	....	xviii
第I部 長寿成就法『チャッキドンポ』の形成と展開		
第1章 序論	....	1
1.1. 先行研究概観: 本論文の位置付け	....	8
1.1.1. 伝記に関する研究	....	8
1.1.2. 長寿成就法に関する研究	....	13
1.1.3. テルマに関する研究	....	20
1.1.4. <無量寿宗要経>に関する研究	....	25
1.2. 本論文の目的と方法	....	30
1.2.1. 本論文の目的	....	30
1.2.2. 本論文の方法	....	30
第2章 長寿成就法『チャッキドンポ』の概要	....	33
2.1. 『チャッキドンポ』を伝えるチャンテル	....	35
2.1.1. リクズイン・グウデムチェン (1337?-1406)	....	35
2.1.2. チャン (Byang) とチャンテル (Byang-gter)	....	39
2.2. 『チャッキドンポ』を収録する集成類	....	42
2.2.1. 『心成就法ダクポツアルの法類』(TD)	....	42
2.2.2. 『心成就法ダクポツアルの法類』における『チャッキドンポ』の箇所情報	....	44
2.2.3. ツルプ版『リンチェンテルズ』(RT_A)	....	45
2.2.4. パルプン版『リンチェンテルズ』(RT_B)	....	47
2.2.5. 『リンチェンテルズ』における成就八部教	....	48
2.2.6. 『リンチェンテルズ』における『チャッキドンポ』の箇所情報	....	50
2.3. タイトルと節構成	....	52
2.3.1. 『チャッキドンポ』というタイトルについて	....	52

2.3.2.	チャッキドンポ: 鉄のように頑丈な命脈	....	53
2.3.3.	『チャッキドンポ』の節構成について	....	54
2.4.	『チャッキドンポ』の記述言語	....	55
2.4.1.	ダーキニーの符牒 ( <i>mkha' 'gro'i brda skad</i> )	....	55
2.4.2.	ウツディヤーナ語 ( <i>o rgyan skad</i> )	....	58
2.4.3.	インド語 ( <i>rgya gar skad</i> )	....	61
2.5.	起源	....	63
2.5.1.	『チャッキドンポ』の起源に関する『不死の成就の種子_B』の記述	....	63
2.5.2.	マーラティカ洞窟 ( <i>brag phug mā ra ti ka</i> )	....	66
2.6.	埋蔵	....	68
2.6.1.	最後の五百年	....	69
2.6.2.	五濁悪世	....	71
2.6.3.	テルマの守護者 ( <i>gter bdag</i> )	....	73
2.7.	発掘	....	75
2.7.1.	『チャッキドンポ』発掘に関する『照射する陽光』の記述	....	75
2.7.2.	『心成就法ダクポツアルの法類』の発掘と伝承	....	79
2.8.	2つの功德	....	83
2.8.1.	功德に関する〈無量寿宗要経〉と『チャッキドンポ』との間の共通点	....	84
2.8.2.	功德に関する〈無量寿宗要経〉と『チャッキドンポ』との間の相違点	....	85
2.8.3.	ヴェーダ文献における寿命百歳の位置付け	....	86
2.8.4.	仏教文献における寿命百歳の位置付け	....	89
2.9.	〈無量寿宗要経〉に比定されるダーラニー	....	92
2.9.1.	翻訳系譜	....	92
2.9.2.	サンスクリット原典	....	92
2.9.3.	漢訳	....	95
2.9.4.	チベット語訳	....	98
2.9.5.	ダーラニー	....	100
2.9.6.	ダーラニーのテキストと試訳	....	103
2.9.7.	プトウンの見解	....	105
2.9.8.	『リンチェンテルズ』所伝のダーラニー	....	107
2.10.	タントンギャルポ伝にみる長寿に関する持明者の死生観	....	114
2.10.1.	タントンギャルポ伝の原典	....	114
2.10.2.	寿命に関する予言	....	118
2.10.3.	『チャッキドンポ』受法の様子	....	119



2.10.4. 『チメーパルテル』	....	121
2.10.5. タントンギャルポの辞世	....	123
2.10.6. 遷化の様子	....	124
<b>第3章 結論</b>	....	127
3.1. 『チャッキドンポ』の起源、埋蔵、発掘、記述言語について	....	127
3.1.1. 『チャッキドンポ』の起源について	....	127
3.1.2. 『チャッキドンポ』の埋蔵について	....	128
3.1.3. 『チャッキドンポ』の発掘について	....	128
3.1.4. 『チャッキドンポ』の記述言語について	....	129
3.2. <無量寿宗要経> からダーラニーを引用している可能性について	....	130
3.2.1. 第2.8章の考察結果	....	130
3.2.2. 第2.9章の考察結果	....	132
3.3. タントンギャルポ伝にみる長寿に関する持明者の死生観について	....	134
<b>第II部 長寿成就法『チャッキドンポ』校訂・訳注研究</b>		
凡例	....	139
4.1. 第0節 長寿成就法『チャッキドンポ』のためのはしがき	....	142
4.1.1. §0. 校訂テキスト	....	142
4.1.2. §0. 翻訳	....	145
4.1.3. §0. 詳解	....	147
4.2. 第1節 長寿成就法『チャッキドンポ』より外なる成就法「貴重な壺」	....	157
4.2.1. §1. 校訂テキスト	....	157
4.2.2. §1. 翻訳	....	165
4.2.3. §1. 詳解	....	172
4.3. 第2節 内なる成就法「チャッキドンポ」	....	196
4.3.1. §2. 校訂テキスト	....	196
4.3.2. §2. 翻訳	....	204
4.3.3. §2. 詳解	....	210
4.4. 第3節 長寿成就法『チャッキドンポ』より秘密なる成就法「虚空の金剛」	....	229
4.4.1. §3. 校訂テキスト	....	229
4.4.2. §3. 翻訳	....	235
4.4.3. §3. 詳解	....	240
4.5. 第4節 長寿成就法『チャッキドンポ』より奥義なる成就法「 <i>Hrī</i> 一字」	....	257

---

4.5.1. §4. 校訂テキスト	....	257
4.5.2. §4. 翻訳	....	264
4.5.3. §4. 詳解	....	269

## 付録

付録1. 長寿成就法『チャッキドンポ』のシノプシス (§§0-4)	....	286
付録2. 長寿成就法『チャッキドンポ』に見られる異体字の一覧	....	288
付録3. 長寿成就法『チャッキドンポ』に見られるダーラニーの一覧	....	290
付録4. 『力倆類考究』における『チャッキドンポ』の相承系譜	....	291
付録5. 『ダライ・ラマ5世の聴聞録』における『チャッキドンポ』の相承系譜	....	292
付録6. 『リンチェンテルズの目録と相伝』における『チャッキドンポ』の相承系譜	....	295
付録7. チャクサム流長寿成就法に関わる無量寿仏の図	....	296

## 文献一覧

一次文献	....	297
二次文献	....	307

## 略号一覽

### 一般的略号

bp.	<i>bam po</i>
ca.	circa
CE	Common Era
cf.	confer
D	sDe-dge edition of bKa'-'gyur and bsTan-'gyur. Numbers according to: 東北帝国大学法文学部編『西藏大蔵経総目録』東京: 名著出版, 1970.
e.g.	exempli gratia
f.	the following page(s) or line(s)
fol./fols.	folio/folios
i.a.	inter alia
i.e.	id est
n	endnote/footnote
N.B.	nota bene
n.d.	no date
P	Peking edition of bKa'-'gyur and bsTan-'gyur. Numbers according to: 西藏大蔵経研究会編輯『西藏大蔵経総目録・索引: 大谷大学図書館蔵』東京: 鈴木学術財団, 1962.
r	recto
Skt.	Sanskrit
s.v.	sub verbo
T	大正新脩大蔵経
Tib.	Tibetan
Tōhoku	Numbers according to: Yensho Kanakura ... [et al.] (eds.). <i>A Catalogue of the Tohoku University Collection of Tibetan Works on Buddhism</i> . Tohoku University, 1953
v	verso
v./vv.	verse/verses

### 辞書／目録類

APTE	Vaman Shivaram Apte. <i>The Practical Sanskrit-English Dictionary</i> . 3rd Ed., Rev. & Enl.. Delhi: Motilal Banarsidass, 1965.
------	---

- BHSD Franklin Edgerton. *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*, vol. 2 (Dictionary). William Dwight Whitney Linguistic Series. Delhi: Motilal Banarsidass, 1970.
- Bod dbyin shan sbyar*  
Tsepak Rigzin. *Nang don rig pa'i ming tshig bod dbyin shan sbyar = Tibetan-English Dictionary of Buddhist Terminology*. Revised and Enlarged Ed. Dharamsala: Library of Tibetan Works and Archives, 1997.
- 『梵和』 荻原雲来編纂 『漢訳対照梵和大辞典』 増補改訂版. 東京: 講談社, 1979.
- 『仏教語大辞典』  
中村元 『仏教語大辞典』 縮刷版. 東京: 東京書籍, 1981.
- 『佛教漢梵大辞典』  
平川彰編 『佛教漢梵大辞典』 東京: 靈友会, 1997.
- 『中国仏教史辞典』  
鎌田茂雄編 『中国仏教史辞典』 東京: 東京堂出版, 1981.
- DAS Chandra Das. *Tibetan-English Dictionary*. Compact ed. Kyoto: Rinsen Book, 1988.
- DBI Lokesh Chandra. *Dictionary of Buddhist Iconography*. 15 vols. New Delhi: International Academy of Indian Culture and Aditya Prakashan, 1999–2005.
- DEY Nundo Lal Dey. *Geographical Dictionary of Ancient and Mediaeval India*. Delhi: Pratibha Prakashan, 2011. Reprint ed.
- DUNG-DKAR  
Dung-dkar Blo-bzang-'phrin-las (ed.). *Mkhas dbang dung dkar blo bzang 'phrin las mchog gis mdzad pa'i bod rig pa'i tshig mdzod chen mo shes bya rab gsal*. Pe-cin: Krung-go'i-bod-rig-pa-dpe-skrun-khang, 2002.
- Gangs ljongs rig gnas*  
80 vols. lHa-sa: Gangs-ljongs-rig-gnas-dus-deb-khang, 1989–2008. [BDRC#W21016]
- GRIERSON G. A. Grierson (comp. and ed.). *Linguistic survey of India*. Vol. 1, pt. 1. Reprint ed. Delhi: Motilal Banarsidass, 1967 (first edition in Calcutta 1927).
- 『IOM RAS目録』  
SAVITSKY, L. S. (Савицкий, Л. С.). Описание тибетских свитков из Дуньхуана в собрании Института востоковедения АН СССР. Москва: "Наука" Глав. ред. восточной лит-ры, 1991.
- ISP Yasunori Ejima (ed.). *Tibetan-Sanskrit Word Index to the Saddharma-puṇḍarīkasūtra*. Tokyo: Reiyukai, 1998.
- JÄSCHKE Heinrich August Jäschke. *A Tibetan-English Dictionary*. Compact ed. Kyoto: Rinsen Book, 1990 (first published in London: Charge of the Secretary of State for India in Council, 1881)
- 『浄土教典籍目録』

- 佛教大学総合研究所編集『浄土教典籍目録』京都: 佛教大学総合研究所, 2011.
- KANEKO See KANEKO (金子) 1982.
- KHETSUN SANGPO  
See KHETSUN SANGPO 1973.
- 『広辞苑』 新村出編『広辞苑』第7版. 東京: 岩波書店, 2018.
- 『古藏文辞典』  
bTsan-lha Ngag-dbang-tshul-khrims. *brDa dkrol gser gyi me long*. Pe-cin: Mi-rigs-dpe-skrun-khang, 1997.
- 『Lalou目録』 M. Lalou (ed.). *Inventaire des manuscrits tibétains de Touen-houang: conservés à la Bibliothèque nationale (Fonds Pelliot tibétain)*. 3 vols. Paris: Libr. d'Amérique et d'Orient, A.-Maisonneuve, 1939–1961.
- 『LVP目録』 Louis de la Vallée Poussin (ed.). *Catalogue of the Tibetan Manuscripts from Tun-huang in the India Office Library*. London: Oxford University Press, 1962.
- LCHANDRA Lokesh Chandra. *Tibetan-Sanskrit Dictionary*. Compact Ed. Kyoto: Rinsen Book, 1990.
- LCHANDRAS Lokesh Chandra. *Tibetan-Sanskrit Dictionary: Supplementary Volume*. Compact Ed. Kyoto: Rinsen Book, 2009.
- MAYRHOFER Manfred Mayrhofer. *Etymologisches Wörterbuch des Altindischen*. 3 Bände. Heidelberg: C. Winter, 1992–2001.
- 『密教大辞典』  
密教辞典編纂会編『密教大辞典』改訂増補縮刷版. 京都: 法藏館, 1983.
- Mi sna* Don-rdor. *Gangs ljongs lo rgyus thog gi grags can mi sna*. lHa-sa: Bod-ljongs-mi-dmangs-dpe-skrun-khang, 1993.
- 『望月』 望月信亨編『望月佛教大辞典』第1巻(改訂3版), 第2巻(12版), 第3巻(3版), 第4巻(再版), 第5巻(初版), 第6巻(増訂3版). 京都: 世界聖典刊行協会, 1936–1994.
- Mvy* 榊亮三郎編『梵藏漢和四譯對校翻譯名義大集』復刻版. 京都: 臨川書店, 1998.
- MW Sir Monier Monier-Williams. *A Sanskrit-English Dictionary*. 1899. Reprint: Tokyo: Meicho Fukyukai Co., 1986.
- 『七寺一切経目録』  
『七寺一切経目録: 尾張史料』名古屋: 七寺一切経保存会, 1968.
- NEGI J. S. Negi et al., *Tibetan-Sanskrit Dictionary*. 16 vols. Sarnath: Central Institute of Higher Tibetan Studies, Dictionary Unit, 1993–2005.
- PDB Robert E. Buswell Jr. and Donald S. Lopez Jr. (eds.), *The Princeton Dictionary of Buddhism*. Princeton: Princeton University Press, 2014.

## POWERS/TEMPLEMAN

John Powers, David Templeman (eds.), *Historical Dictionary of Tibet*. Lanham, Md.: Scarecrow Press, 2012.

## 『世界民間藏中國敦煌文獻』

世界民間藏中國敦煌文獻編輯委員會著 『世界民間藏中國敦煌文獻』 2 vols. 北京: 中國書店, 2014–2017.

## 『SRITリンチェンテルズ目録』

Sonam Thinlay Ladhingpa (ed.). *Rin chen gter mdzod kyi dkar chag: Rinchenzerzod Catalogue*. 2 vols. Gangtok, Sikkim: Sikkim Research Institute of Tibetology, 1996.

## STP

Lokesh Chandra (ed.). *Sanskrit Texts from the Imperial Palace at Peking: in the Manchurian, Chinese, Mongolian and Tibetan Scripts*. 22 pts. New Delhi: [Institute for the Advancement of Science and Culture], 1966–1976.

## 『東洋文庫リンチェンテルズ目録』

東洋文庫チベット研究委員会編 『リンチェンテルズ目録』 東京: 東洋文庫, 1977.

## Schwieger目録

See SCHWIEGER 1990; SCHWIEGER 1995; SCHWIEGER 1999; EVERDING 2008; SCHWIEGER 2009.

## 『Schwieger目録』

See SCHWIEGER 1995.

## SWTF

Heinz Bechert, Klaus Röhrborn (ed.). *Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1973 ff.

## TIBETAN MEDICINE

Tsering Thakchoe & Tsering Dolma Drungtso (eds.). *Bod lugs sman rtsis kyi tshig mdzod bod dbyin shan sbyar = Tibetan-English Dictionary of Tibetan Medicine & Astrology*. Revised and Enlarged Ed. [Dharamsala]: Drungtso Publisher, 2005.

## 『禪學大辭典』

禪學大辭典編纂所編. 東京: 大修館書店, 1985.

## 『藏文辭海』

土登彭措 (Thub-bstan-phun-tshogs) 主編. *Bod yig tshig gter rgya mtsho*. 3 vols. 成都: 四川民族出版社, 2012.

## 『総合佛教大辞典』

総合佛教大辞典編集委員会編集 『総合佛教大辞典』 京都: 法藏館, 1987.

## 『藏漢』

張怡蓀主編 『藏漢大辞典』 = *Bod rgya tshig mdzod chen mo*. 2 vols. [北京]: 民族出版社, 1993.

## シリーズ／雑誌

- ATH Charles Ramble, Martin Brauen (eds.), *Proceedings of the International Seminar on the Anthropology of Tibet and the Himalaya: September 21-28 1990 at the Ethnographic Museum of the University of Zurich*. Ethnologische Schriften Zürich, 12. Zürich: Ethnographic Museum of the University of Zurich, 1993.
- BCCRS *Buddhism: Critical Concepts in Religious Studies*. London: Routledge, 2005–.
- Buddhist Manuscripts*  
Jens Braarvig (general editor). *Buddhist manuscripts*. 4 vols. Oslo: Hermes Academic Pub., 2000–2016.
- Compilation D  
*dPal chen kī la ya'i chos skor phyogs bsgrigs*. [Khreng-tu'u]: Si-khron-zhing-chen-mi-rigs-zhib-'jug-su'o-bod-kyi-shes-rig-zhib-'jug-khang, 2002. 45 vols. Attached catalogue: *dPal chen kī la ya'i chos skor phyogs bsgrig kyi dkar chag*. 89 p., 27 x 20 cm. [BDRC#W24051]
- GBM RAGHU VIRA & LOKESH CHANDRA. *Gilgit Buddhist Manuscripts*. 10 vols. New Delhi: International Academy of Indian Culture, 1959–1974.
- HR Michael Aris and Aung San Suu Kyi (eds.). *Tibetan Studies in Honour of Hugh Richardson: Proceedings of the International Seminar on Tibetan Studies, Oxford, 1979*. Warminster: Aris & Phillips, 1980.
- 『印仏』 『印度学仏教学研究』
- IIJ *Indo-Iranian Journal*.
- JIABS *Journal of the International Association of Buddhist Studies*. Madison: Department of South Asian Studies, University of Wisconsin.
- JIP *Journal of Indian Philosophy*.
- PS Ramon N. Prats (ed.). *The Pandita and the Siddha: Tibetan Studies in Honour of E. Gene Smith*. Dharamshala: Amnye Machen Institute, 2007.
- RET *Revue d'Etudes Tibétaines*.
- RTP Donald S. Lopez, Jr. (ed.). *Religions of Tibet in Practice*. Princeton, NJ: Princeton University Press, 1997.
- STM Mona Schrempf (ed.). *Soundings in Tibetan Medicine: Anthropological and Historical Perspectives*. Leiden: Brill, 2007.
- TJ *The Tibet Journal*.
- TLSG José Ignacio Cabezón and Roger R. Jackson (eds.) *Tibetan Literature: Studies in Genre*. Ithaca, N.Y.: Snow Lion, 1996.
- TSWS Tibetan Sanskrit Work Series.

- VOHD Verzeichnis der Orientalischen Handschriften in Deutschland. Stuttgart: Franz Steiner.
- WSTB Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde.
- ZDMG Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft.

団体／データベース (Accessed 10 December 2019)

- BDRC Buddhist Digital Resource Center.  
[<https://www.tbrc.org>]
- IASWR Institute for the Advanced Studies of World Religions.
- ICPBS International College for Postgraduate Buddhist Studies.
- IDP The International Dunhuang Project. [<http://idp.bl.uk>]
- IIBS The International Institute for Buddhist Studies.
- IOL India Office Library.
- IOM RAS Institute of Oriental Manuscripts of the Russian Academy of Sciences.

NGMCP/NGMPP

The Nepalese-German Manuscript Cataloguing Project.  
[<https://www.aai.uni-hamburg.de/en/forschung/ngmcp>]

日本古写経データベース

[<https://koshakyo-database.icabs.ac.jp>]

- OTDO Old Tibetan Documents Online. [<http://otdo.aa-ken.jp>]

Philologia Tibetica

[<https://philologia-tibetica.blogspot.com>]

- SRIT Sikkim Research Institute of Tibetology/Namgyal Institute of Tibetology.  
[<http://tibetology.net>]

- SUNY State University of New York Press.

- Tiblical [<https://sites.google.com/site/tiblical/>]

記号

- () 「()」内には、筆者による言い換え、被翻訳語句の一般的な綴り、生卒年等をあげた。

E.g.) リクズイン・グウデムチェン (Rig-'dzin rGod-ldem-can. 1337?-1406; BDRC#P5254)

この他、二次文献について、責任表示の原表記名と、使用した刷版を「()」内にあげた。

E.g.) HORI (堀) 1912 (1971)

- [] 「[]」内には、テキストの箇所情報や筆者による補足をあげた。

E.g.) [§0.1.1]



箇所情報の記述方法は次のとおりである。

・ 頁数, 行数

E.g.) 2,14 (i.e. p. 2, l. 14)

・ 偈番号, 章数

E.g.) *Sutta Nipāta*, no. 804 in Ch. IV. 6. *Jarāsutta*, 1.

補足の記述方法は次のとおりである。

E.g.) See BOORD 1993:207: ‘Those *yogins* [...] are instructed in the process of this achievement by A18 (B22, C12) [N.B.: A18≈*rDo rje phur pa'i tshe sgrub*], [...]’.

『』

「『』」内には, 特定の文献名をあげた。

E.g.) 『心成就法ダクポツアルの法類』

E.g.) 長寿成就法『チャッキドンポ』

E.g.) 法成訳『大乘無量寿経』(T 936)

<>

「<>」内には, 諸翻訳を含めた文献の総称をあげた。

E.g.) <無量寿宗要経>

E.g.) <真実撰経>

「」

「」内には, 特定の節名等をあげた。

E.g.) 第1節外なる成就法「貴重な壺」

\*

「\*」は, 筆者による想定サンスクリットの前に付した。

E.g.) \**āyurdhara*

§

「§」は, 『チャッキドンポ』の節番号を意味する。本論文の章立て (Cross reference) には, 「章」を用いて区別した。

E.g.) §2.1.1

E.g.) 第2.1.1章

...

「...」は, 語句の省略を意味する。

## チベット語の表記法

・ 原則としてワイリー方式でローマナイズし,<sup>1</sup> イタリック体の小文字で記述した。

E.g.) 「ལགས་ཀྱི་སྤོང་པོ།」 → 「*lcags kyi sdong po*」

・ 結合した子音 (conjunct consonants) は, 「+」記号を付さず, 繋げて記述した。アチュン ('*a-chung* 「འ་」) が足字となる場合は, 長母音として記述した。

E.g.) 「པདྨ།」 → 「*padma*」

E.g.) 「ཨ་མི་ཏཱ་བ།」 → 「*a mi tā bha*」

・ 判読できた場合は, 「°」 (*rjes su nga ro*) は 「*m̄*」 と, 「<sup>◌</sup>」 (*sna ldan*) は 「*m̄*」 と, 区別してローマナイズした。

E.g.) 「སྐྱོ་སྐྱོ་ཏཱ་ཀླ་ཏ།」 → 「*saṃ skr ta'i skad*」

<sup>1</sup> See WYLIE 1959.

E.g.) 「ཨོྃ」 → 「om」

・テキストを固有名詞（書籍名を除く）として扱う際は、音節間をハイフン（「-」）で繋ぎ、ローマン体で記述した。その際、テキスト冒頭の音節の基字 (*ming gzhi*) のみを大文字で示した。

E.g.) 「གུབ་ཚེན་ཐང་སྟོང་རྒྱལ་པོ།」 → 「Grub-chen Thang-stong-rgyal-po」

E.g.) 「ཐོ་ཡོར་ནག་པོ།」 → 「Tho-yor-nag-po」

・テキストが書籍名に該当する場合は、テキスト冒頭の音節の基字のみを大文字で示し、音節間にハイフンを付すことなく、イタリック体で記述した。

E.g.) 「ལྷགས་ཀྱི་སྟོང་པོ།」 → 「*lCags kyi sdong po*」

・複数の語形が認められる場合は、一次資料に依拠し、適宜選分して記述した。本文中に統一性を欠くことになったのは、その為である。

E.g.) *phreng ba*, 'phreng ba

・そり舌音 (retroflex letters: རྩ་ཐ་རྩ་ཐ་) <sup>2</sup> 等、サンスクリット語の音写形と考えられる語句は、サンスクリット語の表記法に従った。

E.g.) 「སེ་སྐྱི་ཏའི་སྐད།」 → 「*saṃ skr ta'i skad*」

E.g.) 「དྲ་གི་རྣམས།」 → 「*dā ki rnams*」

E.g.) 「ལྷ་མོ་ཅན་ལྷོ་ལྷོ།」 → 「*lha mo tsandha lī*」Ha-mo Caṇḍālī

E.g.) 「ཇི།」 → 「*iti*」

・縮略語 (*skun glbsdus yig*) や文末の *-gs (da log dra)* に相当するそり舌音の *-ḍa (ཐ་)* は、特に注記することなく、正書法に従って改めた。 <sup>3</sup>

E.g.) 「ལྷོ་བ།」 → 「ཨོྃ་རྒྱལ།」 → 「*o rgyan*」

E.g.) 「ལྷཏ།」 → 「ལྷགས།」 → 「*lcags*」

・ダーラニーは、小文字で示し、音節間にハイフンを付すことなく、イタリック体で記述した。サンスクリット語の音写形と考えられる語句は、必要に応じて、サンスクリット語の表記法に従って記述した。

E.g.) 「བ་མོ་གྲ་ག་མ་ཏེ།」 → 「*bha ga wa te:*」 → 「*bhagavate*」

E.g.) 「ཨོྃ་བདེ་ཡུ་ཀ་བ་ཅི་ཧཱུྃ་ཧཱུྃ།」 → 「*om badzra yakṣa ka ba ci hūṃ bhrūṃ:*」 → 「*om vajrayakṣa kavaci hūṃ bhrūṃ*」

・シェー (*shad* 「།」) 等のパンクチュエーション・マークは下記例のようにローマナイズし、イタリック体で記述した。 <sup>4</sup>

<sup>2</sup> See JÄSCHKE, p. [viii]–ix.

<sup>3</sup> See EIMER 1992: 56–104, ROLOFF 2009: 57–66.

<sup>4</sup> シェー (།) は、BEYER 1992 が注意を促しているように、ピリオドやカンマといったパンクチュエーション・マーク以上の役割、即ち、読者に息継ぎをする箇所を示す役割をも担うものである。『チャッキドンポ』の実践においては、ダーラニー等の念誦が重要な意味をもつから、より慎重にこれを取り扱う必要が知られる。

See BEYER 1992: 51–52: '[...] single Tibetan punctuation mark—the *śad* or vertical stroke. This should not be confused with our period or comma: it is not so much a syntactic signal as it is an indication of where the reader—and all Tibetans read out loud—can pause and take a breath. Thus the *śad* is often but not necessarily

E.g.) 「།」 「།」 「།」 「།」 「།」 「།」 → 「/」

E.g.) 「།།」 → 「//」

E.g.) 「།」 「།」 → 「:」

・テルシェー (*gter shad* 「།」) は、パドマサンバヴァが埋蔵したテルマ文献に特有のデリミターとして知られ、この意味でシェー (།) と区別されるが、<sup>5</sup> その区別は必ずしも厳格ではない。<sup>6</sup> テキスト中にシェー (།) とテルシェー (།) との間の異同混同が見られた場合は、従って、文脈に即したものと筆者が判断した方のデリミターを適宜採用した。

・敬畏すべき語句の前に置かれるチェゴ (*che mgo* 「།」) は、<sup>7</sup> 「*che mgo*」 とローマナイズした上で、補記した。

E.g.) *thams cad mkhyen gzigs che mgo [che mgo] ། lnga pa'i gsan yig nas ...*

---

found after major syntactic units such as sentences; and it occurs not only after such units, but anywhere a reader might pause—the end of every line of poetry, after a vocative, and between individual items in a long list’.

<sup>5</sup> See BEYER 1992:53: ‘A special *gter-šad*—two small circles, one above the other, separated by a short horizontal line—is used in writing *gter-ma* or “hidden treasures,” texts supposedly hidden by Padmasambhava in the eighth and then discovered, centuries later, by a special class of seers called *gter-ston* “revealers of hidden treasure.”’.

<sup>6</sup> See GYATSO 1996:158: ‘It is also recognizable by the orthographical device of the *gter shad*—a ། separating each line instead of the standard ། used in other forms of Tibetan literature. However, sometimes the *gter shad* is used improperly to mark the subsidiary commentaries and associated rituals as well’.

<sup>7</sup> See ZLA-BA-TSHE-RING 1999:103: ‘*che mgo [che mgo] ། che mgo/ bla dpon che rgu'i che ba 'degs byed mtshan sogs kyi mgor sbyar ba dper na che mgo [che mgo] ། gong sa/ che mgo [che mgo] ། skyabs mgon lta bu*’.

上記参照文献については、三宅伸一郎教授 (大谷大学) よりご教示を賜った。ここに記して感謝申し上げたい。

## 図版一覧

図版番号	表名	p.
1.	ドゥシャ文字 ( <i>bru sha</i> ) の例 (CHANDRA 1982:59b)	57
2.	<無量寿宗要経> に比定されるギルギット写本の一断片	94
3.	ウッディヤーナ, ギルギット, 敦煌, チャンの位置を示す地図	95
4.	チベット語訳<無量寿宗要経>の写本 (IOL Tib J 308, 3v)	100

## 表一覧

表番号	表名	p.
1.	ジターリの三部作に関する文献情報	4
2.	『チャッキドンポ』を構成する全6節 (§§0-5) の名称一覧	31
3.	至高の三化身と八教説三部	38
4.	『心成就法ダクポツアルの法類』の目録と実際の箇所情報との対照表	45
5.	『リンチェンテルズの目録と相伝』と実際の箇所情報との対照表	50
6.	§0.1.1 と §1.1.1 で用いられていると想定される文字と言語の一覧	55
7.	MIMAKI (御牧) 1984 に提出された表に基づく <無量寿宗要経> の翻訳系譜	92
8.	諸エディション中に見られる <無量寿宗要経> のサンスクリット語タイトルの一覧	93
9.	チベット大蔵経に収録された <無量寿宗要経> 所在一覧	98
10.	チベット語訳<無量寿宗要経>のダーラニーが含む「オーム」の個数一覧	105
11.	『十万タントラ目録』における <無量寿宗要経> のダーラニーに関する二分類	106
12.	『リンチェンテルズ』に見在する <無量寿宗要経> に比定されるダーラニーを引くテルマの一覧	108
13.	想定されるサンスクリットの語形 (§0.1.1)	149
14.	チベットの伝統的な薬学における薬材の分類方法と比較した 5つの精分 ( <i>dwangs ma lnga</i> )	174
15.	五仏とそのダーラニーの一覧 (§1.2.2)	175
16.	<i>a mi dhe wa</i> ≈ *Amidhewa に関する異読の一覧	176
17.	五仏と五仏座の配置	178
18.	5つの精分と4つの甘露が成分とする材料名と分量	188
19.	来たる最後の五百年に関する6つの特徴 (§1.7.1) と5つの特徴 (§2.1.1) との対照表	210
20.	<無量寿宗要経> 中に説示される如来の108個の名号と §3.4.2 所説の名称一覧	250
21.	無量光仏/馬頭尊/無量寿仏 in 馬頭尊/パドマツェワンツェルの様相一覧	270

## 第I部

### 長寿成就法『チャッキドンポ』の形成と展開



# 第1章 序論

## *tshe sgrub* の思想的意義

*tshe sgrub* というチベット語は、*tshe* (生命/寿命/時/機会)<sup>8</sup> という名詞と、*sgrub* (～を成就する)<sup>9</sup> という他動詞より成る複合語で、寿命を延長する一儀軌として知られる。<sup>10</sup> 例えば、14–15世紀チベットの大成者 (*grub chen*) タントンギャルポ (Thang-stong-rgyal-po. 1361?–1485 BDRC#P2778) は、*tshe sgrub* を修習、成就した結果、大凡125歳という長命を得て、最期には極楽往生を果たした人物、即ち、長寿に関する持明者 (*tshe yi rig 'dzin*) と「なった」(*grub*)<sup>11</sup> 人物として、広くヒマラヤ文化圏において著名である。

*tshe sgrub* の英語訳には longevity practice が、<sup>12</sup> ドイツ語訳には Lebensverlängerung や Vollendung (des Lebens) 等が、<sup>13</sup> 一般にみとめられる。*tshe sgrub* は、しかし、偏に異熟の延命、即ち、肉体の存続のみを旨趣するものではない。その内実は多様で、類似する 'chi blul'chi bslu (Skt. *mṛtyuvañcana*) や *bcud len (rasāyana)* といった複数のジャンル間に重複も見られ、これを包含する場合、一義的な定義付けは困難である。<sup>14</sup> 例えば、

<sup>8</sup> See 『蔵漢』 s.v. *tshe* (p. 2280): '(1) *srog* [...] (2) *dus sam skabs*', Jäschke, s.v. *tshe* (p. 450): '1. time, in a gen. sense [...] when it is, when it was [...] 2. time of life [...] life'.

<sup>9</sup> See 『蔵漢』 s.v. *sgrub pa* (p. 616): '(1.) (*tha dad pa*) *bsgrubs pa/ bsgrub pa/ sgrubs/* (1) *byed pa/* [...] (2) *nyo ba/* [...] (3) *bzo ba/* (4) *rang dngos su rtogs pa'i blo'm rang brjod pa'i sgras rang gi dgag bya dngos su bcad nas rtogs par bya ba ma yin pa'i chos/ bum pa dang/ ka ba lia bu rang rang gi don spyi 'char ba rang rang gi dgag bya'i don spyi 'char ba la mi ltos pa'o/* [...] (5) *brtag pa'am brtsi ba/* [...] (6) *chos nyams su len pa/* [...] (2.) *bden bzhi mi rtag sogs bcu drug gi nang gses shig ste sems phyin ci log spangs te phyin ci ma log par sbyor ba*, Jäschke, s.v. *sgrub pa* (p. 121): '1. to complete, finish, perform, carry out [...] to make, achieve, manufacture, obtain, attain, [...] to procure [...] to gain [...] to furnish with, to supply'.

チベット大蔵経中には、*sgrub* の他に *bsgrub* という語形を用いて、*tshe bsgrub* という語句を題名に含む用例も見在する。

E.g. *Tshe bsgrub pa'i thabs. \*Āyuhṣādhana*. P 4863, rGyud-'grel, zu, 172b2–173b1; *mGon po dmar po'i tshe bsgrub. \*Raktanāthāyuhparirakṣā*. P 4927, rGyud-'grel, zu, 279b5–280b8.

<sup>10</sup> See 『蔵漢』 s.v. *tshe sgrub* (p. 2281): '*tshe spel ba'i cho ga*'.

<sup>11</sup> See 『蔵漢』 s.v. *grub pa* (p. 404): '(1) '*grub pa'i 'das pa/* (2) (*siddhi*) *dngos grub/* [...] (3) (*yul*) *dus 'das pa ston byed kyi tshig grogs shig*', Jäschke, s.v. *grub pa* (p. 77): '1. made ready, complete; perfect [...] 2. the state of perfection'.

<sup>12</sup> E.g. BOORD 1993:207: 'longevity ritual (*tshe sgrub*)'; SAMUEL 2012a:[263]: 'the longevity practice (*tshe sgrub*)'. Cf. BOORD 1993:14: '*tshe sgrub* (for the attainment of long life, *āyurvidhi*)'.

<sup>13</sup> E.g. SCHUH 1976:171: '(*tshe grub-pa'i 'bras-bu*) Früchte Lebensverlängerung'; SCHWIEGER 1995:151: '*Tshe-sgrub lcags-kyi sdon-po*: Die äußere Vollendung (des Lebens), Edelsteinflasche'.

<sup>14</sup> Cf. ALMOGI 2005:39–40n48: 'Rituals concerning longevity, for example, should also be included in the category of initiation (*tshe dbang*) or in that of *sādhana* (*tshe sgrub*, *srog sgrub*); they should also be classified under the category of averting rituals, in the sense of removing hindrances and averting misfortune, such as in the case of *rim gro* or *sku rim*; some other rituals concerned with longevity should be classified under the category of ransom rituals, such as ransoming potential longevity (*bla blu* or *bla tshe blu ba*) and "buying off" death ('*chi ba blu ba'i cho ga* or short '*chi blu*). Other types of longevity rituals, such as *tshe 'gugs*, *g.yang 'bod*, *g.yang 'gugs*, etc., should likewise be classified into one of the sub-categories of the general category of ritual or build distinct sub-categories under the sub-category of longevity rituals, as is the case, for example, with the rituals known as *zhabs brtan* or *brtan bzhugs*'.

EINO 2005 は、ヴェーダ文献中に寿命百歳が不死に等しく扱われることを認めつつも、「死にうち勝つ儀式」(‘*mṛtyumjaya* or ritual device to conquer death’, p. 109) と「長寿に関わる儀式」(‘*āyusya* rites’, p. 118) とを別々に系統立てて論じている。<sup>15</sup> *tshe sgrub* は、ことほどさように複雑な内容をたたえており、その旨趣は、個々の *tshe sgrub* が説示する功德によって與えられるものといえる。

本論文が校訂・訳注研究を試みる『チャッキドンポ』(*ICags kyi sdong po*) は、パドマサンバヴァ (Padmasambhava. fl. ca. 8c. BDR#P4956) が埋蔵し、リクズイン・グウデムチェン (Rig-'dzin rGod-ldem-can. 1337?-1406. BDR#P5254) が発掘したチャンテル (Byang-gter) に由来する *tshe sgrub* の一つで、その功德は多岐にわたるが、大要においては、(1.) 存命中に寿命百歳を全うすること、(2.) 死後に極楽世界 (*bde ba can; sukhāvātī*) に往生すること、という 2 点を説示するものである。百年という単位が長命を意図することは、仏典の中に広く認められるが (e.g. *Dhammapada*, vv. 110–115), この観念の萌芽は、より古くは、ヴェーダ文献の中に認められる、百年の間不死を叶える呪文 (e.g. *Atharvaveda-Saṁhitā*, III 11) にまで遡及する。『チャッキドンポ』では、この慶賀すべき百年という長寿が、勤修者の存命中に彼らをして十波羅蜜を習得し、五道十地を経過する有暇と見做され、これが極楽往生——無上なる完全なさとりから不退転である界境への往生——の前提となっている。因時の肉体が *tshe sgrub* の方便によって果時の仏身に展開する、という思想を示すものといえよう。以上の趣旨を踏まえ、ここに *tshe sgrub* を「長寿成就法」と訳出し、<sup>16</sup> 考察をすすめることにしたい。

肉体の死のみならず、生をも含めた死という概念、即ち、輪廻からの脱却を旨趣する長寿成就法は、まさしく仏教の本流の中に位置付けられるべきものである。人間の寿命を百年とし、これを不死に等しく扱う観念はインド・ヨーロッパ祖語の一般思想に既に胚胎されているが、仏教の説く長寿成就法における「寿命百歳」という観念は、「生／中有／死」等に分けた場合の、異熟の「生」の期間に過ぎない。この有暇の期間に極楽浄土往生を目指すことを説く仏教の長寿成就法は、その萌芽が古くヴェーダ文献に遡求し得るとは言いながら、その思想的基盤はヴェーダ文献中のそれと根本的に異なるものである。

## チベット大蔵経における長寿成就法の原典

長寿を成就することに理がある、ということ説く仏典は、菩薩思想の大乗的展開を思想的基盤として成立したものと考えられ、チベットにおいて盛んに探究された。仔細に見れ

<sup>15</sup> See EINO 2005:117–118: ‘[...] the concept of overcoming death is closely related with immortality (*amṛtatva*), and the immortality usually means the life of one hundred years or to live full duration of life [...] But in this article I did not deal with such rites that are categorized into *āyusya* and *bhaiṣajya* or rites performed as a remedy for sickness, because they, in my opinion, probably belong to different tradition. The *āyusya* rites may have a more general character as the expression of a common desire for longevity and the *bhaiṣajya* rites have later developed into Ancient Indian medicine’.

<sup>16</sup> *tshe sgrub/bsgrub* の和訳語についてチベット大蔵経の目録を徴すれば、密教部 (rGyud/rGyud-'grel) に収録された次のような訳題を参照し得る。

E.g. 『寿命成就法』 (D 2336: *Tshe sgrub pa'i thabs*); 『寿命成就教訓』 (D 2420: *Tshe sgrub pa'i gdams ngag*); 『寿命成就勸誡』 (P 3262: *Tshe sgrub pa'i gdams ngag*); 『寿成就法』 (P 4863: *Tshe bsgrub pa'i thabs*); 『赤色尊者寿成就勸誡』 (P 4927: *mGon po dmar po'i tshe bsgrub*).



ば今世紀に至るまでいろいろあげることができるが、14–15世紀をその年代の中核とすると言ってよいであろう。例えば、チベット大蔵経の密教部 (rGyud) に収録されて伝わる『長寿成就法』(D 2336: *Tshe sgrub pa'i thabs. \*Āyuhṣādhana*) は、<sup>17</sup> ナキリンチェン (Nags-kyi-rin-chen, alias Vanaratna. 1384–1468. BDRC#P207) とソナムギャツォ (bSod-nams-rgya-mtsho. 1424–1482. BDRC#P208) によって、チベット語に訳出されたことが知られる。当該の仏典は1フォリオにも満たない小部であり、これに比定し得るインド語資料も今日までにこれを特定することができなかったが、<sup>18</sup> 15世紀チベットにある種の長寿成就法が流伝していたことを裏づける証左として、『長寿成就法』(D 2336) は考慮に値いする。<sup>19</sup>

長寿成就法の主尊は多岐にわたるが、<sup>20</sup> 無量光仏 (\*Od-dpag-med; Skt. Amitābha. 無限の光明をもつもの)、無量寿仏 (Tshe-dpag-med; Skt. Amitāyus. 無限の寿命をもつもの)、<sup>21</sup> 或いはまた、無量寿智仏 (§2.7.3: Ye-shes-tshe-dpag-med; ApS\_t, §5: Tshe-dang-ye-shes-dpag-tu-med-pa; ApS\_s, §4: Aparimitāyurjñāna. 無限の寿命と智慧をもつもの)<sup>22</sup> を主とする長寿成就法については、FUJINAKA/NAKAMIKADO (藤仲/中御門) 2018 が整理した‘マチク流とジターリ流’ (p.436) という二大流派の諸著作が、大枠として本論文に概観を与えよう。<sup>23</sup>

<sup>17</sup> D 2336: rGyud, zhi 299b3–299b6.

<sup>18</sup> 当該資料 (D 2336) に比定し得るインド語資料が想望される事由は、特に \*āyuhṣādhana という語の用例に関わる。“rgya gar skad du/ ā yu: sādha nam” (299b3) という表記から推定される \*āyuhṣādhana というインド語は、主な辞書類 (i.e. APTE, BHSD, MW, SWTF, 『梵和』) を徴するに、見出し語として掲載が見当たらず、*tshe sgrub pa'i thabs* との対応も、LCHANDRA が、当該資料 (D 2336) を根拠に掲載しているに過ぎない。See LCHANDRA, s.v. *tshe sgrub pa'i thabs* (p. 1947): ‘āyuhṣādhana kaṃ. tam. [NB: i.e. D] 2336’.

成就法集として知られるアバヤーカラグプタ (Abhayākara-gupta; ca. 11th–12c) の『サーダナマラー』(Sādhanamālā) にも、管見の限り、\*āyuhṣādhana の用例は見当たらない。今後の学究に期したい。

<sup>19</sup> ソナムギャツォは、EHRHARD 2002 によれば、「長寿成就法」(*tshe sgrub*, p. 82) を翻訳するのみならず、授法してもいた。See EHRHARD 2002:82: ‘Because of the latter prophecy the decision was made that bSod-nams rgya-mtsho should first perform a “life prolonging ritual” (*tshe sgrub*) for Byams-gling Paṅ-chen (addressed with the title “rJe Ya-da”), and only if the signs were right would work on the great stūpa be started. bSod-nams rgya-mtsho accordingly went to the monastery of Tshal-min and undertook the required ritual, which is said to have prolonged the life of Byams-gling Paṅ-chen up to the age of seventy-five years’.

<sup>20</sup> 長寿成就法の主尊としてまず注目されるのは、「寿命三尊」(*tshe lha rnam gsum*) という用語で知られる無量寿仏 (Tshe-dpag-med; Amitāyus)、白ターラー尊 (sGrol-dkar; Sitatārā)、そして、仏頂尊勝 (gTsug-tor-nam-rgyal-ma; Uṣṇīṣavijayā) であろう。See 『藏漢』 s.v. *tshe lha rnam gsum* (p. 2284): ‘*lha tshe dpag med dang/ sgrol dkar/ rnam rgyal ma ste gsum*’. See also GYATSO 1981: 142–143, HALKIAS 2013:145.

<sup>21</sup> See FUJITA (藤田) 2001:115: ‘仏と眷属の寿命無量のゆえにアミターユス (Amitāyus 無限の寿命をもつもの)、仏の光明無量のゆえにアミターバ (Amitābha 無限の光明をもつもの) という二つの名をあげる。チベット訳でも、*tshe dpag med* (=Amitāyus) と *ḥod dpag med* (=Amitābha) の二名をあげる’.

<sup>22</sup> See FUJITA (藤田) 2001:323: ‘[...] 後世 Aparimitāyus (無量壽), 詳しくは Aparimitāyur-jñānasuviniścitatejorāja または Amitāyur-jñānaviniścaya-rāja (or -rājendra) (無量壽決定〔光明〕王) という佛が登場し、その陀羅尼經典が、インドから中央アジアにかけて廣く流布したが、これは、もともとは Amitābha とは (したがって Amitāyus と) 區別して説かれた別の佛であり、また <法華經> の久遠佛を指すものでもない’.

<sup>23</sup> チベットにおける長寿成就法の流派については、この他、GYATSO 1981 の考察が参照される。See GYATSO

前者マチク流は、マチク・ドゥッペーゲルモ (Ma-gcig Grub-pa'i-rgyal-mo, alias Jñānaḍākinī Siddharājñī. ca. 10–11c. BDRC#P0RK58)<sup>24</sup> に由来する。マチク流の諸著作中、<sup>25</sup> 『無量寿智成就法』 (D 2143/P 2992) において読誦が説示されるダーラニーは、本論文がその校訂・訳注研究を試みる『チャッキドンポ』と同じく、〈無量寿宗要経〉所出のダーラニーである可能性が指摘されている。<sup>26</sup>

一方のジターリ流は、後期インド仏教瑜伽行中観派 (\*Yogācāra-Mādhyamika) の論師ジターリ (Jitāri/Jetāri; Tib. Dze-tā-ri, dGra-las-rnam-par-gyal-ba. ca. 960–1040)<sup>27</sup> に由来する。ジターリ流の諸著作の中では、『無量寿讚』 (D 2698/P 3522), 『無量寿智成就法』 (D 2699/P 3523), 『無量寿智儀軌』 (D 2700/P 3524) という3著作が、相互に‘有機的連関を持った’ (p. 6) ‘ジターリの三部作’ (p. 433) とされ、FUJINAKA/NAKAMIKADO (藤仲/中御門) 2018 に訳注研究が発表されている (see 表1)。<sup>28</sup> この‘三部作’の内では最も大部の『無量

1981:323: ‘A special type of practice has evolved around Amitāyus which has become widespread in Tibetan Buddhism. This is the system of the ‘long-life initiation’ (tshe-dbang) and its accompanying sādhanas. [...] One of the major long-life initiation systems is attributed to Thang-stong. Other long-life initiations originate with Ma-gcig Grub-pa'i rGyal-mo, the sTag-lung-pas, and lHo-brag Las-kyi rDo-rje’.

<sup>24</sup> マチク・ドゥッペーゲルモの年代については、FUJINAKA/NAKAMIKADO (藤仲/中御門) 2018 に、彼女からミラレパ (Mi-la-ras-pa. 1040–1123. BDRC#P1853), 或いは、レーチュン・ドルジェタクパ (Ras-chung rDo-rje-grags-pa. 1085–1161. BDRC#P4278) への相承系譜を事由に、「10世紀の後半から11世紀前半の人ということになろうか」 (p. 454n25) という一想定がなされている。

<sup>25</sup> *Tshe dang ye shes dpag tu med pa'i dkyil 'khor gyi cho ga* (\*Aparimitāyurjñānamaṅḍalavidhi. D 2141/P 2993); *Tshe dang ye shes dpag tu med pa zhes bya ba'i sgrub thabs* (\*Aparimitāyurjñānāmasādhana. D 2143/P 2992); *Tshe dang ye shes dpag tu med pa'i sgrub thabs* (\*Aparimitāyurjñānasādhana. D 2145/P 2990); *bCom ldan 'das tshe dang ye shes dpag tu med pa'i dkyil 'khor gyi cho ga* (\*Bhagavadaparimitāyurjñānamaṅḍalavidhi. D 2146/P 2991); *Tshe dpag tu med pa'i sbyin sreg gi cho ga* (\*Aparimitāyurhomavidhi. D 2144/P 2994); *rTa mgrin gyi sgrub thabs* (\*Hayagrīvasādhana. D 2142/P 2995).

See 『浄土教典籍目録』 (2011):45–47, HALKIAS 2013:143–144, FUJINAKA/NAKAMIKADO (藤仲/中御門) 2018:16–18 (付録1 ダーキニー・シッディラージャ (マチク・ドゥッペー・ゲルモ) の阿弥陀仏関係の著作).

<sup>26</sup> See FUJINAKA/NAKAMIKADO (藤仲/中御門) 2018:17: ‘後半部分には心呪の真言 (『鼓音声陀羅尼經』所出), ‘無量寿智決定王如来’の真言 (『宗要経』[NB: i.e. 〈無量寿宗要経〉] 所出) を唱える部分がある’.

<sup>27</sup> For Jitāri/Jetāri, see ROERICH 1949:v. 1, p. 230; SHIRASAKI (白崎) 1981:84; HALKIAS 2013:145; FUJINAKA/NAKAMIKADO (藤仲/中御門) 2018:6, 433–445.

<sup>28</sup> 表1: ジターリの三部作に関する文献情報

No.	タイトル	和訳掲載頁
1.	『無量寿讚』 <i>Tshe dpag med la bstod pa'i Aparimitāyuhstotra</i> D 2698: rGyud, nu 66b3–67a3/P 3522: rGyud-'grel, nyu 81a5–81b6	437–438
2.	『無量寿智成就法』 <i>Tshe dang ye shes dpag tu med pa'i sgrub thabs</i> *Aparimitāyurjñānasādhana D 2699: rGyud, nu 67a3–67b4/P 3523: rGyud-'grel, nyu 81b6–82b2	438–440
3.	『無量寿智儀軌』 <i>Tshe dang ye shes dpag tu med pa'i cho ga</i> *Aparimitāyurjñānavidhi D 2700: rGyud, nu 67b4–69a4/P 3524: rGyud-'grel, nyu 82b2–84a6	440–445

寿智儀軌』に、読誦 (*bklag*) が説示される「無量寿仏のダーラニー」(*tshe dpag med pa'i gzungs*) は、<sup>29</sup> FUJINAKA/NAKAMIKADO (藤仲/中御門) 2018 の考察によれば、〈無量寿宗要経〉に比定されるダーラニーを意図する。<sup>30</sup>

以上に短く徴した長寿成就法の原典は、何もチベット大蔵経の密教部 (*rGyud/rGyud-'grel*) に収録されて伝わり、インド語資料の持つ原典的形態が類推される。『チャッキドンポ』は、パドマサンバヴァが埋蔵し、リクズイン・グウデムチェンがこれをテルマ (*gter ma*. 埋蔵教説) として発掘、相続した長寿成就法であるが、第2章以下において論究するように、『チャッキドンポ』における主要な問題、即ち、尊格、功德、ダーラニー等の解明には、インド語資料の持つ原典的形態 (原語、原文) が鍵となっている。具体的な例証としては、「五現等覚」 (§4.2.3: *mngon byang lnga*), 「三金剛」 (*rdo rje gsum*), 「四儀軌」 (*cho ga bzhi*) といった、金剛頂経系タントラの系統に思惟形式において連なるもの、或いは、これを踏まえたもの、と考えられる用例の解明にあたり、こうした原典的形態の意義が認められることになろう。

チャンテルが伝えるヴァジュラキーラの理論、及びその儀軌に関わる詳細な研究として知られる BOORD 1993 によれば、チャンテルが伝える長寿成就法は、インド起源の密教が伝えるそれと「根本的に異なる」(‘differ in no fundamental fashion’, p. 225)。<sup>31</sup> チャンテルが伝える長寿成就法は、従って、決して特異な傍流ではなく、パドマサンバヴァに遡るカーマ (*bka' ma*. 口頭伝承/口頭伝承経典) の順当な展開として、或いは、ドクソグラフィ (*doxography*) として、とらえることができる。<sup>32</sup>

### 長寿成就法『チャッキドンポ』の系譜

長寿成就法『チャッキドンポ』の相承系譜については、本尊 (無量寿仏) からパドマサンバヴァへの口訣 (§1.3.3: *yi dam lha yi lung*) を起源とし、以降に伸展する。この相承系譜において、本尊 (無量寿仏) とパドマサンバヴァの間にチャンダーリー女神 (*Caṇḍālī*) が介在することは、<sup>33</sup> 『チャッキドンポ』が、ウッディヤーナの地のダーキニー (§0.2.2: *o rgyan yul gyi mkha' 'gro ma*) によって、そのダーキニーの隠符 (*mkha' 'gro'i brda yig*) で記され、

<sup>29</sup> *Tshe dang ye shes dpag tu med pa'i cho ga*, D 68b2/P 83b2: *tshe dpag med pa'i gzungs bklag cing//*  
For a Japanese translation, see FUJINAKA/NAKAMIKADO (藤仲/中御門) 2018:442.

<sup>30</sup> See FUJINAKA/NAKAMIKADO (藤仲/中御門) 2018:471n94: ‘プトン『カンギユル目録』『タントラ目録』には、このタイトルでは掲載されていないため[sic], 『宗要経』[NB: i.e. 〈無量寿宗要経〉]のものと考えられる’.

<sup>31</sup> BOORD 1993:225: ‘Many of the rites of Vajrakīla, said to have been derived from these *mūatantras*, are self-evidently modelled on paradigmatic norms of tantric Buddhist praxis. The rites of assembled offerings (*gaṇacakra*) and longevity (*āyurvidhi*) and so on, looked at above, differ in no fundamental fashion from their counterparts in the religious cycles of other Vajrayāna deities’.

<sup>32</sup> See BOORD 1993:225: ‘In many respects, the eighth century texts of the *bka' ma* traditions appear better organized than the later *gter ma* discoveries of Rig-'dzin rgod-ldem. Since the overwhelming majority of documents in the Byang-gter school are said to have been delivered as oral instruction by the teacher Padmasambhava, it seems that we witness in these documents vital phases in the evolution of the cult of Vajrakīla’.

<sup>33</sup> See 付録4 (『力備類考究』における『チャッキドンポ』の相承系譜), 付録5 (『ダライ・ラマ 5世の聴聞

秘し匿された、とされる事由に基づくものであろう。こうした「隠された意味」(*sbas don*)等の語義の重層性は、<sup>34</sup>『チャッキドンポ』の相承において特に注意される。相承の具体的内容、様子については、受法者個々の伝記(*rnam thar*)や聴聞録(*gsan yig*)における記述が、例証として注目されよう。例えば、タントンギャルポの伝記によれば、第2章以下において論究するように、『チャッキドンポ』の受法に際し、チャンテルの師ドゥンユギャルツェン(Don-yod-rgyal-mtshan)より灌頂／読伝／口伝(*dbang lung man ngag*)が與えられたことが知られる。してみれば、この口伝(*man ngag*)が、前述の「隠された意味」を解明する素材の一つであるということは、当然考えてよいことであろう。

長寿成就法がその一角を成す成就法(*sgrub thabs*, Skt. *sādhana*)<sup>35</sup>は、主に生起次第を修習する儀軌として知られる。<sup>36</sup>特定のタントラを図象的に実践する／した、こうした行法について、TUCCI 1969は「他の人々にも同様なビジョンが繰り返し現われ得るので、これらを注意深く記録しておく必要があった」(‘it was necessary to make a careful note of it, since in others these same visions might be repeated’, p. 75)と分析している。<sup>37</sup>無上瑜伽タントラの行法、例えば、『秘密集会タントラ』(*Guhyasamājatantra*)の教理の体得、実践については、周知のように、聖者流ではナーガールジュナ(Nāgārjuna)の『成就法要集』が、<sup>38</sup>ジュニャーナパーダ流ではジュニャーナパーダ(*Jñānapāda* alias *Buddhaśrījñāna*)の『普賢成就法』が、<sup>39</sup>それぞれ根本典籍として知られる。こうしたインド撰述の成就法について、リクズイン・グウデムチェンと時代が重なるツォンカパ・ロサンタクパ(Tsong-kha-pa Blo-bzang-grags-pa. 1357–1419. BDRC#P64)は、『成就法要集』について『清淨瑜伽次第』を、<sup>40</sup>『普賢成就法』について『文殊金剛成就法: 密意明示』を、<sup>41</sup>それぞれ著

録』における『チャッキドンポ』の相承系譜)。

<sup>34</sup> See BRADBURN 1995:xxxiii: ‘The higher teachings cannot be grasped by ordinary mind. Vajrayāna teachings depend on Tantras, texts that have at least four levels of meaning: The meaning of the words (*tshig gi don*), the general meaning in context (*spyi don*), the esoteric meaning (*sbas don*), and the ultimate meaning (*mthar thug gi don*). [...] Without the keys to the text, held by lineage masters who have undergone proper training and received complete transmission, the Tantra will remain incomprehensible. The reader who approaches the text with an ordinary mind ‘just doesn’t’ get it’. The tradition is vital for a genuine understanding’.

<sup>35</sup> See LCHANDRA, s.v. *sgrub thabs* (p. 560): ‘(1) *saṃgraha* [...] (2) *sādhana*’.

<sup>36</sup> See 『蔵漢』 s.v. *sgrub thabs* (p. 616): ‘(1) *las don byed tshul*/ [...] (2) *lha sgrub pa’i cho ga*’, Jäschke, s.v. *sgrub thabs* (p. 121): ‘the method of effecting the coercion, of obliging a god to make his appearance’.

<sup>37</sup> TUCCI 1969: ‘This, indeed, does happen and it explains the great number of methods for realization of the particular truths into which the different Tantras plunge deeply. There is hardly any great Master who has not composed *sādhana*s (here: ways of methods how to visualize a deity); who has not, that is, recorded in writing, the visions which appeared to his spirit during the time of spiritual concentration. [...] it was necessary to make a careful note of it, since in others these same visions might be repeated’. For a Japanese translation, see TUCCI 1984:117f.

<sup>38</sup> D 1796/P 2661: *Piṇḍīkṛtasādhana*; *sGrub pa’i thabs mdor byas pa*.

<sup>39</sup> D 1855/P 2718: *Samantabhadrasādhana*; *Kun tu bzang po zhes bya ba’i sgrub pa’i thabs*.

<sup>40</sup> Tōhoku 5303: *rNal ’byor dag pa’i rim pa*.

している。彼の諸著作を受け継ぐ成就法をこれに加えたならば、さらに多くの累次に及ぶことであろう。<sup>42</sup> 成就法を文献学的手法に則り考究する場合、こうした伝統的解釈を累次に及び参看することは必要不可欠な手順であり、実際に、こうした手順に則った優れた研究が数多く発表されている。<sup>43</sup> こうした伝統的解釈を累次に及び参看する手法は、『チャッキドンポ』の考究にあたって、可能な限り適用されるべきであろう。

<sup>41</sup> Tōhoku 5311: 'jam pa'i rdo rje'i sgrub thabs 'jam pa'i dbyangs kyi dgongs pa gsal ba.

<sup>42</sup> 例えば、パンチェンラマ1世ロサンチューキギャルツェン (Blo-bzang-chos-kyi-rgyal-mtshan. 1570–1662. BDRC#P719) が編纂した『秘密集会の根本タントラと成就法等の要訣』(gSang 'dus rtsa rgyud dang sgrub thabs sog's nyams bzhes nyer mkho gnad bsdus. BDRC#W8LS26619) が挙げられよう。上記参照文献については、齋藤保高師 (Potala College) より講読の機会を賜った。ここに記して感謝申し上げたい。

<sup>43</sup> 例えば、SAKURAI (桜井) 2009 は、根本典籍『普賢成就法』の下に同註釈を4本 (e.g. *Samantabhadra-sādhana-vṛtti*. D 1868/P 2731), 成就法を9本 (e.g. *Suviśiṣṭāsādhanopāyikā* D 1891/P 2755) 列挙、整理し、これにツォンカパ・ロサンタクパの『文殊金剛成就法: 密意明示』も加え、‘五相現等覺; rnam pa lñaḥi mñon par byañ chub’ (p. 37) について考察している。

ある特定の章について、タントラの教理の体得、実践のために伝わる成就法も知られる。See TSUDA 1974:10: ‘In the case of *sādhanas*, the state of things is not fundamentally different. They are closely connected with a certain chapter of the text, for example Kṣāntiśrī’s *Sādhana* is connected with the thirteenth chapter of the *Samvarodaya*, and is certainly of great help for the understanding of that chapter, but not of other chapters’.

## 1.1. 先行研究概観: 本論文の位置付け

本1.1章では、テルマとして発掘され、相続された長寿成就法の校訂・訳注研究を試みるにあたり、参照する必要がある先行研究について整理する。具体的には、次の4つの視座、即ち——

- (1.) 伝記に関する研究
- (2.) 長寿成就法に関する研究
- (3.) テルマに関する研究
- (4.) <無量寿宗要経>に関する研究

——という4つの視座を設け、これまでの先行研究が何をどこまで明らかにしているかを年代順に一覧にし、これらを概観した上で、本研究の位置付けを提示する。一覧中の先行研究は、原則として初出文献をあげたが、再録文献しか参照し得なかった場合もある。一覧中に提示した主題は、本論文が設けた視座に基づくものであって、必ずしも個々の論考の概略を示すものではない。

### 1.1.1. 伝記に関する研究

本1.1.1章では、1.1章において設けた4つの視座の内、(1.)の伝記に関する研究について、これまでの先行研究が何をどこまで明らかにしているかを年代順に一覧にし、これらを概観した上で、本研究の位置付けを提示する。被伝者は、本論文がその校訂・訳注研究を試みる『チャッキドンポ』の埋蔵者とされるパドマサンバヴァ (fl. ca. 8c), 発掘者/成就者であるリクズイン・グウデムチェン (1337?-1406), そして成就者であるタントンギャルポ (1361?-1485) を中心にあげたが、本研究の考察対象となる事柄や人物についても網羅的に枚挙することを努めた。

参照文献名	概略
1. DAS 1882	トゥカン3世 ロサンチュエキニマ (1737-1802) が著した『宗義の水晶鏡』の中のニンマ派の章の部分的な英訳研究
2. TUCCI 1949	タントンギャルポ伝『すべてを明らかにする宝鏡』を最も重要な伝記と位置付けつつも、その多くは根拠のない伝説であるとする考察 (p. 162)
3. EVANS-WENTZ 1954	ウゲンリンパ (b. 1323) が発掘したパドマサンバヴァの伝記『ペマカタン』の英訳研究
4. STEIN 1962	演劇の神としてのタントンギャルポについて短く考察 (p. 238)
5. SEYFORTH RUEGG 1966	ダツェーパ・リンチェナムゲル (sGra-tshad-pa Rin-chen-mam-rgyal. 1318-1388) が著したプトウン・リンチェンドゥブ (1290-1364) の伝記 <i>sNyim pa'i me tog</i> に関する考察
6. TASHIGANG 1970	タントンギャルポの宗派について言及 (pp. 4-7)
7. KHETSUN SANGPO (1973)	サンボダクパの項目 (pt. 1, pp. 519-522), リクズイン・グウデムチェンの項目 (pt. 1, pp. 537-540), タントンギャルポの項目 (pt. 1, pp. 565-568) に、それぞれ略伝を提出

8. 『ゴンパサンタルの法類』(1973) 著者不明の前書き (preface, vol. 1) にリクズイン・グウデムチェンの人物像について簡明に論述。リクズイン・グウデムチェンが2人存在した可能性 ('It is possible there were two Rgod-kyi-ldem-'phru-cans') を指摘
9. DARGYAY 1977 (1979) リクズイン・グウデムチェンの略伝 (pp. 129–132) 及び、タントンギャルポの略伝 (pp. 153–156) を提出
10. GYATSO 1980 タントンギャルポを、14世紀後半にリンチェンディン (Rin-chen-sdings) に生まれ、124歳まで生きた実在の人物として考察した論考。タントンギャルポに関する一次資料として、5本の伝記、21本の教義に関する資料 (doctrinal sources) をリストアップしている (pp. 117–119)
11. BLONDEAU 1980 パドマサンバヴァの伝記資料に関する研究
12. KAPSTEIN 1980 シャンパカギユ派に関する論考中にタントンギャルポの宗派について言及 (pp. 141–142)
13. GYATSO 1981 著者が UC Berkeley に提出した博士論文。タントンギャルポ伝『すべてを明らかにする宝鏡』が15世紀に実在したタントンギャルポの歴史資料として有用であると評価 (pp. 8–9)
14. HIRAMATSU (平松) 1982 『宗義の水晶鏡』(ニンマ派の章) の訳注研究
15. GYATSO 1985 チュー (*gcod*) の相伝について広く論じる中に、マククラブドン (Ma-cig-lab-sgron. 1055–1149) からタントンギャルポへの相伝について論究
16. WILLIS 1985 *rnam thar* が、密教の修行において、タントラ文献やその注釈と同等、或いはこれらを補完する存在であることを、初期「ゲルク派の6人の聖者」('the six Dge-lugs-pa siddhas', p. 311) の伝記を主な資料として論じた研究
17. GYATSO 1986a タントンギャルポとアチェラモ (*a lce lha mo*) との関わりについての考察
18. TACHIKAWA (立川) 1987 『宗義の水晶鏡』(カギユ派の章) の訳注研究。シャンパカギユ派の相伝中に、タントンギャルポについて言及 (pp. 50, 94–95nn33–35)
19. DOWMAN 1988 ドルジェダク寺に関する考察の中に、リクズイン・グウデムチェンの人物像について短く言及 (p. 209)
20. GYATSO 1991 辞典 (*Who's Who of Religions*) におけるタントンギャルポの項目を提出
21. DUDJOM RINPOCHE/  
DORJE/KAPSTEIN 1991 『ニンマ派仏教史』におけるリクズイン・グウデムチェンの項目 (pp. [780]–783), 及び、タントンギャルポの項目の英訳 (pp. [802]–804) を提出
22. GYATSO 1992a タントンギャルポのジャンル (*genre*) に関する論考
23. GYATSO 1992b 自叙伝 (*rang nam*) が師と弟子との「合作」('a joint product', p. 469) であることを、ジャック・デリダ (Jacques Derrida. 1930–2004) の用語「署名」("signature") を援用して分析
24. BOORD 1993 プルバに関するチャンテルの伝統 (*byang gter phur pa*) を考察する中に、リクズイン・グウデムチェンの小伝を提出 (pp. 23–28)
25. HERWEG 1994 著者が University of Washington に提出した修士論文。セトン・ニマサンポが著したリクズイン・グウデムチェンの伝記『照射する陽光』の校訂・訳注研究
26. BRADBURN 1995 ニンマ派の相伝を年代順にあげる中に、14–15世紀の師として、リクズイン・グウデムチェンの略伝 (pp. 175–176) とタントンギャルポの略伝 (pp. 187–188) を提出
27. MARTIN 1997 リクズイン・グウデムチェンに関する書誌情報 (i.a. 『ゴンパサンタル』) を、先行研究と共に掲載 (no. 85, late 1300's? p. 55)

28. KUNSANG 1999 ニヤンレル・ニマウーセル (1124-1192) が発掘したパドマサンバヴァの伝記『サンリンマ』の英訳研究
29. SMITH 2001 シャンパカギユ派の一派としてタントンギャルポの宗派 (Thang-lugs) の相承系譜を掲載 (pp. 55-57)
30. EHRHARD 2002 主にシャマル4世チュウダクイエシェ (Chos-grags-ye-shes. 1453-1524) の著した伝記に基づくソナムギャツォ (bSod-nams-rgya-mtsho. 1424-1482) の伝記研究
31. BARRON 2003 クントウル・ロドゥターイエ (1813-1899) の自伝 *Phyogs med ris med kyi bstan pa la 'dun shing dge sbyong gi gzugs brnyan 'chang ba* の英訳研究
32. ZANGPO 2003 クントウル・ロドゥターイエが編纂した『加持大海』 (*Byin rlabs rgya mtsho*) の英訳研究だが、箇所情報が見当たらず、注記も限られている。Pt. 2としてシャンパカギユ派の祖師と相伝を纏める中に、タントンギャルポ (pp. 304-306) とロチェン・ギルメデチェン (p. 344) の略伝を提出。前者の末尾には、『優曇華鬘』 (*U dumbara'i phreng ba*) に収録されたタントンギャルポへの祈願文 (*gsol ba 'debs pa*) である『成就の調べ』 (*Grub pa'i sgra dbyangs*) の英訳 (pp. 307-311) も付加されている
33. YAMAGUCHI (山口) 2004 パドマサンバヴァの出生地ウッディヤーナについて、『魔術で知られたマジ教の地』 (p. 44) と論じる
34. MIYAKE (三宅) 2005 主にアチェラモとタントンギャルポの関わりについて考察 (pp. 61-63)。『稀有なる大海』には、『彼とアチェ・ラモ、あるいは歌舞音曲との関わりについて記されていない』こと、タントンギャルポがアチェラモを創始したとする伝承は後代にできあがったことを指摘
35. DIEMBERGER 2007 ジェツンマ・チューキドンマ (rJe-btsun-ma Chos-kyi-sgron-ma. 1422-1455/1467) の伝記に関する研究
36. TSERING 2007 タントンギャルポの年代に関する考察。彼の長寿成就法についても言及 (p. 273)
37. KARMAI 2007 ダライ・ラマ 5世ガワンロサンギャムツォの自伝とモンドーパ・ジャムヤンワンゲルドルジ (sMon-'gro-pa 'Jam-dbyangs dbang-rgyal rdo-rje. b. 16-17c.) が著した伝記との比較研究
38. STEARNS 2007 タントンギャルポの伝記『すべてを明らかにする宝鏡』の英訳研究。巻末にクンガソナムダクパベルサン (b. 15c) の著書『涅槃のご様子』のチベット文テキストと、その英語訳を提出
39. ROLOFF 2009 ガリパ・サンゲーツェモ (mNga'-ris-pa Sangs-rgyas-rtse-mo. b. 14c) が著したレンダーワ・シュンヌーロドゥ (Red-mdā'-ba gZhon-nu-blo-gros. 1349-1412) の伝記の校訂・訳注研究
40. 『浄土教典籍目録』 (2011) 広く浄土教典籍の文献情報を整理する中に、タントンギャルポの「寿命灌頂儀軌」 (*tshe dbang gi cho ga*) の文献内容を掲載 (pp. 56-57)。彼の利他行として架鉄鎖橋事業をあげ、『シャンパ・カギユ派の大行者』と解説。リクズイン・グウデムチェンの『極楽の誓願』 (*bDe ba can gyi smon lam*) については、『著者グウデムチャンはツァンのガムリン (gTsang Ngam ring) 生まれのニンマ派の人であり、『北蔵 Byang gter (チャンテル)』と呼ばれる四事業 (息災・増益・敬愛・降伏) の法類を撰めた埋蔵経を、西チベットのツァン地方のラダックで発見した』と解説 (p. 88)
41. VALENTINE 2013 リクズイン・ペマティンレー (1641-1717) の自伝『白い水晶鏡』の部分的英訳研究



42. BENTOR 2013	ニャンレル・ニマウーセル が発掘したパドマサンバヴァの伝記『サンリンマ』の英訳研究
43. SHINGA 2016	パドマサンバヴァの心の化身 ( <i>thugs sprul</i> ) として架鉄鎖橋をはじめとする菩薩行をなしたその背景に、彼が修学した弥勒の五法等の典籍が関与していたことを、主に『稀有なる大海』と『すべてを明らかにする宝鏡』を元に考察
44. SHINGA 2017a	主に『稀有なる大海』と『すべてを明らかにする宝鏡』に基づくタントンギャルポの修学事情に関する考察
45. SHINGA 2017b	タントンギャルポの長寿成就法『チャッキドンポ』について、そのタイトルが含む「鉄」( <i>lcags</i> )に着目し、修習内容を考察。伝記資料としては主に『稀有なる大海』と『すべてを明らかにする宝鏡』を使用

本論文が参照するところの、上に表示した伝記に関する主な先行研究は、これを内容から整理してみると、次の4点に纏められる。

(内容1.) パドマサンバヴァ (fl. ca. 8c) を被伝者とする伝記資料としては、ニャンレル・ニマウーセル (1124–1192) が発掘した『サンリンマ』とウゲンリンパ (b. 1323) が発掘したパドマサンバヴァの伝記『ペマカタン』の英訳研究等が発表されており、後者『ペマカタン』については、日本語訳も発表されている。

(内容2.) リクズイン・グウデムチェン (1337?–1406) を被伝者とする伝記資料としては、セトン・ニマサンポ (fl. ca. 14c) が著したリクズイン・グウデムチェンの伝記『照射する陽光』(*gSal byed nyi ma'i 'od zer*) の英訳研究として HERWEG 1994 があげられる。『照射する陽光』には、しかし、『チャッキドンポ』に関する言及が見在しないことが注意される。

(内容3.) タントンギャルポ (1361?–1485) を被伝者とする伝記資料としては、ロチェン・ギェルメデチェン (1540–1615) が著した『すべてを明らかにする宝鏡』(*Kun gsal nor bu'i me long*) を全編にわたって英訳した STEARNS 2007 があげられる。デルゲ版 (18c) のリプリント (BDRC#W23929=Siglum K\_B) を底本とする彼の英訳には、このペチャの頁数が角括弧 ([ ]) に入れて補記されており、読者が原文を確認する便宜を図っている。彼の英訳には、また、底本には見られない章立て (Prologue, chs. 1–15, Colophon) が、簡明なタイトルと共に付されてもいる。『すべてを明らかにする宝鏡』は、先行する『明灯』や『稀有なる大海』といったタントンギャルポの伝記を相互に齟齬のないようロチェン・ギェルメデチェンが纏めるかたちで編纂された伝記であり、この点に注意を要する箇所には、他の伝記の参照箇所が注記されている。STEARNS 2007 の巻末には、クンガーソナムダクパベルサン (b. 15c) の著書『涅槃のご様子』(*Mya ngan las 'das pa'i skor*) のチベット文テキストと、その英語訳が、見開き左頁にウチェン字体、右頁にその英語訳という体裁で提出されている (pp. 441–463)。彼の翻訳において使用された英語の文体について、これを考証する知識は、残念ながら筆者に欠けている。しかし、偈文のそれが、散文のそれと区別されて、文体の呼吸を感じさせること、何より原文に忠実でありながら、21世紀の読者を退屈させることなく読ませる翻訳であることは指摘できる。STEARNS 2007 は、従って、『すべてを明らかにする宝鏡』のみならず、タントンギャルポの諸伝記にわたる浩瀚な研究書として高く評価される。

(内容4.) 被伝者が『チャッキドンポ』を修習した結果、長寿に関する持明者 (*tshe'i rig 'dzin* / *tshe yi rig 'dzin*; Skt. \**āyurdhara*) となる／なったことを記述する伝記の研究として

は、同じく STEARNS 2007 があげられる。『すべてを明らかにする宝鏡』中にこれが叙述される箇所が付された注記<sup>44</sup>の他、Introduction にも、タントンギャルポがチャンテルの師ドゥンユギャルツェン (Don-yod-rgyal-mtshan) からこの長寿成就法を受法した経緯等が考察されている (pp. 26–29)。

上来、伝記に関する主な先行研究をその内容から4点に纏めて整理した。本論文はそのすべてから恩恵を得るものであるが、特に内容4に関連する。内容4については、STEARNS 2007 の翻訳及び所論中に『チャッキドンポ』に関する考察を参照した。STEARNS 2007 は、『チャッキドンポ』の考察にあたりツルプ版のリンチェンテルズ (Siglum CD\_B. In: RT\_A) を使用し、この長寿成就法の埋蔵、発掘、相続等について論述しているが、他の版本は参照されておらず、その研究成果はあくまで概略にとどまっている。STEARNS 2007 の関心は、タントンギャルポの諸伝記を主資料とし、これらを忠実に英訳することに向けられており、被伝者タントンギャルポが『チャッキドンポ』を修習した結果、長寿に関する持明者となり、極楽へ往生するさまを『すべてを明らかにする宝鏡』及び『涅槃のご様子』の訳出を通じて明らかにした。本研究が試みる『チャッキドンポ』の校訂・訳注研究は、従って、STEARNS 2007 を補完する研究として位置付けられよう。

*rnam thar* は、GYATSO 1992b による英訳語 ‘liberation [story]’ (p. 469)<sup>45</sup> に看取されるように、完全なる解脱 (*rnam par thar pa*) を得た聖者の伝記として、密教行者の間で特に珍重されてきた。<sup>46</sup> 密教行者にとって彼らの師 (*bla ma*; Skt. *guru*) は、時に釈尊をも凌ぐ肝要な存在であり、彼らが一体如何様に「完全なる解脱」を得たのかを知る手掛かりとして、或いはまた、彼らの「完全なる解脱」を見極め、精査する術として、*rnam thar* と呼称される聖者の伝記は、大きく機能してきたのである。<sup>47</sup>

<sup>44</sup> STEARNS 2007:503n398: ‘The *Iron Tree (Lcags kyi sdong po)* is the text in the Heart Practice (Thugs sgrub) cycle of Gökyl Demtruchen’s treasures for achieving longevity through meditation on Amitābha, Amitāyus, and Hayagrīva’.

<sup>45</sup> See GYATSO 1992b:469: “‘liberation [story]’ (*rnam-thar*)’.

<sup>46</sup> See WILLIS 1985:[304]–305: ‘Because they [NB: *rnam thars*] are revered as having actually accomplished Enlightenment using tantric means, “in one lifetime, in one body, even in these degenerate times,” as the traditional tantric phrase goes, the subjects of such biographies are called *siddhas*, i.e. “accomplished” or “perfected ones,” “those who have succeeded” (from the Skt. root *sidh*, “to succeed,” “to be successful”), 311: ‘A *rnam-thar*, by presenting the significant experiences of a tantric adept in his or her quest for enlightenment is first and foremost a piece of tantric literature. [...] *rnam-thar* are not simply vehicles for providing inspirational models, but vehicles for providing detailed practical instructions to persons seeking to put the particular teachings of a given *siddha* into practice’; HERWEG 1994:2–3: ‘In Tibet, this form of writing, called *rnam thar*, [...] has proliferated greatly over the last nine hundred years, especially since in tantric Buddhism the role of the teacher has become as important as the role of the first Buddha and has even superseded the Buddha’s importance, as the latter is no longer accessible but the present teacher is’.

<sup>47</sup> 師を慎重に吟味することの重要性は、金を吟味する方法に擬え、仏典中処々に説かれている。See THURMAN 1984:190n12: ‘This verse is known to the commentators as being from the *Vimalaprabhā* commentary on the *Kālacakra*, although it appears in the Pali Canon as well. The Sanskrit occurs as a quotation in the D. Shastri *Tattvasaṃgraha* (Varanasi: Bauddhabharati, 1968), k. 3587: [...]’. 当該の偈については、Robert Thurman 教授 (Columbia University) より数々のご教示を賜った。ここに記して感謝申し上げます。

こうした実践の場において *rnam thar* は、GYATSO 1992b に分析されているように、師が自らの体験を直弟子に口授して書き取らせたり、或いは、遙か後世の弟子筋がその口承によって書き記した、師と弟子との「合作」(‘a joint product’, p. 469) であるところの自叙伝 (*rang rnam*) として伝わる。自叙伝として伝わるテキスト中に敬語 (*zhe sa*)<sup>48</sup> が多用され、多分に誇張された部分がみとめられるのは、この為だ。その最たるものは、被伝者の死に関する記述であろう。自叙伝が著者／被伝者である師の遷化について描写、記載するのは、弟子がこれを必要とするからである。自叙伝は、従って、他者の為には書き残されるものであり、師が自らの「完全なる解脱」を「虚栄心」(‘conceit’, p. 470) から吹聴するものでは、決してない。<sup>49</sup>

HADANO (羽田野) 1986–1988 は、‘チベットの学僧の研究は伝記にはじまって伝記に終る、といってもいいすぎではないであろう’ (チベット篇 2, p. 250) と論述している。伝記研究の重要性は、しかし、‘チベットの学僧’に限定されるものではないであろう。例えば、大成就者 (*grub chen*) として知られるタントンギャルポの伝記『すべてを明らかにする宝鏡』の歴史資料としての価値は、GYATSO 1980 が評価するとおりである。<sup>50</sup> タントンギャルポ伝は、レンダーワ・シュンヌーロドゥ (*Red-mda’-ba gZhon-nu-blo-gros*. 1349–1412. BDRC#P60) やゴルカンチェン (*Ngor-mkhan-chen*) 1世クンガーサンポ (*Kundga’-bzang-po*. 1382–1456. BDRC#P1132) といった同時代の学僧の修学事情を知る手がかりにもなるが、<sup>51</sup> これがあくまで副次的価値であることはいうまでもない。

### 1.1.2 長寿成就法に関する研究

本1.1.2章では、1.1章において設けた4つの視座の内、(2.)の長寿成就法に関する研究について、これまでの先行研究が何をどこまで明らかにしているかを年代順に一覧にし、これらを概観した上で、本研究の位置付けを提示する。長寿成就法は、序論の冒頭において論述したように、その内実は多様で、類似する *’chi blul’chi bslu* (死を欺くもの)、*tshe ’gugs* (寿命の召喚)、*zhabs brtan* (延命祈願)、*bcud len* (養生術) といった複数のジャンル間に重複も見られ、これを包含する場合、一義的な定義付けは困難である。こうした諸用語に関

<sup>48</sup> See 『蔵漢』 s.v. *zhe sa* (p. 2401): ‘(1) *mos gus dang ldan pa’i ming dang tshig dang yig tshogs/* [...] (2) *bkur ba’am gus ’dud’*, Jäschke, s.v. *zhe sa* (pp. 477–478): ‘reverence, respect, civility, politeness, [...] reverential, respectful’.

<sup>49</sup> See GYATSO 1992b:469–470: ‘On the practical level, the merging of author and reader occurs when teachers orally dictate their autobiographies to the disciples. Thus the written text is a joint product. [...] At the minimum, they will often add concluding chapters concerning their master’s death. They also sometimes see fit to edit the text by inserting honorific verbs, which they consider to be appropriate for the exalted self whose story is being told. [...] Both genres are labeled with the euphemistic “liberation [story]” (*rnam-thar*). Variants that are only sometimes used to specify that the text is in fact an autobiography are “own liberation [story]” (*rang-rnam=rang-gi rnam-thar* or *nyid-kyi rnam-thar*) or “liberation [story] told by [his/her own] mouth” (*rnam-thar zhal-gsungs-ma*)’.

<sup>50</sup> See GYATSO 1980:111–112. See also STEARNS 2007:2–11.

<sup>51</sup> See SHINGA 2017a:43–45.

連する研究は枚挙に暇がなく、これらを網羅することはとてもできなかった。以下は筆者が参照し得た限りの先行研究である。

参照文献名	概略
1. TOGANŌ (榎尾) 1931	‘延命法に関する仏教経典’として14本を翻訳年代順に列記し、考察した論考 (pp. 10–16)。 <i>‘延命法に於て、最も重要な役目を勤めて居るものは、云ふまでもなく陀羅尼である’</i> (p. 16) と論述
2. NEBESKY-WOJKOWITZ 1956 (1975)	護符 ( <i>‘srung skud [...] amulets’</i> , p. [503]) や欺死法 ( <i>‘Chi bslu, “ransoming from death”</i> , p. 511, n. 12) の考察を含む、チベットの儀軌に関わる宏闊な研究
3. YOSHIMURA (芳村) 1957	14世紀頃のチベット地域において、『四部医典』( <i>rGyud bzhi</i> ) がチベット医学に携わる者の間で‘馴れた依用書’ (p. 201) とされていたことを推定
4. SNELGROVE 1959	<i>sādhana</i> と <i>siddhi</i> に関する語源学的考察 (vol. 1, p. 138)
5. YOSHIMURA (芳村) 1961	<i>bdud rtsi</i> という語がチベット人にとって‘いわば寿命の支えになるものを意味した’ (p. 257) とし、 <i>bdud rtsi snying po yan lag brgyad pa gsang ba man ngag gi rgyud</i> (i.e. 『四部医典』) に‘寿命藏八科 [醫] の教説奥義’ (p. 262) という訳語を与えて和訳した研究
6. NAKAMURA (中村) 1965	チベットにおける「極楽浄土」の観念について、翻訳の点から考察した論考 (pp. 164–171)
7. WAYMAN 1973	ザヤパンディタ・ロサンティンレー (Dza-ya-panḍi-ta Blo-bzang-'phrin-las. 1642–1708/1715) の <i>Thob yig gsal ba'i me long</i> についてアウトラインを提出 (pp. 225–233)
8. STABLEIN 1976	言語と神話によって象徴されるチベットの医療文化システム (Tibetan medical-cultural system) に関する考察
9. DOUGLAS 1978	チベットの護符に関する図像学的研究
10. FINCKH 1978	『四部医典』の翻訳研究 (ヒンディ語及び日本語で発表された資料を除く) の一覧を掲載 (p. 79)。中でも、モンゴル語とチベット語両版に基づく『四部医典』第1節 ( <i>rTsa ba'i rgyud</i> ) と第2節 ( <i>bShad pa'i rgyud</i> ) の露訳研究である POZDNEEV 1908 を高く評価する
11. WALTER 1980	パドマサンバヴァとヴィマラミトラの錬金業 ( <i>rasāyana</i> ) の解釈に関する比較研究。 <i>Lha-'dre-bka-'-'thang</i> 等のパドマサンバヴァに帰される資料を‘Padmaist materials/literature’ (pp. 319–320) と呼称する
12. GYATSO 1981	『チメーパルテル』 (pp. 142–159)、及び、 <i>grub thob thugs tig</i> に関する考察 (pp. 231–253)
13. SKORUPSKI 1982	ドルジェダク 4世リクズイン・ペマティンレー (Rig-'dzin Padma-'phrin-las. 1641–1717. BDRC#P657) が著述した <i>Sreg sbyang lag len</i> の英訳研究
14. SKORUPSKI 1983	チベットの護符に関する図像学的研究
15. CLIFFORD 1984	『四部医典』の英訳研究
16. MULLIN 1985	ドライ・ラマ 2世ゲンドウンギャムツォ (1476–1542. BDRC#P84) の著作の英訳選。『錬金業の生成法に関する教え』( <i>bCud len gyi gdams pa</i> ) の英訳研究を含む (pp. [183]–191) が、使用テキストに関する文献情報が見出せない

17. MULLIN 1986 死をテーマとするチベット人の著作の英訳選だが、使用テキストに関する文献情報が見出せない。ダライ・ラマ 2世ゲンドウンギャムツォが著した '*Tshedpags-med-kyi-'tshe [sic] -sgrub*' (p. 247) の英訳 (ch. 6, pp. 149–172) を含む
18. BABU 1990 *Kavaca* を暗唱した帰依者は、肉体を離れた後に *Vāgīśvara* (*Hayagrīva*) になり、存命中も *Hayagrīva* の恵みによって長寿 ('longevity', p. 155) を始めとする功德が得られるとする論考
19. KUNSANG 1990 Glossary 中の見出し語として *bcud len* を短く解説 (p. 165)
20. BOORD 1993 リクズイン・グウデムチェンの長寿成就法について、主に『ヴァジュラキーラの長寿成就法』、及び、その元と想定される『キーラの火炎鬘』に基づく考察を提出 (pp. 207–214)
21. SAKUMA (佐久間) 1993 成就法の次第を明らかにする目的で、ニヤーサ (*nyāsa*) の種類と機能について例示する論考
22. SKORUPSKI 1994 カルマチャクメー (1613–1678) の『極楽祈願』 (*bDe chen zhing du 'pho ba'i gdams pa rgyas par bsgrigs pa*) の英訳研究
23. BENTOR 1996 インド及びチベットの聖別儀礼 (*rab gnas; pratiṣṭhā; 'consecration'*) に関する研究
24. WHITE 1996 中世インドの成就者の不死なる身体 ('alchemical body') を広く論じる中に、その萌芽がヴェーダ文献中に人間の寿命が「丸百年」 ("full life span" (*viśvāyus*) of one hundred years', p. 10) と見做されていること、それが不死という概念と結びつくことを論考
25. CABEZÓN 1996 *zhabs brtan* (延命祈願) に関する考察
26. KLEIN/SANGPO 1997 雹 (*ser ba*) から身を守る儀軌に関する考察
27. GERMANO 1997 主にロンチェンラプジャンパ (1308–1364) の著作に基づいて死を考察する中にチル ('*chi bslu*') について言及 (pp. 466–471)
28. GYATSO 1997 タントンギャルポに帰される '*Gro don mkha' khyab ma*' の英訳研究
29. JACKSONR 1997 トウカン 3世ロサンチュエーキニマ (1737–1802) の断食行 (*smyung gnas kyi cho ga*) に関する著作の英訳研究
30. WALTER 2000 「死を欺くこと」 ("Cheating Death" (*mṛtyuvāncana [sic]* in Sanskrit, '*Chi bslu* in Tibetan', p. 605) を中心に、インドの長寿成就法について幅広く論じた研究
31. FUJITA (藤田) 2001 <阿弥陀経>のインドから中国への流伝を論じる中に「チベットにおける浄土教は主に在家者の信仰として展開したようである」と言及し、「チベットの浄土思想が中国や日本のそれと大きく相違していること」を指摘 (p. 176)
32. GRAFE 2001 *Vidyādhara* について詳細に考察する中に、カルマリンパ (*Karma-gling-pa*. b. 14c) の『バルドトウドウル』 (*Bar do thos grol*) の中にこの概念が見出せることを指摘
33. SKORUPSKI 2001 カルマチャクメーの『極楽祈願』の英訳研究。ネパールの木版本 ('a block print acquired in Nepal', p. 48n12) を底本とする。*'pho ba* のサンスクリット対応語として *saṃkrānti*, *cyavana*, *saṃcāra*, *saṃkrāma* を挙げる (p. 145n8)
34. KAJIHAMA (梶濱) 2002 チベットの浄土教思想を広く論じた考察。カルマチャクメーの『極楽祈願』の和訳を提出
35. SCHAEFFER 2002 *Amṛtasiddhi* に関する研究

36. KAPSTEIN 2004 チベットの浄土思想 ('Pure Land orientation in Tibet', p. 32) の発展にテルマが関与していたことを論じる考察 (pp. 32–37)
37. NAKAMURA (中村) 2004 「仏頂尊勝陀羅尼」(Uṣṇīṣavijayādhāraṇī) を唱えれば長寿を得、亡者も極楽世界に転生することを、法隆寺に伝わるサンスクリット写本と共に紹介 (p. 80)
38. YAMAGUCHI (山口) 2004 '運変えの身替わり (トチュールー)' (p. 172) について、'身替わりをつくって、これに本来自分に降りかかる災難を背負ってもらい、この身替わりを追い払う儀式' と解説
39. ALMOGI 2005 長寿に関わる儀軌に関する語彙の研究 (pp. 39–40n48)
40. EINO 2005 「死にうち勝つ儀式」('mṛtyujaya or ritual device to conquer death', p. 109) と「長寿に関わる儀式」('āyusya rites', p. 118) を別々に系統立てる考察
41. HALKIAS 2006 ナムチュー・ミンギュルドルジェ (gNam-chos Mi-'gyur-rdo-rje. 1645–1667) が発掘した *bDe chen zhing gi sgrub* の英訳研究
42. SCHNEIDER 2006 *Mṛtyuvañcanopadeśa* に関する研究
43. DASH 2007 『四部医典』に関する研究
44. WANGCHUK 2008 *tshe la dbang ba'i rig 'dzin* が\**Guhyagarbhatantra* 関連の密教文献に由来することを短く指摘 (p. [227])
45. SAMUEL 2008 長寿 (longevity) をインドの身体論と共に論じた考察 (pp. 271–290). *bcud len* についても短く言及 (p. 278)
46. MENGELE 2010 欺死法 ('*chi blu'* *chi bslu*; Skt. *mṛtyuvañcana*) に関する考察
47. MAETANI (前谷) 2010 仏教における死の意味概念を、ジャイナ教におけるそれと対照させつつ論じた考察。『スッタニパータ』(no. 804), 『清浄道論』(Ch. VIII. 1) 等の日本語訳を提出 (pp. 52–55)
48. YAMAGUCHI (山口) 2010 ネットワークの死者儀礼ピンダ供養 (*pinḍapūjā*) を考察する中に、その目的の一つとして「死者が極楽世界に生まれ変わる事」(p. 108) を指摘
49. SCHNEIDER 2010 *Mṛtyuvañcanopadeśa* に関する研究
50. CANTWELL/MAYER 2010 『チメートクティク』('Chi med srog thig) に関する研究
51. SAKUMA (佐久間) 2011 '仏教タントリズム (密教)' (p. 3) の成就法 (*sādhana*) の成立背景について、図像と宗教実践方法という2つの観点から考察した論考 (pp. 16–38)
52. 『浄土教典籍目録』(2011) 広く浄土教典籍の文献情報を整理する中に、タントンギャルポの '寿命灌頂儀軌' (*Tshe dbang gi cho ga*, pp. 56–57) と、リクズイン・グウデムチェンの '極楽の誓願' (*bDe ba can gyi smon lam*, p. 88) に関する文献内容を掲載
53. SUGIKI (杉木) 2011 『八十四成就者伝』(*Caturaśītisiddhapravṛtti*) に描かれる9–12世紀頃の後期密教の成就者たちの“不死” (*amara*, *amṛta*, 等) (p. 205) の死生観について論じた考察。ヴェーダ文献中に「地上の人が得る“不死”を「100年の寿命を全うすること」とする解釈」(p. 208) を見出し、これが後に一般化されたことを考察
54. GERKE 2012 長寿成就法 (*tshe sgrub*) を現代のチベット人社会の中に観察した研究。調息をその根幹とするが、公にされていない為、「民族学的文献」('ethnographic material', p. 202) を収集することは困難であるとする
55. SAMUEL 2012a ドジヨム・ジグデルイエシエドルジ (1904–1987. BDRC#P736) の『チメートクティク』に関する考察 (p. 263)
56. SAMUEL 2012b 長寿成就法を「中国とインド・チベット」('both the Sinitic and Indo-Tibetan cultural regions', p. i) という2つの文化圏を広く範囲として論じた考察。『養性延命録』といった道教の文献も扱う (p. ii)

57. BOORD 2013 BoORD 1993 の改訂増補版。2002年に出版された *Compilation D* を考察の対照に追加するが、『ヴァジュラキーラの長寿成就法』の部分的英訳などは、BoORD 1993 に提出されたものと大差ない
58. ŌTSUKA (大塚) 2013 仏典における寿命百歳を希求する呪文が‘ヴェーダ聖典の影響下にあった’(p. 459) と考えられることを、『大金色孔雀王呪經』(T 986) 等の用例をもとに指摘
59. HALKIAS 2013 チベットの浄土思想を広く考察した研究。テルマとして発掘された *bde-smon* 資料の一覧を提出 (pp. 213–214)
60. SAMUEL 2014 『チメートクティク』に関する研究
61. TURPEINEN 2015 リクズイン・グウデムチェンのゾクチェン思想を主に『ゴンパサントル』と『自浄自生自照』をもとに論じ、ロンチェンラブジャンパのゾクチェン思想と比較した研究。『心成就法ダクポツアルの法類』に収録されている長寿成就法として長寿成就法『チャッキドンポ』(‘long life practices of the Goddess Iron Tree (*lcags sdong ma*)’, p. 27) に言及
62. CANTWELL 2017 *bcud len/rasāyana* に関する考察
63. TRINLAE 2017 ドウクチェン(‘Brug-chen) 4世ペマカルポ(1527–1592. BDRC#P825) の著書 *Tshe dpag med lha mangs kyi cho ga 'chi med 'dod pa'i re skong* の英訳研究 (pp. 103–128)
64. SHINGA 2017b 『チャッキドンポ』について、「鉄」(*lcags*) の語義を中心に論じた考察
65. LI (Mengyan) 2018 著者が Universität Hamburg に提出した博士論文。プルパ(Phur-pa; Kīla; 橛)に関する諸文献を「長寿成就法」(“longevity ritual” (*tshe sgrub*)’ や「長寿鉤召法」(“summoning the life-energy ritual” (*tshe 'gugs*)’ (p. 164) 等にジャンル分けし、考察
66. NAKASHIMA (中島) 2018 ‘zhi khro の儀軌’(p. 1) に関する研究。『ラマ寂静尊・忿怒尊、寿命成就の灌頂理趣の儀軌 無死の金剛網結と名づくるもの』と題され、訳されたテキスト (pp. 8–11) は、おそらく『チメーパルテル』に比定し得る
67. MEI (梅) 2018 ニンマ派のテルマ所伝の薬成就法 (*sman sgrub*) と養生術 (*bcud len*) に関する文献について論じた考察。『『ゴンパサントル』に類する養生術』(*dGongs pa zang thal gyi bcud len*) の概要を提出する (pp. 185–186) と共に、タントンギャルポの長寿(‘大成就者唐東賈布 [...] 1361-1485’, p. 187) にも短く触れている
68. FUJINAKA/NAKAMIKADO (藤仲/中御門) 2018 チベットにおいて‘受容された’(34n21) ‘マチク流とジターリ流’(p. 436) という二大流派の阿弥陀仏成就法が、<無量寿宗要經> と <無死鼓音声陀羅尼經> という‘密教化した經典の延長線上にある’(34n21) ことを指摘

本論文が参照するところの、上に表示した長寿成就法に関する主な先行研究は、これを内容から整理してみると、次の5点に纏められる。

(内容1.) 養生術 (*bcud len*; *rasāyana*) に関する研究。WALTER 1980 の所論に見られるように、インドにおいて *rasāyana* という用語は、「万能薬」(‘elixirs’ p. 319) や「強壯剤」(‘tonics’) の調合、また、卑金属から貴金属への変換を意味する。万能薬の生成は、既に『チャラカ・サンヒター』(*Caraka-Saṃhitā*) や『スシュルタ・サンヒター』(*Suśruta-Saṃhitā*) に、*rasāyana* という用語を用いた卑金属の貴金属への変換は、シャイヴァ教の聖典 (‘Śaivite materials’) である『ラサールナヴァタントラ』(*Rasārṇavatāntara*) に確認で

きるとする。この想定によれば、卑金属から貴金属への変換は、少なくとも8世紀にまで遡り得る。関連する論考には、RAY 1967 や DASGUPTA 1969があげられる。

(内容2.) チベットの伝統医学、特に『四部医典』に関する翻訳研究。医学 (*gso ba rig pa*) は、周知のように、五大学科 (*rig gnas che ba lnga*) の内に仏教 (*nang don rig pa*) と共に位置付けられている。<sup>52</sup> 仏教と医学は、厳密には、区分けされた学問領域を保つものであるが、長寿成就法の考察にあたっては、広く両者にまたがる知識を要すると見た方がよいであろう。『チャッキドンポ』の校訂・訳注研究にあたっては、特に第1節外なる成就法において説示される「不死なる甘露」(*'chi med bdud rtsi*) 等の調合にあたって使用される薬材に関する用語を日本語に訳出するにあたり、『四部医典』に関する翻訳研究を参照した。

薬材に関する日本語訳は、CLIFFORD 1984 が問題提起しているように、第一に薬材の同定 ('identification', p. 204) において多大な困難が付き纏う。<sup>53</sup> その主な理由としては、薬材の呼称がチベットの各地方毎に異なること、それも時代による変化が見られること、等が挙げられよう。チベットの伝統医学は、かかる事由に対し、主に口伝をもって継承されてきた。これを欠きながら「薬材名を翻訳しようとする取り組みは、控えめにいっても冒険的」('the business of translating the names of the materia medica is risky at best', p. 205) であるとする CLIFFORD 1984 の見解は、『チャッキドンポ』の訳注研究に当たっても、従って、重々注意されるべきである。

(内容3.) ヴェーダ文献中に、人間の寿命を百年とする観念の淵源が認められることを指摘し、百年を全うすることと不死とを結びつけて論じる研究 (e.g. WHITE 1996, EINO 2005, SUGIKI (杉木) 2011)。『チャッキドンポ』において、存命中に寿命百歳を全うすることは、死後に極楽世界に往生することと共に、勤修者が得る功德とされており、こうした研究は、「長寿」と「百歳」との関係について本研究に重要な示唆を與えるものである。TOGANŌ (柁尾) 1931 は、仏教が説く長寿成就法の萌芽が、古くはヴェーダ文献に遡り得る可能性を指摘し、長寿に関する呪文の類を護身用等と条件付けて取り入れたと論じてはいるが、長寿や寿命を百歳と結びつけて論じてはいない。人間の寿命を百年とすることは、しかし、人間の妊娠期間が十ヶ月であるという事象に相似した(この点については、後に第2.8.3章(ヴェーダ文献における寿命百歳の位置付け)において触れる)‘インド・ヨーロッパ祖語以来の伝統’ (Goto (後藤) 2009:41n53) であると考えられ、長寿成就法としてこれを希求することは決して特異な説ではない。

(内容4.) *bde smon* (極楽祈願)<sup>54</sup>, *'chi bslu* (死を欺くもの), *tshe 'gugs* (寿命の召喚), *zhabs brtan* (延命祈願), *bcud len* (養生術) 及び、チャンテル以外の相承にある長寿成就法に関する研究。文献学のみならず、フィールドワークにより採取した諸資料を学術成果として提供する。寿命三尊 (*tshe lha nam gsum*) として知られる無量寿仏 (*Tshe-dpag-*

<sup>52</sup> See 『藏漢』 s.v. *rig gnas che ba lnga* (p. 2682): '*bzo rig pa dang/ gso ba rig pa/ sgra rig pa/ gtan tshigs rig pa/ nang don rig pa ste lnga'o*'.

<sup>53</sup> See CLIFFORD 1984:204–209. For a Japanese translation, see CLIFFORD 1993:283–291.

<sup>54</sup> See KAPSTEIN 2004:16: "'Prayer of the Pure Field of Great Bliss" (Rnam dag bde chen zhing gi smon lam, or Bde-smon)'.



med; Amitāyus), 白ターラー尊 (sGrol-dkar; Sitaṭārā), 仏頂尊勝 (gTsub-tor-rnam-rgyal-ma; Uṣṇīṣavijayā) と長寿成就法とを関連付ける論考も少なくない。<sup>55</sup>

(内容5.) タントンギャルポ, 及び, リクズイン・グウデムチェンに帰される長寿成就法に関する研究。彼らのテルマを分析する中に『チャッキドンポ』に言及する考察,<sup>56</sup> また, 埋蔵者/発掘者/勤修者の名を列記するのみならず, 長寿成就法の内容にまで踏み込んで考察した研究としては, GYATSO 1981 と STEARNS 2007 があげられる。GYATSO 1981 は, タントンギャルポにその起源を求め得る長寿成就法として『チメーパルテル』と呼び慣らわされるテキスト群をあげ, それらを暫定的に 6種類 (CM-1-CM-3, CM-4-CM-6) に整理し, 相承等の内容に関する分析を書誌情報と共に提供している (pp. 142-159)。これらのテキスト群には, 馬頭尊, 或いは無量寿仏を主尊として極楽往生を希求するという内容について, 共通の性格が認められる (p. 153)。この他, 本論文に関連する重要な指摘としては, 勤修者が『チメーパルテル』の修習中に無量寿智仏と一体となるプロセスについて, 後代の付加の可能性を指摘しつつも, 無量寿智仏 ('Aparimiāyurjñāna', p. 159) の一典拠として <無量寿宗要経> (D 674/P 361) が挙げられている。<sup>57</sup> 『チメーパルテル』が新訳と古訳の何れのタントラに「関連する」('affiliated', p. 154) かについて, チベット人の著作家/実践者の間に諸見解が見られることも指摘されている (pp. 154-155)。

リクズイン・グウデムチェンに帰される長寿成就法については, BOORD 1993 の第11章 (Activities for the Benefit of Yogins, pp. 207-214) に, 主に『ヴァジュラキーラの長寿成就法』 (*rDo rje phur pa'i tshe sgrub*), 及び, その元と想定される『キーラの火炎鬘』 (*Phur pa me lce'i 'phreng ba*) に基づく考察が提出されている。灌頂を通じて師から弟子へと授与される「長寿の成就」('siddhis of long life', p. 212) は, 当該箇所が概略するように, 前行 (e.g. 除災行, 沐浴, 曼荼羅供養, 三宝帰敬, 発菩提心, 誓戒, 請願) を前提とし, その後, 生起した金剛無量寿仏 (rDo-rje-tshe-dpag-med; \*Vajrāmitāyus) より授与されるものであり, 吉祥讚や廻向を伴う。以上に概略された「長寿成就法」('tshe sgrub', p. 212) の次第は, 特に『チャッキドンポ』のシノプシス作成にあたり, 本論文が参酌すべき研究成果であるが, 考慮すべきは, プルパに関するチャンテルの伝統 (*byang gter phur pa*) を主とする複数の一次資料を用いた (巻末付録に内容一覧が掲載された 3本の集成類を典拠とする) 概略であるという点であろう。

この他, リクズイン・グウデムチェンに帰される長寿成就法については, 『浄土教典籍目録』(2011) が, 『祝詞集』 (*bDe smon phyogs bsgrigs*) の上巻, pp. 181-184 に収録された「極楽の誓願」 (*bde ba can gyi smon lam*) の文献内容を掲載する (p. 88)。当該箇所に

<sup>55</sup> E.g. GYATSO 1981: 142-143, HALKIAS 2013:145.

Cf. 『蔵漢』 s.v. *tshe lha rnam gsum* (p. 2284): '*lha tshe dpag med dang/ sgröl dkar/ rnam rgyal ma ste gsum*'.

<sup>56</sup> TURPEINEN 2015:27: 'The Wrathful Creativity also contains internal cycles of other deities and their *sādhanas*, such as the cleansing practices of Vajra Vidāraṇa, rituals to acquire wealth centered around Jambala and Yakṣa Aparajita, long life practices of the Goddess Iron Tree (*lcags sdong ma*), *ḍākinī* practices of Vajravārāhī and her black wrathful manifestation Trōma Nagmo (*khros ma nag mo*), as well as a cycle of various Garuda practices including several *sādhanas*, narrative texts and meditation manuals'.

<sup>57</sup> 当該の論考 (i.e. GYATSO 1981:159n37) には誤記が認められる。この点については, 第2.10.4章 (『チメーパルテル』) において論究する。

は、チャンテルに関する「四事業(息災・増益・敬愛・降伏)の法類を撰めた埋蔵経」という解説が付されており、リクズイン・グウデムチェンはこれを「西チベットのツァン地方のラダックで発見した」と記述している。タントンギャルポに帰される長寿成就法としては、2点、即ち、(1.) 東洋文庫蔵チベット蔵外文献 No. 1995 (fol. 1a1-8a1) と、(2.) 同 No. 1995 (fol. 8a1-11a3) 「寿命灌頂儀軌」(*tshe dbang gi cho ga*) の文献内容を掲載する (pp. 56-57)。(1.) の内容は、パドマサンバヴァから伝えられた「無量寿仏に関するニンマ派の延命儀軌の作法、特に規範師が弟子に灌頂する次第を説いたもの」とされている。全体が前行、本行、後の「三部分からなる」ことをはじめ、「親近修念」「弟子の撰取」「我生起」「加持の・寿命の精髓を招くこと、「持明者たちからの甘露の流れが身を満たして寿命が成就された」と観想させ、真言を唱える」など、当該儀軌の内容を詳しく紹介する。(2.) は、「所依の場所と能依の無量寿仏の観想と極楽からの招致」「寿命の召喚と結縛と守護」「誓願」といった構成とされている。加えて、「ユトク・ニンチクの師の伝統と薬供養の補足部分」が付加されており、チベットの伝統医学との密接な関係を指摘する。

上来、長寿成就法に関する主な先行研究をその内容から大きく5点に纏めて整理した。本論文はそのすべてから恩恵を得るものであるが、特に内容5に関連する。リクズイン・グウデムチェンに帰される長寿成就法については、主に『ヴァジュラキーラの長寿成就法』に基づく概略が Boord 1993 に提示されている他、「極楽の誓願」の文献内容が『浄土教典籍目録』(2011)に短く紹介されている。タントンギャルポに帰される長寿成就法については、GYATSO 1981 と STEARNS 2007 が『チメーパルテル』に関する内容分析を行っており、STEARNS 2007 は『チメーパルテル』と『チャッキドンポ』を比較して考察をすすめている。両者は、しかし、『チャッキドンポ』を中心とする論考ではなく、この長寿成就法の具体的実践内容、即ち、勤修者はいつどこでどのようにこれを実践するのか、その功德は何で、何をもって成就の証とするのか、といった、長寿成就法の実際については、これに立ち入るものではない。従って、本論文が試みる『チャッキドンポ』の校訂・訳注研究は、これらを解明することに寄与するものといえる。

### 1.1.3. テルマに関する研究

本1.1.3章では、1.1章において設けた4つの視座の内、(3.)のテルマに関する研究について、これまでの先行研究が何をどこまで明らかにしているかを年代順に一覧にし、これらを概観した上で、本研究の位置付けを提示する。

手順としては、まず、ニンマ派の教法におけるテルマの位置付けを確認する必要がある。これに関するまとまった研究としては、HIRAMATSU (平松) 1982 がトゥカン (Thu'u-bkwan) 3世ロサンチューキニマ (Blo-bzang-chos-kyi-nyi-ma. 1737-1802. BDRC#P170) の著書『一切宗義ニンマ派の章』(*gSang sngags rnying ma'i grub mtha' byung tshul*) を用いて解説しているように (pp. 8-11), 「6つの相承」(*brgyud pa drug*) と「3つの相承」(*brgyud pa gsum*) という所成が参照される。<sup>58</sup> 後者「3つの相承」、即ち、――

<sup>58</sup> *gSang sngags rnying ma'i grub mtha' byung tshul*, 9b4 (as translated into Japanese in HIRAMATSU (平松) 1982:105): *brgyud pa'i rim pa la/ rgyal ba dgongs brgyud/ rig 'dzin brda brgyud/ gang zag snyan brgyud gsum dang/ yang bka' babs lung bstan gyi brgyud pa/ las 'phro gter gyi brgyud pa/ smon lam gtad rgya'i brgyud pa ste brgyud pa drug gi nram bzhag kyang byed do// de dag zhib tu bris na mang bar 'gyur bas de tsam las ma spros so// rnying ma'i chos la ring brgyud bka' ma/ nye brgyud gter ma/ zab mo dag snang gi*

(1.) 遠伝仏説 (*ring brgyud bka' ma*), (2.) 近伝埋蔵教説 (*nye brgyud gter ma*), (3.) 深く清らかな発現 (*zab mo dag snang*)——の中では (2.) の近伝埋蔵教説に位置付けられるテルマは、前者「6つの相承」、即ち、——(1.) 御意による勝者の相承 (*rgyal ba dgongs brgyud*), (2.) 象徴による持明者の相承 (*rig 'dzin brda brgyud*), (3.) 耳による人の相承 (*gang zag snyan brgyud*), (4.) 教誨や予言による相承 (*bka' babs lung bstan gyi brgyud pa*), (5.) テルマ [を封印する] カルマが解けた相承 (*las 'phro gter gyi brgyud pa*), (6.) [テルトゥンのために] 祈願, 封印された相承 (*smon lam gtad rgya'i brgyud pa*)——の全てに関わって伝承される。

テルマの起源 (*byung tshul*) については、上の「6つの相承」に関わり、パドマサンバヴァ等「根拠のある人」(*tshad ma'i skyes bu*) が、未来の所化のために、成就に関わる多くの教誡 (*gdams pa*) を加持し、その守護神 (*gter srung*) に託して埋蔵したとされる。こうしたテルマの法 (*gter chos*) は、ニンマ派に限らず、インド (*rgya gar*) やチベットの他の宗義 (*grub mtha'*) にもある。「テルトゥン」(*gter ston*. 埋蔵教説発掘者) と称する者がこれを自分で拵え (*bcos nas*), 隠し (*sbas te*), 発掘するという (*btan pa'i*) 虚偽 (*rdzus ma*) もあるが、確かに清浄 (*rnam dag*) であるものも多いのであるから、一概にテルマを誹謗することは正しくないとされる。<sup>59</sup>

このように、然るべき時期に然るべき場所でテルトゥンによって発掘されるテルマには、地中から発掘されるサテル (*sa gter*)<sup>60</sup>, テルトウンの御心から発掘されるゴンテル (*dgongs gter*)<sup>61</sup>, 秘かに発掘されるサンテル (*gsang gter*), 公に発掘されるトムテル (*khrom gter*)<sup>62</sup> 等の種類が知られる。テルマに関わる用語は、上に挙げた他にもいろいろ挙げることができ、これらに関する諸研究は枚挙に暇がない。従って、これらを網羅することはとてもできなかった。以下は筆者が参照し得た限りの先行研究である。

*brgyud pa gsum du dbye bar snang bas/ de dag bod du ji ltar byung ba ni/*

<sup>59</sup> *gSang sngags rnying ma'i grub mtha' byung tshul*, 13a4: *gter ma byung tshul ni/ slob dpon padma 'byung gnas la sogs pa tshad ma'i skyes bu 'ga' zhig gis ma 'ongs pa'i gdul bya'i don du mchog thun 'grub pa'i gdams pa mang po gter du sbas te chud mi za bar byin gyis brlabs shing gter srung la gnyer du gtad/ skal ldan las 'phro can dang 'phrad pa'i smon lam btab/ dus nam gyi tshe 'don pa dus der 'don ran pa'i ltas mtshan 'byung tshul/ gter ston gang gis 'don pa de'i ming rus mtshan rtags dang bcas pa gter gyi kha byang du btab/ nam zhig gnas dus gang zag thams cad 'dzom pa na gter de thon nas skal ldan mang po la spel ba la gter chos zhes grags so// spyir gter chos rgya gar du'ang byung zhing/ bod kyi grub mtha' gzhan la'ang yod pas gter chos thams cad rnying ma'i chos su byed pa ni thos rgya chung ba'i skyon no// gter ston du grags pa 'ga' zhig gis rang gis bcos nas sbas te btan pa'i rdzus ma'ang yod mod kyang/ rnam dag yin nges kyang ches [ches] chos] mang bas mtha' gcig tu smod mi rung ngo//*

For an English translation, see DARGYAY 1979:67, and Japanese see HIRAMATSU (平松) 1982:111–112.

<sup>60</sup> See 『蔵漢』 s.v. *gter ma* (p. 2897): '(1) *sa 'og na yod pa'i nor bu/ [...]* (2) *slob dpon chen po padma 'byung gnas kyi ma 'ongs pa'i gdul bya rnam la dgongs nas sa steng gter gyis bkang zhing las can la gtad rgya mdzad pa/ phyis gter ston rnam kyi brag sogs las btan pa'i rten rdzas'*.

<sup>61</sup> See 『蔵漢』 s.v. *dgongs gter* (p. 458): '*dgongs par rang shar du byung ba'i gter chos'*.

<sup>62</sup> THONDUP 2001: 'Many Ter [sic] discoveries take place in secret (*gSang gTer*) and many in public (*Khrom gTer*). See also 『蔵漢』 s.v. *yang gter* (p. 2547): '*gter chos kun gyi nang nas zab pa las kyang ches zab pa'i yang gsang snying po'i gter kha'*.

参照文献名	概略
1. LI (An-che) 1949	成就八部教に関する考察 (pp. 146–148)
2. WADDELL 1958	テルマは、ニンマ派が使用するところの「非正統的な修法」(‘unorthodox practices’, p. 56) を正当化するフィクションであるとする論考。その手法は、龍樹が用いた手法、即ち、大乘の教義は釈迦牟尼が在世中に説いたものであるが、その難解な教義が人々に理解され得るまで龍神たちに委託したものだとする手法、と相通するものである、と論じる。ニンマ派のラマたちが洞窟などから発掘したのはパドマサンバヴァが埋蔵した「福音／教義」(‘gospels’) であって、釈迦牟尼が埋蔵したそれではないことを、両者の間の重要な相違として指摘
3. SMITH 1970	『リンチェンテルズ』の編纂に関する考察 (pp. 62–63. 再録: SMITH 1990:263, 338nn883–884)
4. VOSTRIKOV 1970	浩瀚なチベットの歴史資料を纏めて論じる中に、テルマ ( <i>gter mal gter chos</i> ) の占有する「特別な立場」(‘a special place’, p. 27) を認めつつ、その立場はしばしばチベットの著述家にとってかなり「懐疑的なもの」(‘very sceptical’, p. 27) であったと論じる
5. KOLMAŠ 1971	Library of the Oriental Institute of the Czechoslovak Academy of Sciences, Prague に収蔵されている／いたパルプン版『リンチェンテルズ』のタイトルを影印 (facsimile reproduction) で提供
6. 『ゴンパサンタルの法類』(1973)	チャンテルの発掘について、その詳細に諸説あることを指摘した上で、「ドルジェダク流」(‘Rdo-rje-brag tradition’, preface, vol. 1) に基づく説を紹介
7. KANEKO (金子) 1976	ニンマ派に伝わるテルマについて広く論じた考察。『宗義の水晶鏡』からトウカン 3世ロサンチューキニマ (1737–1802) のテルマに関する見解 (ニンマ派の章, 13a) を引用
8. 『東洋文庫リンチェンテルズ目録』(1977)	ドジョム・ジグデルイェシエドルジ (BDRC#P736) が所蔵する63巻本のツルプ版『リンチェンテルズ』の目録
9. GYATSO 1981	タントンギャルポに帰される 8本のテルマについて、テルマのタイトルや発掘場所 (e.g. bSam-yas-mchims-phu) を整理し、文献情報を付してリストアップした論考 (pp. 263–264)
10. HIRAMATSU (平松) 1982	チャンテルに‘北テルマ’という訳語を与え、リクズイン・グウデムチェンからドルジェダク 4世リクズイン・ペマティンレーまでの‘北テルマ系’の相承系譜を図示 (pp. 176–177nn5–8)。テルマ発掘の一要因として‘後期弘通時の初期に中国禪宗的資料を時代に合わせて潤色し編集すること’ (p. 79n7) を挙げる
11. WANG (王) 1983 (1997)	ニャンレル・ニマウーセルのテルマを‘上部伏蔵’と、グル・チューキワンチュクのテルマを‘下部伏蔵’と、これらやラトナリンパのテルマを総称して“‘南蔵’ (lho-gter)’ と、また、リクズイン・グウデムチェンのテルマを“‘北蔵’ (byang-gter)’ と、それぞれ呼称した考察 (p. 47)
12. GYATSO 1986b	テルマを「持明者の象徴による伝達」(‘the Vidyādhara’s Transmission in Symbols’, p. 13), 或いはまた「非歴史的なもの」(‘ahistorical ( <i>dus gsum ma nges pa’i dus</i> )’) と論じる考察
13. THONDUP 1986	様々なテルマの典籍 (‘the various Terma scriptures’) に関する論考。ラマゴンドウ (Bla-ma-dgongs-’dus) 等の伝承を参照し、東南西北中央の 5つのテルマを挙げる

14. DOWMAN 1988 ドルジェダク寺がツァンボ江の北岸に (p. 205), ミンドルリン寺がその南岸に位置すること (p. 209), また, 両寺が「ライバル」(‘rival’, p. 209) の関係にあったことを考察。チャンテル発掘時のリクズィン・グウデムチェンの年齢を35歳とする (p. 209)
15. KARMAY 1988 パドマサンバヴァが埋蔵し, ボン教のテルトウン, グル・イエシェキュンダク (Guru Ye-shes-khyung-grags, ca. 13c) が発掘した「水の長寿成就法」(*tshe chu*) について言及 (p. 220)。これによってクビライ (Kublai Khan. Tib. Se-chen rgyal-po. 1215–1294. BDRC#P5499) が84歳まで生きたという説は, 信憑性が乏しいとする
16. KUNSANG 1990 巻末の glossary (p. 188) 中に Tshe-dbang-rig-'dzin を含む4種の *vidyādhara* (≈*rig 'dzin rnam pa bzhi'i go 'phang*) を挙げる
17. SCHWIEGER 1990 ベルリン州立図書館 (Stabi) が所蔵するツルプ版『リンチェンテルズ』全63巻の内, vols. 1–14 の目録。テルマに関する簡潔な説明文が提出されている (XXVII–XXXIX)
18. BOORD 1993 チャンテルの概要 (pp. 21–35) を述べた後, そのヴァジュラキーラの理論, 及びこれに関わる儀軌の源流がインドやネパールに求められることを明らかにした論考
19. GYATSO 1993 「墮落した当世」(‘the degenerate times of the present era’, p. 111) にテルマが発掘されるロジクに関する考察
20. GYATSO 1994 グル・チューキワンチュク (1212–1270) の『テルマ発掘大史』(*gTer 'byung chen mo*) を中心に扱った論考
21. SCHWIEGER 1995 ベルリン州立図書館が所蔵するツルプ版『リンチェンテルズ』全63巻の内, vols. 14–34 の目録。本論文においては, CD\_B を収録する RT\_A の書誌情報として参照
22. GYATSO 1996 広くテルマについて論じた考察
23. 『SRITリンチェンテルズ目録』(1996) 61巻本パルプン版『リンチェンテルズ』の目録
24. MARTIN 2001 ボン教のテルトウン, シェンチェンルガ (*gShen-chen-klu-dga'*. 996–1035) のテルマに関する論考
25. TULKU TSULTRIM ZANGPO 2001 リクズィン・グウデムチェンが発掘した『ゴンパサントル』に対する注解書
26. BOORD 2002 『プルデルブムナク』(*Phur 'grel 'bum nag*) の訳注研究
27. ZANGPO 2002 パドマサンバヴァの4つの伝記, 及び『七章の祈願』の英訳研究
28. YAMAGUCHI (山口) 2004 ニンマ派の‘発掘聖者(テルトウン)’ (p. 65) が, ‘発掘本’の中に‘予言書を紛れこませ, 取り出す自分に対する暗示めいた記述をふくめたり, すでにある予言書に合わせて自ら行動したりして, 心ある人々のひんしゆくを買い, 発掘本の内容に対する信用をおとした’とする論考
29. DOCTOR 2005 テルマ (*gter ma*) の‘宝[典]’ (*gter*) という性格に関する考察
30. STEARNS 2007 タントンギャルポに関係するテルマについて, 『チメーパルテル』と『チャッキドンポ』の相関関係を論究 (pp. 26–30)
31. EVERDING 2008 ベルリン州立図書館が所蔵するツルプ版『リンチェンテルズ』全63巻の内, vols. 52–63 の目録

32. GYAMTSO 2011 クントウル・ロドウターイエ (1813–1899) の『百人のテルトウン伝』の英訳研究
33. ALMOGI 2011 SCHWIEGER目録に対する論評
34. TURPEINEN 2015 リクズイン・グウデムチェンのゾクチェンに関する思想について、主に『ゴンパサントル』と『自浄自生自照』に基づき、ロンチェンラプジャンパのゾクチェンに関する思想と比較した研究
35. ARGUILLÈRE 2018 『ゴンパサントル史』に基づき、『ゴンパサントル』がリクズイン・グウデムチェンから彼の弟子であるドゥンユギャルツェンに相承されたことに言及 (p. 205)
36. ALMOGI 2019 ニンマ派の相承において、密教に関する教説、典籍が、遠伝仏説、近伝埋蔵教説、深く清らかな発現という3つの方法によって相伝されることを示し、その中に、古タントラ (*rnying rgyud*) を位置付けて詳細に論じた考察。その相承が「遺伝・通時的」(‘genetic–diachronic’) か「遺伝・共時的」(‘genetic–synchronic’) かといった、新たな視座を導入し、検討を加えている

本論文が参照するところの、上に表示したテルマに関する主な先行研究は、これを内容から整理してみると、次の3点に纏められる。

(内容1.) リクズイン・グウデムチェン、及び、タントンギャルポに帰されるテルマの研究。前者リクズイン・グウデムチェンに帰されるテルマについては、BOORD 1993、及び、これに続く BOORD 2002 が、チャンテルが伝えるヴァジュラキーラ (Vajrakīla; Tib. *rDo-rje-phur-pa*; 金剛槌) の理論、及びこれに関わる儀軌を詳しく考察している。近年では『ゴンパサントル』に関する研究がめざましく進捗しており、この方面からのタントンギャルポの位置付けも明確になりつつある。後者タントンギャルポに帰されるテルマについては、『チメーパルテル』と『チャッキドンポ』の相関関係を論じた STEARNS 2007 が有力な学説といえよう。

(内容2.) テルマを収録した目録の研究。この研究は、目録を対照とした論文形式の研究と、目録そのものを作成、或いは翻訳して刊行するものとに分けられる。後者には、例えば、ベルリン州立図書館が所蔵するツルプ版『リンチェンテルズ』の目録である Schwieger目録 (SCHWIEGER 1990; SCHWIEGER 1995; SCHWIEGER 1999; EVERDING 2008; SCHWIEGER 2009) が挙げられ、テルマ研究の基礎資料となっている。中でも『Schwieger目録』(SCHWIEGER 1995) は、『リンチェンテルズ』に収録された『チャッキドンポ』に関する節構成の分析、コロフォンの調査等を経た精緻な研究成果である。

(内容3.) テルトウンに関する研究。タントンギャルポ、及び、リクズイン・グウデムチェンはクントウル・ロドウターイエ (1813–1899) によって「百人のテルトウン」(*gter ston brgya rtsa*) に選定されている。テルトウンの出現について、網羅的に秩序立てて把握する視座も、テルマ研究には不可欠であろう。

上来、テルマに関する主な先行研究をその内容から大きく3点に纏めて整理した。本論文はそのすべてから恩恵を得るものであるが、特には内容1に関連する。リクズイン・グウデムチェンに帰されるテルマについては、ヴァジュラキーラに関わる諸資料を検討し、その理論、及びこれに関わる儀軌の源流がインドやネパールに求められることを明らかにした BOORD 1993 が先ず以て注目されよう。古来、聖地を聖別する結界 (‘rite of *sīmābandha*’, p. 56) として使用されていた木製の槌 (‘wooden pegs’, p. 40) に関連する観念

を受けたものと想定される。チャンテルが伝えるヴァジュラキーラの一注解書『プルデルブムナク』(*Phur 'grel 'bum nag*)によれば、ヴァジュラキーラ崇拝のチベットへの伝播は、パドマサンバヴァ、ヴィマラミトラ、そして、シーラマンジュ (*Śīlamañju*) という 8 世紀の三祖師に帰され (p. 109), ヴァジュラキーラの根本タントラには *rTsa thung rdo rje khros pa* (KANeko, no. 317) 等があげられる。チャンテルをして、こうしたカーマ (*bka' ma*. 口頭伝承/口頭伝承経典) とよく連絡をもつものであるとする Boord 1993 の指摘は、第2.9.5章 (ダーラニー) の考察において、参照されることになる。

『チャッキドンポ』については、上述のように、STEARNS 2007 が『チメーパルテル』と『チャッキドンポ』の相関関係を論じている。タントンギャルポの伝記群を詳しく分析し、タントンギャルポが『チメーパルテル』を発掘、或いは感得したのは、彼が『チャッキドンポ』をチャンテルの師ダウンユギャルツェンより受法した後であったとする STEARNS 2007 の考察結果 (p. 28) については、おそらく何人も異論がないであろう。STEARNS 2007 の『チャッキドンポ』に関する考察は、しかし、先に第1.1.1章 (伝記に関する研究) において述べたように、概略にとどまるものであり、『チャッキドンポ』に関する詳細な考察としては、必ずしも満足すべき結果に達するものではない。これを内容の上から分析するには、本論文が試みるところの校訂・訳注研究による究明が必要不可欠なものとして期される。

#### 1.1.4. <無量寿宗要経>に関する研究

本1.1.4章では、1.1章において設けた 4つの視座の内、(4.) の<無量寿宗要経>に関する研究について、これまでの先行研究が何をどこまで明らかにしているかを年代順に一覧にし、これらを概観した上で、本研究の位置付けを提示する。<無量寿宗要経> 研究に関する諸資料は、MIMAKI (御牧) 1984 に、それまでの研究史と共に概括されており、以後の論考は多分にこの恩恵に与って研究をすすめてきた。しかし、時間の経過と共に、この研究史も当然刷新されるべきである。例えば、<無量寿宗要経> のサンスクリット原文の校訂テキストとしては、奇しくも同じ 1916年に発表された 3本のエディションに代わり、近年では DUAN 1992 が、VON HINÜBER 2014 等の論考において参照されている。

参考文献名	概略
1. LEUMANN 1912	コータン語訳 <無量寿宗要経> の研究 (pp. 82-83)
2. PELLIOU 1914	敦煌の漢文写本中に著作者とされる法成と、チベット大蔵経中に翻訳者として知られるチュードゥブ ( <i>Chos-grub</i> ) とを同一人物とする論考 (pp. 142-143)
3. MATSUMOTO (松本) 1914	漢訳 <無量寿宗要経> に関する一考察 (pp. 158-161)
4. IKEDA (池田) 1916	サンスクリット原文 <無量寿宗要経> の校訂テキストとその和訳を提出する。テキスト校訂には、河口慧海将来の 1本と、高楠順次郎将来の 3本、という計 4本の写本を使用
5. KONOW 1916	スタイン将来敦煌写本 2本を校合したコータン語訳 <無量寿宗要経> の校訂テキストとその英訳を提出する。ASB所蔵本を含む、計 3本の写本を校合したサンスクリット原文とチベット語訳が、左右頁に一覧に付されている。<無量寿宗要経> を「冴えないテキスト」('this dull text', p. 294) と呼称

6. WALLESER 1916 サンسكريット原文とチベット語訳の〈無量寿宗要經〉校訂テキスト, 及び, サンسكريットからの独訳と, 漢訳(法天訳 T 937)からの独訳を提出
7. FUKUDA (福田) 1926 チベット文〈無量寿宗要經〉の敦煌写本を影印版で出版
8. ISHIHAMA (石濱) 1926 FUKUDA (福田) 1926 に関する一考察 (p. 92-94)
9. ISHIHAMA (石濱) 1927 チベット語訳, ウイグル語訳, モンゴル語訳, 満州語訳, 漢訳の〈無量寿宗要經〉を通覧した一考察
10. YABUKI (矢吹) 1933 (1980) 漢訳〈無量寿宗要經〉の敦煌写本に関する研究
11. BAILEY 1951 (1981) コータン語訳の〈無量寿宗要經〉の校訂テキストを提出
12. THOMAS 1951 IOL が所蔵する, スタイン (M.A. Stein. 1862-1943) 蒐集チベット文敦煌写本 (Thomas 2-14, (vol. 56, foll. 73-4)) を英訳し, 〈無量寿宗要經〉の漢文写経 ('copy a Chinese *Tshe-dpag-tu-ma-mchis-pa* (*Aparimitāyuh[sic]-sūtra*'), p. 77) に関する記述を訳解した論考
13. ISHIHAMA/YOSHIMURA (石濱/芳村) 1958 チベット文〈無量寿宗要經〉の敦煌写本に関する研究
14. FUJIEDA (藤枝) 1961 沙州において‘數千部’ (p. 270) の〈無量寿宗要經〉が‘王命によって’‘寫された’こと, 法成が800年代に‘敦煌に來たのは, 奉佛のレ=パ=チェン王のあとに排佛のダルマ王が立って, その迫害による’ (p. 269) こと, また, 法成が‘チベット佛典の漢譯をも多數行つた’ことに論究
15. FUJIEDA/UEYAMA (藤枝/上山) 1962 天理図書館が収蔵するチベット文〈無量寿宗要經〉の写本に関する考察
16. NISHIDA (西田) 1962 天理図書館が所蔵する西夏文の〈無量寿宗要經〉の断片に関する考察
17. FUJITA (藤田) 1970 〈無量寿宗要經〉(法成訳『大乘無量寿經』T 936)を「浄土思想に言及する経論」の一覧 (p. 157) に含めた考察。‘無量壽智決定〔光明〕王’, 即ち, ‘*Aparimitāyur-jñānasuviniścitatejorāja* または *Amitāyur-jñānaviniścaya-rāja* (*or -rājendra*)’ (p. 323) は, *Amitābha* や *Amitāyus* と, 或いはまた〈法華經〉の久遠仏とも区別される別の仏であるとする (pp. 323, 327-328nn6-8)
18. IKEDA (池田) 1975 漢訳〈無量寿宗要經〉の敦煌写本について, 四大機関の収蔵数を (1.) スタイン本に289本, (2.) ペリオ本に35本, (3.) 北京本に513本, (4.) レニングラード本に52本, 各目録によって調査し, 合計数として889本を提出
19. EMMERICK 1979 コータン語訳〈無量寿宗要經〉の研究史を概観した一考察
20. YAMAGUCHI (山口) 1980 訳経僧法成 ('Gos Chos-'grub/Chos-grub) を漢人とする論考 (p. 228)
21. HUANG (黄文煥) 1982 中国国内に所蔵されるチベット文〈無量寿宗要經〉の敦煌写本について, 書写人, 校正人の一覧を提出
22. SAVITSKY 1984 Leningrad Institute of Oriental Studies が所蔵する, オルデングルク (Oldenburg. 1863-1934) 蒐集〈無量寿宗要經〉のチベット文敦煌写本に関する研究
23. MIMAKI (御牧) 1984 〈無量寿宗要經〉の諸資料をその研究史と共に概観した考察
24. NISHIOKA (西岡) 1984 チベット文〈無量寿宗要經〉の敦煌写本について, 主にその写経生と校勘者を論じた研究
25. NISHIOKA (西岡) 1985 チベット文〈無量寿宗要經〉の敦煌写本について, 主にその沙洲における写経事業を論じた研究
26. IWAMATSU (岩松) 1985 敦煌のコータン語仏教文献中の〈無量寿宗要經〉に言及



27. UEYAMA (上山) 1988  
チベット文〈無量寿宗要経〉の敦煌写本について、書写人、校正人を精査し、‘漢人、チベット人以外の民族の者も加わっている可能性’ (p. 196) や、その‘殆どが俗人と認められる’ことを論究  
TSUKAMOTO/MATSUNAGA/
28. ISODA (塚本/松長/磯田) 1989  
〈無量寿宗要経〉の諸資料をその研究史と共に概観した考察 (pp. 120-123)
29. UEYAMA (上山) 1990 (2012)  
法成の業績に関する詳細な論考 (pp. 84-246)。彼の著作と写本一覧を提出する
30. DUAN 1992  
著者の学位論文 (Universität Hamburg, 1986) を基に、コータン語訳〈無量寿宗要経〉の校訂テキストを提出。サンスクリット原文とチベット語訳の校訂テキスト、及び、独訳も付されている
31. HASUIKE (蓮池) 1993  
コータン語訳〈無量寿宗要経〉が、インドの韻律とギリシャの韻律という2つの異なる韻律によって成り立っていることを考察
32. HASUIKE (蓮池) 1994  
コータン語訳〈無量寿宗要経〉中に「浄土」を意図する Avesta 語が借用されていることを指摘
33. WANG (王) 1999  
〈無量寿宗要経〉の諸資料を、主に MIMAKI (御牧) 1984 に依拠した研究史と共に概観した考察
34. SILK 2004  
WALLESER 1916 に基づく〈無量寿宗要経〉の英訳研究
35. PAYNE 2007  
WALLESER 1916 に基づく〈無量寿宗要経〉の英訳研究 (pp. 290-299)
36. OTSUKA (大塚) 2009  
名古屋市市の七寺が所蔵する七寺一切経の内に伝わる『仏説大乘聖無量寿決定光明王如来陀羅尼経』(『聖無量寿王経』) について、1175年から1179年の間に日本国内で書写された‘開宝蔵の追彫分に含まれていたことが確実な法天訳の北宋新訳仏典である’ (p. 5) とする論考
37. KIN (金) 2010  
語順符の起源を論じる中に『大乘無量寿経』のダーラニー (T 936.19.82a23f) の‘意味の切れ目に番号がふつてある’ (p. 48) ことに触れ、これが訳経を効率的に行う為の分業過程で生じたものと考察
38. IWAO 2012  
漢訳とチベット語訳の〈無量寿宗要経〉の敦煌写本について、字体や紙葉の特徴を比較した研究 (p. 102)
39. HALKIAS 2013  
〈無量寿宗要経〉に関する考察を、サンスクリット原文 (WALLESER 1916) からの英訳と共に提出 (pp. 66-75)
40. VON HINÜBER 2014  
ギルギット写本中に〈無量寿宗要経〉に比定し得る一断片 (GBM, pt. 10, plate no. 3366) が含まれていることを指摘した論考。当該断片を DUAN 1992 (ApS\_s, §11, 76-78) に基づき校訂したテキストを提出
41. MATKO / VAN SCHAİK 2014  
British Library が収蔵する〈無量寿宗要経〉と〈大般若経〉について、830年代から840年代にかけて制作されたチベット文敦煌写本のコロフォンをローマ字に転写したカタログ
42. SCHAİK/HELMAN-WAŻNY/ NÖLLER 2015  
チベット文〈無量寿宗要経〉の敦煌写本中に、人血で筆者された可能性の高い写本があることを科学的に分析した考察
43. FUJINAKA/NAKAMIKADO (藤仲/中御門) 2018  
チベットにおいて‘受容された’ (34n21) ‘マチク流とジターリ流’ (p. 436) という二大流派の阿弥陀仏成就法が、〈無量寿宗要経〉と〈無死鼓音声陀羅尼経〉という‘密教化した経典の延長線上にある’ (34n21) ことを指摘。〈無量寿宗要経〉のダーラニーに関するプトウン・リンチェンドゥブやケードゥブジェ・ゲレクパルサンの見解を整理して提出 (pp. 448-452n15)

本論文が参照するところの、上に表示した〈無量寿宗要経〉に関する主な先行研究は、これを内容から整理してみると、次の6点に纏められる。

(内容1.) 〈無量寿宗要経〉の校訂テキストを提出するもの。これまでに、サンスクリット原文の他、コータン語訳とチベット語訳の校訂テキストが出版されている。サンスクリット原文の諸エディション (IKEDA 1916; KONOW 1916; WALLESER 1916; DUAN 1992) 中にも注意すべき数々の異読が指摘され、リセンションの相違が大きな問題として知られる。本論文では、先行する諸エディションを敷衍したかたちで出版された DUAN 1992 を、サンスクリット原文とチベット語訳の校訂テキストとしてそれぞれ使用する。

(内容2.) 〈無量寿宗要経〉の諸資料をその研究史と共に概観した考察。〈無量寿宗要経〉の諸資料としては、上記(1.)にあげた3言語の他、漢訳、満州語訳、西夏語訳、ウイグル語訳、モンゴル語訳の存在が知られており、リセンションの問題を俯瞰的に扱うには、これら諸資料の個々の先行研究が不可欠となる。

(内容3.) 〈無量寿宗要経〉の諸資料の中で、特に敦煌写本について論究するもの。〈無量寿宗要経〉の漢訳とチベット語訳は、吐蕃支配期(786-848年)の沙州(敦煌)において〈大般若経〉と共に大量に書写されたことが知られる。鴻大な量の写本が遺されている事由に関する考察は本論文の研究範囲ではないが、〈無量寿宗要経〉の流行に関する研究は、特に『チャッキドンポ』が埋蔵された時期(8世紀)と、発掘された時期(14-15世紀)の流行に関する諸考察は、本論文においても注意されるべきであろう。

(内容4.) ギルギット写本中に〈無量寿宗要経〉に比定し得る一断片が含まれていることを指摘する論考 (i.e. VON HINÜBER 2014)。7世紀を中心とするものと想定されるギルギット写本の存在は、かねてより知られていたネパール写本に比して、パドマサンバヴァの年代 (ca. 8世紀) に近く、また地理的にみても、同時期の吐蕃期敦煌(786-848年)に比して、パドマサンバヴァの生地と言い慣らわされるウッディヤーナに近い。ここに、『チャッキドンポ』が説示するダーラニーの原初形態がギルギット写本にみとめられる可能性が浮上する。

(内容5.) チベットの浄土思想を論じる中に〈無量寿宗要経〉について言及するもの。特に、経中のダーラニーに着目し、これに対するプトウン・リンチェンドゥブやケドゥブジェ・ゲレクパルサンといった14-15世紀の学僧たちの見解を考察した諸研究 (e.g. FUJINAKA/NAKAMIKADO (藤仲/中御門) 2018) は、14世紀に発掘された『チャッキドンポ』中に当該ダーラニーが引用された可能性を論じる本研究がまさに参照すべき先行研究である。

(内容6.) チベットにおいて‘受容された’ (Fujinaka/Nakamikado (藤仲/中御門) 2018:34n21) ‘マク流とジターリ流’ (p. 436) という二大流派の阿弥陀仏成就法が、‘密教化した’〈無量寿宗要経〉の‘延長線上にある’ (34n21) ことを指摘する論考。上記内容4.に同じく、本研究が『チャッキドンポ』中に〈無量寿宗要経〉に比定されるダーラニーが引用された可能性を論じるにあたり、強力な裏付けとなる考察である。

上來、〈無量寿宗要経〉に関する主な先行研究をその内容から6点に纏めて整理した。本論文はそのすべてから恩恵を得るものであるが、特に内容は内容5と内容6とに関連する。内容5については、〈無量寿宗要経〉中のダーラニーに関する14-15世紀チベットの学僧たちの間に見られる見解は考察されていても、同時代のテルトウン (gTer-ston. 埋蔵教説発掘者) に関しては、これを考察する研究は見出せない。内容5については、FUJINAKA/

NAKAMIKADO (藤仲/中御門) 2018 が、〈無量寿宗要経〉がチベットにおける長寿成就法の一根本聖典であり、テルマもその一典拠であること論じている。しかし、テルマの中に〈無量寿宗要経〉中のダーラニーが引用されていることについては言及が見出せない。従って、これら未解明の事柄について考察を試みることに、本論文の意義がみとめられる。

## 1.2. 本論文の目的と方法

本論文において中心となるのは、パドマサンバヴァ (fl. ca. 8c) が埋蔵し、リクズイン・グウデムチェン (1337?-1406) が発掘したテルマとして伝わる長寿成就法『チャッキドンポ』 (*lCags kyi sdong po*) の校訂・訳注研究である。その目的と方法を以下に順に提示したい。

### 1.2.1. 本論文の目的

『チャッキドンポ』の校訂・訳注研究を試みるにあたって、上の 1.1 章において、4つの視座、即ち——(1.) 伝記に関する研究、(2.) 長寿成就法に関する研究、(3.) テルマに関する研究、(4.) <無量寿宗要経> に関する研究——という 4つの視座を設け、これまでの先行研究が何をどこまで明らかにしているかを概観した上で、本研究の位置付けを提示した。それによって知られるように、チベットの長寿成就法 (*tshe sgrub*) の校訂・訳注研究は、これまで発表されていない。『すべてを明らかにする宝鏡』には、被伝者タントンギャルポが『チャッキドンポ』を修習した結果、長寿に関する持明者 (*tshe'i rig 'dzin*) となり、極楽へ往生するさまが描かれている。しかし、勤修者が実際『チャッキドンポ』をどのように実践するのか、その功德は何で、何をもちて成就の証とするのかといった、長寿成就法の実際については、『すべてを明らかにする宝鏡』の英訳研究である STEARNS 2007 を含め、これに立ち入って考察する研究は未だあらわれていない。例えば、『チャッキドンポ』が<無量寿宗要経> からダーラニーを引用した可能性についても、他のテルマを含め、いままで論じられてこなかった。ここに、チャンテルとして伝わる長寿成就法『チャッキドンポ』の校訂・訳注研究を試み、これら未解明の事柄を明らかにする意義がみとめられる。

本論文は、14世紀チベットにおいてテルマとして発掘された長寿成就法を文献学的手法に則り考究する目的で遂行される。未熟者の筆者にとっては、この領域の研究は容易ならぬことであり、研究も未熟であることは自覚している。『チャッキドンポ』のテキスト校訂作業にあたっては、蒐集し得た原典資料が3本の木版影印本に限定されていることなどからしても、ここに提出する内容は、将来より十全な校訂テキストが作成、提出されるまでの準備作業に位置付けられよう。これに基づく訳注の内容も、従って、大いに見直されるべきだと心得る。

### 1.2.2. 本論文の方法

長寿成就法『チャッキドンポ』の校訂・訳注研究を試みるにあたっては、現時点で入手し得た3本の木版影印本 (内2本は、BDRCによって提供された白黒のpdf版) を使用し、テキストを相互に批判的に検討して、信頼度を高めるという方法をとった。『チャッキドンポ』の節構成、即ち、『チャッキドンポ』を構成する節数、節名、節順 (節番号) については、上記3本の使用テキスト中に異同が看取されるが、第2.3.3章 (『チャッキドンポ』の節構成について) において各版の目録部や『Schwieger目録』を参照して検討するように、現時点では次表 (表2) に提出する通りの説番号と節名が想定される。

表2: 『チャッキドンポ』を構成する全6節 (§§0-5) の名称一覧

節番号	節名
§0.	第0節長寿成就法『チャッキドンポ』のためのはしがき
§1.	第1節長寿成就法『チャッキドンポ』より外なる成就法「貴重な壺」
§2.	第2節内なる成就法「チャッキドンポ」
§3.	第3節長寿成就法『チャッキドンポ』より秘密なる成就法「虚空の金剛」
§4.	第4節長寿成就法『チャッキドンポ』より奥義なる成就法「Hrī一字」
§5.	第5節「寿命守護輪の描出方法」

上の表2中の第5節「寿命守護輪の描出方法」 (§5. *Tshe'i 'khor lo bri thabs*) は、先行する第0節から第4節までが一塊りの長寿成就法であると見做し得るのに比し、全体として、この主体となる節とは区別し得る節であると判断した。従って、その主体となる方の第0節から第4節までの5節分 (表2中にグレー色を付けた §§0-4) を、校訂・訳注研究の範囲とした。シノプシスを作成するにあたり採番した下位の節番号 (e.g. §1.1) とその節名は、筆者による。謹んで識者のご叱正を仰ぎたい。

寿命守護輪 (*tshe'i 'khor lo*) は、護符 (*srung khor/skud*)<sup>63</sup> の一種で、これを図像学的興味の対象とする研究の蓄積は、NEBESKY-WOJKOWITZ 1975 (1956) をはじめ、その恩恵に与ること大である。<sup>64</sup> 例えば、SKORUPSKI 1983 には、「これを身につけている者の生命力を生み出し、延命し、致命的な事故から守護する」 ('Produce life(-force) for the one who wears this. Prolong life. Protect against fatal accidents to life', p. 44) マントラ (*mantra*) が書き入れられた「長寿の護符」 (Amulet for producing long life (*tshe srog*), *ibid.*) が図示されている。<sup>65</sup> こうした護符の類が長寿成就法と関連することは明らかであるが、図像学的資料を通して研究する傾向が強く、文献学の視点に立った研究はそれほど進んでいない。第5節「寿命守護輪の描出方法」を取り上げるとすれば、まずはこの護符の類に焦点を合わせて諸資料を比較検討し、その上で、当該節を組織づけた『チャッキドンポ』を改めて考察するという方法が妥当であろう。今後の学究に期したい。

ダーキニーの符牒 (*mkha' 'gro'i brda skad*), 及び、彼女たちの文字であるダーキニーの隠符 (*mkha' 'gro'i brda yig*) については、今日参照し得る先行研究が極めて乏しい。『チャッキドンポ』にはダーキニーの隠符で記されたものと筆者が仮定した (その根拠は §0.1.1 の詳解において提示する) テキストが計15箇所見在するが、その表記法についても、筆者は確固とした方法を見出すことができなかった。校訂テキストには、従って、当

<sup>63</sup> See 『藏漢』 s.vv. *srung 'khor* (p. 2983): 'rdzas sngags dmigs rim sogs kyi srung ba'i 'khor lo'; *srung skud* (p. 2982): 'srung bar byed pa'i skud pa'.

<sup>64</sup> See NEBESKY-WOJKOWITZ 1956 (1975):[503]–505. See also DOUGLAS 1978 and others.

<sup>65</sup> See SKORUPSKI 1983:27: '45. Amulet against the *sri* who cause harm to people in the prime of life (*dar-sri*)', [p. 44:] '92. Amulet for producing long life (*tshe srog*). It is affixed on those whose life force is impaired. It protects against the harm caused to one's life. *Mantra*: Produce life(-force) for the one who wears this. Prolong life. Protect against fatal accidents to life', [p. 88:] '57. The *cakra* which benefits one's life-force (*srog*)', [p. 109:] '87. The *cakra* of long life ant the syllable *Bhruṃ*. It is worn when one's life-force is declining'.

該テキストをスキャンしたイメージを貼り付けるより他仕方がなかった。ただ、今後の学究に僅かでも資することがあるよう、これらのイメージを一覧にし、付録2に提出した。今後の解明を待ちたい。

上記校訂テキストの他に、『チャッキドンポ』の訳注研究として翻訳と詳解を提出した。いずれも筆者が振った節番号のもとに管理されている。テルマの文体自体が一つのドメイン (domain) であることを考慮すれば、翻訳の文体においても、それはでき得る限り再現されるべきであろう。しかし、その多くが7音節、或いは11音節より成る韻文を前に、筆者の乏しい知識では為す術がなかった。従って、筆者には叶わなかったことは少なくない。将来の学究に期したい。

## 第2章 長寿成就法『チャッキドンポ』の概要

本第2章では、長寿成就法『チャッキドンポ』の概要を、他の関連する諸資料と共に下記の順序で提示する。

第2.1章では、『チャッキドンポ』発掘の背景として、発掘者リクズイン・グウデムチェンの事績、及び、彼が創始したとされるチャンテルについて、主に彼の直弟子のセトン・ニマサンポが著した伝記『照射する陽光』に基づく概括を試みる。具体的な発掘の経緯、年代については、第2.7章(発掘)において検討する。

第2.2章では、原典研究として本論文において使用した『チャッキドンポ』の3本の木版影印本が収録されている集成類について考察する。集成類の目録を調べ、その中に『チャッキドンポ』がどのように位置付けられているか、また、『チャッキドンポ』を構成する各節の名称、及び、節順について検討する。

第2.3章では、第2.2章の考察に基づき、『チャッキドンポ』のタイトルと節構成について考察をすすめる、本論文において参照する箇所情報を確定、提示する。

第2.4章では、『チャッキドンポ』の記述言語について考察する。当該成就法は主にウチェン字体のチベット語で記述されているが、第0節はしがき (§0.1.1) と第1節外なる成就法 (§1.1.1) の、共に冒頭に掲げられた帰敬文には、これと異なる文字が見在する。まず、これらの文字を一覧にして対照させ、その後、その文字と言語について順に考察をすすめる。

第2.5章では、『チャッキドンポ』の起源、即ち、パドマサンバヴァが如何にして当該長寿成就法を会得したかについて考察する。

第2.6章では、『チャッキドンポ』がパドマサンバヴァによって埋蔵された経緯を、主に五濁悪世という文脈で捉えて考察する。

第2.7章では、『チャッキドンポ』発掘の経緯について考察する。リクズイン・グウデムチェンの伝記『照射する陽光』から関連箇所を訳出し、『チャッキドンポ』の記述内容と照らし合わせて考察をすすめる。

第2.8章では、『チャッキドンポ』が称える2つの功德について考察を行う。この2つの功德という構図は<無量寿宗要経>にその萌芽が見られ、この点を主に検討する。

第2.9章では、『チャッキドンポ』が<無量寿宗要経>からダーラニーを引用した可能性について考察を行う。<無量寿宗要経>の翻訳系譜、サンスクリット語原典、漢訳、チベット語訳等を調べ、『チャッキドンポ』がこれを引用するに至った経緯について考察をすすめる。ダーラニーのテキストと試訳を提出した後、『チャッキドンポ』が発掘された14-15世紀チベットには、(1.) 当該ダーラニーに関する知識/見識を有していたプトウン・リンチェンドゥプをはじめとする学僧と、(2.) これらのダーラニーをテキストとして含むテルマを発掘したテルトウン、という2つの潮流が看取されることを指摘する。

第2.10章では、『チャッキドンポ』を修習した結果、長寿に関する持明者となった成就者の具体的事例として、タントンギャルポの死生観を中心に考察する。まずタントンギャルポ伝の原典を概観し、彼が『チャッキドンポ』を受法したことを伝える伝記の箇所を確認する。この他、パドマサンバヴァが遺したとされる予言的伝記<予言書・明灯>の中からタントンギャルポの寿命と遷化が予言された箇所を訳出し、考察する。タントンギャルポに帰される長寿成就法としては、『チャッキドンポ』の他に『チメーパルテル』と呼び慣らわされる長寿成就法が知られる。『チメーパルテル』が関連するタントラ等に

つき、先行研究を参照しつつ検討する。その後、タントンギャルポの辞世について、その訳出を試み、長寿に関する持明者となった、この大成就者の死生観を推し量る。最後に、タントンギャルポの遷化の様子を伝える箇所を訳出し、〈予言書・明灯〉に予言された内容を比較参照しつつ、考察する。



## 2.1. 『チャッキドンポ』を伝えるチャンテル

本2.1章では、長寿成就法『チャッキドンポ』発掘の背景として、発掘者リクズイン・グウデムチェンの事績、及び、彼が創始したとされるチャンテル (Byang-gter) について、主に彼の直弟子のセトン・ニマサンポ (fl. ca. 14c. BDRC#P8839) が著した伝記『照射する陽光』(gSal byed nyi ma'i 'od zer) に基づく概括を試みる。彼の生没年や呼称が考察の対象となろう。具体的な発掘の経緯、年代については、第2.7章(発掘)において検討する。

チャンテル、及びリクズイン・グウデムチェンに関するまとまった研究は、欧米においては BOORD 1993 が先駆的存在として位置付けられており、<sup>66</sup> 当該分野は、比較的新しい研究領域といえる。BOORD 1993 に続く論究は、しかし、今日諸学者によって提示されつつあるので、これらを適宜参照しつつ、『チャッキドンポ』発掘の背景を明らかにすべく考察をすすめる。

### 2.1.1. リクズイン・グウデムチェン (1337?-1406)

本論文においては「リクズイン・グウデムチェン」(Rig-'dzin rGod-ldem-can. 1337?-1406. BDRC#P5254) と呼称する『チャッキドンポ』の発掘者は、「ンゴドゥプギャルツェン」(dNgos-grub-rgyal-mtshan) という幼名を有する。彼は、11/12歳の頃、彼の頭頂部に3本の禿鷲の羽が生え、23/24歳の頃にはこれが5本となった事由により、「グウキデムトゥチェン」(rGod-kyi-ldem-'phru-can. 頭頂に禿鷲の[羽]を有する者)、<sup>67</sup> 或いはこれを縮めて「グウデムチェン」(rGod-ldem-can) と通称される。<sup>68</sup> 同様の羽は、パ

<sup>66</sup> Cf. BOORD 1993:21: 'Although a significant force within the rNying-ma group of religious traditions in old Tibet, very little as yet has been published in the west concerning the Byang-gter and its revealer dNgos-grub rgyal-mtshan. Brief references to the Byang-gter tradition, the fortunes of which have suffered a severe decline in the modern age since the invasion of Tibet by the communist Chinese, are to be found in a number of textbooks on the history of Buddhism in that country, especially those written from the rNying-ma-pa point of view, but no western scholar to date has attempted an exhaustive study of the subject'.

この他、BOORD 1993 にも参照されている (p. 21) 『ゴンパサントルの法類』(dGongs pa zang thal gyi chos skor. 5 vols. Leh: S. W. Tashigangpa, 1973) の前書き (preface, vol. 1) は、著者不明ながら、英文で論述されたリクズイン・グウデムチェンに関する初期の論考として、貴重である。なお、当該前書きの著者について付言すれば、HERWEG 1994 はこれを『ゴンパサントルの法類』の責任表示者である Pema Choden に帰している。See HERWEG 1994:33: 'in the preface of GDUNG RABS [i.e. 『ゴンパサントルの法類』], provided by Pedma Choden'.

<sup>67</sup> See 『蔵漢』 s.vv. *ldem 'phru* (p. 1456): 'zhwa tog gi khyad par zhig'; *rgod* (p. 525): '(1) *bya rgod*/ [...] (2) *bod bran g.yog spyi tshogs kyi thog mar 'bangs la rgod g.yung gnyis su phye zhing/ rgod ces pa 'bangs rab kyi sde tshan yin pas dmag las kyi gras su bzhaq'*, Jäschke, s.v. *rgod* (p. 104): 'bird of prey', 'wild'; NEGI, s.v. *rgod* (p. 742): 'aranya'.

<sup>68</sup> See dGongs pa zang thal gyi chos skor, preface: 'The rediscoverer (*gter-ston*) of this cache of hidden teachings was Gter-ston dNgos-grub-rgyal-mtshan *alias* Rig-'dzin Rgod-kyi-ldem-'phru-can. This curious epithet was applied to him because of featherlike protrusions which miraculously appeared on the top of his head. When he was twelve (i.e. eleven), three such *ldem-'phru* (or *rgod-sgro*) came forth; at the age of 24 (i.e. 23), five manifested themselves'.

ドマサンバヴァも有していたとされ、<sup>69</sup> 予言に叶った好相と見做される。<sup>70</sup> この「グウキデムトゥチェン」という呼称は、当該寿命成就法中に『チャッキドンポ』を発掘するテルトゥンの名として用例が認められる他 (e.g. §0.2.3), 恐らくはこれを継承する形の自称としての用例が、コロフォンに認められる (e.g. §1.8.1)。リクズイン・グウデムチェンの出生については、その場所が「タサン山の東側 [タサン山を背にして] 前面」 (§0.2.3: *ri bo bkra bzang shar mdun du*) であることが予言されているが、その年代は「五濁悪世の時」 (§0.2.3: *nam zhig snyigs ma lnga bdo'i dus*) という簡潔な表現にとどまる。

リクズイン・グウデムチェンの出生年代については、直弟子のセトン・ニマサンポ (Se-ston Nyi-ma-bzang-po alias Sūryabhadra. fl. ca. 14c. BDRC#P8839) が著した伝記『照射する陽光』 (*gSal byed nyi ma'i 'od zer*) に、その日付がチベット暦の1月10日 (*zla ba dang po'i tshes bcu'i nyin*) であることが現存する2本のウメ字写本中に齟齬無く確認し得る。この日付は、下記に参照するように、表現を異にする他の資料も看取されるものの、彼の出生年ほどには、大きな問題とはならないであろう。リクズイン・グウデムチェンの出生年は、『ニンマ派仏教史』 (*bDud 'joms chos 'byung*) の所見、伝持に見られるように、<sup>71</sup> 「第6ラプチュン (*rab byung*) の火の女丑年 (*me mo glang gi lo* ≈ 西暦1337年)」という説が広くみとめられ、これは、前述した2本のウメ字写本の内、1本の写本 (S\_B) の記述 (S\_B 61,5: *me mo glang gi lo*) と一致する。<sup>72</sup> 一方の写本 (S\_A) の記述 (S\_A 11,5: *shing mo glang gi lo*) では、「木の女丑年 ≈ 西暦1325年」と、異なる出生年が看取される。<sup>73</sup> リクズイン・グウデムチェンの出生年を1337年とするか、1325年とするかは、例えば、前者を採用する『蔵漢』 (1993年刊) の記述<sup>74</sup> を問題視する *Mi sna* (1993年刊) や

<sup>69</sup> See DOWMAN 1988:207–209: '[...] Rigdzin Chempo Ngodrub Gyeltsen (1337–1409), better known as Godemchen, He [sic] adorned with the Eagle Feather. Guru Rimpoche wears a similar feather in his Hat of Victory'. See also POWERS/TEMPLEMAN, s.v. Rig 'dzin rgod ldem dngos grub rgyal mtshan (Rikdzin Gödem Ngödrup Gyeltsen; alt. Rig 'dzin rgod kyi ldem phru can (p. 584): '[...] This served to link him with legends that reported Padma 'byung gnas (Skt. Padmasambhava) wore a headdress adorned with vulture feathers'.

<sup>70</sup> See BOORD 1993:24: 'These extraordinary signs had been foretold in the prophecies and were regarded with awe as the marks of a truly special being'.

<sup>71</sup> *bDud 'joms chos 'byung*, 451,4: *sna nam rdo rje bdud 'jams phyi yang srid mchog gi sprul sku rnam gsum gyi ya gyal gter ston rig 'dzin chen po dngos grub rgyal mtshan ni/ ri bo bkra bzang gi shar mdun byang phyogs tho yor nag po'i yul brgyud sna mo lung gi gzims khang du/ hor gung ser rgyal po'i rigs las phur pa'i grub thob bar ma chad par byon pa slob dpon bdud 'dul gyi sras su rab byung drug pa'i me mo glang lo cho 'phrul zla ba'i tshes bcu la mtshan rtags khyad par can dang bcas te sku bltams/ (as translated into English in DUDJOM RINPOCHE/DORJE/KAPSTEIN 1991:[780]: 'Ngödrup Gyeltsen, [...] was born, attended by extraordinary omens, on Tuesday 11 February 1337 (tenth day, month of miracles, fire female ox year, sixth cycle), into the household of Namolung, which hailed from the district of Thoyor Nakpo, to the north-east of Mount Trazang'.*

<sup>72</sup> *gSal byed nyi ma'i 'od zer*, S\_B 61,4: *de ltar zla ba dgu dang ngo bcu rdzogs nas/ me mo glang gi lo zla ba dang po'i tshes bcu'i nyin/ [...] bsam gyis mi khyab pa dang bcas nas 'khrungs te/.*

<sup>73</sup> *gSal byed nyi ma'i 'od zer*, S\_A 11,5: *de ltar zla ba dgu ngo bcu rdzogs nas/ shing mo glang gi lo/ zla ba dang po'i tshes bcu'i nyin/ [...] bsam gyi mi khyab pa dang bcas nas sku 'khrungs ste:.*

<sup>74</sup> See 『蔵漢』 s.v. rig 'dzin rgod ldem (p. 2685): '*mtshan gghan dngos grub rgyal mtshan yang zer/ rab byung drug pa'i me glang lor gtsang ngam ring du 'khrungs shing rab byung bdun pa'i sa byi lor gshegs pa'i*

DUNG-DKAR (2002年刊) の解説に見出されるように、<sup>75</sup> 比較的新しい問題の一つであるが、これは、恐らく、上に挙げた『照射する陽光』の異読に起因するものであろう。<sup>76</sup> リクズイン・グウデムチェンの出生年は、BOORD 1993 をはじめとする主な先行研究においては「1337年」が専ら支持されているが、<sup>77</sup> 彼の他の事績——チャンテルの発掘、遷化と——についての年代や当時の年齢、寿命等をも考慮に入れて算定すべきむずかしい問題である。<sup>78</sup> 本論文においてはリクズイン・グウデムチェンの年代を「1337?-1406」と、未解明のことがらとし、『照射する陽光』の新たな写本発見に基づく今後の学究に期した。<sup>79</sup>

rnying ma'i gter chen zhig [...] 1337-1408'.

<sup>75</sup> See *Mi sna*, s.v. *gter chen rig 'dzin rgod ldem* (pp. 402-404): '[...] *rab byung lnga pa'i shing glang (spyi lo 1325) lo'i bod zla dang po'i tshe bcu nyin 'khrungs/ [...] bod rgya tshig mdzod chen mo'i nang rje 'di nyid rab byung drug pa'i me glang (spyi lo 1337) lor gtsang ngam ring du sku 'khrungs shing/ rab byung bdun pa'i sa byi (spyi lo 1408) lor gshegs par gsungs pas dpyad par 'tshal'*'; DUNG-DKAR, s.v. *gter chen rig 'dzin rgod ldem* (p. 974): '<<bod rgya tshig mdzod chen mo'i>> nang rje 'di nyid rab byung drug pa'i me glang (1337) lor gtsang ngam ring du sku 'khrungs shing/ rab byung bdun pa'i sa byi (1408) lor gshegs par gsungs pas dpyad par zhu'.

<sup>76</sup> リクズイン・グウデムチェンの出生年を1337年とする文献としては、例えば、次のような資料が挙げられる。gSal byed nyi ma'i 'od zer, S\_B 61,5: *me mo glang gi lo; Ngag gi dbang po'i rnam thar*, 432,4: *me mo glang gi lo rta chen zla ba'i dkar phyogs kyi tshes bcu'i dpa' bo mkha' 'gro 'du ba'i dus dge bar; Gu bkra'i chos 'byung*, 483,10: *me mo glang gi lo rta chen zla ba'i dkar phyogs chos bcu'i dpa' bo mkha' 'gro 'du ba'i dus dge bar; sKyes mchog rim byon gyi rnam thar*, 146,5: *me mo glang lo zla ba dang po'i tshe 10 la; gTer ston brgya rtsa'i rnam thar*, 532,6 (as translated into English in GYAMTSO 2011:214): *brgyud sna mo lung gi gzims khang du; bDud 'joms chos 'byung*, 451,9 (as translated into English in DUDJOM RINPOCHE/DORJE/KAPSTEIN 1991:[780]): *rab byung drug pa'i me mo glang lo cho 'phrul zla ba'i tshes bcu la; gCod rnam*, 102,1: *me mo glang gi zla ba'i tshes bcu la; KHETSUN SANGPO*, s.v. *dnegos grub rgyal mtshan* (pt. 1, p. 537): *rab byung drug pa'i me mo glang lo cho 'phrul zla ba'i tshes bcu la* [p. 540:] A.D. 1337-1408; 『蔵漢』 s.v. *rig 'dzin rgod ldem* (p. 2685): *rab byung drug pa'i me glang lor*; POWERS/TEMPLEMAN, s.v. *Rig 'dzin rgod ldem dnegos grub rgyal mtshan* (Rikdzin Gödem Ngödrüp Gyeltsen; alt. *Rig 'dzin rgod kyi ldem phru can* (p. 584): 1337-1408.

また、(多分に上記の説の反駁として)1325年を支持する文献は次の通りである。gSal byed nyi ma'i 'od zer, S\_A 11,5: *shing mo glang gi lo; Mi sna*, s.v. *gter chen rig 'dzin rgod ldem* (p. 403): *rab byung lnga pa'i shing glang (spyi lo 1325) lo'i bod zla dang po'i tshe bcu nyin*; DUNG-DKAR, s.v. *gter chen rig 'dzin rgod ldem* (pp. 974-975): *rab byung lnga pa'i shing glang (1325) lo'i bod zla dang po'i tshe bcu nyin*.

『蔵文辞海』 s.v. *rig 'dzin rgod ldem* (p. 3193) は、1468年を生年と没年の両方に挙げているが、恐らくこれは誤記であろう。

<sup>77</sup> See BOORD 1993:23. See also GYATSO 1986b:32: '1337-1490 [sic]'; STEARNS 2007:19: '1337-1408'; TURPEINEN 2015:5: '1337-1408'; CANTWELL 2017:185: '1337-1408'; VALENTINE 2018:[95]: '1337-1409'; LI 2019:100: '1337-1408'.

<sup>78</sup> 例えば、リクズイン・グウデムチェンの遷化時の年齢については、ダライ・ラマ5世ガワンロサンギャムツォ (Ngag-dbang-blo-bzang-rgya-mtsho. 1617-1682. BDRC#P37) が著した彼の師、ドルジェダク・リクズイン3世リクズイン・ンガギワンポ (Rig-'dzin Ngag-gi-dbang-po. 1580-1639. BDRC#P639) の伝記『リクズイン・ンガギワンポ伝』 (Ngag gi dbang po'i rnam thar) に記述された「72歳」が、一証左として考察の対象となる。See *Ngag gi dbang po'i rnam thar*, 444,6: *sbas yul skyid mo lung gi gnas sgo phye/ dgung lo bdun chu rtsa gnyis kyi bar du 'gro ba rnam smin grol gyi lam la 'god par mdzad do/*

モンゴルのグルセル (Gur-ser) 王家の血筋を引き、ヴァジュラキーラの秘儀を伝承する行者の家系に生まれたリクズイン・グウデムチェンは、<sup>80</sup> パドマサンバヴァの25人の直弟子 (*rje 'bangs nyer lnga*)<sup>81</sup> の一人ナナムドルジドジヨム (sNa-nam-rdo-rje-bdud-'joms. ca. 8c. BDRC#P4CZ10564) の転生者と見做され、<sup>82</sup> また、パドマサンバヴァの「至高の三化身」(*mchog gi sprul sku gsum*) の一人、御身の化身 (*sku sprul*) としても名高い。例えば、ジャムヤンケンツェワンポ ('Jam-dbyangs mKhyen-brtse'i-dbang-po. 1820–1892. BDRC#P258) が著した『蓮華の花園』(*Padmo'i dga' tshal*) でも、御意の化身であるニャンレル・ニマウーセル (Nyang-ral-nyi-ma-'od-zer. 1124–1192. BDRC#P364) や、御口の化身であるグル・チューキワンチュク (Gu-ru Chos-kyi-dbang-phyug. 1212–1270. BDRC#P326) と共にその名を讃えられている。<sup>83</sup> 彼らが発掘したテルマは、例えば、チューキワンチュク (1775–1837. BDRC#P5630) の『八教説自照』(*bKa' brgyad rang shar*) に確認し得るように、八教説三部 (*bka' brgyad rnam gsum*) と呼称される。<sup>84</sup> クントウル・ロドウターイエ (Kong-sprul Blo-gros-mtha'-yas. 1813–1899. BDRC#P264) が

<sup>79</sup> Cf. HERWEG 1994:43: 'Unfortunately I work with re-printed material and cannot investigate the possible age of the originals. However, it seems obvious that the use of fire-ox-year for the birth year is a long-standing tradition, which implies that RNAM THAR 1 [NB: i.e. S\_B] found a greater audience than RNAM THAR 2 [NB: i.e. S\_A], as the question of the correct birth year was never seriously debated'.

<sup>80</sup> *dGongs pa zang thal gyi chos skor*, preface: 'His father, Slob-dpon Bdud-'dul, was a practitioner of the Vajrakīla rites and claimed descent from the royal lineage of the Hor Gur-ser (?=Sha-ra Yu-gur, although some writers have tried to find in this name a corruption of Ge-sar)'; DOWMAN 1988:209: 'Godemchen was born into a family descended from Mongolian royalty in Tsang. [...] His father, Lopon Dudul, was an adept in the *Purba-tantra* and taught it to his son'.

<sup>81</sup> See 『蔵漢』 s.v. *rje 'bangs nyer lnga* (p. 910): '*bod rgyal khri srong lde'u btsan gyi dus slob dpon padma 'byung gnas bod du gdan drangs te rgyal po dang gzhan 'bangs mang por gsang sngags kyi chos gsungs te grub pa thob pa'i rje 'bangs nyer lnga ste/ khri srong lde'u btsan/ nam mkha'i snying po/ sangs rgyas ye shes/ rgyal ba mchog dbyangs/ mkhar chen bza' dpal gyi ye shes/ dpal gyi seng ge/ bai ro tsa na/ gnyags dznyA na ku ma ra/ g.yu sgra snying po/ rdo rje bdud 'joms/ ye shes dbyangs/ sog po lha dpal/ zhang ye shes ste/ dpal gyi dbang phyug ldan ma rtse mang/ ska ba dpal brtsegs/ shud bu dpal gyi seng ge/ rgyal ba'i blo gros/ khye'u chung lo/ 'o bran dpal gyi dbang phyug rma rin chen mchog lha lung dpal gyi rdo rje/ lang gro dkon mchog 'byung gnas/ la gsum rgyal ba byang chub bcas'*.

<sup>82</sup> See *dGongs pa zang thal gyi chos skor*, preface; DUDJOM RINPOCHE/DORJE/KAPSTEIN 1991:780.

<sup>83</sup> *Padmo'i dga' tshal*, 41,6: *nyang chos dbang rgod ldem ste mchog gi sprul sku rnam gsum/*

<sup>84</sup> *bKa' brgyad rang shar*, 143,1: *mnga' bdag nyang nyi ma 'od zer gyi gter byon bka' brgyad bde gshegs 'dus pa dang/ gu ru chos kyi dbang phyug gi gter byon bka' brgyad gsang ba yongs rdzogs dang/ rig 'dzin rgod ldem can gyi gter byon byang gter bka' brgyad drag por rang byung rang shar te bka' brgyad rnam gsum du grags shing/*

表3: 至高の三化身と八教説三部

至高の三化身		八教説三部
ニャンレル・ニマウーセル (1124–1192)	<i>thugs sprul</i>	<i>bka' brgyad bde 'dus</i>
グル・チューキワンチュク (1212–1270)	<i>gsung sprul</i>	<i>bka' brgyad gsang rdzogs</i>
リクズイン・グウデムチェン (1337?–1406)	<i>sku sprul</i>	<i>bka' brgyad rang shar</i>

クズイン・グウデムチェンを「百人のテルトウン」(*gter ston brgya rtsa*)に選定したのも、<sup>85</sup>このような必然的根拠があつてのことであろう。

### 2.1.2. チャン (Byang) とチャンテル (Byang-gter)

『チャッキドンポ』の発掘場所については、第3節秘密なる成就法のコロフォン (§3.8.1) に、これが、リクズイン・グウデムチェンによってチャン地方 (Byang) のサンサンハダク (*Zang-zang-lha-brag*) の中腹に埋蔵された「南に位置する金庫」 (§3.8.1: *lhor ser mdzod*) から発掘されたことが明記されている。

チャンは、モンゴル支配期チベットの13区域 (*khri skor*) の一つで、ガムリン (Ngam-ring) をその首都とした。<sup>86</sup> 今日の地図上に比定すれば、後に図3 (ウッディヤーナ, ギルギット, 敦煌, チャンの位置を示す地図) に図示するとおり、ツァン (gTsang) の西部, ラトウー (La-stod) と呼称される地域の一部に見出される。<sup>87</sup> サンサンハダクは、タサン山 (*Ri-bo-bkra-bzang*) 共々、DORJE/KAPSTEIN 1991 が map 4 (Western Tibet and Nepal) 中に図示する J11 に、ガムリンの北西に位置することが確認し得る。<sup>88</sup> タサン山は、HERWEG 1994 によれば、「ハツェ (lHa-tse) からプレン (sPu-hreng) 方向に伸びる道のりの、ガムリンから 30km 程の右側にあり、サンサンハダクは、タサン山から約 50km 程西側にある」(p. 18)。<sup>89</sup>

<sup>85</sup> *gTer ston brgya rtsa'i rnam thar*, 532,4–535,5.

As translated into English in GYAMTSO 2011:214–216.

<sup>86</sup> See STEARNS 2007:493n305.

<sup>87</sup> See 『蔵漢』 s.v. *ngam ring* (pp. 649–650): ‘*rdzong zhiḡ bod rang skyong ljongs kyi nub rgyud dang mdog gzhung gtsang po'i chu rgyud du yod/ yar klungs gtsang po rdzong 'di'i nub rgyud nas shar du 'bab'*. See also YAMAGUCHI (山口) 1987:204–205: ‘「チャン」というのは、今日のツァン地方の西部にラトウーという地区があつて、この地区は北と南に分けて言及されるが、その北のほうを指す。南のほうは口(南)ムスタングとしてネパールとチベットの間的小国として知られ、今日では現地報告などもある。北はチャン(北)ガムリンという地方で漢字で「昂仁」と書かれる。この地区を支配したのは、チンギス汗に滅ぼされた西夏王の末裔とされている’.

<sup>88</sup> See DORJE/KAPSTEIN 1991:496–497 (map 4). See also FERRARI 1958:65: ‘Progressing to the north on the opposite bank of the Gtsaṅ po, there are Byaṅ ṅam riṅ; Zaṅ zaṅ Lha brag, the place where Rig 'dsin rGod ldem discovered a treasure’

<sup>89</sup> See HERWEG 1994:18: ‘After going from Ngam ring rdzong more than about thirty kilometers on the motor-road from Lha rtse towards Pu hreng [sic], at the right side of the main road one can see the mountain called, among others, Mt. Bkra bzang the Holy Place (*gnas chen ri bo bkra bzang*), Glorious Mt. Bkra bzang (*dpal gyi ri bo bkra bzang*), Bkra bzang, the King of Mountains (*ri rgyal bkra bzang*), and Black Cairn (*mthor yor nag po*). Zang zang lha brag is located about fifty kilometers west of Mt. Bkra bzang’.

以上の HERWEG 1994 の考察は、*Gangs ljongs rig gnas*, s.v. *Gter chen rig 'dzin rgod idem can and gnas chen ri bo bkra bzang* (v. 2, pp. 56–65) に基づく。

なお、HERWEG 1994 が「サンサンハダクはトゥクドゥルプンダ山の一洞窟であるとされるが、その綴りは FERRARI 1959 を含め、どの資料にも確認できない(‘Zang zang lha brag is said to be a cave on Mt. Tukdrül Pungdra. Ferrari 1959, page 65, n. 539, unfortunately does not give the Tibetan transliteration for this mountain, and all other sources do not know it)」と記述している点について、付言したい。固有名詞として記述されている「トゥクドゥルプンダ山 (Mt. Tukdrül Pungdra)」は、おそらく「毒蛇の塊の如き岩山 (*brag ri*

チャンテルの英訳語としては、the Northern Treasures, 或いは、これに類似する訳語が主流として用いられ、<sup>90</sup> これは現代中国語の「北蔵」という訳語、<sup>91</sup> 日本語の「北テルマ」(HIRAMATSU (平松) 1982:176n5) という訳語に相当する。<sup>92</sup> *byang* という多義語に対し、<sup>93</sup> 上述した「チャン」という地名の他に、このように「北／北の」という語義が付与されるに至った根拠、経緯は、しかし、あまり問題にされてこなかったようである。こうした問題は専ら翻訳に関わり、「チャンテル」という音訳語を用いる場合、字義が曖昧になるという事情も勘案されよう。<sup>94</sup>

ここで第一に指摘されるのは、ドルジェダク・リクズィン3世リクズィン・ンガギワンポ (Rig-'dzin Ngag-gi-dbang-po. 1580–1639. BDRRC#P639) が1610年頃に建立したドルジェダク寺 (rDo-rje-brag-dgon-pa) が、ツァンポ江 (gTsang-po) の北岸に位置するという見方である。<sup>95</sup> ツァンポ江の北岸、という見方に関連して次に指摘されるのは、「北」とは別の方角——例えば「南」——と区別するためにチャン (*byang*) に付与された「北／北の」という語義である。実際、テルダクリンパ・ギェルメドルジェ (gTer-bdag-gling-pa 'Gyur-med-rdo-rje. 1646–1714. BDRRC#P7) が1676年にツァンポ江の南岸に建立したミンドルリン寺 (sMin-grol-gling-dgon-pa) が伝承するテルマは、ホテル (IHog-ter), 即ち、

---

*dug sbrul spungs 'dra*)」の一部で、形容詞の「毒蛇の塊の如き (*dug sbrul spungs 'dra*)」に比定され得るものであろう。サンサンハダクも、タサン山同様、人を寄せ付けない険しい山と見做される。『ニンマ派仏教史』(*bdDud 'joms chos 'byung*) の英訳では、'in the cave of Zangzang Lhadrak, on the slopes of the rock mountain of Tukdrül Pungdra' (DUDJOM RINPOCHE/DORJE/KAPSTEIN 1991:780) と、固有名詞として解釈、訳出されている。

<sup>90</sup> E.g. BOORD 1993:1 'the Northern Treasures (Byang-gter); VALENTINE 2018:[95]: 'the Northern Treasure Tradition (Byang gter)'.

<sup>91</sup> See 『蔵漢』 s.v. *byang gter* (p. 1872): 'rig 'dzin rgod ldem gyis gter nas drangs pa'i las bzhi'i chos tshan rnams so'.

<sup>92</sup> HIRAMATSU (平松) 1982:176n5: '「北テルマ」(Byañ gter)'.

<sup>93</sup> See 『蔵漢』 s.v. *byang* (p. 1867): '(1) *byang phyogs/ [...]* mdo smad khul gyi sa bab phal cher byang mtho la lho zhol ba zhig yin/ [...] (2) *bod kyi byang phyogs su yod pa'i 'brog khul'*, Jäschke, s.v. *byang* (p. 374): '1. north [...] 2. northern country [...] 3. to tailor, to cut to proper shape [...] 4. for *byang-bu*'.

<sup>94</sup> Cf. HERWEG 1994:29n103: 'Byang is the name of a myriarchy in La stod, but *byang* also means "north." The treasure could thus also be called "Treasure from the Kingdom of Byang." However, the name Northern Treasure is commonly used'.

<sup>95</sup> See 『蔵漢』 s.v. *rdo rje brag dgon pa* (pp. 1440–1441): '*rab byung bcu pa'i dus su rnying ma'i bla ma bkra shis stobs rgyal gyis btab cing/ smin grol gling las btab snga ba/ rnying ma byang rgyud lugs kyi dgon pa'i gtso bo zhig jun gar dmag gis me brgyab nas bsregs kyang slar yang nyams gso byas yod'*; DOWMAN 1988:88 (Jang): 'Jang means "The North", and refers to the upper part of the Kyichu river system, which includes the Pak Chu valley of Taklung and the \*Rong Chu valley of Reteng. From Pembo Qua jeep-road ascends the Lhundrub Valley to Lhundrub Qu, previously Lhundrub Dzong, and then climbs over the Chak La and down to the Pak Chu'; [p. 205:] 'The old district of Drak consisted of several valleys from Samye to the west of Dorje Drak, and north of the Tsangpo to the Kyichu/Tsangpo watershed'; HERWEG 1994:29–30: 'In the 17th century, Rig 'dzin III, Byang bdag Ngag gi dbang po (1580–1639) from Byang, founded, in about 1610, [...] on the northern bank of the Gtsang po river, south of Lha sa, the Rdo rje brag monastery'.

「南のテルマ」として知られ、<sup>96</sup>「北のテルマ」であるチャンテルと対比されてきた。<sup>97</sup> 方角によるテルマの分類を仔細に見れば、以上の他にもいろいろ挙げることができよう。<sup>98</sup>

上にみたように、ドルジェダク寺がツァンポ江の北岸に位置すること、そして、その南岸に位置するミンドルリン寺と対比されきたことは、例えば DOWMAN 1988 の所論に、両寺が「ライバル」(‘rival’, p. 209) の関係にあったことを交えて論究されている。<sup>99</sup> このように考えてみると、チャンテルが「北のテルマ」とされる概念は、少なくともホテルとの区別でいえば、17世紀以降に遡求するものと考えられるのではないか。ホテルは、WANG (王) 1997 (first published 1983) によれば、ニャンレル・ニマウーセル (Nyang-ral-nyi-ma-'od-zer. 1124–1192. BDRRC#P364) のテルマである‘上部伏蔵’や、グル・チューキワンチュク (Gu-ru Chos-kyi-dbang-phyug. 1212–1270. BDRRC#P326) のテルマである‘下部伏蔵’、その他ラトナリンパ (Ratna-gling-pa. 1403–1479. BDRRC#P470) のテルマを包含する総称とされている (p. 47)。<sup>100</sup> WANG (王) 1997 には、しかし、何故ホテルが“南蔵”(lho-gter) と呼称されるのかという点は論究されておらず、リクズイン・グウデムチェンの年代を‘16世紀早期’或いは、‘生卒年不詳’と、特に論拠を提示することなく述べており、必ずしも左祖し得るものではない。

チャンテルの語義について学問的な主張を行うためには、リクズイン・グウデムチェンと年代の近い伝承 (*thang yig*), 例えば、サンゲーリンパ (1340–1396. BDRRC#P5340) のラマゴンドウ (Bla-ma-dgongs-'dus) 等の伝承を精査する必要があるだろう。加えて、比較的新しい年代の一次資料、例えば、クンサンドードウルドルジェ (Kun-bzang-'gro-'dul-rdo-rje. b. 18th/19th c.. BDRRC#P2703) が著述したドルジェダク寺の寺史『稀有なる瑠璃鬘』(*Ngo mtshar vaidūrya'i phreng ba*) 等も論究されるべきである。2015年には63巻本の『チャンテル法類集』(*Byang gter chos skor phyogs bsgrigs*) が、コンピュータインプット (Computer Input) で出版されている。今後の学究に期したい。

<sup>96</sup> See 『蔵漢』 s.v. *smin grol gling dgon pa* (p. 2170): ‘*bod rang skyong ljongs grwa nang rdzong khongs su tā la'i bla ma sku phreng lnga pa'i bla ma gter bdag gling pas rab byung bcu gcig pa'i me 'brug lor ttab pa'i rnying ma lho brgyud lugs kyi dgon pa'i gtso bo zhig rab byung bcu gnyis pa'i sa khyi lor sog po jun gar gyis mer bsregs btang yang rjes su zhig gso byas shing/ sngar dgon pa 'dir khams dang a mdo'i sa khul khag gi rnying ma pa'i grwa pa chos dang sman rtsis sogs sbyong bar yong mkhan shin tu mang*'.

<sup>97</sup> DOWMAN 1988:167: ‘Minling Terchen Gyurme Dorje [...] was ordained by the Great Fifth Dalai Lama. [...] In 1676 he built Mindroling, providing images, scriptures and officials. As a Treasure finder he discovered the Rigdzin Tuktik cycle, Dzokchen treatises, and *sadhanas* [sic] of the Wrathful and Peaceful Deities, at Wokar Drak, Shawuk and Yamalung. His treasures formed the basis of the teaching methods of *lhoter*, the Southern Treasure, in contradistinction to *jangter*—Northern Treasure—of Dorje Drak’; [p. 209:] ‘Whereas the essential body of instruction given at Dorje Drak is derived from the *jangter*, the rival, sister gumpa at Mindroling [...] to the south of the Tsangpo is associated with the Southern Treasure (*lhoter*)’; HIRAMATSU (平松) 1982:177n13: ‘[ドルジェダク寺は] ニンマ派の総本山。北テルマ系。ミントルリン (南テルマ系 [...]) と並び称される’。

<sup>98</sup> 例えば、THONDUP 1986 は、ラマゴンドウ (Bla-ma-dgongs-'dus) 等の伝承を参照し、東南西北中央の5つのテルマを挙げている (pp. 115nn164–170)。

<sup>99</sup> See also WANG (王) 1983 (1997):48, WANG (王) 2016:47.

<sup>100</sup> See WANG (王) 1983 (1997):47, WANG (王) 2016:46–47.

## 2.2. 『チャッキドンポ』を収録する集成類

本2.2章では、原典研究として、『チャッキドンポ』を収録する集成類 (*phyogs bsgrigs*) について考察する。『チャッキドンポ』がリクズイン・グウデムチェンに帰されるテルマである以上、これを収録する集成類を検討することは、伝承の経過をたどる上に興味ある事実を示すものと考えられるからである。<sup>101</sup> については、下記に各集成類の文献情報を提示し、その後、個々の集成類における『チャッキドンポ』の箇所情報を、節構成を含め、目録類に照らし合わせつつ確認する。

第II部で提示する校訂・訳注研究において使用した『チャッキドンポ』 (siglum CD) を収録する集成類は、次の3本である。

- CD\_A 17 folios. 5/6 lines per folio. In: *Thugs sgrub drag po rtsal gyi chos skor*, vol. 2, pp. 511–543. ネチュン寺版『心成就法ダクポツアルの法類』の木版影印本。Gangtok: Bari Longsal Lama, 1980. 4 vols. 8 x 37 cm. [BDRC#W23453]
- CD\_B 10 folios. 6 lines per folio. In: *Rin chen gter mdzod chen mo*, vol. 29, pp. 249–268. トルン・ツルプ版『リンチェンテルズ』の木版影印本 (パロ版)。Paro: Ngodrup and Sherab Drimay, 1976–1980. 111 vols. 8.3 x 36 cm. [BDRC#W20578]
- CD\_C 10 folios. 6 lines per folio. In: *Rin chen gter mdzod chen mo*, vol. 19, pp. [197]–216. パルプン版『リンチェンテルズ』の木版影印本 (成都版)。[Khreng-tu'u]: [Ho-nub-mi-rigs-dpar-khang], [199?]. 63 vols. Unknown size. [BDRC#W1PD96185].

以下に、これら3本の集成類を、『チャッキドンポ』の箇所情報と共に提示する。

### 2.2.1. 『心成就法ダクポツアルの法類』 (TD)

CD\_A を収録している『心成就法ダクポツアルの法類』については、TBRC より入手した白黒の pdf 版 (W23453) を使用した。文献情報は次のとおりである。

\*\*\*

<sup>101</sup> チャンテルの集成類を比較参照した主な先行研究としては、チャンテルの3本の集成類 (A≈BDRC#W23775, B≈W29251, C≈W27295) に基づき、プルパに関するチャンテルの伝統 (*byang gter phur pa*) について詳細に論じた Boord 1993 が挙げられる。2015年に63巻本で出版された『チャンテル法類集』 (*Byang gter chos skor phyogs bsgrigs*. BDRC#W2PD17457) には『チャッキドンポ』が次の通り収録されている。

- (0.) *Tshe sgrub lcags sdong ma'i them sbyang*, vol. 7, pp. 269–271.
- (1.) *Tshe sgrub lcags kyi sdong po las: phyi sgrub rin chen bum pa*, vol. 7, pp. 273–278.
- (2.) *Nang sgrub lcags kyi sdong po dang: dbang yig bcas*, vol. 7, pp. 279–285.
- (3.) *Tshe sgrub lcags kyi sdong po las: gsang sgrub nam mkha'i rdo rje*, vol. 7, pp. 287–292.
- (4.) *Tshe sgrub lcags kyi sdong po las: yang gsang hrī: gcig ma*, vol. 7, pp. 293–297.
- (5.) *Tshe'i 'khor lo bri thabs*, vol. 7, pp. 299–302.

上の『チャンテル法類集』については、しかし、本研究を提出する間に知った為、未だ精査できていない。2000年に4巻本で出版された『長寿成就法集』 (*Tshe sgrub kun 'dus*. BDRC#W2DB4610) についても同様である。今後の課題としたい。



*Thugs sgrub drag po rtsal gyi chos skor*. Gangtok: Bari Longsal Lama, 1980. 4 vols. [BDRC#W23453]

8 x 37 cm. ‘A cycle of practice focussing upon the esoteric form of the Guru from the Byang-ter revelations of Rig-’dzin Rgod-kyi-ldem-’phru-can. Reproduced from tracings of prints from the Gnas-chun blocks’ (title page of the vol. 1).

\*\*\*

上にあげた寸法は、IASWR が提供しているマイクロフィッシュ (LMpj-014525–014528) に関する情報と照合して、両者の間に齟齬が無いことを確認した。『心成就法ダクポツアルの法類』は、ダライ・ラマ 5世ガワンロサンギヤムツォ (Ngag-dbang-blo-bzang-rgya-mtsho. 1617–1682. BDRC#P37) の聴聞録 (*gsan yig*)<sup>102</sup> をもとにドジョム・ジグデルイエシエドルジ (bDud-’joms ’Jigs-bral-ye-shes-rdo-rje. 1904–1987. BDRC#P736) が編纂し、1980年にガントックにおいて出版した4巻本の集成類として知られる。<sup>103</sup> 当版は、『ダクポツアルの目録』(*Drag po rtsal gyi dkar chag*)によれば、ネチュン寺 (gNas-chung-sgra-dbyangs-gling) のシャキヤヤルペル (Shakya-yar-’phel. ca. 19c. BDRC#P1GS130055) の尽力により出版された新版 (*gsar du*) である。<sup>104</sup>

なお、リクズイン・グウデムチェンの集成類における『心成就法ダクポツアルの法類』の位置付けについて触れる必要があるだろう。TURPEINEN 2015 の所論に見られるように、チャンテルの成就法は、3つの根本 (‘Three Roots’, p. 22), 即ち——(1.) 観音 (寂静尊) を中心とする外なる成就法 (*’thugs rje chen po ’gro ba kun grol*), (2.) パドマサンバヴァ (寂静尊) を中心とする内なる成就法 (*’rig ’dzin gdung sgrub*), そして (3.) パドマサンバヴァ (忿怒尊) を中心とする秘密なる成就法 (*’thugs sgrub drag po rtsal*)——を主軸とする。<sup>105</sup> 「ラマ／守護神／ダーキニー」という三尊との対応では、観音 (寂静尊) は「ラマ」 (*’guru, bla ma*) に、パドマサンバヴァ (寂静尊) は「守護神」 (*’deva, yi dam*) に、パドマサンバヴァ (忿怒尊) は「ダーキニー」 (*’dākiñīs (mkha’ ’gro ma)* [sic]) に、それぞれ相当し、<sup>106</sup>

<sup>102</sup> See JACKSOND 1987:v. 1, p. 84: ‘the record of teachings received’.

*gsan yig* と *thob yig* の区別については、MARTIN 1997 の英訳が参照される。それによれば、*gsan yig* は ‘record [of teachings] heard’ で、*thob yig* は ‘record [of teachings] obtained’ である (p. 16).

<sup>103</sup> *Drag po rtsal gyi dkar chag*, [1],1: *byang gter thugs sgrub drag po rtsal gyi rtsa ba’i chos tshan gyi dkar chag/ thams cad mkhyen gzigs che mgo [che mgo]* ལྷ། *lnga pa’i gsan yig nas zur du bkol ba*.

<sup>104</sup> ただし、ここでいう *gsar du* が、新たに版木を作成したものかどうかは定かではない。

*Drag po rtsal gyi dkar chag*, 31,5: *zhes bsngo smon gyi rgyas ’debs dang bcas par gyi phyi mor gsar du bskrun skabs gnas chung sgra dbyangs gling gi ’dus sde chen por 7 sku rten mkhan ming shakya yar ’phel gyis bgyis pa’o// mchog gi gter chen ya rgyal rgod ldem pa’i// byang gter chos mdzod mi nyams ’phel ba’i slad// mos ldan ba ri klong gsal dang blo gsal ming gis spar bskrun dges// zab gter bstan pa rin chen slar ’phel shog/ / ces pa’ang bdud ’joms pas so//*

<sup>105</sup> See also BOORD 1993:31: ‘In general, the religious tradition of rDo-rje-brag and its affiliate monasteries includes daily recitations from the *Chos spyad rab gsal* collection of Byang-gter prayers, the entire volume of which is memorized by every monk. More able students undertake arduous meditative retreats focussed upon the ‘outer, inner and secret’ *sādhanas* of the Byang-gter and then the study of the wrathful deities including Yamāntaka and Vajrakīla’, *ibid.*, 31n98: ‘*Phyi sgrub thugs rje chen po ’gro ba lam grol*, *Nang sgrub rig ’dzin gdung sgrub* and *gSang sgrub drag po rtsal*’.

チャンテルの僧院 (e.g. シムラのドルジェダク寺) における 3年間の加行でも、前行 (*sngon 'gro*) に続いて、1ヶ月間の観音 (寂静尊) 行, 5, 6ヶ月間のパドマサンバヴァ (寂静尊) 行, そして、1ヶ月間のパドマサンバヴァ (忿怒尊) 行が勤修される。<sup>107</sup> 『心成就法ダクポツァルの法類』は、このように、リクズイン・グウデムチェンの集成類において、成就法集中に、中でもパドマサンバヴァ (忿怒尊) を中心とする秘密なる成就法に位置付けられものと考察されよう。次に第2.2.2章 (『心成就法ダクポツァルの法類』における『チャッキドンポ』の箇所情報) において考察するように、『心成就法ダクポツァルの法類』所伝の『チャッキドンポ』の節構成 (はしがき→外→内→秘密→奥義→寿命守護輪の描出方法) の中には、「外」も「内」も「秘密」も含まれるが、リクズイン・グウデムチェンの集成類を俯瞰してみた場合、秘密なる成就法という位置付けが相応しい。このことは、繰り返しになるが、『チャッキドンポ』を全節を通して見て、言い得ることであろう。

### 2.2.2. 『心成就法ダクポツァルの法類』における『チャッキドンポ』の箇所情報

『チャッキドンポ』は、『心成就法ダクポツァルの法類』の *ka* 巻 (第2巻) に収録されている。『ダクポツァルの目録』 (*Drag po rtsal gyi dkar chag*) 及び『ダクポツァル第2巻の目録』 (*Drag po rtsal gyi pod gnyis pa'i dkar chag*) では、しかし、'u から *ye* という *bp.* 記号で整理、分類されている。<sup>108</sup> これは、前述したように、『心成就法ダクポツァルの法類』がダライ・ラマ 5世ガワンロサンギャムツォの聴聞録をもとに編纂されたためであろう。当該箇所には、両記号 (e.g. *ka* と 'u) が併記されている。両目録と実際の箇所情報を下記の表 (表4) に一覧にして対照してみる。

<sup>106</sup> TURPEINEN 2015:22: 'The three roots in Tibetan Buddhism refer to the master (*guru, bla ma*), tutelary deity (*deva, yi dam*) and the feminine wisdom beings or *dākiñīs* (*mkha' 'gro ma* [sic]). The Northern Treasures tradition has somewhat unusual presentation of the three roots, since the outer root of the guru is actually a deity practice of Avalokiteśvara, the inner root of the deity is a practice of a peaceful guru form of Padmasambhava, and the secret root of the *dākinī* is a practice of the wrathful guru Padmasambhava'.

<sup>107</sup> TURPEINEN 2015:23: 'Some of these ritual cycles are also practiced extensively in the three-year retreat of the Dorjé Drak monastery in exile in Shimla. In this retreat, the participants first complete the preliminary practices (*sngon 'gro*) located in Gödem's Dzokchen anthology, and then go on to practice the Three Roots of the Northern Treasures: Avalokiteśvara (one month), Peaceful Guru (5-6 months) and Wrathful Guru (one month). The last portion of the retreat is devoted to the Vajrakīla or Phurba ritual, and the length of the practice depends on the participant and whether he wishes to also engage in other optional ritual practices'.

<sup>108</sup> *Drag po rtsal gyi dkar chag*, 23,1: ('u) *pa la rnal 'byor tshe srog bsring ba'i phyir: phyi nang gsang ba'i tshe sgrub yod: ces them s can lcags sdong ma'i them [them em.] them] byang ('e) pa la phyi sgrub rin chen bum pa'i bdud rtsi bcud kyi snying po zhes pa bcud len sbyar thabs 'di'i yon ten lo bryad cu lon kyang skra dkar dang gnyer ma zhi zhing gzhon nu lo bcu drug pa ltar 'gyur ba ('o) pa la nang sgrub lcags kyi sdong po sprul sku'i sgrub pa (yi) pa la gsang sgrub nam kha' rdo rje zhes pa tshe dang ye shes rnam par nges pa gzi brjid kyi rgyal po longs spyod rdzogs sku'i sgrub pa (yu) pa la them med yang gsang hrī: gcig ma (ye) pa la tshe'i 'khor lo 'dri thabs.*

*Drag po rtsal gyi pod gnyis pa'i dkar chag*, [9],4: ('u) *pa la tshe sgrub lcags sdong ma'i them byang la ('e) pa la phyi sgrub rin chen bum pa la ('o) pa la nang sgrub lcags kyi sdong po la (yi) pa la gsang sgrub nam kha' rdo rje la (yu) pa la them med yang gsang hrī: gcig ma la (ye) pa la tshe'i 'khor lo 'dri thabs la.*

表4: 『心成就法ダクポツアルの法類』の目録と実際の箇所情報との対照表<sup>109</sup>

§	目録A	目録B	実際の箇所情報
0.	'u	'u	<i>kha-'u</i> : 511,1–513,6. 節名は固有の表紙に記されている <i>Tshe sgrub lcags sdong ma'i them byang</i>
1.	'e	'e	<i>kha-'o</i> : 515,1–521,1. 節名は固有の表紙に記されている <i>Tshe sgrub lcags kyi sdong po las: Phyi sgrub rin chen bum pa</i>
2.	'o	'o	<i>kha-'o</i> : 521,1–525,6. 節名はテキスト中に記されている <i>Nang bsgrub lcags kyi sdong po</i>
3.	yi	yi	<i>kha-yi</i> : 527,1–532,6. 節名は固有の表紙に記されている <i>Tshe sgrub lcags kyi sdong po las: gSang sgrub nam kha'i rdo rje</i>
4.	yu	yu	<i>kha-yu</i> : 533,1–538,2. 節名は固有の表紙に記されている <i>Tshe sgrub lcags kyi sdong po las: Yang gsang hrī gcig ma</i>
5.	ye	ye	<i>kha-ye</i> : 539,1–543,1. 節名は固有の表紙に記されている <i>Tshe'i 'khor lo 'dri thabs</i>

上の表4に確認し得るように、『心成就法ダクポツアルの法類』所伝の『チャッキドンポ』(CD\_A)は、全6節 (§§0–5) 構成となっており、両目録と実際の箇所情報との間に重大な相違は見られない(相違部分はグレーに色付けして示した)。ここで注意されることは、唯一、内なる成就法 (§2. *Nang sgrub*) だけは固有の表紙を欠き、その節名 *Nang bsgrub lcags kyi sdong po* は、本文の行中に記されている点である。この節名の直前には、行中に 'o 番号が付されており、これは目録との間にも齟齬がない。『心成就法ダクポツアルの法類』所伝の『チャッキドンポ』は、このように「はしがき→外→内→秘密 (*gSang sgrub nam kha'i rdo rje*) →奥義 (*Yang gsang hrī gcig ma*) →寿命守護輪の描出方法」という節順によって構成されていることを確認した。

### 2.2.3. ツルブ版『リンチェンテルズ』(RT\_A)

『リンチェンテルズ』は、クントウル・ロドゥターイエによって、その当時散逸の危機が叫ばれ、混沌とした状態にあったテルマ等の貴重な資料の数々を、包括的に収録する一大集大成として結実した。その広汎さは SMITH 2001 をして「実に幅広いもの」(‘as ever, was eclectic’, p. 263) といわしめている。<sup>110</sup> クントウル・ロドゥターイエに流れる『チャッキドンポ』の相承系譜 (*brgyud pa*) は、『リンチェンテルズの目録と相伝』(*RT gyi dkar chag dang brgyud yig*) における彼の記録を付録6に提出した。ついては、これをチャンダク・タシトブゲル (1550–1603) の『力倆類考究』(*mNga' dbang skor gyi mtha' dpyod*) における彼の相承系譜 (付録4) や、ダライ・ラマ5世ガワンロサンギャムツォ (1617–1682) の『ダライ・ラマ5世の聴聞録』(*Thob yig gangga'i chu rgyun*) における彼の相承系譜 (付

<sup>109</sup> 「目録A」欄には『ダクポツアルの目録』の bp. 記号を、「目録B」欄には『ダクポツアル第2巻の目録』の bp. 記号を、それぞれ記入した。

<sup>110</sup> SMITH 1990:263 (first appeared in SMITH 1970:62 with a few words changed): ‘He seems only to want to bring some order into the chaos of this “rediscovered” literature, to establish some criteria of authenticity for this genre that had often been reviled and rejected by Tibetan scholars of a more purist bent. His approach, as ever, was eclectic’.

See also SCHWIEGER 1990:XXXIII.

録5)と対照させた関係が説明されるべきところであるが、これを説明し得る積極的な論拠を筆者は現在持ち合わせていないため、これらを一覧にするに留めたい。

CD\_B を収録しているツルプ版『リンチェンテルズ』の影印本(パロ版)の文献情報は次のとおりである。

\*\*\*

*Rin chen gter mdzod chen mo* (RT\_A). Paro: Ngodrup and Sherab Drimay, 1976–1980. 111 vols. [=BDRC#W20578]

8.3 x 36 cm. ‘A reproduction of the Stod-luñ Mtshur-phu redaction of ‘Jam-mgon Koñ-sprul’s great work on the unity of the gter-ma traditions of Tibet. With supplemental texts from the Dpal-spuñs redaction and other manuscripts. Reproduced at the order of the Ven. Dingo Chhentse Rimpoche under the esteemed patronage of H. M. Ashé Kesang, Queen Mother of Bhutan, and H. R. H. Ashé Phuntsho Choedron, Senior Royal Grandmother’ (title page of the vol. 29).

\*\*\*

当版は、ディルゴケンツェ・タシペルジョル (Dil-mgo-mkhyen-brtse bKra-shis-dpal-byor. 1910–1991. BDRC#P625) によって、ツルプ版 (mTshur-phu) 『リンチェンテルズ』の影印版として、1976年から1980年までの5年間をかけてパロにおいて出版された事由により、パロ版 (Paro) と通称されている。パロ版は、ツルプ版の増補版として知られ、<sup>111</sup> 内容は同じだが巻数の数え方が異なる 111巻本と 70巻本とが流布している。本論文は、前者 111巻本の方を使用した。<sup>112</sup>

このパロ版がツルプ版の影印版であることは、Staatsbibliothek zu Berlin (SBB) が収蔵している木版ツルプ版本の第19巻 (bp. *dza*, 『Schwieger目録』no. 694/1-6) を閲覧し、確認した。<sup>113</sup> 筆者が採寸した同巻の寸法は、9.3 x 48.8 cm であり、『Schwieger目録』が考察しているように、パロ版よりもやや大きい。<sup>114</sup> 同巻には、パロ版には見られないインクの

<sup>111</sup> SCHWIEGER 1990:XXXVIIIn57: ‘Eine Liste der Ergänzungen findet sich im Band 99 der Paro-Ausgabe in dem Text (*Rin-chen gter-mdzod chen-mo’i kha-skoñ dkar-chag*) *rin-chen phreñ-ba*. Eine vier Bände umfassende ergänzende Unterweisung zur Erteilung der Weihnen zum gesamten *Rin-chen gter-mdzod* unter dem Titel (*Rin-chen gter-mdzod chen-mo’i smin-grol ’bog-pa’i skabs kyi phyag-len ñer-mkho’i zur-’debs mtshams-sbyor rigs-bcas ñuñ-gsal-du bkod-pa*) ’dod-rgu ’jo-ba’i gter-bum liegt außer in den Bänden 100 bis 103 der Paro Ausgabe auch als Zusatz zu MKHYEN-BRTSE unter den Bandsignaturen *E, Vañ, Mā* und *Yā vor*’.

<sup>112</sup> 筆者はこの 111本を ICPBSの大学図書館 (D186.14/KO) と、Bibliothek des Asien-Afrika-Instituts, Universität Hamburg (18/303:1: M II 1791/1) で閲覧したが、いずれの資料にも前書き (preface) 部分を見出し得なかった。出版の流通経緯によるものかもしれない。

<sup>113</sup> Staatsbibliothek zu Berlin におけるツルプ版『リンチェンテルズ』19巻 (bp. *dza*) の閲覧に際しては、Michael Balk 博士 (SBB) が便宜を図ってくださった。また、『リンチェンテルズ』については、Orna Almogi 博士 (Universität Hamburg) から数多くのご教示を得た。ALMOGI 2011 (SCHWIEGER 2009 に対する書評) 共々、どれだけ助けられたかわからない。ここにあらためて深く感謝申し上げたい。

<sup>114</sup> SCHWIEGER 1990:XXXVII.

染みが、ペチャの行間に黒色で、その紙面の端々に赤色で、それぞれ付着しているのが看取された。

1909年から1912年にかけて、トールン地方のツルプ印経所 (sTod-lung-mtshur-phu'i-par-khang) において開版された63巻本のツルプ版は、先行する60/61巻本のパルプン版を増補するかたちで出版された。SCHWIEGER 1990によれば、パルプン版は1855年から1871年にかけて編纂され、1875年より開始された刷印は60巻を数えたが、<sup>115</sup> 中央チベットまで広く流布しなかったため、クントウル・ロドゥターイエの弟子筋にあたるカルマパ15世カキャブドルジェ (mKha'-khyab-rdo-rje. 1870/1871–1921/1922. BDRC#P563) がツルプ寺においてこれを増補し、刷印した (1990:XXXIII)。<sup>116</sup> SMITH 2001の所見によれば、両版は「些か異なり」(‘differ somewhat’, p. 338n883), 先行するパルプン版の方が信頼度が高い。<sup>117</sup> 本研究が校訂・訳注研究においてパルプン版とツルプ版の両『リンチェンテルズ』を使用することは、以上の事由による。なお、当ツルプ版『リンチェンテルズ』の影印本(パロ版)における『チャッキドンポ』の箇所情報は、後に、パルプン版『リンチェンテルズ』の影印本(成都版)と共に提示する。

#### 2.2.4. パルプン版『リンチェンテルズ』(RT\_B)

CD\_Cを収録しているパルプン(dPal-spungs)版『リンチェンテルズ』の影印本(成都版)については、TBRCより入手した白黒のpdf版(W1PD96185)を使用した。文献情報は次のとおりである。

\*\*\*

*Rin chen gter mdzod chen mo* (RT\_B). [Khreng-tu'u]: [lHo-nub-mi-rigs-dpar-khang], [199?]. 63 vols. [BDRC#W1PD96185]

Unknown size. ‘Treasury of Precious Revelations. Collection of rediscovered terma and commentarial works. Comprises sadhanas, empowerments, and instructions of the Nyingma order gathered and structured by Jamgon Kongtrul Lodro Taye (1813-1899). Scan based on the Palpung redaction, reproduced in Chengdu’ (Catalog Information of W1PD96185).

<sup>115</sup> SCHWIEGER 1990:XXXII: ‘Im wesentlichen hatte er die Arbeit hieran zwischen den Jahren 1855 und 1871 durchgeführt, doch war er selbst noch viele Jahre nach Beginn der Drucklegung 1875 im osttibetischen Kloster *dPal-spuñs* mit der Anordnung der Texte und der Abfassung von Zusätzen beschäftigt. Der Sammlung gab er den Namen *Rin-chen gter-mdzod*, „Hort kostbarer Schätze“.

Cf. SCHUH 1976:LXVII.

<sup>116</sup> SCHWIEGER 1990:XXXII–XXXIII: ‘Weil Abzüge des ersten Drucks des *Rin-chen gter-mdzod* in Zentraltibet selten waren, ließ der 15. *Karma-pa mKha'-khyab rdo-rje* (1871-1922), der in den Jahren 1887 und 1888 selbst bei *Koñ-sprul* studiert hatte, eine zweite, 63 Bände umfassende Ausgabe in dem in *sTod-luñ* gelegenen Kloster *mTshur-phu* drucken. In sie nahm er auch kleinere von ihm selbst verfaßte Texte auf’.

<sup>117</sup> SMITH 2001:338n883: ‘the Dpal spungs (sixty volumes) and Mtshur phu (sixty-three volumes) editions of the *Gter mdzod* differ somewhat. The Mtshur phu is considerably later than the Dpal spungs edition and is certainly not as reliable. Some examples of the Mtshur phu redaction contain Kong sprul’s biography of his old friend, Mkhyen brtse’.

\* \* \*

当成都版は、TBRCより入手した白黒のpdf版(W1PD96185)に出版情報が看取されず、従って、上の出版情報はTBRCより提供されたCatalog Informationに基づく。当成都版がパルプン版の影印本(redaction)であることは、第1巻(*pod ka pa*)の巻末に看取される *dpal spungs gdan sar bzhengs pa* という文言によって確認できるであろう。<sup>118</sup> また、CD\_Cに印字されたbp.記号は、『SRITリンチェンテルズ目録』(61巻本パルプン版『リンチェンテルズ』の目録)における『チャッキドンポ』の照会番号「*dza, 1-10B2*」(vol. 1, p. 222)とも齟齬がない。

### 2.2.5. 『リンチェンテルズ』における成就八部教

『リンチェンテルズ』における『チャッキドンポ』の箇所情報を提示するに際しては、その前提として、成就八部教 (*sgrub pa bka' brgyad/sgrub pa sde brgyad*; Skt. \**aṣṭamahāsādhana*)の所成を確認しておく必要がある。<sup>119</sup> 成就八部教については、トゥカン3世口サンチュエキニマ(1737-1802)の著書『一切宗義ニンマ派の章』(*gSang sngags rnying ma'i grub mtha' byung tshul*)を用いたHIRAMATSU(平松)1982による考察が参照される。<sup>120</sup>

<sup>118</sup> *sPrul ba'i lo chen bai ro tsa na'i rnam thar padma'i dga' tshal*, RT\_B, vol. 1 (*ka*), 897,5: 'jig rten mig gcig rnam snang lo tsā ba// bai ro'i rnam thar padma'i dga' tshal zhes// ma 'ong bdag sogs dad pa'i gsos 'di ni// kun mkhyen bla ma gar dbang dgongs gter nyid// bsod nams rgya mtsho spel slad 'dzad med kyil// chos shyin 'di yang rag nyag bla ma yi// dad pa'i blo dang btang ba'i dngos rdzas kyis// *dpal spungs gdan sar bzhengs pa'i dge ba des// dpal ldan bla ma mnyes pa'i rgyur 'gyur zhing // bdag sogs 'di nas byang chub ma thob bar// dam chos bdud rtsi'i zas la longs spyod bzhin// thugs rje'i grib bsil rtag tu ngal 'tshor shog// ces pa'ang mkhyen sprul pas smras pa dge//*

当該コロフォンの情報は、Karma Gongde (Head Librarian of TBRC/BDRC)氏よりご示唆を賜った。ここに記して感謝申し上げます。

<sup>119</sup> See KANEKO (金子) 1982:67: '成就8部教といわれるものがあり、出世間の5部と世間の3部に分けられる。[...] これらの成就部は、おもにパドマサンバヴァから盛んになったといわれ、彼がチベットのサムエ、チンプ(*mchims phu*)で、チゾンデツェンやナムカー・ニンポ等の多くの弟子に与えた。その弟子達が、それぞれ成就を得て、種々の奇蹟等をおこしたことが語られている。これらの経典は、リンチェン・テルズエ(埋蔵宝蔵)の編纂における基礎になっている'。

For *sgrub pa bka' brgyad*, see also 『藏漢』 s.v. *sgrub pa bka' brgyad* (p. 617): '*rnying ma pa'i bskyed rim gyi gtso bo/ 'jam dpal sku/ padma gsung/ yang dag thugs/ bdud rtsi yon tan/ phur pa phrin las te 'jig rten las 'das pa'i sde lnga dang/ ma mo rbod gtong/ dmod pa drag sngags/ 'jig rten mchod bstod de 'jig rten pa'i sde gsum mo*'.

<sup>120</sup> See HIRAMATSU (平松) 1982:146nn79-86, i.a. n. 80. 成就八部教は、『一切宗義ニンマ派の章』において次のように説示されている。

*gSang sngags rnying ma'i grub mtha' byung tshul*, 11b2 (as translated into Japanese in HIRAMATSU (平松) 1982:108-109): *bskyed rim gyi gtso bo ni/ sgrub pa bka' brgyad du grags pa ste/ 'jam dpal sku/ padma gsung/ yang dag thugs/ bdud rtsi yon tan/ phur pa 'phrin las rnams la 'jig rten las 'das pa'i sde lda dang/ ma mo rbod gtong/ dmod [dmod] dmon] pa drag sngags/ 'jig rten mchod bstod rnams la 'jig rten pa'i sde gsum zhes grags so// de dag las rta mgrin dang phur pa gnyis slob dpon chen po nyid kyis/ rgyal po la rta mgrin dang/ jo mo dang 'bre a tsa ra sa le [le] me] la phur pa stsal bas de dag las rim gyis 'phel/ 'jam dpal skor ni slob dpon shāntim garbha dang/ yang dag skor ni hūm kā ra/ bdud rtsi'i skor ni/ bi ma la mi tra rnams kyis*

『リンチェンテルズ』における長寿成就法『チャッキドンポ』の位置付けは、マハーヨーガ乗 (Mahāyoga) をタントラ部 (rGyud-sde) と成就法部 (sGrub-sde) に二大別した内の後者に属し、その細目を概略すれば次のような配列、即ち——

根本成就法部 (rTsa-ba-sgrub-thabs)

[...] 成就八部教 (sGrub-pa-sde/bka'-brgyad)

出世間の五部 ('Jig-rten-las-'das-pa-lnga)

蓮華口密成就部 (Padma-gsung-gi-sgrub-skor)

寂靜相 (Zhi-ba)

無量寿仏 (Tshe-dpag-med)——というニンマ派の伝統的な典籍の分類、配列法の中に、無量寿仏を主尊格とする出世間部の成就法に分類されていることが確認し得る。<sup>121</sup> 寂靜相に相對する蓮華口密成就部の忿怒相としては、馬頭尊 (rTa-mgrin; Hayagrīva) が挙げられている。<sup>122</sup>

*bshad cing dar bar byas so// ma mo la sogs pa ni slob dpon gyis bod kyi lha 'dre gdug pa can btul ba rnam dbang bskur te dam tshig la bzhag nas ris su bcad pa'i sde gsum po 'jig rten la phan gdags pa'i rtsa lag tu sgrub pa'i thabs kyi rim pa bstan pa ste/ spyod rgyud 'jig rten dkyil 'khor dag dang rnam bzhag mtshungs pa'o//*

出世間の五部 ('Jig-rten-las-'das-pa-lnga) に対する世間の三部 ('Jig-rten-pa'i-sde-gsum), 即ち——(1.) マモボトン (Ma-mo-rbod-gtong), (2.) ムウパダクガク (dMod-pa-drag-sngags), そして (3.) ジクテンチュトウ ('Jig-rten-mchod-bstod)——について、WANG (王) 1997 は、'ポン教由来とされる' (WANG (王) 2016:51) と論じている。その事由としては、'マモ・ブートンの“マモ (ma-mo)” は、ポン教にあらわれる悪神のことである。チベットの歴史家は、これらがポン教由来であると言ってはばからない (『青史』のシュンヌペル等)' (ibid.) ということが挙げられている。See WANG (王) 1997:52. 世間の三部は、HIRAMATSU (平松) 1982 に、'「鬼女・激発」(ma mo rbod gtoñ) 「呪い・激しいマントラ」(dmod pa drag snags) 「世間・讃歌」(hjjig rten mchod bstod)' という訳語がそれぞれ与えられており (p. 146, n. 80), 比較参照されよう。

<sup>121</sup> RT gyi dkar chag dang brgyud yig, 200,4f.

『リンチェンテルズの目録と相伝』(RT gyi dkar chag dang brgyud yig) では、出世間の五部 ('jig rten las 'das pa lnga) と世間の二部 ('jig rten pa gtsor bstan pa gnyis) との間に境界の一部 (so mtshams pa gcig) としてマモボトン (ma mo rbod gtong, 317,4f.) をあげている。

RT gyi dkar chag dang brgyud yig, 172,4: sgrub pa sde brgyad bye brag tu sgrub pa'i skor la brgyad/ 'jig rten las 'das pa lnga/ so mtshams pa gcig/ 'jig rten pa gtsor bstan pa gnyis so.

ツルプ版『リンチェンテルズ』に基づく構成は SCHWIEGER 1990:v-xxv (from 1-1.2.1.2.1), SCHWIEGER 1995:v-xi (from 1.2.1.2.2-) に、パロ版に基づく構成は BARRON 2003:521-526 に、『成就法集成』(sGrub thabs kun btus) における構成は BARRON 2003:532-543 に、それぞれ提出されている。

<sup>122</sup> rta mgrin は、rta (馬) と mgrin (頸/首) という 2語より成る複合語 ('馬の頸/首を有するもの') で、サンスクリット対応語には hayagrīva (haya-grīva) が挙げられる。See LCHANDRA, s.v. rta mgrin (p. 635): 'hayagrīva'. See also 『仏教語大辞典』s.v. 馬頭観音 (p. 1097): 'また馬頭大士ともいう。怒りのはげしさによって、人びとの苦しみを救う力を示す観音。[...] 観世音菩薩の化身で、煩惱を断じる功德がある。忿怒相で人身馬頭と、頭上に馬頭を置く像とがある。三面八臂・四面八臂など種々ある。俗に馬の病氣と安全とを祈る'. 本論文では rta mgrin 及び hayagrīva に「馬頭尊」という訳語をあてて考察をすすめる。チベットにおける馬頭尊は、OBA (大羽) 2008 によれば、'蓮華部に属する忿怒尊の一尊で、観音としては認識されない。一般的には、馬頭は無量光が忿怒した姿だと説明される' (OBA (大羽) 2008:61)。馬頭観音 (馬頭観世音菩薩) と馬頭尊 (何耶揭唎婆) の作像法が『陀羅尼集経』(T 901) において区別されていることは、OBA (大羽) 2008:66-67 を参照。

成就八部教は、また、ゴ翻訳師シヨンヌペル (*'Gos-lo-tsā-ba gZhon-nu-dpal*. 1392–1481. BDRRC#P318) の『青史』(*Deb ther sngon po*) では、五仏 (*rigs lnga*) と関連付けて論じられる中に蓮華口密成就部は無量光仏 (*'Od-dpag-med*) と対応されているのが注意される。<sup>123</sup> 『リンチェンテルズ』において『チャッキドンポ』がマハーヨーガ乗に位置付けられていることは、チベット語訳〈無量寿宗要経〉が、プトウン・リンチェンドゥブ (1290–1364) の『十万タントラ目録』やケードゥブジェ・ゲレクパルサン (1385–1438) の『タントラ概論』では、所作タントラ (*bya rgyud*; Skt. *kriyātantra*) に選分されていることと比較対象されてよいであろう。

## 2.2.6. 『リンチェンテルズ』における『チャッキドンポ』の箇所情報

『チャッキドンポ』は、『リンチェンテルズ』の *dza* 巻に収録されている。パルプン版 (成都版, i.e. CD\_C) の *dza* 巻の目録部には、フォリオ数が行間のグロスに付されているものの、具体的節名が見在しない。<sup>124</sup> 従って、『リンチェンテルズの目録と相伝』(*RT gyi dkar chag dang brgyud yig*)<sup>125</sup> と、ツルプ版 (パロ版, i.e. CD\_B) とパルプン版の実際の箇所情報を下記の表 (表5) に一覧にして対照してみる。グレーに色付けした部分は、相違する箇所である。

表5: 『リンチェンテルズの目録と相伝』と実際の箇所情報との対照表<sup>126</sup>

§	目録C	実際の箇所情報 (CD_B)	実際の箇所情報 (CD_C)
0.	<i>thems byang</i>	249,1–251,2: <i>Tshe sgrub lcags sdong ma'i them byang</i>	[197],1–199,2: <i>Tshe sgrub lcags sdong ma'i them byang</i>
		節名は固有の表紙に記されている	節名は固有の表紙に記されている
1.	<i>Phyi sgrub</i>	251,2–254,6: <i>Tshe sgrub lcags kyi sdong po las: Phyi sgrub rin chen bum pa</i>	199,2–202,6: <i>Tshe sgrub lcags kyi sdong po las: Phyi sgrub rin chen bum pa</i>
		節名はテキスト中に記されている	節名はテキスト中に記されている

<sup>123</sup> *Deb ther sngon po*, DN\_A vol. 1, 139,2; DN\_B 95,3: *de ltar na rnying ma ba rnams kyis nyams su spyod pa'i sgrub pa bka' brgyad ni/ 'jam dpal sku/ padma gsung/ yang dag thugs/ bdud rtsi yon tan/ phur pa phrin las zhes [zhes A] shes B] 'jig rten las 'das pa'i sde lnga dang/ ma mo rbod gtong dang/ dmod pa drag sngags dang/ 'jig rten mchod bstod de/ de ltar sde brgyad do// de la 'jam dpal sku ni rnam snang/ padma gsung ni 'od dpag med/ yang dag thugs ni mi bskyod pa/ bdud rtsi yon tan ni rin 'byung/ phur pa phrin las ni don grub ste rigs lngar bsdu pa yin la/ ma mo la sogs pa 'jig rten pa'i rigs kyi [kyi A] phyi B] sde gsum ni/ slob dpon padmas bod kyi lha srin rnams btul zhing dam la btags nas sde gsum du phye ba yin pas/ bod ma'o zhes rnying ma ba rnams kyi yi ge 'ga' zhis las 'byung ste/ 'thad par yang bsams so/*

As translated into English in ROERICH 1949:vol. 1, p. 106.

<sup>124</sup> RT\_B, vol. 19, 1,3: *byang gter tshe sgrub lcags sdong ma gter gzhang ldeb <<10>>*

<sup>125</sup> RT gyi dkar chag dang brgyud yig, 202,1: *byang gter thugs sgrub chos tshan nyer lnga las/ bcu dgu pa tshe dpag med sprul sku lcags sdong ma lha gcig bum gcig gi dbang/ se bkra bzang pa'i gsung rgyun [rgyun] rgyun lha → rgyun] mang gi dbang/ them [them em.] thems] byang/ phyi sgrub/ nang sgrub/ de'i dbang byang/ gsang sgrub/ yang gsang hrī: gcig ma/ cho 'khor bri thabs bcas gter gzhang tshang ba/ [...]*

<sup>126</sup> 目録Cには『リンチェンテルズの目録と相伝』に記載された節名を記入した。



2.	<i>Nang sgrub/</i>	254,6–259,2: <i>Nang sgrub lcags kyi sdong pa</i>	202,6–207,2: <i>Nang sgrub lcags kyi sdong po</i>
	<i>de'i dbang</i> <i>byang</i>	節名はテキスト中に記されている	節名はテキスト中に記されている
3.	<i>gSang sgrub</i>	259,3–262,4: <i>Tshe sgrub lcags kyi sdong po</i> <i>las: gSang sgrub hrī: gcig ma</i>	207,3–210,4: <i>Tshe sgrub lcags kyi sdong po</i> <i>las: Nang sgrub hrī: gcig ma</i>
		節名はテキスト中に記されている	節名はテキスト中に記されている
4.	<i>Yang gsang</i>	262,5–266,2: <i>Tshe sgrub lcags kyi sdong po</i> <i>las: Yang gsang nam mkha'i rdo rje</i>	210,5–214,2: <i>Tshe sgrub lcags kyi sdong po</i> <i>las: Yang gsang nam mkha'i rdo rje</i>
	<i>hrī: gcig ma</i>	節名はテキスト中に記されている	節名はテキスト中に記されている
5.	<i>cho 'khor bri</i>	266,2–268,3: <i>Tshe'i 'khor lo 'dri thabs</i>	214,2–216,3: <i>Tshe'i 'khor lo 'dri thabs</i>
	<i>thabs</i>	節名はテキスト中に記されている	節名はテキスト中に記されている

上の表5に確認し得るように、『リンチェンテルズ』所伝の『チャッキドンポ』(CD\_BとCD\_C)も、全6節 (§§0–5) 構成となっている。『心成就法ダクポツアルの法類』(CD\_A)とは異なり、第0節はしがき (§0. *them byang*) にのみ、その節名が固有の表紙に記されている。残りの節 (§§1–5) は全て固有の表紙を欠くもので、従って、これらの節名は本文の行中に示されている。しかし、固有の表紙を有する冒頭のはしがきをもって、長寿成就法『チャッキドンポ』のタイトルと見做すことはできないであろう。何故なら、「残りの節の大半」には、その節名の前に *tshe sgrub lcags kyi sdong po las* (長寿成就法『チャッキドンポ』の) という CD\_A とも共通する文言が見在するからである。これは長寿成就法『チャッキドンポ』のタイトルを考察する上で重要なポイントとなるから、上に述べた「残りの節の大半」を具体的に挙げると、次の3つの節、即ち——(1.) 外なる成就法 (§1. *phyi sgrub*), (2.) 秘密なる成就法 (§3. *gsang sgrub*), (3.) 奥義 (§4. *yang gsang*)——に、*tshe sgrub lcags kyi sdong po las* という文言が見られ、ここに、これら「外／秘密／奥義」が、主となる *tshe sgrub lcags kyi sdong po* の為の副次的な節であることが伺われるのである。どの節が、では、主となる *tshe sgrub lcags kyi sdong po* に対応するかといえば、それは、この文言を含まない、内なる成就法 (§2. *nang sgrub*) だと考えるのが妥当であろう。

なお考察すべき点として、パルプン版 (CD\_C) では *hrī: gcig ma* が内なる成就法 (*nang sgrub*) と記述されている点が残っている。現況では、パルプン版の目録に節名に関する記述を確認し得ないので、ツルプ版の記述を支持したい。パルプン版は、*lcags kyi sdong po* を内なる成就法と記述しており、これが重出する点も指摘されよう。従って、『リンチェンテルズ』所伝の『チャッキドンポ』の節の構成は、「はしがき→外→内→秘密 (*gSang sgrub hrī: gcig ma*) →奥義 (*Yang gsang nam mkha'i rdo rje*) →寿命守護輪の描出方法」という順序であることが暫定的に確認される。

## 2.3. タイトルと節構成

本2.3章では、長寿成就法『チャッキドンポ』のタイトルと節構成について考察をすすめる。*lcags kyi sdong po* という、容易にその語義を把握し得ない複合語がどのように理解、把握され得るかは、本長寿成就法を考察する上で極めて重要な視座となろう。この語句が『チャッキドンポ』を構成する各節の名称に使用されていることは、第2.2章において論究したとおりである。そこで本章では、第2.2章の考察に基づき、まず『チャッキドンポ』というタイトルの語義について考察し、その後、当該長寿成就法の節構成について考察をすすめる。

### 2.3.1. 『チャッキドンポ』というタイトルについて

*tshe sgrub lcags kyi sdong po* (長寿成就法『チャッキドンポ』) という語句は、当該長寿成就法の本文中にも使用例が見在するが (§§0.2.1, 0.3.1, 1.1.2, 2.1.1, 2.8.1), これを構成する節名の一部にも用いられていること (§§1, 3, 4), <sup>127</sup> また、各種目録にも当該長寿成就法の法題、タイトルとして記載が見られることは、第2.2章において確認したとおりである。当該長寿成就法には、この *lcags kyi sdong po* という語形の他に、*lcags sdong ma* という語形も、第0節はしがきの節名に使用されているが、<sup>128</sup> この事由は、おそらく *-ma* と *-po* との間の交代、即ち、書物のタイトル等に用いられる女性形の *-ma* という語尾が選択されたことに起因するものと見做してよいであろう。<sup>129</sup>

当該長寿成就法をして *Tshe sgrub lcags kyi sdong po* と呼び慣らわすことは、後述するように、ダライ・ラマ 5世ガワンロサンギヤムツォ (1617–1682) が著した『チャッキドンポの作法並びに灌頂儀軌法』や、<sup>130</sup> 『チャッキドンポ』を修習した事績を伝えるタントンギャルポの伝記『すべてを明らかにする宝鏡』<sup>131</sup> 等の他の著作にも確認し得る。しかし、その語義に関する説明は、管見に触れた限り、見当たらない。『すべてを明らかにする宝鏡』の英訳研究である STEARNS 2007 は、パロ版『リンチェンテルズ』所伝の『チャッキドンポ』(*Tshe sgrub lcags kyi sdong po*) に基づき、これを ‘Longevity Practice of the Iron Tree’ (p. 589, Bibliography) と英訳している。

典籍のタイトルに関する考察は、多様なりセンション中に、そのタイトルを確定することからして大仕事であることはよく知られている。例えば、そのチベット語訳の経題中

<sup>127</sup> §1: *tshe sgrub lcags kyi sdong po las: phyi sgrub rin chen bum pa bzhugs so:*  
§3: *tshe sgrub lcags kyi sdong po las: gsang sgrub nam mkha'i rdo rje bzhugs so:*  
§4: *tshe sgrub lcags kyi sdong po las: yang gsang hrī gcig ma bzhugs so:*

<sup>128</sup> §0: *Tshe sgrub lcags sdong ma'i them byang bzhugs so.*

<sup>129</sup> See BEYER 1992:126 (2.1.2.2.1.8.4. Names), 127 (2.1.2.2.1.9. The formative *-pho* “adjective/agent”).

<sup>130</sup> *lcags kyi sdong po'i las byang dbang chog dang bcas pa*, 180,2: *ces lha brag gter byon nang sgrub lcags kyi sdong po'i las byang dbang chog dang bcas pa ganggā'i chu rgyun 'di ni [...].*

<sup>131</sup> *Kun gsal nor bu'i me long*, K\_A 24a3; K\_B 49,4; K\_C 48,9: *dge slong brtson 'grus da [da B, C] de A] 'dir gter chos rnam gsan pa la myur du 'byon par [par B, C] pa A] 'dug// khong gter kha 'di'i tshe sgrub lcags kyi sdong po la tshe'i rig 'dzin brnyes nas [...].*

に『チャッキドンポ』と同じく *sdong po* という語句を含む〈入法界品〉(*Gaṇḍavyūha; sDong po bkod pa'i mdo*) は、その経題をめぐる数多の論考で知られる。<sup>132</sup>「翻訳」という方法を通じて典籍を考察する以上、タイトルをいかに解釈するかは、避けては通れない問題であろう。

### 2.3.2. チャッキドンポ: 鉄のように頑丈な命脈

このような問題意識のもと、筆者は SHINGA 2017b において、『チャッキドンポ』の語義について考察を試みた。具体的には、当該長寿成就法中に *lcags/lcags kyi/sdong po* を用いた4つの用例、即ち——(1.) §2.3.1: *lcags kyi padma 'dab*, (2.) §2.3.2: *lcags kyi srog rtsa*, (3.) §2.5.1: *lcags kyu*, (4.) §0.3.1.1: *kha rgyan dpag bsam sdong po*——という用例が看取される箇所を訳出し、*lcags* には「鉄のように頑丈である」(‘iron-like (i.e. firm/robust)’) という語義が、また *sdong po* には「枝/茎/幹」(‘stalk’) という語義が、それぞれ認められることを指摘した。<sup>133</sup> 後者 *sdong po* は、SHINGA 2017b において想定したように、寿命を司る壺 (*tshe bum*) を莊嚴する如意枝 (§2.7.2: *dpag bsam sdong po*) の他に、鉄のように頑丈な命脈 (§2.3.2: *lcags kyi srog rtsa*) を意図するものと考えられる。

*lcags kyi sdong po* は、〈梵網経〉の所説に見られるように、<sup>134</sup>「鉄のように頑丈な幹」として、常見 (*rtaḡ par smra ba*) の喩えに依用されることがある。鉄という金属は、熱伝導率が低く、融点が高いことで知られ、インドでは、ヴェーダ文献に見出されるように、貴金属 (*hīraṇya-*) と卑金属 (*āyas-*) とに二大別した時には、後者卑金属の部類に入る。<sup>135</sup>「鉄の如き」その頑丈性は、当該長寿成就法においては、勤修者と極楽世界 (§2.4.1: *bde ba can*) とを繋ぎ、彼/彼女に不死なる寿命の甘露を注ぎ満たす命脈が備えるべき特性として、よく機能するものである。SHINGA 2017b において、筆者がチャッキドンポを「へその緒」(‘umbilical cord’, p. 78) に擬えたのはこの事由による。鉄は、実に、その実用性によって尊ばれる。

*lcags kyi sdong po* の語義を認定することは、すこぶるむずかしい。従って、現時点では、当該長寿成就法のタイトルは「鉄のように頑丈な命脈」を意図するものと想定するとどめ、その響きのままに、この長寿成就法を『チャッキドンポ』と呼称するのが妥当であろう。

<sup>132</sup> See GÓMEZ 1968:lx: ‘indeed problematic, and nowhere within the text itself do we find anything which could explain or hint at the interpretation of this title’. See also WOGIHARA (荻原) 1972, HARA (原) 1973, WARDER 1970 (1980):424, KAJIYAMA (梶山) 1994:442–448, SAKURABE (櫻部) 1997, MURAKAMI 2006, OSTO 2009, and Hori (堀) 2012.

<sup>133</sup> See SHINGA 2017b:76–78.

<sup>134</sup> \**Brahmajālasūtra*, D 73a7; P 75b7: *lcags kyi sdong po ltar 'dug pa ste/ de ltar na sems can shes ldan 'di dag ni/ kun tu rgyug cing 'khor la rtaḡ pa de lta bu dang mtshungs pa med pa'o// rtaḡ par smra ba mams ci la rten cing/ ci la gnas nas/ ci la gnas bcas te/*

<sup>135</sup> See YAMADA (山田) 2017:278f.

## 2.3.3. 『チャッキドンポ』の節構成について

『チャッキドンポ』の節構成については、既に第2.2章で、当該長寿成就法を収録する個々の集成類における『チャッキドンポ』の箇所情報を、節構成を含め、目録類に照らし合わせつつ確認した。下記に、これら考察結果を比較検討し、『チャッキドンポ』の節構成、即ち、各節の名称と順序を確定する。

『心成就法ダクポツアルの法類』所伝の『チャッキドンポ』の節構成は、「はしがぎ→外→内→秘密 (gSang sgrub nam kha'i rdo rje) →奥義 (Yang gsang hrī gcig ma) →寿命守護輪の描出方法」という順序であることは第2.2章で確認した。これを、同じく第2.2章で確認した『リンチェンテルズ』所伝の『チャッキドンポ』の節構成「はしがぎ→外→内→秘密 (gSang sgrub hrī: gcig ma) →奥義 (Yang gsang nam mkha'i rdo rje) →寿命守護輪の描出方法」と比較すると、上にグレー色を付けた部分、即ち、秘密なる成就法 (§3) と奥義なる成就法 (§4) について、その節の名称が相違することが知られる。『チャッキドンポ』の節構成に関しては、既に第2.2章で確認したように、『ダクポツアルの目録』にも「秘密 (gSang sgrub nam kha'i rdo rje) →奥義 (Yang gsang hrī gcig ma)」という順序が見在する。以上の考察によって、『チャッキドンポ』の節構成を次のとおり確定することは、現在の段階では穏当であろう。

- 第0節 長寿成就法『チャッキドンポ』のためのはしがぎ
- 第1節 外なる成就法「貴重な壺」
- 第2節 内なる成就法「チャッキドンポ」
- 第3節 秘密なる成就法「虚空の金剛」
- 第4節 奥義なる成就法「Hrī 一字」

以上の節構成において、内なる成就法 (*nang sgrub*) が『チャッキドンポ』の主となる節であり、それ以外の節は副次的な節であると見做し得ることは、第2.2章で触れた通りである。このことは、ダライ・ラマ 5世ガワンロサンギャムツォ (Ngag-dbang-blo-bzang-rgya-mtsho. 1617–1682. BDRC#P37) が、『チャッキドンポの作法並びに灌頂儀軌法』 (Tōhoku#5783. *lCags kyi sdong po'i las byang dbang chog dang bcas pa*) において『チャッキドンポ』を「内なる成就法」 (*nang sgrub*) と摘記していることなどからもよく支持されるであろう。<sup>136</sup> この他、テルダクリンパ・ギェルメドルジェ (gTer-bdag-gling-pa 'Gyur-med-rdo-rje. 1646–1714. BDRC#P7) とミンリンロチェン・ダルマシュリー (sMin-gling-lo-chen Dharma-shrī. 1654–1717/1718. BDRC#P667) が編纂した『成就法如意宝瓶』 (*sGrub thabs 'dod 'jo'i bum bzang*) に収録された類書 *Byang gter tshe dpag med nang sgrub lcags sdong mar grags pa'i sgrub thabs*<sup>137</sup> の存在も注意に値いする。

<sup>136</sup> *lCags kyi sdong po'i las byang dbang chog dang bcas pa*, 180,2: *ces lha brag gter byon nang sgrub lcags kyi sdong po'i las byang dbang chog dang bcas pa ganggā'i chu rgyun 'di ni [...]*.

<sup>137</sup> In: GB, vol. 1, pp. 161–173.

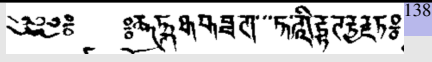
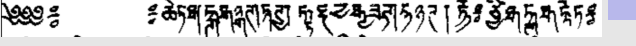
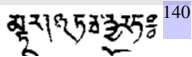
*Byang gter tshe dpag med nang sgrub lcags sdong mar grags pa'i sgrub thabs*, 173,5:  
*mi 'gyur zag med rdo rje tshe'i//*  
*sgrub thabs kun tu grags ldan phyr//*  
*'jug bder lag len du ma yi//*  
*snying po nyung ngur drol ba'o//*  
*byang gter tshe dpag med nang sgrub lcags sdong mar grags pa'i sgrub thabs kyi le'u tshan no//*

## 2.4. 『チャッキドンポ』の記述言語

本2.4章では、『チャッキドンポ』の記述言語について考察する。当該成就法は主にウチェン字体のチベット語で記述されているが、第0節はしがき (§0.1.1) と第1節外なる成就法 (§1.1.1) の、共に冒頭に掲げられた帰敬文には、これと異なる文字が見在する。まず、これらの文字を一覧にして対照させ、その後、その文字と言語について順に考察をすすめる。

§0.1.1 と §1.1.1 で用いられていると想定される文字と言語を、その詳解に基づき、下記に表示する。

表6: §0.1.1 と §1.1.1 で用いられていると想定される文字と言語の一覧

§	言語	文字
0.1.1	[མཁ་གོ་ཀྲོ་འབྲུ་བཅོམ་སྐྱོ་སྐྱོ།]	 <sup>138</sup>
	མཁ་གོ་ཀྲོ་སྐྱོ་སྐྱོ།	ཨིན་ཏུ་ལྷ་ཡུ་ཧྲ་ཀ་ར་ཏ་ཏ་མེ།
	བོད་སྐྱོ་སྐྱོ།	[*indra-āyuhdharanaha namah]
	མཁོ་ན་པོ་ཚེ་དཔག་མེད་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ།	མཁོ་ན་པོ་ཚེ་དཔག་མེད་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ།
1.1.1	[མཁ་གོ་ཀྲོ་འབྲུ་བཅོམ་སྐྱོ་སྐྱོ།]	 <sup>139</sup>
	ཨི་མཁོ་ན་སྐྱོ་སྐྱོ།	 <sup>140</sup>
	བོད་སྐྱོ་སྐྱོ།	རིག་འཛིན་ཚེ་འབྲུ་ཐབས་མཁོ་ན་པོ་ཚེ་དཔག་མེད་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ།

上の表(表6)によって知られるように、第0節はしがきの帰敬文は、(1.) ダーキニーの符牒 (mkha' 'gro'i brda skad), (2.) インド語 (rgya gar skad), (3.) チベット語 (bod skad) という3つの言語で、また、第1節外なる成就法 (§1.1.1) の帰敬文は、(1.) ダーキニーの符牒, (2.) ウッディヤーナ語 (o rgyan skad), (3.) チベット語という3つの言語で、それぞれ念誦されるものと想定される。については、以下に、ダーキニーの符牒、ウッディヤーナ語、インド語について順に考察をすすめる。

### 2.4.1. ダーキニーの符牒 (mkha' 'gro'i brda skad)

mkha' 'gro'i brda skad という語句の用例は『チャッキドンポ』中に見在せず、従って、これは訳文中に補記記号を付して提出した筆者の想定語 (interpretive) である。筆者の想定根拠は、§0.1.1 の詳解において論述するように、『チャッキドンポ』が、ウッディヤーナの地 (o rgyan yul) のダーキニーによって、そのダーキニーの隠符 (mkha' 'gro'i brda yig) で記され、秘し匿されたという §0.2.2 の叙述に基づく。この mkha' 'gro'i brda skad という未確定な言語は、従って、ダーキニーが発する言語に左右されると言えるが、これが

<sup>138</sup> Cf. Appendix B, no. 1 (A 512,1; B 250,1; C198,1).  
<sup>139</sup> Cf. Appendix B, no. 2 (A 516,1; B 251,3; C 199,3).  
<sup>140</sup> Cf. Appendix B, no. 3 (A 516,1; B 251,3; C 199,3).

ウッディヤーナ語であるのか、或いは別種の言語であるのか、といったことがらについてまで論じるのは、いささか奇抜に過ぎよう。「ダーキニーの符牒」と訳出し、<sup>141</sup> 考察をすすめることにする。

この「ダーキニーの符牒」(*mkha' 'gro'i brda skad*) は、後に第2.10.6章 (遷化の様子) において触れるように、『すべてを明らかにする宝鏡』にその用例が出、<sup>142</sup> STEARNS 2007 はこれを ‘symbolic language of the *dākinīs*’ (p. 436) と簡明に英訳している。<sup>143</sup> このダーキニーの符牒は、パドマサンバヴァが〈予言書・明灯〉において「示寂の時、[その人は] 鳴り響く音と輝かしい光に包まれる」<sup>144</sup> と予言したとされる「鳴り響く音」(*sgra*) の一種で、タントンギャルポの遷化時には、実際にこれが稲妻 (*'od kyi glog*) や、色々な音 (*sgra sna tshogs*) や、サンスクリット語 (*saṃ skṛ ta'i skad*) と共に轟々と鳴り響き渡った (*mang po 'ur 'ur*) と叙述されている。

ダーキニーの符牒、及び、彼女たちの文字であるダーキニーの隠符については、今日参照し得る先行研究が極めて乏しい。『チャッキドンポ』にはダーキニーの隠符で記されたものと筆者が仮定した (その根拠は §0.1.1 の詳解において提示する) テクストが計15箇所見在し、校訂テクストには当該テクストをスキャンしたイメージを貼り付けること、またこれらのイメージを一覧にし、付録2に提出することは、第1.2.2章 (本論文の方法) において述べたとおりである。このように一覧にしてみると、言語学的見地から追求することもできよう。例えば、これらのイメージを CHANDRA 1982 に例示されたドウシャ文字 (*bru sha/zha/tsha*) と比較してみると、相通じるものが見られる (see 図1)。

<sup>141</sup> See 『蔵漢』 s.v. *brda skad* (p. 1483): ‘(1) *ming brda dang skad rigs/ [...]* (2) *skad dod'*, Jäschke, s.v. *brda-skad* (p. 298): ‘language by symbolical signs’.

<sup>142</sup> *Kun gsal nor bu'i me long*, K\_A 179a6; K\_B 342,2; K\_C 340,2: *zhes gsungs pa'i mod las/ 'od kyi glog [glog B, C] klog A] 'khyug cing mkha' 'gro'i brda [brda B, C] brda' A] skad mang po 'ur 'ur/ sgra sna tshogs chem chem/ saṃ [saṃ B, C] sam A] skṛ ta'i skad lhang lhang ba'i skabs der/*

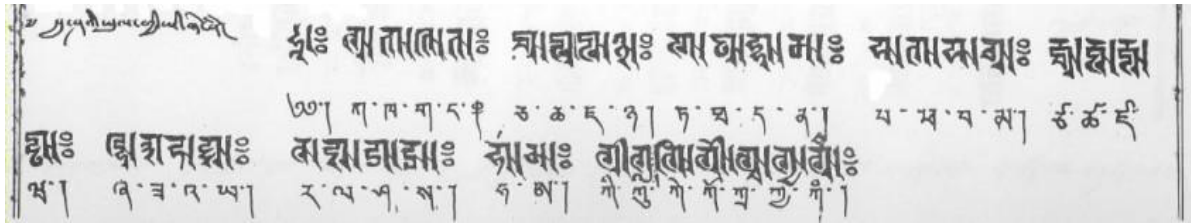
<sup>143</sup> STEARNS 2007:436: ‘As he spoke, streaks of light flashed, much symbolic language of the *dākinīs* buzzed, various sounds roared, and Sanskrit words rang out’.

<sup>144</sup> *Kun gsal nor bu'i me long*, K\_A 179a3; K\_B 341,6; K\_C 339,14:

*u rgyan chen po'i lung bstan las//  
nam zhig 'da' tshul ston pa'i tshel//  
sgra dang 'od du bcas nas su//  
dpa' bo dā ki'i tshogs dang bcas//  
bde ba can du byang chub thob//*

*gSal ba'i sgron me*, 102,4:

*nam zhig mda' tshul bstan pa'i tshel//  
sgra dang 'od du bcas nas su//  
bal po'i yul du dgongs pa bzhag//  
dpa' bo dā ki'i tshogs dang bcas//  
bde ba can du byang chub thob//  
[...] u rgyan gyis ma 'ong lung bstan pa'i le'u ste so dgu pa'o//*

図1: ドウシャ文字 (*bru sha*) の例 (CHANDRA 1982:59b)

上の図1に参照したドウシャ文字は、WEST 2011 に纏められているように、マルチェン文字 (*smar chen*), マルチュン文字 (*smar chung*), プンチェン文字 (*spungs chen*), プンチュン文字 (*spungs chung*) 等と共にボン教典籍の文字に多用されることで知られる。<sup>145</sup> ドウシャ (*bru sha*) は、周知の如く、ギルギット (*Gilgit*) との関わりが深く、<sup>146</sup> 後に第2.4.2章 (ウッディヤーナ語 (*o rgyan skad*)) では、ウゲンリンパ (*O-rgyan-gling-pa. b. 1323. BDRC#P4943*) が発掘したテルマ『カタンデガ』 (*bKa' thang sde lnga*) を典拠に、この語句に「ギルギット語」 (*bru sha*) という訳語を与えて考察をすすめる。『チャッキドンポ』に用例がみとめられるダーキニーの隠符 (§0.2.2: *mkha' 'gro'i brda yig*), 或いは、これに関連するダーキニーの符牒 (*mkha' 'gro'i brda skad*) をして、ドウシャ文字、或いは、ギルギット語に比定するには足りない所論ではあるが、ダーキニーの隠符／符牒とギルギットとの関係について、示唆を見出すことはできよう。

ゲドゥンチューペル (*Ge-'dun-chos-'phel. 1903–1951. BDRC#P219*) は、彼の『黄金の平原』 (*rGyal khams rig pa*) の第8章 (*sNgon dang da lta'i bar yul so so'i yig rigs, pp. 247–276*) において、ドウシャ (272,18: *bru sha*) の他にダーキニーの隠符 (259,14: *mkha' 'gro'i brda yig*) についても触れている。彼の説によれば、ダーキニーの隠符には数種類あり、パドマサンバヴァらによって作られた可能性もあるが、定かではない。しかし、チベット語の古いかたち (*bod kyi yig rnying gi gzugs*), 或いは、これを少し変えたものであることは間違いない。<sup>147</sup>

<sup>145</sup> See WEST 2011:1: 'The Marchen script is one of several related scripts that have been used in the Tibetan Bön tradition: [...] Marchen or Greater Mar script [...] Marchung or Lesser Mar script [...] Pungchen or Greater Pung script [...] Pungchung or Lesser Pung script [...] Drusha script [...]'.  
<sup>146</sup> See *rGyal khams rig pa*, 272,18: *bru sha'i yul bya ba yang bur sha bya ba'i yul gyi ming yin pas sngon gyi klog la dag kyang deng sang Du sha zhes klog pas yul ngos mi zin/* (as translated into English in JINPA/LOPEZ 2014:206: 'Drushé yür ('Bru sha'i yul) is the name of the country of Bursha (Gilgit), which is more correct in the old system of reading. Today, since it is read as Drusha (spelled 'bru sha), we cannot identify the place'). See also WEST 2011:6: 'The Drusha script reputedly originated from the country of Drusha (Tibetan Bru-sha [sic] ལྷུ་ཤ། or Bru-zha [sic] ལྷུ་ཞ། or Bru-tsha ལྷུ་ཚ།), which is commonly identified with Gilgit in Pakistan'.

For *bru sha*, see 『藏漢』 s.vv. *bru sha* (p. 1905): '*shin cang yu gur rigs rang skyong ljongs khongs kyi lung pa zhig gi ming rnying*'; *bru zha* (p. 1905): '*bru sha dang 'dra*', Jäschke, s.v. *bru zha* or *bru sha* (p. 381): 'a. name of a country to the west of Tibet, bordering on Persia'; DUNG-DKAR, s.v. *bru sha* (p. 1523): '*di mnga' ris lho rgyud kyi sa cha zhig min nam snyam zhing/ rba bzhed kyi nang du bru sha'i dmag gis rgya gar du dmag drangs skabs rgyal po khri srong lde btsan gyis chu bo ganggā'i 'gram du bod kyi sa mtshams mtshan byed lcags kyi ka ba zhig btsugs pa de bsheg ma thub par me la bzbur pa'i 'phro yod par bshad 'dug*'.

<sup>147</sup> *rGyal khams rig pa*, 259,14: *mkha' 'gro'i brda yig rigs mi 'dra ba mang du 'dug [...]* *bsam tshod gcig la*

ダーキニーの隠符は、THONDUP 1986 の論考に見られるように、これ（‘*dākiṇī scripts*’, p. 69）とこれでないもの（‘*non-dākiṇī scripts*’）とに二大別する場合は、これをよく承知しているものや、テルマの相承系譜にあるもののみが、これを判読し得るものと広く理解されてきた。<sup>148</sup> 『チャッキドンポ』の埋蔵の趣意 (§0.2.2) にも、来たる最後の五百年に罪人や越法者や偽りの者らによって悪用されないよう、ウッディヤーナの地のダーキニーによってこの甚深なる秘法 (*man ngag zab mo rnams*) がダーキニーの隠符で記され、埋蔵されたことが謳われている。縁に恵まれたパドマサンバヴァの御子 (§0.2.3: *las can padma'i sras*), 即ち、持明者 (*rig 'dzin*) だけが、彼の明妃 (*rig ma*)<sup>149</sup> であるダーキニーの隠符を判読、修習することを強調するものであろう。上来検討したように、ダーキニーの隠符／符牒は、独特な文字／言語だと見做し得るが、これを「翻訳」して公に提示することは——たとえ仮にそれができたとしてもなお——控えるべきであるのかもしれない。

#### 2.4.2. ウッディヤーナ語 (*o rgyan skad*)

ウゲンリンパ (O-rgyan-gling-pa. b. 1323. BDR#P4943) が発掘したテルマ『ローパンカータンイク』 (*Lo paṅ bka'i thang yig*) は、各国語の翻訳者名を列記していることで知られる。そこには、サンスクリット語 (*saṃ skṛ ta'i skad*), 中国語 (*rgya nag gi skad*), インド語 (*rgya gar gyi skad*), ギルギット語 (*bru sha'i skad*) 等の翻訳者たちと並び、チョコクロイギャルツェン (Cog-ro-klu'i-rgyal-mtshan. ca. 9c. BDR#P8183) の名が、ウッディヤーナ語 (*u rgyan gyi skad*)<sup>150</sup> の翻訳者として挙げられている。<sup>151</sup> ウッディヤーナ語が一つの独

*brda yig de dag slob dpon padma sogs kyis mdzad na lany+tsa dang wartu sogs kyang 'ong srid snyam yang/khri srong gi sku dus tsa na yang yul dbus kyi yi ge 'char can pa ni gupta'i yi ge yin cing/ gupta'i yi ge dang mkha' 'gro'i brda yig tu grags pa gnyis spyi'i dbyibs shin tu 'dra bar snang bas/ [...] re zhig de gar lus so/ gang ltar na'ang brda yig de dag bod kyi yig rnying gi zgugs dngos sam cung zad bcos pa zhig yin par gor mā chag ste/*

As translated into English in JINPA/LOPEZ 2014:197.

<sup>148</sup> See THONDUP 1986:69: ‘There are two types of symbolic script, the *dākiṇī* scripts and non-*dākiṇī* scripts. All the various *dākiṇī* scripts are illegible except to people who are highly realized or who have the transmission of the particular Terma. Non-*dākiṇī* scripts include Tibetan, Sanskrit, and other Indian scripts’.

<sup>149</sup> See 『蔵漢』 s.v. *rig ma* (p. 2685): ‘*gsang yum mam phyag rgya ma*’. See also §1.2.4: *rig 'dzin ma mo mkha' 'gro yis*.

<sup>150</sup> *u rgyan* には、*o rgyan* という語形も認められる。See 『蔵漢』 s.vv. *u rgyan* (p. 3138), *o rgyan* (p. 3143). 『チャッキドンポ』には、前者 *u rgyan* という用例は異読を含めて見在しない (*o rgyan* の短縮形である *ayon* という語形は、異読として提出した。See §3.7.1)。従って、本論文では「ウッディヤーナ」を意味するチベット語表記として、後者 *o rgyan* という語形を用いる。

<sup>151</sup> *Lo paṅ bka'i thang yig*, 422,6 (*mjug byang*): *bai ro tsa nas saṃ skṛ [𑏃𑏪] ta'i skad dang yi ge mkhyen/ ska ba dpal brtsegs kyis rgya nag gi skad dang yi ge mkhyen/ cog ro klu'i rgyal mtshan gyis u rgyan gyi skad dang yi ge mkhyen/ rma rin cen mchog gis rgya gar gyi skad dang yi ge mkhyen/ la gsum rgyal ba byang chub kyis ma ru rtse'i skad dang yi ge mkhyen/ sangs rgyas ye shes kyis bru sha'i skad dang yi ge mkhyen/ dan yon tan mchog gis byā ka ra ṇa'i skad dang yi ge mkhyen/*

For a Japanese translation, see KANEKO (金子) 1982:20.

Cf. 『蔵漢』 s.v. *cog ro klu'i rgyal mtshan* (p. 735): ‘*dus rabs brgyad par khri srong lde bitsan gyi dus su ska cog zhang gsum gyi ya gyal lo tsā ba zhig yin zhing/ khong gis dgongs pa nges 'grel gyi rgya chen 'grel ba*



立した言語として見做されていたことを窺わせる記述だ。

ウッディヤーナ (Uḍḍiyāna/Uḍiyāna/Oḍyāna/Oḍḍiyāna)<sup>152</sup> という「小王国」(‘the petty kingdom’, SANDERSON 2007:265)の言語については、玄奘(602–664)の『大唐西域記』(T 2087)巻第三における「烏仗那國」に関する記述「語言雖異大同印度。文字禮儀頗相參預」が著名である。<sup>153</sup> ウッディヤーナは、後に第2.9章(〈無量寿宗要経〉に比定されるダーラニー)において確認するように、スワート河(Swat River)流域に位置し、この地方の言語は、GRIERSONによって、‘The Dardic, or Piśācha, Branch’(p. 108f.)に分類されている。ダルド語群(Dardic languages)の位置するダルディスタン(Dardistan)には、スワート・コヒスタン(Swat Kohistans)の他、ギルギット(Gilgit)やカシミール(Kashmir)も含まれる点は、<sup>154</sup> 第2.9章で関説されよう。この地域の言語グループについては諸説あり、この方面の専門家の間に未だ一致した解決は見られない。<sup>155</sup> この付近の山岳地帯の言語としては、インドアーリヤ語系統と考えられるダルド語群の他に、イラン語派に属するパシュトー語(Pashto)、帰属不明のヌーリストーン語群(Nuristani languages)の存在も可能性として留意する必要がある。<sup>156</sup>

ウッディヤーナの言語、特には彼の人々が「禁呪」をよくしたことは、『大唐西域記』の記述<sup>157</sup>を証左に論究されてきた。例えば、UPASAK 1990は、これを‘magical

*bam po bzhi bcu dang/ nges pa'i don dbu ma/ sher phyin mdor bsdus/ chos gtan la dbab pa'i gal sogs bsgyur'*, DUNG-DKAR, s.v. *cog ro klu'i rgyal mtshan* (p. 788): ‘chos rgyal khri srong lde btsan gyi sku dus su byung ba'i lo tsā ba ska cog zhang gsum gyi ya gyal yin la/ lo tsā ba rab dgu'i nang gses gzhon gsum gyi ya gyal yang yin’.

<sup>152</sup> See BHSD, s.vv. Uḍḍiyāna (p. 120): ‘=Oḍḍiyāna’, Oḍḍiyāna (p. 159): ‘also Oḍi° (and uḍḍiyāna(ka), q.v.), n. of a locality’, MW, s.vv. uḍḍiyāna (p. 175): ‘N. of a place’, Udyāna (p. 191): ‘N. of a country in the north of India’, LAW 1976, s.v. Udyāna (p. 132), DEY, s.vv. Udyāna (p. 209), Ujjānaka (p. 211), Ujjihāna (p. 211). See also UPASAK 1990: *passim*, SANDERSON 2007:265: ‘Uḍḍiyāna, also written Oḍḍiyāna, U/Oḍiyāna, U/Oḍyāna, and U/Oḍḍayana, was the petty kingdom known to the Chinese as Wuzhangna (Jap. Ujōna) and to the Tibetans as U rgyan or O rgyan, located west-north-west of Kashmir to the north of Peshawar in what is now Pakistan’.

<sup>153</sup> 『大唐西域記』(T 2087.51.882b10): 烏仗那國。[...] 語言雖異大同印度。文字禮儀頗相參預。Cf. 法顯記『高僧法顯傳』(T 2085.51.858a18): 其烏長國是正北天竺也。盡作中天竺語。中天竺所謂中國。俗人衣服飲食亦與中國同; 慧超記『遊方記抄 往五天竺國傳』(T 2089.51.977c5): 至烏長國。[...] 衣著飲食人風。與建馱羅國相似。言音不同。

<sup>154</sup> GRIERSON, p. 109: ‘Dardistan, the present home of the Dardic languages, includes, from East to West, Gilgit and Kashmir, the Indus and Swat Kohistans, Chitral, and Kafiristan’.

<sup>155</sup> E.g. MAYRHOFER 1983, BUDDRUSS 1977, MORGENSTIERNE 1973:327–343 (Die Stellung der Kafirsprachen). ここに例示した先行研究は、GOTO (後藤) 2008:129–130 に次のように概括されている。即ち、‘最終的結論を別として、少なくとも作業仮説としては’ ‘独立系統を立てる’ MORGENSTIERNE 1973 の ‘立場を採っておくことが研究上効率的’ である、と。なお、現在のインドの言語群の分類における Kashmiri の歴史/文化 (History/culture) に関する参考文献としては、OSADA/ONISHI 2012 が挙げられる (i.a. p. 58)。

<sup>156</sup> Goto (後藤) 2008 はこの問題を ‘ヌーリストーン「光の国」、以前カフィール「邪教徒」の土地と呼ばれたアフガニスタンの山中に現在話されている言語グループ次第’ (pp. 129–130) と提議している。この言語グループは、Goto (後藤) 2008 によれば、‘インドとイランの間に別のもう一派が山中に孤立して今日まで来た’ ものと想定される。以上に徴した問題については、上に参照した先行研究を含め、後藤敏文名誉教授 (東北大学) より数々のご示唆を賜った。ここに記して感謝申し上げたい。

exorcism' (p. 49) と解釈して論じている。<sup>158</sup> 『大唐西域記』の中で「禁呪」即ち、ダーラニー (*dhāraṇī*) をよくしたと記述されている国は、HORI (堀) 1912 (1971) によれば、唯一ウッディヤーナだけであり、<sup>159</sup> これは、本研究が『チャッキドンポ』中に〈無量寿宗要経〉に比定されるダーラニーが引用された可能性を論じるにあたり、看過できない点だ。残念ながら、現時点では、ウッディヤーナと〈無量寿宗要経〉に比定されるダーラニーとの関係を推知せしめるような証拠は見当たらず、具体的な交渉関係を見極めることはできない。「禁呪」の語義も問題となろう。<sup>160</sup> 「呪」は、HADANO (羽田野) 1965 (1986–1988) によれば、9世紀チベットの王室が翻訳することを禁じた、呪詛等に関わる‘真言 (Mantra)’ (p. 313) の訳語であり、厳密にはダーラニーと区別される。<sup>161</sup>

YAMAGUCHI (山口) 2004 は、パドマサンバヴァの出生地としてのウッディヤーナを‘魔術で知られたマジ教の地でもあった’ (p. 44) と、特にその論拠を示すことなく論じているが、或いはこれは、上に徴した諸資料を踏まえた上での洞察であるのかもしれない。‘マジ教’は、その音の如く解すると、*magi* を意図するものと考えられ、<sup>162</sup> これが古代イランの祭司階級マジ (Magi) を指す場合、HUMBACH 1978 の考察に見られるように、インドのマガ (Maga) という宗教集団との間に「一致する」(‘identifying’, p. 230) 歴史的関連を有する。<sup>163</sup> ウッディヤーナ語に関する問題は、このように、言語学的観点の他に史学的観点からも究明されるべきであり、従って、これら多方面の専門家の見解を待つ必要がある。

<sup>157</sup> 『大唐西域記』(T 2087.51.882b19): 戒行清潔特閑禁呪。

<sup>158</sup> See UPASAK 1990:49: ‘They lead pure life according to monastic rules but also practise magical exorcism’.

<sup>159</sup> See HORI (堀) 1912 (1971):207: ‘烏仗那の佛者が特に禁呪即ち陀羅尼 (Dhāraṇi) を誦せりといふは注意すべき記事にして、玄奘が遊歴せし佛教國中、盛んに陀羅尼を誦持せしは唯だ烏仗那あるのみ’.

<sup>160</sup> See 『佛教漢梵大辞典』s.v. 禁呪 (p. 896): ‘mantra, mantra-vidyā’.

<sup>161</sup> See HADANO (羽田野) 1965 (1986–1988): vol. 1 (チベット篇1), pp. 313–315: ‘真言は呪とも訳し、明 (Vidyā) とも、心 (Hṛdaya) ともダラニとも異なります。その神験的威力は、もともと呪詛、降伏 (Ābhicārika, Raudra), 呪殺などの護摩とかかわっています。[...] また“ダラニの真言”も真言である以上、上述の例外ではありえません、しかしダラニの場合には、王室仏教にとって合目的的 [sic] であれば、吟味、撰択の上、王命によって翻訳し採択することもありえたわけです’.

<sup>162</sup> *magi* の語源が新アヴェスタ語の *moγu-* (<\**magu-*) に遡求し得るラテン語 *magi-* であることについては、後藤敏文名誉教授 (東北大学) より、また、マジ/マジ教 (Magi) については、斎藤明教授 (ICPBS) より、数々のご教示を賜った。ここに記して感謝申し上げたい。

<sup>163</sup> See HUMBACH 1978:230: ‘Although the information found in the Hindu sources concerning the distant continents is generally complete phantasy, F. Wilford (1808), p. 75ff., was undoubtedly correct in seeking a historical reality behind the name of the Magas and in identifying it with that of the Iranian priest caste of the Magi (OP. *magu-*, Av. *moγu-*, MP. *moγ*, Sogd. *mwy*)’. See also SILK 2008:339–340: ‘The term Maga itself, however, clearly refers in the first place to Persian Magi, the historical connection between the Indian Maga and the Persian Magi being that the ancestors of the Indian Maga were in fact Persian Zoroastrians. No doubt at least in part since the Persian Magi were understood to have been solar priests in their own right, Indian texts classify the Magas as Brahmins’.

上記に挙げた先行研究の他、マガ (Maga) という‘古代インドにおけるイラン系宗教集団’ (NAGAI (永井) 2019:39) に関する参考文献は、NAGAI (永井) 2019 に整理、提示されている。See also VAN DER KUIJP 2006.

この多分に神秘的な (magical!) 響きをもつウッディヤーナという土地は、ニンマ派が伝える典籍の起源に言及する場合、特にはサルマ派と対峙して、必ずといってよいほど関説されてきた。例えば、ラトナリンパ (Ratna-gling-pa. 1403–1479. BDRC#P470) は、KANEKO (金子) 1982 がその概要を提出しているように (pp. 13–16), 彼の『ニンマ派の弁明』 (*Chos 'byung rtsod bzlog*) の中で、ウッディヤーナに立ち入ること (*bsgrod pa*) が許されるのは、旧訳派の翻訳者 (*sngon gyi lo tsā ba rnams*), 即ち、ニンマ派の翻訳者だけであるという説を展開している。なぜなら、ラトナリンパによれば、ニンマ派の翻訳者たちは化身の翻訳者 (*sprul pa'i lo tsā ba*) であるが、サルマ派 (gSar-ma-ba. 新訳派)<sup>164</sup> の翻訳者たちは、凡夫の翻訳者 (*so so skye bo'i lo tsā ba*) であるから、ウッディヤーナに辿り着くこと (*rtol*) が叶わなかった。サルマ派の翻訳者たちは、インド (*rgya gar ba*) やネパール (*Bal-po'i-yul*) に向かい、従って、ダーキニーの秘宝 (*gsang mdzod*) を開くことができなかった、とされる。<sup>165</sup>

この種のニンマ派の「弁明」(apology) は、ドジョム・ジグデルイエシエドルジ (1904–1987. BDRC#P736) が『ニンマ派仏教史』 (*bDud 'joms chos 'byung*) の中で論じているように、過去様々な文脈でなされてきた。<sup>166</sup> それらを精査すれば、ウッディヤーナとダーキニーの秘宝との繋がりをなお豊かに見出し得よう。『チャッキドンポ』はウッディヤーナ語から翻訳されて伝わる典籍ではないが、「ウッディヤーナの地のダーキニーによって、そのダーキニーの隠符で記され、秘し匿された」という §0.2.2 の叙述に基づけば、繰り返しになるが、当該長寿成就法に彼女たちの土地であるウッディヤーナの言語が少なからず関わっていることが知られる。コータン語はかつて「未知の言語」と呼ばれた。<sup>167</sup> ウッディヤーナ語が「未知の言語」であり続けるか、学問の進展を見守りたい。

### 2.4.3. インド語 (*rgya gar skad*)

*rgya gar skad du* (§0.1.1) というフレーズは、『チャッキドンポ』において、広く「インド

<sup>164</sup> Cf. GERMANO 1994:203n1: 'my rendering of *gSar ma* as "modernist" (the Tibetan term literally means "the new" or "the fresh")'.

ニンマ派の翻訳者とサルマ派の翻訳者に関する最近の比較研究として、Almogi 2019 があげられる。

<sup>165</sup> *Chos 'byung rtsod bzlog*, 91,2: *sngon gyi lo tsā ba rnams sprul pa'i lo tsā ba yin pas/ rgya gar gyi ke'u tshang bcu gsum du/ dga' rab rdo rje la sogs pa ma mkhas pa nyi shu rtsa lnga dang mjal nus pa dang/ nub phyogs o rgyan gyi yul thams cad du chu bzhin 'jug par nus pa dang/ rkang mgyogs kyi rdzu 'phrul thob pas/ rgya gar dbus 'gyur tshal nas nyin gcig la bod du bsgrod par nus pa la sogs pa/ bai ro'i rnam thar na gsal zhing/ dus phyis kyis rnams ni so so skye bo'i lo tsā ba yin pas/ mkha' 'gro'i gsang mdzod ni 'byed pa'i skabs med/ nub phyogs o rgyan du ni ma rtol/ rgya gar ba shar phyogs dang bal po'i yul skyog sngar byas pa'i lo rgyus rnams 'og nas ston no//*

<sup>166</sup> 『ニンマ派仏教史』には、錚々たるニンマ派の学僧たち——ロンソム・チューキサンポ (Rong-zom Chos-kyi-bzang-po. 11c. BDRC#P3816), ウゲンパ・リンチェンペル (U-rgyan-pa Rin-chen-dpal. 1229/30–1309. BDRC#P1448), ターラナータ (Tāranātha. 1575–1634. BDRC#P1428)——から提出されたこの種の「弁明」が、掲載されている。

*bDud 'joms chos 'byung*, ch. 7 (*sNga 'gyur rdo rje theg pa'i bstan pa la log par lta ba'i phyogs 'ga' zhig byung ba'i skyon sel*), pp. 567–578.

<sup>167</sup> See HOERNLE 1910, HOERNLE 1911.

語で」を意図するものと筆者は想定している。より具体的にいえば、\**indra-āyuh-dharanaha namaḥ* (§0.1.1) を、\**indra-āyurdharaṇasya namaḥ* という、中期インドアーリヤ語の影響下に訛った形 (à la Sanskrit) だと想定するものである。*rgya gar skad du* というフレーズは、サンスクリット語からチベット語に訳されて伝わる典籍のタイトルに付されていることで知られるが、このフレーズを詳しく論じた ROESLER 2018 によれば、チベット仏典の翻訳者たちは、*rgya gar skad* が何語であるのかということよりも、このフレーズがもつ「インドらしさ」(‘Indian-ness’, p. 364) を重んじたようである。<sup>168</sup> この論考に従えば、『チャッキドンポ』がインド語で「主である持寿命者に帰命する」と帰命文を念誦することは、ある種の「インドらしさ」を讃えるものと理解してよいであろう。

地の文である *bod skad* は、では「チベットらしさ」を讃えるものであろうか。言語学的見地からは、例えば、SHAFFER 1974 による ‘Bodish’ (p. 1) の分類が知られる。ただし、この分類を本論文において用いるのは些か煩瑣に過ぎよう。古典チベット語は、8世紀から現在に至るまで「同じ一つの言語で書かれている」(‘written in a language recognizably the same’, BEYER 1992:37) という BEYER 1992 の見解を当面の指針としたい。<sup>169</sup>

<sup>168</sup> ROESLER 2018:364 ‘What matters seems to be first and foremost Indian-ness, not the precise language. Therefore, why not follow the convention of the translators and redactors of the Tibetan Buddhist canon themselves when they say: *rgya gar skad du* “in Indian language”’.

<sup>169</sup> BEYER 1992:36–37 (Defining Classical Tibetan): ‘I will use the term CLASSICAL TIBETAN to refer to the language of written Tibetan texts, with the exception of the canonical translations, primarily from Sanskrit, and the language of modern newspapers and similar printed material. The remainder—the vast corpus of written Tibetan material ranging in date from the eighth century to the present day—is written in a language recognizably the same, and all more or less accessible to the literate Tibetan’.

## 2.5. 起源

本2.5章では、長寿成就法『チャッキドンポ』の起源、即ち、パドマサンバヴァが如何にして当該成就法を会得したかについて考察する。『チャッキドンポ』から関連箇所を抽出し、その後、サキヤティチェン31世ガワンクンガーロドゥ (1729–1783) が著した『不死の成就の種子\_B』を参照しつつ、考察をすすめる。

『チャッキドンポ』中には、外なる成就法 (§1.3.3) と秘密なる成就法 (§3.3.1) に、長寿成就法の起源に関する言及がみられる。それによれば、パドマサンバヴァは、この不可思議な寿命の成就法 (§3.3.1: *tshe yi sgrub pa bsam yas*) を、その本尊 (§1.3.3: *yi dam lha*) である無量寿仏に嘆願して、授かった (§§1.3.3, 3.3.1: *zhus*) とされる。

### 2.5.1. 『チャッキドンポ』の起源に関する『不死の成就の種子\_B』の記述

長寿成就法『チャッキドンポ』の起源に関しては、この他、STEARNS 2007 が参照しているように、<sup>170</sup> サキヤティチェン31世ガワンクンガーロドゥ (Ngag-dbang-kun-dga'-blo-gros. 1729–1783. BDRC#P805) が著した『不死の成就の種子\_B』 (*'Chi med grub pa'i sa bon\_B*) 中に、上記2箇所を敷衍したかたちの「解説」 ('explanatory text', p. 26) が、下記

<sup>170</sup> STEARNS 2007:26–27: 'The Sakya master Ngawang Kunga Tashi, in his explanatory text for bestowing initiation into these teachings, says Tangtong perfected the attainment of immortality through practice of the *Iron Tree*. [...] The *Iron Tree* is believed to be the specific technique that Padmasambhava himself used to achieve immortality. It is said that Amitāyus actually appeared to Padmasambhava when he was in Maratika Cave meditating with his consort, the Indian princess Mandarava. Padmasambhava requested many teachings from Amitāyus, including the *Iron Tree*, which both he and Mandarava used to achieve the immortal, indestructible, vajra body'.

上に引用したように STEARNS 2007 が『不死の成就の種子\_B』の著者を 'Ngawang Kunga Tashi' と記述しているのは、おそらく『不死の成就の種子\_B』にコロフォンが2つ見在することに起因する。以下に両者を対比して検討してみよう。STEARNS 2007 と本論文は、共にツルプ (パロ) 版『リンチェンテルズ』 (RT\_A) に収録された『不死の成就の種子\_B』を使用テキストとしている。

コロフォン1, '*Chi med grub pa'i sa bon\_B*, 288,1: *ces byang gter lcags sdong ma'i dbang chog 'di yang drin can rdo rje 'chang blo gsal bstan 'dzin rgya mtsho grags pa rgyal mtshan dpal bzang po'i zhal snga nas kyi zhabs drung du lan grangs du ma'i bar du thob pa bzhin la/ sa skya pa ngag dbang kun dga' blo gros sangs rgyas bstan pa'i rgyal mtshan dpal bzang pos dbang chog bklag chog ma 'di bzhin gter gzhung dang/ mkhan chen zha lu pa rin chen bsod nams mchog grub dpal bzang pos gsung mchan ka brda dkrugs bsdebs su bris pa yin pas rang bzo'i skyon med do//*

コロフォン2, '*Chi med grub pa'i sa bon\_B*, 294,4: *zhes pa'i rgyun khyer 'di ni nged rang gi zla bo 'gags pa bsod nams dar gyis bskul ngor sa skya pa kun dga' bkra shis kyis mon mtshams sho smug sgar chen du rgyun gyi kha ton du bsgrigs pa dge legs 'phel/ slar yang bsnyen thabs sogs bsnan nas shin tu gsal bar bris pa sarba satwā badzra ā yu swiddhi rastu/ manga lam bha ba tu//*

以上のように2つのコロフォンを対比させてみると、ガワンクンガーロドゥ (1729–1783. BDRC#P805) はシャル派のケンチェン (mKhan-chen-zha-lu-pa) リンチェンソナムチョクドゥブペルサンポ (Rin-chen-bsod-nams-mchog-grub-dpal-bzang-po=シャルケンチェン22世リンチェンソナムチョクドゥブ (Rin-chen-bsod-nams-mchog-grub. 1602–1681. BDRC#P3510)?) の教え (*kha brda*) に忠実に『不死の成就の種子\_B』を著した人物であり、クンガタシ (Kun-dga'-bkra-shis) は、彼にこの上梓を所望した (*bskul ngor*) おそらくは同じくサキヤ派の人物であることが想定される。

のようにみとめられる。

'Chi med grub pa'i sa bon\_B, 278,3<sup>171</sup>

パドマサンバヴァと仰るウッディヤーナの大師が、御身の生死老衰に関して、死ぬことのない不死なる長寿の成就に到達したのは、半月の形をした [東ネパールにある] マーラティカという名の洞窟においてであった。その (洞窟の) 周囲は深い梅檀の森で、[春夏秋という] 三つの季節に花の大雨が降るような [ところであった]。

聖なる三主 (文殊／金剛手／観音)<sup>172</sup> による加持が最勝であるまさしくその場所 (マーラティカ洞窟) で、[パドマサンバヴァは] サホール (Za-hor) の王家に生まれたマンダーラバ王女 (lHa-lcam-mandā-ra-ba) その人をパートナーにカルマムドラー (Karmamudrā) を [勤修] なさっておられた。

[お二人が] 不死なる長寿成就法に専心して趣入なされた時、宏大無辺な寂靜 [相と] 忿怒 [相とを併せ持つ] 主、無量寿仏の本来のお顔と何ら障礙無く直々に対面なされ、父母 (パドマサンバヴァとマンダーラバ王女) 共に揃って不死、[即ち] 破壊を離れた堅固な金剛身となられた。[お二人は] ヨーガによって長寿に関する持明者 [の位] に到達なされたのである。

[以上の起源については、] かの大徳 (パドマサンバヴァ) のお口の化身である隠遁者サンポダクパ (bZang-po-grags-pa) が [パドマサンバヴァが埋蔵された] テルマから発掘なされた『七章の祈願』 (gSol 'debs le'u bdun ma) に、

「マーラティカ洞窟の岩窟において

[パドマサンバヴァが] 不死なる長寿に関する持明者 [の位] を成就した時、

主、無量寿 [仏] による加持が [あり]

生も死も無い金剛身となった」

と、いわれている。

<sup>171</sup> 'Chi med grub pa'i sa bon\_B, 278,3: o rgyan gyi slob dpon chen po padma 'byung gnas zhes bya ba sku la skye 'chi bgres rgud 'das grongs mi mnga' bar 'chi med tshe yi dngos grub brnyes pa'i tshul ni/ brag phug mā ra ti ka zhes pa zla gam gyi dbyibs su yod pa/ de'i logs thams cad tsandan gyi nags tshal 'thug por skyes pa/ dus gsum du me tog gi char chen po 'bebs bzhin pa/ 'phags pa rigs gsum mgon pos byin gyis brlabs pa'i gnas gyi mchog de nyid du/ za hor rgyal rigs las byung ba'i lha lcam mandā ra ba nyid sgrub rten las kyi phyag rgya mdzad de/ 'chi med tshe'i sgrub pa la rtse gcig tu gzhol bar mdzad pa'i tshe/ mgon po tshe dpag tu med pa zhi khro rab 'byams kyi rang zhal sgrib med mngon sum du gzigs te yab yum gnyis ka 'chi med gzhom gzhig dang bral ba'i sra brtan rdo rje'i skur gyur te yo ga tshe'i rig 'dzin brnyes par mdzad pa yang / ma hā gu ru nyid kyi gsung gi sprul pa'i sku ri khrod pa bzang po grags pas gter nas spyān 'dren par mdzad pa'i rnam thar gsol 'debs las/

brag phug mā ra ti ka'i ke'u tshang du:

'chi med tshe yi rig 'dzin sgrub pa'i tshe:

mgon po tshe dpag med kyis byin gyis brlabs:

skye 'chi med pa rdo rje'i lus su gyur:

zhes gsungs pa dang/

<sup>172</sup> See 『藏漢』 s.v. rigs gsum mgon po (p. 2693): 'jam dbyangs dang/ phyag na rdo rje/ spyān ras gzigs te sngags lugs bya rgyud kyi mgon po gsum'.

ガワンクンガーロドゥはここで『チャッキドンポ』に直接言及していないが、当該長寿成就法を主に解説する『不死の成就の種子\_B』の性格を考慮すれば、パドマサンバヴァがマーラティカ洞窟において無量寿仏 (Tshe-dpag-tu-med-pa) と直々に対面し、会得した不死なる長寿成就法 (*'chi med tshe'i sgrub pa*) は長寿成就法『チャッキドンポ』だと特定できよう。

長寿成就法『チャッキドンポ』の起源に関連し、ガワンクンガーロドゥが隠遁者サンポダクパ (bZang-po-grags-pa. BDRC#P6943)<sup>173</sup> のテルマである『七章の祈願』 (gSol 'debs le'u bdun ma) から引用している箇所は、『リンチェンテルズ』所伝の『七章の祈願』にも確かに見在する。<sup>174</sup> 隠遁者サンポダクパは、TURPEINEN 2015 が考察しているように、リクズイン・グウデムチェンがかのテルマをチャン地方のトーヨルナクポの地にある毒蛇の塊の如き岩山の中腹から発掘するにあたり、これを扶翼したテルトゥンとして知られる。<sup>175</sup> ガワンクンガーロドゥがサンポダクパをしてパドマサンバヴァの「お口の化身」 (gsung gi sprul pa'i sku) と呼称している当該箇所は、一つの用例として報告されてよいであろう。

『チャッキドンポ』 (≈lCags sdong ma) のツアル流 (Tshar-lugs) 灌頂儀軌である『不死の成就の種子\_A』 (*'Chi med grub pa'i sa bon\_A*) のコロフォンによれば、ガワンクンガー

<sup>173</sup> サンポダクパの生没年等の詳細は不明である。See KHETSUN SANGPO, s.v. {sprul sku} bzang po grags pa (pt. 1, p. 522): 'gter ston rtsod med yongs grags yin la/ sbas pa'i rnal 'byor chen po de nyid kyi 'khrungs yul yab yum sogs rnam thar gsal ba mi snang ngo// A.D. brgya phrag/ 14 pa'i nang ngo'.

<sup>174</sup> gSol 'debs le'u bdun ma, 166,2:  
brag phug mā ra tī ka'i ke'u tshang du:  
'chi med tshe yi rig 'dzin bsgrubs pa'i tshe:  
mgon po tshe dpag med pas byin gyis brlabs:  
skye 'chi med pa rdo rje'i sku ru gyur:

184,4 (colophon): chu pho stag gi lo ru lag rgyang gi lha khang nas: sprul sku bzang po grags pas gter nas bton te: rig 'dzin rgod kyi ldem 'phru can la gtad pa: rig 'dzin chen pos shog ser las bsgyur pa'o: gter rgya: sbas rgya: zab rgya: ithi:

As translated into English in ZANGPO 2002:240:

'In Maratika cave

You accomplished the state of an immortal awareness holder.

The protector Boundless Life blessed you,

And your body became adamant, transcending birth and death'.

『七章の祈願』は、広くヒマラヤ文化圏において読み継がれてきた経緯により、複雑なりセンション間の相違によって知られる。See ZANGPO 2002:213: 'Since *Supplications to Guru Rinpoché in Seven Chapters* has proved extremely useful to people of every region, the proliferation of differing editions of the text has led to errors and many different versions of these supplications'. 本論文は、『七章の祈願』の英訳研究である ZANGPO 2002 と同じパロ版『リンチェンテルズ』所収版を使用した。

<sup>175</sup> TURPEINEN 2015:19: 'Ritröpa Zangpo Drakpa, who was a Mahāmudra [sic] practitioner from the Kagyu school, and who extracted treasures from Mt. Trazang and the temple of Drompa Gyang, guided by an emanation of Padmasambhava. Ritröpa Zangpo's treasures contained a key to the treasure that Gödem was destined to discover in the Mountain That Resembles a Heap of Poisonous Snakes (*dug sprul spungs dra*), as well as prophetic guidelines on how to identify the destined revealer and scrolls of instructions for Gödem'.

For bZang-po-grags-pa, see KHETSUN SANGPO, s.v. {sprul sku} bzang po grags pa (pt. 1, pp. 519–522).

ロドゥは、ロセルテンズインギヤムツォダクパギヤルツェンペルサンポ (Blo-gsal-bstan-'dzin-rgya-mtsho-grags-pa-rgyal-mtshan-dpal-bzang-po) より『チャッキドンポ』の灌頂を授かっている。<sup>176</sup>『チャクドンマ』に関するガワンクンガーロドゥの他の著作には、『不死の成就の種子\_B』の他、日常経典として『チャッキドンポ』を用いるのに簡便な『チャクドンマ常用経軌』(ICags sdong ma'i rgyun khyer dge) も知られる。『チャクドンマ常用経軌』は、そのコロフォンによれば、チャンチェングン (lCang-can-gung) と某「ノルブ」(nor bu'i mtshan) の発願によって、ガワンクンガーロドゥがラモゲカナガ (La-mo-gad-ka-na-ga) において執筆したものである。<sup>177</sup>

### 2.5.2. マーラティカ洞窟 (brag phug mā ra ti ka)

マーラティカ洞窟 (brag phug mā ra ti ka) は、ニャンレル・ニマウーセル (1124–1192. BDRC#P364) が発掘した『サンリンマ』(Zangs gling ma) 中にも、パドマサンバヴァがここでサホール王家の血筋を引くマンダーラバ王女と共に無量寿仏 (Tshe-dpag-med) に相見え、寿命の成就に関する持明者の位 (rig 'dzin tshe'i dngos grub) に到達した旨が叙述されている。<sup>178</sup>パドマサンバヴァは馬頭尊 (rTa-mgrin; Hayagrīva) に、マンダーラバ王女は金剛亥母 (rDo-rje-phag-mo; Vajravārāhī)<sup>179</sup> に、それぞれ変化したかたちで寿命の成就に関する持明者の位に到達した旨が記されている点が、特に注意されよう。<sup>180</sup>この他、ロンサル

<sup>176</sup> 'Chi med grub pa'i sa bon\_A, 16,4: ces byang gter lcags sdong ma'i dbang 'di yang drin can rdo rje 'chang blo gsal bstan 'dzin rgya mtsho grags pa rgyal mtshan dpal bzang po'i zhal snga nas kyi zhabs drung du lan grangs du ma'i bar du thob pa bzhin la sa skya pa ngag dbang kun dga' blo gros sangs rgyas bstan pa'i rgyal mtshan dpal bzang pos/ dbang chog bklag chog ma 'di bzhin gter gzhung dang mkhan chen bsod nams mchog grub dpal bzang pos gsung tshan ka brda dkrugs su bris pa yin pas/ rang bzo'i skyon med do// 'di ltar bris pa'i dge ba yis// bstan pa'i mnga' bdag 'gro ba'i mgon// mangga ratna zhabs brtan nas//byang chub bar du rjes 'dzin shog/ sarba mangga lam//

<sup>177</sup> ICags sdong ma'i rgyun khyer dge, 326,3: ces 'di sa skya kun blo la// lchang can gung dang nor bu'i mtshan// 'dzin de 'di ltar gyis gsung bzhin// la mo gad ka na gar bris//

<sup>178</sup> Zangs gling ma, 21,1: za hor gyi yul du byon nas: za hor gyi rgyal po gtsug lag 'dzin bya ba'i bu mo me tog mandā ra ba zhes bya ba: lo bcu drug lon pa'i gngang chen ma: mtshan dang ldan pa zhig yod pa de dbang du bsod te: sgrub rten gyi phyag rgya mor khrid nas: 'phags pa spyen ras gzigs kyi pho brang ri bo ta la'i lho phyogs: brag phug mā ra ti ka zhes bya ba: kha lhor lta ba: dus gsum du me tog gi char 'bebs pa: 'ja' tshon gyi gur 'thibs pa: spos kyi ngad ldang ba: tsan dan gyi tshal yod pa: rigs gsum mgon pos byin gyis brlabs pa'i gnas der byon nas: mgon po tshe dpag med kyi dkyil 'khor zhal phyas te tshe yi rig 'dzin bsgrubs pas: zla ba gsum nas sangs rgyas snang ba mtha' yas tshe dpag med kyiis zhal gzigs: 'chi med tshe yi bum pa bdud rtsis bkang ba yab yum gyi spyi bor bzhag: zhal du blugs pas sku skye shi med pa rdo rje'i lus su gyur to: yab dpa' bo rta mgrin du byin gyis brlabs: yum rdo rje phag mor byin gyis brlabs: rig 'dzin tshe'i dngos grub grub par gyur to:

<sup>179</sup> See WADDELL 1958:275.

<sup>180</sup> See EVANS-WENTZ 1954:150: 'Padma took her to the cave in Avalokiteshvara's heaven, and for three months and seven days made prayer and offerings to the Buddha of Long Life. Then Amitāyus appeared, placed the urn of boundless life on the heads of Padma and Mandāravā, gave them to drink of the nectar of immortality, initiated them, and conferred upon them immunity from death and birth until the end of the kalpa. Padma was transformed into Hayagrīva and Mandāravā into Vajra-Vārāhī. both possessed the siddhi of



ニンポ (1625–1692; P1686) の『長寿に関する持明者の相承の勧請』(*Srog sgrub kyi rig 'dzin brgyud pa'i gsol 'debs*)にも、パドマサンバヴァがマラティカ洞窟で不死なる長寿に関する持明者の位を成就したことが伝わる。<sup>181</sup>

長寿成就法『チャッキドンポ』の起源を「死の主」(*'Chi-ba-mthar-byed*)<sup>182</sup>とも呼び慣らわされるマラティカ洞窟に求めるのは、大膽なことではない。ヒンドゥーの聖地としても知られるこの洞窟でパドマサンバヴァが不死なる命滴 (*'chi med srog thig*) を得たとする伝説は長く語り継がれ、<sup>183</sup> この洞窟と長寿成就法とを関連付けて論じる研究も少なくない。<sup>184</sup> 『不死の成就の種子\_B』によれば、マラティカ洞窟の周囲は、深い梅檀の森 (*tsandan gyi nags tshal 'thug por skyes pa*) で、三つの季節に花の大雨が降るようなところ (*dus gsum du me tog gi char chen po 'bebs bzhin pa*) だと形容されている。これは、長寿成就法『チャッキドンポ』が成立した自然風土を髣髴せしめる記述で、当該長寿成就法が春夏秋という三つの過ごしやすい季節が巡る土地に生まれたことを理想的に表現したものと想定される。マラティカ洞窟が現在の東ネパールに比定されることをよく支持するものであろう。

---

transformation into a rainbow and of invisibility. After this, Padma and Mandāravā descended to the human world and dwelt in the Cave of the 'High Slate Mountains' in the country of Kotāla, between Sahor and the rest of India, where they remained for twelve years practising *yoga*, the King of Kotāla giving them maintenance'.

<sup>181</sup> *Srog sgrub kyi rig 'dzin brgyud pa'i gsol 'debs*, 147,5: *hrī: mgon po tshe dpag med pa'i dgongs pa yis: lha mo tsaṅḍa lī yi thugs brgyud nas: 'chi med padma 'byung gnas byin brlabs pas: 'das dang ma byon da lta dus gsum gyi: tshe yi rig 'dzin rnams la gsol ba 'debs: bdag la dbang skur byin gyis brlab tu gsol: zhes gsol ba btab pas sku gsung thugs kyi 'od zer gyis dbang bskur byin rlabs thob par bsgom: slar yang gsol ba 'debs pa ni: hrī: brag phug mā ra ti ka'i ke'u tshang du: 'chi med tshe yi rig 'dzin sgrub pa'i tshe: mgon po tshe dpag med pas byin brlabs pas: skye 'chi med pa rdo rje'i lus su grub: 'chi med padma 'byung gnas la gsol ba 'debs:*

<sup>182</sup> GERKE 2012:199: '[...] eastern Nepal, to the sacred cave of Maratika (*'chi ba mthar byed*, lit. 'to destroy death,' in Nepali *halesi*). The events of the story surrounding this pilgrimage site go back to the eighth century CE, when the Indian tantric Padmasambhava, founding figure for the Nyingma school of Tibetan Buddhism, and his female consort Mandarava are said to have gone to this cave to meditate. They received a blessing directly from Amitāyus, the Buddha of Boundless Life, and achieved the *siddhi* (spiritual attainment) of longevity and immortality'.

<sup>183</sup> BUFFETRILLE 1994:[3]: 'The Halase-Maratika caves open onto one of the few hills that are still covered with forest. Here, according to Tibetam tradition, Padmasambhava, who introduced Tantric Buddhism to Tibet, gained the *siddhi* of long life, at the moment, oral tradition adds, of the Tibeta New Year. The most important pilgrimage, mainly for adherents of the Nyingmapa [...]'.

<sup>184</sup> E.g. SAMUEL 2014:92: 'In the case of the *'Chi med srog thig*, the central deities are, as already implied, forms of Amitāyus, more specifically a male-female couple (Padma Thod 'phreng rtsal and consort). These are held to represent the specific forms of Amitāyus and of his consort Caṅḍalī that were realized by Padmasambhava and his consort, the Indian princess Mandāravā, when they themselves achieved the long-life *siddhi*, an episode that was held to have happened at a location known as Māratika and today mostly identified with the Hindu-Buddhist cave shrine of Halase in Nepal'.

## 2.6. 埋蔵

本2.6章では、『チャッキドンポ』が埋蔵された経緯について考察する。『チャッキドンポ』がパドマサンバヴァによって埋蔵されたテルマ文献であることは、後にこれを発掘するリクズイン・グウデムチェンの為にこれが「記される」(*bkod*)、「置かれる」(*bzhag*)という動詞の他、特にこれを「秘匿する」(*sbas*)という表現が、この意図に叶い特徴的に看取される。『チャッキドンポ』埋蔵の経緯については、当該成就法中にこの「秘匿する」(*sbas*)という動詞を用いてこれに言及する箇所、即ち、本論文が整理したシノプシス(付録1)においては「埋蔵の趣意」と名付けた箇所が考察の対象となる。

「埋蔵の趣意」は、シノプシス中に3箇所、即ち——第0節はしがき (§0.2), 第2節内なる成就法 (§2.1), 第3節秘密なる成就法 (§3.7)——に看取されるが、これらを通覧して知られるように、相互に内容の齟齬がなく、その結果、重複する文言も少なくない (e.g. §0.2.3 と §3.7.1)。従って、3箇所の中から要点となる部分 (§§0.2.1, 0.2.3, 2.1.1)<sup>185</sup>のみを抽出し、考察をすすめることにする。

### *lCags kyi sdong po*

[§0.2.1] 本長寿成就法『チャッキドンポ』は、  
まさしく私パドマサンバヴァによって  
後世の有縁者のために置かれる。

来たる最後の五百年に

人々は [自らの過失に] 無頓着な [一方, 他人を] 軽んじて誹謗するようになり,  
邪見, 競争心, [他人の] 粗探しに巧みになる。

[§0.2.3] [私 (パドマサンバヴァ) は, 私の甚深なる秘法を] チャン地方のトーヨルナク  
ポの地 [にある],

毒蛇の塊の如き岩山の中腹に

えび茶色の銅製の箱の中に [収めて] 秘匿する。

五濁悪世の時,

タサン山の東側 [タサン山を背にして] 前面に

縁に恵まれながらも [それを] 隠匿しているヨーガ行者,

持明者 (*Rig-'dzin; vidyādhara*) グウキデムトゥチェンが誕生する。

この宝蔵 (長寿成就法『チャッキドンポ』) は, 正にこの [人] (持明者グウキデムトゥ  
チェン) によって修されるだろう。

エマホー! 縁に恵まれたパドマ [サンバヴァ] の御子よ!

<sup>185</sup> ここにあげる §§0.2.1, 0.2.3, 2.1.1 は, 校訂テキストに提出したように, 全て7音節より成る頌文であるが, ここでは敢えてそのことを改行によって表現することは控えた。§2.1.1の冒頭には, ダーキニーの符牒, 或いはウディヤーナ語を記した文字が見在するが, これもここでは割愛した。いずれも煩瑣に過ぎると判断したからである。

[§2.1.1] [先に] 教示した来たる最後の [五百年] は  
 [1.] 寿命は短く,  
 [2.] 病は多く,  
 [3.] 富は貧しく,  
 [4.] 勝義も成り立たないので,  
 [5.] 長期間にわたって苦しみの連鎖 [が続く] 時である。  
 [そのような時に] 慈悲の残余が在るように,  
 まさしく私パドマサンバヴァによって  
 本長寿成就法『チャッキドンポ』は  
 有縁者たる [我が] 子のために置かれる。

上に抽出した部分に明らかなように、『チャッキドンポ』埋蔵の経緯は、「来たる最後の五百年」(*ma 'ongs lnga brgya tha ma*) と、五濁悪世の時 (*nam zhig snyigs ma lnga bdo'i dus*) という時間的概念が鍵となっている。

### 2.6.1. 最後の五百年

「最後の五百年」(*lnga brgya tha ma*)<sup>186</sup> という用語は、『チャッキドンポ』中に3つの用例 (§§0.2.1, 1.7.1, 1.7.2) が看取され、この期間に「人々は [自らの過失に] 無頓着な [一方, 他人を] 軽んじて誹謗するようになり, 邪見, 競争心, [他人の] 粗探しに巧みになる」 (§0.2.1: *tho co ras gcod 'phyar khyer mkhan: log lta 'gran sems skyon 'dzin mkhas*), 或いはまた、「寿命は短く, 病は多く, 富は少ないが, 災難は多く, 勝義も成り立たず, 望み [も] 絶たれる」 (§1.7.1: *tshe tshad thung: nad mang longs spyod chung zhing bar chad mang: dam pa'i don yang mi 'grub yid re chad*) と定義されている。こうした時世観は、仏滅後の2500年間を仏法の盛衰によって5つに分けた中の、最後の500年間を指すものであろう。曇無讖訳『大方等大集経』(T 397)に見られるような「鬪諍堅固」という所説に,<sup>187</sup> 思惟形式において連なるものと考えられる。

この「最後の五百年」という時間的観念に関する先行研究は、極めて潤沢である。<sup>188</sup> その事由は実に様々な角度から求められようが、仏典の成立年代を徴證する材料として、この観念が検討されたきたことも、その事由の一つに挙げられよう。<sup>189</sup> 『チャッキドンポ』においては、「来たる最後の五百年」 (§0.2.1: *ma 'ongs lnga brgya tha ma*) という

<sup>186</sup> See 『藏漢』 s.v. *lnga brgya tha ma* (p. 702): ‘*sangs rgyas shākya thub pa'i bstan pa'i gnas tshad lnga brgya phrag bcu'i tha ma/ rta[gs] tsam 'dzin pa'i lnga brgya phrag gcig ste/ bstan pa mar 'grib nas phyi'i rnam pa tsam du zad pa'i dus*'.

<sup>187</sup> 『大方等大集経』(T 397.13.363a29): 於我滅後五百年中。諸比丘等。猶於我法解脫堅固。次五百年我之正法禪定三昧得住堅固。次五百年讀誦多聞得住堅固。次五百年於我法中多造塔寺得住堅固。次五百年於我法中鬪諍言頌白法隱沒損減堅固。

<sup>188</sup> E.g. HIRAKAWA (平川) 1968:781–788, FUJITA (藤田) 1970:253–258, NATTIER 1991:33–37, 91n89, SEYFORTH RUEGG 1992:33, HARRISON 2006:144.

<sup>189</sup> See HIRAKAWA (平川) 1968:65–72, HARRISON 1990:97–98.

用例が、特に埋蔵者パドマサンバヴァ (fl. ca. 8c) を年代軸として注意される。「来たる最後の五百年」の状況は、上述の用例の他、§2.1.1 においても「寿命は短く、病は多く、富は貧しく、勝義も成り立たないので、長期間にわたって苦しみの連鎖 [が続く] 時」 (§2.1.1: *tshe thung nad mang longs spyod dbul: dam pa'i don yang mi 'grub pas: sdug bsngal 'khor lo rgyun ring dus*) と繰り返して強調されている。こうした時世観は、後に第2.6.2章 (五濁悪世) において触れるように、「五濁悪世」という文脈で理解されようが、リクズイン・グウデムチェンが『チャッキドンポ』を発掘した14世紀頃のチベットの実際の社会情勢にも、様々な要因の見出し得ることが推測される。

500年という単位については、LAMOTTE 1958 (1988) が論じているように、5000年という単位も上座部の伝統においては認められることがあるが、<sup>190</sup> 従来注目され、検討されてきたのは、<妙法蓮華経>における50年という単位との比較の問題であろう。鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』(T 262)の薬王菩薩本事品 (Bhaiṣajyarājapūrvayoga-parivarta) に、如来の滅後「後の五百歳の中に」(SaddhP\_c: 後五百歳中)<sup>191</sup> というこの時間的単位概念が出るが、FUJITA (藤田) 1970 が注意を促しているように、<sup>192</sup> この漢訳に対応するサンスクリット文 (SaddhP\_s) では、「後の五十 [年] において」(*paścimāyāṃ pañcāśatyāṃ*) とされている。<sup>193</sup> この相違は、NATTIER 1991 が指摘しているように、*pañcaśatī/pañcaśatī* (500) と *pañcāśatī/pañcāśatī* (50) との間の混同に起因するものと考えられる。<sup>194</sup> BHSD (s.v.

<sup>190</sup> See LAMOTTE 1958 (1988):196: 'Year 5,000.—In Ceylon, in the fifth century A.D., Buddhaghosa and his school fixed the disappearance of the Law in the year 5,000. That is the figure adopted by the Pāli chronicles and commentaries such as the *Mahāvamsa* (III, 38), *Sumaṅgalavilāsini* (I, p. 25), *Atthasālinī* (p. 27) and *Samantapāsādikā* (I, p. 30)'.

<sup>191</sup> SaddhP\_c, 54b29: 若如来滅後後五百歳中。若有女人。聞是經典如說修行。於此命終。即往安樂世界阿彌陀佛大菩薩衆圍繞住處。生蓮華中寶座之上。不復爲貪欲所惱。亦復不爲瞋恚愚癡所惱。亦復不爲憍慢嫉妬諸垢所惱。

<sup>192</sup> See FUJITA (藤田) 1970:257n1: 'この文の「後の五百歳の中に」は、SaddhP. p. 419, l. 2 では「後の五十 [年] において」(*paścimāyāṃ pañcāśatyāṃ*) とあり、『正法華経』(同上 [NB: i.e. 『大正藏』九卷] 一二六頁下) では相當語を缺くから、確かな年代を示すものではない'.

<sup>193</sup> SaddhP\_s, 419,1: *yaḥ kaścīn naḥṣṭrarājasamkusumitābhijñemaṃ bhaiṣajyarājapūrvayogaparivartam paścimāyāṃ pañcāśatyāṃ śrutvā mātṛgrāmaḥ pratipatsyate sa khalv itas cyutaḥ sukhāvatyāṃ lokadhātāv upapatsyate/ yasyāṃ sa bhagavān amitāyustathāgato 'rhan samyaksambuddho bodhisattvagaṇaparivṛtas tiṣṭhati dhriyate yāpayati/ sa tasyāṃ padmagarbhe simhāsane niṣaṇṇa upapatsyate na ca tasya rāgo vyābādhiṣyate [vyābādhiṣyate em.] vyāvadhīṣyate SaddhP\_s] na dveṣo na moho na māno na mātsaryāṃ na krodho na vyāpādaḥ/*

「星宿王華神通 (Nakṣatrarājasamkusumitābhijñā) よ！ この「薬王の前世の因縁」という章 (Bhaiṣajyarājapūrvayogaparivarta. 「薬王菩薩本事品」) を後の五十 [年] において聞き、修行する (*pratipatsyate*) 女性は誰でも、この世から (*itas*) 去って (*cyutaḥ*) 必ずや極楽世界に生まれるであろう (*upapatsyate*)。そこ (極楽) には、完全な悟りに到達した阿羅漢である、彼の尊き無量寿仏如来が、菩薩衆 (*bodhisattvagaṇa*) に囲まれて (*parivṛta*) おられ (*tiṣṭhati*)、留まれ (*dhriyate*)、[時を] 過ぎされている (*yāpayati*)。彼の地 (極楽) で彼 (男性として生まれた者) は、蓮華の胎にある獅子座に座って (*niṣaṇṇa*) 現われ (*upapatsyate*)、[1.] 貪欲 (*rāga*) も、[2.] 瞋恚 (*dveṣa*) も、[3.] 愚癡 (*moha*) も、[4.] 自惚れ (*māna*) も、[5.] 嫉妬 (*mātsarya*) も、[6.] 忿恨 (*krodha*) も、[7.] 害意 (*vyāpāda*) も、彼を害する (*vyābādhiṣyate* < *vyā-√bādhi*) ことはないであろう」

For a Japanese translation, see UEKI (植木) 2008:vol. 下, p. 447.

*pañcāśati*) は、〈妙法蓮華経〉のサンスクリット文 (SaddhP\_s) を用例に、*pañcāśati* に 50 という語義を与えている。<sup>195</sup> BHSD がそこで注意を促しているように、KERN 1909 や BURNOUF 1925 が *pañcāśati* を 500 と解釈していることは、当該部分 (SaddhP\_s, 419,1) の翻訳文にそれぞれ看取される。<sup>196</sup>

『チャッキドンポ』埋蔵の経緯において、諸仏典に用例が見出される「最後の五百年」という時間的単位概念が鍵となっている以上、この概念の解釈を巡る学界の動向には意識的であるべきだろう。『チャッキドンポ』における当該の概念については、しかし、500年の他に関わりを持つ時間的単位概念の痕跡は何も認められず、〈妙法蓮華経〉のチベット語訳 (D 113/P 781) にも看取される「最後の五百 [年]」(*lnga brgya pa tha ma*)<sup>197</sup> という‘決まり文句’ (UEKI (植木) 2008:vol. 下, 459n38)<sup>198</sup> を流用したものと見る方が自然である。500年は、埋蔵者パドマサンバヴァ (fl. ca. 8c) から発掘者リクズイン・グウデムチェン (1337?-1406) までの時間的距離を考慮しても、許容範囲となる時世観と見做し得よう。

## 2.6.2. 五濁悪世

「五濁悪世」(*snyigs ma lnga yi tshe*, Skt. *pañca-kaṣāya-kāla*)<sup>199</sup> という用語は、『チャッキ

<sup>194</sup> NATTIER 1991:91n89: ‘The confusion between “fifty” and “five hundred” in this and other such passages (frequently reflected in Dharmarakṣa’s Chinese translation, which often reads 除五十歲 “in the remaining fifty years” where Kumārajīva has 後五百歲 “in the latter five hundred years”), [...] is easily explained if we postulate the transmission of texts containing this expression in the Kharoṣṭhī script used in northwest India and Central Asia, in which long vowels are generally not indicated. In such a script the distinction between “fifty” (*pañcāśatyām*, fem. loc. sing. < *pañcāśatī*) and “five hundred” (*pañcaśatyām*, fem. loc. sing. < *pañcaśatī*) would have been entirely invisible’.

<sup>195</sup> BHSD, s.v. *pañcāśati* (p. 315): analogical alteration of *pañcāśat*, like rare Skt. *trīṃśati*.

<sup>196</sup> KERN 1909:268: ‘the last five hundred years’, 268n2: ‘I.e. in the latter part of the millennium. According to the declaration of the Buddha in Kullavagga X, I, 6, the true law (Saddhamma) is to stand a millennium, though at the same time, owing to the institution of female monks, the number of 1000 years should be reduced to half’; BURNOUF 1925:t. 1, p. 171: ‘dans les cinq cents dernières années [du Kalpa]’.

<sup>197</sup> SaddhP\_t, D 156b2; P 178b6: *skar ma'i rgyal po me tog kun tu rgyas pa mngon par shes pa/ bud med gang la las sman gyi rgyal po'i sngon gyi sbyor ba'i le'u 'di lnga brgya pa tha ma la thos nas nan tan byed pa del 'di nas shi 'phos nas 'jig rten gyi khams bde ba can du skye bar 'gyur te/ gang na bcom ldan 'das de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas tshe dpag med/ byang chub sems dpa'i tshogs kyis yongs su bskor cing bzhugs te 'tsho zhing gzhes pa der/ de padma'i snying po'i [snying po'i suppl. D] om. P] seng ge'i khri la 'dug bzhin du skye bar 'gyur rol/ de 'dod chags kyis gzir bar mi 'gyur te/ [te/D] ro/ P] zhe sdang gis ma yin gti mug gis ma yin nga rgyal gyis ma yin ser snas ma yin khro bas ma yin gnod sems kyis ma yin te.*

<sup>198</sup> See UEKI (植木) 2008:vol. 下, 459n38: ‘*pañcaśatyām* (< *pañcaśatī*-, 五百) は、KN. と WT. のいずれにおいても、*pañcāśatyām* (< *pañcāśatī*-, 五十) となっているが、内容的にここは決まり文句の「後の五百年」でなければならず、「五百」と改めた。鳩摩羅什訳も「後の五百歳の中にて」となっている。本章では、KN. p. 420, l. 14 にも同様の記述がなされている。岩本訳では、KN. と WT. のままで次のように訳している。「最後の五十年に」(文庫下, p. 205)’.

ドンポ』中に *nam zhis snyigs ma lnga bdo'i dus* (§§0.2.3, 1.3.2) と, *dus ngan snyigs ma lnga bdo'i tshe* (§2.1.2) という2つの用例が, この「五濁悪世の時」に, 持明者グウキデムトウチェンが誕生し (§0.2.3: 'byung), 『チャッキドンポ』を発掘 (§1.3.2: *thon < 'don*),<sup>200</sup> 修習し (§0.2.3: *spyod*), 究竟に至る (§2.1.2: *mthar phyin*) という文脈で見在する。「最後の五百年」同様, 『チャッキドンポ』発掘時の時世観に関わる「五濁悪世」の様相は, この用語の成り立ちから見て五義, 即ち, 5つの濁を趣意とするものと推測されるが, これに関する具体的な説明は見当たらない。そこで, このような視点から, 以下にこの趣意に相当する観念を仏典中に少しく調べてみたい。

「五濁悪世」という用語は, FUJITA (藤田) 2001 に ‘すでに北伝の部派や大乘仏教において広く説かれているもので ‘後には, 末法の時代観と結びついて, 浄土思想の展開に大きな役割を演ずるに至った’ (p. 166) と言及されている。「五濁」(Skt. *pañcakaṣāyāḥ*; Tib. *snyigs ma lnga'i ming la*)<sup>201</sup> という用語については, 阿含經典には ‘説かれるが, 相当のパーリ文 (SN. II, pp. 224–5) には説かれないから, 原始仏教時代には成立していなかった説である’ (FUJITA (藤田) 2001:168n7) と考えられる。<sup>202</sup> この「五濁」即ち「5つの汚濁」については, <阿弥陀経> (\**Amitābhabuddhasūtra*) 等に説示される<sup>203</sup> 「劫濁」「見濁」「煩惱濁」「有情濁」「命濁」という5つの名称が知られ,<sup>204</sup> 学者の中には, 時世が

<sup>199</sup> See ISP, s.v. *sñigs ma lia yi tshe* (p. 89): ‘*pañca-kaṣāya-kāla*’.

<sup>200</sup> See 『藏漢』 s.vv. *thon* (p. 1196): ‘(1) *'don pa'i skul tshig* (2) *'thon pa'i skul tshig*’, *'don pa* (p. 1421): ‘1. (*tha dad pa*) *bton pa/ gdon pa/ thon//* (1) *'gog pa dang/ logs su 'byed pa dang/ 'byin pa/ [...]* (2) *kha ton byed pa/ [...]* (3) *mnga' gsol ba dang/ gong du 'god pa/ [...]* 2. (*rnying*) *bza' btung*'.

<sup>201</sup> See *Mvy*, nos. 2335: *pañcakaṣāyāḥ/snyigs ma lnga'i ming la*, 2336: *āyuhkaṣāyāḥ/tshe'i snyigs ma*, 2337: *drṣṭikaṣāyāḥ/ta ba'i snyigs ma*, 2338: *kleśakaṣāyāḥ/nyon mongs pa'i snyigs ma*, 2339: *sattvakaṣāyāḥ/sems can gyi snyigs ma*, 2340: *kalpakaṣāyāḥ/dus kyi snyigs ma*'.

<sup>202</sup> 五濁の項目を説く阿含經典としては, 次の箇所情報が与えられている。FUJITA (藤田) 2001:168n7: ‘『雑阿含經』九〇六經(『大正藏』二卷, 二二六頁下), 『別訳雑阿含經』一二一經(同上, 四一九頁中)’.

<sup>203</sup> \**Amitābhabuddhasūtra*, AS\_t 90,18: *bcom ldan 'das shākya thub pa shākya'i rgyal pos bskal pa'i snyigs ma dang/ nyon mongs pa'i snyigs ma dang/ sems can gyi snyigs ma dang/ lta ba'i snyigs ma dang/ tshe'i snyigs ma'i tshe 'jig rten gyi khams mi mjed du bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub mngon par rdzogs par sangs rgyas tel' 'jig rten thams cad dang mi mthun pa'i chos bstan pa ni ngo mtshar lags sol/ bcom ldan 'das kyi bka' stsal pa/ shā ri'i bu snyigs ma lnga'i tshe 'jig rten du ngas gang 'jig rten gyi khams mi mjed du bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub mngon par rdzogs par sangs rgyas tel' 'jig rten thams cad dang mi mthun pa'i chos bstan pa de ni mchog tu dka' ba byed pa'o//*

AS\_s 94,1: *śuṣṭkaraṃ bhagavatā śākyamuninā śākyādhiraṅgajena kṛtam | sahāyāṃ lokadhātāv anuttarāṃ samyakṣambodhim abhisambudhya sarvalokavipratyayanīyo dharmo deśitaḥ kalpakaṣāye sattvakaṣāye drṣṭikaṣāya āyushkaṣāye kleśakaṣāye | tan mamāpi śāriputra paramaduṣkaraṃ yan mayā sahāyāṃ lokadhātāv anuttarāṃ samyakṣambodhim abhisambudhya sarvalokavipratyayanīyo dharmo deśitaḥ sattvakaṣāye drṣṭikaṣāye kleśakaṣāya āyushkaṣāye kalpakaṣāye ||*

AS\_c T 366.12.348a18: 舍利弗。如我今者稱讚諸佛不可思議功德。彼諸佛等。亦稱說我不可思議功德。而作是言。釋迦牟尼佛能為甚難希有之事。能於娑婆國土五濁惡世。劫濁。見濁。煩惱濁。衆生濁。命濁中。得阿耨多羅三藐三菩提。為諸衆生。說是一切世間難信之法。舍利弗當知。我於五濁惡世。行此難事。得阿耨多羅三藐三菩提。為一切世間。說此難信之法。是為甚難。

For a Japanese translation from the Sanskrit original, see FUJITA (藤田) 2015:188–189.

<sup>204</sup> これら5つの名称の順序は必ずしも一定していない。See FUJITA (藤田) 2015:241n137: ‘五つの汚濁 [...]

墮落して人間の寿命が短縮される「命濁」(*tshe'i snyigs ma*; Skt. *āyuhkaṣāyah*) を、中でも深刻な汚濁として論じる向きもある。<sup>205</sup>

以上に短く徴した「五濁悪世」や「五濁」の観念は、「寿命は短く、病は多く、富は少ないが、災難は多く、勝義も成り立たず、望み[も]絶たれる」 (§1.7.1) 等と定義された「最後の五百年」の趣意に相当するものと見做されよう。こうした様相を呈する時世に対峙すべく『チャッキドンポ』はテルマとして埋蔵された、という文脈で理解することができる。寿命百歳の全うと、極楽世界への往生を希求する長寿成就法において、「五濁悪世」が注意されるのは、至極当然な成り行きであろう。

以上の文脈によれば、テルマが発掘される事由は、テルマが埋蔵された事由の延長線上に理解される。この点について GYATSO 1993 は、「墮落した当世」(‘the degenerate times of the present era’, p. 111) にテルマが発掘されるロジク (logic) を、「自己を正当化する物語」(‘self-legitimizing narrative’) 或いはまた「啓示の弁明」(‘the account of the revelation’) として論じている。<sup>206</sup> テルマ、或いはテルトウンは、「五濁悪世」の時世観を背景とし、チベットの実際の社会情勢の要請に応える体裁で11世紀以降出現し始めたものと考えられる。<sup>207</sup>

### 2.6.3. テルマの守護者 (*gter bdag*)

『チャッキドンポ』がパドマサンバヴァによって埋蔵されてから、リクズイン・グウデムチェンがこれを発掘するまでの約500年間、このテルマの守護するように (*srungs*), そして、五濁悪世の時にこれをリクズイン・グウデムチェンに譲渡するように (*gtod*) パドマサンバヴァによって命じられた金剛喜 (§1.7.2: *rDo-rje-legs-pa*; *Vajrasādhu*) の存在も、当該成就法の埋蔵には大きく関わっている。THONDUP 1986 が論じているように、金剛喜は、頂髻母 (Mvy., no. 4277: *Ekajaṭī/Ral-pa-gcig-ma*) やラーフ (Mvy., no. 3392: *Rāhuḥ/sGracgan*) と共にテルマの守護者 (*gter bdag*) として知られ、<sup>208</sup> 『チャッキドンポ』の相伝につい

五項目の順序は一定していない。以上の所論と関連し、<菩薩地>における「五濁」については、関連箇所抄訳 (BBh\_s1, 172,25; BBh\_s2, 252,15) を第2.8.4章 (仏教文献における寿命百歳の位置付け) において提出したことを注記する。

<sup>205</sup> E.g. INAGAKI 1994:399: ‘The five defilements become serious when man’s life-span decreases to less than a hundred years’.

<sup>206</sup> GYATSO 1993:111: ‘Here the emphasis is on the moment when the Treasure was first brought to light by the discoverer, in what is considered the degenerate times of the present era. I have labeled this type of Treasure self-legitimizing narrative the *account* of the revelation’.

<sup>207</sup> See HIRAMATSU (平松) 1982:79n7: ‘[...] テルトウンは11世紀頃から出現するから [...]’. テルトウンの出現年代については、FUJINAKA/NAKAMIKADO (藤仲/中御門) 2018 が、BRADBURN 1995 に依拠した次のような分析を提出している。See FUJINAKA/NAKAMIKADO (藤仲/中御門) 2018:234–235n13: ‘9-11世紀の頃から、名前に *gTerston* (埋蔵経発見者) や *gTer chen* (大埋蔵経発見者) といった称号を持つ人が登場する’. テルトウンが最も数多く出現した年代は、FUJINAKA/NAKAMIKADO (藤仲/中御門) 2018 によれば、‘26人’ が出現した ‘14-15世紀’ である。

<sup>208</sup> See THONDUP 1986:70: ‘Terma protectors such as ‘*Ekajaṭī*, *Vajrasādhu* and *Rāhu*, who were to protect and hand over the Termas to the right discoverer, and to protect the followers and the tradition of the teaching’.

ては、タントンギャルポへのそれについても深く関わっている。<sup>209</sup> テルマの守護者は、龍神 (*nāga*) や夜叉 (*yakṣa*), 羅刹 (*rākṣasa*) に由来し,<sup>210</sup> その性質を寂静相と二分した時には、忿怒相が知られる。<sup>211</sup> このような異形のシンボルは、「来たる最後の五百年」において、テルマの守護によく叶ったものであろう。

『チャッキドンポ』が秘匿される場所として選択された「毒蛇の塊の如き岩山の中腹」 (§0.2.3: *brag ri dug sbrul spungs 'dra'i sked*) も、この荒々しいシンボルに通底する。この例証には、他に、『サンリンマ』 (*Zangs gling ma*) 等が挙げられよう。<sup>212</sup> この有毒な (*gdug pa can*) 生き物や、或いはこの生き物に仮託された場所そのものが、テルマの守護者たり得るのかもしれない。『チャッキドンポ』は、「来たる最後の五百年」に備え、後世の有縁者の為にえび茶色の銅製の箱の中央に取めて埋蔵された。このテルマを「慈しみの残余が在るよう」守護してきたのは、いわばチャン地方のトーヨルナクポの地にある「毒蛇の塊の如き岩山の中腹」だった、といえるであろう。

<sup>209</sup> *Kun gsal nor bu'i me long*, K\_A 23b5; K\_B 48,6; K\_C 47,17: *kun spangs don yod rgyal mtshan gnas chen ri bo [ri bo B, C] ri rgyal ri bo A] bkra bzang na bzugs pa'i skabs su/ tshes [tshes A, B] chos C] bcu mdzad pa'i srod la kun spangs ri khrod pa'i sku mdun du e ka dzā ṭi sogs gter bdag rnams mngon sum du yong [yong em.] yongs A, B, C] nas/ chos bdag pos len du yong ba yod pas yi ge gcig kyang ma lus par spro d cig zer/*

<sup>210</sup> See THONDUP 1986:70: 'Those protectors come from classes of non-human beings or spirits such as gods, *nāgas*, *yakṣas* and *rākṣasas*. They are beings who have received teachings from Guru Padmasambhava and have taken a vow to protect the Dharma. Most of them are chiefs of their own classes of beings'.

<sup>211</sup> Cf. GETTY 1962:125: 'Ekajaṭā, the blue Tārā, is the most powerful of all the goddesses, for even to listen to her mantra repeated destroys all obstacles, brings good luck and intense religious enjoyment ... [Ekajaṭā] is one of the most terrifying manifestations in the Mahāyāna pantheon'.

<sup>212</sup> *Zangs gling ma*, 5,6: *de 'das pa'i nang na dug sbrul la sogs pa'i sems can gdug pa can mang po yod pas: byang chub kyi sems sgoms la song zhig: de'i nang na rin po che sna tshogs kyi lcags ri sgo bzhi dang ldan pa: [...]*



## 2.7. 発掘

本2.7章では、第2.1章（『チャッキドンポ』を伝えるチャンテル）の考察に基づき、『チャッキドンポ』発掘の経緯を、これを収録する集成類と共に検討する。『チャッキドンポ』を収録する集成類 (*phyogs bsgrigs*) については、第2.2章において、CD\_A を収録する『心成就法ダクポツアルの法類』と、CD\_B と CD\_C を収録する『リンチェンテルズ』（ツルプ版／パルプン版）を確認した。中でも、前者『心成就法ダクポツアルの法類』に『チャッキドンポ』が収録されて伝わる事由を発掘の経緯と関連付けて考察することは、伝承の経過をたどる上に興味ある事実を示すものと考えられる。

『チャッキドンポ』の発掘については（後述するように、その詳細に諸説ある）、これが「南に位置する金庫」（§1.8.1: *lho gser mdzod ser po*; §3.8.1: *lhor ser mdzod*）から発掘されたことが、第1節外なる成就法のコロフォン (§1.8.1) と、第3節秘密なる成就法のコロフォン (§3.8.1) に、発掘者リクズイン・グウデムチェン自身によって記されている。§3.8.1の方が比較的詳しく、この金庫がチャン地方 (Byang) のサンサンハダク (*Zang-zang-lha-brag*) の中腹から発掘されたことが明記されているが、これ以外の詳細は『チャッキドンポ』中に見当たらない。そこで、この点を検証するために、直弟子のセトン・ニマサンポ (*Se-ston Nyi-ma-bzang-po alias Sūryabhadra. fl. ca. 14c. BDRC#P8839*) が著したリクズイン・グウデムチェンの伝記『照射する陽光』 (*gSal byed nyi ma'i 'od zer*) から関連箇所を訳出し、考察をすすめる。

ここでは、次の2点、即ち——『照射する陽光』には、(1.)『チャッキドンポ』が収納、埋蔵された「南に位置する金庫」を含め、中央／東／南／西／北という計5個の宝庫 (*mdzod*) に関する記述が見られるが、(2.)『チャッキドンポ』に関する記述は見えない——という2点に注意が必要である。チャンテルの発掘については、この他、その詳細に諸説あること、また、発掘の年代を考察するにあたっては、チベット暦の暦算法／西暦への換算法が難解であることが注意される。『照射する陽光』のテキスト校訂にあたっては、同じウメ字本写本2本を使用した HERWEG 1994 の所見に見られるように、<sup>213</sup> 異同が少なくなく見られ、筆者には判断に迷う部分が少なくない。よって、訳出する範囲は『チャッキドンポ』が発掘された「南に位置する金庫」に関する箇所に絞り、以下に試訳を提出する（注に提出した当該部分のテキストはグレーに色付けして示した）。

### 2.7.1. 『チャッキドンポ』発掘に関する『照射する陽光』の記述

*gSal byed nyi ma'i 'od zer*, S\_A 31,1; S\_B 84,1<sup>214</sup>

<sup>213</sup> 本研究が使用したウメ字本写本2本 (S\_A, S\_B) と、HERWEG 1994 のそれ (abbr. RNAM THAR 1, RNAM THAR 2) との間の略号の対照は、次のとおりである。

S\_A=RNAM THAR 2

S\_B=RNAM THAR 1

両写本の系譜が異なることは、HERWEG 1994 に次のように分析されている。See HERWEG 1994:43: ‘The texts are nearly identical. However, numerous grammatical variants, some exclusions, and a few contradictions indicate that the two texts have had for a longer period of time their independent lines of transmission’.

<sup>214</sup> *gSal byed nyi ma'i 'od zer*, S\_A 31,1; S\_B 84,1: *lam [lam B] lam A] byang gsal sgron ma [ma suppl. B] om. A] las [...] brag ri dug sbrul spungs 'dra la: lo rta'i lo la gter 'byung bar [bar S\_A] par S\_B] 'gyur ro:*

『清浄明灯道』 (*Lam byang gsal ba'i sgron me*) という書物に次のようにいわれる：

「[...] ある午年、毒蛇の塊の如き岩山の中腹にテルマ (*gter*) があらわれる」。

[... この書物に記されたとおりに] 南の黄色をした金庫の中から

太陽や月の如く輝く教えである四種近成就を

[リクズイン・グウデムチェンは発掘した]。

『照射する陽光』の当該箇所には、「南の黄色をした金庫」からリクズイン・グウデムチェンが太陽や月の如く輝く教えである四種近成就 (*bsnyen sgrub rnam pa bzhi*) を発掘したことが記されている。<sup>215</sup> この四種近成就については、四種方便 (*caturvidham upāyan*; Tib. *thabs ni rnam pa bzhi po dag*)<sup>216</sup> が、これに相応するものとして検討されてよいであろう。この四種方便は、『秘密集会タントラ』 (*Guhyasamājatantra*) の第18分「一切の秘密の法門である金剛智の加持」 (*Sarvaguhyanirdeśavajrajñānādhiṣṭhāna* ≈ D 443) に (1.) 親近 (*sevā*; *bsnyen pa*), (2.) 近成就 (*upasādhana*; *nye bar sgrub pa*), (3.) 成就 (*sādhana*; *sgrub pa*), (4.) 大成就 (*mahāsādhana*; *sgrub pa chen po*) という四種が説示されている。<sup>217</sup> この

[... A 41,6; B 96,3] *de nas* [1.] *gter mdzod kyi dbus/ snying mdzod smug po'i dbus nas/ bla ma yi dam dākki'i* [dākki'i A] *mkha' 'gro'i B* *sgrub thabs* [sgrub thabs em.] *sgrub thab A; bsgrub pa B* *dang/ kun tu bzang po dgongs pa zang thal gyis thog drangs pa'i gang zag gcig la dgos pa'i chos mtshan tshang ma dang/* [kun ... dang suppl. A] *om. B* *phur bu gsum/ shog ril sum bcu/ dar sngon po cig gi* [sngon po cig gi A] *smug po gnyis la B* *dril nas 'dug pa dang/ gzhan yang phur pa/ dbu skra* [dbu skra suppl. B] *om. A* *la sogs pa'i* [pa'i A] *pa B* *byin rlabs* [rlabs A] *brlabs B* *kyi rdzas khyad par can mang du ston* [ston A] *btan B* *no/*

[2.] *shar phyogs dung mdzod dkar po nas/*

*rgyu 'bras la ldog pa'i chos/*

*dgongs pa ni nam mkha' dang mnyam pa'i chos/*

[3. A 31,3; B 84,3] *lho phyogs gser mdzod ser po nas/*

*bsnyen sgrub* [snyen sgrub A] *bsnyen bsgrub B* *rnam pa bzhi'i chos/*

*spyod pa nyi zla ltar gsal ba/*

[4.] *nub phyogs zangs mdzod dmar po nas/*

*rten 'brel khyad par can gyi chos/*

*tsandan gyi sdong bu lta bu'i chos/*

[5.] *byang phyogs lcags mdzod nag po nas dgra bgegs thal bar rlog pa'i chos/ dug gi sdong po lta bu'i man ngag rnams/*

<sup>215</sup> Cf. *dGongs pa zang thal gyi chos skor*, preface: 'According to 'Jam-mgon Kong-sprul the contents of the various *mdzod* were: [...] 3) *Lho gser mdzod ser po* [...] *Bsnyen sgrub rnam pa bzhi'i chos spyod pa nyi zla ltar gsal ba*'.

<sup>216</sup> Cf. HERWEG 1994:75n201: '*Catvārisevāsādhanaṅga, bsnyen sgrub yan lag bzhi*'.

<sup>217</sup> *Guhyasamājatantra*, GS\_s 162,14:

*caturvidham upāyan tu bodhivajreṇa varṇitam|*

*yogatanreṣu sarveṣu śasyate yoginā sadā||*

*sevāvidhānaṃ prathamaṃ dvitīyaṃ upasādhanaṃ*

*sādhanaṃ tu tṛtīyaṃ vai mahāsādhanaṃ caturthakam||*

*sāmānyottamabhedena sevā tu dvividhā bhavet|*

*vajracatuṣkeṇa sāmānyam uttamaṃ jñānāmṛtena ca||*

GS\_c 885.18.509a29:

有四種方便 菩提金剛等

四種の方便／成就法は、MATSUNAGA (松長) 1980 によれば、『秘密集会タントラ』の第2分から第17分までの16分を四支／四種に分け、その‘実践面’を‘総括’し、‘完結的に代表する実践体系’である (p. 238)。この四部より成る生起次第は、また、‘多くの密教儀礼に様々なかたちで適用されている’ (BENTOR 1996:[1])<sup>218</sup> ことが知られる。

親近、近成就、成就、大成就と次第する四種の方便／成就法は、チャンテルに伝わる長寿成就法の中では『ヴァジュラキーラの長寿成就法』 (*rDo rje phur pa'i tshe sgrub*) に、『秘密心髓真性決定』 (*gSang ba'i snying po de kho na nyid nges pa*. D 834; P 457) から引用する形の用例が認められる。<sup>219</sup> 生起次第における二段階の合一、即ち、三昧耶薩埵を

一切相應教 彼常所相應  
成就爲第一 近成就第二  
成就性第三 大成就第四  
此諸平等行 是名四種法  
四金剛枳拏 最上智甘露。

GS\_t 154a2:

*thabs ni rnam pa bzhi po dag/  
byang chub rdo rje can gyis gsungs//  
rnal 'byor rgyud ni thams cad du//  
rnal 'byor pa yis rtag par bsngags//  
bsnyen pa'i cho ga dang po ste//  
nye bar sgrub pa gnyis pa yin//  
sgrub pa yang ni gsum pa ste//  
sgrub pa chen po bzhi pa'o//  
thun mong mchog gi bye brag gis//  
bsnyen pa rnam pa gnyis su 'gyur//*

For a Japanese translation from the Sanskrit, see MATSUNAGA (松長) 2000:224.

<sup>218</sup> BENTOR 1996:[1]: ‘Among the various processes included in the *sâdhana*, of special importance is the fourfold generation (*bskyed-pa*) ritual which is variously applied in most tantric rituals of all types—those performed for the sake of oneself and those performed for others. This fourfold generation includes the following:

- 1) Generation of the *dam-tshig sems-dpa'* (*samayasattva*).
- 2) Blessing of the sense-bases (*skye-mched*, *âyatana*).
- 3) Invitation of the *ye-shes sems-dpa'* (*jñânasattva*) and its merging with the *dam-tshig sems-dpa'*.
- 4) Sealing the mergence through self-initiation’.

See also *Bod dbyin shan sbyar*, s.v. *bsnyen sgrub yan lag bzhi* (p. 103): ‘The four limbs of the approaching retreat. The ways of being in retreat. 1. *bsnyen pa*. approaching through visualizing a symbolic being 2. *nye bar bsnyen pa*. the near achievement of a wisdom being 3. *sgrub pa*. actual achievement 4. *sgrub pa chen po*. the great achievement’.

<sup>219</sup> *rDo rje phur pa'i tshe sgrub*, DT\_A 2a1; DT\_B 2a2; DT\_C 1b6; DT\_D 2a4≈*gSang ba'i snying po de kho na nyid nges pa*, D 260a1; P 260a1:

*tshe bsnyen dang ni nye bsnyen dang*: [°*bsnyen*°*bsnyen*° A, C, D] °*snyen*°*gnyen*° B]  
*tshe sgrub dang ni sgrub chen bya*: [°*sgrub*°*sgrub chen*° C] °*sgrub*°*bsgrub chen*° A, B; °*sgrubs*°*bsgrub chen*° D]

当該の偈は、多少の異同をもって『キーラの火炎鬘』にも見在する。

*Phur pa me lce'i 'phreng ba*, 213,5:

*tshe bsnyen dang ni nye bsnyen dang*:

勤修者自身と不二一体のものとして生起，観想し，その後に智慧薩埵を招請して合体する，というプロセスを履む観想法は、『チャッキドンポ』にも適用されている。決して積極的な考察ではないが、『チャッキドンポ』を四種近成就に準じて理解しても，不当とはいえないであろう。リクズイン・グウデムチェンが南の黄色をした金庫の中から発掘した四種近成就が，上述した四支成就法の観念を受けたものであることは，HERWEG 1994 の注記にもみとめられる。<sup>220</sup>

このテルマの発掘を予言したものと想定される『清浄明灯道』(*Lam byang gsal ba'i sgron me*) という名の書物は，筆者はこれまでにこれを特定することができなかった。

「毒蛇の塊の如き岩山の中腹に」というテルマの埋蔵場所に関する文言は、『チャッキドンポ』にも繰り返し使用，叙述されており，この文言が当該書物に由来する可能性は注目に値する。今後の学究に期したい。この『清浄明灯道』に「ある午年」と予言されているのは，チベットの暦法を徴するに，或いはまた先行研究からみて，西暦1366年と見做すのが妥当であろう。<sup>221</sup> この年代は，ダライ・ラマ5世ガワンロサンギャムツォ (Ngag-dbang-blo-bzang-rgya-mtsho. 1617–1682. BDRCP#P37) が著した『リクズイン・ンガギワンポ伝』(*Ngag gi dbang po'i rnam thar*) 等のチベット語諸資料によっても支持される。<sup>222</sup>

『照射する陽光』によれば，チャンテルの発掘は，二度，即ち——(1.) 「[火の] 午年巳

*sgrub dang bsgrub pa chen po yi:*

*las rnam yongs su rdzogs par bya:*

BOORD 1993によれば，『ヴァジュラキーラの長寿成就法』は当該の偈を『キーラの火炎鬘』から引用しており，その趣旨である「長寿の成就是，正統派のヨーガ実習の当然の帰結である」とする。See BOORD 1993:208: ‘That this *siddhi* of longevity is considered a natural corollary of orthodox yogic praxis is then demonstrated in the text as it goes on to cite from the *Garland of Flames Tantra* the adage: [...]’.

<sup>220</sup> See HERWEG 1994:97n262: ‘The four limbs of any type of practice; 1) propitiation, 2) approaching accomplishment, 3) accomplishment, 4) great accomplishment’.

<sup>221</sup> Cf. SCHUH 1973:\*87\*: ‘6. Rab-byung/40. Jahr’. *dGongs pa zang thal gyi chos skor*, preface (p. [i]): ‘The opening of the Zang-zang Lha-brag cave thus can be dated to 1366/1367’; DUDJOM RINPOCHE/DORJE/KAPSTEIN 1991:[780]: ‘Accordingly, on Sunday 19 April 1366 (eighth day, snake month, fire horse year), on the summit of Mount Trazang, on the summit of Mount Trazang, at the three stone pillars of Dzengdrak Karpo, Rikdzin Gödemcen found the key to three great treasures and one hundred minor treasures, and at that place he concealed a substitute treasure’.

チベット暦は，YAMAGUCHI (山口) 1990によれば，『時輪 (略本) タントラ』 *bsdus rgyud* の「世界莊嚴品」 *'jig rten khams le'u* による不正確な関係情報によって成立した後，『大註』 *'grel chen* の主張を手掛かりに修正され，今に至っている。一般に，1027年の，現行チベット暦，つまり，ホル暦 *Hor zla* の3月を *nag zla*, *caitra* として，暦の始めとする形で考えられている’ (p. 2)。チベット暦の西暦への換算法は，閏年の扱い等をめぐり，ことほど左様に複雑な計算を要し，ここに詳しく論究する余裕がないので，主要な研究成果である SCHUH 1973 と YAMAGUCHI (山口) 1990 に拠った。いずれも SCHUH 2012 に再録されている。

<sup>222</sup> See *Ngag gi dbang po'i rnam thar*, 434,6: *de nas me rta sbrul gyi zla ba'i yar ngo'i tshe brgyad rgyal phur gyi 'grub sbyor la ri bo bkra bzang gi rtse mor phebs te skya rengs dang po'i tshe gter gnas kyi thad du 'od zer skar chen shar blta bu dang/ [... 436,1] lo de'i lug zla'i tshes bzhi'i srod la brag ri dug sbrul spungs 'dra'i sked pa'i brag phug nas rdo rje'i rgya gram kyi mtshan rtags kyi 'og tu lde mig bsnun pas brag gi sgo gsal ba'i nang nas rdo sngon po gru bzhi sgo dgu yod pa/*

リクズイン・グウデムチェンによるチャンテル発掘の年代を記述するその他のチベット語諸資料 (e.g. 『グルタシ仏教史』 (*Gu bkra'i chos 'byung*) は，HERWEG 1994:160 に纏められている。

月第八日」(≈西暦1366年4月19日日曜日)<sup>223</sup>と、(2.) 同年「未月第四日」(1366年6月14日日曜日)<sup>224</sup>——の二度に分けて行われた。『チャッキドンポ』を含む「南に位置する金庫」の発掘は、以上の所説によれば——前述のとおり、その詳細に諸説あるが——二度目の発掘に当たる。

### 2.7.2. 『心成就法ダクポツアルの法類』の発掘と伝承

前章(第2.7章)において触れたように、チャントルの発掘については諸説伝わる。『ゴンパサントルの法類』(*dGongs pa zang thal gyi chos skor*)の前書き(preface, vol. 1)が基づくところの「ドルジェダク流」(‘Rdo-rje-brag tradition’, p. [ii])の伝承によれば、<sup>225</sup> リクズイン・グウデムチェンは「南の黄色をした金庫」(‘the southern golden yellow *mdzod*’)から次の2点を発掘した。即ち、(1.) 2巻からなる『秘密なる成就法ダクポツアル』(*gSang sgrub drag po rtsal*)と、(2.) 同じく2巻からなる『八教説ダクポ自生自照』(*bKa’ brgyad drag po rang byung rang shar*)とである。<sup>226</sup>

<sup>223</sup> *gSal byed nyi ma’i ’od zer*, S\_A 38,2; S\_B 92,2: *sang snga dro rta lo sbrul gyi zla ba’i tshes brgyad* [°sbrul gyi A] °sbrul B] *skar ma rgyal dang phur pa ’dzoms pa’i tho rangs* [°dang phur pa ’dzoms B] °phur ’dzom A] *lde mig spyan ’dren pa’i brtags blta dgongs pa’i/ sred sna me lung du phebs pa’i tho rangs/* [°brtags°dgongs pa’i/ sred°me°phebs°tho B] °rtags°dgos srod°mo°pheb°miho° A] *skya rengs dang po la rtags kyi ’od zer gzigs te/* [°te B] °ste A].

Cf. DUDJOM RINPOCHE/DORJE/KAPSTEIN 1991:[780]: ‘Accordingly, on Sunday 19 April 1366 (eighth day, snake month, fire horse year), on the summit of Mount Trazang, at the three stone pillars of Dzungdrak Karpo, Rikdzin Gödemcen found the key to three great treasures and one hundred minor treasures, and at that place he concealed a substitute treasure’. See also 74n1044: ‘Tshurpu calculation, as explained above. According to both the Tshurpu and the Phakpa schools the snake month is the fourth (whereas it is the second according to the Phukpa schools); similarly the sheep month is the sixth according to Tshurpu and Phakpa, but the fourth in Phukpa. See Schuh, *Untersuchungen zur Geschichte der Tibetischen Kalenderrechnung* [NB: i.e. SCHUH 1973], p. 146’.

<sup>224</sup> *gSal byed nyi ma’i ’od zer*, S\_A 39,1; S\_B 93,1: *de nas lug gi zla ba’i tshes bzhi skar ma rgyal dang phur pa ’dzom pa la/* [°bzhi°dang phur pa° B] °dang°phur° A] *gter mdzod ’don par gsungs pas/* [°gsungs° B] °gsung° A] *rin po che pa/ bla ma do pa ba/* [°do pa ba/ B] °do pa/ A] *rig ’dzin mgon po dang dpon slob gsum gyis/* [rig°gyis/ em.] rig°gyi/ A; rigs°gyis/ B] *snying byang rgyas pa nas gsungs pa’i gter tshab rnam bsnams te/* [°gsungs°rnam bsnams te/ B] °gsung°bsnams nas/ A] *lam du zhugs nas byon pas/*.

Cf. DUDJOM RINPOCHE/DORJE/KAPSTEIN 1991:[780]: ‘At dusk on Sunday 14 June (fourth day, sheep month) of that same year [1366], in the cave of Zangzang Lhadrak, on the slopes of the rock mountain of Tukdrül Pungdra, Rikdzin Gödemcen discovered a great, profound treasure containing five treasure chambers in separate compartments inside a square, blue treasure chest. [...] he extracted [...] from the yellow gold treasure chamber to the south, the *Doctrinal Cycle of the Four Aspects of Ritual Service and Attainment which is Luminous like the Sun and Moon* (*bsnyen-sgrub rnam-pa bzhi’i chos-skor nyi-zla-ltar gsal-ba*) [...]. In short, he found countless doctrines, the *Penetration of Samantabhadra’s Intention* (*kun-bzang dgongs-pa zang-thal*) foremost among them, and sacramental objects. Because each of the five treasure chambers held one hundred doctrinal topics, there were five hundred in all’.

<sup>225</sup> *dGongs pa zang thal gyi chos skor*, preface (p. [ii]): ‘The story of the opening of the Zang-zang Lha-brag is a wonderful narration; like many miraculous stories, there are variant versions. In this account we shall follow the Rdo-rje-brag tradition’.

両者を今日伝わる集成類に比定する試みは、例えば、HERWEG 1994 が、前者『秘密なる成就法ダクポツアル』については、(1-1.) 1980年にガントック (Gangtok) から出版された4巻本を、後者『八教説ダクポ自生自照』については、(2-1.) 1975年にドーランジ (Dolanji) から出版された2巻本と、(2-2.) 1984年にダージリン (Darjeeling) から出版された1巻本をあげて、論述している (pp. 35–36)。上に (1-1.) として筆者が整理した集成類は、本論文においては『心成就法ダクポツアルの法類』(abbr. TD) として参照しており、CD\_A を収録する。(2-1.) は BDRC#W30291 に、(2-2.) は BDRC#W1KG12971 に、おそらくそれぞれ相当するものと考えられるが、<sup>227</sup> これらの目次 (contents) に『チャッキドンポ』は看取されない。

上の所論によれば、『チャッキドンポ』は、『心成就法ダクポツアルの法類』(TD) に比定し得る2巻本の『秘密なる成就法ダクポツアル』に収録されて、今日まで弘通するものと考えられる。この想定には、これを支持する積極的な論拠が示されるべきであろう。例えば、『ダライ・ラマ5世の聴聞録』(*Thob yig gangga'i chu rgyun*) に看取される文言「ラマ・リクズイン[・グウデムチェン]の心成就法ダクポツアルの法類」(*bla ma rig 'dzin thugs sgrub drag po rtsal gyi chos skor*)<sup>228</sup> も、その有力な根拠の一つとして関わるものと想定される。『心成就法ダクポツアルの法類』が、ダライ・ラマ5世ガワンロサンギャムツォの聴聞録をもとにドジョム・ジグデルイェシェドルジ (bDud-'joms 'Jigs-bral-ye-shes-rdo-rje. 1904–1987. BDRC#P736) によって編纂されたことは、第2.2.1章(『心成就法ダクポツアルの法類』(TD))において概説したとおりである。

ダライ・ラマ5世がドルジェダク・リクズイン3世リクズイン・ンガギワンポ (Rig-'dzin Ngag-gi-dbang-po. 1580–1639. BDRC#P639) の直弟子としてチャンテルを親しく修習していたことは、よく知られている。ダライ・ラマ5世が『心成就法ダクポツアルの法類』の相承に関わっていたことは、例えば、ドルジェダク4世リクズイン・ペマティンレー (Rig-'dzin Padma-'phrin-las. 1641–1717. BDRC#P657) の自伝『白い水晶鏡』(*Rab dkar shel gyi me long*) に記述された事績、即ち、「土の丑年」(*sa glang*~西暦1649年)に

<sup>226</sup> *dGongs pa zang thal gyi chos skor*, preface (p. [ii]): 'Inside the Zang-zang Lha-brag cave Rgod-kyi-ldem-'phru-can found a large square blue receptacle divided into five self-contained parts or treasures (*mdzod*). [...] the southern golden yellow *mdzod* contained the GSANG SGRUB DRAG PO RTSAL (2 volumes) and the BKA' BRGYAD DRAG PO RANG BYUNG RANG SHAR (2 large volumes)'.

<sup>227</sup> (2-1.) *Drag po rang 'byung rang shar chen po'i rgyud dang bka' brgyad kyi bsnyen thabs 'das pa'i zhal lung rin chen phreng ba bcas*. 2 vols. Dolanji: Tibetan Bonpo Monastic Centre, 1975. [BDRC#W30291]

(2-2.) *Byang gter bka' brgyad drag po rang byung rang shar*. Darjeeling: Chopal Lama, Kargyud Sungrab Nyamso Khang, 1984. [BDRC#W1KG12971]

<sup>228</sup> *Thob yig gangga'i chu rgyun*, vol. 3, 264,3:

*rig [rig em.] rigs] 'dzin rtsa ba'i sgrub pa las/*

*lho phyogs gser mdzod ser po na:*

[... 264,6] *gsang ba las kyang ches gsang zhing zab pa las kyang ches zab pa'i man ngag sprul sku rig [rig em.] rigs] 'dzin chen pos phal cher lho gser mdzod ser po nas spyang drangs pa'i bla ma rig [rig em.] rigs] 'dzin thugs sgrub drag po rtsal gyi chos skor la/ thog mar ras bris kyi dkyil 'khor du 'jug cing dbang bskur ba sta gon dang bcas pa'i yi ge'i steng nas sta gon gyi rim pa sngon du 'gro ba'i che ba sgrub chen brgyad kyi rtsa ba dril ba drag po rtsal gyi dbang chog chen mo'i las byad rgyas 'bring gang rung gzhung bsrangs pa'i mngon rtogs dbang chog so'i bdun yod pa ltar mdzad/*

当時9歳であったとされるドルジェダク4世に、<sup>229</sup> ダライ・ラマ5世が『心成就法ダクポツアルの法類』の灌頂を授けたという事績が証跡となろう。<sup>230</sup> こうした証跡に疑義を持つ説としては、例えば、『カーダム宝冊』(*bKa' gdams glegs bam rin po che*)における‘伝授・相承’(vol. 1 (チベット篇1), p. 280)について、史実としての信憑性を疑問視したHADANO(羽田野)1965 (1986–1988)が参照される。証跡の中には、彼の説に認められるように、‘自派の伝統的権威とその正当性を主張しよう’(*ibid.*, p. 283)後世に仮託された内容を伝えるものが「あり得る」ことも、忘れてはならない。<sup>231</sup>

ダライ・ラマ5世に流れる『チャッキドンポ』の灌頂系譜(*dbang brgyud*)については、『ダライ・ラマ5世の聴聞録』に基づく諸系譜を付録5に提出した。ダライ・ラマ5世は、『チャッキドンポの作法並びに灌頂儀軌法』(Tōhoku#5783. *lCags kyi sdong po'i las byang dbang chog dang bcas pa*)や、『チャッキドンポの灌頂に関する補遺』(Tōhoku#5781. *lCags sdong ma'i dbang chog gi lhan thabs*)といった『チャッキドンポ』に関する儀軌提要(*las byang*)<sup>232</sup>を著している。前者『チャッキドンポの作法並びに灌頂儀軌法』の末尾には、『チャッキドンポ』を讃嘆する押韻の美しい要約が記されており、校訂テキスト中にこれを提出した (§4.6.2)。

以上に参照した諸資料を深く読み込めば——時間もかかるし、間違ふこともあろうが——『チャッキドンポ』の発掘や伝承をより詳細に解明する鍵を得られるものと予想

<sup>229</sup> チベット人の年齢の数え方は、YAMAGUCHI(山口)1982の論考に見られるように、‘lo ngo「数え年」によってなされる。[...]例えば、人の寿命を云うとき、誕生した年と死亡した年を各一年としてその間の年に加算したものを示す。前後の各一年はその時間の長さが問われない’(p. 148)点が注意される。

<sup>230</sup> *Rab dkar shel gyi me long*, 329,22 (annotated English translation, p. 289f): *rang lo dgu pa sa glang zla ba dang por rnam sras gling nas pha ma sogs 'gro pher gang yod bteg pa'i sku zhabs yas phyin gyi zhal mjal phyag dbang dang lha sa mjal ba sogs la lhan du bteg/ [...] nged rjes su bsdad pa'i zla ba gnyis pa'i nyer gcig chos rgyal dbang po'i sde'i dus dran nyin gru 'dzin gnyis pa pho brang po ta lar khyab bdag phyag na pad+mo [sic] kun mkhyen blo bzang rgya mtsho'i zhabs drang du snga por nas rang lugs kyi chos bka' tshan che bar dgos tshul gsol ba btab pa bzhin gnas snying zhabs drung rin po che/ sku zhabs grwa gtsang gi grwa pa rags bsdus bcas nged chos nyan pa bdun cu skor la gzims chung khams gsum du ras bris kyi dkyil 'khor la brten pa'i byang gter bla ma rig 'dzin gdung sgrub kyi rab 'byams bka' [b53] dbang chen mo/ thugs sgrub drag po rtsal gyi dbang rgyas pa sgrub sde brgyad dang 'brel ba/ rgya zhang gter byon 'jam dpal gshin rje gshed 'khor 'das kyi phyag rgya zil gyis gnon pa'i pad gnubs dbang gi chu bo gcig tu 'dres pa nges don bde 'jug la/ chos rgyal dbang po'i sde'i phyag bzhes ltar bam chen gsang ba nas kha bkang ba'i slob ma sta gon dang khams gsum yongs sgrol gyi dbang/ zor dbang/ mchod rten gyi dbang/ rdo rje slob dpon gyi dbang sogs shin tu rgyas par nos shing/*

『白い水晶鏡』(*Rab dkar shel gyi me long*)は、文献一覧に挙げたとおり VALENTINE 2013 に依拠した。Jay H. Valentine 助教授 (Troy University) に数多くのご示唆を賜ったことをここに記して感謝申し上げたい。

<sup>231</sup> HADANO(羽田野)1965 (1986–1988): vol. 1 (チベット篇1), pp. 282–283: ‘カーダム派といえども決して単一ではなく、もともと多くの傾向をもち、諸派に分かれ、さらに時代の推移と共に多様に変容発達をとげたことは当然である。かような変容展開を過去に投影して、自派の伝統的権威とその正当性を主張しようとする心情は、宗教的世界においては、決して珍しいことではない。これが多くの場合の偽作・仮託書の主目的であろう。しかし、それは内容的にも史的にも、ある程度人を納得せしめる事実在即することが必要であることは、いうまでもない’。

<sup>232</sup> See 『蔵漢』 s.v. *las byang* (p. 2775): ‘*bya ba byed pa'i cho ga/ las chog kyang zer*’. For *las byang*, see also BOORD 2002:220: ‘ritual practice (*las byang*)’, SAMUEL 2012a:270: ‘*las byang* or ritual manual’.

される。今後の学究に期したい。



## 2.8. 2つの功德

本2.8章では、『チャッキドンポ』が称える2つの功德について考察を行う。この2つの功德という構図は〈無量寿宗要経〉にその萌芽が見られ、この点を主に検討する。

『チャッキドンポ』第2節内なる成就法 §2.8.1 には、〈無量寿宗要経〉に比定し得るダーラニーを讀誦することによって、『チャッキドンポ』を成就する者が得る功德 (*yon tan; guna*) が2点あげられている：

(1.) 遂に寿命が尽きる時に至っても (*tshe zad mtha' la thug pa yang*) 寿命が延び、寿命百歳が必ず叶うこと (*lo brgya nges par thub*)。必ずや三世諸佛の後嗣となること (*dus gsum rgyal ba'i gdung 'dzin nges*)。

(2.) 存命中に十波羅蜜、[五] 道 [十] 地を歩み (*pha rol phyin bcu sa lam bgrod*)、死後に極楽浄土に生まれること (*bde ba can gyi zhing du skye*)。

以上2点の功德は、〈無量寿宗要経〉中に説示される、同経を勤行することにより勤修者が得る2つ功德を色濃く反映しているものと想定される。以下に当該部分 (ApS\_t, §§14–15) を訳出し、その後、〈無量寿宗要経〉と『チャッキドンポ』との間の類同を、共通点と相違点とに分けて考察する。

*Aparimitāyuhṣūtra*, ApS\_t, §14≈ApS\_s, §12<sup>233</sup>

[仏世尊は舎衛国祇樹給孤独園において次のように説示された:]

「文殊師利よ！誰であれ、如来のこれら108個の名号を書写し、或いはまた[他人をしてこれらを]書写せしめ、或いはまた[これらを]書写して家に於いて経巻として受持し、或いはまた[これらを]讀誦する者は、彼らの寿命が尽きても、寿命百歳に至るであろう」

*Aparimitāyuhṣūtra*, ApS\_t, §15≈ApS\_s, §13<sup>234</sup>

<sup>233</sup> ApS\_t, §14: 'jam dpal/ de bzhin gshegs pa'i mtshan brgya rtsa brgyad po 'di dag gang la la zhig yi ger 'bri'am/ yi ger 'brir 'jug gam/ glegs bam la bris te khyim na 'chang ngam/ klog par gyur pa de'i tshe zad pa las tshe lo brgya thub par 'gyur te/

ApS\_s, §12: *idaṃ mañjuśrīṣ tathāgatasya nāmaṣṭottaraśatakaṃ ye kecil likhīṣyanti likhāpayīṣyanti, pustakagatam api kṛtvā gr̥he dhārayīṣyanti vācayīṣyanti te parikṣīṇāyusaḥ punar eva varṣaśatāyusaḥ bhaviṣyanti.*

ApS\_c1 (T 936.19.82a29): 世尊復告曼殊室利。如是如來一百八名號有自書。或使人書爲經卷受持讀誦。如壽命盡復滿百年壽。

ApS\_c2 (T 937.19.85b26): 妙吉祥菩薩。此無量壽決定光明王如來一百八名陀羅尼。若有人躬自書寫。或教他人書是陀羅尼。安置高樓之上。或殿堂內清淨之處。如法嚴飾種種供養。短命之人復得長壽滿足百歲。

<sup>234</sup> ApS\_t, §15: 'di nas shi 'phos nas kyang de bzhin gshegs pa tshe dpag tu med pa'i sangs rgyas kyi zhing 'jig rten gyi khams yon tan dpag tu med pa la sogs par skye bar 'gyur roll/

ApS\_s, §13: *itaś cyutvā aparamitāyusaḥ tathāgatasya buddhakṣetre upapadyante aparimitāyusaś ca bhaviṣyanti aparimitaguṇasaṃcaye lokadhātau.*

ApS\_c1 (T 936.19.82b2): 終此身後得往生無量福智世界無量壽淨土。

ApS\_c2 (T 937.19.85c1): 如是之人於後此處命終。便得往生於彼無量壽決定光明王如來佛刹無量功德藏世

「その後、[彼らは] 死しても、無量寿如来の仏土である無量功德聚という世界に生まれるであろう」。

<無量寿宗要経> は、仏世尊 (bCom-ldan-'das) が舎衛国祇樹給孤独園 (*dze ta'i tshal mgon med zas sbyin gyi kun dga' ra ba*) において為された説法を教示する經典であり、当該箇所は、文殊師利を対告衆として同経の勤行が齎す功德を説示する場面にあたる。誰であれ、「無量寿仏」或いは「無量智決定王」と呼び慣らさわれる如来の 108個の名号を (1.) 書写し、或いはまた (2.) 他人をしてこれらを書写せしめ、或いはまた (3.) これらを書写し、家に於いて経巻として受持し、或いはまた (4.) これらを読誦する者は、寿命が尽きても、彼らの寿命は百歳に至るものとされる。その結果、彼らは死しても、無量寿如来の仏土である無量功德聚という界境に生まれるものと説示される。

### 2.8.1. 功德に関する <無量寿宗要経> と『チャッキドンポ』との間の共通点

勤修者に齎らされる功德について <無量寿宗要経> と長寿成就法『チャッキドンポ』を比較すると、文言は相違するものの (この点は次項で考察する)、その趣意として次の 2つの共通点が知られる。

(1.) 寿命が尽きても、寿命百歳に至ること。

ApS\_t, §14: *tshe zad pa las tshe lo brgya thub par 'gyur te/*

CD §2.8.1: *tshe zad mtha' la thug pa yang: 'di bsgrub lo brgya nges par thub:*

(2.) 結果的に、「無量寿如来の仏土である無量功德聚という世界」或いは「極楽 [浄土]」に往生すること。

ApS\_t, §15: *de bzhin gshegs pa tshe dpag tu med pa'i sangs rgyas kyi zhing 'jig rten gyi kham yon tan dpag tu med pa la sogs par skye bar 'gyur rol//*

CD §2.8.1: *bde ba can gyi zhing du skye:*

(1.) の点に見出される「寿命百歳に至ること」とは、後にヴェーダ文献と仏教文献とを徴して考察を試みるが、先んじていえば、百年という長さの人生を横災なく無事「全うすること」を意図するものと考えられる。『チャッキドンポ』では、この慶賀すべき百年という長寿が、勤修者の存命中(「生/中有/死」の中の「生」の期間)に彼らをして十波羅蜜、五道十地を経過する可能性を高める有暇と見做され、これが極楽浄土往生の前提となっている。<無量寿宗要経> の経末は、六波羅蜜による人獅子の成仏 (*sangs rgyas yang dag 'phags; samudgata buddho*) を讃える偈文によって結ばれており (ApS\_t, §§79–84), <sup>235</sup> これらの経過に観待して成仏することの重要性も、<無量寿宗要経>

界之中。

<sup>235</sup> *Aparimitāyurjñānasūtra*, ApS\_t, §79: *sbyin pa'i stobs kyis sangs rgyas yang dag 'phags// mi yi sengge sbyin pa'i stobs rtogs te// snying rje can gyi grong khyer 'jug pa na// sbyin pa'i stobs kyi sgra ni grags par 'gyur// [...§84] shes rab stobs kyis sangs rgyas yang dag 'phags// mi yi sengge shes rab stobs rtogs te// snying rje can gyi grong khyer 'jug pa na//*

と『チャッキドンポ』との間で共通する。

(2.)の点は、百年という長さの人生を横災なく無事全うした後に、仏に関わる土地(zhing)<sup>236</sup>に往生することを説く点で共通する。しかし、具体的な名称は「無量寿如来の仏土である無量功德聚という世界」(ApS\_t, §15)と「極楽[浄]土」(CD §2.8.1)との間で相違する。

## 2.8.2. 功德に関する〈無量寿宗要経〉と『チャッキドンポ』との間の相違点

勤修者に齎らされる功德について〈無量寿宗要経〉と長寿成就法『チャッキドンポ』との間の相違点は、3点看取される。

第1の相違点は、上に少しく指摘したように、百年という長さの人生を横災なく無事全うした後に、勤修者が「生まれる」(skye; upa-√pad)<sup>237</sup>土地にある。この点は、第2.9章(〈無量寿宗要経〉に比定されるダーラニー)において考察したように、〈無量寿宗要経〉が有するリセンションの相違を多分に考慮する必要があろう。〈無量寿宗要経〉中の別箇所(ApS\_t, §57)には、しかし、本経を書写し、他人をして書写せしめる者は「無量光如来の仏刹である極楽という界境」(de bzhin gshegs pa 'od dpag tu med pa'i sangs rgyas kyi zhing 'jig rten gyi khams bde ba can)に生まれるであろうとも説示されている。<sup>238</sup>従って、この箇所(ApS\_t, §57)を引けば、勤修者が「生まれる」土地に関して、「極楽[浄]土」(CD §2.8.1: bde ba can gyi zhing)との間に類似点が見出し得る。当該の土地は、両文脈から判断して、輪廻からの涅槃(nirvāṇa)、即ち、無上なる完全なさと(正等覚)から不退転である界境を意図するものと考えられる。

第2の相違点は、〈無量寿宗要経〉に見られる「死しても」(shi 'phos nas kyang)という文言に関係する。死後に極楽浄土に往生するという内容は『チャッキドンポ』の当該箇所には見られない。ただし、前後関係からみて、これを死後の往生であると〈無量寿宗要経〉と等しく解釈することも、妥当な想定範囲であろう。

第3の相違点は、2つの功德を得るための行為についてである。〈無量寿宗要経〉では、ダーラニーの(1.)書写、(2.)他人をして書写せしめること、(3.)経巻としての受持、(4.)読誦(klog pa)という4点の徳目があげられているが、『チャッキドンポ』では、ダーラニーを現然たる三昧により繰り返し読誦すること(bzla)一点に絞られている。上の2つの相違点は、大筋においては、〈無量寿宗要経〉と『チャッキドンポ』との共通点に加え得る可能性を残している。しかし、第3の相違点、即ち、『チャッキドンポ』においては、

shes rab stobs kyi sgra ni grags par 'gyur//

<sup>236</sup> Mvy, nos. 3065: buddhakṣetramsangs rgyas kyi zhing; 5291: kṣetram/zhing.

<sup>237</sup> 極楽浄土への「往生」をあらわすサンスクリット語については、FUJITA (藤田) 1970:519, 522nn1-7に〈無量寿経〉と〈阿弥陀経〉に基づく3種類の語、即ち——(1.) ud-√pad, (2.) upa-√pad, (3.) prati-ā-√jan——が検証されている。〈無量寿宗要経〉では、この内の(2.) upa-√pad が使用されていることが注意されよう。

<sup>238</sup> Aparimitāyurjñānasūtra, ApS\_t, §57: gang zhing tshe dpag tu med pa'i mdo sde 'di yi ger 'bri'am/ yi ger 'brir 'jug na/ de de bzhin gshegs pa 'od dpag tu med pa'i sangs rgyas kyi zhing 'jig rten gyi khams bde ba can du skye bar 'gyur ro.

ダーラニーの書写やそれを経巻にして受持することはことほごきように重要視されず、それを読誦し、現然たる三昧に入ることの方に傾注されていることは、長寿成就法である『チャッキドンポ』の一つの特徴として提出されてよいであろう。

### 2.8.3. ヴェーダ文献における寿命百歳の位置付け

人間の寿命を百年とする観念の淵源がヴェーダ文献中に、仏教文献に先行して、認められることは、諸学者によって指摘されてきた。例えば、SCHULZE 1966 は、人間の妊娠期間が十ヶ月であることと寿命が百年であることをインド・ヨーロッパ祖語の思想史上に位置付けて論じている。<sup>239</sup> ここで注意すべきは、WHITE 1996 が考察しているように、ヴェーダ文献中に「寿命百歳は不死に等しく」(‘a hundred years is tantamount to immortality’, p. 10) 扱われる、ということであろう。<sup>240</sup>

長寿成就法との関連では、TOGANŌ (梅尾) 1931 が、‘佛教特有の延命法’ (p. 3f.) 或いは‘陀羅尼’ (e.g. 不空譯『佛說一切如來金剛壽命陀羅尼經』T 1135) を‘吠陀時代に於ける延命法’ 或いは‘呪文’ (e.g. AV IV 9.1–10, V 4.1–10) の発展上に、護身用等と条件付けて論じている。<sup>241</sup> こうした呪文の用例は極めて多いが、仏教の説く長寿成就法がヴェーダ文献中に確立された寿命百歳という観念を受け継いだ可能性を考察する僅少な一契機として、次に一呪文の翻訳を試みたい。この呪文 (AV III 11) は、<sup>242</sup> TSUJI (辻) 1979 が『アタ

<sup>239</sup> See SCHULZE 1966:131–148 (‘Der Tod des Kambyses’ in 1912), i.a. p. 148: ‘Die 10 (Mond-)Monate der Schwangerschaft hat der Indogermane früh der Natur nachgerechnet, die 100 Jahre aber des menschlichen Lebens seinen eigenen Wünschen—der *mortalis animi spes avida, quae subinde, quid rerum natura sit, obliviscitur* Seneca ad Polyb. 10,5—entnommen, die noch gleich weit entfernt waren von der Weisheit des 90’.

<sup>240</sup> See WHITE 1996:10: ‘In addition to fulfilling to the more or less mundane aspirations of the brahmanic sacrificer—wealth in cows, faithful wives, sons, etc.—the principal fruit of the sacrifice was a mitigated immortality for a “full life span” (*viśvāyus*) of one hundred years. Therefore, in order to live a full life, one had to sacrifice constantly, “for a hundred years is tantamount to immortality.”’. See also EINOŌ 2005:117–118: ‘[...] the concept of overcoming death is closely related with immortality (*amṛtatva*), and the immortality usually means the life of one hundred years or to live full duration of life’, SUGIKI (杉木) 2011:208: ‘100 年の寿命を地上にて全うすることが人の理想であり、これを以って人の“不死”とするのである。[...] 地上の人は天界の神々へ神酒ソーマを捧げることにより、天界の神々は「死ぬことのない」という“不死”を得て、地上の人は「100 歳の長寿」という“不死”を得る’.

<sup>241</sup> See TOGANŌ (梅尾) 1931:3: ‘[...] 吠陀の延命法と密教のそれとの間には一脈の相通する所がある’, *ibid.*:10: ‘[...] 思ふに阿闍婆吠陀 (*atharva-veda*) の呪文などを以て、たゞ一概に迷信なりとしてそれを排斥するよりも、却つてこれを攝取し、この呪文の形式を通じて佛陀の教法に渉入し得る様に淨化し引入することが必要であつたに違ひない。さればこそ『十誦律』第四十六、並に『四分律』第二十七等に説ける如くに、治齒咒、腹痛咒、治毒咒等の善咒は護身のための故に害なしとして、これを佛陀が黙認するに至つたと同時に、更に進みては、阿闍婆吠陀等に於ける呪文の形式に模し、謂ゆる巴利經典に於けるパリタ (*parita*) の如きものも出来、惹いては佛教特有の呪文に基く延命法の如きも成立するに至つたのである’.

<sup>242</sup> As translated into English in WHITNEY 1905:vol. 1, pp. 103–104, and into Japanese in TSUJI (辻) 1979:67–69 (長寿と健康とを得るための呪文). AV III 11.1–4 が RV X 161.1–4 に比定し得ることについて、TSUJI (辻) 1979 は、‘この讃歌の vv. 1–4 は僅少の差異をもって、R I.161.1–4 に相応する’ と注記しているが (69n1), 『リグ・ヴェーダ』の正しい対応箇所は、恐らく RV X 161.1–4 であろう。See RV, vol. 7, pp. 3861–3862. See also BLOOMFIELD 1964 s.v. *muñcāmi tvā haviṣā jīvanāya kam* (p. 718): ‘RV.10.161.1’;

ルヴァ・ヴェータ』(Atharvaveda)における‘息災・長寿法 (āyusya)’ (p. 67) として整理、収録した、寿命百歳を全うする為の呪文として知られる。

Atharvaveda(-Samhitā), III 11<sup>243</sup>

(V. 1) 私は [汝 (被呪法者) を] 生きさせるために、供物によって、未知の疾病や労咳から、汝を解放する。

もしここで捕捉者 (未知の疾病や労咳) が当人 (被呪法者) を捕捉しているならば、インドラとアグニよ！彼 (捕捉者) より当人 (被呪法者) を解放せよ！

(V. 2) もし [彼 (被呪法者) の] 寿命が尽きても、或いはもし [彼が] 死んでしまっても、[或いはまた彼が] もし死の近くに導かれたとしても、私は彼 (被呪法者) をニルリティ [女神] の膝元より連れ戻す。

私は当人 (被呪法者) を百年の [寿命の] 為にいままきに解放した。

(V. 3) 私は千の目、百の勲し、百の寿命を伴う供物によって、当人 (被呪法者) をいままきに取り戻した。

インドラが当人 (被呪法者) を [百] 年間、あらゆる困難の彼岸に導くように。

(V. 4) 汝 (被呪法者) は [健康を] 増進しつつ生きよ、百秋の間、百冬の間、また百春の間。

インドラ、アグニ、サヴィトリ [神]、ブリハस्पティが、汝に (te) 百 [年の寿命] を [与えるように]、百 [年] の寿命を伴う供物によって、私は当人 (被呪法者) をいままきに取り戻した。

(V. 5) 進んで入りこめ、呼気と吸気よ。二頭の [荷] 役牛が困いに [入る] 如く。

他の死たちは遠くに去れ、他にも百あると人々が言っているところの。

AV.3.11.1<sup>a</sup>; 20.96.6<sup>b</sup>.

<sup>243</sup> Atharvaveda(-Samhitā), III.11 (AV III 11.1-4≈RV X 161.1-4):  
*muñcāmi tvā haviṣā jīvanāya kām ajñāṭayakṣmād utā rājayakṣmāt |*  
*grāhir jagrāha yādy etād enaṃ tāsyā indrāgnī prā mumuktam enam ||1||*  
*yādi kṣitāyur yādi vā pāreto yādi mṛtyōr antikāṃ nīta evā |*  
*tām ā harāmi nīrter upāsthād āspārṣam enaṃ satāsāradāya ||2||*  
*sahasrākṣeṇa satāvīryeṇa satāyusā haviṣāhārṣam enam |*  
*indro yāthainam śarādo nāyāty āti viśvasya duritāsya pārām ||3||*  
*satām jīva śarādo vārdhamānaḥ satām hemantām chatām u vasantām |*  
*satām te indro agniḥ savitā bṛhaspatih satāyusā haviṣāhārṣam enam ||4||*  
*prā viśataṃ prāṇāpānāv anaḍvāhāv iva vrajām |*  
*vy ānyē yantu mṛtyāvo yān āhūr itarām chatām ||5||*  
*ihāivā staṃ prāṇāpānau māpa gātām ito yuvām |*  
*śārīram asyāṅgāni jarāse vahataṃ pūnaḥ ||6||*  
*jarā tvā bhadrā neṣṭa vy ānyē yantu mṛtyāvo yān āhūr itarām chatām ||7||*  
*abhī tvā jarimāhita gām ukṣāṇam iva rājivā |*  
*yās tvā mṛtyūr abhyādhatta jāyamānaṃ supāsāyā |*  
*tām te satyāsya hāstābhyām úd amuñcad bṛhaspatih ||8||*

(V. 6) ここにこそあれ、呼気と吸気よ。汝ら両者は、ここより去ることなかれ。

[被呪法者が] 老齢に [達する] 為に、彼の身体 [と] 肢体を運び戻せ。

(V. 7) 私は汝 (被呪法者) を老齢に譲り渡す。私は汝を老齢に扇ぎ入れる。

幸福なる老齢が汝を導くがよい。他の死たちは遠くに去れ、他にも百あると人々が言っているところの。

(V. 8) 老齢は汝 (被呪法者) をいままさに自らのもとに置き定めた。恰も縄で若い牡牛を [自らのもとに置き定めた] ように。

[汝が] 生まれつつある時、死がよき輪繩 (*supāsā*) によって汝を自らのもとに置き定めた。

ブリハスパティは、正しい汝の (*te satyāsya*) それ (死) を両手で解き放った。

被呪法者を生きさせるために供物を伴って謳われるこの呪文は、百年という長さの人生において、被呪法者が種々様々な未知の疾病や労咳を患い、その途中で寿命が尽きても、或いは死んでしまっても、或いはまた死の近くに導かれたとしても、彼／彼女を破滅の女神であるニルリティ (*Nirṛti*)<sup>244</sup> の膝元より連れ戻すものである。被呪法者は、その結果、百年という寿命を全うするといわれる。この呪文は、被呪法者に不死、即ち、死なないこと、を無限に与えるものではないが、百年という長さの人生に限っては、これを叶えるものといえる。これは、換言すれば「寿命百歳を全うする間の不死」とも見做され、長寿成就法としてこれを希求することは決して特異な説ではない。仏教の説く長寿成就法がヴェーダ文献中に確立された寿命百歳という観念を受け継いだ可能性をここに指摘し得よう。<sup>245</sup>

この「寿命百歳」という観念は、『チャッキドンポ』においては、勤修者が得る功德、具体的には、「[<無量寿宗要經>に比定し得るダーラニーを讀誦し、]これ(長寿成就法『チャッキドンポ』)を成就する[者]は、遂に寿命が尽きる[時に]至っても[寿命が延び、寿命]百歳が必ずや叶うであろう」 (§2.8.1: *tshe zad mtha' la thug pa yang: 'di bsgrub lo brgya nges par thub*) とされる功德として讃えられる。この慶賀すべき百年という長寿は、勤修者の存命中に彼らをして十波羅蜜、五道十地を経過する可能性を高める有暇と見做され、これが極楽浄土往生の前提となっている。上来、インド・ヨーロッパ祖語の一般思想に眼を向け、その中に人間の寿命を百年とし、これを不死に等しく扱う観念が既に胚胎されていることを検討した。ただし、注意すべきは、仏教の説く長寿成就法における「寿命百歳」という観念は、「生／中有／死」等に分けた場合の「生」の期間に

<sup>244</sup> See 『梵和』 s.v. *nirṛti* (p. 686): '(生命の離れ去ること), 解消, 分解, 破壊, 災害, 腐敗; 死の女神 (西南の守護者)'.

<sup>245</sup> 仏典における寿命百歳を希求する呪文が「ヴェーダ聖典の影響下にあった」(p. 459) と考えられることは、ŌTSUKA (大塚) 2013 が、次の用例を挙げて考察している。

『大金色孔雀王呪經』(T 986)における「擁護某甲令壽百歳得見百秋」(19.478b27)

『佛說六字呪王經』(T 1044)における「以此眞實章句。使某甲晝安夜安晝夜常安得壽百歳得見百秋」(20.38c7-9)

闍那崛多譯『東方最勝燈王如來經』(T 1354)における「彼等護汝命, 願汝壽百秋」(21.871b2)

ŌTSUKA (大塚) 2013 には、上に試訳を提出した AV III 11.2-4 と RV X 161.4 の Tsuji (辻) 訳も参照されている (p. 459)。

過ぎない、ということであろう。<sup>246</sup> この有暇の期間に極楽浄土往生を目指すことを説く仏教の長寿成就法は、その萌芽が古くヴェーダ文献に遡求し得るとは言いながら、その思想的基盤はヴェーダ文献中のそれと根本的に異なるものである。

寿命百歳という観念は、インド・ヨーロッパ祖語以来の流れに位置付けられるが、仏教の長寿成就法に至っては、その流れの中で新しい展開を示した点のあることが知られる。チベットの長寿成就法の形成と展開を考究するに当たっては、こうした点の他、人間の生死を司る聖なる存在 (e.g. Nirṛti) に長寿を祈念する理や、呪文に関わる個々の行作についても、‘インド・ヨーロッパ祖語以来の伝統’ (Goto (後藤) 2009:41n53) が、インドの後期密教を遡るかたちで考慮されるべきであろう。<sup>247</sup> 今後の吟味を待ちたい。

#### 2.8.4. 仏教文献における寿命百歳の位置付け

以上において、ヴェーダ文献における人間の寿命の位置付けを寿命百歳という所論に絞って短く考察した。仏教文献においては、ではこれがどのように位置付けられるのか、という重要な問題が残っている。この問題を取り扱うのに十分といえる資料は、まさに無量に見積られるであろう。しかし、本論文はこの点について浩瀚な考察を試みるものではない。仏教文献における人間の寿命の位置付けは、例えば、〈俱舍論〉第3章世間品 (Loka-nirdeśa) が衆生の寿 (*āyus*) の量 (*parimāṇa*) を善趣と悪趣とに区別して説く所論が広く知られているが、<sup>248</sup> 寿命百歳という所論に絞った考察は、〈無量寿宗要経〉に関する研究を徴してみても、管見に触れた限り見出し得ない。については、下記に5点の仏典をあげ、少しく考察してみたい。

(1.) 『ダンマパダ』 (*Dhammapada*) 第8章千の章 (*Sahassa-vagga*) には、百年を長命の比喻として「[徒らに] 百年生きるより (*yo ca vassasataṃ jīve*) [... 仏法に則って] 一日生きるがよい (*ekāhaṃ jīvitam seyyo*)」 (vv. 110–115) という趣旨の6つの詩頌が見在する。<sup>249</sup>

<sup>246</sup> ヴェーダ文献における、死後に生まれ変わった天界での寿命については、Goto (後藤) 2009 が比較参照される (pp. 25–26)。

<sup>247</sup> 例えば、讃歌の伝統的な使用法については、BLOOMFIELD 1897:341f. が比較参照されよう。当該の参照文献については、後藤敏文名誉教授 (東北大学) よりご教示を賜った。ここに記して感謝申し上げたい。

<sup>248</sup> *Abhidharmakośa*, 3.78. For an English translation, see LODRÖ SANGPO 2012:v. 2, p. 1080, and for Japanese, see YAMAGUCHI/FUNABASHI (山口/舟橋) 1955:431f.

<sup>249</sup> *Dhammapada*, vv. 110–115:

*yo ca vassasataṃ jīve dussīlo asamāhito*  
*ekāhaṃ jīvitam seyyo sīlavantassa jhāyino.* [v. 110]  
*yo ca vassasataṃ jīve duppañño asamāhito*  
*ekāhaṃ jīvitam seyyo paññāvantassa jhāyino.* [v. 111]  
*yo ca vassasataṃ jīve kusīto hīnavīriyo*  
*ekāhaṃ jīvitam seyyo viriyam ārabhato dalham.* [v. 112]  
*yo ca vassasataṃ jīve apassaṃ udayavyayaṃ*  
*ekāhaṃ jīvitam seyyo passato udayavyayaṃ.* [v. 113]  
*yo ca vassasataṃ jīve apassaṃ amataṃ padaṃ*  
*ekāhaṃ jīvitam seyyo passato amataṃ padaṃ.* [v. 114]  
*yo ca vassasataṃ jīve apassaṃ dhammam uttamam*

(2.) 『スッタニパータ』 (*Sutta Nipāta*) 第4章八 [詩頌] の章 (*Atthaka-vagga*) では、百歳程の人間の寿命は、神々の寿命に比して<sup>250</sup>「短い」 (*appa*) ものと説示されている (no. 804 in Ch. IV. 6. *Jarāsutta*, 1)。<sup>251</sup> 百歳という人間の寿命は、しかし、続く「万が一 (*yo ce pi*) [これ (百歳) を] 超過して生きたとしても」という後文から、人間にあつては類い稀な長命の比喩として理解されよう。

(3.) 彌陀山譯『無垢浄光大陀羅尼經』 (T 1024) には、無垢浄光大陀羅尼 (*\*ārya-raśmi-vimalaviśuddhaprabhā-nāma-dhāraṇī*) を念誦すると、寿命百歳が叶い、死後は極樂世界に生まれるものとされる。<sup>252</sup>

(4.) <菩薩地> 菩提分品 (*Bodhipakṣya-paṭala*) には、五濁 (*pañca kaṣāyāḥ*) の第一、命濁 (*āyuṣkaṣāya*) として、末世の今は人間の寿命が短く、寿命百歳を超えることがない、という説示が見られる。<sup>253</sup>

*ekāhaṃ jīvitaṃ seyyo passato dhammam uttamam.* [v. 115]

「破戒し、不寂靜な [状態で] 百年生きるより

持戒し、禪定ある [状態で] 一日生きるがよい。 [v. 110]

智慧無く、不寂靜な [状態で] 百年生きるより

智慧を有し、禪定ある [状態で] 一日生きるがよい。 [v. 111]

怠惰で、不精進な [状態で] 百年生きるより

堅固に勤精進した [状態で] 一日生きるがよい。 [v. 112]

生滅を見ずに百年生きるより

生滅を見た [状態で] 一日生きるがよい。 [v. 113]

不死の境地を (*amataṃ padaṃ*) 見ずに百年生きるより

不死の境地を見た [状態で] 一日生きるがよい。 [v. 114]

無上の法を見ずに百年生きるより

無上の法を見た [状態で] 一日生きるがよい。 [v. 115]

For an English translation from the Pali original, see NORMAN 2004:17, and for a Japanese translation from the Pali original, see KATAYAMA (片山) 2009:160–169.

<sup>250</sup> See BHIKKHU BODHI 2017:1078: ‘[...] and so too when human life is compared to the life of the other devas up to those in the company of Brahmā’.

<sup>251</sup> *Sutta Nipāta*, no. 804 in Ch. IV. 6. *Jarāsutta*, 1:  
*appaṃ vata jīvitaṃ idaṃ, oraṃ vassasatā pi miyyati,*  
*yo ce pi aticca jīvati, atha kho so jarasā pi miyyati.*

「この [人] 生 (*jīvita*) の何と (*vata*) 短いことか。 [人は] 百年以内に死ぬのだ。

万が一 [百年を] 超過して生きたとしても、さりとて、 [人は] 老いによって、結局死ぬ。」

For an English translation from the Pali original, see BHIKKHU BODHI 2017:1077–1078, and for Japanese translations from the Pali original, see MAETANI (前谷) 2010:52, ARAMAKI/HONJO/ENOMOTO (荒牧/本庄/榎本) 2015:215.

<sup>252</sup> 彌陀山譯『無垢浄光大陀羅尼經』 (T 1024.19.718c11): 誦念此呪満足百年。是人命終生極樂界。

Cf. ‘*Phags pa ’od zer dri ma med pa rnam par dag pa’i ’od ces bya ba’i gzungs* (*\*Ārya-raśmivimala-viśuddhaprabhā-nāma-dhāraṇī*), D 510, rGyud, na 25b1–35b3; P 218, rGyud, pha 281a8–292a3 (vol.7, p. 188). See TAKATA (高田) 1978:194.

<sup>253</sup> *Bodhisattvabhūmi*, BBh\_s1 172,25; BBh\_s2 252,15: *punaḥ sattvalokasyaiva kaṣāyotsadakālatāṇ* [°*kālatāṇ* s1] °*kālatāṃ* s2] *ca yathābhūtaṃ prajānāti niṣkaṣāyānutsadakaṣāyakālatāṇ* [°*kālatāṇ* s1] °*kālatāṃ* s2] *ca. yad uta pañcakaṣāyān* [°*pañca* s1] *pañca* ° s2] *ārabhya āyuṣkaṣāyaṃ sattvakaṣāyaṃ* [°*sattvakaṣāyaṃ*



(5.) 仏音 (Buddhaghoṣa. 5 c.) の主著と伝わる『清浄道論』(Visuddhimagga) 第8章随念業処の解釈 (Anussatikammaṭṭhānaniddeso) には, 今日の人々の (ajjatanakālapurisānaṃ) 「寿命が尽きることによる死」(āyukkhayena maraṇa) の解説として, 「百年程の長さの寿命」(vassasatamattaparimāṇassa āyuno) という, 人間の寿命 (āyu) に関する記述が見られる。<sup>254</sup>

以上の教説は, 各仏典の多様な文脈中にあり, 一概にこれを纏めることは困難である。しかし, 人間の寿命百歳が短寿の意味で用いられる用例が見出し得ない限り, これが長寿の意味で用いられていることは諷示されよう。このように想定した場合は, <無量寿宗要経>, 引いては『チャッキドンポ』がその功德にあげる寿命百歳も, 古くはヴェーダ文献から展延したものであるとも見做し得る。「阿彌陀佛」の起源についての詳細な研究で知られる FUJITA (藤田) 1970 は, FILLIOZAT 1953 が Amitāyus に与えた “Longévitie infinie” (§2331, s.v. Amitābha (t. 2, p. 569)) という解釈を継承し, longévitie に「寿命」という訳語を与えて, 彼の論を展開している。<sup>255</sup> 「時間」ではなく「寿命」をあらわすものとされる āyus/tshe を考えれば, Amitāyus/Amitābha という尊格は確かに百年という時間も遙かに超越したものであろう。彼の尊格と繋がり, その相続に与ることが, 人にとっての長寿成就法であると考えられる。

s2] [sattvakaṣāyaṃ] s1] kleśakaṣāyaṃ dr̥ṣṭīkaṣāyaṃ kalpakaṣāyaṃ [°kaṣāyaṃ s1] °kaṣāyaṃ s2]. tad yathā etarhy alpam̐ jīvitam̐ manuṣyānām̐ yaś ciram̐ jīvati sa varṣasatam̐ [°satam̐ s1] °satam̐ s2].

「さらに (punaḥ) [菩薩は, ] 有情世間の濁れ (kaṣāyaḥ) が増えている時 (utsadakālatā) を如實に (yathābhūtam̐) 知る (prajānāti)。また (ca), [有情世間が] 濁れを離れて (niṣkaṣāya), 濁れが減じている時 (anutsada-kaṣāya-kālatāñ) も [如實に知る]。即ち (yad uta), [彼/彼女は, 1.] 命濁 (āyuṣkaṣāya) に始まる (ārabhya) [2.] 有情濁 (sattvakaṣāya), [3.] 煩惱濁 (kleśakaṣāya), [4.] 見濁 (dr̥ṣṭīkaṣāya), [5.] 劫濁 (kalpakaṣāya) [という] 五濁を (pañcakaṣāyān) [如實に知る]。例えば (tad yathā), 今時の (etarhy) 人趣における (manuṣyānām̐) 短壽 (alpam̐ jīvitam̐) のように, 長く (ciram̐) 生きたところで (jīvati < jīvat) [せいぜい] 百年 (varṣasatam̐) [程の寿命] である。」

Cf. BBh\_c, T 1581.30.928c20: 復次於衆生世間濁世増時。如實了知離濁世増時。亦如實知。所謂五濁。一曰命濁。二曰衆生濁。三曰煩惱濁。四曰見濁。五曰劫濁。謂今世短壽人極壽百歲。是名命濁。

For an English translation from the Sanskrit original with reference to the Tibetan translation and commentaries, see ENGLE 2016:419. See also BHSD, s.v. anutsada (p. 27).

<sup>254</sup> Visuddhimagga, Ch. VIII. 1. Maraṇasati (229,20): yaṃ gatikālāhārādisampattiyā abhāvena ajjatanakālapurisānaṃ viya vassasatamattaparimāṇassa āyuno khayavasena maraṇam̐ hoti.—idam̐ āyukkhayena maraṇam̐ nāma.

「今日の人々のように, [善] 趣 (gati), [長い] 時間 (kāla), 栄養 (āhāra) 等々を得られず, 百年程の長さの寿命 (āyu) について寿命が尽きることによる死があるなら, これを「寿命が尽きることによる死」(āyukkhayena maraṇa) というのである。」

For an English translation from the Pali original, see TIN 1923 (1971):264, and for a Japanese translation from the Pali original, see ISHIGURO (石黒) 1936:404, 405n6, MAETANI (前谷) 2010:54.

<sup>255</sup> FUJITA (藤田) 1970:275: ‘すでにフィリオザも注意しているように, Amitāyus の āyus は「時間」(temps) ではなく, 「寿命」(‘longévitie’) をあらわすから’.

## 2.9. <無量寿宗要経> に比定されるダーラニー

長寿成就法と関連が深い<無量寿宗要経>は、先行研究が明らかにしてきたように、サンスクリット原文がアジアの諸言語(コータン語, チベット語, 漢語, 満州語, 西夏語, ウイグル語, モンゴル語)の他, ラテン語にも訳出されていることで知られ,<sup>256</sup> 経中に書写の功德が讃嘆される事由を裏付けるように, 鴻大な量の写本が遺されている。<sup>257</sup> <無量寿宗要経>に関する筆者の論究は, 具体的には, 『チャッキドンポ』がその第2節内なる成就法「チャッキドンポ」 (§2.4.2) において導入するダーラニー (Skt. *dhāraṇī*; Tib. *sngags*) が, 当該経典中に説示されるダーラニーに比定されるものだとする点を焦点とする。この点からすれば, まず<無量寿宗要経>が持つ複雑な性格を確認し, その上で『チャッキドンポ』がこれを引用するに至った経緯について考察をすすめるという手順が, 妥当といえるであろう。

### 2.9.1. 翻訳系譜

まず<無量寿宗要経>の翻訳系譜, リセンション間の変遷を, MIMAKI (御牧) 1984 に提出された表に基づき,<sup>258</sup> 確認する。

表7: MIMAKI (御牧) 1984 に提出された表に基づく<無量寿宗要経>の翻訳系譜

サンスクリット原文	→ コータン語 → チベット語 → 漢語 (法成訳 T 936) → 満州語 (a) → 西夏語 → ウイグル語 → モンゴル語
?	→ 漢語 (法天訳 T 937) → 満州語 (b)

<無量寿宗要経>のチベット語訳に関し, 上の表7によって知られることは, これが (1.) サンスクリット原文からの直訳であると想定されること, (2.) 漢訳を参照する場合には, 法成訳 (T 936) が第一に用いられるべきこと, の2点である。以下に, サンスクリット原文, 漢訳, チベット語訳の順序で確認する。

### 2.9.2. サンスクリット原典

<無量寿宗要経>のサンスクリット語写本は, TSUKAMOTO/MATSUNAGA/ISODA (塚本/松長/

<sup>256</sup> E.g. FUJIEDA/UEYAMA (藤枝/上山) 1962:345: ‘とくに今世紀に入つての中央アジア探検の結果, これのラテン語, ウイグル語訳本や, チベット語, シナ語の古訳本が発見せられて, 学界を賑わせた。敦煌石室本中には, これのシナ・チベット両訳本が目立つて多数に含まれる’。

<sup>257</sup> 写本の数量, 即ち, 本数の勘定方法については, 周知の如く異説が多く, これを収録する目録の参照番号に従って勘定する場合, 特に注意が必要である。例えば, 『LVP目録』では単に「310」という番号で参照されていた<無量寿宗要経>の写本については, VAN SCHAİK 2007 が注意を促しているように, 2001年に「IOL Tib J 310.1」から「IOL Tib J 310.1207」までに「細分化される」(‘subdivided’)という変化が見られる。

<sup>258</sup> MIMAKI (御牧) 1984:168.

磯田) 1989 に、所作類 (Bya-ba; Kriyā) の蓮華部族 (Padma'i-rigs; Padmakula) に属する 'Aparimitāyur nāma mahāyānasūtra' (p. 120) として、ネパール写本が約80本あげられている。<sup>259</sup> この本数は、しかし、時間的経過と共に常に増加しつつあるものと見做すのが自然であろう。ネパール写本の年代は、貝葉と紙葉とで当然異なるが、NGMPP/NGMPP が公開しているデータを参照すれば、大概において貝葉は11-17世紀を、紙葉は16世紀以降を、それぞれ中心とするものと考えられる。周知のように、前者の最古例としては5世紀に遡り得る <十地経 (Daśabhūmikasūtra)> が知られるが、<sup>260</sup> ネパール写本一般としては、上記年代をもとに、これが、7世紀を中心とするものと想定されるギルギット写本の年代よりは<sup>261</sup> 年代が降るものと見做し得る。

ギルギット写本中に <無量寿宗要経> に比定し得る一断片 (GBM, pt. 10, plate no. 3366) が含まれていることは、von HINÜBER 2014 によって指摘された注目すべき研究成果である。<sup>262</sup> 当該の断片には、そこに提出されたテキスト中に確認し得るように (von

<sup>259</sup> TSUKAMOTO/MATSUNAGA/ISODA (塚本/松長/磯田) 1989:120-123.

<無量寿宗要経> のサンスクリット語タイトルは、この他、サンスクリット原文の諸エディション中に相違する (see 表8)。

表8: 諸エディション中に見られる <無量寿宗要経> のサンスクリット語タイトルの一覧

No.	タイトル	コロフォン
1. IKEDA (池田) 1916	551,1: Aparimitāyurdhāraṇīsūtram.	557,18: Ārya Aparimitāyurnāma Dhāraṇī samāptam.
2. KONOW 1916	-	-
3. WALLESER 1916	21,6: ārya-aparimitāyur-(jñāna-)nāma-mahāyāna-sūtram.	25,26: āryya-aparimitāyur-nāma-mahāyāna-sūtram samāptam. 25n37: Msc. Calc. [sic]: āryyāparimitāyur-nāma-dhāraṇī-samāptā, tib. = āryyāparimitāyur-nāma-mahāyāna-sūtram samāptam.
4. DUAN 1992	[132],2: Aparimitāyuh-Sūtra.	138,38: āryya-aparimitāyur-nāma-mahāyāna-sūtram samāptam.

大乘経典のサンスクリット語タイトルは、YONEZAWA (米澤) 2012 の論考に見られるように、「~ nāma mahāyānasūtram」に代表されるような表現であり、~sūtra- という sūtra- を複合語の後分とする経題はその略称であったと考えられる。その略題は、正式な経題より後に成立して、固有名詞として用いられるようになったと考えるべきであろう (p. 99) とされる。<無量寿宗要経> のサンスクリット語タイトルとしては、TSUN (辻) 1974 にあげられた 'しばしば題目・表題として使用される' (p. 267) 主格の用例を敷衍するならば、従って、'Aparimitāyur nāma mahāyānasūtram' (『Aparimitāyus と呼称される大乘経典』) という一フレーズが妥当なタイトルとしてあげられよう。なお付言するならば、<大乘集菩薩學論> (Śikṣāsamuccaya) に <無量寿宗要経> は見在しない。

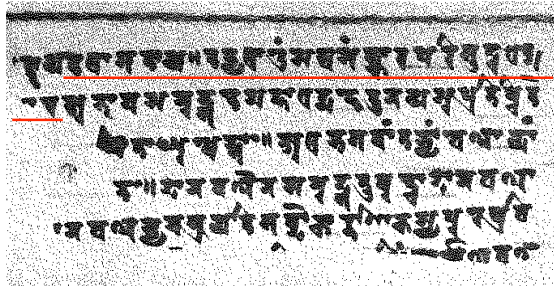
<sup>260</sup> See MATSUDA 1996:xvi-xviii; HARIMOTO 2011:93-95.

<sup>261</sup> See von HINÜBER 1986/1987:226: 'a highly important date marking the turning point in the history of script in the North West: about 620-630 proto-sāradā superseded the older round script'.

<sup>262</sup> See von HINÜBER 2014:111: 'No. 61b: (Aparimitāyuh-sūtra?) Page 3366: 1 fragmentary folio contains a text partly similar to the Aparimitāyuh-sūtra'.

HINÜBER 2014:111), 長寿成就法『チャッキドンポ』が §2.4.2 において導入するダーラニー (*sngags*) と部分的な重複が看取される。下記図2に当該の断片とテキストを提示し、比較してみよう (重複する部分は、左方の断片については下線を引き、右方のテキストについてはグレー色を付して表示した)。<sup>263</sup>

図2: <無量寿宗要経> に比定されるギルギット写本の一断片  
(GBM, pt. 10, plate no. 3366≈ApS\_s, §75f.)



[l. 1] + *jñāya tathāgatāya || tad yathā om sarvasaṃskārapariśuddhadharma* [l. 2] [*te gaṇasamudga*](*te*) *abhāvasamudgate mahādharma* *hetunayasupratīṣṭhite* [l. 3] [+ + + + *apari*]*mitāyuse svā{hā} || atha bhagavāms tasyāṃ velāyāṃ* [l. 4] [*imāṃ gāthāṃ abhāsa*]*ta || dānavalena samudgatu vuddho dāvalā* [l. 5] [*balādhigatā naraśiṃhāḥ d*](*ā*)*navalasya ca śrūyati śavdo kāruṇikasya pure pravi.*

上に提示した GBM, plate no. 3366 は、一面の一断片に過ぎない。<sup>264</sup> しかし、その第1行目から第2行目にかけて看取されるテキストは、確かに <無量寿宗要経> のダーラニー (ApS\_s, §11) に比定し得、ここに、『チャッキドンポ』が §2.4.2 において導入するダーラニー (*sngags*) との部分的な重複を見出し得る。なお、第3行目以降のテキストについて短く触れると、当該部分は経末に六波羅蜜を讃嘆する6つの詩頌の第一、布施 (*dāna*) 波羅蜜の説示にあたる。欠損が激しく、一概に ApS\_s 中に比定し難いが、経末という箇所からいって、当該のダーラニーは、経中に繰り返し説かれる中でも最後のダーラニー、即ち、ApS\_s, §75 に比定し得る可能性が高い。

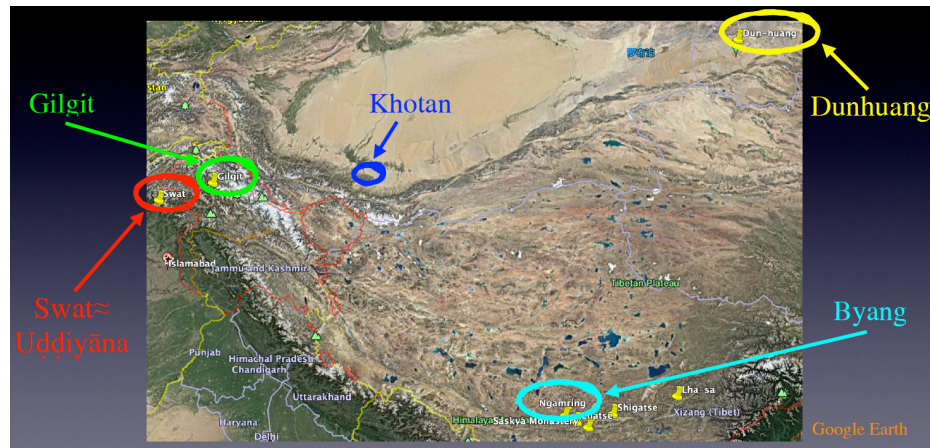
<無量寿宗要経> のチベット語訳がサンスクリット原文からの直訳であると想定されることは、先に確認したとおりである。ギルギット写本は、ネパール写本に比して、『チャッキドンポ』の埋蔵者とされるパドマサンバヴァの年代 (ca. 8世紀) に近く、また地理的にみても、下に図示するように (図3)、ほぼ同時期の吐蕃期敦煌 (786–848年)<sup>265</sup> に比して、パドマサンバヴァの生地と言い慣らわされるウッディヤーナ (ペシャワールの北、カシミールの西北西方向、現パキスタン領) に近い。

<sup>263</sup> 当該校訂テキストは、von HINÜBER 2014 に提出された校訂テキストを参照しつつ、筆者が提出するものであることを注記する。テキスト作成にあたり用いた記号法は、*Buddhist Manuscripts* による。von HINÜBER 2014 がテキスト校訂にあたり参照している DUAN 1992 は (see von HINÜBER 2014:111: ‘The gaps are filled according to the text provided in DUAN 1992: §11; 76–78’), 本論文においては「ApS\_s1」という略号をもって参照されるサンスクリット・テキストである。

<sup>264</sup> von HINÜBER 2014 は、その事由を「おそらくは樺皮の上層が剥がれ落ちたため」と推測している。See von HINÜBER 2014:111: ‘The reverse is blank, most likely because the upper layer of the birch bark peeled off’.

<sup>265</sup> IWA0 2012:102: ‘It is well known that, in Tibetan-ruled Dunhuang (786-848), the Tibetan authorities established a scriptorium that was ordered to copy various Buddhist texts written in both Tibetan and Chinese on behalf of the Tibetan king’.

図3: ウッディヤーナ, ギルギット, 敦煌, チャンの位置を示す地図



GBM, plate no. 3366 は一断片に過ぎないが、『チャッキドンポ』がその第2節内なる成就法「チャッキドンポ」 (§2.4.2) において導入するダーラニーと比較してみて、細部に異なる点はあるものの、骨子の一致が認められる。ここに、『チャッキドンポ』に引用されるダーラニーの原初形態が、ギルギット写本に見出される可能性が浮上する。その事由としては、パドマサンバヴァの生地と言い慣らわされるウッディヤーナとギルギットとが比較的近距离にあり、年代からみても、両者が近接する間柄にあることが挙げられよう。ウッディヤーナは、第2.4.2章(ウッディヤーナ語 (*o rgyan skad*)) で考察を試みたとおり、言語グループとしてもギルギットに比較的近く、「禁呪」即ち、ダーラニー (*dhāraṇī*) をよくしたことが、玄奘 (602–664) の『大唐西域記』を証左に知られる。当該のダーラニーがウッディヤーナに相承されていたことを『チャッキドンポ』を根拠に推測しても、客観的な承認を得るものとは思われないが、しかし、検討してみる価値はあろう。

### 2.9.3. 漢訳

<無量寿宗要経> の漢訳資料は、上の表7に確認したように、翻訳系譜の相違する2本、即ち——(1.) 法成訳『大乘無量壽經』(T 936) と、(2.) 法天訳『佛說大乘聖無量壽決定光明王如來陀羅尼經』(T 937)——という2本が、大蔵経中に何れも密教部 (vol. 19) に収録されて伝わる。ここに『大乘無量壽經』(T 936) の漢訳者として知られる法成が、チベット大蔵経中に『入楞伽經』(D 107; P 775) 等のチベット語訳者として知られるチュードゥプ ('Gos Chos-'grub. ca. 9c. BDRC#P8221) と同一人物であることは、PELLIOT 1914 に指摘されて久しい。<sup>266</sup> 法成 (Tib. 'Gos Chos-'grub. ca. 9c. BDRC#P8221) は、YAMAGUCHI (山口) 1980 によれば、漢人として生まれ、年少の頃より習得したチベット語を活用し、「漢訳仏典のチベット訳に従事していたもの」(p. 229) と見られる。<sup>267</sup> FUJIEDA (藤枝) 1961 によれ

<sup>266</sup> See PELLIOT 1914 142–143. See also UYAMA (上山) 2012:94: '[...] 法成訳の『八転声頌』とチュードゥプ訳のチベット文『八転声頌』とが、法成の『瑜伽師地論』の講義録に同時に登場する事実もあり、法成＝チュードゥプであることはまず間違いないことである'.

<sup>267</sup> YAMAGUCHI (山口) 1980:228–229: '吐蕃支配期の後半に現れる著名な人物に呉法成がいる。チベットでは 'Gos Chos grub として知られる訳経僧である。[...] 上山大峻が主張するように漢人であって幼時からチベット語を習得したものとする方が事情に合致する。[...] 吐蕃支配後期の漢人は既に見たようにチベット名を名乗ることが珍しくない。[...] おそらく沙州で漢訳仏典のチベット訳に従事していたものであろう'.

ば、「チベットのゴエ Hgos [sic] 寺の僧」(p. 269)であったが、所謂「ランダルマの破仏」によって迫害され、沙州に渡り、漢蔵両語に通曉した吐蕃の訳経僧として、その名を残すことになった。<sup>268</sup>『大乘無量壽經』(T 936)が<無量壽宗要經>のチベット語訳から彼が漢訳したものと想定される以上、何れも訳者不明として伝わる<無量壽宗要經>の3本のチベット語訳(D674/P366; D675/P367; D849/P479)に、或いは、その何れかに、法成が関わっている可能性は決して否定し得ないであろう。このような見方は、しかし、「三蔵法師」として知られた法成を推称して、彼が関わった訳出文献の数量を多く見積もる態度にうつるかもしれない。<sup>269</sup>

この『大乘無量壽經』は、敦煌写本によって大正蔵に編入されたことが知られるように、敦煌写本中には約900本という多量の<無量壽宗要經>の漢訳資料が確認されている。<sup>270</sup>その事由としては、YAMAGUCHI(山口)1980の論考に纏められているように、吐蕃期敦煌(786-848)、特にティツクデツェン王(Khri-gtsug-lde-brtsan, alias Ral-pa-can. 806-841. BDR#P2MS13218)の在位中(815-841)、その仏教優遇政策によって吐蕃本土の他、沙州においても寺院や僧尼の数が増大し、組織立った大規模な写経が「王や王族の繁栄祈願のために」(p. 231)漢文とチベット文の両文によって行われたという歴史的背景があげられる。<sup>271</sup>この写経事業は、FUJIEDA(藤枝)1961によると、「恐らく八世紀のうち始まったもの」と推定され、<sup>272</sup>具体的には、<大般若經>と共に<無量壽宗要經>がその大部を占めることが知られる。

この他、<無量壽宗要經>の漢訳資料は、日本古写経と言い慣らわされる12世紀後半の文献群中にも見出し得る。<無量壽宗要經>は、FUJIEDA/UEYAMA(藤枝/上山)1962によれば、「日本や中国本土では、あまり流行した形迹はない」(p. 345)<sup>273</sup>とされるのであるから、以下に取り扱う資料は、或いは注目に値いするかもしれない。名古屋市の七寺が所蔵する七寺一切経の内に伝わる『佛説大乘聖無量壽王經』<sup>274</sup>は、OTSUKA(大塚)2009が

<sup>268</sup> See FUJIEDA(藤枝)1961:269-270. See also UYAMA(上山)1963:337; UYAMA(上山)1990(2012):84-112,『中国仏教史辞典』s.v.法成(p. 348).

チベット大蔵経中に法成訳と伝わる經典としては、例えば、<賢愚經(mDzangs blun zhes bya ba'i mdo; D341/P1008)>があげられる。

<sup>269</sup> 三蔵法師として知られた法成の著書訳書が、想定以上の分量を数える可能性のあることは、YOSHIMURA(芳村)1954:298に論究されている。

<sup>270</sup> 四大機関が漢訳<無量壽宗要經>の敦煌写本を収蔵する数は、IKEDA(池田)1975の統計調査(「既刊目録による敦煌文献内容概観」p. 85)によれば、(1.)スタイン本に289本、(2.)ペリオ本に35本、(3.)北京本に513本、(4.)レニングラード本に52本で、合計数として889本である。

最新の数量は、IDP(<http://idp.bl.uk>. Accessed December 10, 2019)によって確認できる。

<sup>271</sup> ティツクデツェン王の生没年代(806-841)については、see YAMAGUCHI(山口)1980:199; 彼の在位年代(815-841年)については、see IWAO(岩尾)2010:21.

<sup>272</sup> FUJIEDA(藤枝)1961:271:「沙州における写経事業が組織だった形をとったのは、九世紀に入ってからかなりたってからの時と見られるが、写経事業そのものは、恐らく八世紀のうちに始まったものと思われる」.

<sup>273</sup> FUJIEDA/UEYAMA(藤枝/上山)1962:345:「『無量壽宗要經』の名がもつとも多く用いられるこの経は、日本や中国本土では、あまり流行した形迹はないが、中央アジア諸民族の間では、過去もしくは現在以上に尊信せられたものである」.

<sup>274</sup> See『七寺一切経目録』現存目録、番外三函(p. 124); 日本古写経データベース、貞元録 No. Ndx004

考察しているように、<sup>275</sup> 1175年から1179年の間に日本国内で書写された‘開宝蔵の追離分に含まれていたことが確実な法天訳の北宋新訳仏典である’(p. 5)と見做し得るからである。

当該写本(七寺本)には、高麗再雕版や福州版、湖州版などの版本には見られない奥書が、<sup>276</sup> 尾題の後に看取され、この奥書の文言によって、当該経が(1.)太平興国6年(981年)に鄜州の龍興寺において(法天によってサンスクリット原文から)漢訳されたこと、また、(2.)河中府・開元寺の「梵学僧」である法進がこれを「筆受」「那綴」したこと、が知られる。<sup>277</sup> 河中府の法進が法天に請いて蒲津において訳経をすすめたことは、『宋高僧伝』(T 2061)<sup>278</sup>に、また、中天竺の法天が「[太平興国]6年」(981年)に鄜州に至り、「聖無量壽經」を漢訳したことは『佛祖統紀』(T 2035)<sup>279</sup>に出るが、<sup>280</sup>これを裏付ける、即ち、法天が『佛説大乘聖無量壽王經』をサンスクリット文より漢訳した年代と場所を裏付ける一次資料を、筆者は他に知らない。

日本古写経中に現存する法天訳『佛説大乘聖無量壽王經』(≈T 937)は、雍熙2年(985年)に裔然(938-1016)が北宋より請来した写本に遡求し得る<無量壽宗要經>の漢訳資料であるが、吐蕃期敦煌に見られたような彼の写経の流行(current)が日本国内にも古来存

(<https://koshakyo-database.icabs.ac.jp/materials/index/1535>).

<sup>275</sup> OTSUKA (大塚) 2009:5: ‘承安五年(一一七五)、尾張國中島郡では在庁官人・大中臣安長の支援により、一切経書写事業が始まり、治承三年(一一七九)頃に完成した。これが現在、名古屋市の七寺に所蔵されている七寺一切経である。この一切経中には、裔然が請来した開宝蔵の系統を引く転写本であることを示す、刊記・印記の写しを持つ仏典が五点見出せ、その他にも開宝蔵系の写本が一定数含まれているとみられる。七寺本『佛説大乘聖無量壽決定光明王如来陀羅尼經』(以下『聖無量壽王經』とする)は、開宝蔵の追離分に含まれていたことが確実な法天訳の北宋新訳仏典である’。

上記の論考をここに参照し得たのは、上杉智英博士(京都国立博物館美術室研究員)、新田優博士(国際仏教学大学院大学)ご夫妻より賜ったご教示による。また、当該写本(七寺本)の扱いについては、前島信也博士(日本古写経研究所)と張美僑氏(ICPBS)よりご教示を賜った。ここに記して感謝申し上げたい。

<sup>276</sup> Cf. OTSUKA (大塚) 2009:6: ‘北宋では、端拱元年の改訂時に七寺本の奥書に見える記述は削除されたと考えられる。開宝蔵の統蔵として刊行される前に、裔然が写本をいち早く日本に請来したからこそ、訳経事業に関する貴重な情報が現在に伝わったのである’。

<sup>277</sup> 愛知県名古屋七寺所蔵『佛説大乘聖無量壽王經』(貞元録 No. Ndx004, 卷末の奥書):

河中府開元寺梵學僧法進筆受刪綴朝奉即

行起居舍人権知鄜州軍州軍事借紫臣龜

從證文

太[太]大]平興國六年四月十五日於鄜州龍興寺譯

一校了 榮俊

<sup>278</sup> 『宋高僧伝』(T 2061.50.725a3): 有河中府傳顯密教沙門法進。請西域三藏法天譯經于蒲津。州府官表進。上覽大悦。各賜紫衣。

<sup>279</sup> 『佛祖統紀』(T 2035.49.396b21): 六年八月。[... 396b22] 知鄜州(音孚鄜延路)王龜從表稱。中天竺三藏法天至。譯聖無量壽經七佛讚。河中府梵學沙門法進執筆綴文。龜從潤色。詔法天赴闕召見慰問。賜紫方袍 [... 398a2] ○河中府沙門法進。請三藏法天譯經。於蒲津(蒲州河中府)守臣表進。上覽之大説。召入京師始興譯事。

<sup>280</sup> See 『望月』s.v. 法天(p. 4631), 『総合佛教大辞典』s.v. 法天(p. 1280), 『中国仏教史辞典』s.v. 法天(p. 352).

在したことを示すものではない。当該写本(七寺本)の文献学的価値は、今後大いに考究されることであろうが、その一つには、彼の稀有な奥書の文言によって、法天訳『佛說大乘聖無量寿王經』(≈T 937)の漢訳年代が981年である根拠を提示するものである、ということが挙げられるべきであろう。

#### 2.9.4. チベット語訳

〈無量寿宗要經〉のチベット語訳資料は、大蔵經中に3本、何れも *'Phags pa tshe dang ye shes dpag tu med pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo* という経題で、訳者不明として伝わる。その何れかの訳経に法成が関わっている可能性を否定し得ないことは、先の第2.9.3章(漢訳)において少しく触れたとおりである。以下にチベット大蔵經中の所在を表示し、確認する。

表9: チベット大蔵經に収録された〈無量寿宗要經〉所在一覧

	D	P
1.	674, rGyud, <i>ba</i> 211b2–216a7	361, rGyud, <i>ba</i> , 243b6–249a5 (vol. 7, p. 301)
2.	675, rGyud, <i>ba</i> 216a7–220b5	362, rGyud, <i>ba</i> , 249a5–254a2 (vol. 7, p. 303)
3.	849, gZungs-'dus, <i>e</i> 57b1–62a6	474, rGyud, 'a, 55b3–60b4 (vol. 11, p. 86)

上の表9に確認し得るように、チベット語訳〈無量寿宗要經〉は、大蔵經中、主に密教部(rGyud)に配属されている。<sup>281</sup>後に触れるように、プトウン・リンチェンドゥブ(1290–1364)の『十万タントラ目録』、及び、ケードゥブジェ・ゲレクパルサン(1385–1438)の『タントラ概論』では、〈無量寿宗要經〉は、所作タントラ(*bya rgyud*; Skt. *kriyātantra*)に選分される蓮華部のタントラ(*padma'i rigs kyi rgyud*)として、*'Phags pa tshe dang ye shes dpag tu med pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo* というタイトルのもとに2部収録されている。

ここで、上の表9に確認したチベット語訳〈無量寿宗要經〉の内、D 849だけはダーラニー部(gZungs)に配属されている点に注意したい。これは、經中に説示されるダーラニーをもって〈無量寿宗要經〉の枢要としたものであろう。この *gzungs* という一語は、經末の文言中にも、諸版の間にその有無が分かる。<sup>282</sup>この相違は、サンスクリット原文の諸エディション中にも、同じく看取されることは、上の表8(諸エディション中に見られ

<sup>281</sup> 錯雑な密教部の分類に関する比較的最近の論考としては、ENGLISH 2002:2–6が挙げられる。

<sup>282</sup> D 674 (216a7): *'phags pa tshe dang ye shes dpag tu med pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo rdzogs so/*  
/

P 361 (249a4): *'phags pa tshe dpag tu med pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo/ rdzogs sto//*

D 675 (220b5): *'phags pa tshe dang ye shes dpag tu med pa'i gzungs rdzogs so//*

P 362 (254a1): *'phags pa tshe dang ye shes dpag tu med pa'i gzungs rdzogs sto//*

D 849 (62a6): *'phags pa tshe dpag tu med pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo rdzogs so//*

P 474 (60b3): *'phags pa tshe dpag tu med pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo// // rdzogs sto// // om gcig pa dang gnyis pa dang gsum pa dang gsum yod pa las// om gsum pa 'di dag pa yin te/ 'di la tshe dpag med kyi mtshan brgya rtsa brgyad pa zhes zer ro// 'di la yi ge brgya rtsa bcu yod pa ni klog pa'i ched du a gnyis dkyus su bcug pa yin no// 'di rgya dpe dngos la bris so//*



る〈無量寿宗要經〉のサンスクリット語タイトルの一覧)によって確認し得る。

漢訳では、「佛說無量寿宗要經」(T 936), 及び「佛說大乘聖無量寿王經」(T 937) という文言が、それぞれ上にあげたチベット語、サンスクリット語両資料の経末に見出し得る文言に対応する。前者が含む「宗要」という語句は、法成訳と伝わり、MIMAKI (御牧) 1984 が指摘するように、ダーラニーを意図するものと解釈し得る。<sup>283</sup> 経中に説示されるダーラニーをもって〈無量寿宗要經〉の枢要とする態度は、リセンションにより相違するものの、大概においては、梵蔵漢に共通して経題に明らかである。NISHIOKA (西岡) 1984 が報告しているように、敦煌のチベット語資料の中には、〈無量寿宗要經〉のダーラニー部分のみを書写した写本(『Lalou目録』nos. 4065, 4156)も確認されている。<sup>284</sup>

吐蕃期敦煌(786–848年)における〈無量寿宗要經〉の漢文とチベット文の両文による大規模な写経については、既に触れた。これが組織立った公の事業として行われたという歴史的背景の具体的資料としては、『Lalou目録』no. 999 (Pelliot tibétain 999) が取り上げられよう。<sup>285</sup> この文書によれば、西暦844年に沙州において〈無量寿宗要經〉(*dar ma tshe dpag du myed pa* [sic])の写経が、漢文とチベット文の両文によって行われたことが知られる。漢文が135本、チベット文が480本、計615本を数えるこの写経は、841年に逝去したティツクデツェン王(Khri-gtsug-lde-brtsan)の大規模な法供養(*chos gyi sbyin ba chen po*)のために行われたものと想定される。

〈無量寿宗要經〉のチベット語訳資料は、このように、鴻大な写本の「量」によって知られる。〈無量寿宗要經〉のチベット文敦煌写本は、〈大般若經〉のそれと共に、<sup>286</sup> これを収録する図版、目録類を挙げれば枚挙に暇がない。<sup>287</sup> この事由をめぐる考察は、第1.1.4章において概観した〈無量寿宗要經〉の主な先行研究では、内容3.に該当する。中でも写経に用いられたインクの分析は、〈無量寿宗要經〉が熱心に書写された歴史的な事実を裏付ける研究として注目されよう。その一つの証左としてここに参照するチベット語訳〈無量寿宗要經〉の一写本 IOL Tib J 308 (図4)は、<sup>288</sup> VAN SCHAİK/HELMAN-WAŻNY/NÖLLER 2015 の蛍光X線元素分析(X-ray Fluorescence Analysis, XRF)によれば、その大半が血で記された可能性がある。<sup>289</sup>

<sup>283</sup> See MIMAKI (御牧) 1984:167: ‘経題中の「宗要」とは「陀羅尼」(*dhāraṇī*)の意味’. Cf. 『禪學大辭典』s.v. 宗要 (p. 496c): ‘宗門の要諦’.

<sup>284</sup> NISHIOKA (西岡) 1984:102n4: ‘同経のダラニのみを記したものに Nos. 4065, 4156 がある’.

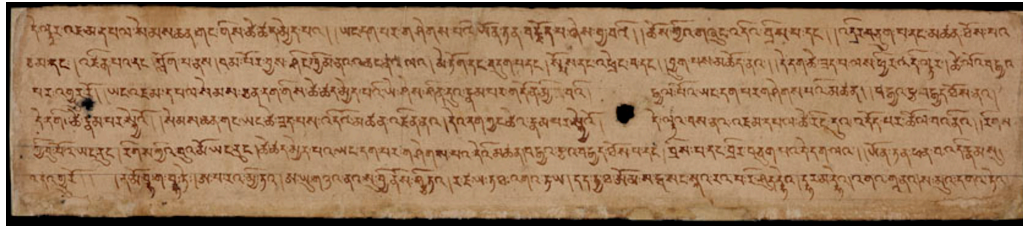
<sup>285</sup> 当該文書については、FUJIEDA (藤枝) 1961:276–277 に概略が提示されている他、日本語訳は YAMAGUCHI (山口) 1985:499–500 に、テキストと仏訳は IMAEDA 1998:[87]–88 に、それぞれ提出されている。これらをもとにした考察には、例えば、NISHIOKA (西岡) 1985 や IWAO 2012 があげられよう。NISHIOKA (西岡) 1985 の記述「この文書は七四四年にウースン宮殿からの支出により本経の写経が行われることになり」(p. 380)の「七四四年」は、明らかに「八四四年」の誤記である。

<sup>286</sup> 例えば、次の注に挙げる『IOM RAS目録』(1991)には、IOM RAS (≈Института востоковедения АН СССР) が所蔵するチベット文敦煌写本が214点収録されているが、その内、〈無量寿宗要經〉は202点を、〈大般若經〉10点を数える。

<sup>287</sup> E.g. 『IOM RAS目録』(1991), TSÉNG (曾) 2003, WANG (王) / HUANG (黄維忠) 2003, CHANG (張) 2006, T’AI (邵) / FAN (範) 2006, HUANG (黄維忠) 2012, 『世界民間藏中國敦煌文獻』(2014–2017).

<sup>288</sup> 『LVP目録』no. 308 (Tāntrik Works, p. 100).

図4: チベット語訳〈無量寿宗要経〉の写本 (IOL Tib J 308, 3v)



上に図示した IOL Tib J 308 には、その最終行 (3v6) に、『チャッキドンポ』が第2節 (§2.4.2) において導入するダーラニーに比定し得る一文が、確かに看取される。人血をインクとして用いる写経の実践は、決して珍しいことではない。<sup>290</sup> 〈無量寿宗要経〉は経中に当該ダーラニーを書写し、或いは人をして書写せしめる功德を説くのだから、人血をもってこれを遺遂げた該本は、その熱心な一つの実例を示すものであろう。

### 2.9.5. ダーラニー

以上において、〈無量寿宗要経〉に関する諸資料をサンスクリット原文、漢訳、チベット語訳の順序で確認した。サンスクリット原文資料については、7世紀を中心とするものと想定されるギルギット写本に、その原初形態が認められ、ギルギットがパドマサンバヴァの生地と言い慣らわされるウッディヤーナに地理的にも近接することを指摘した。漢訳、チベット語訳資料については、同じくパドマサンバヴァと比較的年代の近い吐蕃期敦煌において、かくもこの経典が重用されたことを示唆する諸資料を確認した。パドマサンバヴァによって埋蔵されたとされる『チャッキドンポ』が、〈無量寿宗要経〉から著名な(と、表現しても、もうよいであろう)ダーラニーを引用したとする筆者の想定において、何も考慮に値する資料である。

もっとも、テルマ文献に関わる想定に対しては、上の如何なる考証も有力とはいえないであろう。パドマサンバヴァを歴史的人物と見做せば、彼が「実在した」証左となる資料も参照されるべきであろう。仏教文献学的見地から見れば、テルマ文献は、僅少な例外に属するものであり、決してパドマサンバヴァの実在を積極的に裏付けるような資料にはなり得ない。もしギルギット写本や敦煌文書をして、パドマサンバヴァの活動年代や地域に近接すると見做し、彼が〈無量寿宗要経〉からその当時、当地で著名であったダーラ

<sup>289</sup> VAN SCHAİK/HELMAN-WAŻNY/NÖLLER 2015: 'Most of the writing in this manuscript is in a brown ink varying between a light colour and a darker colour with a clotted appearance. Black ink has also been used to clarify some of the letters, add corrections, and for the ornamental opening curl on each page and the page numbers (actually the letters *a* and *ha*) in the right margins. It is possible that the brown ink used for the majority of the text is evidence of the practice of writing with blood, which is attested in colophons and other sources'.

<sup>290</sup> See HELMAN-WAŻNY 2014:101n20. 例えば、カートクシトウ3世チューキギヤムツォ (The Third Kaḥ-thog-si-tu Chos-kyi-rgya-mtsho. 1880–1923/1925. BDR#P706) の著書 *dBus gtsang gi gnas yig* には、ヤルルン・トゥルク (Yar-lung-sprul-sku) がグル・チューキワンチュク (Gu-ru Chos-kyi-dbang-phyug. 1212–1270. BDR#P326) の鼻血 (*shangs mtshal*) で描いた彼のタンカ (*zhal thang*) が報告されている。

*dBus gtsang gi gnas yig*, 285,2: *gu ru chos dbang shangs mtshal las skal ldan yar lung sprul skus phyag bris mdzad pa'i zhal thang yod/*

Cf. JACKSOND 1996:257n574 (As translated into Japanese in JACKSOND 2006:249n574).

ニーを引用したということが承認されるなら、上記に確認した諸資料の文献学的価値との衝突を避けるためにも、パドマサンバヴァの实在が前提とされなければならない。

おそらく、ここで研究方法の一助となるのは、間テキスト性 (intertextuality; *intertextualité*) という概念であろう。<sup>291</sup> *Intertextualité* という語句は、1960年代にジュリア・クリステヴァ (Julia Kristeva. 1941-) によって提唱されて以来、実に多様な文脈の中で育まれてきた。筆者がこの概念によって研究方法の一助とするのは、あるテキスト (テキストa) の責任表示者 (e.g. 説話者/著者) や読者が、明示的に (explicitly) 或いは、暗示的に (implicitly) 別のテキスト (テキストb) を引用したり参照したりすることの意味である。チベットの著作物における「間テキスト的絢交ぜ」(‘intertextual promiscuity’, p. 260n36) という問題は、CABEZÓN 2001 が詳しく論じているように、単に文献学的手続きに則り、テキストの「借用パターン」(‘patterns of borrowing’) を指摘して片付けられ得る問題などではなく、これを批判的に精緻に学究する姿勢が、真摯に求められるべきである。<sup>292</sup> ダーラニーの引用についていえば、『チャッキドンポ』がテキストaに、〈無量寿宗要経〉がテキストbに、それぞれ代入されよう。この問題は、後に第2.9.8章 (『リンチェンテルズ』所伝のダーラニー) において、リクズイン・グウデムチェンをはじめとするテルトウンのテキストの借用 (textual borrowing) について考察する際に、再度触れる。

以上のように、二重の責任表示者をもって引用されたとする〈無量寿宗要経〉のダーラニーは、彼らによってどのように理解されていたのであろうか。長寿成就法『チャッキドンポ』中に、経中と同じく *sngags* と呼称される当該のダーラニーは、経中 (ApS\_t, §12≈ApS\_s, §10) に無量寿如来の 108 の名号 (*nāmā* < *nāman*; *mtshan*) とされ<sup>293</sup>——この 108 の名号については、周知の通り諸説ある<sup>294</sup>——後に第2.8章 (2つの功德) において詳察

<sup>291</sup> この、間テキスト性の他、テルマ文献の扱いについては、後付けの予言 (*Vaticinium ex eventū*) という概念も、研究方法の一助となり得るであろう。仏教文献学に、この、後付けの予言という概念を導入した研究としては、SILK 2019 (not published) があげられる。Silk 教授 (Universiteit Leiden) からの私信によれば、この概念は NEUJAHR 2012 に詳しい。後付けの予言という概念は、テルマ文献研究にとって新たな視座を与えるものであるが、今後の課題とし、本論文において詳細に入ることは差し控えることにしたいと思う。

<sup>292</sup> See CABEZÓN 2001:260n36: ‘A critically sophisticated study of this type of intertextual promiscuity that goes beyond a mere philological analysis, that is, beyond merely noting patterns of borrowing, is a desideratum in the field of Tibetan literary studies’.

<sup>293</sup> ApS\_t, §12: ‘*jam dpal/ de lta bas na/ rigs kyi bu’am/ rigs kyi bu mo tshe ring bar ’dod pa de dag de bzhin gshegs pa tshe dpag tu med pa de’i mtshan brgya rtsa brgyad nyan tam/ yi ger ’bri’am/ yi ger ’brir ’jug na de dag gi yon tan dang/ legs par ’gyur ba ni/ ’di dag go/*

ApS\_s, §10: *tasmāt tarhi mañjuśrīr dirghāyuskatvaṃ prārthayitu-kāmaḥ kula-putro vā kula-duhitā vā tasyāparimitāyusaḥ tathāgatasya nāmāṣṭottara-śataṃ śroṣyanti likhīṣyanti likhāpayīṣyanti teṣāṃ ime guṇānusamsā bhaviṣyanti.*

<sup>294</sup> 例えば、PAYNE 2007 は、これを「108個の音節」(‘108 syllables’, 305n65) と理解している。See PAYNE 2007:305n65: ‘Walleser uses “names,” but this is perhaps a mistaken presumption that we are dealing here with something similar to the idea of the “one hundred names of God.” This is clearly, however, a reference to the 108 syllables of the *dhāraṇī* itself. In Walleser’s rendering, adhered to here, there would appear to be 110 syllables. There are, however, two instances of what might be called double *a*’s, *puṇya-āparimita*, and these would no doubt have been counted as a single long *a* (*ā*) by the author, thus giving 108 rather than 110’. Cf. WALLESER 1916:31: ‘Deshalb denn, Mañjuśrī, wird ein Sohn oder eine Tochter aus edlem Geschlecht, die ein langes Leben wünschen, die einhundertundacht Silben (eig. „Namen“) dieses Tathāgata Aparimitāyuh hören

を試みるように、これを書写し、或いは人をして書写せしめ、家においてこれを経巻として受持、読誦すれば、現世において寿命百歳に至ることと、死後に無量寿如来の仏土に生まれることという、2つの功德が得られるものとも、経中に明説されている。ダーラニーと呼び慣らわされる言語表現の一形式は、DASGUPTA 1958 が論じているように、一般にその大部分は‘語源的な意味を喪失したか、或いは、語源的な意味をもつことのなかった音節の羅列によって構成されている’ (p. 59: composed of a string of syllables which have lost their etymological meaning or which had never an etymological meaning)<sup>295</sup> とされるが、長寿成就法『チャッキドンポ』に引用される当該のダーラニーは、108の音節より成る無量寿如来の名号であることやその功德が明示的であることを、その顕著な特色とする。

*dhāraṇī* というサンスクリット語は、 $\sqrt{dhr}$  (支える、把持する) に語源をもつ派生語と考えられ、<sup>296</sup> DAVIDSON 2009 によれば、「個々のテキストや仏典の各部、或いはその仏典丸ごと全部を、存在論的に圧縮し、暗号化するもの」 (p. 118) とされる。<sup>297</sup> ダーラニーのこうした機能性は、「憶念／憶持 (*smṛti*, *dhāraṇa*; Tib. *dran pa*)」と関連付けて論じられることも多い。DELEANU 2020 によれば、ダーラニーのこうした「記憶に関わる」(‘mnemonic’, p. 91) 特徴は、初期大乘仏教より用例が認められるが、その禅定における活用は、概して密教において発展したものである。<sup>298</sup>

ダーラニー (*dhāraṇī*) の秘められた側面は、BHARATI 1965 (1975) によって、これに精通した者のみが理解する「経験則に基づく命題」(‘heuristic propositions’, p. 118) であるとされ、「意図的な言葉ではない」(‘not couched in intentional language’) と考察されてき

[...] なお、ここで参照されべき仏典として、聖観自在菩薩の108個の名を受持読誦することの功德を説く『聖観自在一百八名』(‘*Phags pa spyan ras gzigs dbang phyug gi mtshan brgya rtsa brgyad pa*. D 705, rGyud, tsa 171b1–173a5; P 381, rGyud, pha 438a2–440b4) 『聖観自在菩薩一百八名経』(T 1054) 『*Ārya-avalokīteśvara-nāma-aṣṭasārika*. STP, vol. 11, p. 3462) が挙げられよう。聖観自在菩薩の108個の名の受持読誦は、NAKAMURA (中村) 2004 によれば、「インドの民衆はシヴァ神の百八の名、ヴィシュヌ神の百八の名をとえらるということを行っていたために、観音信者のあいだでもその習わしが成立した」(p. 198) ものである。〈無量寿宗要経〉における無量寿如来の108の名号についても、或いはこの文脈で捉えることができるかもしれない。

<sup>295</sup> DASGUPTA 1958:59 ‘On the whole it seems that most of the Mantras and Dhāraṇīs are composed of a string of syllables which have lost their etymological meaning or which had never an etymological meaning’ (as translated into Japanese MIYASAKA/KUWAMURA (宮坂/桑村) 1981:70–71).

<sup>296</sup> DAVIDSON 2009:111: ‘The etymology of *dhāraṇī* is certainly from  $\sqrt{dhr}$ , which is employed with the verb *dhārayati*, to memorize, but the same root yields (among other terms) *dharma*, which is another term like *dhāraṇī* that is bewilderingly polysemic, as all students of Buddhism must learn to their grief’.

<sup>297</sup> DAVIDSON 2009:118: ‘*Dhāraṇīs* [sic] must be capable of storing and communicating scriptures, whether individual texts, or sections of the canon, or the entire canon itself, and whether this storage is understood as ontological compression or encryption or some other method’.

<sup>298</sup> See DELEANU 2020:91: ‘Sacred utterances—whether the (initially mnemonic) formulae known as *dhāraṇī* or (not necessarily meaningful) sound sequences called *mantra*—are already attested in Early Mahāyāna, but their use for contemplative purposes is a development chiefly associated with Esoteric Buddhism’. ダーラニーの念誦が‘真言密教の独自の特徴の一つ’ (p. 14) であること、また、‘仏教の本来の立場には合致しないもの’であったが、‘精神統一をはかるための手段であるとして正当化された’ (p. 14) ことは、NAKAMURA (中村) 2004 にも指摘されている。

た。<sup>299</sup>ダーラニーは、このように、応用される状況に対応し得る「多義語」(‘polysemic’, DAVIDSON 2009:118)としての役割を担ってきた。このように高度に「コード化」(‘coding’, *ibid.*)されたダーラニーという情報を「デコード化」(‘decoding’, *ibid.*)するにあたっては、細心の用心が必要とされてきたのである。<sup>300</sup>

或いは、マントラ (*mantra*) をめぐる <菩薩地> 菩提分品 (*Bodhipakṣya-pāṭala*) の「無意味さこそが、マントラのもつ真実の意味である」<sup>301</sup> という所論に基づいて、敢えてダーラニーの意味を探し求め (*sam-anv-√iṣ*) ない、という姿勢も、一つの研究方法として意識されてよいであろう。実際、少なくない数の論考において、ダーラニーは音写されてきた。

### 2.9.6. ダーラニーのテキストと試訳

上にみた、敢えてダーラニーの意味を探し求めない、という姿勢は、もとより、当該のダーラニーを訳出する意義をいささかも損なうものではない。後に考察するように、リクズイン・グウデムチェンの年代 (1337?-1406) と近似する二人の学僧——プトウン・リンチェンドゥブ (1290-1364) と、ケードゥブジェ・ゲレクパルサン (1385-1438)——は、<無量寿宗要経> という一タントラについて、当該のダーラニーを中心に論じており、それらの内容を検討するためにも、ここに訳出を試みることは必要な手順と筆者は考える。

<sup>299</sup> BHARATI 1975:118: ‘There are two ways in which instructions about how to arrive at a *mantra* are given: the direct way, in which the *mantra* is simply listed in the text; and the indirect way, in which the instruction is couched in heuristic propositions using circumlocutory terms for *mantra*-constituents and *bījas* which are known only to the initiate or to scholars conversant with tantric terminology. These instructions are therefore in *sandhābhāṣā*, and they are the only *sandhā*-passages in *mantric* instructions of any kind; that is to say, instructions about *dhāraṇī*, *yāmala*, *kavaca*, *yantra*, and *maṇḍala*, are not couched in intentional language’.

<sup>300</sup> See DAVIDSON 2009:118: ‘*dhāraṇīs* must be ritually efficacious, for they play an important role in the rituals associated with the teaching of the Mahāyāna [...]. This means that any value for *dhāraṇī* must be polysemic, for all of these functions must fall into the class of conditions exercised by *dhāraṇīs*, which can in turn have not a single purpose, but must be capable of exercising its functions in an environment-sensitive manner’.

<sup>301</sup> *Bodhisattvabhūmi*, BBh\_s1 185,23; BBh\_s2 273,13: *sa eṣāṃ mantrapadānām evaṃ samyak pratipanna evam arthaṃ svayam evāśrutvā kutaścīt pratividhyati [pratividhyati s1] pratipadyati s2] tad yathā nāsty eṣāṃ mantrapadānām kācid arthapariniṣpattiḥ. nirarthā [nirarthā s1] nirartha s2] evaite/ ayam eva caiṣāṃ artho yad uta nirarthatā/ tasmāc ca paraṃ punar anyam [anyam s2] aparam s1] arthaṃ na samanveṣate/ iyatā tena teṣāṃ mantrapadānām arthaḥ supratividdho bhavati*

「これら諸々の真言句 [の意味] を [1.] 正しく修し, [2. その] 意味を (*arthaṃ*) 自ずから [理解して], [3. その意味を] 誰にも聞かなかった者は, [次のように] 承知する (*pratipadyati*)。即ち「これら諸々の真言句には意味の確立 (*arthapariniṣpattiḥ*) など何もない。これらは (諸々の真言句は *ete*) 全く (*eva*) 無意味である (*nirarthāḥ*)。むしろ (*ca ... uta*), これらに関する (諸々の真言句に関する *eṣāṃ*) 意味 (*arthaḥ*) は, 意味を持たないということ (*nirarthatā*) である」と。したがって (*tasmāc ca*), [彼/彼女は] さらに再び別の意味を探し求める (*samanveṣate* < *sam-anv-√iṣ*) ことはない。このようにして (*iyatā*), それら諸々の真言句の意味は (*arthaḥ*), 彼/彼女によって (*tena*) 正しく覺知された (*supratividdhaḥ*) ことになるのである。」

For an English translation from the Sanskrit original with reference to the Tibetan translation and commentaries, see ENGLE 2016:449.

試訳の対象となるテキストは、問テキスト性を考慮した場合、責任表示者を埋蔵者パドマサンバヴァとすればサンスクリット原文 (ApS\_s) が、これを発掘者リクズイン・グウデムチェンとすればチベット語訳 (ApS\_t) が、その近似性からみてそれぞれ適当だといえるが、後に参照する二人の学僧の所論がチベット語訳に依拠していることを鑑みて、チベット語訳を選択した。以下の試訳中にグレーに色付けして示した部分は、長寿成就法『チャッキドンポ』 (§2.4.2) に引用が見られない部分である。

*Aparimitāyuhṣūtra*, ApS\_s, §11<sup>302</sup>

オーム、世尊、無量寿智、善決定光明王如来、阿羅漢、正遍知に帰命する。彼、即ち、オーム、福德、福德、大福德、無量寿の大福德智資糧積集よ。オーム、一切諸行清浄法性、虚空出現、自性清浄、有大理趣眷属よ、スヴァーハー。

長寿成就法『チャッキドンポ』 (§2.4.2) には引用が見られない、グレーに色付けして示した「オーム」で始まる部分は、〈無量寿宗要経〉をそのダーラニー中に「オーム」の数の相違によって、リセンションを区別する一つのメルクマールとして知られる。しかし、管見に触れた限り、大蔵経所伝の3本にわたって、この「オーム」の数を整理した対照表を提出する先行研究は未だあらわれていない。14-15世紀のチベットにおいては、この「オーム」の数をめぐって学者間に見解の相違がみられ、これを考察するためにも、以下に一覧表 (表10) を作成、提出する意義が認められよう。

<sup>302</sup> ApS\_t, §13: *omna mobha-ga-ba-tea-pa-ra-mi-ta-ā-yur-jñā-na-su-bi-ni-ści-ta-te-jo-rā-jā-yata-thā-ga-tā-ya a-ra-ha-te saṃ-myak-sambud-dhāya | tadya-thā | om pu-ṇye pu-ṇye ma-hā-pu-ṇye a-pa-ri-mi-ta-āyuh pu-ṇye-jñā-na-saṃ-bhā-ro-pa-ci-te | omṣa-rba-saṃ-skā-ra-pa-ri-śud-dha-dharmma-te ga-ga-na-sa-mud-ga-te sva-bhā-ba-bi-śud-dhe ma-hā-na-ya-pa-ri-bā-re svāhā ||*

ApS\_s, §11: *om namo bhagavate aparimitāyur-jñāna-suviniścita-tejo-rājāya tathāgatāyārhate samyak-sambuddhāya || tad yathā || om puṇya-mahā-puṇya-aparimita-puṇya-aparimitāyu-puṇya-jñāna-saṃbhāropacite || om sarva-saṃskāra-pariśuddha-dharmate gagaṇa-samudgate svabhāva-pariśuddhe mahānaya-parivāre svāhā ||*

ApS\_c1, 82a23: 南謨薄伽勃底\_阿波喇蜜哆\_阿喩紇硯娜\_須毘爾悉指陀\_囉佐耶\_怛他羯他耶\_怛姪他唵\_薩婆桑悉迦囉\_鉢喇輸底\_達磨底\_伽迦娜\_莎訶某持迦底\_薩婆婆毘輪底\_摩訶娜耶\_波喇婆喇莎訶

ApS\_c2, 85b18: 曩謨\_婆\_誡嚩\_帝\_阿播哩弭跢\_愈\_覓野\_曩素\_尾\_室止\_怛帝嚩\_囉\_惹\_野\_怛他\_野\_囉賀\_帝\_麼藥\_訖\_沒馱\_野\_怛爾也\_他\_唵\_薩\_僧塞迦\_囉波哩舜馱達\_唵\_帝\_嚩\_母努藥\_帝\_嚩\_嚩尾舜弟麼賀\_曩野波哩嚩\_黎娑嚩

IKEDA (池田) 1916:559: ‘唵、薄伽梵、無量寿智、善決定光明王如来に帰命す。所謂、唵、福よ、福よ、大福よ、無量福よ、智資糧所積集よ。唵、一切清浄法性よ、虚空等出よ、自性清浄よ、有大理趣眷属よ。娑嚩賀。’

〈無量寿宗要経〉のダーラニーに類似する『阿彌陀鼓音聲王陀羅尼経』(T 370) 中のダーラニー (12.352c14f) を還梵したテキストは、PAYNE 2007:288 に提出されている。

表10: チベット語訳〈無量寿宗要経〉のダーラニーが含む「オーム」の個数一覧

	「オーム」の個数	D	P
1.	3	674, rGyud, <i>ba</i> 212a3	361, rGyud, <i>ba</i> , 244a8
2.	2	675, rGyud, <i>ba</i> , 217a2	362, rGyud, <i>ba</i> , 249b7
3.	3	849, gZungs-'dus, <i>e</i> , 58a2	474, rGyud, 'a, 56a4

上の表10に確認し得るように、D675/P362と長寿成就法『チャッキドンポ』とは、ダーラニー中に全体として「オーム」の数を2個保有する点で相似する。なお、この点は、大正蔵中の2本の漢訳 (ApS\_c1 と ApS\_c2) についても同じく数えられることは、注記したテキストのとおりである。

### 2.9.7. プトゥンの見解

プトウン・リンチェンドゥブ (Bu-ston Rin-chen-grub. 1290–1364. BDRC#P155) は、リクズイン・グウデムチェン (1337?–1406) と同じツァン地方に、同じくニンマ派の家系に生まれたが、幼い頃よりサキャ派の教学に親しみ、シャーキャシュリーバドラ (Śākyaśrībhadra. Kha-che-pan-chen. 1127–1225. BDRC#P1518) の転生者と見做されていた。1320年に30歳でシガツェ近郊のシャル (Zhwa-lu) 寺に赴任し、後にシャル派 (Zhwa-lu-pa), 或いは、プトウン派 (Bu-lugs-tshul) とも呼称される学統を築いている。1322年頃には『プトウン仏教史』 (*Bu ston chos 'byung*) と呼び慣らわされる著作を完成させ、その仏典目録部は、チベットの大蔵経史に残る一大業績となった。『プトウン仏教史』は、HADANO (羽田野) 1986–1988 が記述しているように、‘単なる仏教史ではない。すでにその標題が示すように、彼の仏教観や仏教史観にもとづいて仏教学、仏教史を扱い、しかる後に、これにもとづいて、仏典を体系的に分類排列し整備した目録の作成を試みたもの’ (vol. 2 (チベット篇2), p. 203) であり、後世に多大な影響を及ぼすことになるこの一著作によって、プトウン・リンチェンドゥブは大学僧としての地位を確立した。<sup>303</sup>

一切知者 (*thams cad mkhyen pa*) として知られた彼の著作は多岐に渡るが、〈無量寿宗要経〉に関して第一に参照すべきは『十万タントラ目録』 (*rGyud 'bum gyi dkar chag*) であろう。〈無量寿宗要経〉は、当該目録中に所作タントラ (*bya rgyud*; Skt. *kriyātantra*) に選分される蓮華部のタントラ (*padma'i rigs kyi rgyud*) として、中でも、これを5つ、即ち――

- (1.) [蓮華] 部の正 [尊] (*rigs kyi gtso bo*)
- (2.) [蓮華] 部の主 [尊] (*rigs kyi bdag po*)
- (3.) [蓮華] 部の母 [尊] (*rigs kyi yum*)
- (4.) [蓮華] 部の男女忿怒 [尊] (*rigs kyi khro bo khro mo*)
- (5.) [蓮華] 部の男女使者 [尊] (*rigs kyi bka' nyan pho mo*)

――という5つに分類した内の(1.) 蓮華部の正尊に属するタントラとして、*'Phags pa tshe*

<sup>303</sup> See DUNG-DKAR, s.v. Bu-ston-rin-chen-grub (pp. 1409–1412); 『蔵漢』 s.v. Bu-ston-rin-chen-grub (p. 1829); PDB, s.v. Bu ston rin chen grub (p. 159).

See also SEYFORTH RUEGG 1966:1–46, YAMAGUCHI (山口) 2004:316–317.

*dang ye shes dpag tu med pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo* というタイトルのもとに2部収録されている。<sup>304</sup> EIMER 1990 の当該箇所、両者はチベット大蔵経中に比定された番号が複数示されているが、以下にその要点のみを表示する。

表11: 『十万タントラ目録』における〈無量寿宗要経〉のダーラニーに関する二分類

1.	ダーラニーの中間に <i>punya</i> が有る「 <i>om</i> が3つあるもの ( <i>om gsum byas pa</i> )」 D 674/P 361
2.	ダーラニーの中間に <i>punya</i> が無い「 <i>om</i> が2つあるもの ( <i>om gnyis byas pa</i> )」 D 675/P 362

上記表 (表11) 中の 1. には「色究竟天の無量寿仏」(*'og min gyi tshe dpag med*) と、2. には「極楽の無量寿仏」(*bde ba can gyi tshe dpag med*) という記述がそれぞれ認められ、プトウン・リンチェンドゥプはこれらを別々の異なるタントラとして区別した可能性は、FUJINAKA/NAKAMIKADO (藤仲/中御門) 2018 等の先行研究によって論考されている。<sup>305</sup>

この区別については、後に、ゲルク派の学僧ケードゥプジェ・ゲレクパルサン (mKhas-grub-rje dGe-legs-dpal-bzang. 1385–1438. BDRC#P55) が、彼の『タントラ概論』(*rGyud sde spyi rnam*) において、〈無量寿宗要経〉に関する解説をおこなうに及び、論難が提出されている。当該箇所は既にいくつかの先行研究中に訳出されているが、<sup>306</sup> 以下に筆者の試訳を加えたい。

*rGyud sde spyi rnam*, 122,24<sup>307</sup>

<sup>304</sup> *rGyud 'bum gyi dkar chag*, 108 (=EIMER 1990:<<1.2.>>: *gnyis pa padma'i rigs kyi rgyud la/ rigs kyi gtso bo dang/ rigs kyi bdag po dang/ rigs kyi yum dang/ rigs kyi khro bo khro mo dang/ rigs kyi bka' nyan pho mo'i rgyud dang lnga'i dang po la/ 'phags pa tshe dang ye shes dpag tu med pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo/ om gsum byas pa/ bar na punya yod pa gcig dang/ om gnyis byas pa/ bar na pu nya [sic] med pa gcig ste/*

NISHIOKA 1981–1983:v. 3, p. 61 (nos. 1253–1254): *'og min gyi tshe dpag med/ bde ba can gyi tshe dpag med/*

Cf. *gSang sngags rgyud sde bzhi*, 491,3: *om na mo bha ga wa te a par mi ta ā yur dznyā na su bi ni ſci ta te dzo rā dzā ya/ ta thā ga tā ya/ arha te samyakasambuddhā ya/ tadya thā/ om sarbba sam skā ra pa ri shuddha dharmma te ga ga na sa mudga te swa bhā wa bi shuddhe/ ma hā ya na pa ri wā re swā hā//* (འོ་ན་མོ་གྲག་མ་དེ་ཨ་པ་མི་དུ་ཡུར་རྒྱ་ན་སུ་བི་ནི་ཏི་དེ་རྩ་རྒྱ་ཡ། དུ་གྲག་དུ་ཡ། ཨ་རྟེ་སུ་གྲག་སུ་གྲག་ཡ། དེ་ལྟ་ན། འོ་སྐྱེ་སྐྱེ་སྐྱེ་པ་འི་འུ་ལྟ་ལྟ་དེ་ག་ག་ན་ས་ལུ་ན་དེ་སྐྱེ་ལྟ་ལྟ་མ་དུ་ཡ་ན་པ་འི་སྐྱེ་ལྟ་ལྟ་།).

<sup>305</sup> See FUJINAKA/NAKAMIKADO (藤仲/中御門) 2018:449n15.

<sup>306</sup> E.g. LESSING/WAYMAN 1968 (1978):123, 125 (an English translation) and TAKATA (高田) 1978:213–214 (a Japanese translation).

<sup>307</sup> *rGyud sde spyi rnam*, 122,24: *padma'i rigs kyi rgyud la/ rigs kyi gtso bo'i rgyud ni/ bcom ldan 'das kyis mnyan yod du 'jam dpal la gsungs pa/ steng phyogs kyi tshe dpag med kyi mtshan brgya rtsa brgyad pa yon tan bsngags pa dang bcas pa ste/ de la om gsum ma gcig dang/ om gnyis ma/ om punye punye [sic] zhes pa'i sngags tshan med pa gcig dang gnyis yod do/ de gnyis las/ gcig la bde ba can gyi tshe dpag med zer/ gcig la 'og min gyi tshe dpag med zer ba mi 'thad de/ gnyis ka steng phyogs kyi tshe dpag med kyi gzungs su gsungs pa'i phyir/ om gnyis ma la sngags bar nas chad pas/ mtshan brgya rtsa brgyad ma tshang ba yin gyi/ rgyud so*



蓮華部のタントラ中，[蓮華]部の正尊 (*rigs kyi gtso bo*; Skt. *kula-jyeṣṭha*) に属するタントラ (*rgyud*) [である <無量寿宗要経>] は，世尊がシュラーヴァステイー (*mNyan-yod*; Śrāvastī) において文殊師利に対してお説きになったもので，上方の無量寿仏の百八つの名号と [これを念誦する] 功德を称讃する内容である。

これ(タントラ)には，

[1.] *om* が3つある [ダーラニーを有するもの] (*om gsum ma*, i.e. D#674/P#361) と，  
[2.] 「*om punye punye*」 という [D#674/P#361 にはある] ダーラニー (*sngags*) の [一] 部分が無い，*om* が2つある [ダーラニーを有するもの] (*om gnyis ma*, i.e. D#675/P#362) という2 [種類] がある。

この2 [種類] について，一方は [西方] 極楽世界 (*bDe-ba-can*; *Sukhāvātī*) の無量寿仏 [のタントラ] をいい，もう一方は [上方] 色究竟天 (*Og-min*; *Akaṅkṣṭha*) の無量寿仏 [のタントラ] をいうという [説] は，理に合しない。[何故なら] 両者は共に，上方の無量寿仏のダーラニー (*gzungs*) を説いたものであるからである。

*om* が2つある [ダーラニー] は，中間が切断しているから不完全な百八つの名号ではあるけれども，[これら2種類の] タントラ (*rgyud*) は，別々の2 [種類のタントラ] なのではない。

ケードゥプジェ・ゲレクパルサンが，ここで問題としている「上方の無量寿仏のダーラニー」 (*steng phyogs kyi tshe dpag med kyi gzungs*) 中の「上方」 (*steng phyogs*) とは，<無量寿宗要経> 中に仏の説法の場合「上方」 (*ApS\_t*, §4: *steng gi phyogs*) と説示されていることをいうもので，<sup>308</sup> 西方に位置すると見做されている極楽世界と相違するかどうか問われる。実際，法天訳 (T 937) では「西方」と訳出されており，<sup>309</sup> <無量寿宗要経> の叙述にあらわれる108の音節より成る名号を有する仏と，<sup>310</sup> 彼の説法の場合については，一致をみない。おそらくは，リセンションの相違によるこうした混乱を，プトウン・リンチェンドゥップはダーラニー中の *om* の数量と関連づけて論述し，これにケードゥプジェ・ゲレクパルサンが異を唱えたものであろう。<sup>311</sup>

### 2.9.8. 『リンチェンテルズ』所伝のダーラニー

それでは，『チャッキドンポ』を発掘したリクズイン・グウデムチェン (1337?-1406. BDRC#P5254) は，<無量寿宗要経> のダーラニーに関する「知識」を有していたのだろうか。彼と同時代人であるプトウン・リンチェンドゥップ (1290-1364) やケードゥプジェ・

*so ba gnyis ma yin no/*

<sup>308</sup> *ApS\_t*, §4: *steng gi phyogs na 'jig rten gyi khams yon tan dpag tu med pa zhes bya ba zhig yod de.*

<sup>309</sup> *ApS\_c2* (T 937.19.85a21): 西方過無量佛土。有世界名無量功德藏。

<sup>310</sup> *ApS\_c1* (T 936.19.82a9): 號無量智決定王如來。  
*ApS\_c2* (T 937.19.85a24): 有佛名無量壽決定光明王如來無上正等菩提。  
*ApS\_c1* (T 936.19.82a16): 得聞是無量壽智決定王如來一百八名號者。  
*ApS\_c2* (T 937.19.85b9): 若有衆生聞是無量壽決定光明王如來名號。

<sup>311</sup> Cf. FUJINAKA/NAKAMIKADO (藤仲/中御門) 2018:449n15.

ゲレクパルサン (1385–1438) といった14–15世紀のチベット人学僧の間にこのダーラニーが知られ、その *om* の数量をめぐる見解の相違が看取される程であることは、『タントラ概論』の翻訳研究等を通じ、既に少なくない数の先行研究が蓄積されている。しかし、テルマの中にこのダーラニーが伝わる可能性は、管見に触れた限り、これまで論究されてこなかった。テルマに関するこれまでの研究成果の中には、例えば、GYATSO 1996の所論に見出し得るように、<sup>312</sup> テルマ自体が、他のタントラ同様、一つの *mūla/rtsa ba text* として取り扱ひ得ることを論じた考察はあっても、テルマに引用されたダーラニー等のテキストを個別に論じたものは見当たらない。

リクズイン・グウデムチェンは、彼の伝記『照射する陽光』によって知られる限り、大蔵経の目録作成に関わるなどして数多くの仏典を渉猟する機会が、プトウン・リンチェンドゥプやケードゥプジェ・ゲレクパルサンのように、決して多くはなかったものと想定される。これについていえば、リクズイン・グウデムチェンの他に、このダーラニーを引用するテルマを発掘したテルトウンが存在するのか、別の言い方をすれば、このダーラニーを引用するテルマが他に存在するのか、という関心も生じよう。

この関心にこたえる資料は、実に幅広く見積もられるべきである。従って、以下に参照する『リンチェンテルズ』が、いかにテルマを包括的に収録する一大集大成であったとしても、一義的な考察になろう。しかし、試みる意義があることを信じ、以下に、〈無量寿宗要経〉に比定されるダーラニーを引くテルマを『リンチェンテルズ』(ツルプ版, i.e. RT\_A) から抽出してみる。当該ダーラニーは、既に考察したように、リセンションの相違によってそのかたちが未だ確立しているとはいえ、厳密に言えば、比定対象が曖昧である。従って、下記表12に提出されるのは、『チャッキドンポ』所載のダーラニーと比定した時のように、総じて比定し得るものと筆者が恣意的に判断したテルマの一覧に過ぎない。

表12: 『リンチェンテルズ』に見在する〈無量寿宗要経〉に比定されるダーラニーを引くテルマの一覧<sup>313</sup>

番号	RT_A	発掘者名/著者名	テルマ名/ダーラニーが含む「オーム」の個数
0.	67, 511–551	ベムセー・ドンマサンポ (ca. 12c. BDRC#P4CZ15360)	<i>mKha' 'gro rlung 'khor bcas chog ma.</i> 0個 (528,3: ダーラニーの名称を含む部分的引用) <sup>314</sup>

<sup>312</sup> GYATSO 1996:158: ‘The core text may be couched as a *tantra* or other sort of “root text” (*mūla; rtsa ba*), and it is most likely to represent the revealed Treasure vision or philosophical teaching itself. As such, it will be anonymous, or couched as the words of Padmasambhava, or a buddha, or deity’.

<sup>313</sup> ここに参照したツルプ版『リンチェンテルズ』(RT\_A)の箇所情報は、巻号数(vol.)と頁数(p/pp.)をカンマ(,)で区切って記述した。即ち「6, 131–140」は「Vol. 6, pp. 131–140」を意味する。

<sup>314</sup> RT\_A, vol. 67, p. 528, l. 3: *om na mo bha ga zhes pa nas pa ri wā re sbā hā'i bar gyi tshe gzungs tshang ma bris pa'i mjug tu.*

ベムセー・ドンマサンポ (Bram-ze sDom-pa-bzang-po. ca. 12c. BDRC#P4CZ15360) が発掘したとされるテルマは、“*om na mo bha ga*” で始まり、“*pa ri wā re sbā hā*” で終わる“*tshe gzungs*” に言及している。当該テルマがここで「[無量] 寿[仏]のダーラニー」(*tshe gzungs*) とするダーラニーは、〈無量寿宗要経〉中に説示されるダーラニーに比定される可能性がある。しかし厳密には、確たる証拠に乏しいといわざるを得ない。本論文は、従って、当該テルマに「0.」という通し番号を付け、『リンチェンテルズ』に見在する〈無量寿宗要経〉に比定されるダーラニーを引くテルマの一覧には含めつつも、その総数からは除外する。

1.	29, 249–268	リクズイン・グウデムチェン (1337?–1406. BDRC#P5254)	『チャッキドンポ』 2個 (256,3)
2.	93, 161–173	リクズイン・グウデムチェン	<i>Byang gter tshe dpag med nang sgrub lcags sdong mar grags pa'i sgrub thabs kyi le'u tshan.</i> 2個 (162,6)
3.	29, 311–336	リクズイン・グウデムチェン	<i>bKa' brgyad rang byung rang shar las/ Tshe lha yongs rdzogs kyi phrin las smin byed dang bcas pa padma'i rgyan phreng.</i> 1個 (314,1: 部分的引用) <sup>315</sup>
4.	29, 337–381	サンゲーリンパ (1340–1396. BDRC#P5340) <sup>316</sup>	<i>Tshe sgrub nyi zla kha sbyor las/ Tshe dbang don gyi pra khrid kyi zin bris.</i> 3個 (344,4)
5.	29, 431–493	ラトナリンパ (1403–1479. BDRC#P470)	<i>Tshe sgrub rdo rje phreng ba'i lo rgyus nyi ma'i snying po.</i> 3個 (458,6)
6.	70, 459–466	ラトナリンパ	<i>Yig sna thod pa rdzas ngan la sogs kun thub: rta mgrin nag po'i las tshogs gnam skas ma.</i> 0個 (464,4: ダーラニーの名称のみ) <sup>317</sup>
7.	77, 23–45	ウゲン・ペマリンパ (1450–1521. BDRC#P1693)	<i>Pad gling tshe khrid rdo rje'i phreng ba las spyi la nye bar mkho ba'i rigs khol du phyung ba.</i> 3個 (38,3: 前後逆の二分割式) <sup>318</sup>
8.	6, 131–140	ガリパンチェン・ペマワングル (1487–1542. BDRC#P1699)	<i>dKon mchog gsum gyi gsang sgrub: Rig 'dzin yongs 'dus kyi chos sde'o.</i> 3個 (137,3)
9.	30, 61–151	ガリパンチェン・ペマワングル	<i>Rig 'dzin tshe yi sgrub pa yang gsang bla na med pa'i snying tig ye shes 'od mchog.</i> 3個 (98,1)

<sup>315</sup> RT\_A, vol. 29, p. 314, l. 1: *om bha ga wa te a pa ri mi ta ā yurdznyā na sa pa ri bā ra badzra sa mā dza: dza: hūm bam ho:*

<sup>316</sup> コロフォン (381,4f.) には、ミンギェルドルジェ (Mi-'gyur-rdo-rje. 1645–1667. BDRC#P659) とカルマチャクメー (alias Ārāga. 1613–1678. BDRC#P649) の名前が挙げられている。

RT\_A, vol. 29, p. 381, l. 4: *ces pa sprul sku mi 'gyur rdo rje phyag len bde phyir a rā gas bsgrigs pa la/ nyes pa gang mchis rtsa gsum lha la bshags shing/ dge bas zab gter bstan pa dar zhing rgyas pa dang/ chos mdzad thams cad sku tshe brtan par gyur cig/ mangga lam//*

<sup>317</sup> RT\_A, vol. 70, p. 464, l. 4: *tshe dpag med kyi gzungs rnams bri'o:*

<sup>318</sup> RT\_A, vol. 77, p. 38, l. 3: *om punye punye ma hā punye a pa ri mi ta ā yu: punye: dznyā na sarba ro pa tsi te om sarba sam ska ra pa ri shuddhe dharmā te: ga ga na sa mud ga te swa bhā wa bi shuddhe: ma hā nā ya pa ri wā re swā hā: mu khyud de yi phyi rim la: na mo ratna tra yā ya: [38,4] om na mo bha ga wa te: a pa ri mi ta ā yurdznyā na: su bi nishtsi ta te dzo rā dzā ya: ta thā ga tā ya: a ra ha te: sam myag: sam buddhā ya: tadya thā: de yi phyi rim mu khyud la:*

10.	30, 153–201	ガリパンチェン・ペマワンゲル	<i>Rig 'dzin yongs 'dus las/ Tshe sgrub ye shes 'od mchog gi gsang sgrub phrin las kyi byang bu ye shes 'od kyi thig le.</i> 1個 (170,5: 部分的引用) <sup>319</sup>
11.	47, 483–496	ドルジェダク・リクズイン 2世レク デンドルジェ (1512–ca. 1580. BDRC#P1701)	<i>bDud rtsi 'khyil ba 'chi med tshe'i rgyud don rnal 'byor rgyun gyi nar ma ye shes snying po.</i> 3個 (486,1)
12.	75, 223–267	バンリ・リクズイン・ ジャツオンニンポ (1585–1656. BDRC#P882)	<i>'Ja' tshon ma ning zhi ba'i las tshogs mkha' 'gro grib sel bklags chog tu bkod pa shel dkar bum pa'i chu rgyun.</i> 3個 (233,2)
13.	79, 1–19	ハツン1世ナムカイジグメ (1597–1650. BDRC#P1691)	<i>Tshe g.yang 'gugs pa'i phrin las khrigs su bsdebs pa tshe bsod 'dod rgu'i dpal ster.</i> 0個 (6,5: ダーラニーの名称のみ) <sup>320</sup>
14.	31, 295–316	ロントン・ペマデチェンリンパ (1663–1713. BDRC#P669)	<i>Klong gsal mkha' 'gro snying thig gi yan lag tshe sgrub rdo rje rgya mdud kyi yang gsang smin byed zab mo mdor dril bkod pa bdud rtsi'i bum bzang.</i> 0個 (316,1: ダーラニーの名称のみ) <sup>321</sup>
15.	29, 269–294	サキャティチェン31世 ガワンクンガーロドゥ (1729–1783. BDRC#P805)	『不死の成就の種子_B』 2個 (273,1 and 291,4)
16.	76, 145–170	リクズイン・トウクチョクドルジェ (ca. 18c. BDRC#P682)	<i>rTsa gsum thugs sgrub dbang chen 'dus pa las/ bKra shis gter sgrub kyi las byang bde legs kun 'byung.</i> 3個 (155,5) <sup>322</sup>

上の表12によって、次の5点、即ち——

(1.) 『チャッキドンポ』の他に <無量寿宗要経> に比定されるダーラニーを引くテルマが少なくとも15点見在すること。この中にはリクズイン・グウデムチェンが発掘した他の2点のテルマも含まれること、

<sup>319</sup> RT\_A, vol. 30, p. 170, l. 5: *om na mo bha ga wa te a pa ri mi ta sogs tshe gzungs mtshan brgya rtsa brgyad par grags pa ci nus bzlas te.*

<sup>320</sup> RT\_A, vol. 79, p. 6, l. 5: *tshe dpag med kyi gzungs ring yang bzla.*

<sup>321</sup> RT\_A, vol. 31, p. 316, l. 1: *tshe dpag med kyi gzungs sngags 'don:*

<sup>322</sup> RT\_A, vol. 76, p. 155, l. 5: *snang mtha' 'od dpag med pa'i sngags: om na mo bha ga ba te a pa ri mi ta ā yurdznyā na su bi niṣhṭsa ta te dzo rā dzā ya: ta thā ga tā ya: arha te samyaksam buddhā ya: tadya thā: om puṇye puṇye ma hā puṇye: a pa ri mi ta puṇye: a pa ri mi ta puṇye: dznyā na sam bhā ro pa tsi te: om sarba saṃskā ra pa ri shuddha dharma te: ga ga na sa mungga te swa bhā ba bi shuddhe: ma hā na ya pa ri bā re swā hā:*

(2.) 15点のテルマの中には、ダーラニーを部分的に引用するもの、また、ダーラニーの名称にのみ言及するものが見在すること。ダーラニーの名称は、「[無量] 寿 [仏] のダーラニー」(*tshe gzungs*)、「無量寿仏のダーラニー」(*tshe dpag med kyi gzungs*)、「無量光仏のダーラニー」(*snang mtha' 'od dpag med pa'i sngags*) と呼称され、一定していないこと、

(3.) <無量寿宗要経> に比定されるダーラニーを引くテルマは、ベムセー・ドンマサンポ (ca. 12c) を除外すると、12人のテルトゥンによって発掘されていること。この12人の中でリクズイン・グウデムチェンは最も古い時代に位置すること、

(4.) 各テルマが含む「オーム」の個数は、大枠でみて、リクズイン・グウデムチェンのテルマが2個、その他のテルトゥンが3個であること、

(5.) 12人のテルトゥンの年代は、大枠でみて、14–17世紀を中核としており、これは、先にみたプトゥン・リンチェンドゥブ (1290–1364) やケードゥブジェ・ゲレクパルサン (1385–1438) といった14–15世紀のチベット人学僧の年代と重なること、

——という5点が知られる。これらは、繰り返しになるが、ツルプ版『リンチェンテルズ』を筆者が恣意的に徴した結果に基づく考察であって、これを厳密に調査すれば——その方法を筆者は現在持ち合わせていない訳であるが——或いは他に資料を求めるならば、なお多くの見解が立てられるであろう。ベムセー・ドンマサンポのテルマについても詳細な考究が求められるべきである。しかし、ここでは以上にとどめたい。

彼ら12人のテルトゥンが<無量寿宗要経>のダーラニーに関する「知識」を有していたのかという問いに対しては、上の表12からは何も導き出し得ない。これを解明にするには、おそらく、リクズイン・グウデムチェンの場合に『照射する陽光』を徴したように、個々のテルトゥンの伝記を丹念に読み進めていくことが一つの手がかりになろう。或いは、「知識」を有していたのか？ という筆者の問いの立て方こそ、問題とされるかもしれない。何故なら彼らテルトゥンは、<無量寿宗要経>に比定されるダーラニーを引くテルマを14–17世紀を中核として発掘したものたちであり、彼らに作家としての「知識」は必ずしも問われないからである。

リクズイン・グウデムチェン (1337?–1406) が、先人、例えば、ロンチェンラブジャンパ・ティメーウーセル (Klong-chen-rab-'byams-pa Dri-med-'od-zer. 1308–1364. BDRC#P1583) のテキストを借用していたこと (textual borrowing) は、TURPEINEN 2015 によって既に指摘されているが (p. 218), <sup>323</sup> 先行する諸々のテキスト群をリクズイン・グウデムチェンが「知識」として收拾していたのかどうかは、なおいつその精査が期されるところである。リクズイン・グウデムチェンに何らかのかたちで帰されるテキスト中に

<sup>323</sup> See TURPEINEN 2015:218: 'Gödem's indebtedness to the tradition is also obvious in the textual borrowing of the anthology. *The Unimpeded Realization* contains eleven texts that are directly adopted from *The Seminal Heart of the Dākinīs* revealed by Tsultrim Dorjé, and compiled into *The Seminal Heart in Four Partas* by Longchenpa. Ten of these texts are ritual texts (tantric empowerments, *sādhana*s and an offering ritual) and one contains six tantras of Liberation Through Wearing. The fact that especially ritual texts akin to normative tantra are borrowed from this earlier collection indicates Gödem's willingness to base the ritual foundation on the tradition, while the anthology's Dzokchen texts, which are ranked superior, seem to be his contributions. [...] in the light of Tibetan customs, Gödem's textual borrowing is a rather natural phenomenon, which points to his faithfulness to the Seminal Heart tradition, in addition to giving us invaluable clues to the content of his library and his sources of literary inspiration'.

は、『チャッキドンポ』への〈無量寿宗要経〉からの引用の他、『ヴァジュラキーラの長寿成就法』(*rDo rje phur pa'i tshe sgrub*)には、『秘密心髓真性決定』(\**Guhyagarbha-tattvanirṇaya; gSang ba'i snying po de kho na nyid nges pa*. D 834; P 457)からの引用を見出し得る。<sup>324</sup> こうした引用テキストをその典拠と共に整理し、一覧にすることは、新しい寄与となろう。<sup>325</sup>

チベットにおける著作家性 (authorship) は、CABEZÓN 2001 の論考に見られるように、「暗黙の論理」(‘an implicit theory’, p. [233]) が機能しているものと見られる。チベットにおいて哲学がその最盛期に達した13—16世紀のチベット人学者の著作は、明らかにこの問題を「一種の「絢交ぜ」」(‘a kind of “promiscuity”’, p. 251)に取り扱っており、著作家に帰属することなくテキストを借用することは、むしろ「慣習」(‘the rule’, p. 251)であった。<sup>326</sup> 従って、個々のテキストに個別の著者を想定することは、すこぶるナイーヴなもの見方、研究方法であるといえよう。このことは、既に第2.9.5章において、あるテキスト(テキストa)の責任表示者(e.g. 説話者／著者)や読者が、明示的に、或いは、暗示的に、別のテキスト(テキストb)を引用したり参照したりすることの意味について、間テキスト性という概念を援用して考察したとおりである。

ただ、彼らテルトゥンをして、実際の著者 (de facto author) とする etic な立場に立てば、(1.) 14—15世紀のチベット人学僧の間にこのダーラニーが知られていたように、(2.) 14—17世紀に出現した名だたるテルトゥンの間にもこのダーラニーは流通していた、という〈無量寿宗要経〉に比定されるダーラニーに関する2つの潮流が、ここに指摘し得るであろう。一方、パドマサンバヴァ (ca. 8世紀) がこれらのテルマを記して秘匿したとする emic な立場に立てば、ギルギット写本や敦煌文書をして、パドマサンバヴァの活動年代や地域に近接するものと見做し、彼が〈無量寿宗要経〉からその当時、当地で著名であったダーラニーを引用したと理由付けられるであろう。<sup>327</sup>

テキストの借用 (textual borrowing) は、複雑な性格を有し、一面的な類似性をもってテキストの具体的起源を解することの極めて危険であることは、言うを俟たない。従って、明確な結論は導き出し得ないが、〈無量寿宗要経〉の8世紀の流行に遡求し得るパドマサンバヴァにダーラニーの引用を帰し、これがリクズイン・グウデムチェンをはじめとするニンマ派のテルトゥン／ヨーギンの伝統の中に脈々と受け継がれていたとする想定は、上の所論により可能であろう。この想定によれば、当該ダーラニーに関する相続

<sup>324</sup> *gSang ba'i snying po de kho na nyid nges pa*, D 260a1; P 260a1.

<sup>325</sup> この種の試みとしては、例えば、ロンチェンラプジャンパ・ティメーウーセルの全作品を対象に、引用テキストをその典拠と共に提示した ARGUILLÈRE 2008 が挙げられる。

<sup>326</sup> See 1:251: ‘Those of us who work with the Tibetan philosophical/theological literature of this period are of course quite cognizant of its extreme intertextuality. More than intertextual, however, the work of the great Tibetan scholars of this period evinces a kind of “promiscuity” that to the modern Western mind would seem to border on plagiarism. Borrowing without attribution in these sources was of course the rule rather than the exception’.

<sup>327</sup> この etic/emic という研究の視座は、国際ワークショップ New Horizons in Buddhist Studies (November 16, 2019, Tokyo) における筆者の口頭発表 Did Padmasambhava Cite a *Dhāraṇī* from the *Aparimitāyuhṣūtra* in His Longevity Practice? Materials for the Study of the *Tshe sgrub lcags kyi sdong po* の質疑応答中に、David Higgins 博士 (University of Vienna) によって筆者に与えられたものである。ここに記して感謝したい。

は、プトウン・リンチェンドゥブやケードゥプジェ・ゲレクパルサンといった学僧が有していた典籍の「知識」とは、ほぼ無関係に成立していたことになる。

## 2.10. タントンギャルポ伝にみる長寿に関する持明者の死生観

本2.10章では、『チャッキドンポ』を修習した結果、長寿に関する持明者となった成就者の具体的事例として、タントンギャルポ (Thang-stong-rgyal-po. 1361?-1485 BDRC#P2778)<sup>328</sup>の死生観を中心に考察する。

まずタントンギャルポ伝の原典を概観し、彼が『チャッキドンポ』を修習したことを伝える伝記の箇所を確認する(第2.10.1章)。タントンギャルポの伝記群においては、パドマサンバヴァが遺したとされる予言的伝記〈予言書・明灯〉(\**Ma 'ongs lung bstan gsal ba'i sgron me*)が、究極の筋書きとしてその根底に横たわっている。〈予言書・明灯〉から引用される形で記述された、タントンギャルポの寿命と遷化に関する予言を訳出し、考察をすすめる(第2.10.2章)。次に、タントンギャルポの『チャッキドンポ』受法の様子を伝える箇所を訳出し、どのような相続のもとにこれがなされたかについて明らかにする(第2.10.3章)。タントンギャルポに帰される長寿成就法としては、『チメーパルテル』(\**Chi med dpal ster*)と呼び慣らわされるテキスト群が知られる。『チメーパルテル』の所依の経典等につき、先行研究を参照しつつ考察をすすめる(第2.10.4章)。タントンギャルポの伝記中には、彼が遷化に際し遺した辞世が伝わる。彼の辞世の訳出を試み、長寿に関する持明者となった、この大成就者の死生観について推し量る(第2.10.5章)。最後に、タントンギャルポの遷化の様子について、後代の弟子筋にあたるロチェン・ギュルメデチェンが著述した『すべてを明らかにする宝鏡』から、これを伝える箇所を訳出し、〈予言書・明灯〉に予言された内容と比較、参照しつつ、考察する(第2.10.6章)。

### 2.10.1. タントンギャルポ伝の原典

タントンギャルポを被伝者とする伝記資料は、現在に至るまで種々様々なかたちで出版されている。<sup>329</sup>彼の伝記(*rnam thar, rtogs brjod*)には、<sup>330</sup>聖者伝(hagiography)としての性格が認められるが、これはチベット一般の伝統を受け継いだものである。先行研究の中には、被伝者タントンギャルポを「大成就者」(*grub chen*)として理想化し、凡そ125歳もの長寿を成就したとする数々の驚嘆すべき叙述内容について、これを歴史的事実としては受け容れがたいものとする論考(e.g. Tucci 1949)も見られる。<sup>331</sup>この種の論考に対して

<sup>328</sup> タントンギャルポの年代については、彼の諸伝記を詳しく考証し、これを「1361?-1485」と算出した STEARNS 2007 による推定年代が、現在最も信頼のおける研究成果であり、本論文はこの研究成果に従う。See STEARNS 2007: [1]-14.

<sup>329</sup> これらの中には、例えば、子供向けの漫画本である SKAL-BZANG-MKHAS-GRUB 2006 なども含まれよう。

<sup>330</sup> 他の人物の伝記資料も、当然、タントンギャルポの事績を解明する素材となり得る。例えば、イエシェギャルツェン(Ye-shes-rgyal-mtshan. 1713-1793. BDRC#P105)の『レンダーワ・シュンヌーロドゥ伝』(*Red mda' ba gzhon nu blo gros kyi rnam thar*)には、タントンギャルポがレンダーワ・シュンヌーロドゥ(*Red mda' ba gzhon nu blo gros*. 1349-1412. BDRC#P60)に聴聞したという記述が見られる。See *Red mda' ba gzhon nu blo gros kyi rnam thar*, 897,28f. See also SHINGA 2017a:52n33. タントンギャルポの長寿成就法との関連では、この他、ジェツンマ・チューキドンマ(*rJe-btsun-ma Chos-kyi-sgron-ma*. 1422-1455/1467. BDRC#P2CZ7891)の伝記『チューキドンマ伝』(*Chos kyi sgron ma'i rnam thar*. BDRC#W2CZ7892)の精査が期される。

<sup>331</sup> これは、Tucci 1949の『すべてを明らかにする宝鏡』(*Kun gsal nor bu'i me long*)に対する論評である。



は、「[今日の観点からは事実として受け容れがたい叙述内容について] 歴史性がないという理由で切り捨てるのではなく、仏教思想の発展の中にこれを意義付けて解釈すべき」(「[...] Rather than being discarded for lack of historicity, such accounts should be interpreted in light of their significance in the development of Buddhist thought', p. 9) と反駁する GYATSO 1981 のような論考にこそ、<sup>332</sup> 本論文は追従するものだ。

タントンギャルポを主な被伝者とする伝記資料としては、彼の直弟子であるクンチョクパルサン (dKon-mchog-dpal-bzang. fl. ca. 15c) とデワサンポ (bDe-ba-bzang-po. fl. ca. 15c. BDRC#P7845) が著述した『明灯』(gSal ba'i sgron me) と、同じく直弟子のラトゥジャンパ・シェーラパルデン (La-stod-byang-pa Shes-rab-dpal-ldan. fl. ca. 15c. BDRC#P7844) が著述した『稀有なる大海』(Ngo mtshar rgya mtsho) が、まずもって知られる。

『明灯』は、そのコロフォンによれば、クンチョクパルサンがパルリボーチェ (dPal-ri-bo-che) において著述を開始し、その後デワサンポがブータンのワンパルツァム・タチョクノルブガン (Wang-spar-'tshams rTa-mchog-nor-bu-sgang) で書き上げたタントンギャルポの伝記である。<sup>333</sup> 『明灯』という書名は、STEARNS 2007 が指摘するように、パドマサンバヴァが遺したとされる予言的伝記〈予言書・明灯〉(\*Ma 'ongs lung bstan gsal ba'i sgron me)<sup>334</sup> によく影響されたものであろう。<sup>335</sup> 後述する『稀有なる大海』には見られな

---

See TUCCI 1949:162: 'our hopes proved groundless; in this biography actual facts are overcome by legends and accounts of miracles to such an extent that little can be gleaned from it of which we may be certain'.

<sup>332</sup> E.g. GYATSO 1981:8–9: 'In the course of this research we have found B-1 [NB: i.e. the *Kun gsal nor bu'i me long*] to be a useful and informative source for the study of Thang-stong. [...] B-1 accurately reflects the 15th century context in which Thang-stong must be placed. [...] Claims of miraculous occurrences such as instantaneous trips to India, meetings with Buddhist teachers known to have died centuries earlier, and so forth, were integral elements of the vision in Buddhism long before the legends concerning Thang-stong developed. Rather than being discarded for lack of historicity, such accounts should be interpreted in light of their significance in the development of Buddhist thought. It is in this sense that B-1 and the other biographies of Thang-stong have been used in the present study'.

See also GYATSO 1980:111–112, STEARNS 2007:2–11.

<sup>333</sup> gSal ba'i sgron me, 588,5: om̄ ma ñi padme hūm/ grub thob chen po'i rnam thar 'di/ lung bstan thob pa byang ngam ring pa/ dkon mchog dpal bzang gis/ dpal ri bo cher skod na'ng / grub thob chen po dang rje btsun ā sgron chos sgron gnyis kyis/ chos sku snang ba miha' yas kyi gsung rgyun/ sems can 'gro don mdzad tshul skye ba dran pa'i gsung 'gros/ lung bstan pa rnam mos pas thos/ lung dang 'thun par ma tshangs ba rnam kha skangs ba'o// bla ma thang stong rgyal po'i rnam thar gsal ba'i sgron me/ rgya mtsho las chu thigs tsam zhig blangs nas/ lung bstan thob pa mon pa bde ba bzang pos/ wang spar 'tshams rta mchog nor bu sgang gi gnas mchog /mkha' 'gro gsang ba'i brag phug dben pa'i gnas su bskod pa'o// bkra shis dpal 'bar 'dzam bu gling brgyan du dge legs 'phel/mangga lam.

<sup>334</sup> See MARTIN 1997:no. 4 (1048 CE, s.v. *Chos skyong ba'i rgyal po srong btsan sgam po'i bka' chems*), STEARNS 2007:3–4, 465n4, 490n281, SHINGA 2016:110n20.

<sup>335</sup> STEARNS 2007:5–6: 'The Bright Lamp (*Gsal ba'i sgron me*), a name obviously borrowed from the biographical prophecy mentioned above, was originally written at Tangtong's monastery of Riwoché by Könchok Palsang, who was from nearby Ngamring in the same district of Latö Jang in western Tsang'.

い<予言書・明灯>からの引用が認められる。『明灯』には、しかし、『チャッキドンポ』に関する言及は見在しない。

『稀有なる大海』は、そのコロフォンによれば、シェーラプパルデンが36歳の時にパルリボーチェ (dPal-ri-bo-che) において書き上げられた。<sup>336</sup> シェーラプパルデンの年代は、『稀有なる大海』の執筆時期を含め、その詳細は不明であるが、「木の男辰年」(shing pho 'brug gi lo≈西暦1484年)が『稀有なる大海』における最後の年代として知られることから、<sup>337</sup> STEARNS 2007 はその執筆時期を「1485年から1517年の間」(‘during the period between 1485 and 1517’, p. 7)と想定している。<sup>338</sup> 『稀有なる大海』には、パドマサンバヴァが遺したとされる予言的伝記<予言書・明灯>の引用例が見在せず、『チャッキドンポ』に関する言及も見出し得ない。

以上2つの伝記は、National Library of Bhutan (Thimphu, Bhutan) が1984年から1985年にかけて、3巻本の木版刷ウチェン字本として出版したタントンギャルポの全集 (*Grub chen thang stong rgyal po'i bka' 'bum*, Siglum ThKB) に収録されており、本論文はこれを使用した。<sup>339</sup>

この他、クンガーソナムダクパペルサン (Kun-dga'-bsod-nams-grags-pa-dpal-bzang. b. 15c.. BDR#P1KG4595) が著述した『涅槃のご様子』(*Mya ngan las 'das pa'i skor*) が、彼の父シェーラプパルデンの著書『稀有なる大海』を補完するかたちで出版されている。<sup>340</sup> タントンギャルポの般涅槃の様相をありありと記録した、この『涅槃のご様子』と名付けられた伝記資料は、STEARNS 2007 の巻末に付されたエディションを本論文は使用した。『涅槃のご様子』には、<予言書・明灯>からの引用例は認められるが、『チャッキドンポ』に関する言及は見在しない。

<sup>336</sup> *Ngo mtshar rgya mtsho*, 565,1: *grub thob chen po lcags zam pa'i rnam par thar pa ngo mtshar rgya mtsho zhes bya ba/ yul mchog tu gyur pa la/ dad pa brtan po dang ldan pa rnam kyis/ yang yang bskul ba'i ngor/ rje nyid kyi zhabs rdul spyi bos len pa/ las stod byang pa/ shes rab dpal ldan gyis/ lo sum cu rtsa drug pa la/ dpal ri bo che phyogs thams cad las rnam par rgyal ba'i rtse nas bkod pa'i yi ge pa ni/ 'jam dbyangs legs pa dang / kun dga' dpal ldan no// 'gro ba rnam la phan thogs par gyur cig/ shu bham//*

<sup>337</sup> *Ngo mtshar rgya mtsho*, 561,2: *rten gsum 'di dag shing pho 'brug gi lo yan lo sum cu rtsa brgyad kyi bar la/*

<sup>338</sup> STEARNS 2007:7: ‘Since the last date mentioned in Sherab Palden’s work is 1484, he almost certainly wrote his biography of Tangtong during the period between 1485 and 1517, while it was generally believed that the master was still alive’.

<sup>339</sup> ThKB は、『稀有なる大海』(vol. 1, pp. 1–565), 『明灯』(vol. 2, pp. 1–589) の他、タントンギャルポの長寿成就法として、<チメーパルテル>を収録する(vol. 3, pp. 739–756)。

『稀有なる大海』には、他に出版情報が未確定な異本(BDR#W1KG4592)の存在が知られる。同じく木版刷ウチェン字本である当該資料は、おそらくThKBに先行する出版物であるが、部分的に欠落も見られる。

<sup>340</sup> *Mya ngan las 'das pa'i skor*, 462,1: *grub thob chen po'i rnam thar phyi ma mya ngan las 'das pa'i skor 'di nyid grub thob chen po'i thugs sras dam pa rje bla ma shes rab dpal ldan gyis mdzad pa'i rnam thar ngo mtshar rgya mtsho'i kha skong du/ de nyid kyi sras sngags ram pa kun dga' bsod nams grags pa dpal bzang la/ grub thob chen po'i gdung brgyud dri ma med pa/ blo gros rgyal mtshan pa'i bkas bskul nas mdzad pa 'di ni las bdag rta mgrin gyis rnam thar chan mo'i kha slongs su zhal shus nas bris pa'ol/*

これら先行する伝記群を相互に齟齬のないよう纏め上げた伝記として、後代の弟子筋にあたるロチェン・ギルメデチェン (Lo-chen 'Gyur-med-bde-chen. 1540–1615. BDRC#P644) が著した『すべてを明らかにする宝鏡』(Kun gsal nor bu'i me long) が挙げられる。コロフォンによれば、『すべてを明らかにする宝鏡』は、タントンギャルポの死後 125年にあたる「地の女酉年」(sa mo bya'i lo~西暦1609年)に、エワムガツキル (E-wam-dga'-'khyil) で書き上げられた。<sup>341</sup> 『明灯』等の先行する伝記群が写本で、即ち、前述したタントンギャルポの全集 (ThKB) に収録されて 1984年から1985年にかけて出版されるまでの間は稀覯本であった事情と異なり、『すべてを明らかにする宝鏡』は木版刷で出版され、広く流布した。<sup>342</sup> 本論文において使用した3つの版本 (Sigla K\_A, K\_B, K\_C) の一つ K\_A (BDRC#W4CZ1085) は、この17世紀の最古版である可能性があるが、詳細は不明である。今後の学究に期したい。

『すべてを明らかにする宝鏡』には、〈予言書・明灯〉の引用、及び『チャッキドンポ』に関する言及が認められる。先行する伝記群には認められない、タントンギャルポの『チャッキドンポ』受法に関する具体的記述が『すべてを明らかにする宝鏡』に見在する事由について、どのように考えたらよいであろうか。『すべてを明らかにする宝鏡』のタントンギャルポ伝としての性格は、前述した通り、先行する伝記群を相互に齟齬のないよう纏め上げた伝記、という点に主に見出されるが、先行する伝記群の間に異同が見られる場合には、STEARNS 2007 が指摘するように、「先行文献間の相反する記述を独自に意味づけて、一つの首尾一貫したストーリーを創出しようとする」(‘he has tried to make sense of the extremely different accounts in the ancient sources and create a coherent story’, STEARNS 2007:9) 嫌いがある。この傾向は注意されるべきであるが、タントンギャルポの『チャッキドンポ』受法に関する具体的記述がロチェン・ギルメデチェンによる独創だと、直ちに決めつけることはできない。やはり、何らかの先行文献、或いは口承を伝えるものであろうという想定が妥当と考えられる。

ロチェン・ギルメデチェンの相承については、シャンパカギユ派の、中でもタントンギャルポに連なるタン派 (Thang-lugs) の相承系譜が、『シャンパカギユ派の祖師伝金鬘』(Shangs pa gser 'phreng) に基づき参照されてきた (e.g. SMITH 2001)。<sup>343</sup> ロチェン・ギルメデチェンは『時輪タントラ』(Kālacakrantra) の権威として知られ、彼の自伝と伝わる『青蓮華鬘: 伝記風祈願』(rNam thar gsol 'debs utpa la'i phreng ba) によれば、STEARNS 2007 の考察に見られるように、<sup>344</sup> チョナン派 (Jo-nang) の師ラトナバドラ

<sup>341</sup> Kun gsal nor bu'i me long, K\_A 181a?5; K\_B 345,4; K\_C 343,15: grub pa mchog gi bsti gnas dpal gyi [gyi suppl. B, C] om. A] ri bo che'i [che'i A] chen po'i B, C] mgul pa e wam [wam B, C] wam A] dga' 'khyil du grub thob chen po gshegs nas lo brgya dang nyer lnga sa mo bya'i [mo bya'i B, C] pho pyis 'i A] lo hor zla bcu pa'i tshes bco lnga la legs par grub pa'i yi ge pa ni rgyal dbang dkon mchog 'byung gnas kyis bgyis pa'i rnam thar stengs nas/ sa mo lug gi lo la yul la stod phyogs kyi ldum bu bas bris pa 'dis kyang skye dgu rnams la dge legs su gyur cig/ [rgyal dbang dkon mchog 'byung gnas ... cig/ B, C] sna tshogs kyis bgyis pa skya dgu rnams la dge legs su gyur cig/ shubham// A].

<sup>342</sup> See STEARNS 2007:8–9.

<sup>343</sup> See SMITH 2001:53–57, i.a. p. 56–57. 『シャンパカギユ派の祖師伝金鬘』におけるロチェン・ギルメデチェン伝の箇所情報 (Shangs pa gser 'phreng, 669–670) も参照されている。

<sup>344</sup> See STEARNS 2007:9–10.

(Ratna-bha-dra. 1489–1563. BDRC#P2417) や、ジェツン・ソナムツェモ (rJe-btsun bSod-nams-rtse-mo. fl. ca. 15c. BDRC#P5712), そして、クンガードルチョク (Kun-dga'-grol-mchog. 1507–1565. BDRC#P2387) 等の師から、チョナン派やサキヤ派 (Sa-skya) の相承を伝授されている。<sup>345</sup> このように他派からも相承くロチェン・ギェルメデチェンの著作については、ZANGPO 2003 によれば、シャンパカギェ派の側から「態度を決めかねる反応」(‘an ambivalent response’, ZANGPO 2003:344) が示されたこともあった。<sup>346</sup>

タントンギャルポは、後に第2.10.3章(『チャッキドンポ』受法の様子)において考察を試みるように、チャンテルの相承に与って『チャッキドンポ』を受法したものと考えられるが、その証跡となる『すべてを明らかにする宝鏡』の著者ロチェン・ギェルメデチェンとチャンテルとの結びつきを明示する具体的根拠は、以上の所論には認められない。今後の学究に期したい。しかしともかく、以上によって、『チャッキドンポ』については、タントンギャルポを被伝者とする伝記資料の中では『すべてを明らかにする宝鏡』が参照、検討されることが明らかとなった。今後の学究の手がかりとしては、タントンギャルポの伝記 (*rnam thar*) の他に、例えば、彼の信奉者が著した祈願文 (*gsol 'debs*) の精査も含まれよう。<sup>347</sup> 祈願文の中には、素材的にも古い時代に源流をたずねることができるものもあり、厳密なことは言えないが、被伝者の事績を具体的に示唆する記述が認められるからである。これらの具体的素材は、宗派を超えて求める必要がある。このことは、以上の所論によってよくご賢察いただけるであろう。

### 2.10.2. 寿命に関する予言

パドマサンバヴァに帰される〈予言書・明灯〉は、タントンギャルポの寿命に関して次のように予言している。

*Kun gsal nor bu'i me long*, K\_A 178b5; K\_B 341,2; K\_C 339,3<sup>348</sup>

その方(タントンギャルポ)の寿命の長さについて、〈予言書・明灯〉は次のように[予言している]:

「[その方の] 寿命の長さは、81歳である。  
[しかし] 寿命を司る女神の滋養を成就すれば、  
それによって長い [寿命] が可能となる」

<sup>345</sup> *rNam thar gsol 'debs utpa la'i phreng ba*, 432–434.

<sup>346</sup> See ZANGPO 2003:344: ‘In the past, Gyurmé Déchen’s work met with an ambivalent response in the Shangpa tradition’.

<sup>347</sup> 例えば、クントウル・ロドウターイエ (Kong-sprul Blo-gros-mtha'-yas. 1813–1899. BDRC#P264) が著したタントンギャルポへの祈願文『成就の調べ』(*Grub pa'i sgra dbyangs*) が挙げられる。

<sup>348</sup> *Kun gsal nor bu'i me long*, K\_A 178b5; K\_B 341,2; K\_C 339,3: *sku tshe'i tshad* [*tshe'i tshad* A, B] *tshe'i C*] *lung bstan las*

*brgya bcu* [*brgya bcu* B, C] *brgyad cu* A] *phrag gcig tshe'i* [*gcig tshe'i* B, C] *gicag tshe yi* A] *tshad*//  
*tshe 'dzin lha mo'i bcud bsgrubs na*//  
*de bas ring ba thub par 'gyur*//

Cf. *gSal ba'i sgron me*, 102,4f. As translated into English in STEARNS 2007:435.

『すべてを明らかにする宝鏡』がその巻末に〈予言書・明灯〉から引用するかたちで言及する上の予言には、タントンギャルポの寿命の長さ (*tshe'i tshad*) がもともと 81歳であること、しかし、寿命を司る女神 (*tshe 'dzin lha mo*) の滋養 (*bcud*) を成就すれば、より長い寿命が可能となることが予言、説示されている。<sup>349</sup> 当該の予言は、『明灯』にも引用例が見られ、『すべてを明らかにする宝鏡』はこれを参照したものと想定される。しかし、STEARNS 2007 が注記しているように、<sup>350</sup> 『明灯』では彼の寿命はもともと「83歳」とされていることに注意が必要である。<sup>351</sup> 当該の予言に説示される「寿命を司る女神の滋養」は、『すべてを明らかにする宝鏡』の文脈において、『チャッキドンポ』を明確に意図するものとはいえないが、『明灯』の文脈では、この「寿命を司る女神」が広く「チャンドーリー女神」だと解し得、<sup>352</sup> ここに『チャッキドンポ』との会通がはかれる可能性がある。

### 2.10.3. 『チャッキドンポ』受法の様子

タントンギャルポの『チャッキドンポ』受法は、『すべてを明らかにする宝鏡』に次のように叙述されている。

*Kun gsal nor bu'i me long*, K\_A 23b5; K\_B 48,6; K\_C 47,17<sup>353</sup>

遁世者ダウンユギャルツェンが聖なるタサン山にいらしたとき、[... 彼は次のように] お付きのものに仰った：

<sup>349</sup> 既に第2.7.2章 (『心成就法ダクポツァルの法類』の発掘と伝承) において注意したように、チベット人の年齢、寿命の数は年数 (*lo ngo*) によってなされる。See YAMAGUCHI (山口) 1982:148.

<sup>350</sup> See STEARNS 2007:476n114.

<sup>351</sup> *gSal ba'i sgron me*, 102,3:  
*tshe lo brgyad bcu phrag gsum thub/*  
*tshe 'dzin lha mo bcud grub nas/*  
*de bas ring pa thub par 'gyur/*

<sup>352</sup> *gSal ba'i sgron me*, 50,5: *nga'i ming ni mgon po tshe dpag med ces bya ba'o/ yum ni tshe'i lha mo tsan dha li zhes bya'o/ nye ba'i 'khor ni khro bo rta mgrin dang bdud rtsi 'khril ba'o//*  
 Cf. STEARNS 2007:583n1127.

<sup>353</sup> *Kun gsal nor bu'i me long*, K\_A 23b5; K\_B 48,6; K\_C 47,17: *kun spangs don yod rgyal mtshan gnas chen ri bo [ri bo B, C] ri rgyal ri bo A] bkra bzang na bzhugs pa'i skabs su/ [...] dge slong brtson 'grus da [da B, C] de A] 'dir gter chos rnam gsan pa la myur du 'byon par [par B, C] pa A] 'dug// khong gter kha 'di'i tshe sgrub lcags kyi sdong po la tshe'i rig 'dzin brnyes nas bu slob skar tshogs kyi grangs dang mnyam pa bsdus longs spyod mtha' yas [yas B, C] yas pa A] 'bul ba gda' zhes 'khor rnam la gsungs so [so B, C] ngo A]/*

*de nas grub thob chen po tshes bcu'i nyin dge slong gi kun spyod gtsang bas/ gnas chen ri bo bkra bzang du phebs/ kun spangs chen pos bdag la bka' gter gyi zab chos yongs su rdzogs pa zhig gnam ba mkhyen/*

[...] *rang la gang yod kyi chos bdag po la los 'bul gsung / bka' ma'i sgyu 'phrul sogs dang / rig 'dzin rgod kyi ldem 'phru can [rgod kyi ldem 'phru can A] rgod sgro can B, C] gyi gter chos kyi dbang lung man ngag yongs su rdzogs pa gnam ba'i [...].*

Cf. *Ngo mtshar rgya mtsho*, 12,4f. As translated into English in STEARNS 2007:130.

「ツンドウ」<sup>354</sup> という名の比丘がテルマを受法するためにもうすぐここ（タサン山）に到着する。彼はそのテルマである長寿成就法『チャッキドンポ』によって長寿に関する持明者[の位]を得る。そうして[彼は]、弟子を空の星の数ほど集め、[弟子たちは彼に] 数え切れない程の富を捧げるであろう」

その後、大成就者（タントンギャルポ）は、比丘の出で立ちで[パドマサンバヴァの縁日である] 10日に聖なるタサン山に到着され、[遁世者ダウンユギャルツェンに次のように仰った:]

「大遁世者よ、どうぞ私にカーマ（口頭伝承）とテルマの甚深なる法を余すことなくお授けくださいますように」

[... 遁世者ダウンユギャルツェンは大成就者（タントンギャルポ）に]「私にあるものは何でもそっくり、法の持ち主に捧げましょう」とおこたえになり、[大成就者（タントンギャルポ）に] \**Guhhyagarbhatattvaviniścaya* 等のカーマと、リクズイン・グウデムチェン[が発掘した]テルマの教えに関する灌頂／誦伝／口伝を完全なかたちでお授けになった。

『すべてを明らかにする宝鏡』の叙述によれば、タントンギャルポは、遁世者ダウンユギャルツェンからリクズイン・グウデムチェンが発掘したテルマの教え (*gter chos*) に関する灌頂／誦伝／口伝を授けられている。その文脈上に「そのテルマである長寿成就法『チャッキドンポ』」 (*gter kha 'di'i tshe sgrub lcags kyi sdong po*) が位置付けられている以上、この機会に『チャッキドンポ』を含めた「完全なかたちで」チャンテルの相承をダウンユギャルツェンから授けられたものであろう。

タントンギャルポは 500人もの師に学んだと伝記に伝わる。<sup>355</sup> タントンギャルポの修学事情については、SHINGA 2017a において一考察を試みた通り、チャンテルの他にも、サキヤ派、カギユ派、ジョナン派、カーダム派からの伝授、相承が認められ、他派にも寛容で開放的な、即ち、非閉鎖的で非排他的な修学の様子が伺われる。<sup>356</sup> このような宥和的傾向は、HADANO (羽田野) 1965 (1986–1988) によって論評されているように、14–15世紀チベットの仏教界における一般的風潮と見做し得、タントンギャルポは、同時代のツォンカパ・ロサンタクパ (Tsong-kha-pa Blo-bzang-grags-pa. 1357–1419. BDRC#P64) 同

<sup>354</sup> 『稀有なる大海』及び『すべてを明らかにする宝鏡』によると、タントンギャルポは、サキヤ派の法主ペルジョルシェーラブ (Chos-rje dPal-'byor-shes-rab. b. 14c. BDRC#P62) のもとで比丘戒を授けており、その戒名は brTson-'grus-bzang-po/brTson-'grus-seng-ge と伝わる。See SHINGA 2017a:43–45.

<sup>355</sup> *Kun gsal nor bu'i me long*, K\_A 179a3; K\_B 341,6; K\_C 228,6:  
*nga bod kyi skyes bu lcags zam pa//*  
*skye ba 'bum phrag du ma ru//*  
*sems can don du smon lam btab//*  
*sangs rgyas bstan la bya ba byas//*  
*yang dag bla ma brgya phrag lnga//*  
*'bral med gus pas gtsug tu bsten [bsten C] brten A, B]//*  
 Cf. *Ngo mtshar rgya mtsho*, 389,1f.

<sup>356</sup> See SHINGA 2017a:46: 'Thang-stong owes his doctrinal and spiritual training to numerous lineages, basically spanning all the major traditions of Tibetan Buddhism of his time'.

様, ‘可能な限りの全仏教を求めるというゆきかた’ (vol. 1 (チベット篇1), p. 301) をし, ‘広く仏教を研学し三乗を兼修’ したものと考えられる。<sup>357</sup>

タントンギャルポが同年代のリクズイン・グウデムチェンに聴聞したという記述は、しかし、『すべてを明らかにする宝鏡』に見在せず、『チャッキドンポ』を含むチャンテルの相承、即ち、灌頂／誦伝／口伝は、遁世者ダウンユギャルツェン (Don-yod-rgyal-mtshan/Don-yod-rgyal-mtshan-pa. fl. ca. 14c)<sup>358</sup> に与るものとみられる。<sup>359</sup> ダウンユギャルツェンの名は——タントンギャルポの名共々——『チャッキドンポ』の相承系譜 (付録4-6) に見当たらないが、彼がリクズイン・グウデムチェンの直弟子であることは、例えば、クンチョクギャルツェン (dKon-mchog-rgyal-mtshan. BDRC#P10292) が著した『ゴンパサンタル史』 (*dGongs pa zang thal gyi lo rgyus*) が証左となろう。<sup>360</sup> タントンギャルポが同年代のリクズイン・グウデムチェンに聴聞したという記述が『すべてを明らかにする宝鏡』に見在しないことについては、その著者であるロチェン・ギェルメデチェン (Lo-chen 'Gyur-med-bde-chen. 1540-1615. BDRC#P644) がシャンパカギユ派 (Shangs-pa-bka'-brgyud) の相承者であることも、<sup>361</sup> 事由の一つとして関わっているのかもしれない。本論文においてはこれらを未解明のことがらとし、今後の学究に期したい。

#### 2.10.4. 『チメーパルテル』

タントンギャルポにその起源を求め得る長寿成就法としては、『チメーパルテル』 (*'Chi med dpal ster*) と呼び慣らわされるテクスト群が知られる。『チメーパルテル』は、STEARNS 2007 等の所論にみとめられるように、今日伝わるタントンギャルポの教えの中で最も著名であり、<sup>362</sup> またリセンシヨンの相違によっても知られる。<sup>363</sup> GYATSO 1981 は、こ

<sup>357</sup> このように、他派にも寛容で開放的な修学事情は、HADANO (羽田野) 1965 (1986-1988) によれば、サキャパンディタ・クンガーギャルツェン (Sa-skya-paṇḍi-ta Kun-dga'-rgyal-mtshan. 1182-1251. BDRC#P1056) の出現以後の様相である (see p. 301)。

<sup>358</sup> For Don-yod-rgyal-mtshan-pa, see *Ngo mtshar rgya mtsho*, 10,4: *kun spangs don yod rgyal mtshan pa gdan drangs nas/*.

<sup>359</sup> See STEARNS 2007:24, 26, SHINGA 2017a:43, SHINGA 2017b:49.

<sup>360</sup> *dGongs pa zang thal gyi lo rgyus*, 76,5: *gter ston rig 'dzin chen po des/ kun spangs don yod rgyal mtshan la gsungs te/*

<sup>361</sup> タントンギャルポとロチェン・ギェルメデチェンに関するシャンパカギユ派の相承については、クントウル・ロドウターイエが著した『加持大海』 (*Byin rlabs rgya mtsho*) と『優曇華鬘』 (*U dumbara'i phreng ba*) が証左となる。

See ZANGPO 2003:168: ‘Lochen Gyurmé Déchen, nephew of the great accomplished master Tangtong Gyalpo, [...]’. See also STEARNS 2007:9: ‘Lochen Gyurmé Dechen was recognized as an emanation of the Indian master Maitripa and was one of the most respected teachers of his time, especially of the Kālacakra practices and the teachings of the Shangpa Kagyü tradition’.

<sup>362</sup> See STEARNS 2007:28: ‘From among the many teachings of Tangtong Gyalpo that have been passed down until the present day, his life-sustaining techniques are the most famous. These methods, known as the *Glorious Giver of Immortality* (*'Chi med dpal ster*), focus on Amitāyus, who is the Buddha of Infinite Life, and Hayagrīva, who is a terrible form of Avalokiteśvara’.

これらのテキスト群を暫定的に 6種類 (CM-1-CM-3, CM-4-CM-6) に整理し、相承等の内容に関する分析を書誌情報と共に提供している (pp. 142-159)。タントンギャルポの伝記群(『稀有なる大海』『明灯』『すべてを明らかにする宝鏡』)には、STEARNs 2007 が指摘するように、『チメーパルテル』に関する言及が見在しない。<sup>364</sup>従って、この長寿成就法をしてタントンギャルポが発掘したサテル (*sa gter*) であるとする説は、後代の付加だと考えられる。<sup>365</sup>

『チメーパルテル』と呼び慣らわされるテキスト群中には、GYATSO 1981 がその説示内容を分析して明らかにしたように、「赤い *hrīḥ* という種子が、勤修者と一体となった無量寿智仏に変化する」(‘the red seed-syllable ‘*hrīḥ* which turns into the practitioner-as-Aparimitāyurjñāna’, p. 153) というプロセスがみとめられる。<sup>366</sup>『チャッキドンポ』では、これと類似した次第が第3節秘密なる成就法に、*hrīḥ* ではなく *hūm* 字として観想される (§3.4.2)。GYATSO 1981 は、当該のプロセスが後代に付加された可能性を指摘しつつも、無量寿智仏の大典抛として〈無量寿宗要経〉(D 674/P 361) を挙げており、<sup>367</sup>これは、『チャッキドンポ』が〈無量寿宗要経〉に比定し得るダーラニーを引用したとする筆者の想定をよく支持するものである。

GYATSO 1981 はまた、『チメーパルテル』が新訳と古訳の何れのタントラに「関連する」(‘affiliated’, p. 154) かについて、チベット人の著作家／実践者の間に諸見解が見られることも指摘している。即ち、ロンソム・チューキサンポ (Rong-zom Chos-kyi-bzang-po. 11c. BDRc#P3816) 等が翻訳した「新訳のタントラ」(‘the New tantra translations’)<sup>368</sup>

<sup>363</sup> See STEARNs 2007:477n116: ‘Many versions of the teachings of the *Glorious Giver of Immortality* (‘*Chi med dpal ster*) have been preserved’.

本論文における使用テキストは、『リンチェンテルズ』(RT\_A) 所伝の『チメーパルテル』である。

<sup>364</sup> See STEARNs 2007:28 ‘Tangtong Gyalpo’s biographies do not mention the *Glorious Giver of Immortality* by name among the treasure texts extracted from the wall of the cave in Chimpu (Mchims phu)’.

<sup>365</sup> この点について今後精査すべき資料として、チャクサム 7世テンズインイェシエフンドゥブ (bsTan-’dzin-ye-shes-lhun-grub. 1739-1795. BDRc#P2691) の『不死を成就するための口伝』(‘*Chi med grub pa’i zhal lung*) や、サキヤティチェン 29世ガワンクンガタシ (Ngag-dbang-kun-dga’-bkra-shis. 1656-1711. BDRc#P2540) の『チメーパルテルに関する教誡』(‘*Chi med dpal ster gyi sgrub thabs dbang chog man ngag*) 等があげられる。

<sup>366</sup> ‘*Chi med dpal ster*, CP\_A 436,5: *rang tshe dpag tu med par gsal ba’i thugs ka’i hrīḥ yig las ’od ’phros/blā ma dang gnyis su med pa’i bcom ldan ’das mgon po tshe dang ye shes dpag tu med pa la brgyud pa’i bla ma sangs rgyas dang byang chub sems dpa’i tshogs kyis bskor ba om badzra sa mā dzaḥ zhes pas mdun gyi nam mkhar byon pa la/ om gu ru ā yurdznyiā na a pa ri mi ta sa pa ri wā ra maṇḍa le bhyah zhes phyag ’tshal/ na mo gu ru ā yurdznyiā na a pa ri mi ta sa pa ri wā ra argham sogs kyis mchod/ dkon mchog gsum la bdag skyabs mchi//*

(རང་ཚེ་དཔག་ཏུ་མེད་པ་རྟམ་ལ་བའི་གྲགས་ཀའི་རྗེེ་ཡིག་ལས་འཛོད་འཕྲོ་སྤྲོ་སྲ་མ་དང་གཉིས་སུ་མེད་པའི་བཙམ་ལུ་མ་དང་མགོན་པོ་ཚེ་དང་ཡེ་ཤེས་དཔག་ཏུ་མེད་པ་ལ་བརྐྱེད་པའི་སྲ་མ་སངས་རྒྱལ་དང་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའི་ཚོགས་ཀྱིས་བསྟོན་པ་ལོ་བཟླ་སྲ་ལྔ་དེེ་ཞེས་པས་མཉམ་ནུ་གྱི་ནམ་མཁམ་བྱོན་པ་ལ། ལྷོ་ག་རུ་ལྷོ་ལྷོ་ན་ཨ་པ་རི་མི་རྟ་ས་པ་རི་སྲ་ར་མཇུ་ལ་བྱེེ་ཞེས་གྲག་འཚལ་ན་མོ་གུ་རུ་ལྷོ་ལྷོ་ན་ཨ་པ་རི་མི་རྟ་ས་པ་རི་སྲ་ར་མཇུ་སོགས་ཀྱིས་མཚོན་། དཀོན་མཚོག་གསུམ་ལ་བདག་སྐྱབས་མཚེ།)

<sup>367</sup> GYATSO 1981:159n37: ‘Aparimitāyurjñāna is red, but otherwise iconographically identical to the white Sambhogakāya Amitāyus. Cf. To. 65 [sic] (*Ārya-āparimitāyurjñāna-nāma-mahāyānasūtra*). The introduction of this figure into the CM system seems to be a later interpolation, as he is not mentioned in the ancient writing’.



に「関連する」というチャクサム7世テンズインイエシェフンドウプ (bsTan-'dzin-ye-shes-lhun-grub. 1739–1795. BDRC#P2691) による主張と、古訳のタントラに「関連する」というサキヤティチェン29世ガワンクンガタシ (Ngag-dbang-kun-dga'-bkra-shis. 1656–1711. BDRC#P2540) による主張が、例証として挙げられている。<sup>369</sup>『チメーパルテル』が新訳と古訳の何れのタントラに「関連する」かについての広汎な結論は、以上の所論からは抽出し得ない。しかし、上来考察した『チメーパルテル』と『チャッキドンポ』との間の類似点を考慮すれば、このことの究明が『チャッキドンポ』の考察にあたっても鍵となることは明らかであろう。

### 2.10.5. タントンギャルポの辞世

『すべてを明らかにする宝鏡』によれば、タントンギャルポは西暦1485年、128歳にして示寂の時を迎え、次のような辞世を遺したとされる。<sup>370</sup>

*Kun gsal nor bu'i me long*, K\_A 179a5; K\_B 342,1; K\_C 339,19<sup>371</sup>

不滅の力は、不生の領域において究竟となる。

言葉で表現することができないこのような [状態にある] 心は、無明でありながら、明知 [そのものでも] ある。

一切の戯論は、無戯論の領域にゆく。

思考を突破すれば、生死輪廻などお笑い沙汰である。

<sup>368</sup> GYATSO 1981 が ROERICH 1949 を引いて注記しているように、ロンソム・チューキサンポは「通常、古訳のタントラに関連する」ものと考えられる。See GYATSO 1981:159n43: 'Rong-zom was an 11th century scholar, a contemporary of Atīśa, and is usually associated with the Old Tantra tradition. See George Roerich, *Blue Annals*, pp. 160–167.

<sup>369</sup> GYATSO 1981:154–155: 'There is disagreement as to which tantric canon the CM is affiliated. bsTan-'dzin relates the CM to the New Tantra translations of Rong-zom Chos-kyi bZang-po and others. Kun-dga' bKra-shis states that the CM is affiliated to the Old Tantras. This discrepancy may reflect bsTan-'dzin's omission, and Kun-dga' bKra-shis's inclusion, of the Discovered Treasure theory of the origin of the CM, a theory which is tantamount to claiming affiliation to the Old Tantras. The issue perhaps could be resolved after a comparative study of the characteristic features of the Discovered Treasure and the New Tantra Amitāyus systems'.

<sup>370</sup> *Kun gsal nor bu'i me long*, K\_A 179a4; K\_B 342,1; K\_C 339,17: *drug cu skor gnyis dang lo rkyang lnga'i ngo thog gshol rtsis pas dgung lo brgya dang nyer brgyad bzhes pa drug cu skor brgyad pa'i shing mo sbrul lo cho 'phrul chen po'i tshes bzhi'i nyin/*

この「辞世」という日本語は、筆者による。

Cf. KANEKO (金子) 1982:56: 'ガーラプドルジェが臨終遺言 (hdas rjes, shal chems) に遺した'.

<sup>371</sup> *Kun gsal nor bu'i me long*, K\_A 179a5; K\_B 342,1; K\_C 339,19:

*skye med ngang la 'gag med rtsal rdzogs te//*

*brjod med sems de ma rig rig [rig rig A, B] rig sangs C] pa yin/*

*spros pa thams cad spros med ngang du thal//*

*blo 'das yin na 'khor ba dgod [ba dgod B, C] 'das rgod A] re bro/*

As translated into English in STEARNS 2007:436.

思考 (*blo*) が減した状態で詠じられた上の辞世は、生死輪廻 (*'khor ba*) を笑い飛ばすように、それが単なる言語的思考に過ぎないことを、「無明 (*ma rig*) でありながら、明知 (*rig pa*) そのものでもある」といった一見相反する表現を用い、鋭く指摘している。言語表現を憂いつつ詩作されたタントンギャルポの辞世には、彼がサキヤ派の師チョクサンレクパイロドゥー (*mChog-bzang-legs-pa'i-blo-gros. ca. 14c*) に学んだドーハー (*dohā*) の伝統が反映されているものと想定される。<sup>372</sup>

示寂の時を迎えたいま、持寿命者 (*Tshe'i-rig-'dzin*) となった彼が得ようとしている不滅の力 (*'gag med rtsal*) は、不生の領域 (*skye med ngang*) において究竟となろうとしているが (*rdzogs*)、このような状態にある心は、そもそも言語表現を越えており、無明も明知も共に戯論 (*spros pa*) とされる。彼がこれから赴こうとしている不生の領域は無戯論の領域 (*spros med ngang*) であり、生や死といった概念的思考は、そのような境地にある者にとっては、お笑い沙汰 (*dgod re bro*) であろう。

### 2.10.6. 遷化の様子

タントンギャルポの遷化の様子は、『すべてを明らかにする宝鏡』に、パドマサンバヴァに帰される〈予言書・明灯〉を引用した後に、彼の予言が実現するかたちで叙述されている。

*Kun gsal nor bu'i me long*, K\_A 179a3; K\_B 341,6; K\_C 339,14<sup>373</sup>

<sup>372</sup> ドーハーの他、タントンギャルポはチョクサンレクパイロドゥーに無死 (*'chi med*) に関する教えも学んでいる。See SHINGA 2017a:52n25.

*Ngo mtshar rgya mtsho*, 86,3: *thar pa gling gling du/ chos rje mchog bzang pa la/ phyag rgya chen po ga ma/ ga 'u ma/ yi ge bzhi pa/ yi ge med pa/ lhan cig skyes sbyor/ lnga ldan/ phyag rgya chen po brda'i skor brda'i skor/ mdo ha skor/ ro snyoms skor skor/ na ro skor/ 'chi med skor la sogs gsan/*

<sup>373</sup> *Kun gsal nor bu'i me long*, K\_A 179a3; K\_B 341,6; K\_C 339,14:

*u rgyan chen po'i lung bstan las//  
nam zhig 'da' tshul ston pa'i tshe//  
sgra dang 'od du bcas nas su//  
dpa' bo dā ki'i tshogs dang bcas//  
bde ba can du byang chub thob//*

*gSal ba'i sgron me*, 102,4:

*nam zhig mda' tshul bstan pa'i tshe/  
sgra dang 'od du bcas nas su/  
bal po'i yul du dgongs pa bzhag/  
dpa' bo dā ki'i tshogs dang bcas/  
bde ba can du byang chub thob/*

[...] *u rgyan gyis ma 'ong lung bstan pa'i le'u ste so dgu pa'o//*

As translated into English in STEARNS 2007:436.

ウッディヤーナの大師の『予言』に次のようにいわれる：

「示寂の時, [その人は]  
 鳴り響く音と輝かしい光に包まれ,  
 大勢の勇者, ダーキニーたちに囲まれて,  
 極楽に [赴き, ] 菩提を得るであろう」

パドマサンバヴァが遺したものとされる <予言書・明灯> には、彼の人が、示寂の時 (*nam zhig 'da' tshul ston pa'i tshe*), 鳴り響く音と輝かしい光に包まれ、大勢の勇者 (*dpa' bo*) やダーキニーたちに囲まれて極楽 (*bde ba can; sukhāvati*) に赴き、菩提を得ることが予言されている。

『すべてを明らかにする宝鏡』の文脈では、この予言の後にタントンギャルポの辞世が挿入され、その後、彼の遷化の様子が次のように描出されている。

*Kun gsal nor bu'i me long*, K\_A 179a6; K\_B 342,2; K\_C 340,2<sup>374</sup>

[大成就者(タントンギャルポ)が辞世を] 述べられるや否や、稲妻が走った。ダーキニーの符牒が轟々と鳴り響き、色々な音が様々鳴り渡り、サンスクリット語が朗々と鳴り伝わった。すると大成就者のお身体は光の塊となり、[お身体から発せられる] 光線はよろずの方角に拡散した。[大成就者のお身体は] 瞑想小屋の上空に上昇していった。大勢の勇者、ダーキニーたちは、この機会に虹色の様々な [1.] 宝蓋, [2.] 勝幢, [3.] 裏衣香 (*phye phur*)<sup>375</sup>, [4.] ヤクの毛で作った扇等々 [の財宝] や、様々な音楽をもって [大成就者を] 奉迎した。地上は余すところなく隅々まで薫香が満ちた。

タントンギャルポの遷化時に起きた現象、即ち——(1.) 稲妻が走り、(2.) ダーキニーの符牒 (*mkha' 'gro'i brda skad*) が轟々と鳴り響き (*mang po 'ur 'ur*), (3.) 色々な音 (*sgra*) が様々鳴り渡り (*chem chem*), (4.) サンスクリット語が朗々と鳴り伝わった (*lhang lhang ba*)<sup>376</sup>——というこれらの現象は、「示寂の時、鳴り響く音 (*sgra*) に包まれる」という <予言書・明灯> に記された予言を具現化したものとして展開している。

<sup>374</sup> *Kun gsal nor bu'i me long*, K\_A 179a6; K\_B 342,2; K\_C 340,2: *zhes gsungs pa'i mod las/ 'od kyi glog [glog B, C] klog A] 'khyug cing mkha' 'gro'i brda [brda B, C] brda' A] skad mang po 'ur 'ur/ sgra sna tshogs chem chem/ sam [sam B, C] sam A] skr ta'i skad lhang lhang ba'i skabs der/ grub thob chen po'i sku 'od kyi phung po [po B, C] po'i A] 'od zer phyogs brgyar [brgyar A, B] brgyad C] 'phro ba zhig tu song ste/ sgrub khang gi steng gi [steng gi suppl. A] om. B, C] nam mkhar 'phags so/ de'i tshe dpa' bo dang mkha' 'gro mang pos 'ja' 'od kha dog sna tshogs pa'i [pa'i B, C] pa A] gdugs dang rgyal mtshan dang phye phur [phye phur B, C] 'phye 'phur A] dang rnga yab la sogs pa [pa B, C] pa'i A] dang rol mo'i sgra sna tshogs kyi bsu zhing / sa gzhi thams cad spos kyi dri zhim pos khyab ste/*

As translated into English in STEARNS 2007:436.

<sup>375</sup> Cf. JÄSCHKE, s.v. *phye*: 'flour, meal' 'flour of parched barley'; s.v. *spos phye, tsandan gyi phye ma*: 'sandlewood powder, fumigating powder'. See also Saddhp, s.v. '*phye*: 'sakkin'. See also 『藏漢』 s.v. *phye phur* (p. 1758): '*mchod rdzas kyi bye brag ste/ ras dang gos chen sogs kyi bzos pa'i dri bzang phye ma phur ma'i snod cig*'.

<sup>376</sup> Cf. JÄSCHKE, s.v. *lhang nge*: 'clear, distinct, to the sight as well as to the ear'; s.v. *kyi skad lhang lhang pa*: 'the clear (loud) barking of dogs'; s.v. *lhang lhang brjod la*: 'speaking with a clear, sonorous voice'.

この現象の後、タントンギャルポの身体は光の塊 (*'od kyi phung po*) となり、その身体から発せられる光線はよろずの方角に拡散した。そうして彼は、彼が愛用した故郷リンチェンデイン (*Rin-chen-sdings*) の瞑想小屋 (*sgrub khang*) の上空に上昇していったという。これらの事象は、「輝かしい光 (*'od*) に包まれる」という予言を成就するものであろう。この機会に大勢の勇者やダーキニー (*mkha' 'gro*) たちは、虹色 (*'ja' 'od kha dog*, 七色?) の様々な財宝や、様々な音楽 (*rol mo'i sgra*) をもって タントンギャルポを奉迎した (*bsu*) という。この歓待は、「大勢の勇者、ダーキニーたちに囲まれて、極楽に赴き、菩提を得る」という予言を完遂するものであり、その時地上は余すところなく隅々まで薫香が満ちたというのは、大地にも喜び、祝福されたことを表現するものであろう。

## 第3章 結論

本第3章では、結論として、以上の第1章、及び、第2章における論考に基づいて明らかになった点と、残された課題を要約して提示したい。

第1章では、序論として、長寿成就法『チャッキドンポ』校訂・訳注研究の前提となる基本的枠組みを提示した。まず *tshe sgrub* (長寿成就法) の思想的意義やチベット大蔵経における長寿成就法の原典について調べ、長寿成就法『チャッキドンポ』の系譜を整理した。

第2章では、長寿成就法『チャッキドンポ』の概要を10側の側面に、即ち——(1.) チャンテル、(2.) 使用した3本のテキストを収録する集成類、(3.) タイトルと節構成、(4.) 記述言語、(5.) 起源、(6.) 埋蔵の経緯、(7.) 発掘の経緯、(8.) 称えられる功德、(9.) <無量寿宗要経> からダーラニーを引用した可能性、そして、(10.) 成就者の事例——に分け、第2.1章から第2.10章まで順に考察した。

本章では、結論として、前章の考察結果に基づく結論を第3.1章から第3.3章まで3つの章に分け、(1.) 『チャッキドンポ』の起源、埋蔵、発掘、記述言語についての考察結果、(2.) 『チャッキドンポ』が<無量寿宗要経> からダーラニーを引用している可能性についての考察結果、そして(3.) 『チャッキドンポ』を修習した結果、長寿に関する持明者となった成就者の具体的事例として、タントンギャルポの事績を中心とする考察結果について、これらを要約し、残された課題と共に提示する。

### 3.1. 『チャッキドンポ』の起源、埋蔵、発掘、記述言語について

#### 3.1.1. 『チャッキドンポ』の起源について

長寿成就法『チャッキドンポ』の起源、即ち、パドマサンバヴァが如何にして当該成就法を会得したかについては、第2.5章において、『チャッキドンポ』から関連箇所を抽出し、その後、サキャティチェン31世ガワンクンガーロドゥ (1729–1783) が著した『不死の成就の種子\_B』を参照しつつ、考察をすすめた。

『チャッキドンポ』中には、外なる成就法 (§1.3.3) と秘密なる成就法 (§3.3.1) に、当該長寿成就法の起源に関する言及がみられる。それによれば、パドマサンバヴァは、この不可思議な寿命の成就法 (§3.3.1: *tshe yi sgrub pa bsam yas*) を、その本尊 (§1.3.3: *yi dam lha*) である無量寿仏に嘆願して、授かった (§§1.3.3, 3.3.1: *zhus*) とされる。

『不死の成就の種子\_B』では、上の『チャッキドンポ』の記述を敷衍するかたちで、その起源の場所がマーラティカ洞窟 (*brag phug mā ra ti ka*) であることを、リクズイン・グウデムチェンと縁深い隠遁者サンポダクパ (*bZang-po-grags-pa. ca. 14c*) のテルマである『七章の祈願』 (*gSol 'debs le'u bdun ma*) を引用するかたちで叙述している。この引用については、『リンチェンテルズ』所伝の『七章の祈願』に当該箇所を確認した。

『不死の成就の種子\_B』によれば、マーラティカ洞窟の周囲は「深い梅檀の森で、三つの季節に花の大雨が降るようなところ」だと形容されている。これは、長寿成就法『チャッキドンポ』が成立した自然風土を髣髴せしめる記述で、当該長寿成就法が春夏秋という三つの過ごしやすい季節が巡る土地に生まれたことを理想的に表現したものと想定される。ヒンドゥーの聖地としても知られるこの洞窟が、現在の東ネパールに比定されることをよく支持するものであろう。

### 3.1.2. 『チャッキドンポ』の埋蔵について

『チャッキドンポ』がパドマサンバヴァによって埋蔵された経緯は、第2.6章(埋蔵)において、主に「五濁悪世の時」 (§§0.2.3, 1.3.2: *nam zhig snyigs ma lnga bdo'i dus*; §2.1.2: *dus ngan snyigs ma lnga bdo'i tshe*) という時間的文脈でこれを捉え、考察した。『チャッキドンポ』埋蔵の経緯を考察するにあたっては、当該成就法中に「秘匿する」(*sbas*) という動詞を用いてこれに言及する箇所、即ち、本論文が整理したシノプシス(付録1)においては「埋蔵の趣意」と名付けた3箇所を考察の対象とした。当該箇所は相互に内容の齟齬がなく、その結果、重複する文言も少なくない。従って、3箇所の中から要点となる部分 (§§0.2.1, 0.2.3, 2.1.1) のみを抽出し、考察をすすめた。

『チャッキドンポ』における「来たる最後の五百年」は、§2.1.1 に看取されるように、(1.) 寿命は短く、(2.) 病は多く、(3.) 富は貧しく、(4.) 勝義も成り立たないので、(5.) 長期間にわたって苦しみの連鎖が続く時、とされている。こうした時間的概念が、『大方等大集経』(曇無讖訳 T 397) や鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』(T 262) の所説に遡求し得ることを、先行研究を参照しつつ論じた。

このような「来たる最後の五百年」の状況は、リクズイン・グウデムチェンが『チャッキドンポ』を発掘した14世紀チベットの社会情勢に限らず、広く五濁悪世という文脈で理解し得る。五濁の内、命濁 (Skt. *āyuh-kaṣāyah*; Tib. *tshe'i snyigs ma*; ) は、人間の寿命が濁世において短縮されるという所説として論じられることも少なくない。『チャッキドンポ』が発掘される時世は、「五濁悪世の時」とパドマサンバヴァによって予言されており、5つの濁(劫濁/見濁/煩惱濁/有情濁/命濁)の中でも、命濁に対治する目的で、この長寿成就法は埋蔵されたという文脈で理解した。長寿成就法の功德は、それを百歳までの延命に限ったとしても、勝義が成立している等の時世的条件に影響を受けるものと考えられる。

なお、『チャッキドンポ』の埋蔵には、パドマサンバヴァがこれを埋蔵し、リクズイン・グウデムチェンがこれを発掘するまでの約500年間、これを守護し、五濁悪世の時にこのテルマをリクズイン・グウデムチェンに譲渡するようパドマサンバヴァによって命じられた金剛喜 (§1.7.2: *rDo-rje-legs-pa*; *Vajrasādhu*) も大きく関わっていることにも、第2.6章において触れた。「来たる最後の五百年」の間『チャッキドンポ』の埋蔵に関わったテルマの守護者 (*gter bdag*) には、彼の他、チャン地方のトーヨルナクポの地にある「毒蛇の塊の如き岩山の中腹」という埋蔵場所も、或いはあげられる可能性を指摘した。

### 3.1.3. 『チャッキドンポ』の発掘について

長寿成就法『チャッキドンポ』の発掘については、これが「南に位置する金庫」 (§1.8.1: *lho gser mdzod ser po*; §3.8.1: *lhor ser mdzod*) から発掘されたことが、第1節外なる成就法のコロフォン (§1.8.1) と、第3節秘密なる成就法のコロフォン (§3.8.1) に、発掘者リクズイン・グウデムチェン自身によって記されている。そこで、第2.7章では、この点を検証するために、直弟子のセトン・ニマサンポ (fl. ca. 14c) が著したリクズイン・グウデムチェンの伝記『照射する陽光』から関連箇所を訳出し、考察をすすめた。

『照射する陽光』には、「南の黄色をした金庫」からリクズイン・グウデムチェンが太陽や月の如く輝く教えである四種近成就 (*bsnyen sgrub rnam pa bzhi*) を発掘したことが

記されている。この四種近成就については、『秘密集会タントラ』(*Guhyasamājatantra*)の第18分「一切の秘密の法門である金剛智の加持」(*Sarvaguhyanirdeśavajrajñānādhiṣṭhāna*≈D 443)に説示された四種方便 (*caturvidham upāyan*; Tib. *thabs ni rnam pa bzhi po dag*), 即ち——(1.) 親近 (*sevā*; *bsnyen pa*), (2.) 近成就 (*upasādhana*; *nye bar sgrub pa*), (3.) 成就 (*sādhana*; *sgrub pa*), (4.) 大成就 (*mahāsādhana*; *sgrub pa chen po*)——という四種の方便/成就法を、四種近成就に相応するものとして検討した。四種方便は四支成就法 (*\*catvārisevāsāadhanāṅga*; *bsnyen sgrub yan lag bzhi*) とも呼称され、生起次第と究竟次第における二段階の合一、即ち——(1.) まず仮の尊格である三昧耶薩埵を勤修者自身と不二一体のものとして生起、観想し、(2.) その後に真の尊格である智慧薩埵を勧請して、これと合体する——というプロセスを履む観想法として知られ、数多くの密教儀礼に様々なかたちで適用されている。チャンテルに伝わる長寿成就法との関連では、例えば、『ヴァジュラキーラの長寿成就法』(*rDo rje phur pa'i tshe sgrub*) に引用される『秘密心髓真性決定』(*\*Guhyagarbhatattvanirṇaya*; *gSang ba'i snying po de kho na nyid nges pa*. D 834; P 457)の一偈は、この四支成就法に何らかの関係を持って展開したものと想定される。

このテルマの発掘を予言したものと想定される『清浄明灯道』(*Lam byang gsal ba'i sgron me*) という名の書物については、これを特定することができなかった。なお、『チャッキドンポ』が収納、埋藏された「南に位置する金庫」については、ダライ・ラマ5世ガワンロサンギャムツォ (1617–1682) の『ダライ・ラマ5世の聴聞録』にも記述が見られ、これら一次資料中に『チャッキドンポ』発掘に関する経緯を詳細に解明する鍵を探求することを、今後の課題として残した。

#### 3.1.4. 『チャッキドンポ』の記述言語について

『チャッキドンポ』は主にウチェン字体のチベット語で記述されているが、第0節はしがき (§0.1.1) と第1節外なる成就法 (§1.1.1) の、共に冒頭に掲げられた帰敬文には、これと異なる文字が見在する。まず、これらの文字を一覧表 (表6) にして対照させ、その後、これらの言語が次の4つの言語、即ち——(1.) ダーキニーの符牒 (*mkha' 'gro'i brda skad*), (2.) ウッディヤーナ語 (*o rgyan skad*), (3.) インド語 (*rgya gar skad*), そして、(4.) チベット語 (*bod skad*)——という4つの言語に比定し得るのではないかという想定のもと、順に考察をすすめた。

*mkha' 'gro'i brda skad* (ダーキニーの符牒) という語句の用例は『チャッキドンポ』中にみとめられず、従って、これは訳文中に補記記号を付して提出した筆者の想定語 (interpretive) である。筆者の想定根拠は、§0.1.1 の詳解において論述したように、『チャッキドンポ』が、ウッディヤーナの地 (*o rgyan yul*) のダーキニーによって、そのダーキニーの隠符 (*mkha' 'gro'i brda yig*) で記され、秘し匿されたという §0.2.2 の叙述に基づく。この未確定な言語は、従って、ダーキニーが用いる言語に左右されるといってよい。

ダーキニーの符牒及び、彼女たちの文字であるダーキニーの隠符については、今日参照し得る先行研究が極めて乏しい。『チャッキドンポ』にはダーキニーの隠符、或いはウッディヤーナ語を記した文字で記されたものと想定されるテキストが計15箇所見在するが、その表記法についても、筆者は確固とした方法を見出すことができなかった。校訂テクス

トには、従って、当該テキストをスキャンしたイメージを貼り付けるより他仕方がなかった。識者のご叱正を仰ぎたい。ただ、今後の学究に僅かでも資することがあるよう、これらのイメージを一覧にし、付録2に提出した。

ウッディヤーナ語については、ウゲンリンパ (b. 1323) が発掘したテルマ『ローパンカータンイク』に、ウッディヤーナ語の翻訳者としてチョクロルイギヤルツェン (ca. 9c) の名があげられていることを証左に、一つの独立した言語と見做し得る可能性について論じた。ウッディヤーナという「小王国」の歴史的立ち位置については SANDERSON 2007 を参照し、これに短く触れたが、ニンマ派の論書の中には、ウッディヤーナに立ち入ることが許されるのは「化身の翻訳者」であるニンマ派(旧訳派)の翻訳者だけであり、「凡夫の翻訳者」であるサルマ派(新訳派)の翻訳者にはこれが叶わないとする論考もみられることを、ラトナリンパ (1403–1479) の『ニンマ派の弁明』における所論によって確認した。ウッディヤーナは、このように、周辺のインドやチベットといった土地とは全く性格、意義を異にするという見方もあり、従って、その歴史的立ち位置を検討すると共に、ウッディヤーナという土地がもつ思想的特異性をも究明することが重要であることを論じた。

*rgya gar skad du* (§0.1.1) というフレーズは、『チャッキドンポ』において、広く「インド語で」を意図するものと筆者は想定した。より具体的にいえば、\**indra-āyuhdharanaha namaḥ* (§0.1.1) を、\**indra-āyurdharaṇasya namaḥ* という、中期インドアーリヤ語の影響下に訛った形 (à la Sanskrit) だと想定するものである。従って、『チャッキドンポ』がインド語で「主である持寿命者に帰命する」と帰命文を念誦することは、ある種の「インドらしさ」を讃えるものだと理解される。

### 3.2. <無量寿宗要経> からダーラニーを引用している可能性について

長寿成就法『チャッキドンポ』が<無量寿宗要経> からダーラニーを引用している可能性については、第2.8章(2つの功德)において、<無量寿宗要経> と『チャッキドンポ』とが説示する2つの功德について、両者間の類同を、共通点と相違点とに分けて考察した。この他、第2.9章(<無量寿宗要経> に比定されるダーラニー)においては、『チャッキドンポ』が埋蔵されたとされる8世紀を中心とする諸資料、及び、これが発掘された14世紀を中心とする諸資料とに分けて参照し、考察した。以下に、その考察結果を提示したい。

#### 3.2.1. 第2.8章の考察結果

第2.8章では、『チャッキドンポ』が称える2つの功德について考察を行った。この2つの功德という構図は<無量寿宗要経> にその萌芽が見られ、この点を主に検討した。

『チャッキドンポ』第2節内なる成就法 §2.8.1 には、<無量寿宗要経> に比定し得るダーラニーを読誦することによって、『チャッキドンポ』を成就する者が得る功德 (*yon tan*) が2点あげられている：

(1.) 遂に寿命が尽きる時に至っても (*tshe zad mtha' la thug pa yang*) 寿命が延び、寿命100歳が必ず叶うこと (*lo brgya nges par thub*)。必ずや三世諸佛の後嗣となること (*dus gsum rgyal ba'i gdung 'dzin nges*)。

(2.) 存命中に十波羅蜜、[五]道[十]地を歩み (*pha rol phyin bcu sa lam bgrod*)、死後に極楽浄土に生まれること (*bde ba can gyi zhing du skye*)。



以上2点の功德は、〈無量寿宗要経〉中に説示される、同経を勤行することにより勤修者が得る2つ功德を色濃く反映しているものという想定のもと、同経の当該部分 (ApS\_t, §§14–15) を訳出し、『チャッキドンポ』との間の類同を、共通点と相違点とに分けて考察した。

両者の共通点は、文言は相違するものの、その趣意として次の2つの共通点が知られる。即ち——(1.) 寿命が尽きても、寿命百歳に至ること、(2.) 結果的に「無量寿如来の仏土である無量功德聚という世界」或いは「極楽[浄]土」に往生すること——との2点である。(1.)の点に見出される「寿命百歳に至ること」とは、百年という長さの人生を横災なく無事「全うすること」を意図するものと考えられる。この觀念の萌芽は、ヴェーダ文献中に、百年という長さの人生に限っては、即ち、死なないことを無限に与えるものではないが、被呪法者に不死を叶える呪文として看取されることを、『アタルヴァ・ヴェーダ』(Atharvaveda-Saṁhitā, III 11) を訳出し、確認した。仏教文献においては、百年は長命の比喩として一つの単位と見做し得ることを、『ダンマパダ』(Dhammapada, vv. 110–115), 『スッタニパータ』(Sutta Nipāta, no. 804 in Ch. IV. 6. Jarāsutta, 1), 彌陀山譯『無垢浄光大陀羅尼經』(T 1024), 〈菩薩地〉菩提分品 (Bodhipakṣya-pāṭala), 及び、仏音 (Buddhaghoṣa. 5 c.) の主著と伝わる『清浄道論』(Visuddhimagga) 第8章随念業処の解釈 (Anussatikammaṭṭhāna-niddeso) を概観し、確認した。

『チャッキドンポ』では、この慶賀すべき百年という長寿が、勤修者の存命中に彼らをして十波羅蜜、五道十地を経過する可能性を高める有暇と見做され、これが極楽浄土往生の前提となっている。〈無量寿宗要経〉の経末は、六波羅蜜による人獅子の成仏を讃える偈文によって結ばれており (ApS\_t, §§79–84), これらの経過に觀待して成仏することの重要性も、〈無量寿宗要経〉と『チャッキドンポ』との間で共通する。(2.)の点は、百年という長さの人生を横災なく無事全うした後に、仏に関わる土地 (zhing) に往生することを説く点で共通する。しかし、具体的な名称は「無量寿如来の仏土である無量功德聚という世界」(ApS\_t, §15) と「極楽[浄]土」(CD §2.8.1) との間で相違する。無量寿如来の異名である「無量寿智」(Aparimitāyurjñāna) は『チャッキドンポ』第2節内なる成就法において称名されていること (§2.7.3: *ye shes tshe dpag med*), また、第3節秘密なる成就法においても「仏世尊, 如来応供正遍知, [無量] 寿智, [善] 決定光明王」 (§3.4.2: *bcom ldan 'das de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas tshe dang ye shes nam par nges pa'i gzi brjid kyi rgyal po*) と呼称される尊格が觀想されることも注意される。

勤修者に齎らされる功德について〈無量寿宗要経〉と長寿成就法『チャッキドンポ』との間の相違点は、3点看取される。第1の相違点は、百年という長さの人生を横災なく無事全うした後に、勤修者が「生まれる」(*skye; upa-√pad*) 土地にある。〈無量寿宗要経〉では「無量寿如来の仏土である無量功德聚という世界」とされるが、『チャッキドンポ』では「極楽[浄]土」とされている。しかし、この点は、〈無量寿宗要経〉が有するリセンションの相違、或いはまた、別箇所 (ApS\_t, §57) に、本経を書写し、他人をして書写せしめる者は「無量光如来の仏刹である極楽という界境」に生まれるであろうとも説示されていることを考慮する必要がある。第2の相違点は、〈無量寿宗要経〉に見られる「死しても」(*shi 'phos nas kyang*) という文言に関係する。死後に極楽浄土に往生するという内容は『チャッキドンポ』の当該箇所には見られない。ただし、前後関係からみて、これを死後の往生であると〈無量寿宗要経〉と等しく解釈することも、妥当な想定

の範囲であろう。第3の相違点は、2つの功德を得るための行為についてである。〈無量寿宗要経〉では、ダーラニーの (a.) 書写, (b.) 他人をして書写せしめること, (c.) 経巻としての受持, (d.) 読誦 (*klog pa*) という4点の徳目が挙げられているが、『チャッキドンポ』では、ダーラニーを現然たる三昧により繰り返し読誦すること (*bzla*) 一点に絞られている。上の2つの相違点は、大筋においては、〈無量寿宗要経〉と『チャッキドンポ』との共通点に加え得る可能性を残している。しかし、第3の相違点、即ち、「『チャッキドンポ』においては、ダーラニーの書写やそれを経巻にして受持することはことほどきように重要視されず、それを読誦し、現然たる三昧に入ることの方に傾注されていること」は、長寿成就法の一つの特徴として提出されてよいであろう。

### 3.2.2. 第2.9章の考察結果

第2.9章では、『チャッキドンポ』が〈無量寿宗要経〉からダーラニーを引用した可能性について考察を行った。まず〈無量寿宗要経〉の複雑なりセンションを確認し、その上で『チャッキドンポ』がこれを引用するに至った経緯について考察をすすめた。

〈無量寿宗要経〉は、先行研究が明らかにしてきたように、サンスクリット原文がアジアの諸言語(コータン語, チベット語, 漢語, 満州語, 西夏語, ウイグル語, モンゴル語)の他, ラテン語にも訳出されていることで知られ, 経中に書写の功德が讃嘆される事由を裏付けるように, 鴻大な量の写本が遺されている。

〈無量寿宗要経〉のサンスクリット語写本は, TSUKAMOTO/MATSUNAGA/ISODA (塚本/松長/磯田) 1989 に, ネパール写本が約80本あげられている。ネパール写本の年代は, 貝葉と紙葉とで当然異なるが, NGMPP/NGMPP が公開しているデータを参照すれば, 大概において貝葉は11-17世紀を, 紙葉は16世紀以降を, それぞれ中心とするものといえよう。この他, 7世紀を中心とするものと想定されるギルギット写本中に〈無量寿宗要経〉に比定し得る一断片 (GBM, pt. 10, plate no. 3366) が含まれていることは, von HINÜBER 2014 によって指摘されている。当該の断片には, 『チャッキドンポ』が §2.4.2 において導入するダーラニー (*sngags*) と部分的な重複が看取される。ここに, 『チャッキドンポ』に引用されるダーラニーの原初形態が, ギルギット写本にみとめられる可能性が浮上する。ギルギット写本は, ネパール写本に比して, 『チャッキドンポ』の埋蔵者とされるパドマサンバヴァの年代 (ca. 8世紀) に近く, また地理的にみても, ほぼ同時期の吐蕃期敦煌 (786-848年) に比して, パドマサンバヴァの生地と言い慣らわされるウッディヤーナ (ペシャワールの北, カシミールの西北西方向, 現パキスタン領) に近い。

〈無量寿宗要経〉の漢訳資料は, 翻訳系譜の相違する2本 (法成訳 T 936 と法天訳 T 937) が, 大蔵経中に何れも密教部 (vol. 19) に収録されて伝わる。この内, 『大乘無量寿経』 (T 936) はチベット語訳からの訳出と想定され, 何れも訳者不明として伝わる〈無量寿宗要経〉の3本のチベット語訳の何れかに, 法成 (Tib. 'Gos Chos-'grub. ca. 9c. BDRC#P8221) が関わっている可能性を指摘した。この『大乘無量寿経』は, 敦煌写本によって大正蔵に編入されたことが知られるように, 敦煌写本中には約900本という多量の〈無量寿宗要経〉の漢訳資料が確認されている。その事由としては, YAMAGUCHI (山口) 1980 の論考に纏められているように, 吐蕃期敦煌 (786-848), 特にティツクデツェン王 (Khri-gtsug-lde-brtsan, alias Ral-pa-can. 806-841. BDRC#P2MS13218) の在位中 (815-841), その仏教優遇政策によって吐蕃本土の他, 沙州においても寺院や僧尼の数が

増大し、組織立った大規模な写経が「王や王族の繁栄祈願のために」(p. 231) 漢文とチベット文の両文によって行われたという歴史的背景があげられる。この写経事業は、FUJIEDA (藤枝) 1961 によると、「恐らく八世紀のうち始まったもの」と推定され、具体的には、〈大般若経〉と共に〈無量寿宗要経〉がその大部を占めることが知られる。

〈無量寿宗要経〉のチベット語訳は、大蔵経中に訳者不明として伝わる3本(D 674/P 361, D 675/P 362, D 849/P 474)が、主に密教部(rGyud)に収録されている。〈無量寿宗要経〉は、吐蕃期敦煌において、その漢文とチベット文の両文による大規模な写経が組織立った公の事業として行われており、鴻大な写本の「量」によっても知られるが、これが熱心に書写された歴史的事実を、「その大半が血で記された可能性がある」(VAN SCHAIK/HELMAN-WAŻNY/NÖLLER 2015) チベット語訳〈無量寿宗要経〉の一写本 IOL Tib J 308 を図示し、指摘した。当該写本中には、その最終行に、『チャッキドンポ』が第2節 (§2.4.2) において導入するダーラニーに比定し得る一文が、確かに看取される。

以上において確認した〈無量寿宗要経〉に関する漢訳、及びチベット語訳資料は、パドマサンバヴァと比較的年代に近い吐蕃期敦煌において、かくもこの経典が重用されたことを示唆するものであり、パドマサンバヴァによって埋蔵されたとされる『チャッキドンポ』が、〈無量寿宗要経〉からダーラニーを引用したとする筆者の想定において、何も考慮に値する資料である。

もっとも、テルマ文献に関わる想定に対しては、上の如何なる考証も有力とはいえない。もしギルギット写本や敦煌文書をして、パドマサンバヴァの活動年代や地域に近接すると見做し、彼が〈無量寿宗要経〉からその当時、当地で著名であったダーラニーを引用したということが承認されるなら、上記に確認した諸資料の文献学的価値との衝突を避けるためにも、パドマサンバヴァの実在が前提とされなければならない。

『チャッキドンポ』を発掘したリクズイン・グウデムチェンと同時代人であるプトゥン・リンチェンドゥプ(1290–1364)やケードゥプジェ・ゲレクパルサン(1385–1438)といった14–15世紀のチベット人学僧の間に、このダーラニーが知られ、その *om* の数量をめぐっては見解の相違が看取される程であることは、『十万タントラ目録』や『タントラ概論』の翻訳研究等を通じ、既に少なくない数の先行研究が蓄積されている。しかし、テルマの中にこのダーラニーが伝わる可能性は、管見に触れた限り、これまで論究されてこなかった。テルマに関するこれまでの研究成果の中には、例えば、GYATSO 1996 の所論に見出し得るように、テルマ自体が、他のタントラ同様、一つの *mūla/rtsa ba text* として取り扱い得ることを論じた考察はあっても、テルマに引用されたダーラニー等のテキストを個別に論じたものは見当たらない。

この関心にこたえる資料として、テルマを包括的に収録する一大集大成『リンチェンテルズ』(ツルプ版, i.e. RT\_A) を選択し、〈無量寿宗要経〉に比定されるダーラニーを引くテルマをここから抽出した。その結果、(1.) 『チャッキドンポ』の他に〈無量寿宗要経〉に比定されるダーラニーを引くテルマが少なくとも15点見在すること、(2.) 〈無量寿宗要経〉に比定されるダーラニーを引くテルマは、リクズイン・グウデムチェンを含めて12人のテルトゥンによって発掘されていること。この中でもリクズイン・グウデムチェンは比較的古い時代に位置すること、(3.) 12人のテルトゥンの年代は、大枠でみて、14–17世紀を中核としており、これは、プトゥン・リンチェンドゥプやケードゥプジェ・ゲレクパルサンといった14–15世紀のチベット人学僧の年代と重なること、という3点が明らかに

なった。

14-15世紀のチベット人学僧の間にこのダーラニーが知られていたように、14-17世紀に出現した名だたるテルトゥンの間にもこのダーラニーは流通していた、という〈無量寿宗要経〉に比定されるダーラニーに関する2つの潮流が、ここに指摘し得るであろう。明確な結論は導き出し得ないが、〈無量寿宗要経〉の8世紀の流行に遡求し得るパドマサンバヴァにダーラニーの引用を帰し、これが、リクズイン・グウデムチェンをはじめとするニンマ派のテルトゥン／ヨーギンの伝統の中に脈々と受け継がれていたことが想定される。この想定によれば、テルトゥン／ヨーギンの伝統の中に脈々と受け継がれていた当該ダーラニーに関する相続は、プトウン・リンチェンドゥプやケードゥプジェ・ゲレクパルサンといった学僧が有していた典籍の「知識」とは、ほぼ無関係に成立していたことになる。

### 3.3. タントンギャルポ伝にみる長寿に関する持明者の死生観について

『チャッキドンポ』を修習した結果、長寿に関する持明者となった成就者の具体的事例として、タントンギャルポ (1361?-1485 BDRC#P2778) の死生観を中心に、第2.10章において考察した。

まずタントンギャルポ伝の原典を概観し、後代の弟子筋にあたるロチェン・ギルメデチェン (1540-1615) が著述した『すべてを明らかにする宝鏡』に、パドマサンバヴァが遺したとされる予言的伝記〈予言書・明灯〉の引用、及び『チャッキドンポ』に関する言及がみとめられることを確認した。

次に、パドマサンバヴァが遺したとされる予言的伝記〈予言書・明灯〉の中から、タントンギャルポの寿命と遷化が予言された箇所を訳出し、考察をすすめた。〈予言書・明灯〉には、タントンギャルポの寿命の長さ (*tshe 'i tshad*) がもともと81歳であること、しかし、寿命を司る女神 (*tshe 'dzin lha mo*) の滋養 (*bcud*) を成就すれば、より長い寿命が可能となることが予言、説示されている。この「寿命を司る女神の滋養」は、『すべてを明らかにする宝鏡』の文脈において、『チャッキドンポ』を明確に意図するものとはいえないが、タントンギャルポの直弟子であるクンチョクパルサン (fl. ca. 15c) とデワサンポ (fl. ca. 15c) が著述した彼の伝記『明灯』の文脈によれば、この「寿命を司る女神」が広く「チャンダリー女神」だと解し得、ここに『チャッキドンポ』との会通がはかれる可能性があることを指摘した。

また、『チャッキドンポ』受法の様子を伝える箇所を訳出し、どのような相続のもとにこれがなされたかについて検討した。『すべてを明らかにする宝鏡』の叙述によれば、タントンギャルポは、遁世者ダウンユギャルツェンからリクズイン・グウデムチェンが発掘したテルマの教え (*gter chos*) に関する灌頂／誦伝／口伝を授けられている。この機会に『チャッキドンポ』を含めた「完全なかたちで」チャンテルの相承をダウンユギャルツェンから授けられたものと想定した。タントンギャルポは500人もの師に学んだと伝記に伝わるが、同年代のリクズイン・グウデムチェンに学んだという記述は見当たらない。ダウンユギャルツェン (*Don-yod-rgyal-mtshan/Don-yod-rgyal-mtshan-pa*) の名は、本論文の付録に提出した3つの相承系譜 (付録4-6) にはみとめられず、遁世者 (*Kun-spangs*) という尊称が物語るように、遺された事績は極めて限られているものと想定される。本論文においてはこれらを未解明のことととし、今後の学究に期したい。

タントンギャルポに帰される長寿成就法としては、『チメーパルテル』(‘*Chi med dpal ster*) と呼び慣らわされるテキスト群が知られ、当該長寿成就法の所依の経典等につき、先行研究を参照しつつ考察をすすめた。『チメーパルテル』と呼び慣らわされるテキスト群中には、GYATSO 1981 がその説示内容を分析して明らかにしたように、「赤い *hrīḥ* という種子が、勤修者と一体となった無量寿智仏に変化する」(‘the red seed-syllable ‘*hrīḥ* which turns into the practitioner-as-Aparimitāyurjñāna’, p. 153) というプロセスがみとめられる。『チャッキドンポ』では、これと類似した次第が第3節秘密なる成就法に、*hrīḥ* ではなく *hūm* 字として観想される (§3.4.2)。

GYATSO 1981 は、当該のプロセスが後代に付加された可能性を指摘しつつも、無量寿智仏の一典拠として〈無量寿宗要経〉(D 674/P 361) を挙げており、これは、『チャッキドンポ』が〈無量寿宗要経〉に比定し得るダーラニーを引用したとする筆者の想定をよく支持するものである。GYATSO 1981 によれば、『チメーパルテル』が新訳と古訳の何れのタントラに「関連する」(‘affiliated’, p. 154) かにについて、チベット人の著作家／実践者の間に諸見解が見られる。即ち、ロンソム・チューキサンポ (11c) 等が翻訳した新訳経典であるという説と、古訳のタントラであるという説である。この点に関する究明は、『チメーパルテル』と『チャッキドンポ』との間の類似点を考慮すれば、『チャッキドンポ』の考察においても関鍵となることを指摘し、今後の学究に期した。

2.10.5章では、タントンギャルポの辞世の訳出を試み、長寿に関する持明者となった、この大成就者の死生観について推し量った。思考 (*blo*) が滅した状態で詠じられた彼の辞世は、生死輪廻 (*‘khor ba*) を笑い飛ばすように、それが単なる言語的思考に過ぎないことを、「無明 (*ma rig*) でありながら、明知 (*rig pa*) そのものでもある」といった一見相反する表現を用い、鋭く指摘している。言語表現を憂いつつ詩作された彼の辞世には、彼がサキャ派の師チョクサンレクパイロドゥー (ca. 14c) に学んだドーハー (*dohā*) の伝統が反映されているものと想定した。

最後に、タントンギャルポの遷化の様子を伝える箇所を訳出し、考察した。その結果、『すべてを明らかにする宝鏡』に伝わる、タントンギャルポの遷化時に起きた諸々の現象は、〈予言書・明灯〉に記された予言を具現化したものとして展開していることを指摘した。



## 第II部

長寿成就法『チャッキドンポ』校訂・訳注研究





# 凡例

## 校訂・訳注研究の範囲

長寿成就法『チャッキドンポ』校訂・訳注研究は、当該テキストの第0節 (§0) から第4節 (§4) までを範囲とする。当該範囲には、特殊文字が多分に含まれる。従って、本校訂・訳注研究においては、厳密な批判的校訂本を目指すことよりも、将来の研究に資する資料を提示することに重点を置いた。

## 使用テキスト

入手し得た限り 1本の木版 (TBRC によって提供された白黒の pdf版) と 2本の木版の影印本 (内 1本は、TBRC によって提供された白黒の pdf版) を次のとおり使用した。

- CD\_A In: *Thugs sgrub drag po rtsal gyi chos skor* (TD), vol. 2, pp. 511–543. Gangtok: Bari Longsal Lama, 1980. 4 vols. 8 x 37 cm. [BDRC#W23453]  
17 folios. 5/6 lines to a folio; *dbu can*. ‘Reproduced from tracings of prints from the Gnas-chuñ blocks’ (title page of the vol. 1).
- CD\_B In: *Rin chen gter mdzod chen mo* (RT\_A), vol. 29, pp. 249–268. Paro: Ngodrup and Sherab Drimay, 1976–1980. 111 vols. 8.3 x 36 cm. [BDRC#W20578]  
10 folios. 6 lines to a folio; *dbu can*. ‘A reproduction of the Stod-luñ Mtshur-phu redaction of ’Jam-mgon Koñ-sprul’s great work on the unity of the gter-ma traditions of Tibet. With supplemental texts from the Dpal-spuñs redaction and other manuscripts. Reproduced at the order of the Ven. Dingo Chhentse Rimpoche under the esteemed patronage of H. M. Ashé Kesang, Queen Mother of Bhutan, and H. R. H. Ashé Phuntsho Choedron, Senior Royal Grandmother’ (title page of the vol. 29).
- CD\_C In: *Rin chen gter mdzod chen mo* (RT\_B), vol. 19, pp. [197]–216. [Khrengtu’u]: [IHo-nub-mi-rigs-dpar-khang], [199?]. 63 vols. Unknown size. [BDRC#W1PD96185]  
10 folios. 6 lines to a folio; *dbu can*. ‘Treasury of Precious Revelations. Collection of rediscovered terma and commentatorial works. Comprises sadhanas, empowerments, and instructions of the Nyingma order gathered and structured by Kong-sprul Blo-gros-mtha’-yas. 1813–1899. BDRC#P264). Scan based on the Palpung redaction, reproduced in Chengdu.’ (Catalog Information of W1PD96185).

## 校訂テキストの構成

校訂テキストは、『チャッキドンポ』の校訂テキストを掲載する本文と、脚注より構成される。脚註は次のとおり 2層に分けた。

1段目の注記には、ローマ数字の注番号 (e.g. i) により、<無量寿宗要経> や『照射する陽光』等、校訂作業において参照したレファレンスを明示した。サンスクリット語資料も必要だと筆者が判断した場合には、これを追加した。

2段目の注記には、アラビア数字の注番号 (e.g. 1) により、異読情報を明示した。異読は、採用した語形を含め、網羅的に注記する方針 (positive apparatus) を採った。2段目の注記には、この他、付録2 (長寿成就法『チャッキドンポ』に見られる異体字の一覧) の照会番号を明示した。

## 記号一覧

校訂・訳注研究にあたり、使用した記号は次のとおりである。

- <<>> 「<<>>」には、点線 (*mchan rtags*) など で連結された欄外、或いは行間のグロス (gloss; Tib. *mchan 'grel*) を入れた。
- +
- 「+」には、テキスト中に欠損、或いは対応箇所が暗い等の理由で筆者には読み取れなかった部分を入れた。「+」の数は判読できなかった音節数に凡そ対応するが、必ずしも確定的ではない。
- E.g.) ཀུན་ལོ་ལྷན་པོ་ B, C] + ལྷན་པོ་ A
- ]]
- 「]]」は、採用した読み (lemma. 「*em.*」や「*conj.*」を含む) を明示する為に、その直後に付した。不採用とした読みは「]]」の右側後に続けた。
- E.g.) ཆོ་ལོ་ལྷན་པོ་ em.]] ཆོ་ལོ་ལྷན་པོ་ A, B, C.
- °
- 「°」は、筆者が採用した読み、不採用とした読みに関わらず、同じ音節を意味する。
- E.g.) ཆོ་ལོ་ལྷན་པོ་ A]] ཆོ་ལོ་ལྷན་པོ་ B, C.
- 
- 「→」は、訂正印「x」が施されたテキストに対処する記号である。使用テキスト「X」中に訂正印「x」が付され、当該箇所の欄外、或いは節末等に訂正された内容「XX」が明示されている場合、「X→XX」と記述した。
- E.g.) གནས་ལྷན་པོ་ B, C]] གནས་ལྷན་པོ་ → ལྷན་པོ་ A.
- E.g.) འཛིན་པོ་ B]] om. → འཛིན་པོ་ A; འཛིན་པོ་ C.
- em.*
- 筆者が想定する読み「X」は、「X *em.*」と記述した。
- E.g.) ལྷན་པོ་ em.]] ལྷན་པོ་ A; ལྷན་པོ་ B, C.
- om.*
- 使用テキスト「A」が対応箇所「X」を欠いている場合、「X *om.* A」と記述した。
- E.g.) ལྷན་པོ་ em.]] ལྷན་པོ་ A; om. B, C.
- suppl.*
- 使用テキスト「A」が対応箇所「X」を補完している場合、「X *suppl.* A」と記述した。
- E.g.) ལྷན་པོ་ལྷན་པོ་ལྷན་པོ་འཛིན་པོ་ suppl. A]] om. B, C.

## その他

・自動詞 (intransitive) と他動詞 (transitive) の選分は、主に JÄSCHKE に依拠した。しかし、異同から判断して、当該の語形、語法が当時に存在していた可能性もあり、文脈に

沿って選分した動詞のかたちは、特に時制において、校訂テキスト中に統一性を欠くことになった。

- ・自動詞と他動詞の訳し分けは、訳文中にこれをうまく反映できない場合もあった。例えば、*ldang* は自動詞 (*tha mi dad pa*) であるが、「あらわれる」と訳さずに、「[姿を] 顕す」と訳出した箇所がある。
- ・一定の規則に従って文字を算え、配列する韻律は、異同が見在する場合に限り勘案した。

1 4.1. 第0節 長寿成就法『チャッキドンポ』のためのはしがき  
 2 4.1.1. §0. 校訂テキスト

3 [A 511,1; B 249,1; C 197,1:長寿成就法『チャッキドンポ』のためのはしがき]

4 ཚེ་སྐྱབ་ལྷགས་སྤྱོད་མའི་ཐེམ་བྱང་བཞུགས་སོ།<sup>377</sup>

5 [§0.1. 帰敬文の奉唱]

6 [§0.1.1] རྣལ་འབྱོར་ཚེ་སྐོག་བསྐྱིད་བའི་བྱིར་ལྷོ།  
 7 ཕྱི་ནང་གསང་བའི་ཚེ་སྐྱབ་ཡོད་ལྷོ།<sup>378</sup>

8 འཕྲོ་ལྷོ། ལྷོ་རྣམ་མཁའ་འཁྲུ་རྣམ་འཕྲོ་ལྷོ།<sup>379</sup> རྒྱ་གར་རྣང་དུ། ཨི་རྒྱ་ལྷོ་ལྷོ་རྣམ་འཕྲོ་ལྷོ།<sup>380</sup> ཐོད་རྣང་དུ།

9 མགོན་པོ་ཚེ་དཔག་མེད་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ།

10 [§0.2. 埋蔵の趣意]

11 [§0.2.1] བདག་འདྲ་སྐྱབ་འབྱུང་གནས་ཀྱིས་ལྷོ།  
 12 ཚེ་སྐྱབ་ལྷགས་ཀྱི་སྤྱོད་པོ་འདི།  
 13 ལས་ཅན་ཕྱི་མའི་དོན་དུ་བཞག་ལྷོ།  
 14 མ་འོངས་ལྷོ་བརྒྱ་ཐ་མ་ལྷོ།  
 15 ཐོ་ཚོ་རས་གཙོད་འཕྱར་ཁྱེར་མཁའ་ལྷོ།<sup>381</sup>  
 16 ལོག་ལྷོ་འགྲན་སེམས་སྐྱོན་འདྲིན་མཁའ་ལྷོ།

17 [§0.2.2] སྤྱིག་ཅན་དམ་ཉམས་དར་བའི་ཚེ།  
 18 ང་ཡི་མན་ངག་ཟབ་མོ་རྣམས་ལྷོ།<sup>382</sup>  
 19 རོག་པོ་ཀུན་གྱིས་སྤྱད་དོགས་ནས་ལྷོ།  
 20 ཨི་རྒྱ་ལྷོ་ལྷོ་མཁའ་འགོ་མལ།

377 ཚེ་ཐེམ་ B] ཚེ་ཐེམས་ A; ཚེ་ཐེམ་ C.  
 378 རྣལ་འབྱོར་ཚེ་སྐོག་བསྐྱིད་བའི་བྱིར་ལྷོ།  
 ཕྱི་ནང་གསང་བའི་ཚེ་སྐྱབ་ཡོད་ལྷོ། *suppl. A]* *om. B, C.*  
 379 Cf. Appendix B, no. 1 (A 512,1; B 250,1; C198,1).  
 380 ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ། B, C] ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ། A.  
 381 ཐོ་ཚོ་གཙོད་འཕྱར་ཁྱེར་ལྷོ། *em.]* ཐོ་ཚོ་མཁའ་འཕྱར་ལྷོ། A; ཐོ་ཚོ་མཁའ་འཕྱར་ལྷོ། B, C.  
 382 ལྷོ་ལྷོ། B, C] ལྷོ་ལྷོ། A.

1	ཉི་འོད་འབར་བ་དུང་མདོག་ཅན་ལྷོ་	1
2	བྱུང་ན་བདུད་རྩི་བྱམ་པ་བསྐྱམས་ལྷོ་ <sup>383</sup>	2
3	སྤྲུང་འབྱུང་གནས་གསང་བའི་ཡུམ་ལྷོ་	3
4	གསང་མཚན་སྣ་མོ་ཅན་སྤྲི་ལྷོ་ <sup>384</sup>	4
5	ཕྱོད་ནས་མཁའ་འགྲོའི་བརྒྱ་ཡིག་ལྷོ་ <sup>385</sup>	5
6	སྤྲུང་འབྱུང་གནས་སྤྲིང་ཐིག་བཀོད་ལྷོ་	6
7	[§0.2.3] བྱང་ཕྱོགས་ཐོ་ཡོར་ནག་པོའི་ཡུལ་ལྷོ་	7
8	བྲག་རི་དུག་སྐྱུལ་སྤྲངས་འབྲའི་སྐྱེད་ལྷོ་ <sup>ii 386</sup>	8
9	བསེ་སྐྱོམ་སྐྱུག་པོའི་ནང་དུ་སྐྱས་ལྷོ་ <sup>387</sup>	9
10	ནམ་ཞིག་སྤྲིགས་མ་སྤྲེའི་དུས་ལྷོ་	10
11	རི་བོ་བྲག་བཟང་ཤར་མདུན་དུ་ལྷོ་	11
12	རིག་འཇིན་ཚོད་ཀྱི་ལྷེམ་འཕྲུ་ཅན་ལྷོ་	12
13	ལས་ཅན་སྐྱས་པའི་ནལ་འབྱོར་འབྱུང་ལྷོ་	13
14	གཏེར་འདི་དེས་པར་དེ་ཡིས་སྐྱོད་ལྷོ་	14
15	ཞེ་མ་རྟོ་ལས་ཅན་པར་འདི་སྐྱས་ལྷོ་ <sup>388</sup>	15
16	[§0.3. 内容細目]	16
17	[§0.3.1] ཚེ་སྐྱབ་ལྷགས་ཀྱི་སྤོང་བོ་ལྷོ་ <sup>389</sup>	17
18	ཕྱི་ནང་གསང་བའི་སྐྱབ་ཐབས་གསུམ་ལྷོ་	18
19	དབྱེ་ན་ཚོས་ཚན་བརྩུ་གཅིག་ཡོད་ལྷོ་	19

<sup>i</sup> MLSG, A 440,1; B 437,5:  
 དུས་མ་འོངས་ལྷོ་བརྒྱའི་མཐའ་མ་ལ།  
 སངས་རྒྱས་ཀྱི་བསྟན་པ་ཉམས།  
 ཚོས་བྱེད་ཐབས་ཅད་སྤྲིན་པའི་ལོང་མེད་པར།

<sup>ii</sup> S\_A 31,3; S\_B 84,3: བྲག་རི་དུག་སྐྱུལ་སྤྲངས་འབྲའི་ལྷོ་ ལོ་རྟའི་ལོ་ལ་གཏེར་འབྱུང་བར་ [བར་ S\_A] པར་ S\_B] འཕྲུར་རོ་

383 འོ་ལྷོ་ B, C] འོ་ལྷོ་ A.  
 384 འོ་ལྷོ་ B, C] འོ་ལྷོ་ A.  
 385 འོ་ལྷོ་ B, C] འོ་ལྷོ་ A.  
 386 འོ་ལྷོ་ A] འོ་ལྷོ་ B, C.  
 387 འོ་ལྷོ་ em.] འོ་ལྷོ་ A; འོ་ལྷོ་ B, C.  
 388 འོ་ལྷོ་ A] འོ་ལྷོ་ B, C.  
 389 ཚེ་ em.] ཚེ་ A, B, C.

1	[§0.3.1.1] ཕྱི་སྐྱབ་རིན་ཆེན་བྱམ་པ་ལུཾ	1
2	བདུད་ཅི་བརུད་ཀྱི་སྣོང་པོ་ཡོདུཾ	2
3	ཁ་རྒྱན་དཔག་བསམ་སྣོང་པོ་ཡོདུཾ	3
4	[§0.3.1.2] བྱང་སྐྱབ་ལྷགས་ཀྱི་སྣོང་པོ་ལུཾ	4
5	འོད་ལྷ་བརུད་ཀྱི་ཡལ་ག་ཡོདུཾ	5
6	འཆི་མེད་དོ་རྗེའི་འབྲས་བུ་ཡོདུཾ	6
7	[§0.3.1.3] གསང་སྐྱབ་ནམ་མཁའི་དོ་རྗེ་ལུཾ	7
8	རང་གསལ་འོད་ཀྱི་སྣོན་མ་ཡོདུཾ <sup>390</sup>	8
9	རྒྱན་ཆད་མེད་པའི་རྩ་བོ་ཡོདུཾ	9
10	དམུས་ལོང་མིག་འབྱེད་ལྷེ་མིག་ཡོདུཾ	10
11	ལས་ཆོགས་རིན་ཆེན་ཆར་འབེབ་ཡོདུཾ <sup>391</sup>	11
12	ས་མ་ཡུཾ <sup>392</sup> ལྷ་ལྷ་ལྷུཾ	12

<sup>390</sup> ོམ་° B, C] ོམེ་° A.

<sup>391</sup> ོའབེབ་° B] ོའབེབས་° A; ོའབབས་° C.

<sup>392</sup> ོཡུཾ B, C] ོཡུུཾ A.

## 4.1.2. §0. 翻訳


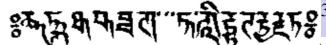
[A 511,1; B 249,1; C 197,1:長寿成就法『チャッキドンポ』のためのはしがき]

長寿成就法『チャッキドンポ』のための

はしがきと名付く [節]

[§0.1. 帰敬文の奉唱]

[§0.1.1] ヨーガ行者の寿命と生命を延ばすために  
外と内と秘密の長寿成就法がある。

[ダーキニーの符牒で] 「  <sup>393</sup>」。インド語で「主である長  
寿に関する持明者に帰命する (\**indra-āyuhdharanaha namah*)」。チベット語で「主である  
無量寿仏に帰命する」。

[§0.2. 埋蔵の趣意]

[§0.2.1] 本長寿成就法『チャッキドンポ』は、  
まさしく私パドマサンバヴァによって  
後世の有縁者のために置かれる。  
来たる最後の五百年に  
人々は [自らの過失に] 無頓着な [一方、他人を] 軽んじて誹謗するようになり、  
邪見、競争心、[他人の] 粗探しに巧みになる。

[§0.2.2] 罪人 [と] 越法者が蔓延る [このような] 時期に、  
私 (パドマサンバヴァ) の甚深なる秘法が  
[こうした] ありとあらゆる偽りの者によって行じられることを案じて、  
ウッディヤーナの地のダーキニーが  
来りて、ダーキニーの隠符で  
[この] パドマサンバヴァの心滴を記した。  
[彼女の] 太陽光線のように眩しく輝く [御身は] 法螺貝色、  
御手に甘露の壺を持ち抱える。  
[彼女は] パドマサンバヴァの秘密の明妃、  
秘密の御名で「チャンダーリー女神」 [と仰る]。

<sup>393</sup> Cf. Appendix B, no. 1 (A 512,1; B 250,1; C198,1).

[§0.2.3] [私 (パドマサンバヴァ) は、私の甚深なる秘法を] チャン地方のトーヨルナクポの地 [にある],  
 毒蛇の塊の如き岩山の中腹に  
 えび茶色の銅製の箱の中に [収めて] 秘匿する。  
 五濁悪世の時,  
 タサン山の東側 [タサン山を背にして] 前面に  
 縁に恵まれながらも [それを] 隠匿しているヨーガ行者,  
 持明者 (Rig-'dzin; vidyādhara) グウキデムトゥチェンが誕生する。  
 この宝蔵 (長寿成就法『チャッキドンポ』) は、正にこの [人] (持明者グウキデムトゥチェン) によって修されるだろう。  
 エマホー！縁に恵まれたパドマ [サンバヴァ] の御子よ！

## [§0.3. 内容細目]

[§0.3.1] 長寿成就法『チャッキドンポ』は、  
 外と内と秘密という3つの成就法 [より成り],  
 [これらを] 分ければ, [次のとおり] 11個の要門がある。

[§0.3.1.1] [要門1.] 外なる成就法「貴重な壺」に  
 [要門2.] 「甘露の精髓」があり,  
 [要門3.] 「[貴重な壺の] 口を飾る如意枝」がある。

[§0.3.1.2] [要門4.] 内なる成就法「チャッキドンポ」に  
 [要門5.] 「精ある五光の枝」があり,  
 [要門6.] 「不死なる金剛の果実」がある。

[§0.3.1.3] [要門7.] 秘密なる成就法「虚空の金剛」に  
 [要門8.] 「自照光の燈明」があり,  
 [要門9.] 「途切れることのない水流」があり,  
 [要門10.] 「盲者の眼を開く鍵」があり,  
 [要門11.] 「諸業の宝の雨を降らすもの」がある。  
 誓言！封印, 封印, 封印！



### 4.1.3. §0. 詳解

本4.1.3章では、第0節長寿成就法『チャッキドンポ』のためのはしがき (*Tshe sgrub lcags sdong ma'i them byang*) のテキスト、及び、翻訳に基づく考察を詳解として提出する。

詳解に入る前に、*them byang* という用語について短く触れたい。おそらくは *them pa* (門扉／敷居) と *byang bu* (銘) との2語より成る合成語と想定される、この用語は、よって「門扉上のまぐさ石等に銘記された文字」をまづもって意味する。<sup>394</sup> *them byang* が有するこのイメージは、また、書物全体の章節構成 (Tib. *le'u*; Skt. *parivarta, pariccheda*) において、まづはじめに通り返けるべき冒頭の章節を表現するのによく適ったものであろう。

長寿成就法『チャッキドンポ』の冒頭に掲げられたこの「はしがき」<sup>395</sup> (*them byang*) には、帰敬 (§0.1), 埋蔵の趣意 (§0.2), に続き、『チャッキドンポ』の内容細目 (§0.3) が掲載されている。書物全体の章節構成において一般に冒頭に置かれ、「序章」を意味する '*go brjod*'<sup>396</sup> 等との相違は、*them byang* という用語が有する、この内容一覧 (inventory) としての機能的語義に見出されよう。ALMOGI 2005 は、チベット語資料のタイトルを整理して明示した論考において、*them byang* を 'lists of contents', 'inventories or registers of various kinds' (p. 37) として分類している。<sup>397</sup>

BOARD 1993 によれば、*them byang* は、テルマの、特にリクズイン・グウデムチェンが発掘したチャンテルの埋蔵地に関する文脈では、これを記したリストという語義をもって *kha byang* と同義語とされる。<sup>398</sup> 実際、『チャッキドンポ』の当該箇所 (§0.3.1) も、外／内／秘密という3つの成就法を、その凡その下位区分である11個の要門 (*chos tshan*) と共に整理して示す、内容細目として機能している。『Schwieger目録』も、おそらくはこの文脈で '<*tshe sgrub lcags sdon ma'i them byan*' (p. 151) に 'Verzeichnis (zu Herkunft, Versteck und Inhalt) des *Tshe-sgrub lcags-sdon* [sic] (genannten *gter-ma*)' (p. 151) というドイツ語訳を与えているものと想定される。

<sup>394</sup> See 『蔵漢』 s.v. *them byang* (p. 1186): '*sgo'i ya them gyi ming byang yi ge*', *them pa* (p. 1186): '*sgo'i ya them ma them*', *byang bu* (p. 1873): '*shing dang ras shog sogs gru bzhi nar mor dras pa'i tshal bu*'.

<sup>395</sup> See 『広辞苑』 s.v. はしがき (p. 2338): '詩歌などの前にその由来を書き添えたことば', '論文や書籍の初めに、その取り扱う範囲や内容の要約などを記した文。序文'.

<sup>396</sup> See 『蔵漢』 s.v. '*go brjod*' (p. 497): '*rtsom yig gi thog ma'i shis brjod dam tshig rgyan*'.

<sup>397</sup> ALMOGI 2005:37: 'The genre category of lists of contents should thus include, in addition to *dkar chag*, the Tibetan terms *them byang* and *tho yig*; bibliographical lists should also include *mtshan tho* or *mtshan byang*, perhaps also *spar tho* and even *gsan yig* or *thob yig* and *lung thob pa'i yi ge*; and inventories or registers of various kinds should also include *tho yig*, *them byang* and *bem(s) chag(s)*'.

<sup>398</sup> See BOARD 1993:27: 'Apart from the *gter ma* which he himself revealed, Rig-'dzin rgod-ldem held the key to other lists of hiding places (*them byang*, *kha byang*) and was thus instrumental in the unearthing of many more texts and powerful cult objects'.

## §0.1. 帰敬文の奉唱

### §0.1.1

はしがき (*them byang*) の冒頭にあたる当該箇所には、本長寿成就法の意図と構成が韻文スタイルで記され、その後に散文スタイルの帰敬文が、ダーキニーの符牒 (*mkha' 'gro'i brda skad*)、インド語 (*rgya gar skad*)、チベット語 (*bod skad*) という3つの言語で記されているものと想定される。

本長寿成就法の意図は、これを勤行するヨーガ行者の寿命 (*tshe*) と生命 (*srog*) を延ばすこと (*bsring ba*)、即ち「延命」にあること、また、(1.) 外なる成就法 (*phyi sgrub*)、(2.) 内なる成就法 (*nang sgrub*)、そして (3.) 秘密なる成就法 (*gsang sgrub*) という3部構成であることが記されている。この「外→内→秘密」という順序は、成就法の他にも、例えば聖者伝等にも広く見られる一般的な配列であり、『チャッキドンポ』の実際の節順とも齟齬がない。『チャッキドンポ』の実際の節構成は、しかし、第2.3章(タイトルと節構成)において考察したとおり、より細かくみれば「はしがき→外→内→秘密→奥義」という、はしがきを除外すれば4部(寿命守護輪の描出方法を含めれば、5部)で構成されている。

この他、§0.1.1について注意すべき点として、本長寿成就法の意図(延命)と構成(3部構成)を記した1偈7音節から成るこの冒頭の2偈は『リンチェンテルズ』(CD\_B及びCD\_C)に見在しない、という点があげられる。当該の2偈が『心成就法ダクポツアルの法類』(CD\_A)によって何らかのかたちで付加されたと考えた場合は、はしがき (*them byang*) は、散文スタイルで記された帰敬文により開始されることになる。

ここに帰敬文とした、当該の2偈に続く散文は、ダーキニーの符牒、インド語、チベット語という3言語で記されたものと想定した。冒頭の「ダーキニーの符牒」(*mkha' 'gro'i brda skad*) という解釈は、しかし、この語句の用例が『チャッキドンポ』中に認められず、従って、これは訳文中に補記記号を付して提出した筆者の想定語 (*interpretive*) である。ここで仮に「ダーキニーの符牒」としたテキストの解説ができていない以上、これを帰敬文とすること、或いはまた、散文スタイルとすることもまた想定の域を出ない。

筆者の想定の根拠は、第2.4.1章(ダーキニーの符牒 (*mkha' 'gro'i brda skad*))において論述したように、§0.2に述べられる埋蔵の趣意にある。後に§0.2.1において考察するように、パドマサンバヴァが『チャッキドンポ』を埋蔵した趣意は、甚深なる秘法であるこの長寿成就法が末法の五百年間に悪用されることを忌避する目的で、これをウッディヤーナのダーキニーの隠符 (§0.2.2: *mkha' 'gro'i brda yig*) で記し、秘し匿すことにある。筆者はこの『チャッキドンポ』を記したという文字「ダーキニーの隠符」に注目し、これを当該 §0.1.1において並ぶその他の2言語、即ちインド語 (*rgya gar skad*) とチベット語 (*bod skad*) に合わせて「ダーキニーの符牒」(*mkha' 'gro'i brda skad*) と改めて想定した。この未確定な言語に関する考察は、従って、ダーキニーが用いる言語に左右されている。彼女が用いる言語がダーキニーの符牒であるのか、ウッディヤーナ語であるのか、或いは別種の言語であるのか、といったことがらについて論じるのは、しかし、いささか奇抜に過ぎよう。

なお、当該帰敬文には帰敬の対象となる主尊格名に関わる異読が、使用テキスト(CD\_A, CD\_B, CD\_C)の間に見在する。その主な事由は、当該帰敬文が多言語(ダーキ

ニーの符牒／インド語／チベット語)で記されていることに起因するものと考えられ、この一点からもテキストの選択は容易ではなかったことが強調されよう。<sup>399</sup>

長寿成就法『チャッキドンポ』の主尊格を巡っては、筆者は『リンチェンテルズ』所伝の読み (CD\_B, CD\_C) を採用し、インド語で (*rgya gar skad du*) 「*indra ā yu: dha ra na ha na ma:*」と読誦される当該帰敬文を「*indra-āyudhāraṇaha namaḥ*」と綴り直し、チベット語で *mgon po tshe dpag med la phyag 'tshal lo:* と読誦される帰敬文を参照して、これを \**indra-āyurdharaṇasya namaḥ* (主である持寿命者に帰命する) を意図する、中期インドアーリヤ語の影響下に訛った形 (à la Sanskrit) だと想定した。<sup>400</sup> テルシェー (᠋) がここでヴィサルガ (: ) に置換され得るのは、前者の起源を後者に求めた BEYER 1992 の所説が参照されよう。<sup>401</sup>

『心成就法ダクポツアルの法類』所伝の読み (CD\_A) では、「帰命」(CD\_B, CD\_C: *na ma:~namaḥ*) が、「～と名付けられる [長寿成就法]」(CD\_A: *nā ma:~nāma*) と解し得る点で『リンチェンテルズ』所伝の読みと相違する。CD\_A の読みを採用した場合は、従って、『チャッキドンポ』はインド文献からの翻訳という位置付けも可能になるであろう。*tshe 'i rig 'dzin* (長寿に関する持明者) のサンスクリット想定語 \**āyurdhara* をめぐる一用例としても、*mgon po tshe dpag med* と \**indra-āyurdharaṇa* との対応は慎重に検討する必要がある。

<sup>399</sup> 想定されるサンスクリットの語形を以下に表示する。

表13: 想定されるサンスクリットの語形 (§0.1.1)

Loc	ཐུག་རྒྱ་ལྷ་རྒྱ་ལྷ་མཚོ།	བོད་སྐད་ལྷ་མཚོ།
A 512,1	འི་རྩེ་ཨ་ཡུ་རྩེ་ར་ན་ལྷ་མཚོ། <i>indra a yu dha ra na ha nā ma: → indrāyudhāraṇahanāmaḥ!</i> <i>indrāyudhāraṇanāmalindrāyurdhāraṇanāmal</i> <i>indrāyudhāraṇāmalindrāyurdhāraṇāmal</i> <i>indrāyudhāraṇanāmalindrāyurdhāraṇāma</i>	འི་རྩེ་ཨ་ཡུ་རྩེ་ར་ན་ལྷ་མཚོ། <i>→ indrāmitāyuse namaḥ!</i> <i>indrāyāmitāyuse namaḥ!</i> <i>indrāparmitāyuse namaḥ!</i> <i>amitāyurnāthāya namaḥ!</i> <i>aparimitāyanāthāya namaḥ!</i> <i>aparimitāyurnāthāya namaḥ!</i>
B 250,1; C198,1	འི་རྩེ་ཨ་ཡུ་རྩེ་ར་ན་ལྷ་མཚོ། <i>indra ā yu: dha ra na ha na ma: → indrāyudhāraṇahanamaḥ!</i> <i>indra-āyurdhāraṇāya namaḥ!indra-āyurdharāya namaḥ!</i> <i>indra-āyurdharaṇāya namaḥ!indra-āyurdharaṇasya namaḥ</i>	

上の表 (表13) にあげた語形については、Harunaga Isaacson 教授 (Universität Hamburg)、後藤敏文名誉教授 (東北大学)、堀内俊郎博士 (東京大学)、Daisy Cheung氏 (Universität Hamburg) をはじめとする方々よりご意見を賜った。ここに記して感謝申し上げたい。

<sup>400</sup> Cf. SCHWIEGER 1995:151: ‘*indra āyudhāraṇahanama*’.

<sup>401</sup> BEYER 1992:53n15: ‘The source of the *gter-śad* is obscure, but in a number of eighth- and ninth-century manuscripts from the caves near Tun-huang we find, sporadically, a variety of *tsheg* formed with two small circles, one above the other, in various combinations with vertical and horizontal lines. My guess—and it is a guess—is that the *gter-śad* is originally a graphic imitation of the Sanskrit *visarga*, just as the *tshig-śad* and *ñis-śad* derive from the Sanskrit single and double *daṇḍa*.’

## §0.2. 埋蔵の趣意

### §0.2.1

『チャッキドンポ』埋蔵の趣意は、当該部分 (§0.2) の他、第2節内なる成就法 (§2.1)、第3節秘密なる成就法 (§3.7) にも看取されるが、冒頭のはしがきに位置する当該部分に最も詳しい。誰が、何を、どのような目的で、どのように記し、どこに埋蔵するのか、またそれをいつ、誰が発掘するのか、といった情報が、開示されている。

§0.2.1 には、この長寿成就法『チャッキドンポ』が、「まさしく私」(*bdag 'dra*)、即ち、パドマサンバヴァによって、「後世の有縁者のために」(*las can phyi ma'i don du*) 置かれる (*bzhag*)、即ち、埋蔵されるテルマであることが説示されている。「後世の有縁者」には、*las can phyi ma* (§0.2.1) の他に、第3節秘密なる成就法に *phyi rabs las can* (§3.8.1) という類例が見られる。この「有縁者」(*las can*; Skt. *karmaka*)<sup>402</sup> は、何れもリクズイン・グウデムチェンを意図する表現であろう。彼の名は、続く §0.2.3 に「グウキデムトゥチェン」(頭頂に秃鷲[の羽]を有する者)として明記されている。

『チャッキドンポ』が埋蔵される事由は、§0.2.2 に継続して説示されるが、当該箇所には、その前提として、来たる最後の五百年 (*ma 'ongs lnga brgya tha ma*) の間に生きる人々 (*mkhan*) の「[彼らは自らの過失に]無頓着な (*tho co*) [一方、他人を]軽んじて (*ras gcod*) 誹謗するようになり (*'phyar khyer*)、邪見 (*log lta*)、競争心 (*'gran sems*)、[他人の]粗探し (*skyon 'dzin*) に巧みになる (*mkhas*)」という性格をあげて説示されている。

仏法の盛衰を5つの五百年に分ける教説は、曇無讖 (Dharmakṣema. 385–433) の漢訳『大方等大集経』(T 397) に伝わる。仏滅後五百年に四度示される「次五百年」のその最後に、最後の五百年は「論争が絶えず正しい教えが見失われる時代 (鬪諍言頌白法隱沒損減堅固)」だと説かれている。<sup>403</sup> このような末法の世の呈は、パドマサンバヴァに帰される上の予言に通底するものといえよう。

### §0.2.2

当該 §0.2.2 には、『チャッキドンポ』がウツディヤーナの地のダーキニー (*o rgyan yul gyi mkha' 'gro ma*) によって、ダーキニーの隠符で (*mkha' 'gro'i brda yig la*) 記されたこと (*bkod*) が説示されている。その事由としては、§0.2.1 の予言に見られるように、来たる最後の五百年は、罪人 (*sdig can*) と越法者 (*dam nyams*) が蔓延る時期であり、こうしたありとあらゆる偽りの者 (*zog po*) によって、自身の甚深なる秘法 (*man ngag zab mo rnams*) が悪用されることへの憂慮 (*dogs*) があげられている。

<sup>402</sup> See NEGI, s.v. *las can* (p. 6639): 'karmakāh'.

<sup>403</sup> 『大方等大集経』363a25: 爾時世尊告月藏菩薩摩訶薩言。了知清淨土。若我住世諸聲聞衆。戒具足。捨具足。聞具足。定具足。慧具足。解脫具足。解脫知見具足。我之正法熾然在世。乃至一切諸天人等。亦能顯現平等正法。[1.] 於我滅後五百年中。諸比丘等。猶於我法解脫堅固。[2.] 次五百年我之正法禪定三昧得住堅固。[3.] 次五百年讀誦多聞得住堅固。[4.] 次五百年於我法中多造塔寺得住堅固。[5.] 次五百年於我法中鬪諍言頌白法隱沒損減堅固。了知清淨土。從是以後於我法中。

法滅 (*dam pa'i chos nub pa*) を説示する諸經典については、この他、NATTIER 1991 が詳細に論じている。

この憂慮に基づきダーキニーの隠符で記されたパドマサンバヴァの心滴 (*padma 'byung gnas snying thig*), 即ち、『チャッキドンポ』は、従って、罪人や越法者や偽りの者らには利用し得ないものである。ダーキニーの隠符は、THONDUP 1986 が論じているように、それ (*'dākinī scripts*) とそれでないもの (*'non-dākinī scripts*) とに二大別される場合は、よく承知しているものやテルマの相承系譜にあるもののみが、この前者を判読し得るものであることは、第2.4章(『チャッキドンポ』の記述言語)で触れたとおりである。

*snying thig* (*'\*citta-tilaka'*, GERMANO 2007:51) は *snying gi thig le* の簡略形で、<sup>404</sup> ニンマ派が仏教を9つの乗に分類、整理する体系においては、その九乗の頂点に位置するアティヨーガ乗 (Atiyoga) の3つの部類、即ち心部 (Sems-sde)<sup>405</sup> / 界部 (Klong-sde) / 教誡部 (Man-ngag-sde) の中の教誡部において、肝要な位置を占める用語として知られる。<sup>406</sup> 教誡部は「ゾクチェン・ニンティク」(rDzogs-chen-snying-thig) とも呼称され、<sup>407</sup> アティヨーガ乗の3つの部類の中で最も「実践の占める比重が大きくなる」(HIRAMATSU (平松) 1982:39) といわれる。

GERMANO 1994 は *snying thig* を ‘Seminal Heart’ (p. 205) と英訳し、この「体系」(*'cercles'* p. 269) 或いは「集成」(*'corpus'* p. 269, n. 168) がゾクチェン (rDzogs-chen) の「奥義」(*'the exceedingly secret core of the Great Perfection'*) と見做されており、それ故、仏教が王朝期チベットに定着した8世紀後半から9世紀にかけては、文字通り一握りの人々にしか伝授されていなかった、と論考している。*snying thig* が発掘されたテルマ群に依拠して広くチベットに知られるところとなったのは、11世紀以降とされる。<sup>408</sup> リクズイン・グウデムチェンが発掘したパドマサンバヴァの心滴 (§0.2.2: *padma 'byung gnas snying thig*) も、*Pad ma snying thig* と呼び慣らわされるこうした個々の *snying thig*<sup>409</sup> の一つと想定されよう。<sup>410</sup>

<sup>404</sup> See 『蔵漢』 s.v. *snying thig* (p. 1005): ‘*snying gi thig le ste snying po'am yang snying gi don*’. See also 『蔵漢』 s.v. *snying tig* (p. 1004): ‘*snying thig dang 'dra*’.

<sup>405</sup> KARMAY 1988によれば、テルマを構成するガブパ (*gab pa*, 埋蔵された教え) とダクパ (*bsgrags pa*, 発掘された教え) は、別個の相承系譜に連なるものの、ニンマ派の心部 (Sems-sde) の教えに関わるという点において共通点も多い。See KARMAY 1988:202: ‘Although the teachings contained in the *Gab pa* (hidden) and the *bsGrags pa* (revealed) have independent spiritual lineages from one another, they are philosophically very close to each other and basically have much the same view as that of the Sems sde trend of the rNying ma pa. The texts belonging to these collections are traditionally classified as *gter ma*, “rediscovered texts” [...]’.

<sup>406</sup> See LI (An-che) 1949, KHETSUN SANGPO (ケツンサンポ) 1964, KANEKO (金子) 1980, GERMANO 1994:281–286, YASUDA (安田) 2017:4, 7nn1–5.

<sup>407</sup> See HIRAMATSU (平松) 1982:9.

<sup>408</sup> GERMANO 1994:269: ‘Traditionally, the Seminal Heart is said to have been the exceedingly secret core of the Great Perfection, and as such was only transmitted to literally a handful of people during the late eighth and ninth centuries as Buddhism took hold in dynastic period Tibet. This new Great Perfection movement was then introduced to the wider Tibetan public from the eleventh century onwards under the auspices of “recovered” texts called “treasures” (*gter ma*), which included both transcendental buddha-authored tantras and their human-composed exegetical literature’.

<sup>409</sup> GERMANO 1994:269: ‘many figures in the Nyingma tradition (and other sects) composed their own Seminal Heart systems (generally known by such titles as the *Pad ma snying thig* [Lotus Seminal Heart] and

ウッディヤーナの地 (*o rgyan yul*) より来りて (*byon nas*) このパドマサンバヴァの心滴を彼女の隠符で記したダーキニーは、パドマサンバヴァの秘密の明妃 (*gsang ba'i yum*) で、秘密の御名 (*gsang mtshan*) で「チャンダーリー女神」(*lHa-mo-tsandha-lī; Caṇḍālī*)<sup>411</sup> と呼ばれている。*gsang mtshan* の用例は、『チャッキドンポ』の他にもう一箇所、第3節秘密なる成就法『虚空の金剛』に、パドマサンバヴァの忿怒相の秘密の御名「偉大なるグル・ダクポツアル」 (§3.3.2: *ma hā gu ru drag po rtsal*) を説示する際に使用されている。<sup>412</sup>

*caṇḍāla* の女性形として知られる *caṇḍālī* は、「熾熾」「暴悪」「屠者」「殺者」等と漢訳されるように、『ヒンドゥー社会』(TACHIKAWA (立川) 2015:37) において、狩猟や屠殺、刑戮等を業とする、最も賤しい階層の女性を指す。<sup>413</sup> *caṇḍālī* のチベット対応語としては、*gtum mo* という語句が挙げられよう。<sup>414</sup> 『チャッキドンポ』中にその用例は見えないが、リクズイン・グウデムチェンが発掘した『ヴァジュラキーラの長寿成就法』(*rDo rje phur pa'i tshe sgrub*) には、忿怒相の馬頭尊の明妃という用例 (*yum chen gtum mo*) が認められる。<sup>415</sup> *gtum mo* の語義は多様だが、<sup>416</sup> 中でも脈管 (*rtsa*) に関わる「忿怒女相」(*bud med khro mo*) が、本研究の当面の課題に照らして特に注意される。

*caṇḍālī/gtum mo* の性質は、依拠するタントラにより観想上の具体的特徴は異なるものの、大きく寂静相と忿怒相とに分けた場合は、このように、後者忿怒相として知られる。当該 §0.2.2 に描出されるチャンダーリーは、「チャンダーリー女神」(*lHa-mo-tsandha-lī*) として神格化されており、太陽光線のように眩しく輝く法螺貝色をした (*nyi 'od 'bar ba dung mdog can*) 身体をして、その御手に「甘露の壺」(*bdud rtsi'i bum pa*) を持ち抱えてい

so on) such that earlier traditions of the Great Perfection became marginalized and Seminal Heart came to be widely recognized as the premier form of the Great Perfection’.

<sup>410</sup> *Pad ma snying thig* は、他に、成就八部教 (*sGrub-pa-bka'-brgyad*) 中の蓮華口密成就部 (*Padma-gsung-gi-sgrub-skor*) の異名が注意される。See DARGYAY 1979:31: These instructions are contained in the text group of the Eight Pronouncements (*bka'-brgyad*). They constitute the eight main doctrines of Padmasambhava. The names of the separate sections follow: *gSin-rje-snying-thig*, *Padma-snying-thig*, *Rang-dag-thugs-kyi-snying-thig*, *bDud-rtsi-yon-tan-snying-thig*, *Phrin-las-phur-pa-snying-thig*, *rBod-gtong-ma-mo'i-snying-thig*, *Rig-'dsin-bla-ma'i-snying-thig*, *Jig-rten-dregs-pa'i-snying-thig*’.

<sup>411</sup> *caṇḍālī* のチベット語音写形と考えられる *tsandha lī* (ཙཎ་ལྷི།) には、校訂テキスト中に提出したように、異読がみとめられる。『リンチェンテルズ』所伝の読み (CD\_B, CD\_C) は *tsandha lī* であり、本論文はこの綴りを採用した。CD\_A では、*tsandha li* (§0.2.2) と *tsan dha li* (§3.7.2) と綴られている。

<sup>412</sup> §0.2.2: *gsang mtshan lha mo tsandha lī*.  
§3.3.2: *ma hā gu ru drag po rtsal: gsang mtshan*.

<sup>413</sup> See 『仏教語大辞典』s.vv. 旃陀羅, 旃陀利 (p. 838), BHSD, s.v. *caṇḍālī* (p. 223).

<sup>414</sup> See DBI, s.v. *Caṇḍālī* (v. 3, p. 739), LCHANDRA, s.v. *gtum mo* (p. 924).

<sup>415</sup> *rDo rje phur pa'i tshe sgrub*, 148,3:  
*nub phyogs klu dbang lag tu tshe 'thor na*: [°lag tu tshe 'thor na: em.] °lag tu x]  
*khro chen rta mgrin rgyal pos tshe khug la*: [°chen°rgyal pos tshe khug la: em.] °bo°rgyal pos x]  
*yum chen gtum mo yis ni dpal skyobs shig*: [°mo yis ni dpal skyobs shig: em.] °mo yis ni x]

<sup>416</sup> See 『藏漢』s.v. *gtum mo* (p. 1046): ‘(1.) *bud med khro mo* [...] (2.) *lus kyi rtsa'i bye brag cig* [...] (3.) *lha mo u ma* [...] (4.) *gtum mo'i me'i bsdus ming*’.

る。<sup>417</sup>『キーラの火炎鬘』(*Phur pa me lce'i 'phreng ba*)におけるチャンダーリー (*tsandra li*) は、無量寿仏の胸部に一面四臂という像容で観想され、<sup>418</sup>「貴重な壺」(*rin chen bum pa*) を、「金剛」(*rdo rje rin po che*) や「宝篋」(*rin chen za ma tog*) と共に持ち抱えている。<sup>419</sup> いずれもチャンダーリーが長寿と密接に関わる尊格であることを伺わせる叙述であり、『キーラの火炎鬘』における当該の「貴重な壺」(*rin chen bum pa*) を「甘露の壺」 (§0.2.2: *bdud rtsi'i bum pa*) と同等に見ても、問題ないであろう。

『チャッキドンポ』における彼女は、決して死者の頭部を胴部から切り離したり、それを喰らったりするような忿怒の行相で、不死を司ることはしない。チャンダーリー女神と『チャッキドンポ』との関わりは、「甘露の壺」にも象徴されようが、パドマサンバヴァの秘密の「明妃」(*yum*, Skt. *vidyārājñī*), 即ち、特定のダーラニーを有する女神、<sup>420</sup> として彼の心滴をダーキニーの隠符で記し、これを伝えたという役割を考えれば、当該

<sup>417</sup> Cf. DBI, s.v. *Caṇḍālī* (v. 3, pp. 739–741). 当該見出し語の第3番目の項目 (p. 740) には、‘*Caṇḍī* [sic] (Tib. *Gtum.mo*) in the maṇḍala of *Yogāmbara* (NSP.14.16) shows her holding a vessel of ambrosia’ という解説文と共に、当該チャンダーリーが図示されている。この図中のチャンダーリーは、確かに彼女の胸の前に何かを保持しているように見える。この図の典拠を見出すことはできなかったが、或いはこの ‘vessel of ambrosia’ は、<ニシュパンナヨーガーヴァリー> 中の用例 *vahnikuṇḍabhṛt* (NY\_s, #24 (Pañcaḍākamaṇḍala), 89,2) に見られる一種の「火壺」(Tib. *me thab*) に相当するものであるかもしれないことを(或いは大きな見間違いであるかもしれないが)注記しておきたい。BHATTACHARYYA 1968 は、この火壺(‘Fire-pot’ p. 312)をチャンダーリーの一つのシンボルとして挙げるにあたり、<ニシュパンナヨーガーヴァリー> の当該箇所 (i.e. BHATTACHARYYA 1949:75) を参照している。

<sup>418</sup> *Phur pa me lce'i 'phreng ba*, 216,3:  
*tshe dpag med pa'i thugs [thugs] thya] ka nas:*  
*tsandra li ni sku mdog dkar:*  
*phyag na rin chen bum pa bsnams:*  
*me dpung dag gi nang na bzhuks:*  
*zhal gcig phyag kyang bzhi pa la:*  
*g.yas pa rdo rje rin po che:*  
*g.yon pa rin chen za ma tog:*  
*dbu skra'i gseb nas rin po ches:*  
*gang ba'i sprul pa grangs med 'phro:*  
*'jig rten drug gi phyogs bcu nas:*  
*log par lta ba'i sems can rnams:*  
*rdul phran bzhin du brlag byas te:*

<sup>419</sup> 一面四臂の像容における左右の手標は、右手に「金剛」、左手に「宝篋」である。「貴重な壺」は、従って、残りの両手で把持されるものであろう。

Cf. BOORD 1993:209n747: ‘The *Garland of Flames* presents the rite of the consort as a backup technique to ensure the attainment of *siddhi*. If the signs of success are not fully attained by means of the previous rite, it says, the *yogin* should invoke the white goddess *Caṇḍālī* from the heart of *Amitāyus* by muttering OM VAJRACANḌĀLĪ HA JA JA HŪṀ. Blazing in a mass of fire she appears with one face and four hands within which she holds a *vajra* made of gems, a precious vase of nectar, a jewel and a casket. She has jewels in her hair and from her body radiate countless emanations which fill the ten directions of the six destinies and grind to dust all those who hold false views’.

<sup>420</sup> See 『仏教語大辞典』 s.v. 明妃 (p. 1308): ‘真言陀羅尼のこと。明王 ([Skt.] *vidyā-rāja*) の女性形。→真言 [Skt.] *vidyā-rājñī*’.

長寿成就法のコード化に彼女が深く関わっていたことにも、注意しなければならないであろう。

### §0.2.3

当該 §0.2.3 には、チャッキドンポ』がパドマサンバヴァによって埋蔵された場所と、これをいつ、誰が発掘するか、という点が、具体的に記されている。

パドマサンバヴァはこの宝蔵 (*gter*) を、まず、えび茶色の (*smug po*) 銅製の箱 (*bse sgrom*) の中に収めた。そうして、その箱を、チャン (Byang) 地方のトーヨルナクポ (Thoyor-nag-po) の地にある、毒蛇の塊 (*dug sbrul spungs*) の如き岩山の中腹 (*sked*) に秘匿した (*sbas*) とされる。この内容がリクズイン・グウデムチェンの直弟子セトン・ニマサンポ (fl. ca. 14c) が著したリクズイン・グウデムチェンの伝記『照射する陽光』に確認し得ることは、第2.7章 (発掘) において考察したとおりである。『チャッキドンポ』が発掘される時期とこれを発掘する人物については、五濁悪世の時 (*nam zhig snyigs ma lnga bdo'i dus*) に、タサン山 (Ri-bo-bkra-bzang) の東側、タサン山を背にして前面に誕生する持明者 (Rig-'dzin; *vidyādhara*) 「グウキデムトウチェン」 (rGod-kyi-ldem-'phru-can), 即ち、リクズイン・グウデムチェンが、これを発掘するものと記されている。

パドマサンバヴァが『チャッキドンポ』を納めたという *bse sgrom* を、本論文は「銅製の箱」と訳出するものであるが、*bse sgrom* というチベット語には「犀皮製の箱」という日本語訳の方が、一般的であるかもしれない。HERWEG 1994 による『照射する陽光』の関連箇所 (S\_A 26,1; S\_B 78,2: *bse'i ga'u cig gi nang na*) の英訳にも ‘within a charm-box (*ga'u, samputa*) of rhinoceros leather’ (p. 77) という訳文が看取される。<sup>421</sup> 筆者がここで *bse* を「銅／製の」と訳出したのは、偏に『古藏文辞典』s.v. *bse* (p. 1004) を参照した結果である。<sup>422</sup> そこには、まさしく (1.) 「銅」 (*zangs*) と (2.) 「草食動物の犀」 (*ri dwags bse ru*) という2つの語義が、この順序で挙げられており、前者に与えられた、多分に頑丈さを含意する「銅鎧」 (*bse khrab*) 及び「銅兜」 (*bse rmog*) という用例を参考に *bse sgrom* を「銅製の箱」と訳出した。<sup>423</sup> テルマを秘匿するにあたっては、「銅製の箱」の方が

<sup>421</sup> See also SCHWIEGER 1995:152 ‘„Die (meditative) Verwirklichung des *Tshe-dpag-med* hat *O-rgyan Padma 'byui-gnas* zum Wohle derjenigen (Anhänger) aus späteren Generationen, die (gutes) *karma* besitzen in der Mitte der purpurnen Lederschachtel versteckt ...“’, STEARNS 2007:26: ‘hidden in a casket of maroon rhinoceros hide until rediscovered by Gökyi Demtruchen’.

<sup>422</sup> 筆者にこの有用なレファレンスを与えてくださったのは、Cantwell 博士 (Oxford University) である。ここに記して感謝申し上げたい。

<sup>423</sup> *bse* に「銅／製の」という語義を与えている辞書類は、そう多くない。『古藏文辞典』の他に *bse* を見出し語として掲載している辞書でも、例えば DUNG-DKAR, s.v. *bse* (p. 2144) は、‘*zangs kyi ming dang ri dwags bse ru'i ming*’ と、極短く「銅」 (*zangs*) の語義をみとめているに過ぎない。

*bse* の語義について、その他の辞書類を参照すると、例えば『蔵漢』s.v. *bse* (p. 3048) には「漆／製の」という語義が「漆革」 (*ko bse*) 及び「漆布」 (*ras bse*) という用例と共に見られるが、「銅」 (*zangs*) に関する言及は見られない。『蔵漢』s.v. *bse sgam* (p. 3048) は、『チャッキドンポ』の当該箇所に見られる用例 *bse sgrom* に近似するが、その語義は *bse ko'i sgam* とばかりある。JÄSCHKE, s.v. *bse* (p. 593) にも「銅」 (*zangs*) に関する言及は見られず、‘tanned leather’ という語義が「革製の箱」 (*bse sgam/bse'i sgrom*) という用例と共に挙げられている。NEGI, s.v. *bse* (p. 7469) は *bse ru* (p. 7469) を同義語として挙げるが、NEGI, s.v. *bse ru* は ‘*khadgah*’ (犀) 及び ‘*khadgaviṣāṇah*’ (犀角) というサンスクリット対応語を挙げるばかりで、「銅 (*zangs*)」



「犀皮製の箱」より頑丈で、清潔であると考えられ、<sup>424</sup> 「えび茶色 (*smug po*)」という形容にも叶うものと想定される。

『チャッキドンポ』埋蔵の趣意には、この宝蔵 (*gter*) たる長寿成就法が発掘されるだけでなく、まさしく (*nges par*) 発掘者グウキデムトゥチェンその人によって修習されるべきこと (*spyod*) も記されている。その後続く「エマホー！」 (*e ma ho*) という驚嘆の感嘆詞<sup>425</sup>は、縁に恵まれた自らの御子 (*sras*) であるグウキデムトゥチェンが、無事『チャッキドンポ』を発掘し、これを修習する吉兆を讃嘆する意を表現したものであろう。

## §0.3. 内容細目

### §0.3.1

はしがきの末尾にあたる §0.3.1 には、『チャッキドンポ』の内容細目が記されている。この内容細目は、§0.1.1 に提示された『チャッキドンポ』の構成を敷衍するかたちで、即ち、外／内／秘密という3つの成就法をさらに11個の要門 (*chos tshan*) に分けて (*dbye na*)、『チャッキドンポ』の説示内容を整理、提示するものと考えられる。

ここで「要門」と訳した *chos tshan* は、「章節」とも訳し得よう。<sup>426</sup> 合計11個を数える *chos tshan* の具体的名称は、しかし、そこに含まれる外／内／秘密という3つの成就法の具体的節名を除き、『チャッキドンポ』中に用例が見在しない。例えば、「甘露の精髓」(要門2. *bdud rtsi bcud kyi snying po*) という、外なる成就法に内訳される *chos tshan* は、確かに外なる成就法に「甘露の錬金薬」 (§1.6.3: *bdud rtsi'i bcud len*) という近似した用語が看取される。しかし、この *bdud rtsi'i bcud len* を指して *bdud rtsi bcud kyi snying po* と同定することは躊躇われるであろう。「甘露の精髓」は、「甘露の錬金薬」を包括するところの一つの教えだと見做す方が無理がない。同様に、「自照光の燈明」(要門8. *Rang gsal 'od kyi sgron ma*)<sup>427</sup> や、「盲者の眼を開く鍵」(要門10. *dMus long mig 'byed lde mig*)、そして「諸業の宝の雨を降らすもの」(要門11. *Las tshogs rin chen char 'beb*) 等も、個々の用語が象徴するところの教えなのだと理解できよう。チャンダク・タシトブゲル (1550–1603. BDRC#P646) が著した『力倆類考究』 (*mNga' dbang skor gyi mtha' dpyod*) では、*chos tshan* は *man ngag* と表現されている。<sup>428</sup> *chos tshan* は、従っ

に関する言及は見られない。

<sup>424</sup> See 『蔵漢』 s.v. *bse can* (p. 3048): ‘*dri ma can*’.

<sup>425</sup> 「エマホー！」 (*e ma ho*) の用法は多岐にわたるが、『蔵漢』 s.v. (p. 3141) に ‘*ngo mtshar che zer ba'i brda*’ と、また「エマオー (*e ma'o*)」は『蔵漢』 s.v. (p. 3141) に ‘*ngo mtshar che ba'i tshig*’ と出ているように、一般に驚嘆の感嘆詞として用いられる。JÄSCHKE, s.v. *e ma* (p. 607) にも同様の語義 ‘interj.[ection] expressing joy, surprise, astonishment’ がみとめられる。

<sup>426</sup> See 『蔵漢』 s.v. *chos tshan* (p. 842): ‘*chos kyi dpe cha tshan pa'am/ sde tshan*’.

<sup>427</sup> *sgron ma* (B, C) には異読 *sgron me* (A) がある。両者は『蔵漢』 s.v. *sgron ma* (p. 624) に ‘*sgron me dang 'dra*’ と説明されているように、同義語と考えられるが、ここでは書物の表題に多用される接尾辞 *-ma* が付された *sgron ma* を採用した。

<sup>428</sup> *mNga' dbang skor gyi mtha' dpyod*, 643.2: *tshe sgrub lcags kyi sdong po la: phyi nang gsang ba'i sgrub thabs gsum: dbye na man ngag bcu gcig yod:*

て、厳密な科段 (*sa bcad*) を意図するものではなく、外／内／秘密という3つの成就法の中に説示される教えを象徴的に示す「要門」だと想定される。

第0節長寿成就法『チャッキドンポ』のためのはしがきは、この内容細目 (§0.3) の最後に誓言 (*sa ma ya≈samaya*)<sup>429</sup> と封印の言 (*rgya rgya rgya*)<sup>430</sup> をもって終わる。この誓言によって既述の内容が仏の智慧と合一した真実であることが宣誓され、<sup>431</sup> これに追加された封印の言によって、当該のはしがきを封緘するものであろう。

<sup>429</sup> See *Mvy*, no. 1438: *samayah/gzhung lugs sam sngags kyi skabs su dam tshig*.

<sup>430</sup> See 『藏漢』 s.v. *rgya* (p. 528): ‘*he’u tshe dang rtags/ dam rgya ’debs pa/ gsang rgya/ dngos po rga can gyi rigs/ thag ring du gtong rgyu’i yi ger rgya btap pa*’, Jäschke, s.v. *rgya* (p. 104–105): ‘*seal, stamp [...] to seal, to stamp*’.

<sup>431</sup> See KUNSANG 1990:179 (s.v. *samaya (dam tshig)*): ‘(1) The sacred pledge, precepts, or commitment of Vajrayana practice. [...] (2) At the end of a chapter, the single word *samaya* is an oath that what has been stated is true’. See also NAKAMURA (中村) 2004:93n1: ‘[NB: *samaya* の] *sam* は「共に」で、*aya* は *i* (行く) という動詞の語根からつくられたもので、一体におもむく、合一するという意味’に求められ、これは‘仏の智慧と合一した境地をいい、くだいていうと、実在と現象との差別のなくなった境地ということになる’.

1 4.2. 第1節 長寿成就法『チャッキドンポ』より外なる成就法「貴重な壺」  
2 4.2.1. §1. 校訂テキスト

3 [A 515,1; B 251,2; C 199,2: 外なる成就法「貴重な壺」]

4 ཚེ་སྐྱུབ་ལྷགས་ཀྱི་སྡོང་པོ་ལས་ལྷི་སྐྱུབ་རིན་ཚེན་བུམ་པ་བཞུགས་སོ་<sup>432</sup>

5 [§1.1. 帰敬文の奉唱]

6 [§1.1.1] ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ རྩེ་ཚེས་སྐྱུ་ལྷགས་ཀྱི་སྡོང་པོ་ལས་ལྷི་སྐྱུབ་རིན་ཚེན་བུམ་པ་བཞུགས་སོ་<sup>433</sup> ལོ་རྒྱུན་སྐྱེད་དུ་

7 ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་<sup>434</sup> བོད་སྐྱེད་དུ་ རིག་འཛིན་ཚེ་འེ་སྐྱུབ་ཐབས་ལྷོ་ མགོན་པོ་ཚེ་དཔག་མེད་ལ་ཕྱག་  
8 འཚལ་ལོ་

9 [§1.1.2] རི་བོ་བྲག་བཟང་ཤར་འདབས་སུ་<sup>435</sup>  
10 ལས་ཅན་སྐྱེས་པའི་རྣལ་འབྱོར་པ་  
11 ཚོད་ཀྱི་ལྷེ་མ་འཕྲུ་ཅན་གཅིག་འབྱུང་<sup>436</sup>  
12 ཚེ་སྐྱུབ་ལྷགས་ཀྱི་སྡོང་པོ་འདི་  
13 སྐལ་ལྷན་བུ་ཡིས་ཉམས་སུ་ལོངས་<sup>437</sup>  
14 ཐུགས་རྗེའི་གདུལ་བུ་མཐར་ཕྱིན་ཤོག་  
15 སྐྱེད་དུ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་<sup>438</sup>

16 [§1.2. 9つの滋養物より成る甘露の調合とその功德]

17 [§1.2.1] དང་པོ་ཕྱི་ཡི་སྐྱུབ་པ་ནི་

<sup>432</sup> སོ་ B, C] སོ་ ཐེམས་ཅན་བཅུ་དགུ་པ། A.  
<sup>433</sup> Cf. Appendix B, no. 2 (A 516,1; B 251,3; C 199,3).  
<sup>434</sup> Cf. Appendix B, no. 3 (A 516,1; B 251,3; C 199,3).  
<sup>435</sup> འདབས་ B, C] འདབས་ A.  
<sup>436</sup> འཕྲུ་ཅན་གཅིག་ B, C] འཕྲུ་ཅན་ཞིག་ A.  
<sup>437</sup> ལོངས་ em.] ལོངས་ A, B, C.  
<sup>438</sup> Cf. Appendix B, no. 4 (A 516,3; B 251,5; C 199,5).

1	ས་རྩོམ་མི་མོ་ཉེན་གྱི་། <sup>iii</sup>	1
2	དུངས་མ་ལྷ་དང་བདུད་རྩི་བཞི་།	2
3	གསོ་བྱེད་རྩལ་དགུའི་བདུད་རྩི་སློབ་། <sup>439</sup>	3
4	[§1.2.2] རིགས་ལྷ་རྒྱལ་བའི་སྤྲུགས་འདི་གདབ་།	4
5	ཨོ་བཟླ་སྒྲ་རྩི་། རྒྱ་སྒྲ་རྩི་། <sup>440</sup> ཨ་མི་རྩི་མ་རྩི་། <sup>441</sup> ཀམ་བཟླ་རྩི་། <sup>442</sup> བེ་རོ་ཅ་ན་ཨོ་།	5
6	[§1.2.3] བྱང་རྒྱལ་ལོ་ལས་ཀྱི་སྒོ་བསྐྱབ་བྱ་།	6
7	འདི་མོས་ཡོན་ཏན་བརྗོད་མི་ལང་།	7
8	ལོ་བཅུ་སྟོན་པ་བརྒྱ་འཚོར་འགྱུར་། <sup>443</sup>	8
9	འཚི་བ་དུག་པོ་བསྐྱབ་བར་འགྱུར་། <sup>444</sup>	9
10	འབྱུང་བ་ཆས་པ་གཞིན་ཅུར་འགྱུར་།	10
11	སེང་གེ་སྲུང་ཆེན་མ་བྱ་བྱུང་།	11
12	[§1.2.4] བཀྲག་མདངས་མེ་ཉེན་པར་འབྱུང་།	12
13	རིག་འདི་ན་མ་མོ་མཁའ་འགོ་ཡིས་།	13
14	དངོས་སྐྱེ་བྱིན་གྱིས་བརྒྱབས་པར་འགྱུར་། <sup>445</sup>	14
15	བདུད་རྩི་འདི་ཡི་ཡོན་ཏན་གྱིས་།	15
16	ཆེ་ལ་དབང་བའི་རིག་འདི་ན་འགྱུར་། <sup>446</sup>	16

<sup>iii</sup> rGyud bzhi, 202,1:

རོ་བོ་རྩལ་འཕེལ་ཅུས་པ་བསྐྱེད་པ་ནི།  
 རིན་པོ་ཆེ་ཡི་སྤྲོད་དང་ས་རྩི་སྤྲོད།  
 ཐིན་སྤྲོད་རྩི་སྤྲོད་ཐང་སྤྲོད་སོ་སྤྲོད་དང་།  
 སྤྲོད་ཆགས་སྤྲོད་དང་དབྱེ་བ་བརྒྱུད་ཏུ་བཤམ།

<sup>439</sup> འོ་སྤྲོད་ em. ] འོ་སྤྲོད་ A, B, C.

<sup>440</sup> རྒྱ་སྒྲ་རྩི་ em. ] རད་ན་སྒྲ་འཕྲི་ A; རྒྱ་སྒྲ་འཕྲི་ B, C.

<sup>441</sup> ཨ་མི་རྩི་མ་རྩི་ B ] ཨ་སྤྲོད་མི་མོ་ A; ཨ་སྤྲོད་མི་མོ་ C.

<sup>442</sup> འོ་སྤྲོད་ em. ] འོ་སྤྲོད་ A; འོ་སྤྲོད་ B; འོ་སྤྲོད་ C.

<sup>443</sup> འོ་སྤྲོད་ B, C ] འོ་སྤྲོད་ A.

<sup>444</sup> འོ་སྤྲོད་ B ] འོ་སྤྲོད་ A; འོ་སྤྲོད་ C.

<sup>445</sup> འོ་སྤྲོད་ A ] འོ་སྤྲོད་ B, C.

<sup>446</sup> འོ་སྤྲོད་ B, C ] འོ་སྤྲོད་ A.

1	[§1.3. 相承]	1
2	[§1.3.1] ཨོ་རྒྱལ་པརྩ་འབྱུང་གནས་གྱིས།	2
3	འདི་རྒྱལ་ཚེ་ཡི་རིག་འཛིན་འགྲུབ། <sup>447</sup>	3
4	ཚེ་རྒྱལ་མན་ངག་བསམ་ཡས་ཀྱང་།	4
5	ཨོ་རྒྱལ་ཐུགས་ཐིག་འདི་ཉིད་ཡིན། <sup>448</sup>	5
6	[§1.3.2] བྲག་རི་དྲག་རྒྱལ་སྤངས་འདྲའི་རྐྱེད།	6
7	བམེ་རྩོམ་རྒྱལ་པོའི་ནང་དུ་སྤྲས།	7
8	ནམ་ཞིག་སྤྲིགས་མ་ལྷ་བདེའི་དུས། <sup>449</sup>	8
9	ཚོད་གྱི་ལྷེ་མ་འཕྲུ་ཅན་གྱིས་ཐོན།	9
10	གདུལ་བྱ་སློན་ཅིང་ཕོལ་བར་ཤོག།	10
11	ཕྱི་མཁའ་རྒྱ་མཚོ་ཀློང་། ཏཱ་ལྷ་རྩེ་། ལྷ་ལྷ་རྩེ་། <sup>450</sup>	11
12	[§1.3.3] པརྩ་འབྱུང་གནས་བདག་གིས་ཀྱང་།	12
13	ཡི་དམ་ལྷ་ཡི་ལྷང་ཡང་ལྷས། <sup>451</sup>	13
14	རྒྱ་གི་ནམས་ལ་གསོལ་བ་བཏབ།	14
15	ཚེ་ཡི་རྒྱལ་ཐབས་འདི་ཉིད་ལྷས། <sup>452</sup>	15
16	[§1.4. 前行]	16
17	[§1.4.1] དང་པོ་སློན་དུ་འགོ་བའི།	17
18	ཡར་ངོ་བཀྲ་ཤིས་དུས་བཟང་ཚེ།	18
19	སློང་ད་ཐུག་དང་དུལ་སྤངས་སྤང་། <sup>453</sup>	19
20	[§1.4.2] ལུ་བསྐོལ་བཏུང་ཞིང་ཚ་སྤྲུབས་སྤང་། <sup>454</sup>	20

447 འབྲུབ་འུ་ A] འབྲུབས་འུ་ B, C.  
 448 འཐིག་འུ་ A] འཉིག་འུ་ B, C.  
 449 རྣམ་འུ་ B, C] རྣམ་འུ་ A.  
 450 Cf. Appendix B, no. 5 (A 517,5; B 252,3; C 200,3).  
 451 འལྷས་འུ་ B, C] འབསྟན་འུ་ A.  
 452 འལྷས་འུ་ A] འལྷས་འུ་ B, C.  
 453 འང་འལྷས་སྤང་འུ་ em.] འང་འལྷས་སྤངས་འུ་ A; འང་འལྷས་སྤང་འུ་ B, C.

1	ཟས་ཀྱང་བཅུད་ལྡན་ཚུང་བར་བཟའུ་ <sup>455</sup>	1
2	སྲོག་བསྐྱུ་སྐྱུ་བ་ཀྱི་སྐྱུ་བ་གཏང་ུ་ <sup>456</sup>	2
3	དེ་ནས་དངོས་གཞིའི་རིམ་པ་ནི་ུ་	3
4	འཆི་མེད་བདུད་ཚི་འདི་ཉིད་དོ་ུ་	4

5	འདྲི་རྒྱ་ན་མ་དུ་ཕྱི་ཕྱི་ལྟོ་ལྟོ་ <sup>457</sup>	5
---	---	---

[§1.5. 本次第「不死なる甘露」]

6		6
7	[§1.5.1] ས་ཡི་དྲངས་མ་བྲག་ཞུན་བྲེ་བྱེད་ལུ་ <sup>458</sup>	7
8	རྩོ་ཡི་དྲངས་མ་ཚོང་ཞི་བྲེ་གང་གིས་ུ་ <sup>459</sup>	8
9	སེའུ་སྐྱེ་ཞིང་རུས་པ་མཁེགས་པར་བྱེད་ུ་ <sup>460</sup>	9
10	ཤིང་གི་དྲངས་མ་བྱ་རམ་བྲེ་དོ་ལུ་	10
11	ཚི་ཡི་དྲངས་མ་འབྲི་མར་བྲེ་བཞི་སྐྱུར་ུ་ <sup>461</sup>	11
12	སྟོབས་ཆེ་བཅུད་རྣམས་རྒྱས་ཤིང་འཕེལ་བར་བྱེད་ུ་ <sup>462</sup>	12
13	མེ་ཏོག་དྲངས་མ་སྣང་ཚི་བཀྲག་གི་གསོས་ུ་ <sup>463</sup>	13

14	[§1.5.2] ལྷག་པ་འདབ་མ་རྒྱས་དུས་བ་ལུ་མེ་ཏོག་རྒྱས་དུས་མཁེགས་པ་འདབ་མ་རྒྱས་དུས་མཆེ་སྟོ་གཞི་	14
15	ཐིམ་དུས་དང་བཞི་ུ་ <sup>464</sup> དེ་རྣམས་རང་རང་གི་ཁན་ད་འདོན་པ་ཡིན་ནོ། <sup>465</sup>	15

<sup>454</sup> འབྲོལ་ུ་ B, C] འགོལ་ུ་ A.

<sup>455</sup> འབཟའུ་ B, C] འཟུ་ A.

<sup>456</sup> འགྱི་གཏང་ུ་ em.] འགྱིས་འགྱི་གཏང་ུ་ A; འགྱི་གཏང་ུ་ B, C.

<sup>457</sup> Cf. Appendix B, no. 6 (A 518,2; B 252,6; C 200,6).

<sup>458</sup> འབྱེད་ུ་ B, C] འབྱེད་ུ་ A.

<sup>459</sup> འཡི་ུ་ B, C] འཡིས་ུ་ A.

<sup>460</sup> འསེའུ་ A] འསེའུ་ B, C.

<sup>461</sup> འདྲངས་ུ་ B, C] འདྲངས་ུ་ A.

<sup>462</sup> འརྒྱས་ཤིང་འཕེལ་བར་ུ་ B, C] འཕེལ་ཞིང་རྒྱས་པར་ུ་ A.

NB: As for the term of འཕེལ་ (A 518,4), there is something seems to be a superscript figure འ ( ? ) or *bskur yig mgo* (ཟ), list enumerator, used in Bhutan.

<sup>463</sup> འཚི་བཀྲག་གི་གསོས་ུ་ B, C] འཚིས་བཀྲག་མདངས་གསེལ་ུ་ A.

<sup>464</sup> འལྷག་འདབ་མ་རྒྱས་དུས་མེ་ཏོག་རྒྱས་དུས་འདབ་མ་རྒྱས་དུས་མཆེ་སྟོ་གཞི་ཐིམ་དུས་ུ་ em.] འལྷག་འདབ་མ་རྒྱས་དུས་འདབ་མ་རྒྱས་དུས་འདབ་མ་རྒྱས་དུས་མཆེ་སྟོ་གཞི་ཐིམ་དུས་ུ་ A; འལྷག་འདབ་མ་རྒྱས་དུས་འདབ་མ་རྒྱས་དུས་འདབ་མ་རྒྱས་དུས་མཆེ་སྟོ་གཞི་ཐིམ་དུས་ུ་ B, C.

<sup>465</sup> འདེ་རྣམས་རང་རང་གི་ཁན་ད་འདོན་པ་ཡིན་ནོ། em.] འདེ་རྣམས་རང་རང་གིས་ཁན་ད་འདོན་པ་ཡིན་ནོ། A; འདེ་རྣམས་

1	[§1.5.3]	དུས་བཞིར་བརྟུན་ལྷན་བདུད་ཚི་བཞི་ཡིན་པས།	1
2		དེ་བཞིའི་བརྟུན་བསྐྱུས་ཁན་ད་ཚྱོར་གང་གྲོགས། <sup>466</sup>	2
3		སྐྱུར་བའི་ཐབས་ནི་ཚང་ཞི་བྲེ་གང་ཚད།	3
4		ཚུ་བྲེ་དུག་ལ་ཚིག་མ་བྲེ་གང་དབྱུང་། <sup>467</sup>	4
5		སྐྱུར་པོ་བྲེ་གང་སོང་ཚེ་བདུད་ཚི་བཞི། <sup>468</sup>	5
6		བཀ་ལྷན་མར་དང་འོ་མ་ཉིས་འགྱུར་བསྐྱེ།	6
7		མ་འདྲེས་བསྐྱུས་ལ་ཚུ་དེ་ཚོད་པ་དང་།	7
8		སྐྱུར་དང་བྱ་རམ་མར་དང་ལེགས་པར་བསྐྱེ།	8
9	[§1.5.4]	མཚན་ལྷན་ཐོད་པ་ལྷར་སྐྱབས་དལ་ལ་བཀོད། <sup>469</sup>	9
10		ཡིག་འབྲུ་ལྷ་ལ་རིགས་ལྷ་ཡབ་ཡུམ་བསྐྱེད།	10
11		རང་བཞིན་གནས་ནས་སྐྱུན་དངས་ངོ་རྒྱ་བོ་རྟོ། <sup>470</sup>	11
12		བརྟན་པར་བལྟགས་གསོལ་མཚོད་པ་རྒྱ་ཚེར་འབྲུལ། <sup>471</sup>	12
13	[§1.5.5]	གོང་ལྷར་སྐྱེང་པོ་བསྐྱེ་གིང་ཉིང་འདྲིན་བསྐྱེམ། <sup>472</sup>	13
14		རིགས་ལྷ་ཡབ་ཡུམ་སྐྱེར་མཚམས་བྱང་ཚུབ་སེམས།	14
15		བརྟུད་ཀྱི་བདུད་ཚི་བབས་པས་ཐོད་པ་གང་བར་བསམ། <sup>473</sup>	15
16		[§1.6. 本次第「不死なる甘露」成就の証]	16
17	[§1.6.1]	དེ་ལྷར་ཞག་བདུན་བསྐྱུབས་ནས་དངོས་གྲུབ་སྐྱང་། <sup>474</sup>	17
18		ཐོ་རངས་ལྷོ་གོང་དུས་སྐྱུ་ཉག་ཏུ་སྐྱུད།	18
19		མ་ལྷ་བར་ལ་ཁ་བས་གཞན་ནམས་སྐྱང་། <sup>475</sup>	19

རང་རང་གི་ཁ་ནད་འདོན་པ་ཡིན།>> B, C.

466 °བཞིའི་°ཁན་ད་°གྲོགས། em.] °བཞིན་°ཁན་ད་°གྲོགས། A; °བཞིའི་°ཁན་ད་°གྲོགས། B; °བཞིའི་°ཁན་ད་°གྲོགས། C.

467 °ཚིག་° B, C] °བསྐྱུས་ལ་°བཞིགས་° A.

468 °བདུད་ཚི་° B, C] °བདུ་བཞི་° A.

469 °སྐྱབས་° B, C] °སྐྱབ་° A.

470 °རྟོ་° B, C] °རྟོ་° A.

471 བརྟན་°གསོལ་མཚོད་° B, C] མ་ཚེས་བརྟན་°སྐྱུ་གསོལ་° མཚོད་° A.

472 °བསྐྱེ་ em.] °བསྐྱེས་° A, B, C.

473 བརྟུད་ཀྱི་° B, C] <<བརྟུད་ཀྱི།>>° A.

474 °སྐྱང་° B, C] °སྐྱངས།° A.

475 °སྐྱང་° B, C] °སྐྱངས།° A.

1	ཚེ་ནི་ཉི་ཟླའི་ཚད་དང་མཉམ་པར་འགྱུར་ཅེ་	1
2	འཚི་བ་དྲུག་པོ་བསྐྱུ་བར་བྱེད་པར་ངེས་ཅེ་ <sup>476</sup>	2
3	རིམས་དང་རྒྱུན་དང་འབྲུང་བའི་དར་རྒྱུད་དང་ <sup>477</sup>	3
4	ཀས་དང་འདུ་བ་རྣམ་བཞིའི་ནད་ལས་ཐར་ཅེ་	4
5	[§1.6.2] བརྒྱུད་ཅུ་ལོན་ཚེ་སྐྱ་དཀར་གཉེར་མ་དང་ <sup>478</sup>	5
6	ཤ་སྐྱམ་ལུས་སྟོབས་རྒྱུད་དང་མིག་མི་གསལ་ལུ་ <sup>479</sup>	6
7	སེམས་འཐེབ་ཀས་པའི་སྐྱེན་རྣམས་འབྲུང་མི་འགྱུར་ཅེ་ <sup>480</sup>	7
8	གཞིན་ཅུ་བརྒྱ་དྲུག་ལོན་པ་ལྟ་བུར་འགྱུར་ཅེ་	8
9	གྲུབ་རྟགས་སྟོབས་དང་གྲུད་དང་མདངས་དང་འགྲོས་ཅེ་	9
10	སང་གེ་སྲང་ཚེན་མ་བྱ་ཉ་ལྟར་འགྱུར་ཅེ་	10
11	[§1.6.3] ཉག་ཏུ་སྐྱུད་ན་ཤ་རྒྱས་གཉེར་མ་མེད་ཅེ་	11
12	སོ་སྐྱེ་དབང་པོ་གསལ་ལ་ལ་ལུས་སེམས་བདེ་ <sup>481</sup>	12
13	ཚེ་ནི་ཉི་ཟླ་མཚོགས་པ་རྒྱུད་ལྟར་འགྱུར་ཅེ་ <sup>482</sup>	13
14	རིག་འཛིན་མཁའ་འགྲོས་བྱ་བཞིན་བསྐྱུང་བར་འགྱུར་ཅེ་ <sup>483</sup>	14
15	བདུད་ཚིའི་བརྒྱུད་ལེན་ཚེ་ཡི་སྐྱབ་ཐབས་སོ་ <sup>484</sup>	15
16	[§1.6.4] བོང་ལྟར་སྐྱུར་ཉེ་སྐྱབ་པ་མ་བྱུང་ཡང་ཅེ་	16
17	སྐབས་སུ་སྐྱུད་ན་ཡོན་ཏན་བསམ་མི་བྱུང་ཅེ་	17
18	སྐྱོད་ལམ་དྲག་ཤུལ་རྩལ་ཐོན་ལས་མི་བྱུང་ <sup>485</sup>	18
19	འབྲོངས་དུས་ཁ་བས་རྣམས་ཀྱང་བསྐྱུང་མི་དགོས་ཅེ་ <sup>486</sup>	19

<sup>476</sup> འབྲུ་ཅེ་*em.*] འབྲུས་ཅེ་ A; འབྲུ་ཅེ་ B, C.

<sup>477</sup> འབྲུད་ཅེ་ A] འབྲུད་ཅེ་ B, C.

<sup>478</sup> འཚི་བ་ཅེ་ B, C] འཚི་བ་ཅེ་ A.

<sup>479</sup> ཤ་སྐྱམ་ཅེ་ B, C] ཤ་སྐྱམས་ཅེ་ A.

<sup>480</sup> འཐེབ་ཅེ་ B, C] འཐེབས་ཅེ་ A.

<sup>481</sup> སྐྱེ་ཅེ་ B, C] སྐྱེས་ཅེ་ A.

<sup>482</sup> མཚོགས་ཅེ་ B, C] མཚོགས་ཅེ་ A.

<sup>483</sup> འབྲུང་ཅེ་ B, C] འབྲུང་ཅེ་ A.

<sup>484</sup> ཚིའི་ཚེ་ཡི་ཅེ་ B, C] ཚིའི་ཚེ་ཡི་ཅེ་ A.

<sup>485</sup> སྐྱོད་ཅེ་ A, C] སྐྱོན་ཅེ་ B.

<sup>486</sup> འབྲོངས་ཅེ་ B, C] འཕང་ཅེ་ A.



1 [§1.7. テルマの守護] 1

2 [§1.7.1] ལྷ་བརྒྱུ་ཐ་མ་ཤར་བས་ཚེ་ཚད་བྱང་ལྷ་<sup>487</sup> 2

3 བད་མང་ལོངས་སྤྱོད་ཚུང་ཞིང་བར་ཚད་མང་ལྷ་ 3

4 དམ་པའི་དོན་ཡང་མི་འགྲུབ་ཡིད་རེ་ཚད་ལྷ་<sup>488</sup> 4

5 [§1.7.2] དེ་ཕྱིར་པར་འབྱུང་གནས་ཉམས་ཕྱོད་འདི་ལྷ་<sup>489</sup> 5

6 ལྷ་བརྒྱུ་ཐ་མ་དུས་ངན་འབྱུང་དུས་སྤྱོད་ལྷ་<sup>490</sup> 6

7 ལས་ཅན་ང་ཡི་བྱ་དང་འཕྲད་འགྱུར་ནས་ལྷ་<sup>491</sup> 7

8 སངས་རྒྱལ་བསྟན་པ་ཡུན་དུ་གནས་པར་ཤོག་ལྷ་ 8

9 རོ་རྗེ་ལེགས་པ་ཁྱོད་ཀྱིས་གཏོར་འདི་སྤྲུང་སྤྱོད་ལྷ་<sup>492</sup> 9

10 ལྷོགས་མའི་དུས་སྤྱོད་ལས་ཅན་བྱ་ལ་གཏོར་ལྷ་ 10

11 ལྷོགས་མའི་དུས་སྤྱོད་ལས་ཅན་བྱ་ལ་གཏོར་ལྷ་<sup>493</sup> 11

12 [§1.8. コロフォン] 12

13 [§1.8.1] བྲག་རི་དུག་སྤྲུལ་སྤྲངས་འབྲེལ་སྐྱོད། ལྷོ་གསེར་མཛོད་སེར་པོའི་ནང་ནས་རིག་འཛིན་ཚོད་ཀྱི་ 13

14 ལྷོ་མ་འབྲུ་ཅན་གྱིས་བཏོན་པའི་<sup>494 iv</sup> 14

iv *gSal byed nyi ma'i 'od zer*, S\_A 31,3; S\_B 84,3:  
 བྲག་རི་དུག་སྤྲུལ་སྤྲངས་འབྲེལ་ལྷ་  
 ལོ་རྒྱའི་ལོ་ལ་གཏོར་འབྱུང་བར་ [བར་ S\_A] བར་ S\_B] འགྱུར་རྩོད་  
 [... S\_A 42,2; S\_B 96,5]  
 ལྷོ་ཕྱོགས་གསེར་མཛོད་སེར་པོ་ནས།  
 བསྟན་སྤྲུབ་ [སྟན་སྤྲུབ་ A] བསྟན་བསྤྲུབ་ B] ལྷོ་མ་པ་བཞིའི་ཚོས།  
 ལྷོ་མ་པ་ལྷོ་མ་ལས་ལ་བ།

*Thob yig gangga'i chu rgyun*, vol. 3, 264,6: ལྷོ་མ་ལས་ལྱང་ཆེས་ལྷོ་མ་པའི་མན་ངག་སྤྲུལ་སྤྲུལ་རིག་ [རིག་ em.]  
 རིགས་] འཛིན་ཆེན་པོས་ལས་ཆེན་ལྷོ་གསེར་མཛོད་སེར་པོ་ནས་སྤྲུལ་སྤྲངས་པའི་ལྷོ་མ་རིག་ [རིག་ em.] རིགས་] འཛིན་སྤྲུགས་སྤྲུབ་

487 འབྲུང་ལྷ་ A] འབྲུང་ལྷ་ B, C.  
 488 འབྲུང་ལྷ་ A] འབྲུང་ལྷ་ B, C.  
 489 འབྲུང་ལྷ་ B, C] འབྲུང་ལྷ་ A.  
 490 འབྲུང་ལྷ་ B, C] འབྲུང་ལྷ་ A.  
 491 འབྲུང་ལྷ་ em.] འབྲུང་ལྷ་ A; འབྲུང་ལྷ་ B, C.  
 492 འབྲུང་ལྷ་ B, C] འབྲུང་ལྷ་ A.  
 493 Cf. Appendix B, no. 7 (A 520,6; B 254,6; C 202,6).  
 494 འབྲུང་ལྷ་ B, C] འབྲུང་ལྷ་ A.

---

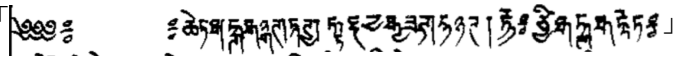
ཐག་པོ་ཅལ་གྱི་ཚོས་སྐོར་ལ་ [...].

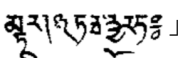
## 4.2.2. §1. 翻訳

[A 515,1; B 251,2; C 199,2: 外なる成就法「貴重な壺」]

長寿成就法『チャッキドンポ』より  
外なる成就法「貴重な壺」と名付く [節]

[§1.1. 帰敬文の奉唱]

[§1.1.1] [ダーキニーの符牒で]  <sup>495</sup>。

ウッディヤーナ語で「」<sup>496</sup>。チベット語で「長寿成就法に関する持明者にして主である無量寿仏に帰命する」。

[§1.1.2] タサン山の東側に

縁に恵まれながらも [それを] 隠匿しているヨーガ行者、  
グウキデムトウチェンが誕生する。

この長寿成就法『チャッキドンポ』は、

[この] 有縁の人 (グウキデムトウチェン) によって実修されるべきである。

悲心の懐にある [この] 弟子が究竟に至るように！

 <sup>497</sup>

[§1.2. 9つの滋養物より成る甘露の調合とその功德]

[§1.2.1] まず、外なる成就法の為に

9つの滋養物 [より成る] 甘露を調合しなさい。

[9つの滋養物は、] 5つの精分、即ち

- [1.] 土類、
- [2.] 岩石/鉱物類、
- [3.] 液体凝固類、
- [4.] 樹木類、
- [5.] 花類と、

<sup>495</sup> Cf. Appendix B, no. 2 (A 516,1; B 251,3; C 199,3).<sup>496</sup> Cf. Appendix B, no. 3 (A 516,1; B 251,3; C 199,3).<sup>497</sup> Cf. Appendix B, no. 4 (A 516,3; B 251,5; C 199,5).

4つの甘露 [より成る]。

[§1.2.2] [その後, ] 五仏のダーラニーを次のように唱える。

[1.] 「*om vajrasattva hūm*」

[2.] 「*[om] ratnamudrā trāḥ*」

[3.] 「*[om] amidhewa hrī*」

[4.] 「*[om] karmavajra hūm*」

[5.] 「*[om] vairocana om*」

[§1.2.3] 菩提心の発し, 収斂したものである

これ (9つの滋養物より成る甘露) を食して [得られる] 功德は筆舌に尽くしがたい。

[人間にとって] 十年ありえた [寿命] は百 [年] に延び,  
6つの死を欺き,  
老体は若返り,  
獅子, 象, 孔雀, 金翅鳥 (*garuḍa*) [の如く自在になる]。

[§1.2.4] 端麗で, 蓮華の如き

持明者にして本母であるダーキニーによって,  
[勤修者は] 直々に加持される。

この (9つの滋養物より成る) 甘露の功德によって  
[勤修者は] 長寿を意のままにする持明者となる。

#### [§1.3. 相承]

[§1.3.1] [私, 即ち] ウッディヤーナのパドマサンバヴァによる

これ (長寿成就法『チャッキドンポ』) を勤修し, 長寿に関する持明者となれ。  
[本] 長寿成就法は, 秘法であり, 不可思議であり, しかも  
ウッディヤーナの (私の) 心滴そのものである。

[§1.3.2] [これ (長寿成就法『チャッキドンポ』) を私 (パドマサンバヴァ) は,  
チャン地方のトーヨルナクポの地にある] 毒蛇の塊の如き岩山の中腹に  
えび茶色の銅製の箱の中に [収めて] 秘匿する。

五濁悪世の時,  
グウキデムトゥチェンによって発掘されるように。

[この私の] 弟子が成熟し、解脱するように！

ཕྱི་མཁའ་ལྷན་པའི་ཀློང་ལོ་ལྷན་པའི་ལྷན་པའི་།<sup>498</sup>

[§1.3.3] パドマサンバヴァ私自身も

本尊(無量寿仏)からの口訣も嘆願した。

ダーキニーたちに勧請して

まさしくこの長寿成就法(長寿成就法『チャッキドンポ』)を授かったのである。

[§1.4. 前行]

[§1.4.1] まずはじめに、前行は

[満月に向かう] 吉祥な上弦の月の幸先が良い時

[次のものを] 禁忌として [勤修する]。

[1.] 匂いの強い青菜,

[2.] 血腥いもの、そして,

[3.] 腐臭のするもの。

[§1.4.2] 白湯を飲んで、血管を清浄にすること。

食べ物を [摂る] なら、滋養のあるものを少しだけ摂ること。

放生 [等、他の生きものを] 利益する布施を行うこと。

この(前行の)後、[外なる成就法『貴重な壺』の] 本次第である

「不死なる甘露」を [漸く勤修する] ことになる。

འདྲི་མཁའ་ལྷན་པའི་ཀློང་ལོ་ལྷན་པའི་ལྷན་པའི་།<sup>499</sup>

[§1.5. 本次第「不死なる甘露」]

[§1.5.1] [9つの滋養物に含まれる5つの精分を] 練り混ぜる。

[1/9.] 土類の精分であるダクシュン(≈岩精)をデ(*bre*)で半杯、[これを]

[2/9.] 岩石/鉱物類の精分であるチョンシ(≈寒水石)デ1杯と [練り混ぜる]。

[これら 1. と 2. の精分は] 新しい歯を生じさせ、骨を強固にする。

<sup>498</sup> Cf. Appendix B, no. 5 (A 517,5; B 252,3; C 200,3).

<sup>499</sup> Cf. Appendix B, no. 6 (A 518,2; B 252,6; C 200,6).

[3/9.] 樹木類の精分であるブラム (≈糖蜜) をデ2杯, [これを]

[4/9.] 液体凝固類の精分であるディマル (ディの乳で作ったバター) デ4杯 [と練り混ぜる]。

[これら 3. と 4. の精分は] 筋肉と内臓を壮健にする。

[5/9.] 花類の精分であるダンツイ (蜂蜜) は, [外見の] 色艶を育む。

[§1.5.2] [9つの滋養物に含まれる] 4つの [不死なる甘露] は,

[6/9.] シュクパ (≈ビヤクシン) は, [針] 葉が生い茂る時期に,

[7/9.] バル (≈シャクナゲ) は, 花が咲く時期に,

[8/9.] ケンパ (≈ヨモギ) は, 葉が生い茂る時期に,

[9/9.] ツェゴ (≈マオウ) は, 根が伸長する時期に,

これらをそれぞれ煎じ詰めて, 抽出したものをいう。

[§1.5.3] 滋養がみとめられる 4つの時期に, 4つの甘露は [収穫され, 抽出される] のであるから,

これら4つの滋養を凝縮し, 煎じ詰めたものは, たとえ一握りであっても [互いの滋養を] 補い合う。

[9つの滋養物を] 調合する方法は,

[1.] チョンシ (≈寒水石) をデ1杯量る。

[2.] デ6杯の水に, [チョンシと] デ1杯のツイクマ (≈壁土) を加える。

[3.] ペーストリー状になった [上記2.] デ1杯と, [その] 2倍の分量の (デ2杯の) (a.) 4つの甘露,

(b.) ダクシュン,

(c.) [ディ]マル (=ディの乳で作ったバター), そして,

(d.) ミルク

とを, 混ぜ合わせる。

[4.] 混合しづらいものを纏めるには, それらの水分を切り,

(e.) ダン[ツイ] (≈蜂蜜) と,

(f.) ブラム (≈糖蜜),

(g.) [ディ]マル (=ディの乳で作ったバター)

を [加えて] よく混ぜ合わせる。

[§1.5.4] [上記のように調合した9つの滋養物を] 5つのやんごとない頭蓋骨に [分け] 容れて, 大事に安置する。

[五仏のダーラニーに含まれる] 5つの種子 (§1.2.2: *hūm, trāḥ, hrī, hūm, om*)

[を奉唱すること]により、五仏を[彼らの明妃と共に]父母合体尊として生起する。

自然安住の位より[彼らを]勧請し、[四摂智菩薩の種子から成る真言]「jah」 「hūm」 「vam」 「hoḥ」[を唱える]。

[五仏と彼らの明妃が]恒にいらっしやるよう、盛大な祈祷を捧げる。

[§1.5.5] 前述した[5つの]種子を唱え、一心に思索を深めてゆく。

[すると、]五仏が父母合体尊として交接する箇所[から]菩提心[である]

滋養の甘露が滴り落ちて、[5つのやんごとない]頭蓋骨に満ちる。[その様子を]ありありと観想するのである。

#### [§1.6. 本次第「不死なる甘露」成就の証]

[§1.6.1] 以上のように[本次第「不死なる甘露」を]7日間勤修することにより、[勤修者は]成就を得る。

決まっていつも暁闇、食事[を摂る]前に行じること。

[前日食したものが]消化しきれていないときは、[新たな]別の食べ物は控えること。

[これらを守れば、勤修者の]寿命は、太陽や月に齊しく[壮大な]スケールとなるであろう。

[次に挙げる]6つの死を欺くこと請け合いである。[即ち、—]

[1.] 疫病[による死]、

[2.] 事故[による死]

[3.] [自然界を構成する四大]種の[極端な]増大[に起因する災害による死]

[4.] [自然界を構成する四大種の極端な]減少[に起因する災害による死]

[5.] 老い[による死]

[6.] [身体を]構成する四種[の不均衡に起因する]病[による死]

[—という6つの死]から[勤修者は]解放される。

[§1.6.2] 80歳に届くと、髪は白[くなって]皺[が目立ち]、

身体は潤いを失い、体力は衰え、視[覚も]ぼやけ、

思考力は散漫になる[ものだが、こうした]老いに伴う諸々の厄介事[も、本次第「不死なる甘露」を勤修した者には]生じなくなる。

16歳そこそこの若者のようになるであろう。

成就の証としては、

[1.] 獅子の如く強勢に[なること]、

- [2.] 象の如く頑強に [なること],
- [3.] 孔雀の如く光輝に [なること],
- [4.] 馬の如く徒路するようになること,  
[が挙げられる]。

- [§1.6.3] [本次第「不死なる甘露」を] 常に行ずるなら, [勤修者の] 身体は壮健で,  
[彼/彼女に] 皺はない。  
歯が生え, [五] 根は明晰になり, 心身共に安泰である。  
寿命は太陽と月に [斉しく壮大なスケールになり], 俊敏さは風のように [斉しく  
敏捷に] なる。  
持明者 [にして本母である] ダーキニーの子どものように守護されるであろう。  
[以上が] 甘露の錬金薬 (*rasāyana*) に関する長寿成就法である。

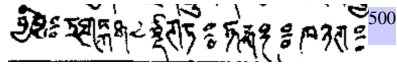
- [§1.6.4] 上に記したとおりに [甘露の錬金薬を] 調合して成就が生じなかったとしても,  
時機を得て行ずるなら, 功德は量り知れない。  
粗野な [四] 威儀, [例えば] 汗をかくような行為はいけない。  
[勤修者が本次第「不死なる甘露」に] 熟達した時は, 食べ物など [の禁忌] に  
ついては遵守する必要はない。

## [§1.7. テルマの守護]

- [§1.7.1] 最後の五百年が来ると,  
[1.] 寿命は短く,  
[2.] 病は多く,  
[3.] 富は少ないが,  
[4.] 災難は多く,  
[5.] 勝義も成り立たず,  
[6.] 望み [も] 絶たれる。

- [§1.7.2] だからこそパドマサンバヴァの, この領受が  
最後の五百年という困難な時期が訪れる時に  
縁に恵まれた我が子と巡り会い,  
[その結果] 仏の教えが末長く安住するように!  
金剛喜よ! 汝, このテルマ (長寿成就法『チャッキドンポ』) を守護せよ!  
[五濁] 悪世の時, 縁に恵まれた [我が] 子に [このテルマを] 譲渡せよ!





## [§1.8. コロフォン]

[§1.8.1] [以上，このテルマ，即ち長寿成就法『チャッキドンポ』は，] 毒蛇の塊の如き岩山の中腹 [に，中央／東／南／西／北の 5箇所に分けて埋蔵された内の] 南に [位置する] 黄色をした金庫の中から，[私] 持明者グウキデムトゥチェンによって発掘されたものである。

<sup>500</sup> Cf. Appendix B, no. 7 (A 520,6; B 254,6; C 202,6).

### 4.2.3. §1. 詳解

本4.2.3章では、第1節外なる成就法「貴重な壺」のテキスト、及び、翻訳に基づく考察を詳解として提出する。

詳解に入る前に、当該節の節名の後に、使用テキスト中、『心成就法ダクポツアルの法類』所収の CD\_A にのみ、その直後に *thems can bcu dgu pa* という文言が付加されている事由について検討したい。<sup>501</sup> *thems can* という語句は、『ダクポツアルの目録』や『ダクポツアル第2巻の目録』に確認し得るように、おそらく *thems med* という語句と対句になっている。<sup>502</sup> この *thems* は、*them byang* (はしがき) 中の語句 *them* の異読として知られ、<sup>503</sup> 概ね「ラベル (label)」という語義を有するものと考えられる。<sup>504</sup> *thems can* は、従って、「ラベルを有するもの」を、一方 *thems med* は、「ラベルを有しないもの」を表す用語と想定される。後者 *thems med* は、上記目録では、第4節奥義なる成就法 (*yang gsang*) の直前に置かれており、上の想定からして、おそらくは「ラベルを有するもの」に比し、より複雑な、そうして口伝や修習を必要とする内容を有するものと解釈できよう。

『心成就法ダクポツアルの法類』所収の読み *thems can bcu dgu pa* は、外なる成就法が「ラベルを有するところの19番目の [比較的わかりやすい長寿成就法]」を意図するものと考えられる。なお、この19番目という数字は、『リンチェンテルズの目録と相伝』中にこの数字を指示すると思しき箇所が見出せる。当該箇所の記述によれば、長寿成就法『チャッキドンポ』は、チャンテルの心成就法 (*thugs sgrub*) として25個を数える要門 (*chos tshan*) の内、19番目の要門に当たることになろう。

## §1.1. 帰敬文の奉唱

### §1.1.1

第1節外なる成就法「貴重な壺」の冒頭にあたる当該箇所では、散文スタイルの帰敬文が、おそらくは3つの異なる言語で奉唱されるものと想定される。3言語による散文スタイルの帰敬文は、第0節はしがきの冒頭 §0.1.1 では、(1.) インド語で「主である長寿に関する

<sup>501</sup> CD\_A, 515,1: *tshe sgrub lcags kyi sdong po las: phyi sgrub rin chen bum pa bzhugs so: them can bcu dgu pa.*

<sup>502</sup> *Drag po rtsal gyi pod gnyis pa'i dkar chag*, [9],4: ('u) *pa la tshe sgrub lcags sdong ma'i them byang la* [...] (*yu pa la them med yang gsang hrī: gcig ma la.*

*Drag po rtsal gyi dkar chag*, 23,1: ('u) *pa la rnal 'byor tshe srog bsring ba'i phyir: phyi nang gsang ba'i tshe sgrub yod: ces them can lcags sdong ma'i them [them em.] them] byang [...]* (*yu pa la them med yang gsang hrī: gcig ma (ye) pa la tshe'i 'khor lo 'dri thabs.*

<sup>503</sup> *RT gyi dkar chag dang brgyud yig*, 202,1: *byang gter thugs sgrub chos tshan nyer lnga las/ bcu dgu pa tshe dpag med sprul sku lcags sdong ma lha gcig bum gcig gi dbang/ se bkra bzang pa'i sung rgyun [rgyun] rgyun lha → rgyun] mang gi dbang/ them [them em.] them] byang/ phyi sgrub/ nang sgrub/ de'i dbang byang/ gsang sgrub/ yang gsang hrī: gcig ma/ cho 'khor bri thabs bcas gter gzhung tshang ba/*

<sup>504</sup> See 『蔵漢』 s.v. *them pa* (p. 1186): 'sgo'i ya them ma them', Jäschke, s.v. *them pa* (p. 236): 'threshold', 'staircase [sic]', 'rank'.

る持明者」(\**indra-āyurdharaṇa*)に、(2.)チベット語で「主である無量寿仏」(*mgon po tshe dpag med*)に、そして、(3.)おそらくはダーキニーの符牒でも、ある種の尊格に対して奉唱されるものと §0.1.1 の詳解において想定した。

当該 §1.1.1 では、「ウッディヤーナ語で」(*o rgyan skad du*)というフレーズの前後に、§0.1.1 と同様、筆者には解読できない文字が記されている。手がかりとしては、チベット語で「長寿成就法に関する持明者にして主である無量寿仏に帰命する」と奉唱される帰敬文があげられよう。この帰敬文は、「[これ(『チャッキドンポ』)は]持明者の長寿成就法である。主である無量寿仏に帰命する」とも解し得るが、「長寿成就法に関する持明者にして主である無量寿仏」(§1.1.1: *rig 'dzin tshe'i sgrub thabs mgon po tshe dpag med*)という尊格に対する帰敬文だと理解した場合には、§0.1.1 において想定した、インド語で「主である長寿に関する持明者」と、チベット語で「主である無量寿仏」と、それぞれ奉唱される尊格の、合成されたかたちである可能性を指摘し得る。

当該 §1.1.1 の帰敬文を、§0.1.1 と同じく 3つの異なる言語で奉唱されるものと想定した場合は、「ウッディヤーナ語で」(*o rgyan skad du*)と「チベット語で」(*bod skad du*)に先んじて「ダーキニーの符牒で」(*mkha' 'gro'i brda skad*)が想定されるであろう。この想定に基づけば、ダーキニーの符牒とウッディヤーナ語を記した文字とが相似して看取される。

## §1.1.2

§1.1.2 には、『チャッキドンポ』を発掘し、またそれを実修する人物に関する予言が記述されている。その人物とは、タサン山 (*Ri-bo-bkra-bzang*) の東側 (*shar 'dabs*) に誕生する「頭頂に禿鷲の羽を有する者」(*rgod kyi ldem 'phru can*)、即ち、リクズイン・グウデムチェンである。彼は長じて、パドマサンバヴァとの縁に恵まれながらも、それを誇張せずに隠匿するヨーガ行者 (*las can sbas pa'i rnal 'byor pa*) となる、と予言されており、§0.2.3 において描出された「来たる最後の五百年」(*ma 'ongs lnga brgya tha ma*) の人々、即ち、他人を軽んじて誹謗するような人々とは、まったく真逆の人物である。そのような人物によって『チャッキドンポ』は実修されるべきだ (*nyams su longs*)、とするパドマサンバヴァの意向は、予言というよりは、寧ろ付託というべきものかもしれない。

パドマサンバヴァの悲心の懐にある (*thugs rje'i*) 有縁の弟子 (*gdul bya*) リクズイン・グウデムチェンがこの付託に応じて長寿成就法『チャッキドンポ』を実修することにより「究竟に至るよう」(*mthar phyin shog*) 師であるパドマサンバヴァは豊寿いでいる。従って、当該 §1.1.2 の終わりに付された文字は、<sup>505</sup> ダーキニーの符牒、或いはウッディヤーナ語を記した文字で、この言祝ぎを記したものと想定される。

## §1.2. 9つの滋養物より成る甘露の調合とその功德

### §1.2.1

帰敬文を奉唱した後、外なる成就法「貴重な壺」においてまず勤修者が取り掛かることは、9つの滋養物より成る甘露を調合すること (*gso byed rdzas dgu'i bdud rtsi sbyor*) で

<sup>505</sup> Cf. Appendix B, no. 4 (A 516,3; B 251,5; C 199,5).

ある。*amṛta* (< *a-√mr̥*) のチベット語訳として知られる *bdud rtsi* は、外なる成就法の本次第 (*dngos gzhi'i rim pa*) 「不死なる甘露」 (§1.4.2: '*chi med bdud rtsi*) において、甘露の鍊金葉 (§1.6.3: *bdud rtsi'i bcud len*), 即ち *rasāyana* として中心的な役割を担っている。<sup>506</sup>

当該 §1.2.1 では、その成分を、5つの精分 (*dwangs ma lnga*) と4つの甘露 (*bdud rtsi bzhi*) より成る、合計9つの滋養物 (*gso byed rdzas dgu*) として具体的に説明している。5つの精分は、(1.) 土類 (*sa*), (2.) 岩石／鉱物類 (*rdo*), (3.) 液体凝固類 (*rtsi*), <sup>507</sup> (4.) 樹木類 (*shing*), (5.) 花類 (*me tog*) からそれぞれ抽出されるもので、その具体例は、実際の調合方法と共に、後に §1.5.1 において提示される。当該 §1.2.1 が「9つの滋養物 [より成る] 甘露を調合しなさい」 (*gso byed rdzas dgu'i bdud rtsi sbyor*) と記しているのは、その導入にあたろう。

5つの精分に見られる上記の5分類は、ではチベットの伝統的な薬学からみて、どのような位置付けを有するのであろうか。下記にその代表例として『四部医典』 (*rGyud bzhi*) における薬材 (*rdzas*) の8分類を取り上げ、下記の表 (表14) により対照してみる。

表14: チベットの伝統的な薬学における薬材の分類方法と比較した5つの精分 (*dwangs ma lnga*)

長寿成就法『チャッキドンポ』		『四部医典』における8分類 <sup>508</sup>
5つの精分 (§1.2.1)	5つの精分の具体例 (§1.5.1)	
		[1.] <i>rin po che yi sman</i>
1. 土類 ( <i>sa</i> )	ダクシュン	[2.] <i>sa'i sman</i>
2. 岩石／鉱物類 ( <i>rdo</i> )	チョンシ	[3.] <i>rdo'i sman</i>
3. 樹木類 ( <i>shing</i> )	ブラム	[4.] <i>shing sman (me tog)</i>
4. 液体凝固類 ( <i>rtsi</i> )	ディマル	[5.] <i>rtsi sman</i>
5. 花類 ( <i>me tog</i> )	蜂蜜	[4.] <i>shing sman (me tog)</i>
-	-	[6.] <i>thang sman</i>
-	-	[7.] <i>sngo sman</i>
-	-	[8.] <i>srog chags sman</i>

『四部医典』における8分類は、解釈タントラ (*bshad rgyud*) の第20章「薬の効能」 (*sman gyi nus pa*) において説示される。『チャッキドンポ』が §1.2.1 において説示す

<sup>506</sup> この不死に関わる鍊金葉の調合方法は、『Schwieger目録』においても、外なる成就法の概要に置かれている。See SCHWIEGER 1995:151: 'Anleitungen zur Herstellung von Nektar (*bdud-rtsi*) zur Stärkung des Lebens'.

<sup>507</sup> For *rtsi*, see DE'U-DMAR BS'TAN-'DZIN-PHUN-TSHOGS (帝瑪爾・丹增彭措) 1986:45: '汁液精华类药'.

<sup>508</sup> *rGyud bzhi*, 202,1:  
*ngo bo rdzas re'i nus pa bstan pa ni//*  
*rin po che yi sman dang sa rdo'i sman//*  
*shin sman rtsi sman thang sman sngo sman dang//*  
*srog chags sman dang dbye ba brgyad du bshad//*

る5つの精分は、この『四部医典』における薬材の分類方法を、大筋において、反映しているものといえるだろう。<sup>509</sup> 無量寿仏を主尊とする『チャッキドンポ』と『四部医典』との結びつきは、決して不思議なことではない。当該 §1.2.1 が記述する9つの滋養物より成る甘露の成分は、「不死なる甘露」 (§1.4.2: 'chi med bdud rtsi) という多分に形而上学的な響きをもつ錬金薬の生成 (bcud len; rasāyana) に関わるものだ。しかし、その成分を調べれば、チベットの伝統的な薬学の知識から逸脱するものでないこと、また、それを口にすることで得られる功德 (§1.2.3: 'di zos yon tan) も、こうした知識に裏付けられたものであることが、伺われる。

## §1.2.2

当該 §1.2.2 には、五仏のダーラニー (rigs lnga rgyal ba'i sngags) の朗唱 (gdab [pa])<sup>510</sup> が説示されている。下記に、採用した読みとその翻字形、及び、これに基づいて想定した仏名と種字を一覧にして表示してみたい。

表15: 五仏とそのダーラニーの一覧 (§1.2.2)

	採用した読みとその翻字形	想定した仏名と種字	
1.	om badzra satwa hūm: (ཨོཾ་བདེ་སྒྲ་སྐྱེ་ལྷོ་མུམ་)	Vajrasattva (金剛薩埵)	hūm (ལྷོ་མུམ་)
2.	[om] ratna mu drā trā: (རྩ་མུ་དྲ་ཏྲ་)	Ratnamudrā (宝印)	trāḥ (ཏྲ་མ་)
3.	[om] a mi dhe wa hrī: (ཨོཾ་མི་དྷེ་མ་ཧྲི་)	*Amidhewa (阿弥陀仏≈無量光仏)	hrīḥ (ཧྲི་མ་)
4.	[om] karma badzra hūm (ཀཱ་མ་བདེ་སྐྱེ་ལྷོ་མུམ་)	Karmavajra (業金剛)	hūm (ལྷོ་མུམ་)
5.	[om] vairocana om (བེ་རོ་ཅ་ན་ཨོཾ་)	Vairocana (毘盧遮那)	om (ཨོཾ་)

上記の表 (表15) に一覧にした五仏の構成、即ち——(1.) 金剛部の金剛薩埵、(2.) 宝部の宝印、(3.) 蓮華部の阿弥陀仏≈無量光仏、(4.) 羯磨部の業金剛、そして、(5.) 如来部の毘盧遮那——について注意すべきは、五仏中に無量寿仏ではなく、阿弥陀≈無量光仏 (\*Amidhewa) が認められる点であろう。<sup>511</sup> 当該の仏名 (尊格名) a mi dhe wa については、

<sup>509</sup> See BURANG 1974:75–76: ‘Nach dem <<dyü-schi>> (einem wichtigen tibetischen Medizinwerk) gehören zu diesen <<typischen>> und daher besonders wirkungsvollen Heilstoffen u.a.: 1. Das drag-schun (Erdpech, Bitumen) [...] 2. Der tshong-schi (Kalkspat) [...] 3. Der Zuckersirup [...] 4. Der Honig [...] 5. Die frische Butter [...]’.

<sup>510</sup> gdab pa については、「[息を]吹きかける」という語義から、「[ダーラニーを]朗唱する」と意識した。See JÄSCHKE, s.vv. gdab pa (p. 265): ‘fut. of 'debs-pa’, 'debs pa (p. 279): ‘to cast, throw, strike, hit’, 『蔵漢』 s.vv. gdab pa (p. 1342): ‘'debs pa'i ma 'ongs pa’, 'debs pa (p. 1412): '(tha dad pa) btap pa/ gdab pa/ thob// (1) gsar du 'dzugs pa/ [...] (2) rgyag pa dang/ byed pa/ [...] (3) zhu 'bul byed pa’.

<sup>511</sup> チャンテルの類書、例えば、『キーラの火炎鬘』における五仏とその種子の構成としては、(1.) 金剛部の badzra kī l[a] (≈Vajrakīla) の hūm, (2.) 宝部の ratna kī l[a] (≈Ratnakīla) の tram, (3.) 蓮華部の padma kī l[a] (≈Padmakīla) の am, (4.) 羯磨部の karma kī l[a] (≈Karmakīla) の a[:], そして、(5.) 如来部の buddha kī l[a] (≈Buddhakīla) の om といった類例が参照される (ここに挙げた (1.) から (5.) までの順序は、比較参照の為、当該 §1.2.2 に準拠した)。See Phur pa me lce'i 'phreng ba, 213,3: padma kī lā ya am: badzra kī lā ya hūm: ratna kī lā ya tram: buddha kī lā ya om: karma kī lā ya a:

*a bhiṣinyca a bhi ṣinyca* という異読が、*mām/mām* と共に見在することも注意に値いする。下記表 (表16) に異読を一覧にして表示してみよう。

表16: *a mi dhe wa*~\*Amidhewa に関する異読の一覧

	ウチェン字表記とその翻字形	推定したサンスクリット表記
CD_A	<i>a bhiṣinyca mām</i> : (ཨ་བྱི་ཤི་རྩུ་མཱཾ་)	<i>abhiṣiñca mām</i>
CD_B	<i>a mi dhe wa hrī</i> : (ཨ་མི་དྲེ་པ་རྩི་)	<i>amidhewa hrī</i>
CD_C	<i>a bhi ṣinyca mām</i> : (ཨ་བྱི་ཤི་རྩུ་མཱཾ་)	<i>abhiṣiñca mām</i>

上記の表 (表16) において推定したサンスクリット表記 *abhiṣiñca mām* は、「[汝] 我を灌頂せよ」(*abhi-√sic*) と解し得る。この想定によれば、当該の読みは、五仏のダーラニーの朗唱が説示される当該 §1.2.2 の文脈においては、顕著なりセンションの相違として扱われるべきであろう。こうしたヴェアリエーションの背景に何らかの事情がある可能性は当然検討されなければならないが、現時点では、ツルプ版『リンチェンテルズ』(CD\_B) 所伝の読みを採用し、詳細な検討は今後の学究に期したい。

### §1.2.3

§1.2.3 では、9つの滋養物より成る甘露を食して (*zos*) 得られる功德 (*yon tan*) が述べられる。§1.2.1 にその成分が説示されたとおりに勤修者によって調合されたこの甘露は、§1.2.2 に明示された五仏のダーラニー (*rigs lnga rgyal ba'i sngags*) を朗唱すると、菩提心がこれを発し (*byang chub sems kyi spro*)、収斂したもの (*bsdu bya*) となる。9つの滋養物より成る甘露は、五仏のダーラニーを朗唱した結果、貴重な甘露に変化するものと解されよう。このような貴重な甘露を口にする功德は「筆舌に尽くしがたい」(*brjod mi lang*) としつつも、外なる成就法はこれを次の3つの功德に纏めて讃えるものである。

第一の功德としては、人間にとって十年ありえた寿命が百年に伸長されること (*'tshor 'gyur*) があげられている。人間の寿命が元来百年間であるという観念が、古くはヴェーダ文献に遡上することは、第2.8.3章 (ヴェーダ文献における寿命百歳の位置付け) において触れた。ここでいう伸長 (*'tshor*) は、おそらく、勤修者の寿命が10倍になるということを用意するものであろう。ここでは端的に延命ということが賛美されている。

第二の功德としては、6つの死 (*'chi ba drug po*) を欺くこと (*bslu bar 'gyur*) があげられている。貴重な甘露を口にすることによって欺くことができる6つの死は、§1.6.1 に具体的に説示されるが、先んじていえば——(1.) 疫病 (*rims*) による死、(2.) 思わぬ事故 (*rkyen [god]*) による死、(3.) 自然界を構成する四大種の極端な増大に起因する災害による死、(4.) 自然界を構成する四大種の極端な減少に起因する災害による死、(5.) 老い (*rgas*) による死、(6.) 身体を構成する四種の不均衡に起因する病による死——という6つの死がこれにあたる。§1.6.1 は、外なる成就法の本次第「不死なる甘露」(*'Chi med bdud rtsi*) の功德を述べる箇所にあたり、こうした6つの死から「解放されること」(*thar*) をあげるものであるが、当該 §1.2.3 においては、これを「欺くこと」(*bslu ba*) が、貴重な甘露を口にする功德として挙げられている。

死を欺くこと (Tib. *'chi ba bslu ba*; Skt. *mṛtyuvañcana*)<sup>512</sup> は、チル (*'chi blul'chi bslu*) と呼び慣らわされる欺死法、儀軌で知られ、<sup>513</sup> この儀軌に関わる仏典は、MENGELE 2010 によれば、テンギュル中に 10点みとめられる。<sup>514</sup> チルは、チベットの人々が生命力の縮退に対処し、身に降りかかった障碍を取り除く (*rkyen sel*) ために開催される儀軌であり、厄年 (*lo keg*)<sup>515</sup> 等、暦法上の吉兆も意識されて執り行われる。その機能を MENGELE 2010 は 8つに分けて考察しているが、その第6番目にあげられた「長寿、即ち、寿命の延長」(*'long life or prolonging of the life span'*, p. [103]) が、特に注目されよう。<sup>516</sup>

さて、第三の功德としては、老体 (*'byung ba rgas pa*) が若返ること (*gzhon nur 'gyur*) があげられている。老体の特徴と若返りの効果は、§1.6.2 に具体的な記述が看取される。先んじていえば、老体とは白髪、肌の皺が目立ち始める80歳に届く頃の潤いを失った身体のこと、体力は衰え、視覚はぼやけ、思考力も散漫になる。それが16歳そこそこの若者のようになるというのが、若返りの意味合いである。

以上、貴重な甘露を口にすることの3つの功德、即ち——(1.) 寿命の伸長、(2.) 6つの死を欺くこと、(3.) 老体が若返ること——を *'gyur* で結び讃えた後、その成就の証として、勤修者が獅子 (*seng ge*)、象 (*glang chen*)、孔雀 (*rma bya*)、金翅鳥 (*khyung*; Skt. *garuḍa*) の如く自在になるという説示がつづく。この4つの生きものとそれらが特長として有する自在さは、§1.6.2 所説の (1.) 獅子の如く強勢になること、(2.) 象の如く頑強になること、(3.) 孔雀の如く光輝になること、(4.) 馬の如く徒路するようになること、に関連するものと想定される。ただし、最後の4番目は、§1.2.3 が金翅鳥としているところを §1.6.2 は馬 (*rta*) としている点が相違する。

§1.2.3 が言及する4つの生きものに、馬を加えた5つの生きものの構図は、金剛頂経系タントラの五仏座として知られる。下記表 (表17) に『金剛頂瑜伽中略出念誦経』

<sup>512</sup> See NEGI, s.v. *'chi ba bslu ba* (p. 1342): *'mṛtyuvañcanaḥ'*.

<sup>513</sup> See 『蔵漢』 s.v. *'chi blu* (p. 864): *'chi ba zlog par byed pa'i thabs shig'*.

MENGELE 2010 は、チルに *'chi bslu* という綴りを当ててこの儀軌を考察した論考である。See MENGELE 2010:104: *'chilu ('chi bslu) or "deathdeceiving" rites, a unique type of ritual performed for a person facing untimely death'*.

TSUMAGARI (津曲) 2003 は、チルに類似した儀式として *'身代わり [glud]'* (TSUMAGARI (津曲) 2003:61) をあげ、この語句の「ル」とチルの「ル」との音の類似性を指摘している。*glud* は『蔵漢』 s.v. *glud* (p. 426) に *'srog gi glud'* という用例が見られる。『チャッキドンポ』では *srog bslu* という語句が「放生」の語義で使用されており (§1.4.2)、ここにも *glud* と *bslu* との間の相関関係がみとめられる。YAMAGUCHI (山口) 2004 では、*'運変えの身替わり (トチュールー)'* (YAMAGUCHI (山口) 2004:172) として、*'身替わりをつくって、これに本来自分に降りかかる災難を背負ってもらい、この身替わりを追い払う儀式'* と解説されている。

<sup>514</sup> See MENGELE 2010:122–123nn3–4. See also NEBESKY-WOJKOWITZ 1975 (first published 1956):511n12.

<sup>515</sup> See 『蔵漢』 s.v. *lo keg* (p. 2805): *'nag rtsis las bshad pa'i rang gi lo rtags shar skabs kyi lo'i bar chad cig'*.

<sup>516</sup> See MENGELE 2010:103: '(1) protection, (2) purification of negative deeds, (3) increase of merit, (4) elimination of obstacles, (5) fulfillment of wishes, (6) long life or prolonging of the life span, (7) health and (8) enhancement of the healing power of medicine'.

(T 866)<sup>517</sup>を参照した五仏、五仏座の構図と、『チャッキドンポ』の当該箇所を一覧にし、対照させてみたい。

表17: 五仏と五仏座の配置

	『略出念誦經』		長寿成就法『チャッキドンポ』			
	五仏	五仏座	五仏とその種字 (§1.2.2)		4つの生きもの (§1.2.3)	4つの生きもの (§1.6.2)
1.	毘盧遮那佛	師子	Vairocana	<i>om̐</i>	<i>seng ge</i>	<i>seng ge</i>
2.	阿彌陀佛	孔雀	*Amidhewa	<i>hrī</i>	<i>rma bya</i>	<i>rma bya</i>
3.	阿閼鞞佛	象	Vajrasattva	<i>hūm̐</i>	<i>glang chen</i>	<i>glang chen</i>
4.	寶生佛	馬	Ratnamudrā	<i>trāḥ</i>	-	<i>rta</i>
5.	不空成就佛	迦樓羅	Karmavajra	<i>hūm̐</i>	<i>khyung</i>	-

上の表(表17)のように対照させてみると、§1.2.3と§1.6.2とが言及する4つの生きものは、金剛頂経系タントラの五仏座の構図に似通ってみえる。但し、それは§1.2.3と§1.6.2とが相補って、馬と金翅鳥とを提出した場合に限定されるのであるから、このような眺め方を試みることは多分に主観的に映るであろう。五仏の構成は、灌頂の次第や曼荼羅の観想法と密接に結びついており、曼荼羅の種類によっても、また流派によっても諸尊の交代が見られる。従って、§1.2.2に説示される『チャッキドンポ』の五仏の構成について、一概にその系統を特定することはすこぶる難しいが、§1.2.3や§1.6.2に見られる4つの生きものを含め、その系統を金剛頂経系タントラの系統に比定することも、少なくともその可能性は、指摘しておくべきであるかもしれない。<sup>518</sup>

## §1.2.4

§1.2.4は、貴重な甘露の加持力について説示するものである。貴重な甘露は、これを口にした勤修者が、持明者(*rig 'dzin*)にして本母(*ma mo*; Skt. *mātrkā*)<sup>519</sup>であるダーキニー(*mkha' 'gro*)によって、直々に加持される(*dn̄gos su byin gyis brlabs par 'gyur*)という特惠を与えもする。端麗で(*bkrag mdangs*)、蓮華のような(*me tog padma 'dra*)彼女に加持された勤修者は、この9つの滋養物より成る甘露の功德(*yon tan*)によって、長寿を意のままにする持明者(*tshe la dbang ba'i rig 'dzin*)になる(*'grub*)とされる。

勤修者は甘露の功德によって、獅子や象や孔雀や金翅鳥のように自在となるが、彼／彼女が「長寿を意のままにする持明者」(*tshe la dbang ba'i rig 'dzin*)となるには、持明者

<sup>517</sup> 金剛智訳『金剛頂瑜伽中略出念誦經』T 866.227b23: 及隨已記印相貌如下所説皆想從毘盧遮那佛身中出現。又想四面毘盧遮那佛。以諸如來眞實所持之身。及以如上所説一切如來師子之座而坐。其上毘盧遮那。示久成等正覺。一切如來以普賢爲心。復用一切如來虛空所成大摩尼寶。以爲灌頂。復獲得一切如來觀自在法智究竟波羅蜜。又一切如來毘首羯磨。不空離障 画像礙教令。所作已畢所求圓滿。於其東方如上所説象座。想阿閼鞞佛而坐其上。於其南方如上所説馬座。想寶生佛而坐其上。於其西方如上所説孔雀座。想阿彌陀佛而坐其上。於其北方如上所説迦樓羅座。想不空成就佛而坐其上各於座上又想滿月形。

<sup>518</sup> ジターリ流、マチク流の両成就法が金剛頂経系タントラの系統にありつつも、「それを無量寿の成就法として再構成している点」、また相互に「その構成の仕方に違いがある」点は、FUJINAKA/NAKAMIKADO (藤中/中御門) 2018:455–457n27 に詳述されている。

<sup>519</sup> See NEGI, s.v. *ma mo* (p. 4221): ‘*mātā*’, ‘*mātrkā*’, ‘*jananī*’, ‘*cātakī*’.



にして本母であるダーキニー (*rig 'dzin ma mo mkha' 'gro*) による加持を要するものと考えられる。4つの生きものが、それぞれに自在である領域を持つように、長寿を意のままにする持明者は、長寿という領域において自在である (*dbang ba*) のだろう。

## §1.3. 相承

### §1.3.1

§1.3.1 において『チャッキドンポ』は、これを埋蔵したパドマサンバヴァによって、当該長寿成就法 (*tshe sgrub*) が秘法 (*man ngag*) であり、不可思議 (*bsam yas*) であり、ウッディヤーナの心滴 (*o rgyan thugs thig*) そのものだということが謳われている。ウッディヤーナの心滴は、おそらく、パドマサンバヴァの心滴 (§0.2.2: *padma 'byung gnas snying thig*) と同義と見做してよいであろう。

この長寿成就法を勤修する (*sgrub. autonomous*) には勤修者の意志を要するが、その結果として、長寿に関する持明者 (*tshe yi rig 'dzin*) となる (*'grub. heteronomous*) 道が必ずや開かれていることが、巧みに表現されている。

### §1.3.2

§1.3.2 には、§0.2.3 (埋蔵の趣意) との重複がみとめられるが、両者を比較すれば、先出の§0.2.3の方に記述が詳細である。これは、当該§1.3.2が煩瑣を避けて、肝要な部分以外を省略したものと見做し得よう (§1.3.2の訳出にあたっては、§0.2.3の所説をもって補足した)。

§1.3.2は、弟子グウキデムトゥチェンが成熟して (*smin*) 解脱するように (*grol bar shog*)、という師パドマサンバヴァの豊寿ぎをもって結ばれている。当該§1.3.2の終わりに付された文字は、<sup>520</sup> 従って、ダーキニーの符牒、或いはウッディヤーナ語を記した文字で、彼のこの豊寿ぎを記したものと想定される。

### §1.3.3

§1.3.3には、『チャッキドンポ』の本尊 (*yi dam lha*) からパドマサンバヴァへの相承が、*zhus ba* (*zhu ba*) を「嘆願」と「拝受」の語義で<sup>521</sup> 巧みに用い、明示されている。この本尊とは、帰敬文 (§1.1.1: *mgon po tshe dpag med la phyag 'tshal lo*) に称名されているところの、無量寿仏 (*Tshe-dpag-med; Amitāyus*) と見做してよいであろう。パドマサンバヴァが無量寿仏より長寿成就法『チャッキドンポ』を授与された様子は、第2.5章 (起源)

<sup>520</sup> Cf. Appendix B, no. 5 (A 517,5; B 252,3; C 200,3).

<sup>521</sup> See 『藏漢』 s.v. *zhu ba* (p. 2395): ‘[as a verb] 1. (*tha dad pa*) *zhus pa/ zhu ba/ zhus//* (1) *re 'dun rjod pa/ [...]* (2) *blug pa dang/ len pa/ byed pa sogs kyi zhe sa/ [...]* 2. (*tha mi dad pa*) (1) *mar sogs gong bu rang bzhin du khu ba' i nram par gyur pa/ [...]* (2) *tha mi dad par 'jug pa' i 'ju ba' i 'das pa/* [as a noun] (3) *snyan zhu/ [...]* *zhu ba 'bul ba/ [...]* *zhu ba gsol ba'*, Jäschke, s.v. *zhu ba* (p. 476): ‘I. vb., pf. *zhus* (esp. in later writings and vulgo [i.e. ‘in common life’, see p. xxii], in ancient literature gen. [i.e. ‘general, -ly’, see p. xxii] *gsol bar* for it) signifies 1. every kind of speaking to a person of higher rank, therefore to request, to prefer a suit or petition, to make a report, to put a question etc. [...] II. [...] 1. to melt [...] 2. to digest’.

において考察したように、サキャティチェン31世ガワンクンガーロドゥ (1729–1783. BDRC#P805) が著した『不死の成就の種子\_B』に詳しく叙述されている。『チャッキドンポ』の相承は、従って、無量寿仏をその根源とするものであり、パドマサンバヴァはこれを埋蔵して後世に伝えた、「仲介者」(‘a mediator’, WALTER 1980:319) としての役割がここに見出し得る。<sup>522</sup>『力倆類考究』における『チャッキドンポ』の相承系譜(付録4)でも、無量寿仏は、その先頭にあつて、チャンダーリー女神 (Caṇḍālī) とパドマサンバヴァがこれに続いている。

パドマサンバヴァが『チャッキドンポ』を会得するにあたっては、本尊である無量寿仏からの口訣 (*lung*) を主としつつも、ダーキニーたち (*dā ki rnams*) の存在も付随的に言及されていることが注意される。彼は無量寿仏からの口訣を嘆願し (*zhus*) つつ、ダーキニーたちに勧請して (*gsol ba btab*) この長寿成就法『チャッキドンポ』を授かった (*zhus*) ののである。*dā ki* は、『チャッキドンポ』において当該箇所のみ用例がみとめられる孤語 (*hapax legomenon*) で、多用される *mkha' 'gro ma/mkha' 'gro* を本論文が「ダーキニー」と訳出する一つの根拠となっている。当該箇所において「ダーキニーたち」(*dā ki rnams*) という複数形が看取されるのは、おそらく、ウツディヤーナの地のダーキニー (§0.2.2: *o rgyan yul gyi mkha' 'gro ma*) とされるパドマサンバヴァの秘密の明妃 (§0.2.2: *gsang ba' i yum*) と区別して、これを言表するためであろう。

## §1.4. 前行

### §1.4.1

§1.4.1 には、外なる成就法「貴重な壺」の前行 (*sngon du 'gro ba*) を勤修する時期と、禁忌が規定されている。それによれば、時期は満月に向かう吉祥な上弦の月の幸先が良い時 (*yar ngo bkra shis dus bzang tshe*) であり、断すべき禁忌 (*spang*) としては、次の3点、即ち——(1.) 匂いの強い青菜 (*sngo ngad*)<sup>523</sup>, (2.) 血腥いもの (*khrag*), そして, (3.) 腐臭のするもの (*rul sungs*)——という3点を禁忌としている。しかし、本次第「不死なる甘露」(*'chi med bdud rtsi*) を明かす §1.6.4 では、勤修者が本次第に熟達した時は、食べ物などの禁忌についても守る必要はないと説かれており、勤修者の習熟の程度によって断すべき禁忌が異なることが伺われる。

### §1.4.2

§1.4.2 には、前行において推奨される勤修内容が3点示されている。即ち——(1.) 白湯 (*chu bskol*) を飲んで、血管 (*rtsa sbubs*) を清浄にすること (*sbyang*), (2.) 食べ物を摂るなら、滋養のあるもの (*bcud ldan*) を少しだけ摂ること, (3.) 放生 (*srog bslu*) をはじめと

<sup>522</sup> WALTER 1980:319: ‘Padmasambhava delivers these teachings as a mediator for, or is to be evoked as a form of, Amitayus’.

<sup>523</sup> *sngo ngad* は『蔵漢』 s.v. *sngo ngad* (p. 712) に ‘*sngo tshal gyi dri ma'am nus pa*’ と説明されており、文字通り「匂いの強い青菜」と訳した。おそらくは、大蒜や葱のような香草を指すのであろう。TIBETAN MEDICINE, s.v. *sngo ngad* (p. 113) は、しかし ‘green vegetables’ とのみ記載し、その香りの程度については言及していない。

する他の生きものを利益する布施を行うこと (*sman gyi sbyin pa gtang*)——という 3点である。

第3番目の放生 (*srog bslu*) は、§1.2.3 において触れたように、チル (*'chi blul'chi bslu*) と呼び慣らわされる欺死法、儀軌と関わりをもっている。他の生きものの命を救うという利他行は、その生き物の死を欺す (*blulbslu*) ことに繋がり、延いてはこれが勤修者自らの命を救い、その死を欺す行為に繋がると解釈される。この図式は、Tsumagari (津曲) 2003 がチルとこれに類似した「身代わり[glud]」(p. 61) という儀式を関連づけて論じているように、自他の命の交換を広く示唆するものであろう。<sup>524</sup> おそらく、因果関係の論理が働いているものと想定される。この放生という慣行は、*tshe thar* という語句でも知られ、<sup>525</sup> 例えば、チルを論じた MENGINELE 2010 は、厄年 (*lo keg*) に推奨される障壁を取り除く行為 (*rkyen sel*) の一つとして、放生を挙げる中にこの語句を使用している。<sup>526</sup>

外なる成就法「貴重な壺」の前行は、以上 3点の推奨される勤修内容を、§1.4.1 において規定された時期に禁忌を守って行じた後、本次第 (*dngos gzhi'i rim pa*) である「不死なる甘露」(*'Chi med bdud rtsi*) を漸く勤修することになる。当該 §1.4.2 の終わりに付された文字は、<sup>527</sup> 従って、ダーキニーの符牒、或いはウッディヤーナ語を記した文字で、本次第に入るにあたっての豊寿ぎを記したものと想定される。

## §1.5. 本次第

### §1.5.1

外なる成就法「貴重な壺」の本次第である「不死なる甘露」(*'Chi med bdud rtsi*) の冒頭部分にあたる §1.5.1 は、9つの滋養物 (§1.2.1: *gso byed rdzas dgu*) に含まれる 5つの精分 (*dwangs ma lnga*) について、それらの調合方法、即ち、練り混ぜ方 (*sbyar*) を具体的に教示するものである。

*bdud rtsi* は、WANGCHUK 2018 が問題を提議しているように、そのサンスクリット対応語として知られる *amṛta* が、<sup>528</sup> *a-√mr̥* から派生して「不死／甘露」の語義をもつものと考えられるのに比し、*bdud* (魔)<sup>529</sup> と *rtsi* (汁、液、漆、薬)<sup>530</sup> という 2つの用語がいかよう

<sup>524</sup> *glud* には『藏漢』 s.v. *glud* (p. 426) に '*srog gi glud*' という用例も紹介されている。

<sup>525</sup> See 『藏漢』 s.v. *tshe thar* (p. 2281): *gzhan gyis gsod rgyu'i sems can ra lug sogs srog blu gtong srol zhig*.

<sup>526</sup> See MENGINELE 2010:103: 'the *tsetar* (*tshe thar*) or "liberation of the lives of animals".'

<sup>527</sup> Cf. Appendix B, no. 6 (A 518,2; B 252,6; C 200,6).

<sup>528</sup> See Mvy, nos. 3319: *amṛtaḥbdud rtsi can*, 5774: *amṛtam/bdud rtsi*, 5775: *sudhā/bdud rtsi*; BHSD, s.v. *amṛta* (p. 64): Mvy 3319.

<sup>529</sup> See Mvy, no. 3134: *māraḥbdud*, 『藏漢』 s.v. *bdud* (p. 1360): <*māra*> *sems can la gnod 'tshe dang dge ba la bar chad byed mkhan/ 'dod lha rigs drug gi nang gses shig*.

<sup>530</sup> See Mvy, no. 5773: *bhaiṣajyam/rtsi*; 『藏漢』 s.v. *rtsi* (p. 2217): (1) *kha dog dang/ ro bcud sogs la phan byed kyi rdzas shig*/ [...] (2) *sman*.

に関わって「不死／降魔甘露／神々の食べ物」という語義<sup>531</sup>を有するようになったのか、必ずしも定かではない。

*bdud* には、OTDO に拠れば、「屈服する」(“to succumb”), 「譲る」(‘yield’), 「死ぬ」(‘die from’)等の語義を有する、動詞としての使用例が認められる。関連する *dud/’dud/gdud/sdud/mdud/mthud/’thud* といった語句を考え合わせると、これらは基本的に「曲げる」(“to bend”) 或いは「お辞儀をする」(“to bow”) というニュアンスを帯びるものと想定される。名詞でも、例えば、四魔のように、人をして「必然的に、また常に」(‘inevitably and invariably’) 屈服するよう仕向けるものである。一方 *rtsi* には、*sbrang rtsi* (蜜) や *tshon rtsi* (顔料) といった用例から推測されるように、ある種の「べたべたするもの」「薬用」(“medicinal.”) という語義がみとめられる。

以上の語源学的考察によって WANGCHUK 2018 が仮定する *bdud rtsi* の語義は、凡そ、人を屈服させるものに対する「万能薬」(‘panacea or elixir’) だといえよう。<sup>532</sup> *bdud rtsi* という語が、チベット人にとって‘いわば寿命の支えになるものを意味した’ (p. 257) ことは、YOSHIMURA (芳村) 1961 にも指摘されている。<sup>533</sup> 錬金薬の生成 (*bcud len; rasāyana*) をめぐっては、当該 §1.5.1 では「不死なる甘露」(‘*Chi med bdud rtsi*’) の精分に関する考察が不可欠であり、また、その所依の仏典に関する考察 (e.g. HALKIAS 2013)<sup>534</sup> も重要な視座を提供するものである。しかし、これがいかに不死と関わるかということ、語源学的に考察する意義も大いにみとめられよう。

さて、当該 §1.5.1 に第一番目の精分 (*dwangs ma*) としてあげられる土類の精分 (*sa yi dwangs ma*) としては、ダクシュン (*brag zhun*≈岩精) をデで半杯 (*bre phyed*≈1,136.- ml.) 要する。ダクシュンの食味は甘苦く、その薬効としては、胃炎、肝炎、腎炎、腸炎、痛風、眼疾患、体力衰弱等に関する効能が知られる。<sup>535</sup> これを半杯計量するところの

<sup>531</sup> See 『藏漢』 s.v. *bdud rtsi* (p. 1362): (1) <amṛta> ‘*chi med de ’chi ba ’joms byed kyi rdzas/ [...]* (2) *smangyi skabs su bdud ces skyes bu’i tshes srog la gnod par byed pa’i nad dang/ rtsi zhes sems can spyi mthun gyi bsod nams las byung ba’i nad kyi zug rngu ’joms byed kyi gnyen po sman*; DAS, s.v. *bdud rtsi* (p. 667): ‘1. the food of the gods, nectar, the portion that confers immortality [...] 2. a laudatory epithet of medicines[...].’

<sup>532</sup> WANGCHUK 2018: ‘In sum, etymologically *bdud rtsi* seems to mean “a kind of sticky substance (*rtsi*) or a medicinal substance (*rtsi*) which serves as a kind of remedy, panacea or elixir against forces or factors to which one inevitably and invariably succumbs (*bdud*).”’.

<sup>533</sup> See also YOSHIMURA (芳村) 1961:257: ‘寿命の支えに関連することは、これを實際生活についていえば、健康かそれとも病氣かということになる。健康か否かについての知識はしたがって醫學を意味し、この術語によつてしだいに醫學書の標題 [NB: *bDud rtsi snying po yan lag brgyad pa gsang ba man ngag gi rgyud* (i.e. 『四部医典』)] を形成することにまでなつたのであろう’.

<sup>534</sup> HALKIAS 2013:145: ‘alchemical processes (*bcud-len*; Skt. *rasāyana*) for extracting vital essences into pills (*ril-bu*), as in the instructions based on the *Aparimitāyur-jñāna-sādhana*’.

<sup>535</sup> See TIBETAN MEDICINE, s.v. *brag zhun* (p. 301): ‘Hindi Name: Shlajeet/Pather’, ‘Scientific Name: Mineral pitch or exudate’, ‘Taste: Bitter to sweet to astringent’, ‘Potency: Cool’, ‘Uses: It treats gastritis, hepatitis, nephritis, intestinal colitis, brown phlegm, gout, op[h]thalmic disease, [e]dema, debility and fever of all origins’, 『藏漢』 s.v. *brag zhun* (pp. 1899–1900): ‘*rtsi sman gyi nang tshan gser dngul zangs lcags zha nye bcas kyi gter dngos yod pa’i brag nas zhun ’bab pa ltar ’dzags pa’i rdzas shig ste/ ro mngar kha/ zhu rjes snyoms/ nus pas pho tshad dang/ mchin tshad/ mkhal tshad/ rgyu tshad bcas sel/ bad kan smug po dang dreg nad/ mig nad bcas la phan/ lus stobs nyams pa gso/ ming gi rnam grangs la khams lnga’i bcud sman dang/*

*bre* は、容積を示すチベットの伝統的な度量衡の一単位で、漢字では「升」の一字があてられることが多い。<sup>536</sup> 升の物理量は、しかし、時代や地域によって差異がみとめられ、現在広く通用しているミリリットル (ml.) やグラム (g.) 等の計量単位に換算することは容易ではない。従って、本論文は *bre* をそのまま「デ」と訳し、これにミリリットル単位に換算した数値を補記することにする。

デの換算方法にも諸説あり、例えば JÄSCHKE, s.v. (p. 381) は、デをサンスクリット語の *droṇa* に対応させており、デ1杯が 4 pints の乾物および液体に相当する ('a measure for dry things as well fluids, about 4 pints') と解説している。1 pint を仮に 568 ml. とした場合、デ1杯は 2,272.- ml.  $\approx$  2,272.- g. に換算されることになる。デをいかに換算するかは、錬金業の生成法 (*bcud len; rasāyana*) の他、資料に記載された供物の分量等を正確に把握するために肝要な知識であるが、これまでの研究成果をみると、諸学者の間に見解の相違があるようである。例えば、STEARNS 2007 は、デ1杯を約 1.35 pound 或いは 650 g. に相当するものとしており ('A measure (*bre*) is equivalent to about 1.35 pounds or 650 grams' (p. 553n829), これは、JÄSCHKE による換算よりもかなり少ない見積もりの例である。<sup>537</sup> Tiblical がその度量衡の項目 (Measurements & Numbers) において提示しているように、デの換算方法は複数みとめられ、被計量物によってもその内容を異にする、と結論できようか。本論文においては、しかし、筆者の理解を助ける便宜として、JÄSCHKE による換算方法によって算出した値を試みに補記することにする。

第二番目の精分として挙げられる岩石/鉱物類の精分 (*rdo yi dwangs ma*) としては、チョンシ (*cong zhi* 寒水石) をデ1杯 (*bre gang*  $\approx$  2,272.- ml.) 要し、これを先にみた土類の精分であるダクシュンと練り混ぜる。チョンシの食味は甘く、その薬効としては、体力衰弱、下痢、慢性胃炎、骨のひびや骨折等に関する効能が知られる。<sup>538</sup> 『チャッキドンポ』

---

*khrag dar ya kan/ khrag 'dra/ mchin mkhris nad sel/ mchin pa'i rtsi/ brag gi khrag brag gi rakta/ brag gi bdud rtsi/ brag gi ru rdi ra/ brag dar ya kan/ rin chen bcud/ shi la dza tur/ sa steng nad 'joms/ srid pa'i khams dmar/ srid pa'i byang sems dmar po/ a ga ya/ a ba bcas so'.*

<sup>536</sup> See 『藏漢』 s.v. *bre* (p. 1906): (1) *bod du 'bru rigs phul drug shong ba'i 'jal byed snod spyad gru bzhi ma zhig [...]* (2) *snum 'jal byed kyi zo ba/ [...]* (3) *ka ba'i bre/ [...]* (4) *skar ma chu stod*; HOSHI 2016:68.

<sup>537</sup> Cf. YAMAGUCHI (山口) 1980:207: '1 khal=20 bre, 1 bre=4 phul, 1 phul=4 khyor, 1 srang=10 sho, 1 sho= 10 skar ma'.

<sup>538</sup> See TIBETAN MEDICINE, s.v. *cong zhi* (p. 118): 'Skt. Name: Somawath', 'English Name: Lime stone', 'Scientific Name: Calcitum', 'Taste: Sweet', 'Potency: Hot', 'Uses: It treats debility, diarrhoea, chronic gastritis, brown phlegm, sour watery vomitus; and heals cracks and fractured bones', 『藏漢』 s.v. *cong zhi* (p. 735): '*rdo sman gyi rigs shig ste/ ro mngar/ zhu rjes bcud la dro/ rus chag gso/ mkhal nad dang skrang pa sel/ ro tsa/ sha mdangs rgyas/ bad kan smug po 'joms/ ming gi rnam grangs la gcong nad gcig thub dang/ rdo bcud/ rdo'i da byid/ rdo'i dwangs ma/ rdo'i tshil bu/ tshil bu dar ya kan/ mtshan mo'i 'od can/ zla ba'i bu/ rus pa'i gsos/ srid pa'i khams/ srid pa'i byang sems/ lha bu'i khams bcas so'.*

筆者は、Barbara Gerke 博士 (University of Vienna) が学会発表中に ('Enhancing the Potency of Substances in Sowa Rigpa: Chongzhi (*cong zhi*), the 'Essence of Stones'', at the 15th Seminar of the IATS (Paris, July 12, 2019)) 提供して下さったチョンシの実物に触れ、その成分について学ぶ機会に恵まれた。ここに記して感謝申し上げたい。

においても、土類の精分と岩石／鉱物類の精分の薬効は「新しい歯を生じさせ (*se'u skye*)、骨を強固にするもの (*rus pa mkhregs par byed*)」とされている。

第三番目の精分として挙げられる樹木類の精分 (*shing gi dwangs ma*) としては、ブラム (*bu ram*≈糖蜜) をデ2杯 (*bre do*≈4,544.- ml.) 要する。ブラムの食味は甘く、その薬効としては、肺病、風邪等に関する効能が知られる。<sup>539</sup>

第四番目の精分として挙げられる液体凝固類の精分 (*rtsi yi dwangs ma*) としては、ディマル (*'bri mar*=ディの乳で作ったバター)<sup>540</sup> をデ4杯 (*bre bzhi*≈9,088.- ml.) 要し、これを先にみた樹木類の精分であるブラムと練り混ぜる。ディマルについては、TIBETAN MEDICINEに見出し語として記載がなく、『蔵漢』にもその食味や薬効に関する説明が見られない。

『チャッキドンポ』が記す樹木類の精分と液体凝固類の精分の薬効は、「筋肉と内臓 (*stobs che bcud rnams*) を壮健にする (*rgyas shing 'phel bar byed*)」というものだ。こうした薬効は、おそらく、第一と第二の精分は歯や骨といった身体の硬質部分に、第三と第四の精分は筋肉や内臓といった身体の軟質部分に、それぞれ別の効能をみとめるものであろう。

第五番目の精分として挙げられる花類の精分 (*me tog dwangs ma*) としては、ダンツイ (*sbrang rtsi*≈蜂蜜) を要するが、ダンツイに関しては特に分量の規定がなされていない。適量を先にあげた4つの精分と練り混ぜるということであろうか。花類は、『四部医典』における8分類では、樹木に由来する薬 (*shing sman*) に類別される。<sup>541</sup> ダンツイの食味は甘く、その薬効としては、口腔潰瘍、喉痛、痰 (*bad kan*)<sup>542</sup>、肥満等に関する効能が知られる。<sup>543</sup> 『チャッキドンポ』は、花類の精分の薬効を「色艶を育むもの」 (*bkrag gi gsos*) としている。この表現は、おそらく、蜂蜜のてらてらとした色艶と皮膚の色艶との間の聯想に由来するのではないかと想察する。第五の精分は、皮膚外臓といった身体の表面部分に、その効能をみとめるものであろう。

<sup>539</sup> See TIBETAN MEDICINE, s.v. *bu ram* (p. 286): 'Jaggery, Brown suger, Molasses', 'Taste: Sweet', 'Potency: Heavy and oily', 'Uses: It is used for treating *rLung* disorders and cold diseases', 『蔵漢』 s.v. *bu ram* (p. 1831): '*bu ram shing gi khu ba las bzos pa'i mngar cha/zhim rgyu bu ram zhim yang/za rgyun rtsam pa ring ba/ro mngar/ zhu rjes drod/nus pas rlung nad 'joms/ drod skyed/ lus stobs nyams pa gso/ rlung nad la phan pa'i sman gyi nus pa rtsar 'khrid par byed*'.

<sup>540</sup> See 『蔵漢』 s.v. '*bri mar* (p. 1997): '*'bri'o 'o ma las byung ba'i mar*'.

<sup>541</sup> *rGyud bzhi*, 205,10: *shing sman rtsa ba ldum bu sdong po dang// yal ga rkang dang shun pa thang chu dang// lo ma me tog 'bras bu bcu ru 'gyur//*

<sup>542</sup> See 『蔵漢』 s.v. *bad kan* (p. 1810): '*lus kyi cha shas su gtogs shing/ rkyen dang phrad na rtsa ba'i nad gsum gyi ya gyal du'ang 'gyur ba zhig*'.

<sup>543</sup> See TIBETAN MEDICINE, s.v. *sbrang rtsi* (p. 321): 'English Name: Honey', 'Taste: Sweet', 'Potency: Warm', 'Uses: Honey is the best medicine for oral ulceration and sore throat due to fungal and bacterial infection. It contains antibiotic property and is beneficial for inflammations and hoarseness, if gargled with water. In Tibetan medicine, pure honey is highly recommended for obese patients to reduce weight and it also cures *Bad-kan* diseases', 『蔵漢』 s.v. *sbrang rtsi* (pp. 2032–2033): '*bung bas bsags pa'i rtsi mngar mo/ spu gri'i so la sbrang rtsi byug pa/ ming gi rnam grangs la mngar ldan dang/ spra tshil lo/ ro mngar/ zhu rjes drod/ nus pas lus stobs nyams pa gso ba dang/ mig nad bar 'grib/ rtsa dkar gyi nad/ dbang po mi gsal ba/ sha 'phel gyi nad bcas la phan/ bad kan dang/ chu ser la phan pa'i sman gyi nus pa rtsar 'khrid par byed*'.

## §1.5.2

§1.5.2には、9つの滋養物より成る甘露 (§1.2.1: *gso byed rdzas dgu'i bdud rtsi*) を調合するにあたり必要とする材料が説明されている。この甘露は、5つの精分 (*dwangs ma lnga*) と4つの甘露 (*bdud rtsi bzhi*) より成るが、前者5つの精分の材料、調合方法(練り混ぜ方)、そしてその薬効は、既に §1.5.1 で説明されている。§1.5.2 は、残りの後者4つの甘露の材料と、それらをいつどのように抽出するかについて説示するものである。なお、当該箇所には、校訂テキストに提出したように、異読が目立つ。散文スタイルで記述されていることもやや唐突に映り、当該部分が後に付加された可能性もある。しかし、『リンチェンテルズ』所伝の読み (CD\_B, CD\_C) の間に相違はなく、『心成就法ダクポツアルの法類』所収の読み (CD\_A) を勘案しても、さして重要な内容の相違を提出するものではない。従って、以下に順に示す4つの甘露の材料、及びその抽出方法は、一つの確定したかたちと見做してよいであろう。第3節「秘密なる成就法」の末尾にも、§1.5.2 が明示する4つの甘露のかたちは、これをおさらいする格好で言及されており、4つの甘露はそこで、「4つの不死なる甘露」 (§3.8.1: *'chi med bdud rtsi bzhi*) と表現されている。

第一番目の甘露 (*bdud rtsi*) は、シュクパ (*shug pa*≈ビャクシン) を、その葉が生い茂る時期に (*'dab ma rgyas dus*) 収穫し、これを煎じ詰めて (*khan da*)<sup>544</sup> 抽出したもの (*'don pa*) をいう。柏槲属 (*Juniperus*) は、ヒノキ科の常緑針葉樹として知られ、チベットの多種多様な気候の中で、具体的にどの時期にその針葉が生い茂ると理解すればよいか一概に限定することは難しい。従って、§1.5.2 が言及する、4つの甘露に関わる植物の具体的な繁茂時期については、これらを特定しないでおく。シュクパの薬能は、シュクパツェルチェン (*shug pa tsher can*≈カシワ) に詳しく、それによれば、シュクパツェルチェンの食味は甘苦く、その薬効としては、腎臓の熱障害、関節に溜まった漿液、腫れ等に関する効能が知られる。<sup>545</sup>

第二番目の甘露は、バル (*ba lu*≈シャクナゲ) を、その花が咲く時期に (*me tog rgyas dus*) 収穫し、これを煎じ詰めて抽出したものをいう。バルの食味は酸っぱく、その薬効としては、消化不良、胃病等に関する効能が知られる。<sup>546</sup>

<sup>544</sup> *khan da* は、当該箇所においては「糖」よりも、より広く「煎じ詰めたもの」を意味するものであろうと推測した。See JÄSCHKE, s.v. *khan da* (p. 38): ‘more correctly *khaṇḍa*, also spelled *ka 'da*, [Skt.], treacle or molasses partially dried, candy’, 『蔵漢』 s.v. *khaṇḍa* (p. 220): ‘(legs) *dum bu ste/ sman gang zhiḡ chur bskol nas khu ba gdus pa'i dwangs ma gar por gyur pa la zer*'.

<sup>545</sup> See TIBETAN MEDICINE, s.v. *shug pa tsher can* (p. 489): ‘English name: Juniper’, ‘Botanical name: *Juniperus squamata*', ‘Taste: Bitter’, ‘Potency: Cool’, ‘Uses: It is used against hot disorders of the kidneys, accumulation of serous fluids in the joints and to relieve sudden swelling’, 『蔵漢』 s.v. *shug pa* (p. 2852): ‘*shing sman gyi rigs shug pa tsher ma yod pa can te/ ro kha/ zhu rjes bsil/ nus pas mkhal mar tsha ba zhugs pa dang/ chu ser dang lhog pa sogs la phan/ [...] ming gi rnam grangs la rgya shug pa dang/ spa ma/ ba da ra/ 'brog rtsi sngon po/ g.yu 'brug ze ba bcas so*', Jäschke, s.v. *shug tsher* (p. 560): ‘Med[ical works]. the young pointed sprouts of this tree’.

<sup>546</sup> See TIBETAN MEDICINE, s.v. *ba lu* (p. 279): ‘Skt. name: Talee patt [sic]', ‘Botanical name: *Rhododendron primulaeflorum* Bur. Et. Franch’, ‘Taste: Astringent’, ‘Potency: Warm’, ‘Uses: It restores bodily heat, promotes appetite, cures indigestion and diseases due to collision of hot and cold elements’, 『蔵漢』 s.v. *ba lu* (p. 1804): ‘*shing sman gyi rigs shig ste/ ro bska/ zhu rjes drod/ nus pas me drod gso/ dang ga 'gag pa 'byed/ ma zhu ba dang/ tsha grang 'thab pa'i pho nad bcas sel*'.

第三番目の甘露は、ケンパ (*mkhan pa* ≈ ヨモギ) を、その葉が生い茂る時期に (*'dab ma rgyas dus*) 収穫し、これを煎じ詰めて抽出したものをいう。ケンパの食味は甘苦く、その薬効としては、出血、手足の腫れ等に関する効能が知られる。<sup>547</sup>

第四番目の甘露は、ツェゴ (*mtshe sngo* ≈ マオウ) を、その根が伸長する時期に (*gzhi thim dus*) 収穫し、これを煎じ詰めて抽出したものをいう。ツェゴの薬能は、ツェドウム (*mtshe ldum* ≈ マオウ) に詳しく、それによれば、ツェドウムの食味は甘苦く、その薬効としては、若返り (*rejuvenating agent*)、及び、出血、肝臓や胆嚢や脾臓等に関する疾患等に関する効能が知られる。<sup>548</sup>

4つの甘露 (*bdud rtsi bzhi*) の効能は、このように、チベットの伝統的医学にも認められるものであり、その薬剤の伝統的解釈との間に重大な逕庭は見当たらない。密教行者の養生術 (*bcud len*; Skt. *rasāyana*)、中でも食事に関する大要は、長寿成就法が専唱するものでもなく、古来重大視されてきた。その内実は、しかし、複雑で、食の禁忌／不食 (*zas gcod pa*)<sup>549</sup> 或いはまた、食聚 (*bza' tshogs/zas tshogs*)<sup>550</sup> 等の用法について眼を向ければ、これらを究明する余地が一層みとめられよう。今後詳細に検討していきたい。甘露の内容として糞尿や人肉、精液、経血等の、一体に汚物と見做されるものを挙げることもあるが、<sup>551</sup> 『チャッキドンポ』において勤修者が口にする甘露の鍊金薬 (§1.6.3: *bdud rtsi'i bcud len*)

---

See also Mvy, no. 4207: *tālīśaḥ/bal ba*, Jäschke, s.v. *ba lu* (p. 363): ‘= *da-li*, various low alpine species of *Rhododendron*’.

<sup>547</sup> See TIBETAN MEDICINE, s.v. *mkhan pa* (p. 53): ‘English Name: Mugwort’, ‘Botanical Name: *A[r]tem[i]sia Vulgaris*’, ‘Uses: It stops bleeding and pacifies swelling of the limbs’, 『藏漢』 s.v. *mkhan pa* (p. 296): ‘*ldum bu'i sman gyi rigs shig ste/ ro mngar la kha/ zhu rjes bsil/ nus pas khrag gcod/ lums byas na yan lag gi skrang pa 'joms*'.

<sup>548</sup> See TIBETAN MEDICINE, s.v. *mtshe ldum* (p. 381): ‘Skt. Name: *Son latha*’, ‘Botanical Name: *Ephedra geradiana*’, ‘Taste: Bitter’, ‘Potency: Cool’, ‘Uses: It is a rejuvenating agent, stops bleeding from arteries, subside fever associated with liver, gall bladder, spleen and all kinds of initial and chronic fevers’, 『藏漢』 s.v. *mtshe ldum* (p. 2316): ‘*ldum bu'i sman gyi rigs shig ste/ ro mngar la kha/ zhu rjes bsil/ nus pas mcher pa'i tshad pa dang/ tsha ba gsar rmying sel/ khrag gcod/ lus stobs skyed*'.

<sup>549</sup> See 『藏漢』 s.v. *zas gcod pa* (p. 2455): ‘(1) *gzugs por gnod pa'i zas spong ba/ [...]* (2) *lto mi za ba/*’.

<sup>550</sup> *bza' tshogs* については、リクズイン・グウデムチェンに帰される3つの資料——(1.) *rDo rje phur pa'i zas tshogs*. In: *Byang gter rdo rje phur pa'i chos skor* (Leh: S. W. Tashigangpa, 1973. [BDRC#W23775]), pp. 175–176, (2.) *rDo rje phur pa'i zas tshogs dang tshwa tshwa*, In: *Byang gter phur pa'i skor* 1977, vol. 2, pp. 71–80, and (3.) *rDo rje phur pa'i zas tshogs dang tsha tsha*, In: *Byang gter phur pa'i skor* 1984, pp. 139–142——に関する分析が、BOORD 1993:213–214 に摘記されている。

<sup>551</sup> See SHIZUKA (静) 2004:64–65 (第一章「五甘露」・「五灯明」): ‘インド密教が、正統派バラモンの社会通念からは唾棄すべきものとされる糞尿など人体の排泄物を口にする行為を修法・行法に取り込む動きは『真実撰経』(Tattvasaṃgraha 『初会金剛頂経』に同じ)の釈タントラから始まる。こうした展開が極まって集約的な表現を見たのが、九世紀初頭に現れた仏教タントリズムの「成立宣言」としての『秘密集会タントラ』(Guhyaśamāja-tantra 以下『秘密集会』)である。その第五章には、「他人の財物に執着する者たち、常に愛欲に溺れる人たち、糞尿を食物とする人たち、これらの人たちは本当のところ、成仏するに相応しい者たちである(5)」と極端な「悪人正機」思想が宣揚されている’.



は、その材料にチベットの伝統的医学の知識に裏付けされた確かな薬効をみとめるものだといえる。

### §1.5.3

§1.5.3 には、9つの滋養物 (*gso byed rdzas dgu*) を調合する方法 (*sbyar ba'i thabs*) が具体的に教示されている。これに先立つ4つの甘露に関する説明は、§1.5.2 に言及された収穫の時期に関する補足で、これは §1.5.2 と異なり韻文スタイルで記述されている。その主旨は、4つの甘露 (e.g. シュクパを煎じ詰めて抽出したもの) は、滋養がみとめられる4つの時期に (*dus bzhir bcud ldan bdud rtsi bzhi*, e.g. シュクパの葉が生い茂る時期に) 収穫され、抽出されるのであるから、これら4つの滋養 (*bcud*) を凝縮し (*bsdus*)、煎じ詰めたもの (*khan da*) は、たとえ一握りであっても (*khyor gang*)<sup>552</sup> 互いの滋養を補い合う (*grogs*)、というものだ。

9つの滋養物を調合する具体的方法を、下記 (1.) から (4.) までの順序で考察してみたい。

(1.) まず、チョンシ (*cong zhi*≈寒水石) をデ1杯 (*bre gang*≈2,272.- ml.) 量る。チョンシは岩石/鉱物類の精分である。

(2.) デ6杯 (*bre drug*≈13,632.- ml.) の水を用意し、そこに、上記チョンシとデ1杯のツイクマ (*rtsig ma*≈壁土)<sup>553</sup> を加える (*dbyung*)<sup>554</sup>。

(3.) 上記2. がペーストリー状 (*snying po*) になったら、これをデ1杯と、その2倍の分量の (*nyis 'gyur*) 次の4つの材料——(a.) 4つの甘露 (*bdud rtsi bzhi*)、(b.) ダクシュン (*brag zhun*≈岩精)、(c.) デイマル (*bri mar*=デイの乳で作ったバター)、そして、(d.) ミルク (*'o ma*)——と混ぜ合わせる (*bsre*)。即ち、これら4つの材料 (a.-d.) は、それぞれデ2杯分 (≈4,544.- ml.) 要することになる。ダクシュンは土類の精分である。デイマルは、当該箇所においては *mar* とのみ記されているが、これは、§1.5.2 に液体凝固類の精分として言及される *bri mar* (デイの乳で作ったバター) と同定して、補って訳した。

(4.) 上の手順中に混ぜ合わせづらいもの (*ma 'dres*) があれば、それを纏める (*bsdus*) ために、生地的水分 (*chu*) を一旦切り (*chod pa*)、代わりに (e.) ダンツイ (*sbrang rtsi*≈蜂蜜) と、(f.) ブラム (*bu ram*≈糖蜜) と、(g.) デイマル (*'bri mar*. デイの乳で作ったバター) を加えて、よく混ぜ合わせる (*legs par bsre*)。ここで加えるもの (e.-g.) は、すべて粘着質で、先にみた *rtsi* に備わる「ある種のべたべたするもの」の特質をよく表している。分量に関する説明は見られない。適量、ということであろうか。ダンツイは、当該箇所においては *sbrang* とのみ記されているが、これは、§1.5.2 に花類の精分として言及される *sbrang rtsi* (蜂蜜) と同定して、補って訳した。ブラムは樹木類の精分である。デイマルも、当該箇所においては *mar* とのみ記されているが、これも、§1.5.2 に液体凝固類の精分として言及される *bri mar* (デイの乳で作ったバター) と同定して、補って訳した。

<sup>552</sup> See JÄSCHKE, s.v. *khyor* (p. 48): 'as much as fills the hollow of the hand, a handful'.

<sup>553</sup> See JÄSCHKE, s.vv. *rtsig ma* (p. 439): 'wall, masonry'; *rtsigs ma* (p. 439): 'sediment'.

<sup>554</sup> See 『蔵漢』 s.v. *'byin pa* (p. 1979): '(*tha dad pa*) *phyung ba/ dbyung ba/ phyung*'.

以上、9つの滋養物を調合する具体的方法を考察した結果、9つの滋養物には、確かに5つの精分と4つの甘露をその成分としていることが明らかになった。これらの具体的な材料名と分量を下記表(表18)に一覧にしてみたい。

表18: 5つの精分と4つの甘露が成分とする材料名と分量

5つの精分 (§§1.5.2-1.6.3)			4つの甘露 (§§1.5.2-1.6.3)		
1.	土類	ダクシュン	4,544.- ml.	シュクパ	4,544.- ml.
2.	岩石/鉱物類	チョンシ	2,272.- ml.	バル	
3.	液体凝固類	ディマル	4,544.- ml.	ケンパ	
4.	樹木類	ブラム	適量	ツェゴ	
5.	花類	ダンツイ	適量	-	-

## §1.5.4

§1.5.4には、五仏を父母合体尊として生起する次第が述べられる。勤修者はまず、§1.5.3に教示されたとおり調合した9つの滋養物を、5つのやんごとなない頭蓋骨 (*mtshan ldan thod pa*) に分け容れて (*blugs*)、大事に、或いは、安静なところに (*dal la*)<sup>555</sup> これらを安置する (*bkod*)。BEER 1999 が論じているように、頭蓋骨 (Skt. *kapāla*) は、死、無常、人生の儚さをよく想起させるものである。<sup>556</sup>

勤修者は次に5つの種子 (*yig 'bru*) を奉唱し (§1.5.5: *bzla*)、五仏 (*rigs lnga*) を彼らの明妃と共に、即ち、父母合体尊 (*yab yum*) として生起する (*bskyed*)。五仏の構成は、先に五仏のダーラニー (§1.2.2: *rigs lnga rgyal ba'i sngags*) を説示する中に5つの種子「*hūm*」「*trāḥ*」「*hrī*」「*hūm*」「*om*」と共に導入されている。勤修者は五仏を父母合体尊として「生起する (*bskyed*)」——これは、彼らを自然安住の位 (*rang bzhin gnas*) より「勧請する」(*spyān drangs*)<sup>557</sup> とも表現されている——にあたり、これら5つの種子「*hūm*」「*trāḥ*」「*hrī*」「*hūm*」「*om*」を奉唱する。この生起/勧請の後には、また別種の4つの種子「*ḥṣṣṣṣ-jah*」「*ḥṣṣṣṣ-hūm*」「*ḥṣṣṣṣ-vam*」「*ḥṣṣṣṣ-hoḥ*」が奉唱されるが、これは金剛頂経系タントラの四摂智菩薩の種子と見做してよいであろう。<sup>558</sup> 四摂智菩薩の働き、即

<sup>555</sup> See 『藏漢』 s.v. *dal ba* (p. 1254): '*lhod pa'am khom pa*', Jäschke, s.v. *dal ba* (p. 251): 'slowness, ease, quietness, leisure'.

<sup>556</sup> See BEER 1999:264: 'In its most benign symbolism, as the begging bowl or food vessel of an ascetic, the *kapala* [sic] serves as a constant reminder of death and impermanence, the ephemeral transitoriness of life that engenders renunciation'.

Cf. BEER 1999:[265], plate 119 (the skull-cup).

<sup>557</sup> See BIELMEIER 2004:405: 'With the meaning of 'to invite' the Written Tibetan verb '*dren*', in honorific contexts *spyān 'dren*, still works as a full verb in Old Tibetan, occurring in imperfective as well as in perfective contexts'.

<sup>558</sup> See *Sarvatathāgatattvaṣaṃgraha*, § 888:

'*om vajrāṅkuśakrodh' ākaṣaya sarvasamayān hūm jjaḥ*' ||  
 '*om vajrapāśakrodha praveśaya sarvasamayān hūm hūm*' ||  
 '*om vajrasphoṭamahākrodha bandha bandha sarvasamayān hūm vam*' ||  
 '*om vajr'āveśakrodh' āveśaya [...]* sarvasamayān hūm aḥ' ||

ち、四摂事／四摂法（鉤／索／鑊／鈴）は、一般に「鉤」によって衆生を仏道に召集し、「索」によって引持し、「鑊」によって堅留し、「鈴」によって歡喜せしめんとするものとして知られ、<sup>559</sup> 当該箇所においては、五仏とその明妃を対象に彼らを召集、引持、堅留し、歡喜させるものとして、これら4つの種子は機能するものと想定される。自然安位の位より勸請した五仏とその明妃が、5つのやんごとない頭蓋骨に恒に (*brtan par*)<sup>560</sup> いらっしやるよう、盛大な祈禱を捧げる前に奉唱されるものであろう。

「鉤／索／鑊／鈴」は、後に §2.5.1 の詳解において「鉄鉤」(*lcags kyu*) に関わり検討を試みるように、タントンギヤルポに帰される『チメーパルテル』において、<sup>561</sup> 寿命を召喚する女神 (*tshe 'gugs kyi lha mo*) が標幟（三昧耶形）とする5つの属具、即ち——(1.) 矢 (*mda'*), (2.) 鉄鉤 (*lcags kyu*), (3.) 輪繩 (*zhags pa*), (4.) 足枷 (*lcags sgrog*), (5.) 鈴 (*dril bu*)——という5つの属具の内、(1.) の矢を除く「鉄鉤／輪繩／足枷／鈴」との間に関連性を指摘し得る。「*jaḥ/hūm/vam/hoh*」という4つの種子に関わる、これら4つの属具、標幟に、寿命を召喚する働きが認められることは、明らかであろう。「*jaḥ/hūm/vam/hoh*」という4つの種子については、印相 (*phyag rgya; mudrā*) が知られるが、<sup>562</sup> 『チャッキドンポ』中に印相に関する説示は見在しない。或いは、別途、口伝というかたちで相伝されたものかもしれない。

## §1.5.5

§1.5.5 には、彼らの種子 (*hūm, trāḥ, hrī, hūm, om*) を奉唱することによって生起し、また、四摂智菩薩の真言（四種子 = §1.5.4: *jaḥ hūm vam hoh*）を奉唱することによって召請し、引持し、堅留し、歡喜したところの五仏の父母合体尊から、滋養の甘露が滴り落ちるさまを觀想する次第が説かれる。勤修者はまず、『チャッキドンポ』が「前述した」(*gong ltar*) とする *snying po* を唱え (*bzla*)、一心に思索を深めてゆく (*ting 'dzin bsgom*)。この *snying po* は、*yig 'bru lnga* (§1.5.4) とは異なる表現ではあるが、§1.2.2 に説かれた、五仏のダーラニー (*rigs lnga rgyal ba'i sngags*) が含む5つの種子、即ち、*hūm*,

<sup>559</sup> See 『仏教語大辞典』s.vv. 四摂事 (p. 524); 四摂法 (p. 524); 『密教大辞典』s.v. 四明 (p. 321): ‘小野方は真言によって四明といい、広沢方はその効能によって四摂という。鉤索鑊鈴の四菩薩を表わし、この印明によって智法身を鉤召し、引入し、縛住せしめ、理法身と不二一体となって歡喜させる。[...] その真言は弱吽じゃくうん鑊斛ばんこく (*jaḥ*. 鉤召, *hūm*. 索引, *baḥ*. 鑊縛, *hoh*. 歡喜)’.

Cf. HORIUCHI (堀内) 1983:148: *jaḥ hūm vam hoh*.

四摂智菩薩の真言については、菊谷竜太准教授 (京都大学白眉センター) より、参考文献をご恵送頂く等、ご親身なご教示に与った。ここに記して、感謝申し上げたい。

<sup>560</sup> *brtan par* (恒に) には、これに *sa ces* を付して、*sa ces brtan par* とする異読 (CD\_A) が見在する。異読によれば、「土のように恒に」、即ち「四大の土のように不変で、堅固に」五仏とその明妃がいらっしやるよう願うものとなろう。

<sup>561</sup> ‘*Chi med dpal ster*, CP\_A 460,7.

<sup>562</sup> See 『密教大辞典』s.v. 四明 (p. 321): ‘印には種々あるが普通は、両手忿怒拳にして二小指を鉤し、鉤は二頭指を屈して招き、索は二頭指を環の如くし、鑊は腕を開いてこれを鉤し、鈴は腕を合わせて振うようにする’.

四摂智菩薩の4つの種子に関わる印相は、FUSE (布施) 2001 に不空譯『金剛頂勝初瑜伽經中略出大樂金剛薩埵念誦儀』(T 1120A) 等の所説が訳出されている (pp. 281–283)。

*trāh, hrī, hūm, om* だに見做してよいであろう。種子 (*yig 'bru/snying po*) に始まる修定 (*ting 'dzin; samādhi*) は、パドマサンバヴァに帰される『智慧の精髓なる階梯』(*Lam rim ye shes snying po*) にも「小さな種子が全てを生み出す源となる」<sup>563</sup> と述べられているとおりである。

このように、勤修者が五仏の種子を一心に奉唱すると、五仏が父母合体尊として交接する箇所 (*sbyor mtshams*) から滋養の甘露 (*bcud kyi bdud rtsi*) が、5つのやんごとない頭蓋骨 (*thod pa*) に滴り落ちて、それらを満たす、そのような様子を勤修者はありありと観想する (*bsam*) ものである。5つのやんごとない頭蓋骨は、既に §1.5.4 において9つの滋養物を分け容れ、大事に安置したものであるから、滋養の甘露は、五仏が父母合体尊として交接する箇所からその上に滴り落ちてそれらを満杯にする、と観想することになる。

## §1.6. 本次第の成就の証

### §1.6.1

§1.6 には、§1.5 に説示された本次第「不死なる甘露」(*'Chi med bdud rtsi*) を成就した証 (*grub rtags*) が記されている。§1.6 以降の文体は、§1.5 までは7音節から成る頌文で記述されていたものが、当該 §1.6 以降はこれが9音節に変更されている点が顕著である。この音節数の変更は、或いは、§1.5 までに説示された説示内容 (予言/9つの滋養物より成る甘露の調合とその功德/相承/前行/本次第) と、§1.6 からの説示内容 (本次第の成就の証/テルマの守護) が、第1節「外なる成就法」に編入された時期を異にする印とも考えられよう。その場合は、他の節と比較検討しても、7音節から成る頌文で構成された §1.5 までの前半部の編入時期が比較的早いものと考えられる。

本次第「不死なる甘露」(*'Chi med bdud rtsi*) の成就 (*dnagos grub*) は、本次第を7日間 (*zhag bdun*) 勤修 (*bsgrubs*) することにより、得られる (*blang*) ものとされる。<sup>564</sup> 本次第「不死なる甘露」を行じる (*spyad*) 時分、更 (*thun*) は、<sup>565</sup> いつも決まって (*rtag tu*) 「曉闇 (*tho rangs*)<sup>566</sup> の食事 (*lto*) を摂る前」だと規定されている。*tho rangs* は、*tho rengs* と同義

<sup>563</sup> *Lam rim ye shes snying po*, 18,5:

*sngags dang phyag rgyas bde chen 'dod rgur spel:*  
*dnagos gzhi 'chi dang bar do skye ba'i tshul:*  
*sbyong byed zab dang rgya che'i ting 'dzin ni:*  
*stong chen de bzhin nyid dbyings mkha' ltar dag:*  
*bden gnyis dbyer med dbyings su mnyam par bzhag:*  
*snying rje sgyu ma kun snang rig pa'i sprin:*  
*gsal la 'dzin med mkha' khyab kun tu spro:*  
*phyag rgya gcig pa phra mo yig 'bru'i tshul:*  
*thams cad skyed byed rgyu yi sa bon ni:*  
*mi 'gyur ye shes snying po mkha' la shar:*  
*rtse gcig sems bzung gsal snang tshad du 'don:*

<sup>564</sup> Cf. KUNSANG 1990:169: 'Great accomplishment practice (*sgrub chen*) A sadhana practice undertaken by a group of people that goes on uninterruptedly for seven days'.

<sup>565</sup> See 『蔵漢』 s.v. *thun* (p. 1170): '(1) *dus kyi tshad dang/ sman gyi tshad/ [...]* (2) *sngags brgyab pa'i yungs kar sogs*'.

とされ、<sup>567</sup> 一日を12分した十二时辰では、概ね「寅の刻」(午前四時頃)に相当する。<sup>568</sup> 曉闇であるから、前日食したものが未だ消化しきれていないときは (*ma zhu bar la*), 新たな別の食べ物 (*kha zas*) 等は控える (*spang*) よう注意されている。以上の本次第の規定は、§1.4.1 に既に規定された、外なる成就法「貴重な壺」の前行を勤修する時期と、禁忌、或いはまた、§1.4.2 に規定された、前行において推奨される勤修内容に付加されるべきものである。満月に向かう吉祥な上弦の月の幸先が良い時期に、断ずべき禁忌 (*spang*) や、推奨される勤修内容を遵守した上で勤修される。規定を遵守した上で勤修すれば、勤修者の寿命 (*tshe*) は太陽と月に齊しく壮大なスケールになる、即ち、それ程の長大な延命が叶うものとされる。このように、無尽蔵の寿命を太陽と月のそれに擬える例は、当該箇所その他、後に §1.6.3 と §3.6.2 にも見られる。

死を先延ばしにする延命は、死を欺す (*blu/bslu*) という行為であり、これが、放生 (*srog bslu*), 或いはまたチル (*'chi blu/ 'chi bslu*) と呼び慣らわされる欺死法、儀軌と関わりをもつものと考えられることは、§1.4.2 の詳解において触れた。当該外なる成就法においては、本次第の名称に「不死なる甘露」(*'Chi med bdud rtsi*) と謳われてはいても、不死ではなく欺死が、その願意としてみとめられる点が注目されよう。或いは、外なる成就法における「不死」(*'chi med*) とは、「欺死」(*'chi ba bslu ba*) 即ち「チル」(*'chi blu/ 'chi bslu*) を意図するものだと解せようか。外なる成就法が確実に欺くところの (*bslu bar byed pa*) 死は6つを数え、これは「6つの死」(*'chi ba drug po*) として次のように説示されている。

(1.) 疫病 (*rims*)<sup>569</sup> による死。例えば、タントンギャルポの伝記『すべてを明らかにする宝鏡』には、疫病が流行し、彼の三人の兄弟姉妹を含む、多くの人々が亡くなったことが記録されている。<sup>570</sup>

<sup>566</sup> See 『蔵漢』 s.v. *tho rangs* (p. 1189): '*dus tshod bcu gnyis kyi ya gyal zhiḡ ste/ nam gyi cha smad dam/ nyin mo'i thog ma ste stag gi dus*'.

<sup>567</sup> See 『蔵漢』 s.v. *tho rengs* (p. 1189): '*tho rangs dang 'dra*'.

<sup>568</sup> See 『蔵漢』 s.v. *dus tshod bcu gnyis* (p. 1277): '*nyin zhag phrugs gcig dus tshod bcu gnyis su phye ste nam langs/ nyi shar/ nyi dros/ nyi phyed/ phyed yol/ nyi myur/ nyi nub/ sa sros/ srod 'khor/ nam phyed/ phyed yol/ tho rangs te bcu gnyis so/ nyin mtshan mnyam pa'i skabs su nam langs yos/ nyi shar 'brug ces sogs sbyor/ dus tshod re rer yang chu tshod lnga re yod*', Mvy, no. 8244: *pañcamapraharah/thun lnga pa'am tho rangs*.

*tho rengs* については、YAMAGUCHI (山口) 1987 に「トレン(寅の刻、四時)」(p. 169) という補記が看取される。当該箇所は、大撰政サンギェー・ギャンツォ (De-srid Sangs-rgyas-rgya-mtsho. 1653-1705. BDRC#P421) が「ダライラマ五世の自伝に書き加えた」「ハレー彗星が夜明けのトレンに北東に昇った」という事績の和訳部分に当たる。

<sup>569</sup> See 『蔵漢』 s.v. *rims* (p. 2704): '*jug sgo drug nas rim bzhin du lus la zhugs pa'am gcig nas gcig tu rim gyis 'go ba la rims zhes zer te/ de la nang gses su dbye na 'brum bu dang/ gag lhog rgyu gzer/ cham pa bcas rigs lnga mchis*'.

<sup>570</sup> See *Kun gsal nor bu'i me long*, K\_A 13a2; K\_B 26,6; K\_C 25,9: *de nas 'khrungs yul du nad yams chen po byung ba la/ thabs sna tshogs byas kyang ma phan par mi mang po shi/ khyad par grub thob chen po rang gi mched zla 'phan po dang lnga dar/ lcam mo dpal 'dzin rdo rje ma rnams kyang 'das pa la/ rtsis mkhan gyis lung bstan la ro rnams chu la skyur/ dge rtsa byed mi 'dod zer gtor ma brgya rtsa tsam yang gtong mi nus/ shul mi rnams 'jigs skrag chen po 'dug pa la/ (as translated into English in STEARNS 2007:109).*

疫病を鎮める祈願文の中には、タントンギャルポに帰されるものも少なくない。E.g. 『サキヤが病から回

(2.) 事故 (*rkyen*)<sup>571</sup> による死。*rkyen* は、順縁 (*mithun rkyen*), 病縁 (*nad rkyen*), 死因 (*'chi rkyen*) 等の用語が示すとおり、ニュートラルな縁 (*pratyaya*) として知られるのであるから、ここでは一つ踏み込んで「不慮の事故」(*rkyen god*)<sup>572</sup> と補って解釈することも一考であろう。

(3.) 自然界を構成する四大種の極端な増大 (*'byung ba'i dar*) に起因する災害による死。*'byung ba* は様々に解釈、訳し得るが、当該箇所においては、後の (6.) 「[身体を] 構成する四種 [の不均衡に起因する] 病 [による死] (*'du ba rnam bzhi'i nad*)」に見られる *rnam bzhi* を「四大種」(*rkyen god*) の意味と解釈し、これによって補った。(6.) が勤修者自身の身体を構成する自然 (地/水/火/風) の悪影響をいうのに比し、当該箇所は、次の (4.) と共に、勤修者の周囲の自然環境の悪影響、即ち大雨 (「水」の増大) 等、四大種の極端な増大に起因する災害による死をあげている。

(4.) 自然界を構成する四大種の極端な減少 (*rgud*) に起因する災害による死。(4.) は (3.) と対をなすもので、干ばつ (「水」の減少) をはじめとする四大種の極端な減少が齎す災害による死をいう。自然界を構成する四大種は、多過ぎても少な過ぎても災害を起こし得るのであるから、バランスを崩すことなく、それを適度に保つことが重要となろう。そうした意味では、大雨は水要素の増大のみに起因するものではなく、地/水/火/風全体のバランスが崩れた結果、といえる。当該長寿成就法の勤修者は、しかし、これらのバランスを保つ為に何かをなし得るとは、説かれていない。

(5.) 老い (*rgas*) による死。上記 (1.) から (4.) までの死から解放された (*thar*) としても、死なないでいる以上、即ち、生きている以上、老化からは解放され得ない。ここでいう「老いによる死からの解放」は、従って、老体が若返る (§1.2.3: *'byung ba rgas pa gzhon nur 'gyur*) という効果を謳ったものであろう。この若返りの効果は、9つの滋養物より成る甘露を食して得られる功德として、6つの死を欺くこと (*'chi ba drug po bslu bar 'gyur*) と共に §1.2.3 に挙げられている。

(6.) 身体を構成する四大種の不均衡に起因する病による死。勤修者の身体を構成する (*'du ba*) 四種 (*rnam bzhi*) とは、四大種 (*'byung ba bzhi*) を意図するものと解釈してよいであろう。これら四種の、即ち、身体の地/水/火/風のバランスが崩れると病 (*nad*) を引き起こすということはよく知られている。<sup>573</sup>

以上、これら6つの死から解放される (*thar*) 為には、本次第「不死なる甘露」を規定どおり勤修することが求められる。死の原因は様々に数えられ、例えば「九横死」は、『佛説九横経』(T 150b)<sup>574</sup> や『佛説薬師如来本願経』(T 449)<sup>575</sup> 等に説かれている。

復するための祈願』(*Sa skya nad grol ma*).

<sup>571</sup> See 『藏漢』 s.v. *rkyen* (p. 100): ‘*bras bu smin par byed pa'i grogs su gyur pa'am 'bras bu'i khyad par skyed byed/ [...] 'gal rkyen/ [...] mithun rkyen/ [...] nad rkyen/ [...] 'chi rkyen/ [...] shugs rkyen/ [...] rmas rkyen gyis shi ba*'.

<sup>572</sup> See 『藏漢』 s.v. *rkyen god* (p. 100): ‘*bar chad dang god ka*'.

<sup>573</sup> See 『藏漢』 s.v. *'byung ba bzhi* (p. 1982): ‘*sa/ chu/ me/ rlung ste bzhi/ [...] lus la 'byung bzhi'i gnod pa med*'.

<sup>574</sup> 安世高譯『佛説九横経』(T 150b.2.883a15): 有九輩九因縁。命未盡便横死。一者爲不應飯爲飯。二者爲不量飯。三者爲不習飯飯。四者爲不出生。五者爲止熟。六者爲不持戒。七者爲近惡知識。八者爲入里不時不如法

このように、死の原因は広く仏典に求められるが、『チャッキドンポ』におけるそれは、「6つの死」(*'chi ba drug po*)として6つを数える。

## §1.6.2

§1.6.2には、本次第「不死なる甘露」の成就の証 (*grub rtags*) が、§1.2.3 所説の老体の若返り (§1.2.3: *'byung ba rgas pa gzhon nur 'gyur*) に傾注して、再び説かれる。そこには、80歳に届く (*brgyad cu lon tshe*) 人間の老体の特徴が、5つに分けて、即ち——(1.) 白髪 (*skra dkar*) や皺 (*gnyer ma*) が増えて目立ち、(2.) 身体は潤いを失い (*sha skam*)、(3.) 体力は衰え (*lus stobs chung*)、(4.) 視覚はぼやけ (*mig mi gsal*)、(5.) 思考力は散漫になる (*sems 'thib*)——といった人間の老体の特徴が示されている。しかし、こうした老いに伴う諸々の厄介事 (*rgas pa'i skyon rnams*) も、本次第「不死なる甘露」を成就すれば生じなくなるもの (*'byung mi 'gyur*) とされる。そればかりか、16歳そこそこの若者のようになる (*gzhon nu bcu drug lon pa lta bur 'gyur*) とまでされる。髪、肌、身体の潤い、体力、視覚、そして思考力において、16歳そこそこの若者のように若返るという意味であろう。ここに示された80歳 (*brgyad cu*) と16歳 (*bcu drug*) という具体的年齢は、『チャッキドンポ』における老若の指数と見做し得、実に興味深い。

成就の証 (*grub rtags*) として挙げられる次の4点、即ち——(1.) 獅子 (*seng ge*) の如く強勢に (*stobs*) なること、(2.) 象 (*glang chen*) の如く頑強に (*gyad*) なること、(3.) 孔雀 (*rma bya*) の如く光輝に (*mdangs*) なること、そして、(4.) 馬 (*rta*) の如く徒路する (*'gros*) ようになること——については、§1.2.3 の詳解において、金剛頂経系タントラの五仏座と関連付けて論じた。しかし、ここ §1.6.2 の文脈においては、上にあげた4点は、80歳の老人の視点から眺める16歳そこそこの若者像とも考えられよう。年老いた身体にしてみれば、若者の身体は、五仏座のように万能に称えられるものであろうからである。

## §1.6.3

§1.6.3には、本次第「不死なる甘露」の成就の証 (*grub rtags*) が、具体的な若返りの内容をもって説かれる。本次第を常に行ずるなら (*rta tu spyad na*)、勤修者の身体は壮健で (*sha rgyas*)、彼／彼女に皺はない (*gnyer ma med*)。皺がない、というのは、皺がない状態に変化するということであろうか。歯も生え、五根も明晰になり (*dbang po gsal*)、結果的に心身共に安泰である (*lus sems bde*)。以上は、概ね §1.6.2 に示された人間の老体の特徴に対抗する内容だといえよう。

勤修者の寿命は (*tshe*) 太陽と月に斉しく壮大なスケールになり、俊敏さは (*mgyogs pa*) 風 (*rlung*) のように、即ち、極めて敏捷になるものとされる。無尽蔵の寿命を太陽と月の

行。九者爲可避不避。如是爲九因縁。

<sup>575</sup> 達摩笈多譯『佛說藥師如來本願經』(T 449.14.404a256f): 汝豈不聞如來所說九橫死耶。是故教以呪藥方便。或有衆生。得病非重。然無醫藥及看病人。或復醫人療治失所非時而死。是爲初橫。第二橫者。王法所殺。第三橫者。遊獵放逸姪醉無度。爲諸非人害其魂魄。第四橫者。爲火所燒。第五橫者。爲水所溺。第六橫者。入獅子虎豹諸惡獸中。第七橫者。飢渴所困不得飲食因此致死。第八橫者。厭禱毒藥起屍鬼等之所損害。第九橫者。投巖取死。是名如來略說大橫有此九種。

Cf. 玄奘譯『藥師琉璃光如來本願功德經』(T 450.14.408a1f).

それに擬える例は、当該箇所その他、後に §1.6.1 と §3.6.2 にも見られるが、ここでも無尽蔵の寿命の喩例として用いられている(太陽と月が実際に無死、或いは不死であるかという点は問われない)。勤修者はまた、持明者 (*rig 'dzin*) にして本母 (§1.2.4: *ma mo; mātrkā*) である、即ち、明妃 (*rig ma*) たるダーキニー (*mkha' 'gros*) の子どものように守護されるものである (*bskyang bar 'gyur*)。

以上が、甘露 (*bdud rtsi*) の鍊金薬 (*bcud len; rasāyana*) に関する長寿成就法 (*tshe yi sgrub thabs*) である。この *bdud rtsi'i bcud len* という語句には、「甘露の鍊金薬」の他に、「滋養の甘露 (§1.5.5: *bcud kyi bdud rtsi*) を抽出すること (*len*)」という訳語も検討されるべきであろう。概観すれば、両者は同義語となろうが、*bcud len (rasāyana)* は、鍊金薬とも、鍊金薬を抽出する技法とも見做し得、今後注意していきたい。

## §1.6.4

§1.6.4 は、本次第「不死なる甘露」に関する付論である。§1.6.3 に説かれる成就の証 (*grub rtags*) が見られなかった場合の保険や、その他の注意事項が記されている。万が一、上に記したとおりに甘露の鍊金薬 (§1.6.3: *bdud rtsi'i bcud len*) を調合して (*sbyar te*) 成就 (*sgrub pa*) が生じなかったとしても、時機を得て行ずるなら (*skabs su spyad na*) その功德は量り知れない (*bsam mi khyab*) とされる。成就の不可を勤修者の機根等によって説くのではなしに、一度で諦めず、何度も常に行ずることをすすめるものだ。

その他の注意事項としては、汗をかく行為 (*rngul thon las*) のような粗野な (*drag shul*) 振る舞い (*spyod lam*) は、反対に、すすめられない (*mi bya*)。 *spyod lam* は、 *spyod lam bzhi* (四威儀: 行/住/坐/臥) として知られるように、<sup>576</sup> 生活全般に亘る行いに関して、粗野になることなく、心身ともに穏やかであることも、本次第「不死なる甘露」の成就に関わるのだと注意される。なお、当該 §1.6.4 においては、§1.4.1 や §1.4.2 に規定された、食べ物 (*kha zas*) に関して断ずべき禁忌 (*spang*) や、推奨される勤修内容も、勤修者が本次第に熟達した時は (*'byongs dus*) 遵守する必要はないもの (*bsrung mi dgos*) とされる。

## §1.7. テルマの守護

### §1.7.1

§1.7.1 は、最後の五百年に備えて長寿成就法『チャッキドンポ』が埋蔵されなければならない理由として、いかにこの期間が末法の世を呈するかを、6つの特徴をもって説示するものである。最後の五百年 (*lnga brgya tha ma*) が来ると (*shar bas*)、(1.) 寿命は短く (*tshe tshad thung*)、(2.) 病は多く (*nad mang*)、(3.) 富は少ないが (*longs spyod chung zhing*)、(4.) 災難は多く (*bar chad mang*)、(5.) 勝義も成り立たず (*dam pa'i don yang mi 'grub*)、(6.) 望みも絶たれる (*gid re chad*)——このような6つの特徴を有する末法の世の呈は、既に §0.2.1 や §0.2.2 に、また五濁悪世については §0.2.3 や §1.3.2 に説示されたとおりであり、§2.1.1 にもこれと近似した5つの特徴が看取される。第1節の末尾にあたる当該

<sup>576</sup> See DUNG-DKAR, s.v. *spyod lam bzhi* (p. 1321).



箇所において、改めてこれらを概括したものであろう。寿命が短くなるという点はここでも第一番目にあげられ、大きく強調されてみえる。

## §1.7.2

§1.7.2 は、末法の世を呈する最後の五百年に備え、パドマサンバヴァによって埋蔵される長寿成就法『チャッキドンポ』が、彼の子どもと目される人物によって無事発掘されるよう、金剛喜に守護を命じるものである。最後の五百年は、§1.7.1 に明示したような6つの特徴を有する末法の世である。だからこそ、パドマサンバヴァのこの領受 (*nyams myong*)<sup>577</sup>、即ち、『チャッキドンポ』は、最後の五百年 (*lnga brgya tha ma*) という困難な時期 (*dus ngan*) が訪れる時に (*'byung dus su*)、縁に恵まれた「我が子」リクズイン・グウデムチェンと巡り会う (*'phrad 'gyur*) よう意図されて埋蔵される。パドマサンバヴァの願いは、『チャッキドンポ』がリクズイン・グウデムチェンによって発掘され、その結果、仏の教え (*sangs rgyas bstan pa*) が末長く、最後の五百年においても安住するよう (*yun du gnas par shog*) 発せられている。

パドマサンバヴァは、その為に、金剛喜 (*rDo-rje-legs-pa*; *Vajrasādhu*) に向かってこのテルマを守護するよう (*srungs*) 命じている。最後の五百年という悪世の時は (*snyigs ma'i dus su*) 罪人 (*sdig can*) と越法者 (*dam nyams*) が蔓延る時期とされ、こうしたありとあらゆる偽りの者 (*zog po*) からこのテルマを守護し、「縁に恵まれた子」 (*las can bu*) 即ち、彼の子どもと目されるリクズイン・グウデムチェンにこれを譲渡するよう (*gtod*) 金剛喜に命じるものである。当該§1.7.2の終わりに付された文字は、<sup>578</sup> 従って、ダーキニーの符牒、或いはウッディヤーナ語を記した文字で、長寿成就法『チャッキドンポ』が最後の五百年という困難な時期にあっても金剛喜によってよく守護され、リクズイン・グウデムチェンに無事譲渡されること、その結果、仏の教えが末長く安住するようという祈願を記したものと想定される。

## §1.8. コロフォン

### §1.8.1

§1.8.1 には、『チャッキドンポ』が毒蛇の塊の如き岩山の中腹からリクズイン・グウデムチェンによって発掘されたこと (*bton pa*) が、発掘者自身によって、散文スタイルで記述されている。当該箇所は、第1節外なる成就法「貴重な壺」のコロフォンにあたろうが、上の§1.7.2 にみられるパドマサンバヴァのリクズイン・グウデムチェンへの付託を考慮すれば、当該長寿成就法が無事彼によって発掘されたことを叙述するものとも解されよう。仏の教えが末長く、最後の五百年においても安住するよう願われたパドマサンバヴァの心願が、ここに無事成就したことを、このコロフォンは記している。

<sup>577</sup> See 『藏漢』 s.v. *nyams myong* (p. 940): '*goms byang gi rgyus sam shes rtogs*'.

<sup>578</sup> Cf. Appendix B, no. 7 (A 520,6; B 254,6; C 202,6).

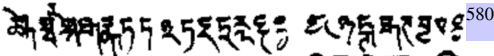
4.3. 第2節 内なる成就法 「チャッキドンポ」

4.3.1. §2. 校訂テキスト

[A 521,1; B 254,6; C 202,6: 内なる成就法「チャッキドンポ」]

ནང་སྐྱབ་ལྷགས་ཀྱི་སྣང་པོ་བཞུགས་སོ།<sup>579</sup>

[§2.1. 埋蔵の趣意]

[§2.1.1]  <sup>580</sup>

བདག་འདྲ་པར་འབྱུང་གནས་ཀྱིས།  
 མ་འོངས་བསྟན་པ་མ་ལ།  
 ཆོ་སྲིད་ནང་མང་འོངས་སྤྱོད་དབུལ།  
 དམ་པའི་དོན་ཡང་མི་འགྲུབ་པས།  
 ལྷག་བསྐལ་འཁོར་ལོ་རྒྱུན་རིང་དུས།  
 ལྷགས་རྗེའི་ལས་འགྲོ་ཡོད་པའི་སྤྱིར།  
 ཆོ་སྐྱབ་ལྷགས་ཀྱི་སྣང་པོ་འདི།  
 ལས་ཅན་བྱ་ཡི་དོན་དུ་བཞག།

[§2.1.2] བྲག་རི་དུག་སྐྱལ་སྤངས་འདྲའི་སྐད།

བསེ་སྐྱོམ་སྐྱུག་པོའི་ནང་དུ་སྐྱས།<sup>581</sup>  
 དུས་ངན་སྤྱིགས་མ་ལྟ་བུའི་ཆོ།  
 རིག་འཛིན་ཚོད་ཀྱི་ལྷེམ་འཕུ་ཅན།  
 ང་ཡི་གཏེར་དང་འཕྲད་པར་འགྱུར།<sup>582</sup>  
 ལྷགས་རྗེའི་གདུལ་བྱ་མཐར་སྐྱབ་ཤོག།

དཀར་ཅོད་ལོ་མཚན་ལོ་ལོ་ལྟར་ན་དཀར་ཕྱེད་དུ་བཞག་ཏུ།<sup>583</sup>

<sup>579</sup> ནང་སྐྱབ་ཀྱི་པོ་ em.] འོ་ནང་བསྐྱབ་ཀྱི་པོ་ A; ནང་སྐྱབ་ཀྱི་པ་ B; ནང་སྐྱབ་ཀྱི་པོ་<<མ་>> C.  
<sup>580</sup> Cf. Appendix B, no. 8 (A 521,1; B 255,1; C 203,1).  
<sup>581</sup> ལྷགས་ em.] སྐད། A; སྐྱེད། B, C.  
<sup>582</sup> ལོ་ B, C] ལོ་ལས་ A.  
<sup>583</sup> Cf. Appendix B, no. 9 (A 521,4; B 255,3; 203,3).

1		[§2.2. 発最勝菩提心]	1
2	[§2.2.1]	ཐོ་རངས་སྐྱེ་རེངས་དང་པོ་ལུ་ <sup>584</sup>	2
3		བདེ་བའི་སྒྲོན་ལ་འདུག་ནས་ཀྱང་ལྷོ་	3
4		བྱང་ཚུབ་མཚོག་ཏུ་སེམས་བསྐྱེད་དོལ་	4
5		[§2.3. 無量光仏(三昧耶薩埵)の観想]	5
6	[§2.3.1]	དང་པོ་སྣོད་པའི་ངང་ཉིད་ལས་ལྷོ་	6
7		ལྷགས་ཀྱི་པར་འདབ་བརྒྱད་གདན་ལྷོ་ <sup>585</sup>	7
8		དེ་སྣོད་བདག་ཉིད་འོད་དཔག་མེད་ལྷོ་	8
9		སྐྱེ་མདོག་དམར་པོ་སྐྱེ་ལ་ཀྱང་བཞུགས་ལྷོ་	9
10		སྐྱེ་ལ་སྐྱེ་འི་ཆ་བྱད་དར་ཚོས་མནའ་བས་ལྷོ་	10
11		ཕྱག་གཉིས་མཉམ་བཞག་ཆེ་བུམ་འདྲི་ན་ལྷོ་	11
12		སྐྱེ་ཆེ་ཡན་ལག་རྒྱལ་པའི་ཚད་ལྷོ་ <sup>586</sup>	12
13		ཕྱག་པ་གཡས་གཡོན་ཉི་ལྷོ་འཆར་ལྷོ་ <sup>587</sup>	13
14		དྲངས་མ་འོད་ལྷའི་རྒྱབ་ཡོལ་ཅན་ལྷོ་	14
15	[§2.3.2]	འོད་པའི་ནང་ནས་བག་ཆགས་ཀྱི་ལྷོ་	15
16		སྐྱེགས་མ་གདོས་བཅས་ཐམས་ཅད་སྐྱེངས་ལྷོ་	16
17		འཆི་མེད་ཆེ་ཡི་བདུད་རྩིས་གདང་ལྷོ་ <sup>588</sup>	17
18		རྒྱ་ག་དམར་པོའི་མདོག་ཅན་བསམ་ལྷོ་ <sup>589</sup>	18
19		སྐྱེ་བོའི་གཟུགས་ནས་གསང་གནས་བར་ལྷོ་	19
20		ལྷགས་ཀྱི་སྐྱོག་ཚ་སྐྱེག་དོང་ཅན་ལྷོ་ <sup>590</sup>	20
21		ཀ་བ་བཅུགས་པ་ལྷ་བུར་བསམ་ལྷོ་ <sup>591</sup>	21
22		ནང་ནི་སྣོད་པ་འོད་གསལ་དྲངས་ལྷོ་ <sup>592</sup>	22

584 འངས་འངས་ A] འངས་འངས་ B; འངས་འངས་+ C.

585 གདན་ལྷོ་ B, C] ལྷོ་ A.

586 རྒྱལ་ em.] རྒྱལ་ A, B, C.

587 འཆར་ B, C] ཆར་ A.

588 ཡི་ B, C] ཡིས་ A.

589 རྒྱ་ B, C] ར་ A.

590 སྐྱེག་དོང་ B, C] སྐྱེག་གདོང་ A.

591 བཅུགས་ em.] གཅུགས་ A; བཅུག་ B, C.

592 ནི་དྲངས་ B, C] ན་དང་ A.

1	ལ་དོག་ལྷར་གསལ་འོད་ཟེར་འབར་མུང་།	1
2	སྒོག་ཅའི་ཕྱི་ན་སྒྲགས་ཀྱི་འབྲུང་མུང་ <sup>593</sup>	2
3	དུང་མདོག་ཟིལ་པ་ལྷ་བྱུང་བསམ་མུང་།	3
4	[§2.4. 極楽世界より智慧薩埵を勧請する]	4
5	[§2.4.1] བདེ་བ་ཅན་ནས་ཡེ་ཤེས་སེམས་མུང་།	5
6	རང་འབྲས་སྒྱུན་དངས་མཁའ་ལ་བཞུགས་མུང་།	6
7	བུམ་པའི་ནང་ནས་ཆེ་བརྒྱད་ལྷུང་།	7
8	བདག་གི་ཚངས་བུག་ནང་དུ་བབས་མུང་ <sup>594</sup>	8
9	དབང་བསྐྱར་ལྷ་དང་དབྱེར་མེད་གྱུར་མུང་།	9
10	ལྷ་དང་སྒོག་ཅའི་བདུད་ཚིལ་མུང་ <sup>595</sup>	10
11	འོད་འཕྲོས་གསལ་འཚོར་མདངས་དང་ལྷན་མུང་།	11
12	[§2.4.2] མོ་རངས་སྒྲགས་འདི་བརྒྱ་ཅ་བཞུང་ <sup>596</sup>	12
13	ཨོ་ཨྲུང་ འྲུང་ <sup>v</sup> བ་མོ་སྒྲག་མ་ཉེ་ <sup>597</sup> ཨ་པ་རི་མི་ཏ་ཨྲུ་ཡུར་རྫོང་ <sup>598</sup> ལྷ་བི་ལི་ཕྱི་ཏ་ཉེ་རྩོ་རྩོ་ལྷ་ཡུང་ <sup>599</sup>	13
14	ཏ་སྒྲག་ཏུ་ཡུང་ <sup>600</sup> ཨ་རྩ་ཉེ་སྐྱུ་སྐྱི་བུརྫོང་ཡུང་ <sup>601</sup> ཏུ་སྐྱུ་ <sup>602</sup> ཨོ་ས་པ་སྐྱུ་ར་པ་རི་བྱང་རྫོང་ <sup>603</sup>	14
15	རྫོམ་ཉེ་ག་ག་བ་སྐྱུ་ལ་ཉེ་ <sup>604</sup> ལྷ་སྐྱུ་བ་བི་བྱང་རྫོང་ <sup>605</sup> མ་རྩ་བ་ལ་པ་རི་སྐྱུ་རི་སྐྱུ་རྫོང་ <sup>606</sup>	15

<sup>v</sup> ApS\_s, §11: om namo bhagavate aparimitāyurjñānasuviniścitatejorājāya tathāgatāyārhatē samyak-sambuddhāya || tadyathā || om puṇyamahāpuṇyāparimitapuṇyāparimitāyupuṇyajñānasambhāropacite || om sarvasaṃskārapariśuddhadharmate gagaṇasamudgate svabhāvapariśuddhe mahānayaparivāre svāhā ||

ApS\_t, §13: ཨོ་ཨྲུང་ག་ག་ཉེ་ ཨ་པ་རི་མི་ཏ་ཨྲུ་ཡུར་རྫོང་ན་ལྷ་བི་ལི་ཕྱི་ཏ་ཉེ་རྩོ་རྩོ་ལྷ་ཡུང་ ཏ་སྐྱུ་ལྷ་ཡུང་ ཨ་རྩ་ཉེ་ སྐྱུ་སྐྱི་བྱང་རྫོང་ ཨོ་ས་པ་སྐྱུ་ར་པ་རི་བྱང་རྫོང་ ཉེ་ག་ག་བ་སྐྱུ་ལ་ཉེ་ ལྷ་སྐྱུ་བ་བི་བྱང་རྫོང་ མ་རྩ་བ་ལ་པ་རི་སྐྱུ་རི་སྐྱུ་རྫོང་

593 °ན་° B, C] °ནང་° A.  
 594 °ཚངས་° B, C] °ཚང་° A.  
 595 °དང་°ཅའི་° em.] °དང་°ཅ་° A, C; °གང་°ཅ་° B.  
 596 °རངས་°བཞུང་ B, C] °རེངས་°བཞུས་མུང་ A.  
 597 °མ་° A] °བ་° B, C.  
 598 °ཏ་ཨྲུ་ཡུར་རྫོང་° B, C] °ཏ་ཨྲུ་ཡུར་རྫོང་° A.  
 599 °བི་ལི་ཕྱི་ཏ་ཉེ་རྩོ་རྩོ་ལྷ་ཡུང་° em.] ལྷ་བི་ལི་ཕྱི་ཏ་ཉེ་རྩོ་རྩོ་ལྷ་ཡུང་ A; ལྷ་བི་ལི་ཕྱི་ཏ་ཉེ་རྩོ་རྩོ་ལྷ་ཡུང་ B; ལྷ་བི་ལི་ཕྱི་ཏ་ཉེ་རྩོ་རྩོ་ལྷ་ཡུང་ C.  
 600 °ཏུ་° B, C] °ཏ་° A.  
 601 ཨ་རྩ་ཉེ་སྐྱུ་སྐྱི་བུརྫོང་° B] ཨ་རྩ་ཉེ་ སྐྱུ་སྐྱི་བྱང་རྫོང་° A; ཨ་རྩ་ཉེ་སྐྱུ་སྐྱི་བྱང་རྫོང་° C.  
 602 ཏུ་སྐྱུ་ B, C] ཏུ་སྐྱུ་ A.  
 603 °སྐྱུ་ར་°བྱང་རྫོང་° em.] °སྐྱུ་རི་°བྱང་རྫོང་° A; °སྐྱུ་ར་°བྱང་རྫོང་° B, C.

1	འི་ལྷོ་བཏོན་ལྷ་ལྷ་འི་ལྷ་ལྷ་ན་སི་རྒྱུ་ལྷོ་ལྷོ་	1
2	[§2.5. 鉄鉤形の光線が二世間を遍満する]	2
3	[§2.5.1] ཉིང་འཇིན་སྐྱེས་ཀྱི་འོད་ཟེར་ནི་ལྷོ་	3
4	སྐྱེས་ཀྱི་ལྷ་ལྷ་ལྷོ་དང་བཅུད་གང་ལྷོ་ <sup>608</sup>	4
5	སངས་རྒྱལ་བྱང་ཚུབ་སེམས་དཔའ་ཡི་ལྷོ་	5
6	སྐྱེས་ཀྱི་ལྷོ་ལྷོ་བྱེད་ལྷོ་སྐྱེས་ལྷོ་ <sup>609</sup>	6
7	ལྷོ་སྐྱེས་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་སྐྱེས་ལྷོ་བྱེད་ལྷོ་	7
8	རྒྱ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་གཟི་མདངས་འཕྲོག་ལྷོ་	8
9	[§2.5.2] རི་རབ་སྐྱིད་བཞི་སྐྱིད་ཕྱན་དང་ལྷོ་	9
10	གསེར་གྱི་རི་བདུན་རོལ་མཚོ་དང་ལྷོ་	10
11	ཚི་ཤིང་ནགས་ཚལ་རྒྱུ་ལྷོ་ལྷོ་གསེར་	11
12	འབྲུང་བ་ལྷོ་ལྷོ་དངས་མ་བསྐྱེས་ལྷོ་	12
13	ལྷོ་སྐྱེས་ལྷོ་ལྷོ་དངས་མ་དང་དང་ལྷོ་ <sup>610</sup>	13
14	བསྐྱེས་ནམས་དངོས་གྲུབ་ཐམས་ཅད་བསྐྱེས་ལྷོ་ <sup>611</sup>	14
15	[§2.5.3] བདུད་ཚིའི་འོད་ཟེར་ཆར་ལྷོ་བསྐྱེས་ལྷོ་	15
16	ཐམས་ཅད་མ་ལྷོ་སྐྱེས་བདག་ལ་བསྐྱེས་ལྷོ་	16
17	བདག་ལྷོ་སྐྱེས་བདུད་ཚིའི་གང་བར་བསྐྱེས་ལྷོ་	17
18	སྐྱེས་གསལ་འོད་ལྷོ་གོང་བྱེད་བསྐྱེས་ལྷོ་ <sup>612</sup>	18
19	[§2.6. 請願]	19
20	[§2.6.1] རྒྱལ་ལ་སྐྱོན་ལམ་འདི་ལྷོ་བཏོན་ལྷོ་	20

604 ལྷོ་སྐྱེས་ལྷོ་ B, C] ལྷོ་སྐྱེས་ལྷོ་ A.

605 ལྷོ་བ་ལྷོ་ B, C] ལྷོ་སྐྱེས་ལྷོ་ A.

606 མ་རྒྱུ་ལྷོ་སྐྱེས་ལྷོ་ em.] མ་རྒྱུ་ལྷོ་སྐྱེས་ལྷོ་ A; མ་རྒྱུ་ལྷོ་སྐྱེས་ལྷོ་ B, C.

607 ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་སྐྱེས་ལྷོ་] ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་སྐྱེས་ལྷོ་ A; ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་སྐྱེས་ལྷོ་ B; ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་སྐྱེས་ལྷོ་ C.

608 ལྷོ་ A, C] ལྷོ་ B.

609 ལྷོ་ལྷོ་སྐྱེས་ལྷོ་ em.] ལྷོ་ལྷོ་སྐྱེས་ལྷོ་ A; ལྷོ་ལྷོ་སྐྱེས་ལྷོ་ B, C.

610 ལྷོ་ A] ལྷོ་ B, C.

611 ལྷོ་སྐྱེས་གྲུབ་ཐམས་ཅད་བསྐྱེས་ལྷོ་ B] ལྷོ་ལྷོ་སྐྱེས་གྲུབ་བསྐྱེས་ལྷོ་ A; ལྷོ་ལྷོ་སྐྱེས་གྲུབ་ཐམས་ཅད་བསྐྱེས་ལྷོ་ C.

612 ལྷོ་སྐྱེས་ལྷོ་ B] ལྷོ་སྐྱེས་ལྷོ་ A; ལྷོ་སྐྱེས་ལྷོ་ C.

1	ཧྲིཿ <sup>613</sup> ལྷེ་ཤི་གཉིས་མེད་བདེ་བ་ཆེན་པོའི་ངང་།	1
2	མི་འགྲུབ་ཆེ་ཡི་དངོས་གྲུབ་བདག་ལ་སྣོལ་ལ།	2
3	འགྲུབ་བ་ལྷ་འདུས་གསལ་འཚོར་བརྟན་པའི་སྣོལ་ལ།	3
4	ཐུན་མོང་ཆེ་ཡི་དངོས་གྲུབ་བདག་ལ་སྣོལ་ལ།	4
5	ཨྲ་ཡུལ་ལྷོ་ན་རྟེན་ཏུ་སྣོལ་ལ། <sup>614</sup>	5
6	འོ་སྣོལ་བཟོ་ཨྲ་ཡུལ་ཏུ་ཨྲ་ལ། <sup>615</sup>	6

7	<u>མཁའ་ལྷོ་སྣོལ་བཟོ་ཨྲ་ཡུལ་ཏུ་ཨྲ་ལ།<sup>616</sup></u>	7
---	---	---

[§2.7. 寿命を司る壺に関する次第]

9	[§2.7.1] མགོན་པོ་ཆེ་དཔག་མེད་ལ་ཕྱག་འཚམས་ལོ།	9
10	ཡར་འོ་དུས་དང་གཟའ་སྐར་བཟང་པོ་ལ།	10
11	ས་གཙང་བཟུ་ཤིས་དབེན་པའི་གནས་བཙམ་ལ། <sup>617</sup>	11
12	འགྲུ་སྣོལ་རྩུ་སྣོལ་དང་སྣོལ་པོ་ལ།	12

13	[§2.7.2] རྒྱན་ཚད་མེད་པའི་ཚུ་ཡིས་བྱམ་པ་དགང་། <sup>618</sup>	13
14	གཙང་མའི་གོས་དཀྱིས་དཔག་བསམ་སྣོང་པོས་བརྒྱན་ལ།	14
15	གོང་ལྷན་སྤགས་དང་ཉིང་འདྲིན་རྒྱས་པར་བྱ།	15
16	བདུད་རྩིའི་བཅུད་བསྐྱེས་བྱམ་པའི་ནང་དུ་བཞུགས་ལ།	16
17	རང་ལས་འོད་འཕྲོས་ཆེ་ཡི་དངོས་གྲུབ་བསྐྱེས་ལ། <sup>619</sup>	17

18	[§2.7.3] ཉིང་འདྲིན་གསལ་བས་ཆེ་ཡི་ཐིན་ལས་ནི། <sup>620</sup>	18
19	བཅོམ་ལྷན་མགོན་པོ་ཡེ་ཤེས་ཆེ་དཔག་མེད་ལ། <sup>vi</sup>	19

<sup>vi</sup> ApS\_t, §5: དེ་ན་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་དག་བཅོམ་པ་ཡང་དག་པར་རྣོགས་པའི་སངས་རྒྱས་ཆེ་དང་ཡེ་ཤེས་དཔག་ཏུ་མེད་པ་

<sup>613</sup> ཧྲིཿ B, C] ཧྲིཿ A.  
<sup>614</sup> ཨྲ་ཡུལ་ལྷོ་སྣོལ་ B, C] ཨྲ་ཡུལ་ལྷོ་སྣོལ་ A.  
<sup>615</sup> འོ་སྣོལ་ཨྲ་ཡུལ་ཏུ་ B, C] འོ་སྣོལ་ཨྲ་ཡུལ་ཏུ་ A.  
<sup>616</sup> Cf. Appendix B, no. 10 (A 523,6; B 257,3; C 205,3).  
<sup>617</sup> འོད་བེན་ A, C] འོད་བེན་ B.  
<sup>618</sup> འོད་གང་ B, C] འོད་གང་ A.  
<sup>619</sup> འོད་ལས་ B, C] འོད་ལས་ A.  
<sup>620</sup> འོད་ཐིན་ལས་ B, C] འོད་ཐིན་ལས་ A.

1	འབྱུང་བ་ལྷ་ལ་དབང་རྒྱུ་ལྷ་མོའི་ཚོགས་ལྷོ་ <sup>621</sup>	1
2	ནལ་འབྱོར་བདག་གི་ཚོ་དང་གཡང་སྤེལ་ཅིག་ལྷོ་	2
3	སྤོང་འོག་ཕྱོགས་བཅུ་སྤོང་གི་འཇིག་རྟེན་ལྷོ་	3
4	སྤོང་དང་འབྲུམས་དང་ཡར་བའི་ཚོ་སྤྲུག་ཅིག་ལྷོ་ <sup>622</sup>	4
5	སྤོང་ཕྲག་བརྒྱད་ཅུ་བཞག་གས་གི་ཚོགས་རྣམས་གིས་ལྷོ་ <sup>623</sup>	5
6	བརྒྱུས་དང་འཕྲོག་དང་གཞོན་པའི་ཚོ་སྤྲུག་ཅིག་ལྷོ་ <sup>624</sup>	6
7	འབྱུང་བ་དག་གཤེད་འབྲུག་པའི་ལས་སྤྱོར་གིས་ལྷོ་ <sup>625</sup>	7
8	ཉམས་དང་ཟད་དང་འཕོར་བའི་ཚོ་གསོས་ཤིག་ལྷོ་	8
9	ཡིད་གིས་དངངས་དང་ཉེད་གིས་བརྒྱལ་བ་དང་ལྷོ་ <sup>626</sup>	9
10	ལུད་གིས་འདྲོགས་པའི་ཚོ་དང་གཡང་གསོས་ཤིག་ལྷོ་ <sup>627</sup>	10
11	ཚོ་སྤྲུག་གཡང་རྒྱབས་དངོས་གྲུབ་བདག་ལ་སྤོང་ལྷོ་ <sup>628</sup>	11
12	འབྱུང་བ་འོད་ལྷ་འབར་བའི་ཚོ་བཅུད་སྤྱིམས་ལྷོ་ <sup>629</sup>	12
13	འཚི་མེད་ཚོ་ཡི་དངོས་གྲུབ་བདག་ལ་སྤོང་ལྷོ་	13
14	[§2.7.4] ཞེས་བརྗོད་ཚོ་བུམ་སྤྱི་བོའི་གཙུག་ཏུ་བཞག་ལྷོ་	14
15	གོང་གི་སྤོང་བོ་གསུམ་གིས་དངོས་གྲུབ་བསྐྱེམ་ལྷོ་	15
16	བདག་གི་ཚངས་བུག་བརྒྱད་ནས་བདུད་རྩི་བབས་ལྷོ་ <sup>630</sup>	16
17	ཁོང་པ་གང་ཞིང་དངོས་གྲུབ་ཐོབ་པར་བསམ་ལྷོ་ <sup>631</sup>	17

ཤིན་ཏུ་རྣམ་པར་ངེས་པའི་གཟི་བརྗོད་གི་རྒྱལ་པོ་ཞེས་བྱ་བ་

ApS\_s, §4: *tatrāparimitāyur-jñāna-suviniścita-tejo-rāja nāma tathāgato 'rhan* [ 'rhan em. ] *rhan*] *samyak-sambuddho*.

CDT 645,1: ཚོ་སྤྲུག་ལྷགས་སྤོང་མའི་ཚོ་འགྲུགས་ནི། ལྷོ་བཙོམ་འཇིག་རྟེན་ན། བརྒྱད་ཅུའི་དང་འཕྲོགས་དང་བཙོམ་འབྱུང་བའི་གཤེད་འབྲུགས་ཉེད་གིས་བསྐྱེམས་དང་ཡུད་གྲུབ་སྤོང་ལྷོ་གསོས། འབྱུང་ལྷོ་འོད་ལྷོ་ཞེས་སོ།

621 ལྷོ་ལྷོ་ B, C] ལྷོ་ལྷོ་ A.

622 ལྷོ་ལྷོ་ B] འཕྲོགས་ལྷོ་ A; འཕྲོགས་ལྷོ་ C.

623 ལྷོ་ལྷོ་ B, C] ལྷོ་ལྷོ་ A.

624 འཕྲོགས་གཞོན་ལྷོ་ C] ལྷོ་གས་གཞོན་ལྷོ་ A; ལྷོ་གས་གཞོན་ལྷོ་ B.

625 འབྲུག་ལྷོ་ A] འབྲུགས་ལྷོ་ B, C.

626 ཡིད་ལྷོ་ em.] ཡིད་ལྷོ་ A, B, C.

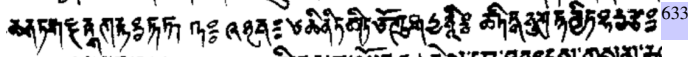
627 ལུད་གིས་འདྲོགས་པའི་ལྷོ་ B] ལུད་གི་ཕྱོགས་བའི་ལྷོ་ A; ལུད་གིས་འདྲོགས་པའི་ལྷོ་ C.

628 ལྷོ་གས་ལྷོ་ A] ལྷོ་གས་ལྷོ་ B; ལྷོ་++ ལྷོ་ C.

629 ལྷོ་ལྷོ་ B, C] ལྷོ་ལྷོ་ A.

630 ལྷོ་ལྷོ་ B, C] ལྷོ་ལྷོ་ A.

631 ལྷོ་ལྷོ་ A] ལྷོ་ལྷོ་ B, C.

1	བཅོམ་ལུན་མགོན་པོ་རྡོ་རྗེ་ཚེ་དཔག་མེད་ལྷོ་	1
2	འཁོར་ལོ་བརྒྱད་དེ་བདག་གི་སྣང་ཁར་ཐིམ་ལྷོ་ <sup>632</sup>	2
3	འཆི་མེད་ཚེ་ཡི་དངོས་གྲུབ་ཐོབ་པར་བསམ་ལྷོ་	3
4		4
5	[§2.8. 2つの功德]	5
6	[§2.8.1] ཚེ་སྐྱུ་བ་ལྷགས་ཀྱི་སྣང་པོ་འདི་ལྷོ་	6
7	ཐོ་རངས་སྡོ་དང་པོ་ལྷོ་ <sup>634</sup>	7
8	ཉིང་འཇིན་གསལ་བས་བརྒྱ་ཚ་བརྒྱལ་ལྷོ་ <sup>635</sup>	8
9	ཚེ་ཟད་མཐའ་ལ་ཐུག་པ་ཡང་ལྷོ་ <sup>636</sup>	9
10	འདི་བསྐྱུ་བ་ལོ་བརྒྱ་དེས་པར་ཐུབ་ལྷོ་ <sup>vii 637</sup>	10
11	དུས་གསུམ་རྒྱལ་བའི་གདུང་འཇིན་དེས་ལྷོ་	11
12	འདི་ཡི་ཡོན་ཏན་བརྗོད་མི་ལང་ལྷོ་ <sup>638</sup>	12
13	པ་རོལ་གྱིན་བརྒྱ་ས་ལམ་བཤོད་ལྷོ་	13
14	བདེ་བ་ཅན་གྱི་ཞིང་དུ་སྐྱེ་ལྷོ་	14

vii ApS\_t, §14: འཇམ་དཔལ། དེ་བཞིན་གཤེགས་པའི་མཚན་བརྒྱ་ཚ་བརྒྱད་པོ་འདི་དག་གང་ལ་ལ་ཞིག་ཡི་གེར་འབྲིའམ། ཡི་གེར་འབྲིར་འཇུག་གམ། སྐྱེགས་བམ་ལ་བྲིས་ཏེ་བྱིམ་ན་འཆང་ངམ། སྐྱོག་པར་གྱུར་པ་དེའི་ཚེ་ཟད་པ་ལས་ཚེ་ལོ་བརྒྱ་ཐུབ་པར་འགྱུར་ཏེ། [§15] འདི་ནས་ཤི་འཕོས་ནས་ཀྱང་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ཚེ་དཔག་ཏུ་མེད་པའི་སངས་རྒྱས་ཀྱི་ཞིང་འཇིག་རྟེན་གྱི་ཁམས་ཡིན་ཏན་དཔག་ཏུ་མེད་པ་ལ་སོགས་པར་སྐྱེ་བར་འགྱུར་རོ།།

ApS\_s1, §12: *idaṃ mañjuśrīṣ tathāgatasya nāmāṣṭottaraśatakam ye kecit likhīṣyanti likhāpayīṣyanti, pustakagatam api kṛtvā gr̥he dhārayīṣyanti vācayīṣyanti te parikṣāṇāyusaḥ punar eva varṣaśatāyūṣo bhaviṣyanti* [§13] *itaś cyutvā aparimitāyūṣas tathāgatasya buddhakṣetre upapadyante aparimitāyūṣas ca bhaviṣyanti aparimitaguṇasamcaye lokadhātau.*

<sup>632</sup> ལྷོ་ཁར་ལྷོ་ A] ལྷོ་གར་ལྷོ་ B, C.

<sup>633</sup> Cf. Appendix B, no. 11 (A 525,3; B 258,5; C 206,5).

<sup>634</sup> ལྷོ་རངས་ལྷོ་ B, C] ལྷོ་རངས་ལྷོ་ A.

<sup>635</sup> ལྷོ་བརྒྱལ་ལྷོ་ B, C] ལྷོ་བརྒྱལ་ལྷོ་ A.

<sup>636</sup> ལྷོ་ཐུག་ལྷོ་ B, C] ལྷོ་ཐུགས་ལྷོ་ A.

<sup>637</sup> ལྷོ་བསྐྱུ་བ་ལྷོ་ A] ལྷོ་བསྐྱུ་བ་ལྷོ་ B, C.

<sup>638</sup> ལྷོ་ལང་ལྷོ་ B, C] ལྷོ་ལངས་ལྷོ་ A.



1		[§2.9. 授記]	1
2	[§2.9.1]	ཨེ་མ་ཉོེ་བསྐལ་པ་ཐ་མའི་དུས།	2
3		སྒྲིགས་མ་ལྷ་ཡི་རྟགས་རྣམས་འབྱུང་།	3
4		པར་འབྱུང་གནས་ལུགས་རྗེ་ཡིས།	4
5		ལྷ་ལྷའི་བསྟན་པ་མཐའ་རྒྱས་ཕྱིར།	5
6		འགོ་བ་འགའ་ཞིག་སྤོང་ཅིང་གོ་ལ།	6
7		དེ་ཕྱིར་ཚེ་རླུབ་ཟབ་མོ་འདི།	7
8		ལས་ཅན་བྱ་དང་འཕྲད་པར་གོ་གཞུང་། <sup>639</sup>	8
9		རིག་འཛིན་ཚོད་ཀྱི་ལྷེ་མ་འཕྲུ་ཅན།	9
10		ཚེ་རླུབ་ཟབ་མོ་ཉམས་སྲུ་ལོངས། <sup>640</sup>	10
11		ང་ཡི་གདུལ་བྱ་མཐའ་ཕྱིན་འགྱུར། <sup>641</sup>	11

<sup>639</sup> འཕྲད་འཕྲད་ A, B] འཕྲད་འཕྲད་ C.

<sup>640</sup> འཕྲད་འཕྲད་ B] འཕྲད་འཕྲད་ A, C.

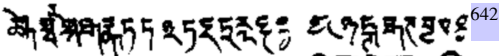
<sup>641</sup> འཕྲུར་འཕྲུར་ B; C] འཕྲུར་འཕྲུར་ A.

## 4.3.2. §2. 翻訳

[A 521,1; B 254,6; C 202,6: 内なる成就法「チャッキドンポ」]

内なる成就法「チャッキドンポ」と名付く [節]

[§2.1. 埋蔵の趣意]

[§2.1.1]  <sup>642</sup>

[先に] 教示した来たる最後の [五百年] は

[1.] 寿命は短く,

[2.] 病は多く,

[3.] 富は貧しく,

[4.] 勝義も成り立たないので,

[5.] 長期間にわたって苦しみの連鎖 [が続く] 時である。

[そのような時に] 慈しみの残余が在るように,

まさしく私パドマサンバヴァによって

本長寿成就法『チャッキドンポ』は

有縁者たる [我が] 子のために置かれる。

[§2.1.2] [長寿成就法『チャッキドンポ』は] 毒蛇の塊の如き岩山の中腹に

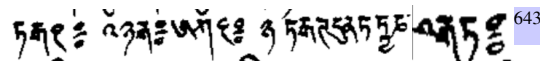
えび茶色の銅製の箱の中に [収めて] 秘匿される。

五濁悪世の時,

持明者グウキデムトウチェンが

私 (パドマサンバヴァ) のテルマと巡り会い,

悲心の懐にある [この] 弟子が究竟に至るように!

 <sup>643</sup>

[§2.2. 発最勝菩提心]

[§2.2.1] 暁闇朝一番に

<sup>642</sup> Cf. Appendix B, no. 8 (A 521,1; B 255,1; C 203,1).<sup>643</sup> Cf. Appendix B, no. 9 (A 521,4; B 255,3; 203,3).

心地よい坐具にあつて、その上で  
最勝なる菩提に発心する。

[§2.3. 無量光仏(三昧耶薩埵)の観想]

- [§2.3.1] [勤修者であるあなたは] まず空性そのものから  
鉄の [ように頑丈な] 八重の花弁から成る蓮華台 [を生起する]。  
その (鉄のように頑丈な八重の花弁から成る蓮華台の) 上に [勤修者である  
あなた] 自身を  
赤色の御身を結跏趺坐にしていらっしゃる無量光仏 [として観想する]。  
[勤修者と不二一体となった無量光仏は] 化身の装飾具を御身に纏い、  
禅定 [印を結んだ] 御両手に寿命 [を司る] 壺を擁し、  
御身の肢体はいずれも剛健である。  
五 [色] の耀かしく透明な光背を有する  
左右の両肩 [の上方には] 太陽と月が出現している。
- [§2.3.2] 習気である汚染の実体は  
深奥部からすっかり清除され、  
不死なる寿命の甘露で満たされて、  
赤漆色をしている [——と、このように三昧耶薩埵である無量光仏の様子を]  
ありありと観想するのである。  
[三昧耶薩埵である無量光仏の] 頭頂から秘所までを [貫く]  
竹筒程に [空洞ながら] 鉄の [ように頑丈な] 命脈を  
建立された柱のように、ありありと観想するのである。  
[鉄のように頑丈な命脈の] 内側は空洞で、耀かしく澄み切った光明 [だけ] が  
五色の煌々とした光線として眩しく輝いている。  
[鉄のように頑丈な] 命脈の外側は、[五仏の] ダーラニーが [含む5つの] 種子  
(*hūm, trāh, hrī, hūm, om*) が、  
法螺貝色をした露のように [ある様子] をありありと観想するのである。

[§2.4. 極楽世界より智慧薩埵を勧請する]

- [§2.4.1] 極楽世界より勧請した、[無量光仏と不二一体となったあなた] 自身とよく似た  
智慧薩埵が、  
空中にいらっしゃる。  
[智慧薩埵が擁する、寿命を司る] 壺の中から、寿命の滋養が溢れ出て、  
[勤修者であるあなた≈三昧耶薩埵] 自身の頭頂ブラフマ孔の中に滴り落ち、

[勤修者~三昧耶薩埵は] 灌頂を授ける本尊 (智慧薩埵) と不可分となった。

[灌頂を授ける] 本尊と、命脈の甘露から

光が発散し、[あなたは] 鮮烈な光輝で充溢する。

[§2.4.2] 曉闇, [＜無量寿宗要経＞ 中に説示される] 次のダーラニーを数百回 [繰り返し] 唱える。

「*om namo bhagavate aparimitāyurjñānasuviniścitatejorājāya tathāgatāyārhatē samyak-saṃbuddhāya || tad yathā || om sarvasaṃskārapariśuddhadharmate gagaṇasamudgate svabhāvaviśuddhe mahānaya-parivāre svāhā || ṇrī bhrūm vajrāyuse āyurjñānasiddhi. āḥ bhrūm*」

[§2.5. 鉄鉤形の光線が二世間を遍満する]

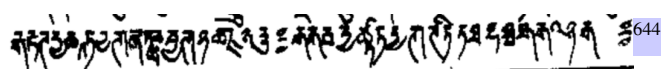
[§2.5.1] [上記ダーラニーを一心に唱えて] 思いを込めると、  
 ダーラニーの光線が  
 器 [世間と] 衆生 [世間] を遍満し、  
 諸仏諸菩薩の  
 慈悲深い守護と効験 (*siddhi*) を鉄鉤の如く掻き集める。  
 [鉄鉤の如き光線は、また、]  
 [1.] [十] 方の守護神、  
 [2.] ダーキニー、  
 [3.] 八部衆の  
 昂然な聖通である寿命と生命を収奪する。

[§2.5.2] [ダーラニーを唱えた結果生ずる鉄鉤の如き光線は]  
 [1.] 須弥山、  
 [2.] 四大洲、  
 [3.] [八] 中洲と、  
 [4.] 七金山、  
 [5.] [七] 海と、  
 [6.] 果樹園 [を遍満し]、  
 [それらの] 宝の集塊である  
 五大 (地/水/火/風/空) の精分を掻き集め、  
 天、龍、人の  
 あらゆる福運と福德と成就を掻き集める。

- [§2.5.3] 不死なる甘露である [ダーラニーを唱えた結果生ずる鉄鉤の如き] 光線が、雨のように [勤修者の上に] 降り注ぎ  
 [上に述べた] あらゆるものを、残らずすべて [勤修者であるあなた] 自身 [の中] に収斂させる。  
 [その結果、勤修者であるあなた] 自身の身体が、[その] 不死なる甘露で遍満している [様子を] ありありと観想するのである。  
 [あなたの身体が] 一塊の光となった煌々とした空であることについて、思索を深めてゆく。

## [§2.6. 請願]

- [§2.6.1] [その] 後、次のような請願 [文] を読誦するのである：  
 [請願1.] 「hūm! 寿命に関して不変な成就であるところの  
 不二なる生死を、大樂のまま我に授け給え！」  
 [請願2.] 「寿命に関して普遍的な成就であるところの  
 五大の集積である、優れた、[そして] 堅固な身体を、我に授け給え！」  
*āyurjñāna bhindu bhrūm. ṅrī bhrūm vajrāyuṣe om āh.*

 644

## [§2.7. 寿命を司る壺に関する次第]

- [§2.7.1] 主である無量寿仏に帰命する。  
 [満月に向かう] 上弦の月の、幸先が良い星曜辰宿の時に  
 清浄、且つ、吉祥な土地に、寂然とした場所を求めて  
 [壺を安置し、その中に次のものを容れる]。  
 [1.] 穀物、  
 [2.] 香、  
 [3.] 宝、  
 [4.] 薬、そして  
 [5.] 5つの精髓。
- [§2.7.2] [勤修者は次に] 水を途切れることなく [注ぎ入れ] て、壺を満たす。  
 [その壺に] 清浄な布を巻きつけ、如意枝で飾る。  
 前述したダーラニー (§2.6.1: *āyurjñāna bhindu bhrūm. ṅrī bhrūm vajrāyuṣe om*

<sup>644</sup> Cf. Appendix B, no. 10 (A 523,6; B 257,3; C 205,3).

*āh*) と禪定 [の力] が増強していく。

[すると、ダーラニーが] 不死なる甘露の滋養を凝縮させ、壺の中に [これを] 収斂させる。

[壺] 自体から光が発散し、寿命の成就を [壺の中に] 凝縮させる。

[§2.7.3] [勤修者の] 現然たる三昧の寿命に関する業として [次のような請願文を読誦する]:

「主である仏世尊，無量寿智仏よ！

五大を支配する女神の集塊よ！

[請願1.] ヨーガ行者たる我が寿命と福祿を増大させ給え！

[請願2.] 上下十方の器世間を

流離い，彷徨い，散り散りになった [我が] 寿命を召喚させ給え！

[請願3.] 八万にわたる，あらゆる障難によって

分捕られ，濫妨され，損なわれた [我が] 寿命を召喚させ給え！

[請願4.] [身体を構成する五] 大の不調和が作用して，

弱体化し，尽果て，散乱した [我が] 寿命を育み給え！

[請願5.] [妄] 想によって恐怖して，突然昏倒するなど，

急に畏縮した [我が] 寿命と福祿を育み給え！

[請願6.] 寿命を召喚させ，福祿を保護する成就を我に授け給え！

[請願7.] [身体を構成する五] 大に，寿命の滋養を [寿命を司る壺が発散する] 眩しく輝く五光として充滿させ，

不死なる長寿の成就を我に授け給え！」

[§2.7.4] 以上のように [請願文を] 読誦し，[勤修者は] 寿命を司る壺を [彼／彼女の] 頭頂に置く。

先に述べた 3つの精髓によって [不死なる寿命の] 成就は [寿命を司る壺の中に既に] 収斂されている。

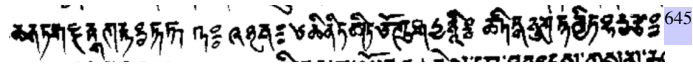
[勤修者であるあなた] 自身の頭頂ブラフマ孔を伝って [不死なる寿命の] 甘露が滴り落ち，

[勤修者の体内] 深奥部まで隈なく隅々まで [浸透し，不死なる寿命の] 成就が成し遂げられた [様子を] ありありと観想するのである。

主である仏世尊，無量寿金剛仏が

チャクラ (*cakra*) を通じて [勤修者であるあなた] 自身の心臓部に滲み込み，

[その結果，] 不死なる長寿の成就が成し遂げられた [様子を] ありありと観想するのである。



## [§2.8. 2つの功德]

## [§2.8.1] 暁闇朝一番に、

この長寿成就法『チャッキドンポ』[中の §2.4.2 において導入し、展開した  
ダーラニー]を

現然たる三昧により、数百回読誦するのである。

[その結果] これ(長寿成就法『チャッキドンポ』)を成就する[者]は、遂に  
寿命が尽きる[時に]至っても[寿命が延び、寿命]百歳が必ずや叶うであろ  
う。

[成就者はまた]必ずや三世諸佛の後嗣となるであろう。

この(長寿の)功德は筆舌に尽くしがたい。

[何故なら、彼／彼女は存命中に]十波羅蜜、[五]道[十]地を歩む[ことが  
叶い]、

[死後は]極楽[浄]土に生まれる[からである]。

## [§2.9. 授記]

## [§2.9.1] エマホー！末劫の時、

五濁の諸々の証が生じる。

[しかし、]パドマサンバヴァの悲心によって

釈迦の教えは余すところなく広まるのであるから

何某かの有情は、成熟して解脱する。

その為に、この甚深なる長寿成就法が、

縁に恵まれた[我が]子と巡り会うように！

持明者グウキデムトゥチェンよ、

[この]甚深なる長寿成就法を実修せよ。

私の弟子よ、究竟に至るがよい。

<sup>645</sup> Cf. Appendix B, no. 11 (A 525,3; B 258,5; C 206,5).

### 4.3.3. §2. 詳解

本4.3.3章では、第2節内なる成就法「チャッキドンポ」のテキスト、及び、翻訳に基づく考察を詳解として提出する。『チャッキドンポ』における第2節内なる成就法の位置付けは、第2.3.3章(『チャッキドンポ』の節構成について)において考察したとおりである。

## §2.1. 埋蔵の趣意

### §2.1.1

当該 §2.1.1 には、長寿成就法『チャッキドンポ』埋蔵の趣意が、末法の世を呈する最後の五百年に備えて、パドマサンバヴァの有縁の弟子リクズイン・グウデムチェンのために埋蔵されるという文脈で述べられる。

§2.1.1 が説示する来たる最後の五百年の 5 つの特徴、即ち——(1.) 寿命は短く (*tshe thung*), (2.) 病は多く (*nad mang*), (3.) 富は貧しく (*longs spyod dbul*), (4.) 勝義 (*dam pa'i don*) も成り立たないので、(5.) 長期間にわたって苦しみの連鎖が続く時——という 5 つの特徴は、「[先に] 教示した」(*bstan pa*) という関連付けに看取されるように、§1.7.1 における所説と重複する。§1.7.1 に説示された 6 つの特徴と当該 §2.1.1 が説示する 5 つの特徴を比較すれば、<sup>646</sup> 多災という特徴に関し、前者はこれをあげ、後者はこれをあげていないという相違点が、指摘されよう。この点は、しかし、軽微な差異と見做し得、「[先に] 教示した」という言辞が表現するように、当該 §2.1.1 は大枠において §1.7.1 を踏襲しているものとみられる。両者の比較においてより注目されるべき点は、「短命」(§1.7.1: *tshe tshad thung*; §2.1.1: *tshe thung*) が、両者に共通して、来たる最後の五百年の第一番目の特徴としてあげられている点である。

このような特徴を有する最後の五百年にあつてこそ、慈悲の残余 (*thugs rje'i las 'phro*) が在るようにと願われて、この長寿成就法『チャッキドンポ』はパドマサンバヴァその人によって埋蔵された。その目的は仏の教えが末長く、最後の五百年においても安住すること (§1.7.2: *yun du gnas par shog*) にあるのだから、この「慈悲の残余」は、埋蔵者パドマサンバヴァに限らず、この長寿成就法の相承に関わる諸仏が残されたものと解釈できよう。長寿成就法『チャッキドンポ』は、縁に恵まれた我が子 (*las can bu*) のために置かれる (*bzhag*)、即ち、埋蔵されるものであるが、その目的が仏法の末長い安住にある以上、最後の五百年を生きる衆生のために埋蔵されたものとも理解し得る。

<sup>646</sup> §1.7.1 に説示された 6 つの特徴と当該 §2.1.1 が説示する 5 つの特徴を下記表 (表19) に対照させてみたい。

表19: 来たる最後の五百年に関する 6 つの特徴 (§1.7.1) と 5 つの特徴 (§2.1.1) との対照表

No.	特徴	§1.7.1	§2.1.1
1.	短命	<i>tshe tshad thung</i>	<i>tshe thung</i>
2.	多病	<i>nad mang</i>	<i>nad mang</i>
3.	貧窮	<i>longs spyod chung zhing</i>	<i>longs spyod dbul</i>
4.	多災	<i>bar chad mang</i>	-
5.	勝義の不成立	<i>dam pa'i don yang mi 'grub</i>	<i>dam pa'i don yang mi 'grub</i>
6.	暗い見通し	<i>yid re chad</i>	<i>sdug bsngal 'khor lo rgyun ring dus</i>



§2.1.1 の冒頭に見在するダーキニーの符牒、或いはウッディヤーナ語を記した文字<sup>647</sup>は、これらの点を踏まえて蓋然性を考えると、埋蔵の趣意に関係するというよりは、内なる成就法の冒頭における言祝ぎを記したものと想定される。ここに開かれる内なる成就法によって、利益されるものが多いようにとの願いが込められたものであろう。

## §2.1.2

§2.1.2 には、長寿成就法『チャッキドンポ』の埋蔵場所と発掘者が記されている。その内容は、第0節 (§0.2.3) や第1節 (§1.3.2) の所説と重複するものであるが、その重要性により、当該第2節においてもこれを記すものであろう。『チャッキドンポ』が各節において自身の埋蔵場所や発掘者について言い及ぶのは、このテルマの出自を明確に、リクズイン・グウデムチェンの生涯に起きた出来事の一つに関連付ける意義もみとめられようが、或いは、厳密なことはいえないが、各節が単体で修習される可能性を示唆するものであるのかもしれない。

当該 §2.1.2 の終わりには、ダーキニーの符牒、或いはウッディヤーナ語を記した文字が付されている。<sup>648</sup> ここに記された文言も、おそらくパドマサンバヴァがこれを発するかたちで、五濁悪世 (*dus ngan snyigs ma lnga bdo*) の時にリクズイン・グウデムチェンが『チャッキドンポ』を発掘し、パドマサンバヴァ (或いは諸仏の) 悲心の懐にあるこの弟子 (*gdul bya*) が、究竟に至るように (*mthar phyin shog*) と願う内容かと想定される。

## §2.2. 発最勝菩提心

### §2.2.1

§2.2.1 には、内なる成就法「チャッキドンポ」を勤修するにあたっての第一の次第として、発最勝菩提心が、勤修する時刻と場所と共に説示されている。

勤修する時刻、更は、「曉闇朝一番」 (*tho rangs skya rengs dang po*) と規定されている。*skya rengs* は、先に §1.6.1 において「曉闇」という訳出を試みた *tho rangs/rengs* に類似し、*skya rengs dang po* は、この明け方の黎明を3分割した中の、最も早い時刻を指すものと考えられる。<sup>649</sup> 『蔵漢』に「曉闇、陽が射して空がうっすらと青色になりかける頃」と説明されているように、<sup>650</sup> *skya rengs dang po* は、「曉闇」 (*tho rangs/rengs*) をより詳しく規定したものか、或いはこれを強調したかたちであるのかもしれない。後の §2.8.1 に出る類例 *tho rangs snga dro dang po* も、この文脈で検討されよう。

勤修する場所は、心地よい坐具の上 (*bde ba'i stan*) と規定されている。

<sup>647</sup> Cf. Appendix B, no. 8 (A 521,1; B 255,1; C 203,1).

<sup>648</sup> Cf. Appendix B, no. 9 (A 521,4; B 255,3; 203,3).

<sup>649</sup> See 『蔵漢』 s.vv. *skya rengs* (p. 140): ‘*nam langsh khar shar phyogs kyi nam mkhar shar ba'i nyi 'od*’, *skya rengs gsum* (p. 140): ‘*skya rengs dang po dang/ bar ma/ tha ma'am/ skya rengs/ sngo rengs/ dmar rengs te gsum*'.

<sup>650</sup> See 『蔵漢』 s.v. *skya rengs dang po* (p. 140): ‘*tho rengs shar dus sam/ nam mkha' sngo skyar snang ba'i mdog 'char skabs*'.

## §2.3. 無量光仏 (三昧耶薩埵) の観想

### §2.3.1

先の §2.2.1 において最勝なる菩提に発心した後、勤修者は当該 §2.3.1 において、彼／彼女自身を無量光仏 (*'Od-dpag-med; Amitābha*) として立ち上げ、修習する。無量光仏を本尊とする我生起の本尊瑜伽にあたっては、いかなる装束を身に付け、どのような姿勢をし、何を手にしているのか、また、周囲はどのような様子であるか、といった点が信解の上で重要である。この点に関する当該箇所の説示は、後の §2.3.2 が無量光仏である勤修者自身の内面をその内容とするのに比し、勤修者自身の外面に関する説示だといえる。

勤修者はまず、空性そのもの (*stong pa'i ngang nyid*) から、鉄のように頑丈な (*lcags kyi*) 八重の花弁から成る蓮華台 (*padma 'dab brgyad gdan*) を生起する。<sup>651</sup> その蓮華台の上に勤修者である彼／彼女自身を赤色の御身を結跏趺坐 (*skyil krung*) にしていच्छる無量光仏 (*'od dpag med*) として観想する。ここで「鉄のように頑丈な」と訳出した *lcags kyi* は、文字どおりには「鉄の」に過ぎず、「頑丈な」は多分に主観的な付け足しに映るであろう。鉄よりも頑丈な物質に比べれば、*lcags* は決して頑丈とはいえないのであるし、鉄に冷徹さを想定すれば「鉄のように冷徹な」と訳しても不当とはいえない。しかし、『チャッキドンポ』においては、その名称が含む *lcags kyi* という用語に「鉄のように頑丈な」という語義が具わるものと想定されることは、第2.3.2章(チャッキドンポ: 鉄のように頑丈な命脈)において考察したとおりである。

『チャッキドンポ』中に *dam tshig sems dpa'ldam tshig sems* という用例は見在しないが、このように勤修者が修習、観想した本尊が三昧耶薩埵 (*dam tshig sems dpa'; samayasattva*) という仮の存在であることは、<sup>652</sup> 後に §2.4.1 において、極楽世界から智慧薩埵 (§2.4.1: *ye shes sems*) を勧請し、これと一体化させるという智尊召入の次第が説かれることを考慮すれば、三昧耶薩埵に対応するものといってよいであろう。

この三昧耶尊は、その外面において、次のような3つの特徴をもって観想される。(1.) 化身の装飾具 (*sprul sku'i cha byad dar chos*) を御身に纏い (*mnabs*)、(2.) 御両手は禪定印を結んで (*mnyam bzhas*) 寿命を司る壺 (*tshe bum*) を擁し (*'dzin*)、(3.) 御身の肢体はいずれも剛健である (*hrag pa'i tshad*)。勤修者が我生起した無量光仏は、五色の耀かしく透明な光背 (*dwangs ma 'od lnga'i rgyab yol*) を有しており、その左右両肩 (*phrag pa*) の上方には太陽と月が出現している (*'char*)。以上の特徴は、DAGYAB 1991 に 'Tshe-dpag-med/ Tshe-

<sup>651</sup> Cf. *bsLab pa lnga'i phan yon gyi mdo*, D276b2; P292a4:

*de'i phyir bcom ldan 'das kyis bka' stsal pa/  
tsha zhing rtsub pa'i chu bo ni//  
rab med shin tu bgrod par dka'//  
lcags kyi pad ma'i 'dab ma rnam//  
'dab ma rno ba'i steng du 'gre//  
chu bo rab med gzhi med par//  
chos min ji ltar spyod par 'gyur//  
gang zhig chang 'thung ba de ni sdig pa chung ba ma yin no//*

<sup>652</sup> Cf. DILGOKHYENTSE/PALMO 1992:72: 'Why is it called the samayasattva? For instance, if one's teacher is in front of one, and one makes the vow to accomplish such-and-such a virtuous action or do such-and-such a practice, one should not break that promise [or, samaya]'.

sgrub lCags-zam-lugs' (p. 89) として収録された図像に見事に再現されているので、付録7に転載、提出した。

## §2.3.2

§2.3.2には、無量光仏と不二一体となった勤修者の内面について、これをいかに観想するかが説示されている。その内面は、次のような3つの特徴をもってありありと観想される(*bsam*)。(1.) 習気である汚染の実体(*gdos bcas*)は深奥部から(*khong pa'i nang nas*)すっかり清除され、(2.) 不死なる寿命の甘露(*'chi med tshe yi bdud rtsi*)で満たされて、(3.) 赤漆色をしている(*rā ga dmar po'i mdog can*)<sup>653</sup>。このような内面の清浄性は、第1節外なる成就法「貴重な壺」の前行において清められた (§1.4.2: *sbyang*) 勤修者の心身と無関係ではあるまい。より積極的にいえば、外なる成就法を前提とし、これを発展、深化させたかたちで、第2節内なる成就法「チャッキドンポ」は実践されるものと考えられる。

次にありありと観想されるのは、勤修者と不二一体となった無量光仏の、頭頂(*spyi bo'i gtsug*)から秘所(*gsang gnas*)までを貫く竹筒(*snyug dong*)<sup>654</sup>程に空洞ながら、鉄のように頑丈な命脈(*lcags kyi srog rtsa*)である。勤修者はこれを建立された柱(*ka ba btsugs pa*)のように、ありありと観想する。*srog rtsa*は、‘ヒンドウの密教的神経叢論’(DASGUPTA 1958:118: ‘the Hindu Tāntric nerve system’)を参照すると、前後の文脈から判断して、アヴァドゥーティー脈管(*avadhūtī*)を指すものと想定される。<sup>655</sup>ここで *lcags kyi* という用語によって修飾された *srog rtsa* は、従って、字義どおりに「命脈」と訳してよい

<sup>653</sup> See APTE, s.v. *rāgaḥ* (p. 798): ‘Red dye, red lac[quer]’, MW, s.v. *rāga, m.* (p. 872): ‘(esp.) red colour, redness’.

<sup>654</sup> *snyug dong* には、異読 (CD\_A: *smyug gdong*) が見在する。これは、*snyug* と *smyug* との間の、また、*dong* と *sdong* との間の混同に起因するものであろう。当該箇所においては、暫定的に *snyug dong* (CD\_B, CD\_C) という語形を選択し、これを「竹筒」と訳出した。

See 『蔵漢』 s.v. *snyu gu* (p. 1009): ‘(*rnying*) *yi ge 'bri byed*’, Jäschke, s.v. *snyug ma* (p. 199): ‘more frq. *smyug ma*, reed, rush, bulrush’, s.v. *snyug shing* (p. 199): ‘bamboo’.

See 『蔵漢』 s.v. *smyu gu* (p. 2177): ‘*yi ge 'bri byed*’.

See 『蔵漢』 s.v. *dong* (p. 1298): ‘*sa'i khung bu*’; s.v. *smyug sdong* (p. 2177): ‘*smyug ma'i sdong po*’, Jäschke, s.v. *dong* (p. 258): ‘a deep hole, pit, ditch’, ‘depth, deepness, profundity’.

<sup>655</sup> DASGUPTA 1958:153–158 ‘On the whole it seems that most of the Mantras and Dhāraṇīs are composed of a string of syllables which have lost their etymological meaning or which had never an etymological meaning’ (as translated into Japanese MIYASAKA&KUWAMURA (宮坂/桑村) 1981:146–150).

For *avadhūtī*, see BHS GD, s.v. *avadhūtī* (p. 72): ‘an artery, vein, or canal (*nāḍī*) in the body’, 『蔵漢』 s.v. *a wa dhū ti* (p. 3126): ‘(*legs*) *rtsa dbu ma/ lus rtsa'i gtso gsum gyi ya gyal zhig*’, Jäschke, s.v. *gtum po* (p. 208): ‘*caṇḍa* (hot) in the more developed mysticism the power which meditating saints by dint of long continued practice may acquire of holding back their breath for a great length of time, by which means the air is supposed to be drawn from the *ro ma* and *rkyang ma* (two veins, v. [i.e. see] *rtsa ba*) into the *dbu ma* (*sróg-rtsa*, *dhú-ti*, aorta? [sic]) thus causing a feeling of uncommon warmth, comfort, and lightness inside, and finally even emancipating the body from the laws of gravity, so as to lift it up and hold it freely suspended in the air’.

であろう。<sup>656</sup> この脈管は四輪三脈の一角を担い、体内を走る3本の脈管の中では、その中央に位置することが知られる。<sup>657</sup>

勤修者の身体の要所に建立された (*btsugs pa*) 鉄のように頑丈な命脈 (*lcags kyi srog rtsa*) の「内側」は、空洞 (*stong pa*) で、耀かしく澄み切った光明だけが五色の煌々とした光線として眩しく輝いている。この五色 (*kha dog lngar*) というのは、後に言及される「ダーラニーの種子」 (*sngags kyi 'bru*) から類推すれば、五仏 (§1.2.2) に対応する5つの色調を意図するものと考えられるが、五仏に照応する具体的な色彩名は不明である。

これら五色の煌々とした光線に対応するのは、鉄のように頑丈な命脈の「外側」に観想される、ダーラニーの種子 (*sngags kyi 'bru*) である。前述したように、これは五仏のダーラニーが含有するところの5つの種子 (*'bru*) と推測されるから、具体的には、*hūm*, *trāḥ*, *hrī*, *hūm*, *om* という5つの種子が、法螺貝色をした露 (*dung mdog zil pa*) のように、勤修者の身体の要所に建立された、鉄のように頑丈な命脈の外側にある様子がありありと観想されるのであろう。

## §2.4. 極楽世界より智慧薩埵を勧請する

### §2.4.1

先の §2.3 において、無量光仏を三昧耶尊として我生起した後、勤修者は当該 §2.4.1 において、極楽世界 (*bde ba can*) より智慧薩埵 (*ye shes sems dpa'*; *jñānasattva*) を勧請し、三昧耶尊と一体化させる智尊召入を行じる。

この二段階の合一、即ち——(1.) まず仮の尊格である三昧耶薩埵を勤修者自身と不二一体のものとして生起、観想し、(2.) その後に真の尊格である智慧薩埵を勧請して、これと合体する——というプロセスを履む観想法は、様々な角度から論じられようが、『チャッキドンポ』においては、その発掘の経緯に関わる四種近成就 (*bsnyen sgrub rnam pa bzhi*)、或いは、四支成就法 (*\*catvārisevāsādhanaṅga*; *bsnyen sgrub yan lag bzhi*) を内容の上から分析して、相互の関係や系統を究明すべきであらう。

当該 §2.4.1 において、極楽世界 (*bde ba can*; *sukhāvātī*) より勧請した (*spyan drangs*) 智慧薩埵は、勤修者自身、即ち、三昧耶薩埵 (無量光仏) とよく似た (*rang 'dra*) 姿で、空中に (*mkha' la*) 観想される。勤修者が彼／彼女自身を無量光仏としていかに観想するかは、その外面の特徴 (e.g. 化身の装飾具を身に纏っている) は §2.3.1 に、その内面の特徴 (e.g. 不死なる寿命の甘露で満たされている) は §2.3.2 に、それぞれ説示されていた。智慧

<sup>656</sup> See 『蔵漢』 s.v. *srog rtsa* (p. 2989): '*srog khams kyi rten du gyur pa'i rtsa* [...] '*khor ba'i rtsa thams cad kyi rtsa bar gyur cing srog 'dzin byed kyi rtsa*', Jäschke, s.v. *srog* (pp. 584–585): '*srog rtsa* 'root of life, vein of life', 'aorta', *MVy*, no. 3991: *sīrārtsa*.

See MILLARD 2007:266: 'the 'life channel' (*srog rtsa*) situated at the heart centre, is the location of the most important of the five winds in connection with Tibetan psychiatry, the 'life holding wind' (*srog 'dzin rlung*'); KVAERNE 2005:187: 'the central "psychic-nerve (*nāḍī*)"'.

<sup>657</sup> See TSUDA (津田) 1973. See also DHARMACHAKRA 2006:172: 'The central channel is the main energetic channel in the body, running vertically through its center. Its upper end is located at the cranial aperture on the crown of the head, while its lower end is found in the secret place (the perineum)'.

薩埵は、従って、これらの無量光仏の特徴をもって、同調するように観想されるものであろう。

智慧薩埵が観想される *mkha'* (空中) は、智慧薩埵が擁する壺の中から、寿命の滋養 (*tshe bcud*) が溢れ出て (*lud*)、勤修者 (三昧耶薩埵) 自身の頭頂ブラフマ孔 (*tshangs bug; brahmarandhra*) の中に滴り落ちると説示されるのであるから、勤修者の頭頂ブラフマ孔の上部、即ち、勤修者の上空ということになろう。このプロセスにより、勤修者 (三昧耶薩埵) は、灌頂を授ける本尊 (*dbang bskur lha*)、即ち、智慧薩埵と、不可分となるものである (*dbyer med gyur*)。

智慧薩埵が擁する壺 (*bum pa*) は、寿命の滋養を湛えるものであるのだから、ここでは「寿命を司る壺」 (§2.3.1: *tshe bum=tshe 'i bum pa*) と見做してよいであろう。「寿命を司る壺」は、無量光仏がその御両手に擁して観想されることは、§2.3.1 に説示されている。続く2つの偈文 *lha dang srog rtsa'i bdud rtsi las: 'od 'phros gsal 'tsher mdangs dang ldan:* は、省略が少なくなく、読解が難しい。*lha* は本尊、即ち、灌頂を授ける本尊 (*dbang bskur lha*) である智慧薩埵を、*srog rtsa* は、勤修者 (三昧耶薩埵) の身体の要所に建立された命脈を、それぞれ指すものとすれば、前者の *bdud rtsi* は、勤修者の上空、寿命を司る壺の中から溢れ出て、勤修者の頭頂ブラフマ孔の中に滴り落ちる「寿命の滋養」 (*tshe bcud*) を、後者の *bdud rtsi* は、勤修者の内面を満たす「不死なる寿命の甘露」 (§2.3.2: *'chi med tshe yi bdud rtsi*) だと理解できよう。これら2つの甘露 (*bdud rtsi*) から、光が発散し (*'od 'phros*)、勤修者は鮮烈な光輝 (*gsal 'tsher mdangs*) で充溢するものと説示されるのだから、両甘露は光源として勤修者に体験されるものである。

以上のように当該 §2.4.1 の所論を考察してみると、そこに、鉄のように頑丈な命脈 (§2.3.2: *lcags kyi srog rtsa*) が、大きく機能していることがわかる。智慧薩埵が擁する、寿命を司る壺の中から溢れ出て、三昧耶薩埵 (勤修者) の頭頂ブラフマ孔の中に滴り落ちた「寿命の滋養」は、その身体の要所に建立された命脈において発光するものであり、これに応じるようにして、既に勤修者の内面を満たしていた「不死なる寿命の甘露」も、そこで、即ち、鉄のように頑丈な命脈 (§2.3.2: *lcags kyi srog rtsa*) において、発光するものと考えられるからである。この点は、長寿成就法『チャッキドンポ』及び、内なる成就法「チャッキドンポ」という名称を考察するにあたり、重要な視座となる。

以上、§2.4.1 が説示する一連のプロセスにおいて問題となるのは、極楽世界より招請される智慧薩埵の尊格についてである。ここで誇張されて然るべきは、智慧薩埵が「灌頂を授ける本尊」 (*dbang bskur lha*) と表現されている点であろう。帰敬文 (§§0.1.1, 1.1.1) に奉唱されるように、長寿成就法『チャッキドンポ』は無量寿仏 (*Tshe-dpag-med; Amitāyus*) を主尊とし、その相承に関してもパドマサンバヴァがこれを無量寿仏から授かったことは明確であるが、§2.4.1 に言及される「本尊」 (*lha*) 或いは「灌頂を授ける本尊」 (*dbang bskur lha*) をこれと同等に扱い、俄かに智慧薩埵を無量寿仏と同定すれば、疑問が残る。§2.3 までの説示内容を通覧して知られることは、智慧薩埵は、三昧耶薩埵 (無量光仏) と同調するように、即ち、「よく似た」 (*rang 'dra*) 姿で観想される存在であるから、その外面の特徴にしても、その内面の特徴にしても、両者を切り分けて扱うことはできない、ということである。

無量光仏と無量寿仏との間の相違異同は、種々様々に論じられてきた。長寿成就法『チャッキドンポ』におけるそれは、無量光仏を三昧耶薩埵に、無量寿仏を智慧薩埵に、

それぞれあてる構図が考えられるが、その特質上、両者は勤修者の観想中に不可分となり、一体となる、ということがあげられるであろう。

## §2.4.2

§2.4.2 に言及されるダーラニー (*sngags*) が、〈無量寿宗要経〉中に説示されるダーラニーに比定し得ることは、第2.9章 (〈無量寿宗要経〉に比定されるダーラニー) において考察を試みた。

当該ダーラニーは、曉闇 (*tho rangs*)、数百回繰り返し唱えるもの (*bzla*) とされる。『チャッキドンポ』においては、§2.3 までの説示内容を通覧して知られるように、食事等の禁忌に比し、これを勤修する時刻が厳密に規定されている。当該 §2.4.2 に規定される「曉闇」(*tho rangs*) は、発最勝菩提心の次第が勤修される時刻「曉闇朝一番」 (§2.2.1: *tho rangs skya rens dang po*) と大枠でみて同じであろうが、これが説示された §2.2.1 からの時間的経過、一連のプロセスの進捗を考慮すれば、「朝一番」(*skya rens dang po*) よりはやや遅い時刻となろう。このように、§2.4.2 を第2節内なる成就法「チャッキドンポ」の中に改めて位置付けてみると、当該ダーラニーを数百回繰り返し唱える次第は、勤修者が既に智慧薩埵と合一、不可分 (*dbyer med*) となった後ということになる。この点は、注意に値するであろう。

## §2.5. 鉄鉤形の光線が二世間を遍満する

### §2.5.1

§2.5 には、§2.4.2 において唱えたダーラニーの所産であるダーラニーの光線 (*sngags kyi 'od zer*) が、二世間を遍満する広観の次第が説かれる。ダーラニーは、この語義を細説した DAVIDSON 2009 の表現を以てすれば「マントラの音力の媒体として」(‘as the vehicle for the sonic power of mantras’, p. 117)<sup>658</sup> 機能するものであり、器世間と衆生世間 (*snod bcud*) を遍満する広観の次第に、この光線ほど相応しいものはない。

このダーラニーは、§2.4.2 においては、数百回繰り返し「唱える」 (§2.4.2: *bzla*) ものであったが、当該の §2.5.1 においては、これに思いを込める (§2.5.1: *ting 'dzin*) 禪定の次第となっている。この点は、後の §2.7.2 にも「ダーラニーと禪定 [の力] が増強していく」 (§2.7.2: *sngags dang ting 'dzin rgyas par bya*) と、(1.) ダーラニーを唱えること、そして、(2.) これに一心に思いを込めること、との両者が強調されている (§2.7.2 では、実際には、「清浄な布を巻きつけ、如意枝で飾る」という財物 (*rdzas*; Skt. *dravya*) を含めた三者が強調されている。この点は §2.7.2 において考察する)。これは、構成的に言えば、ダーラニーを奉唱すること、そして、これに一心に思いを込めること、という2つの要素が共同して、加持力 (*byin gyis brlabs pa*) を惹起するということである。<sup>659</sup> ここでいうダーラ

<sup>658</sup> DAVIDSON 2009:117–118: ‘*Dhāraṇīs* [sic] must be capable of functioning as the vehicle for the sonic power of mantras, whether these are for worldly purposes, as in the case of protection or other goals, or for soteriological purposes’.

<sup>659</sup> ダーラニーを奉唱すること、そして、これに一心に思いを込めること、という2つの要素が共同して加持力を惹起するという見解は、14世紀チベットの密教行者の間にも極自然に看取される。例えば、タントンギャルポの伝記『すべてを明らかにする宝鏡』に記録された、彼が自在天とその明妃 (*dbang phyug bza' mi*) に宛

ニーの光線 (*sngags kyi 'od zer*) は、従って、奉唱することと一心に思いを込めること、という両者によって加持された所産だと理解できよう。

このダーラニーの光線は、器世間と衆生世間 (*snod bcud*) を遍満し、諸仏諸菩薩の慈悲深い守護 (*thugs rje'i byin brlab*) と効験 (*siddhi*) を鉄鉤 (*lcags kyu*) の如く掻き集める (*bsdus*) ものとされる。*lcags kyu* (鉄鉤) のサンスクリット語の対応語として知られる *aṅkuśa* は、<sup>660</sup> 仏教文献においては、先にみた (§1.5.4) 四摂智菩薩の鉤の種子 *jaḥ* に象徴されるように、衆生や仏菩薩を召集する働き (*vaclañc*) によって知られる。<sup>661</sup> 当該 §2.5.1. が使用する「鉄鉤の如く」(*lcags kyu lta bus*) もこの通説で、即ち、ダーラニーの光線が、器世間と衆生世間を余す所なく波及して、諸仏諸菩薩の慈悲深い守護と効験を鉄鉤の如く掻き集めるものと理解してよいであろう。鉄鉤の如き光線は、また、十方の守護神 (*phyogs skyong*)<sup>662</sup>、ダーキニー (*mkha' 'gro*)、八部衆 (*sde brgyad*)<sup>663</sup> の昂然な (*gzi mdangs*)<sup>664</sup> 聖通 (*rdzu 'phrul*)<sup>665</sup> である寿命と生命 (*tshe srog*) を収奪する (*'phrog*) ものと説かれる。「鉄鉤の如きダーラニーの光線が寿命と生命を収奪する」という所説には、確かに、長寿成就法と明瞭に結びつく思想が指摘され得よう。

この鉄鉤 (*lcags kyu*) は、寿命と生命 (*tshe srog*) を召喚する光線 (*'od zer*) の譬喩として、タントンギャルポに帰される『チメーパルテル』の中にも言及されている。

'*Chi med dpal ster*, CP\_A 460,7<sup>666</sup>

てた手紙が、これを支持するものとしてあげられよう。

*Kun gsal nor bu'i me long*, K\_A 158b4; K\_B 305,3; K\_C 303,13: *kun rdzob 'khrul snang yod pa de srid du las rgyu 'bras bden pas/ sbrum ma brgya'i sha khrag gi tshab la/ sngags dang ting nge 'dzin gyi byin gyis brlabs pa'i glud gzugs grangs tshang ster ba yod/* (「世俗に関わる限り、誤った顕現はある。行いの因果ははっきりしている。だから [あなたには] 100人の妊婦の血肉の代わりに、ダーラニー [を奉唱し、そして、これに] 一心に思いを込めて加持した身代わりの人形 (*glud gzugs*) を見合った数だけ与えよう」)

As translated into English in STEARNS 2007:398.

<sup>660</sup> See Mvy, no. 4981: *aṅkuśagrahaḥ/ lcags kyi skyur thabs/ lcag skyus bskyur thabs*; DAS, s.v. *kyu* (p. 39): 'aṅkuśa, a hook'; LCHANDRA, s.v. *kyu* (p. 59): 'aṅkuśa'; LCHANDRA, s.v. *kyu* (p. 48): 'lcags ~'.

Cf. Mvy, nos. 4284: *vajrāṅkuśīrdo rje lcags kyu ma*; 6807: *baḍīsam (baḍīśah)lmchil ba*.

<sup>661</sup> See 『仏教語大辞典』 s.v. 鉤 (p. 398): 'S. aṅkuśa'.

Cf. BHSGD s.v. *aṅkuśagraha* (p. 5): '(in Pali aṅkusaggaha is one who practices the art, and so Skt. °śagraha, a rare word; the art in Pali is aṅkusagayha), the art of handling an (elephant-) good: Mvy 4981'.

語意的にみて、「鉤」を意味する *aṅkuśa* は、必ずしも鉄製を含意しない (see MAYRHOFER, s.v. *aṅkuśa* (Bd. 1, p. 47): 's. AÑC¹', APTE, s.v. *aṅkuśa* (p. 16): 'A hook, a goad')。「金剛鉤」(*vajra-aṅkuśī*) の図像は、NAGANO/TACHIKAWA 1989:217 に提出されている。

<sup>662</sup> See 『蔵漢』 s.v. *phyogs skyong* (p. 1762): '*brgya byin sogs phyogs bcu srung ba'i lha bcu*'.

<sup>663</sup> See 『蔵漢』 s.v. *sde brgyad* (pp. 1472-1473): *lha/ klu/ gnod sbyin/ dri za/ lha ma yin/ nam mkha' lding/ mi'am ci/ lto 'phye chen po bcas brgyad do*.

<sup>664</sup> See 『蔵漢』 s.v. *gzi mdangs* (p. 2494): (1) *lus kyi bkrag mdangs/ [...]* (2) *nyi zla sogs kyi 'od zer/ [...]* (3) *sangs rgyas shig gi mtshan/*

<sup>665</sup> See 『蔵漢』 s.v. *rdzu 'phrul* (p. 2357): *khyad gzhi sems kyi 'phen pa'i lus chos ni rdzu ba dang/ khyad chos lus kyi spyod pa sems chos ni 'phrul ba/*

寿命の召喚についてのあらまし [は次のとおり。]

[1.] [勤修者] 自身を本尊として観想する。

[2.] [勤修者の] 頭頂に [頂いた] 諸尊のお胸から、鉄鉤の如き光線が [発せられる]。

[3.] [鉄鉤の如き光線は] 寿命を召喚する女神 [である。彼女は、]

五大 ([a.] 地, [b.] 水, [c.] 火, [d.] 風, [e.] 空) を支配し、

[a.] 白色, [b.] 黄色, [c.] 赤色, [d.] 緑色, [e.] 青色という色をして、

[a.] 矢, [b.] 鉄鉤, [c.] 輪繩, [d.] 足枷, [e.] 鈴 を持ち、

大小の定めなく太陽光線中の塵の如くうごめくので、[鉄鉤の如き光線は] 虚空が続く限りの器 [世間と] 衆生 [世間] である自然界に蔓衍し、[寿命を召喚する]。

寿命の召喚についてのあらまし (*dmigs pa*) には、鉄鉤の如き光線 (*'od zer lcags kyu lta bu*) の本質が、寿命を召喚する女神 (*tshe 'gugs kyi lha mo*) であると説かれている。勤修者の頭頂に頂いた諸尊 (*bla ma rnams*) のお胸から発せられたこの女神は、五大 (地/水/火/風/空) を支配し、五色 (白色/黄色/赤色/緑色/青色) を帯び、5つの用具 (矢 (*mda'*)/鉄鉤 (*lcags kyu*)/輪繩 (*zhags pa*)/足枷 (*lcags sgrog*)/鈴 (*dril bu*)) を手にしているのだから、或いは、五仏や五色の光に対応する5人の女神たちであるのかもしれない。しかし、光の本質である彼女が単数であるのか複数であるのかは、問われないものと見るのが自然であろう。彼女/彼女たちが手にする5つの用具は、矢 (*mda'*) を除くその内の4つが、四摂の効能である鉤 (*lcags kyu*)/索 (*zhags pa*)/鏢 (*lcags sgrog*)/鈴 (*dril bu*) をその内容としている。長寿成就法『チャッキドンポ』には見られない所説で、『チメーパルテル』が鉄鉤の如き光線を5つに分類整理して明示するにあたり、おそらくは *lcags kyu* という用語を引き合いにして、四摂の効能をあげたものであろう。彼女/彼女たちは、鉄鉤の如き光線であるから、大小の定めなく太陽光線中の塵 (*nyi zer gyi rdul*) の如くうごめくので (*spros pas*)、虚空が続く限りの (*nam mkhas gar khyab kyi*) 器世間と衆生世間である自然界 (*'byung khams*) に蔓衍し (*khyab*)、鉤/索/鏢/鈴をもって寿命を召喚するものとされる。

『チメーパルテル』には、寿命と生命 (*tshe srog*) を収奪する光線 (*'od zer*) を、ダーラニー (*rdzas sngags*) を奉唱し、かつまた、これに一心に思いを込めるという精勤加行と関連付けて説示する箇所も見在する。そこでは、しかし、鉄鉤 (*lcags kyu*) ではなく、これに類似した磁石 (*rdo khab len*) が、寿命と生命を掻き集める用具の譬喩として用いられている。

*'Chi med dpal ster*, CP\_B 192,1<sup>667</sup>

<sup>666</sup> *'Chi med dpal ster*, CP\_A 460,7: *tshe 'gugs kyi dmigs pa/ rang lhar gsal ba dang spyi bo'i bla ma rnams kyi thugs ka nas 'od zer lcags kyu lta bu dang/ 'byung ba lnga la dbang bsgyur ba'i tshe 'gugs kyi lha mo dkar/ ser/ dmar/ ljang/ mthing ba'i mdog can mda' dang/ lcags kyu/ zhags pa/ lcags sgrog dril bu thogs pa che chung ma nges pa nyi zer gyi rdul ltar spros pas nam mkhas gar khyab kyi snod bcud 'byung khams la khyab/*

<sup>667</sup> *'Chi med dpal ster*, CP\_B 192,1: *ban bon mthu bo che rnams kyis rdzas sngags ting nge 'dzin gyi sbyor ba la brten nas tshe srog phrog pa la sogs pa rnams/ 'od zer des rdo khab len gyis lcags phye bsdu pa ltar 'ub kyis bsdu.*



功験灼かな仏教徒とボン教徒たちは、[1.]財物、[2.]ダーラニー、[3.]禪定を結集することにより、[人々の]寿命と生命の収奪等々を[行う]。その(ダーラニーの)光線が一気に[人々の寿命と生命を]を掻き集める[仕方は]、まるで磁石が鉄粉を掻き集めるようである。

『チメーパルテル』の当該箇所には、功験灼かな仏教徒とボン教徒たち (*ban bon mthu bo che rnams*) が、[1.]財物 (*rdzas*)、[2.]ダーラニー (*sngags*)、そして、[3.]禪定 (*ting nge 'dzin*) という三者——この三者は、『チャッキドンポ』においては「3つの精髓」 (§2.7.4: *gong gi snying po gsum*) に対応するものと考えられる——を結集、加行することにより、人々の寿命と生命の収奪 (*tshe srog 'phrogs pa*) 等々を行う様子が描写されている。ニンマ派とボン教の行者たちがその儀軌において多くを共有していることは、STEIN 1972, CECH 1993 をはじめとする諸論考が既に明らかにしており、<sup>668</sup> テルマの扱いに関しても両派が「相互に受粉する」 ('cross-pollination', GYATSO 1996:162n3) 間柄にあったことは、BLONDEAU の一連の論考、及び SAMUEL 1993, GYATSO 1996 が考察しているとおりである。<sup>669</sup> 長寿成就法に関していえば、しかしながら、仏教とボン教との間の比較研究は今後の課題といわなければならない。当該『チメーパルテル』の所説は、これを具体的に言及する箇所として参照されることになろう。

功験灼かな仏教とボン教の僧侶たちが、財物、ダーラニー、そして、禪定という三者を結集、加行することによって生じるダーラニーの光線 (*'od zer*) が、一気に (*'ub kyis*) 人々の寿命と生命を掻き集める (*bsdus*)、即ち、収奪する (*'phrogs pa*) 仕方は、まるで (*rdo khab len*)<sup>670</sup> が鉄粉 (*lcags phye*)<sup>671</sup> を掻き集める (*bsdus*) ようだと説示されている。ここにおいて注目されるべきは、鉄鉤 (*lcags kyu*) と磁石 (*rdo khab len*) / 鉄粉 (*lcags phye*) という譬喩の相違ではなく、鉄 (*lcags*) の有する「釣り込む力」、即ち、磁力であろう。ここには、「鉄のように頑丈な命脈」 (§2.3.2: *lcags kyi srog rtsa*) に看取される鉄の「頑丈さ」ではなく、その「磁力」が、ダーラニーの光線の譬喩となっている。

## §2.5.2

§2.5.1 に引き続き、当該 §2.5.2 にも、ダーラニー奉唱の所産である鉄鉤の如き光線が、器世間と衆生世間を遍満し、寿命と生命を利益するものを掻き集める様子が説示されている。

<sup>668</sup> See STEIN 1962:204–210 (Le Bon assimilé. For a Japanese translation, see STEIN 1993:295–305), CECH 1993:43: 'The structure of the religious pantheon is the same and the iconographic portrayal of the deities very similar'.

<sup>669</sup> See BLONDEAU 1971, BLONDEAU 1985, BLONDEAU 1987, BLONDEAU 1988. See SAMUEL 1993:322: 'by the discovery of large numbers of *gter-ma* texts which provided a mechanism for the gradual transformation and reshaping of the Bon religion', GYATSO 1996:148: 'these two groups had much overlap in their Treasure activity'.

<sup>670</sup> See 『蔵漢』 s.v. *rdo khab len* (p. 1437): '*lcags len gyi rdo khyad par ba zhig*'.

<sup>671</sup> See 『蔵漢』 s.v. *lcags phye* (p. 762): '*lcags kyi phye ma*'.

鉄鉤の如き光線が遍満する器世間 (*snod kyi 'jig rten*; Skt. *bhājanaloka*) としては、須弥山 (*ri rab*), 四大洲 (*gling bzhi*), 八中洲 (*gling phran*), 七金山 (*gser gyi ri bdun*), 七海 (*rol mtsho*), 贍部樹 (*rtsi shing nags tshal*; \**jambuvṛkṣa*)<sup>672</sup> があげられている。仏教のアビダルマ教学に見出し得るこれらの在所は、例えば『俱舍論』の世間品に典拠を求めることができよう (III. vv. 45–58)。鉄鉤の如き光線はこれら器世間を遍満し、そこにある宝の集塊である (*ratna'i tshogs*), 即ち、五大の精分 (*'byung ba lnga yi dwangs ma*) を掻き集めるものとされる。この「五大」は、おそらく器世間を構成する「地／水／火／風／空」という5つの要素を意図するものと想定されるが、他の可能性として、第1節外なる成就法「貴重な壺」において用例の見られる「5つの精分」 (§1.2.1: *dwangs ma lnga*), 即ち——(1.) 土類, (2.) 岩石／鉱物類, (3.) 液体凝固類, (4.) 樹木類, (5.) 花類——も検討されるべきであるかもしれない。「5つの精分」は、9つの滋養物より成る甘露を調合するために必要な精分である。

鉄鉤の如き光線が遍満する有情世間 (*sems can gyi 'jig rten*; Skt. *sattvaloka*) としては、天 (*lha*), 龍 (*klu*), 及び、人 (*mi*) があげられており、『俱舍論』世間品において天と人の寿量は善趣の、龍の寿量は悪趣の項目に、それぞれ参照し得る (III. vv. 77–83)。鉄鉤の如き光線はこうした有情世間を遍満し、彼らのあらゆる福運 (*dbang thang*), 福德 (*bsod nams*), 成就 (*dngos grub*) を掻き集める (*bsdus*) ものとされ、畜生, 餓鬼, 地獄の寿量に関わることはない。

§2.5.2 には、このように、勤修者の寿命と生命を利益するものとして「器世間」からは宝の集塊が、「有情世間」からは福運, 福德, 成就が、それぞれ鉄鉤の如き光線が掻き集めるものとして説示されている。ダーラニー奉唱の所産である、このダーラニーの光線が掻き集め得るものは、事ほど左様に無辺際である。二世間を余す所なく、まさしく遍満する様子が讃えられ、ここに生起次第の途轍も無い膨大さが知られる。

### §2.5.3

§2.5.3 では、ダーラニー奉唱の所産であるダーラニーの光線が二世間を遍満して鉄鉤の如く掻き集めた寿命と生命が、勤修者の上に雨のように降り注ぎ、彼／彼女の中に収斂する斂観の次第が説かれる。この光線が不死なる甘露であること (*bdud rtsi'i 'od zer*) が、当該 §2.5.3 において明示されている。ダーラニーを唱えた結果生ずる鉄鉤の如き光線は、§§2.5.1–2.5.2 において説示されたとおり、既に二世間を遍満して「慈悲深い守護と効験 (*siddhi*)」や「昂然な聖通である寿命と生命」を掻き集めた後であるから、この光線は不死性を帯びている。この不死なる甘露の光線が勤修者の上に雨のように降り注ぐ (*char ltar babs*) ことで、これが二世間を遍満して掻き集めたあらゆるものを残らずすべて (*thams cad ma lus*) 彼／彼女の中に収斂させる (*bstim*) ことが叶うと観想されるのである。

三昧耶薩埵である無量光仏は、既に §2.3.2 において、習気である汚染の実体が深奥部からすっかり清除され、不死なる寿命の甘露で満たされた (§2.3.2: *'chi med tshe yi bdud rtsis gang*) 様子がありありと観想されているのであるから、ダーラニーを唱えた結果生ずる鉄鉤の如き光線は、これを増加するかたちで、雨のように勤修者の上に降り注ぐものであろう。勤修者はここにおいて、あらためて、彼／彼女自身の身体が、甘露で遍満してい

<sup>672</sup> YAMAGUCHI/FUNABASHI (山口/舟橋) 1955:380: '贍部樹 (*jambu-vṛkṣa*)'.

の様子をありありと観想することになる (§2.5.3: *bdag lus bdud rtsis gang bar bsam*)。この観想においては、勤修者の身体が二世間のあらゆるものを残らずすべて収斂させた、不死なる甘露の光線 (*bdud rtsi'i 'od zer*) より成る一塊の光でありながら (*od kyi gong bur*)、煌々とした空 (*stong gsal*) である、と思索を深めてゆく (*bsgom*) 点が注意される。

## §2.6. 請願

### §2.6.1

勤修者は §2.5.3 において自身の身体を不死なる甘露の光線より成る一塊の光であり、かつまた、煌々とした空でもある、と思索を深めていった。その後、彼／彼女は、当該 §2.6.1 において、請願文 (*smon lam*) を念誦する (*brjod*)。請願の内容としてここに 2つに分けられた「寿命の成就」(*tshe yi dngos grub*) は、何も当該長寿成就法の目途を確認する上で重要な視座を提供するものである。

第一番目の請願文では、「寿命に関する不変な成就」(*mi 'gyur tshe yi dngos grub*) を授かるよう請願する。これは、不二なる生死 (*skye shi gnyis med*) に関するもので、生と死が不二であることを窮めて生死輪廻を解脱し、大楽のまま (*bde ba chen po'i ngang*)<sup>673</sup> 極楽世界 (*bde ba can*) へ往生することを請願するものであろう。こうした理解は、当該の請願文が、寿命に関わる「不変な」(*mi 'gyur*) 成就を授ける (*stsol*) よう請願する内容であることから、自然といえる。

第二番目の請願文では、「寿命に関する普遍的な成就」(*thun mong tshe yi dngos grub*) を授かるよう請願する。これは、身体 (*sku*) に関するもので、これが良好な状態にある五大の集積 (*'byung ba lnga 'dus*) であるように、かつまた、優れて (*gsal 'tsher*)、堅固で (*brtan pa'i*) あるように請願するものであろう。この身体は、既に、灌頂を授ける本尊 (智慧薩埵) と不可分となった (§2.4.1: *dbang bskur lha dang dbyer med gyur*) 身体であり、単なる異熟の肉体ではない。

以上 2つの「寿命の成就」に関わる成就、即ち、「不変な成就」と「普遍的な成就」は、何も当該長寿成就法の目途を確認する上で重要な視座を提供するものであるが、当該 §2.6.1 に見られる両請願文の順序が諷示するように、第一には「不変な成就」が請願される。このことについては、成就の二分類 (*dngos grub gnyis*)<sup>674</sup> として知られる「至高の成

<sup>673</sup> See 『藏漢』 s.v. *ngang* (p. 643): '[1.] (1) *rgyud dam gshis ka/ [...]* (2) *rang bzhin nam tshull/ [...]* (3) *rang shugs sam 'bad med lhun grub/ [2.]* (1) *da lta ba ston pa'i sgra*'.

<sup>674</sup> See 『藏漢』 s.v. *dngos grub gnyis* (p. 675): '*mchog gi dngos grub dang/ thun mong gi dngos grub gnyis*'. See also 『藏漢』 s.v. *dngos grub brgyad* (p. 675): '*ral gri dang/ ril bu/ mig sman/ rkang mgyogs/ bcud len/ mkha' spyod/ mi snang ba/ sa 'og bcas kyi dngos grub ste thun mong ba'i dngos grub brgyad*', *dngos grub gnyis* (p. 675): '*mchog gi dngos grub dang/ thun mong gi dngos grub gnyis*'.

成就 (*dngos grub*) の種類は様々知られる。例えば、ツアルパシトウ・クンガードルジェ (Tshal-pa-si-tu Kun-dga'-rdo-rje. 1309–1364. BDRC#P4525) が『紅史』(*Deb ther dmar po*) の「普遍的な成就の証」の項 (no. 446: *thun mong gi grub rtags*) で挙げている「8種目の普遍的な成就」(*thun mong gi dngos grub brgyad*) には、「不死の成就」(*'chi med kyi dngos grub*) や「病を退治する成就」(*nad 'joms pa'i dngos grub*) が含まれる。See *Deb ther dmar po*, s.v. *thun [thun em.] mthu] mong gi grub rtags* (no. 446, pp. 406–407): (*thun mong*) *sangs rgyas chos lugs kyi gsang sngags kyi gzhung nas bshad tshul la/ gsang sngags bla med kyi lam bsgoms nas bskyed rim mihar phyin pa na phyi'i rtags mtshan du thun mong gi dngos grub brgyad thob pa*

就」(*mchog gi dngos grub*)と「普遍的な成就」(*thun mong gi dngos grub*)の中で、「不変な成就」が前者「至高の成就」に対応する可能性を指摘し得る。「普遍的な成就」に関わる身体的重要性は、しかし、決して閑却し得ない。第1節外なる成就法「貴重な壺」に説示される鍊金薬(*bcud len*)の服用による若返りや延命、また、第3節秘密なる成就法「虚空の金剛」に説示される護身の儀軌が長寿成就法の内に位置付けられるのは、これが勤行の拠り所である身体を良好な状態に保つ法と見做されているからである。

§2.6.1の終わりに付された——ものと、シノプシスに置いた——ダーラニー *āyurjñāna bhindu bhrūm. nrī bhrūm vajrāyuse om āḥ* は、その典拠を特定することが筆者にはできなかった。当該ダーラニーは、その近似したかたち *bhrūm vajrāyuse hūm āḥ* が「密護のダーラニー」 (§3.2.3: *bsrung ba'i sngags*)<sup>675</sup> として第3節秘密なる成就法「虚空の金剛」に看取され、両者の間に重複する *bhrūm vajrāyuse* は『チャッキドンポ』において重用されていることが伺われる。なお、当該ダーラニーの直後に付されたダーキニーの符牒、或いはウッディヤーナ語を記した文字<sup>676</sup> は、次の §2.7.1 の冒頭に置かれるべきかもしれないことを付言し、この点についても、識者のご叱正を仰ぎたい。

## §2.7. 寿命を司る壺に関する次第

### §2.7.1

§2.7 に説示される観想法は、当該 §2.7.1 の冒頭に「主である無量寿仏に帰命する」(*mgon po tshe dpag med la phyag 'tshal lo*) という帰敬文をもって開始されており、ここに、先行する観想法とは異なる次第が開始されることが伺われる。この観想法を勤修する時機は、満月に向かう上弦の月 (*yar ngo*)<sup>677</sup> の、幸先が良い星曜辰宿 (*gza' skar bzang po*) の時と規定されている。満月でも下弦の月でもなく、「上弦の月」と規定されている点に、月齢が細かく当該長寿成就法の実践に関わっていることが知られよう。

勤修者は、このような吉祥な時機に、清浄、且つ、吉祥な土地 (*sa*) に、寂然とした場所 (*dben pa'i gnas*) を求めて壺を安置する。この「壺」と「安置」は、筆者による補記である。前者「壺」は、続く §2.7.2 に見られる用例「壺」(*bum pa*) を、後者「安置」は、§1.5.4 の所説「調合した 9つの滋養物を 5つのやんごとない頭蓋骨に分け容れて、大事に、或いは、安静なところに (*dal la*) 安置する (*bkod*)」を、それぞれ参照し、補って訳出した。壺の数は、チベット語の常例で定かではないものの、おそらく 1個に限るものと

*'byung ste/ (1) ri lu'i dngos grub/(2) mig sman gyi dngos grub/ (3) sa 'og gi dngos grub/ (4) ral gri'i dngos grub/ (5) rkang mgyogs kyi dngos grub/ (6) mi snang ba'i dngos grub/ (7) 'chi med kyi dngos grub/ (8) nad 'joms pa'i dngos grub bcas brgyad ka thob pa'am/ gang yang rung ba thob pa 'byung/*

<sup>675</sup> §3.2.3:

*om bhrūm vajrāyuse hūm āḥ |*  
*āḥ bhrūm vajrāyuse hūm āḥ |*  
*hūm bhrūm vajrāyuse hūm āḥ |*

<sup>676</sup> Cf. Appendix B, no. 10 (A 523,6; B 257,3; C 205,3).

<sup>677</sup> See 『蔵漢』 s.v. *yar ngo* (p. 2557): *'zla ba'i dkar cha yar 'phel ba dang/ dkar phyogs kyi dus tshes gcig nas bco lnga'i bar [...] yar ngo'i zla ba ltar gong nas gong du 'phel ba [...] ming gi rnam grangs la dkar phyogs dang/ gang phyogs/ rgyas phyogs/ phyogs snga ma/ 'phel phyogs/ zhi phyogs bcas so'*.

想定される。続く §2.7.4 に、この壺、即ち、「寿命を司る壺」(*tshe bum*) は、勤修者の頭頂に置かれるという次第が説示されるから、勤修者の頭数だけ用意されるものであろう。

勤修者は、この大事に安置した壺の中に、次の5つのものを容れてゆく。即ち——(1.) 穀物 (*'bru*), (2.) 香 (*spos*), (3.) 宝 (*ratna*), (4.) 薬 (*sman*), そして、(5.) 5つの精髓 (*snying po lnga*)——である。最後の「5つの精髓」は、第1節外なる成就法「貴重な壺」において用例の見られる「5つの精分」 (§1.2.1: *dwangs ma lnga*), 即ち——(1.) 土類, (2.) 岩石/鉱物類, (3.) 液体凝固類, (4.) 樹木類, (5.) 花類——を指すものと考えられるが、他の可能性としては、5つのダーラニーがあげられよう。この場合は、五仏のダーラニー (§1.2.2) が相応しい。

## §2.7.2

§2.7.2 では、§2.7.1 において準備された壺の内容物が「不死なる甘露の滋養」(*bdud rtsi'i bcud*) に変化する過程が、勤修者が奉唱するダーラニーが、これを壺の中に凝縮させるものとして説かれる。勤修者は、§2.7.1 の説示とおりに、即ち、(1.) 穀物, (2.) 香, (3.) 宝, (4.) 薬, そして、(5.) 5つの精髓を収容した壺の中に、水を途切れることなく注ぎ入れて (*rgyun chad med pa'i chu yis*), 壺 (*bum pa*) を満たし、また、この壺に清浄な布を巻きつけて (*gtsang ma'i gos dkris*), 如意枝で飾る (*dpag bsam sdong pos brgyan*) ものとされる。

*dpag bsam sdong po* (如意枝) という用例は、『チャッキドンポ』中に当該箇所その他、はしがきの内容細目中の要門3「[貴重な壺の]口を飾る如意枝」(*kha rgyan dpag bsam sdong po*) に、この用例が見在する。要門3は、しかし、はしがきの内容細目 (§0.3) では外なる成就法「貴重な壺」に配置されている点が、実際の説示箇所との相違点として注意されよう。この如意枝で荘厳された壺は、BEER 1999 に複数図示されている (p. [220], plate 103: Ritual vases and assorted ritual implements)。<sup>678</sup> 「長寿の壺」(“long-life vase” (Tib. *tshe bum*), p. 221) に関する図像学的考察によれば、この壺は、不死の甘露 (“nectar (Skt. *amrita*; Tib. *bdud rtsi*) of immortality”) で満たされており、無量光仏の化身、無量寿仏の所有物である。その上部を飾る如意樹は、無量光仏の本質、或いは、その ‘*Hri*’ という種子を体現したもので、ある伝説によれば、如意樹(葉と花と実を常に付けている)は、無量光仏の所有物であった。<sup>679</sup>

勤修者は上の次第で壺を準備し、次に「前述したダーラニー」(*gong ltar sngags*) に一心に思いを込めるとされる。このダーラニーは、おそらく直前の、即ち、§2.6.1 において請願文と共に念誦されるダーラニー *āyurjñāna bhindu bhrūṃ. ṅrī bhrūṃ vajrāyuse om āḥ* を意図するものであろう。勤修者がこのダーラニーに一心に思いを込めること (*ting 'dzin*

<sup>678</sup> See also BEYER 1973:376, fig. 43: ‘a flask of life’.

<sup>679</sup> See BEER 1999:221: ‘the ‘long-life vase’ (Tib. *tshe bum*) filled with the ‘nectar (Skt. *amrita*; Tib. *bdud rtsi*) of immortality’. This vase is the attribute of the longevity deity Amitayus (Tib. *Tshe dpag med*) [...]. Amitayus is an emanation of the red Buddha of the western direction, Amitabha (Tib. ‘*Od dpag med*) [...]. [...] a wish-fulfilling tree at its top, which embodies the essence of Amitabha or his syllable *Hri*; according to one legend the wish-fulfilling tree - always in leaf, flower and fruit - belongs to Amitabha’.

rgyas par bya) は、壺の中の収容された不死なる甘露の滋養 (*bdud rtsi'i bcud*) を凝縮させ (*bsdus*)、壺の中でこれを収斂させる (*bstim*) ものとされる。この結果、壺自体 (*rang*) から光が発散し (*'od 'phros*)、壺の中で寿命の成就 (*tshe yi dngos grub*) をさらに凝縮させる。

### §2.7.3

§2.7.3 では、勤修者の現然たる三昧 (*ting 'dzin gsal ba*) の寿命に関する業 (*tshe yi phrin las*) として、7つの請願文が読誦される。当該箇所、即ち、§2.7.3 のテキスト全文は、ミパム・ジャムヤンナムゲルギャツォ (*Mi-pham rNam-rgyal-rgya-mtsho*. 1846–1912. BDRC#P252) が著した『チャクドンマの寿命召喚』 (*lCags sdong ma'i tshe 'gugs*) に引用されている (異読は校訂テキスト中に提出した)。ミパム・ジャムヤンナムゲルギャツォがそこで「『長寿成就法チャクドンマの寿命召喚』は次のとおりである」 (*tshe sgrub lcags sdong ma'i tshe 'gugs ni*) と書き始めているように、請願の主題は、勤修者の寿命召喚 (*tshe 'gugs/tshe khug*) にある。

当該 §2.7.3 においてヨーガ行者 (*rnal 'byor*) たる勤修者は、請願文の読誦にあたり、まずもって、主である仏世尊 (*bCom-ldan-mgon-po*)、無量寿智仏 (*Ye-shes-tshe-dpag-med*)、そして、五大を支配する女神の集塊 (*'byung ba lnga la dbang sgyur lha mo'i tshogs*) に帰敬する。無量寿智仏 (§2.7.3: *Ye-shes-tshe-dpag-med*) は、<無量寿宗要経> 中に無量寿如来の異名として知られる「無量寿智」 (*ApS\_t*, §5: *Tshe-dang-ye-shes-dpag-tu-med-pa*; *ApS\_s*, §4: *Aparimitāyurjñāna*) が、ここで比較参照されよう。

彼らに対する7つの請願は、順に――

請願1. 勤修者の寿命 (*tshe*) と福祿 (*g.yang*)<sup>680</sup> を増大させ給え (*spel cig*)、と請願するもの。

請願2. 上下十方の器世間 (*snod kyi 'jig rten*) を流離い (*bros*)、彷徨い (*'khyams*)、散り散りになった (*yar ba'i*) 勤修者の寿命を召喚させ給え (*khug cig*)、と請願するもの。

請願3. 八万にわたる、あらゆる障難 (*bgegs*) によって分捕られ (*brkus*)、濫妨され (*'phrog*)、損なわれた (*gzhom pa'i*) 勤修者の寿命を召喚させ給え、と請願するもの。

請願4. 身体を構成する五大 (*'byung ba*) の不調和 (*dgra gshed 'khrug pa*) が作用して (*las sbyor gyis*)、弱体化し (*nyams*)、尽果て (*zad*)、散乱した (*'thor ba'i*) 勤修者の寿命を育み給え (*gsos shig*)、と請願するもの。

請願5. 妄想 (*gid*) によって恐怖して (*dngangs*)、突然 (*had kyis*) 昏倒する (*brgyal ba*) など、急に (*'ud kyis*) 畏縮した (*'drogs pa'i*) 勤修者の寿命と福祿を育み給え、と請願するもの。

請願6. 寿命を召喚させ、福祿を保護する (*skyabs*) 成就 (*dngos grub*) を勤修者に授け給え (*stsol*)、と請願するもの。

<sup>680</sup> See 『藏漢』 s.v. *g.yang* (p. 2613): '(1) *dpal 'byor phun sum tshogs pa'i phywa'am/ bcud dam/ bsod nams/ [...]* (2) *grog rong gzar po sogs lung nyen che ba yod sa*'.

請願7. 身体を構成する五大 ('byung ba)<sup>681</sup> に、寿命の滋養 (*tshe bcud*) を、寿命を司る壺が発散する眩しく輝く五光として ('od lnga 'bar ba'i) 充滿させる (*stims*) ことにより、不死なる長寿の成就 ('chi med tshe yi dngos grub) を勤修者に授け給え、と請願するもの。

——という内容をもって読誦される (§2.7.4: *brjod*)。当該 §2.7.3 において請願される寿命に関する業 (*tshe yi phrin las*) は、このように、勤修者の寿命と福祿を増大させ (*spel cig*)、召喚させ (*khug cig*)、育み (*gsos shig*)、授けよ (*stsol*)、という世間的な請願の成就、達成をその意趣とするものであり、極楽世界への往生を志向する出世間的な請願は、ここには未だ見出し得ない。

ここで寿命 (*tshe*) と一対をなし、勤修者が請願するところの「福祿」 (*g.yang*) は、「福運」 (§2.5.2: *dbang thang*) や「福德」 (§2.5.2: *bsod nams*)、或いは「富」 (§4.4.1: *longs spyod*) に相応して理解されよう。後者の「富」は、後に第4節奥義なる成就法「*hrī*: という一種子」において、勤修者の上に雨のように降り注ぐ勤修の功德とされ、こうした「福祿」の類を請願する儀軌/成就法としては、*g.yang 'gugs* 等が知られる。<sup>682</sup> 寿命と共に (或いは、寿命の他に)、こうした福祿を勤修者が切要とする思想は、無論、いろいろな角度から追求し得るが、その背景となった先駆思想の中には、〈無量寿宗要経〉が説示する供養の「福德」 (ApS\_t, §68: *bsod nams*; ApS\_s, §65: *punya*) も、その一端として予想されてよいであろう。

## §2.7.4

§2.7.4 では、§2.7.2 において壺の中で凝縮させた寿命の成就 (*tshe yi dngos grub*) を、勤修者の中に取り込み、不死なる長寿の成就 ('chi med tshe yi dngos grub) が成し遂げられた様子をありありと観想する次第が説かれる。

勤修者は、§2.7.3 において説示された請願文を読誦した (*brjod*) 後、寿命を司る壺 (*tshe bum*) を彼/彼女の頭頂 (*spyi bo'i gtsug*) に置く。この寿命を司る壺の中には、先に述べた3つの精髓 (*gong gi snying po gsum*) によって、寿命に関する不死なる成就が収斂されている (*bstim*)。ここで「3つの精髓」と訳出した *snying po gsum* は、現在の筆者には「先に述べた (*gong gi*)」いう叙述にしか決め手を見出し得ない。壺の中の収容された不死なる甘露の滋養 (*bdud rtsi'i bcud*) を凝縮させ (*bsdus*)、壺の中でこれを収斂させる (*bstim*) ものとしては、§2.7.2 において、*āyurjñāna bhindu bhrūm. nṛī bhrūm vajrāyuṣe om āḥ* というダーラニーを想定したが、この次第には具体的には3つの要素、即ち——(1.) 壺という具体的事物を対象に水を途切れることなく注ぎ入れてこれを満たし、清浄な布を巻きつけ、如意枝で飾ること、(2.) ダーラニー (§2.6.1: *āyurjñāna bhindu bhrūm. nṛī bhrūm vajrāyuṣe om āḥ*)、そして (3.) ダーラニーを対象にして一心に思いを込める禪定——という3つの要素が見出し得る。<sup>683</sup>

<sup>681</sup> 'byung ba は、『チャクドンマの寿命召喚』が伝承する読みを参照して「身体を構成する五大」と訳出した。ここに伝承される5という数字は、五光 ('od lnga) に対応している。

ICags sdong ma'i tshe 'gugs, 645,4: 'byung lnga 'od lnga 'bar ba'i tshe bcud stims.

<sup>682</sup> See 『蔵漢』 s.v. *g.yang 'gugs* (p. 2613): 'zas nor longs spyod 'gugs byed kyi cho ga zhig'.

<sup>683</sup> §2.7.2:

*rgyun chad med pa'i chu yis bum pa dgang:*

§2.5.1 の詳解において参照したように、『チメーパルテル』にも類似する三者「財物」(*rdzas*)「ダーラニー」(*sngags*)「禅定」(*ting nge 'dzin*)が、功験灼かな仏教とボン教の僧侶たちがこれらを結集、加行した(*sbyor ba*)結果、ダーラニーの光線 (*'od zer*)が生じるものと説示されている。<sup>684</sup> 従って、不死なる甘露の滋養が凝縮、収斂させられるところの、寿命を司る壺 (§2.7.4: *tshe bum*)を「財物 (*rdzas*)」に比定すれば、両成就法の間「財物」「ダーラニー」「禅定」という、相互する「3つの精髓」を見出すことができよう。決して積極的な考察ではないが、当該の文脈から外れたものともいえず、一つの想定としてこれを提出し、識者のご叱正を仰ぎたい。

この寿命を司る壺 (*tshe bum*)を、勤修者は彼／彼女の頭頂に置く。すると、そこから不死なる寿命の甘露 (*bdud rtsi*)が、頭頂ブラフマ孔を伝って (*tshangs bug brgyud nas*) 滴り落ち、勤修者自身の体内の深奥部まで隈なく隅々まで (*khong pa gang zhing*) 浸透する。勤修者はそこで、成就 (*dngos grub*) が成し遂げられた様子を (*thob par*) ありありと観想 (*bsam*)するのである。

また、主である仏世尊 (*bCom-ldan-mgon-po*)、無量寿金剛仏 (*rDo-rje-tshe-dpag-med*) がチャクラ (*'khor lo; cakra*) を通じて (*brgyud de*) 勤修者自身の心臓部にしみ込み (*snying khar thim*)、不死なる長寿の成就 (*'chi med tshe yi dngos grub*) が成し遂げられた様子をありありと観想するのである。この無量寿金剛仏は、前の無量寿智仏 (§2.7.3: *Ye-shes-tshe-dpag-med*) の異名と見做してよいであろう。

当該 §2.7.4 の終わりに付されたダーキニーの符牒、或いはウッディヤーナ語を記した文字<sup>685</sup> は、上の2段階の成就が成し遂げられたことを言祝ぐものと想定される。

## §2.8. 2つの功德

### §2.8.1

§2.8.1 には、長寿成就法『チャッキドンポ』を成就する者が得る功德 (*yon tan*) が説かれる。この果報の前提としては、「暁闇朝一番、<sup>686</sup> この長寿成就法『チャッキドンポ』を現然たる三昧により数百回誦すること」(*tshe sgrub lcags kyi sdong po 'di: tho rangs snga dro dang po la: ting 'dzin gsal bas brgya rtsa bzla*) が、冒頭に挙げられている。三偈文より成る当該箇所を〈無量寿宗要経〉に比定し得るダーラニーが導入される §2.4.2 の

*gtsang ma'i gos dkris dpag bsam sdong pos brgyan:*  
*gong ltar sngags dang ting 'dzin rgyas par bya:*  
*bdud rtsi'i bcud bsdus bum pa'i nang du bstim:*  
*rang las 'od 'phros tshe yi dngos grub bsdus:*

<sup>684</sup> *'Chi med dpal ster*, 192,1: *ban bon mthu bo che rnams kyis rdzas sngags ting nge 'dzin gyi sbyor ba la brten nas tshe srog phrog pa la sogs pa rnams/ 'od zer des rdo khab len gyis lcags phye bsdus pa ltar 'ub kyis bsdus.*

<sup>685</sup> Cf. Appendix B, no. 11 (A 525,3; B 258,5; C 206,5).

<sup>686</sup> *tho rangs skya rengs dang po* (§2.2.1) と *tho rangs snga dro dang po* (§2.8.1) の区別は判然としない。前者は、§2.2.1 の詳解において考察を試みたように、発最勝菩提心の次第が履行される時分、更であり、当該箇所の次第が履行される後者よりは、比較的早い時間帯だという推測も成り立つであろう。現時点では共に「暁闇朝一番」と訳出し、識者のご叱正を仰ぎたい。



一偈文「暁闇，[<無量寿宗要經> 中に説示される] 次のダーラニーを数百回 [繰り返し] 唱える」(*tho rangs sngags 'di brgya rtsa bzla:*) と比較してみると，(1.) 暁闇 (*tho rangs*) と (2.) 数百回読誦する (*brgya rtsa bzla*) という 2点に重複が看取される。§2.8.1 で読誦する対象をこの <無量寿宗要經> に比定し得るダーラニーと見ることは，前後関係からみても，妥当な想定といえよう。

長寿成就法『チャッキドンポ』を成就する者が得る功德，即ち，<無量寿宗要經> に比定し得るダーラニーを読誦することによって，『チャッキドンポ』を成就する者が證果とする，筆舌に尽くしがたい (*brjod mi lang*) 功德 (*yon tan*) が，<無量寿宗要經> が同経を勤行することにより勤修者に齎す 2つ功德 (ApS\_t, §14) を色濃く反映しているものと想定されることは，第2.8章 (2つの功德) において考察を試みたとおりである。

ダーラニー読誦の功德が筆舌に尽くしがたいのは，寿命が単に百歳まで延長されることにあるのではない。三世諸佛の後嗣となるべく，その延長された存命中に十波羅蜜，五道十地を経過し，その結果，死後は極楽世界に生まれるという宿願が達成されることにその得難さがある。阿僧祇劫の経過に観待しない，速疾な成仏を実現するものといえよう。§2.8.1 には，長寿成就法『チャッキドンポ』を成就した者が三世諸佛の後嗣となること，即ち，無上なる完全なさとりから不退転である界境へ往生すること，が如実に示されている。

## §2.9. 授記

### §2.9.1

第2節内なる成就法「チャッキドンポ」の最末尾にあたる §2.9.1 は，パドマサンバヴァのリクズイン・グウデムチェンに対する授記をその内容とする。

「エマホー (*e ma ho*) !」という驚嘆の感嘆詞をもって開始されるこの授記は，末劫の時に (*bskal pa tha ma'i dus*)，五濁の諸々の証 (*snyigs ma lnga yi rtags rnams*) が生じるけれども，パドマサンバヴァの悲心によって (*thugs rje yis*) 釈迦の教えは余すところなく広まるのであるから (*shākya'i bstan pa mtha' rgyas phyir*) 何某かの有情 (*'gro ba 'ga' zhig*) は，成熟して解脱するものと展開，説示する。

末劫の，五濁の諸々の証が生じる時であっても，釈迦の教えが余すところなく広まり，何某かの有情が成熟して解脱するように，即ち，長寿成就法『チャッキドンポ』を勤修する者が成仏し，極楽世界に往生する為に，当該長寿成就法はまずもって縁に恵まれたパドマサンバヴァの子と巡り会わ (*'phrad pa*)<sup>687</sup> なければならない。これが自然な成り行きでなされるべくしてなされること (*heteronomous*) として，記されている。

このように，持明者グウキデムトウチェン (*rig 'dzin rgod kyi ldem 'phru can*)，即ち，縁に恵まれたパドマサンバヴァの子であるリクズイン・グウデムチェンは，『チャッキドンポ』を発掘し，この甚深なる長寿成就法を実修するよう (*nyams su longs*) 記別を受ける者だ。ただし，この記別の対象は「私の弟子よ (*nga yi gdul bya*)，究竟に至るがよい (*mthar phyin 'gyur*)」というパドマサンバヴァの言祝ぎからも知られるように，広く長寿成就法『チャッキドンポ』を勤修する者を包含するようにも考えられる。

<sup>687</sup> See 『藏漢』 s.v. *'phrad pa* (p. 1791): '(*tha mi dad pa*) *phrad pa/ 'phrad pa// mjal ba dang thug pa*'.

続く最後の偈文には、*iti* (𑖀𑖄𑖅𑖆) を付す異読 (CD\_A) が見在する。この異読は「以上」が第2節内なる成就法「チャッキドンポ」の説示であることを端的に示す記号といい得よう。何故ならこの記号 𑖀𑖄𑖅𑖆 は、第3節秘密なる成就法「虚空の金剛」でも、最末尾にあたる §3.9.1 の最後の散文に付されているが (異読は見在しない)、そこでもやはり「以上」というくだりで理解し得るからである。

1 4.4. 第3節 長寿成就法『チャッキドンポ』より秘密なる成就法「虚空の金剛」  
2 4.4.1. §3. 校訂テキスト

3 [A 527,1; B 262,5; C 210,5: 秘密なる成就法「虚空の金剛」]

4 ཚེ་སྐྱབ་ལྷགས་ཀྱི་སྒྲིབ་པོ་ལས་ལྷགས་སྐྱབ་ནམ་མཁའི་དོ་རྩེ་བཞུགས་སོ།<sup>688</sup>

5 [§3.1. 帰敬]

6 [§3.1.1] ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ མཚོ་རྒྱ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་<sup>689</sup> མགོན་པོ་ཚེ་དཔག་མེད་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ།

7 [§3.2. 前行儀軌]

8 [§3.2.1] བར་ཚད་ཐམས་ཅད་བསྐྱེད་བའི་སྐྱེ་བ་ལྷོ་<sup>690</sup>

9 བདག་ཉིད་ཏྟ་མགྱིན་སྐྱེ་མདོག་དམར་ལྷོ་

10 ཞལ་གཅིག་ཕྱག་གཉིས་མདའ་གཞུ་བསྐྱེད་ལྷོ་

11 ཏྟ་མགོ་ལྷོ་གུ་རྩོག་མ་སྐྱེ་བ་ལྷོ་

12 དུར་ཁྲིད་ཆས་ཀྱིས་རབ་དུ་བརྒྱན་ལྷོ་<sup>691</sup>

13 བསྐྱེད་པའི་མེ་འབར་སྒྲིབ་དུ་བསྐྱེད་ལྷོ་

14 [§3.2.2] དེ་ཡི་ཕྱགས་ཀར་ཚེ་དཔག་མེད་ལྷོ་<sup>692</sup>

15 ཞི་བའི་ཚུལ་ལ་མཉམ་བཞག་ཕྱག་ལྷོ་<sup>693</sup>

16 སྐྱེ་མདོག་པར་རྒྱ་ག་དམར་ལྷོ་

17 ཞི་བའི་རྒྱན་གྱིས་མངོས་པར་བརྒྱན་ལྷོ་

18 [§3.2.3] དེ་ཡི་ཕྱགས་ཀར་ཐིག་ལེ་མདོག་ལྷོ་<sup>694</sup>

19 འོད་ལྷོ་ཟེར་དང་བཅས་པ་བསྐྱེད་ལྷོ་

20 བསྐྱེད་བའི་སྐྱགས་འདི་བསྐྱེད་བར་བྱེད་ལྷོ་<sup>695</sup>

<sup>688</sup> གསང་སྐྱབ་ནམ་མཁའི་ལ། A] ཡང་གསང་ནམ་མཁའི་ལ། B, C.

<sup>689</sup> Cf. Appendix B, no. 12 (A 528,1; B 262,5; C 210,5).

<sup>690</sup> འཚད་ལ། A] འཚོད་ལ། B, C.

<sup>691</sup> འགྱིས་ལ། B, C] འགྱི་ལ། A.

<sup>692</sup> འཀར་ལ། B, C] འཁར་ལ། A.

<sup>693</sup> འབཞག་ཕྱག་ལ། A] འགཞག་ཕྱག་ལ། B; འབཞག་ཕྱག་ལ། C.

<sup>694</sup> འཀར་ལེ་ལ། B, C] འཁར་ལེ་ལ། A.

1	ཨི་བཟོ་བཏོ་ལྷ་ཡུ་ཤི་རྩི་ལྷོ་ <sup>696</sup>	1
2	ལྷོ་ཨི་བཟོ་ལྷ་ཡུ་ཤི་རྩི་ལྷོ་ <sup>697</sup>	2
3	རྩི་ཨི་བཟོ་ལྷ་ཡུ་ཤི་རྩི་ལྷོ་ <sup>698</sup>	3
4	[§3.2.4] དཀར་དང་དམར་དང་མཐིང་དང་གསུམ་མཚོ་	4
5	སྐྱེས་ཀྱི་འོད་དྲུ་འཕྲོས་པ་ལས་མཚོ་	5
6	བསྐྱེད་བཞེས་པ་བཅས་ཆགས་སྐྱིབ་པ་སྦྱངས་མཚོ་ <sup>699</sup>	6
7	རོ་རྩི་ལྷ་ཡུ་ཤི་རྩི་ལྷོ་	7
8	གཞན་གྱིས་མི་ཚུགས་ལོ་ཆ་བཟོ་	8
9	[§3.2.5] ཨི་བཟོ་ཡུ་ལྷ་ཡུ་ལྷ་བ་ཅི་རྩི་ལྷོ་ <sup>700</sup>	9
10	འདི་ཉིད་བསྐྱེད་བཞེས་པའི་མཚོ་གུ་ལྷོ་ལྷོ་ <sup>701</sup>	10
11	ཉི་མ་དམར་ཐག་ཚོད་ཀ་དང་མཚོ་ <sup>702</sup>	11
12	སྐྱེད་པའི་དང་པོ་ཤར་དྲུ་ས་གཉིས་མཚོ་	12
13	བསྐྱེད་བཞེས་པའི་ཉིད་ལན་རེ་བྱེད་མཚོ་ <sup>703</sup>	13
14	ཆོ་སྐྱེད་ཀྱི་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་	14
15	མཚོ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ <sup>704</sup>	15
16	ས་མ་ལུ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་	16
17	<b>མ་ལུ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་</b> <sup>705</sup>	17

695 བསྐྱེད་བཞེས་ em.] བསྐྱེད་བཞེས་ A; བསྐྱེད་བཞེས་ B, C.

696 ཨི་བཟོ་ལྷོ་ལྷོ་ B, C] ཨི་བཟོ་ལྷོ་ A.

697 ལྷོ་ཨི་བཟོ་ B, C] ལྷོ་ཨི་བཟོ་ A.

698 ལྷོ་ཨི་བཟོ་ B, C] ལྷོ་ཨི་བཟོ་ A.

699 བཞེས་པ་ B, C] བཞེས་ A.

700 ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ A] ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ B, C.

701 བསྐྱེད་བཞེས་ em.] བསྐྱེད་བཞེས་ A; བསྐྱེད་བཞེས་ B, C.

702 བཟོ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ A, B] བཟོ་++++ལྷོ་ C.

703 བསྐྱེད་ A] བསྐྱེད་ B; +ད་ C.

704 ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ em.] ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ A; ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ལྷོ་ B, C.

705 Cf. Appendix B, no. 13 (A 529,3; B 263,4; C 211,4).

1	[§3.3. 秘密なる成就法の由来]	1
2	[§3.3.1] ཨོ་རྒྱན་པ་སྐྱོད་འབྱུང་གནས་ངས། <sup>706</sup>	2
3	ཚོ་དཔག་མེད་ཀྱི་སྐྱུན་སྲུང་སྤྱིན།	3
4	ཚོ་ཡི་སྐྱབ་པ་བསམ་ཡས་ཞུས།	4
5	ཀུན་ལ་སྐྱོན་འགྲོ་དངོས་གཞི་དང་།	5
6	རྗེས་ཀྱི་ཚོ་ག་གསུམ་དུ་བཤད།	6
7	སྤྱི་སྟུང་སྤྱང་བའི་འཁོར་ལོ་བསྐྱོམ། <sup>707</sup>	7
8	ནང་སྟུང་སྟུ་ཡི་ཉིང་འཛིན་བསྐྱོམ། <sup>708</sup>	8
9	གསང་བ་སྤྱང་གི་བརྟུང་ལེན་བྱ། <sup>709</sup>	9
10	[§3.3.2] མ་རྟུ་གུ་རུ་དག་པོ་ཚལ།	10
11	གསང་མཚན་སླ་མའི་སྐྱབ་པ་ལས། <sup>710</sup>	11
12	གསང་སྐྱབ་ནམ་མཁའི་རྩོ་རྗེ་ཞེས། <sup>711</sup>	12
13	ཤིན་ཏུ་གསང་ནས་གབ་པ་ཡང་།	13
14	སྐྱབ་ཐབས་འདི་རུ་གསལ་བར་བཀོད།	14
15	སྤྱི་རབས་ནལ་འབྱོར་སྐྱབ་པ་པོ།	15
16	མན་ངག་འདི་དང་འཕྲད་ནས་ཀྱང་།	16
17	སྤྱགས་རྗེས་གདུལ་བྱ་མཐའ་རྒྱས་ཤོག།	17
18	ས་མ་ཡུ། <sup>712</sup> རྒྱ་རྒྱ་རྒྱ།	18
19	[§3.4. 風による長寿成就法「命の風」]	19
20	[§3.4.1] མགོན་པོ་ཚོ་དཔག་མེད་ལ་སྤྱག་འཚལ་ལོ། ཚོ་སྐྱབ་པར་འདོད་པ་ཡིས། <sup>713</sup> དང་པོ་སྐྱབས་འགྲོ་	20
21	སེམས་བསྐྱེད་བྱུང་ དེ་ནས་རང་གི་ལྟེ་བའི་ལོག་ཏུ་ཡི་གེ་རྩི་ཞིག་བསྐྱོམ། <sup>714</sup> དེ་ལས་མེ་འབར་བས་ལོག་	21
22	པའི་ནང་གི་ནད་དང་གདོན་དང་སྤྱི་གསྐྱིབ་ཐབས་ཅད་བཞེགས་སྤྱངས་པར་བསྐྱོམ། <sup>715</sup> ལྷ་བྱག་ནས་རྒྱང་	22

706 ཨོ་རྒྱན་° A, B] °+° C.  
 707 འཁོར་° A, B] འ+ར་° C.  
 708 ནང་སྟུང་སྟུ་ཡི་ཉིང་འཛིན་བསྐྱོམ། *suppl.* A] *om.* B, C.  
 709 བ་°བྱུང་° B, C] བའི་°བྱུང་° A.  
 710 སྐྱབ་° B, C] བསྐྱབ་° A.  
 711 འཁའ་མཁའི་° B, C] འཁའ་མཁའི་° A.  
 712 ས་མ་ཡུ། *em.*] ས་མ་ཡུ། A; *om.* B, C.  
 713 སྐྱབ་° B, C] བསྐྱབ་° A.  
 714 རྩི་° B, C] རྩི་° A.

1 གི་དྲུག་ལན་གསུམ་དབྱང་།<sup>716</sup> 1

2 [§3.4.2] ཚེས་ཐམས་ཅད་སྣང་པ་ཉིད་དུ་བསྐྱེད་ཅུག་དེའི་ངང་ལས་ཉི་ལྷན་བསྐྱེད་པ་གདན་བསམ་ཅུག་དེའི་སྣང་ 2  
3 དུ་སེམས་ཉིད་རྩྭ་དུ་གྱུར་པས་། བཅོམ་ལྷན་འདས་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་དག་བཅོམ་པ་ཡང་དག་པར་ 3  
4 ཚེགས་པའི་སངས་རྒྱས་ཚེ་དང་ཡི་ཤེས་རྣམ་པར་ངེས་པའི་གཟི་བརྗིད་ཀྱི་རྒྱལ་པོ་ཞེས་བྱ་བུ་<sup>718</sup> <sup>viii</sup> ལྷན་ 4  
5 མདོག་དཀར་པོ་ཞེས་གཅིག་ལྷུག་གཉིས་མཉམ་བཞག་གི་ལྷུག་རྒྱ་ཅན་ཅུག་<sup>719</sup> རིན་པོ་ཚེའི་རྒྱན་སྣ་ཚོགས་ 5  
6 པས་བརྒྱན་པུ་<sup>720</sup> ཞལ་འཇུག་བག་དང་བཅས་པ་བསྐྱེད་ཅུག་ཡང་དབྱུགས་ཀྱི་དྲུག་ལན་གསུམ་དབྱང་། 6

7 [§3.4.3] དེ་ནས་རྒྱུད་ལ་ཚེ་སྐབ་པ་ནི་<sup>721</sup> དང་པོ་སེམས་ཅན་གྱི་ལྷུག་རྒྱ་ལ་བསྐྱེད་པའི་དུས་སུ་<sup>722</sup> རྒྱུད་ 7  
8 ལྷུག་པ་དྲུག་སྟོག་རྩ་དུ་སོང་བ་ལ་སྟོག་གི་རྒྱུད་ཞེས་བྱ་བ་ཡིན་ཏེ་<sup>722</sup> སྟོག་གི་རྒྱུད་དེ་གསེས་པས་ཚེ་རང་ 8  
9 བར་འགྱུར་བ་ཡིན་ཅིང་། 9

10 [§3.5. 本行儀軌] 10

11 [§3.5.1] དངོས་གཞི་ནི་། ལྷུག་སྐྱེལ་གྱུང་བཅས་དེ་ལག་པ་མཉམ་བཞག་གི་ལྷུག་རྒྱ་བཅས་ལུ་<sup>723</sup> ལྷུག་ 11  
12 ལམ་ལུ་མཐོང་བའི་སངས་རྒྱས་ལམ་ལུ་བསྐྱེད་ཏེ་<sup>724</sup> ལ་ནས་རྒྱལ་བས་ནས་མཚེལ་མ་དང་བཅས་པ་མེད་ 12  
13 ཏོ་<sup>725</sup> དམིགས་པ་ནི་། ལྱིའི་འབྱུང་བ་ནས་ལམ་ལུ་ཐམས་ཅད་བདག་གི་སྟེ་བར་འདུས་པར་བསམ་ཅུག་<sup>726</sup> ལྷུག་ 13

viii ApS\_s1, §8: [...] *sattvās tasyāparimitāyurjñānasuviniścitatejorājasya tathāgatasyārhatāḥ samyaksaṃ-*  
*buddhasya nāmāṣṭottaraśataṃ [...]*  
 §11: *om namo bhagavate aparimitāyurjñānasuviniścitatejorājāya tathāgatāyārhatate samyaksaṃ-*  
*buddhāya ||*  
 ApS\_t, §10: [...] *sems can gang dag tshe dang ye shes [shes em.] ses] dpag tu med pa shin tu rnam par*  
*nges pa gzi brjid kyi rgyal po'i mtshan brgya rtsa brgyad thos par gyur pa [...]*  
 §13: *om na mo bha ga ba te a pa ri mi ta ā yur dznyā na su bi ni shtsi ta te dzo rā dzā ya ta thā ga tā ya a*  
*ra ha te saṃ myak saṃ bud dhā ya.*

715 འད་དང་ B, C] འད་ A.

716 འབྱུང་ A, B] འད་འབྱུང་ C.

717 དེའི་ B, C] དེ་ཡི་ A.

718 འབཅོམ་རྒྱས་འདས་པའི་ B, C] འབཅོམ་རྒྱས་འདས་པ་ A.

719 འབཞག་ A, C] འགཞག་ B.

720 འཇུག་ B, C] འཇུག་ A.

721 འསྐྱེད་ B, C] འབསྐྱེད་ A.

722 འཇུག་ལ་སྟོག་གི་རྒྱུད་ཞེས་བྱ་བ་ཡིན་ཏེ་ B, C] འཇུག་ལས་སྟོག་ཚགས་པ་ལས་སྟོག་གི་རྒྱུད་ཞེས་བྱ་བ་ཡིན་ཏེ་ A.

723 འབཞག་གི་ A] འགཞག་ B; འབཞག་ C.

724 འཇུག་ལམ་ལུ་མཐོང་བའི་སངས་རྒྱས་ལམ་ལུ་བསྐྱེད་ཏེ་ B, C] འཇུག་ལམ་ལུ་མཐོང་བའི་སངས་རྒྱས་ལམ་ལུ་བསྐྱེད་ཏེ་ A.

725 འད་ A] འད་ B, C.

726 འགྱུར་ B, C] འགྱུར་ A.

1 ཚོད་བཟུང་མི་སྐབ་པ་དང་དལ་བྱས་གཏང་།<sup>727</sup> ཕྱི་རུ་ནམ་མཁའ་ཡང་ཚོད་སོང་བར་བསམམོ།<sup>728</sup> 1

2 [§3.5.2] དེ་ལྟར་ལན་གསུམ་བྱས་པས་། སློག་རྒྱུང་མ་བུ་འཕྲོད་པའི་རྟགས་སྐྱེགས་པ་ཆེལ་ཡོང་སྟེ། དེ་ 2  
3 ལྟར་ཉི་མ་རེ་ལ་ལན་རེ་བྱས་ན་། ཚོ་བཟང་པའི་འཚོ་བའང་བསྐྱེད་མོ།<sup>729</sup> རྒྱན་ཏུ་མ་ཆག་ན་ཚོ་ཉི་ཟླ་དང་ 3  
4 མཉམ་པར་འགྱུར་རེ་། བྱ་བའི་ཏུས་ནི་དོ་གོང་ཐོ་རངས་དང་།<sup>730</sup> དགོངས་མི་བས་རྟིང་པ་ལྷོ།<sup>731</sup> གསར་པ་ 4  
5 མ་བོས་པ་ལ་བྱའོ།<sup>732</sup> 5

6 [§3.6. 後行儀軌] 6

7 [§3.6.1] རྗེས་ཀྱི་ཚོག་ནི་སེམས་ཅན་གྱི་སློག་མི་གཙོད་མོ།<sup>733</sup> ཚོ་དང་ཁམས་ལ་གཞོད་པའི་བས་མི་བཟོ། 7

8 [§3.7. 埋蔵の趣意] 8

9 [§3.7.1] ཚོ་དཔག་མེད་གྱི་སྐབ་པ་ནི་། 9  
10 མོ་རྒྱན་པར་འབྲུང་གནས་གྱིས་།<sup>734</sup> 10  
11 ཕྱི་རབས་ལས་ཅན་དོན་ཕྱིར་ཏུ་།<sup>735</sup> 11  
12 བསེ་སློམ་སྐྱུག་པའི་དབྱས་སྐྱེས་།<sup>736</sup> 12  
13 ལས་ཅན་གཅིག་དང་འཕྲད་པར་ཤོག་། 13  
14 ས་མ་ཡོ།<sup>737</sup> རྒྱ་རྒྱ་རྒྱ་། 14

15 [§3.7.2] ཚོ་སྐབ་འདྲི་དང་བཅུད་ལེན་གྱི་རིལ་བུ་རྒྱན་ཏུ་བཅངས་ན་། སློག་མི་ལོ་བརྒྱའི་བར་ཏུ་འཚོ་ 15  
16 བར་འགྱུར་རེ་། ལྷ་མོ་ཅན་གྱི་འདོད་ལོ་།<sup>738</sup> ས་མ་ཡོ།<sup>739</sup> རྒྱ་རྒྱ་རྒྱ་། 16

727 °བཟུང་དལ་° B, C] °བྱང་ངལ་° A.

728 ཕྱི་རུ་ནམ་མཁའ་° B] ཕྱི་རུ་ནམ་མཁའ་° A; ++ནམ་མཁའ་° C.

729 °བཟང་བའང་བསྐྱེད་མོ། B, C] °བཟང་བ་ཡང་ལྷས་སོ། A.

730 °གོང་° A] °གང་° B, C.

731 དགོངས་རྟིང་པ་° B, C] དགོང་སྐྱེགས་མ་° A.

732 °བོས་° B, C] °བོས་° A.

733 °གཙོད་། A] °བཅད་ B, C.

734 °མོ་རྒྱན་° B, C] °མོ་ན་° A.

735 °ཕྱིར་° B] °ཚེད་° A; °ཕྱིར་° C.

736 °སྐྱེས་ B, C] °སྐྱེས་ A.

737 °ཡོ། B, C] °ཡོ། A.

738 °ཅན་གྱི་འདོད་ལོ་ b] °ཅན་གྱི་འདོད་ལོ་ A; °ཅན་གྱི་འདོད་ལོ་ c.

739 °ཡོ། B, C] °ཡོ། A.

1	[§3.8. コロフォン]	1
2	[§3.8.1] བྱང་ཟང་ཟང་ལྷ་བྲག་གི་སྐྱེད་ནས་རིག་འཛིན་ཚོད་ཀྱི་ལྷེམ་འཕྱུ་ཅན་གྱིས་སྣོན་སེར་མཛོད་ནས་	2
3	སླུན་བྲངས་པའོ། <sup>740</sup>	3
4	[§3.9. 説示内容の要綱]	4
5	[§3.9.1] མ་སྤྱི་གཅིག་ན། <sup>741</sup> འཆི་མེད་བདུད་ཅི་བཞི་ནི།	5
6	ལྷག་པའི་བདུད་ཅི་མཁལ་མའི་གསོས། <sup>742</sup>	6
7	བ་ལུའི་བདུད་ཅི་སྤྱིང་གི་གསོས། <sup>743</sup>	7
8	མཁན་པའི་བདུད་ཅི་སློ་བའི་གསོས། <sup>744</sup>	8
9	མཆོ་ཡི་བདུད་ཅི་མཆིན་པའི་གསོས། <sup>745</sup>	9
10	རྒྱ་གཉིས་རྒྱུན་གསུམ་བདུད་ཅི་བཞི། <sup>746</sup>	10
11	སླུན་ན་ཡོན་ཏུན་བསམ་མི་བྱའོ། <sup>747</sup>	11
12	ཅེས་པའང་འདུག་གོ། <sup>748</sup> ལྷོ།	12

740 བྱང་ཟང་ཟང་ལྷེད་འཕྱུ་ཅན་གྱིས་སྣོན་སེར་མཛོད་ནས་སླུན་ཅོ་ em.] བྱང་ཟང་ཟང་ལྷེད་འཕྱུ་ཅན་གྱིས་སྣོན་སེར་མཛོད་ནས་སླུན་ཅོ་ A; ཟང་ཟང་ལྷེད་འཕྱུ་ཅན་གྱིས་སླུན་ཅོ་ B, C.

741 ཅོ་ B, C] ཅོ་ A.

742 གསོས། B, C] གསོས། A.

743 གསོས། B, C] གསོས། A.

744 གསོས། B, C] གསོས། A.

745 མཆོ་ཡི་མཆིན་གསོས། B, C] ཆོད་འཆིན་གསོས། A.

746 གསུམ་ཅོ་ B, C] གཉིས་ཅོ་ A.

747 ཅོ་ B, C] ཅོ་ A.

748 ཅོ་ B] ཅོ་ A, C.





[§3.2.4] 白色，赤色，青色という三 [色の光] が  
 ダーラニーの光として発散し，  
 密護を [勤修者≈馬頭尊≈無量寿仏の中に] 収斂させる。[その結果，] 習気や  
 障礙は清除された。  
 [彼／彼女は] 一連の金剛としてあらわれた  
 他の [如何ような] ものによっても害われることがない甲冑を着用すること  
 になる。

[§3.2.5] [また，ダーラニーを次のように唱える]  
 「*oṃ vajrayakṣa kavaci hūṃ bhrūṃ*」。  
 まさしくこれ (上記のダーラニー) によって密護は最勝となる。  
 この密護 [のダーラニーに関する次第] は，  
 日の入り，即ち，夕陽が沈む頃と，  
 日の出，即ち，朝一番という [一日に] 二度，  
 [少なくとも] 一回は [勤行] すること。  
 [これは] あらゆる長寿成就法に通ずる前行であり，  
 [これによって] 主である無量寿仏の密護は究竟に至る。  
 誓言！ 封印，封印，封印！



### [§3.3. 秘密なる成就法の由来]

[§3.3.1] [これ (秘密なる成就法) は，] 私， [即ち] ウッディヤーナのパドマサンバヴァ  
 が，  
 無量寿仏の御前でお伺いした，  
 不可思議な寿命の成就法である。  
 [その] 一切を前行，本行，そして，  
 後行という 3つの儀軌として説き明かそう。  
 [具体的には]  
 [1.] 外なる [成就法] として，守護輪に関する修習，  
 [2.] 内なる [成就法] として，本尊に一心に思索を深めてゆく修習，  
 [3.] 秘密なる [成就法] として，風の養生術

<sup>750</sup> Cf. Appendix B, no. 13 (A 529,3; B 263,4; C 211,4).

を [その内容と] する。

[§3.3.2] [これは] 秘密の名で「偉大なるグル・ダクポツアル」[という]  
師の (私パドマサンバヴァの) 成就法の中でも  
秘密なる成就法で、「虚空の金剛」という。  
由々しい秘密であるから秘匿するけれども、  
この成就法には、明確に [その秘密を記して] 安置するものである。  
後世の勤行者たるヨーガ行者が  
この秘法と巡り会い、  
悲心の懐にある弟子が増え広がるように！  
誓言！ 封印，封印，封印！

[§3.4. 風による長寿成就法「命の風」]

[§3.4.1] 主である無量寿仏に帰命する。寿命を成就することを望む者は、まずもって帰依 [と、最勝なる菩提への] 発心をなすものである。その後、[勤修者は、あなた] 自身の臍の下に「𑖀」字 [を観想し、] 思索を深めてゆく。それ（「𑖀」字）から火が眩しく輝き、[あなた自身の] 内部にある、あらゆる [1.] 肉体的病気，[2.] 精神的病魔，そして [3.] 罪障を焼却し、[すっかり] 清除されたものと思惑を深めてゆく。[その後、] 鼻孔から風の毒を三度排出する。

[§3.4.2] [続いて] 一切法が空であることについて思索を深めてゆく。そのまま [自心を] 蓮華台 [の上に載っている] 太陽と月 [の行相で] ありありと観想する。その (太陽と月の) 上には [あなたの] 心そのものが「𑖀」[字] に転変して [載っている。この𑖀字は、さらに] 「仏世尊，如來応供正遍知，[無量] 寿智，[善] 決定光明王」とお呼び申し上げる方に [転変する。そのご様子を]

[1.] 御身は白色，

[2.] 一面二臂で禅定印を結んでいらっしゃり，

[3.] 様々な宝飾品によって荘厳されていて，

[4.] 微かに笑みを浮かべていらっしゃる

[— と、このように生起して] 思索を深めてゆく。そして再び [鼻孔から] 息の毒を三度排出する。

[§3.4.3] その後、風によって寿命を成就することを [次のように勤行する]。まず、有情の身体を [あなたの鉄のように頑丈な命] 脈に生起する。[この] 時、六度刷新された風が命脈に到達することから [この勤行は] 「命の風」と呼ばれる。この「命の風」が [寿命を] 回復させるので、寿命が長くなるのである。

## [§3.5. 本行儀軌]

[§3.5.1] [3つの儀軌の中の] 本行として、[次のように勤行する。勤修者は] 身体を結跏趺坐にし、両手は禅定印を結ぶ。眼にする虚空中に虚空を見定め、口から息を吸い込みなさい。そうすれば、唾液は [必要以上に分泌] されることがない。[勤行の] 対象は、外的な [四] 大と一切虚空であり、[これが] 己の臍 [輪] に集合した [様子を]、ありありと観想する。できうる限り [息を] 止め、[息を止めることが] できなくなったところで、ゆっくり [息を] 吐き出す。外に [吐き出された息が] また虚空になっていく [様子を]、ありありと観想する。

[§3.5.2] 以上のように [本行を] 三度 [勤行] すると、「命の風」は、母と子が出逢った (勤行が成功した) 証に噫気となって自然と出る。このように [以上の次第を] 一日に [少なくとも] 一度 [勤行] すれば、寿命が尽きて死ぬことをも欺くであろう。[この次第を] 間断なく連続すれば、[その者の] 寿命は太陽と月に齊しく [壮大なスケールに] なるであろう。[この次第を勤行] する時刻は、陽が昇って暖かくなった朝方、[前日食した] 古い [腐食した] 夕食が消化し、新しい [食べ物] (朝食) を口にしない内とされる。

## [§3.6. 後行儀軌]

[§3.6.1] [3つの儀軌の中の] 後行儀軌としては、  
 [1.] 有情の命を切断しないこと、  
 [2.] 寿命と [身] 界を損なう食べ物を食さないこと、  
 [——があげられる]。

## [§3.7. 埋蔵の趣意]

[§3.7.1] [この] 無量寿仏の成就法 (長寿成就法『チャッキドンポ』) は、  
 [私、即ち] ウッディヤーナのパドマサンバヴァによって  
 後世の有縁者の為に  
 えび茶色の銅製の箱の中央に [収めて] 秘匿される。  
 [この成就法が後世の] 一有縁者 (i.e. リクズイン・グウデムチェン) と巡り会う  
 ように！  
 誓言！ 封印，封印，封印！

[§3.7.2] この長寿成就法 (長寿成就法『チャッキドンポ』) と養生術の丸薬を連続して用いれば、[寿] 命は人間にとっての百年まで延びるであろう。[これは] チャンダーリー女神の教誨である。誓言！ 封印，封印，封印！

## [§3.8. コロフォン]

[§3.8.1] [長寿成就法『チャッキドンポ』] は チャン地方のサンサンハダクの中腹から、

[より詳しくは、中央／東／南／西／北の5箇所に分けて、そこに埋蔵された内の] 南に位置する黄色をした [金] 庫から、[私] 持明者グウキデムトゥチェンによって発掘されたものである。

[§3.9. 説示内容の要綱]

[§3.9.1] 原文に [戻る] なら、[§1.5.2 で説示した、9つの滋養物に含まれる] 4つの不死なる甘露は――

- [1.] 腎臓を治癒するシュクパ (≈ビヤクシン) から [抽出した不死なる] 甘露,
  - [2.] 心臓を治癒するバル (≈シャクナゲ) から [抽出した不死なる] 甘露,
  - [3.] 肺を治癒するケンパ (≈ヨモギ) から [抽出した不死なる] 甘露,
  - [4.] 肝臓を治癒するツェ [ゴ] (≈マオウ) から [抽出した不死なる] 甘露
- [――である]。

2つの因、3つの縁、そして、[この] 4つの [不死なる] 甘露を [説示する、この長寿成就法 (長寿成就法『チャッキドンポ』) を]

行ずるなら、功德は量り知れない。

――と、[上に説示] した。

### 4.4.3. §3. 詳解

本4.4.3章では、第3節秘密なる成就法「虚空の金剛」のテキスト、及び、翻訳に基づく考察を詳解として提出する。

詳解に入る前に、『Schwieger目録』に提出された当該節の要約 (p. 152) を参照したい。ツルプ版 (RT\_A) の目録として名高い Schwieger目録は、本論文においては第3節に配置した秘密なる成就法「虚空の金剛」を、奥義なる成就法「虚空の金剛」(‘*yañ gsañ nam mkha’i rdo rje* [...] *Überaus geheimer Himmelsvajra*’, p. 152) として、即ち、同目録における秘密なる成就法「*hrīḥ*: という一 [種子]」(‘*gsaṅ sgrub hrīḥ gcig ma* [...] Die (durch Konzentration auf die) eine (Silbe) *hrīḥ* (gekennzeichnete) geheime Vollendung (des Lebens)’, p. 151) の後に——いわば第4節として——配置しているが、ここでは、しかし、便宜上、第3節に相当する秘密なる成就法「虚空の金剛」として考察をすすめる。

『Schwieger目録』によれば、当該節「虚空の金剛」は、次の2つの儀軌(‘Ritualvorschriften’)によって構成されている。(1.) まず前行(‘vorbereitende Verrichtung’)として、馬頭尊(‘*rTa-mgrin*’)と無量寿仏(‘*Tshe-dpag-med*’)を勤修者の胸部(‘Herzstelle’)に観想する。この儀軌(‘Vorschrift’)は、密護のダーラニー(‘Schutz bewirkender *mantras*’)の奉唱と観想を伴う。(2.) 次に、パドマサンバヴァが無量寿仏より授かったという死をも欺く(‘sogar den Tod zu täuschen vermag’)行(‘Praktizierung’)を勤修する。これは、一切虚空(‘gesamten Himmels’)を勤修者の臍部(‘Nabel’)に観想する行である。<sup>751</sup>

以上に参照した『Schwieger目録』の考察は実を得的を得た要約であり、本論文はこの優れた研究成果から多くを学ぶものである。同目録には、しかし、別の視点からの考察が提示される若干の余地もあろう。以下に考究を試みたい。

## §3.1. 帰敬

### §3.1.1

第3節秘密なる成就法「虚空の金剛」の冒頭にあたる当該 §3.1.1 では、主である無量寿仏(*mgon po tshe dpag med*)に帰命する帰敬文が奉唱される。長寿成就法『チャッキドンポ』中に、節の冒頭に奉唱される帰敬文は、他に第0節はしがき (§0.1.1) と、第1節外なる成就法 (§1.1.1) に見在する。<sup>752</sup> これら帰敬文は、第0節では、ダーキニーの符牒／インド語／

<sup>751</sup> See SCHWIEGER 1995:152: ‘Der Text besteht aus zwei Ritualvorschriften: 1. als vorbereitende Verrichtung zu *Tshe-sgrub*-Ritualen allgemein eine angeblich von *Tshe-dpag-med* verkündete Vorschrift zur Meditation des *rTa-mgrin* sowie des *Tshe-dpag-med* an seiner Herzstelle verbunden mit der rezitation und Visualisation Schutz bewirkender *mantras*, 2. ein *Tshe-sgrub*-Ritual, das *Padma-byun-gnas* in *bSam-yas* von *Tshe-dpag med* erbeten haben soll und durch dessen regelmäßige Praktizierung der *yogin* angeblich sogar den Tod zu täuschen vermag. In seinem Mittelpunkt steht die imaginäre Konzentration des gesamten Himmels im eigenen Nabel’.

<sup>752</sup> §0.1.1: [...] *rgya gar skad du: indra ā yuḥdha ra na ha na ma: bod skad du: mgon po tshe dpag med la phyag ’tshal lo.*

§1.1.1: [...] *bod skad du: rig ’dzin tshe’i sgrub thabs: mgon po tshe dpag med la phyag ’tshal lo.*

§3.1.1: [...] *mgon po tshe dpag med la phyag ’tshal lo.*

チベット語という3言語で、第1節では、ダーキニーの符牒／ウッディヤーナ語／チベット語という3言語で、おそらくは散文スタイルによって奉唱されるものと想定されることは、当該箇所の詳細において考察を試みたとおりである。§3.1.1において奉唱される帰敬文は、これらと比較して、(1.) ダーキニーの符牒、或いはウッディヤーナ語を記した文字を含み、<sup>753</sup> (2.) 散文スタイルで、(3.) 主である無量寿仏に帰命するものである、と想定される3点に、相似点が見出し得る。

## §3.2. 前行儀軌

### §3.2.1

第3節秘密なる成就法「虚空の金剛」の実質的な序開に当たる当該 §3.2.1 には、あらゆる災難 (*bar chad thams cad*) から勤修者を守る (*bsrung ba*) 次第が説かれる。当該の次第は、先んじていえば、これが閉じられる §3.2.5 に「あらゆる長寿成就法に通ずる前行」 (§3.2.5: *tshes sgrub kun gyi sngon 'gro*) と表現されており、ここに当該 §3.2.1 から §3.2.5 までが前行儀軌にあたることが想定される。

その冒頭、当該 §3.2.1 では、勤修者が自身を馬頭尊 (*rTa-mgrin*; *Hayagrīva*) として、次のように我生起する次第が説示される。(1.) 御身は赤色 (*mdog dmar*), (2.) 一面二臂に (*zhal gcig phyag gnyis*) 弓と矢を持ち (*mda' gzhu bsnams*), (3.) えび茶色の鬘をした (*rngog ma smug*) 碧馬頭 (*rta mgo ljang gu*) で、(4.) 尸陀林の装束 (*dur khrod chas*)<sup>754</sup> によって見事に荘厳されて、(5.) 昂然と (*klong*) 眩しく輝く (*'bar*) 劫火 (*bskal pa'i me*) の中にある。<sup>755</sup>

<sup>753</sup> Cf. Appendix B, no. 12 (A 528,1; B 262,5; C210,5).

<sup>754</sup> See NORBU 1993:84–85: ‘The eight graveyard adornments (*Dur. khrod chhas* [sic] *brgyad*) of the wrathful deities are described as follows:

The three garments (*bGo. ba'i gos gsum*), which are: An elephant skin, which is a sign that ignorance has been subdued by the ten strengths; A human skin, which is a sign that desire has been subdued by “desireless great compassion”; and A tiger skin, which is a sign that anger or hatred has been subdued by “wrathful compassion”.

The two kinds of fastened ornaments (*gDags. pa'i rgyan gnyis*), which are as follows: Human skull ornaments, dried and fresh, which are: The crown of five dry human skulls (*Thod. pa skam. po lnga'i dbu. rgyan*), The garland of fifty fresh heads (*rLon. pa lnga. bchu'i do. shal*), The bracelets of fragments of human heads (*Tshal. bu'i dpung. rgyan*), and [...].

The three smeared things (*Byug. pa'i rdzas gsum*) symbolising the subduing of jealousy, which are: Ashes piled on the forehead, Blood spotting the bridge of the nose or cheeks, and Moldy grease smeared on the chin’.

<sup>755</sup> 『サーダナマラー』 (*Sādhanamālā*) に収録されている2篇の「馬頭尊の成就法」 (*Hayagrīvasādhana*, nos. 259–260, *Sādhanamālā*, vol. 2, pp. 508–510) に見られる馬頭尊の主な図像上の特徴は、OBA (大羽) 2008 の付表1 (馬頭の関連する文献一覧) に、次のように纏められている (p. 72)。

‘*Hayagrīvasādhana*, no. 259. 1165年までに成立。身色赤、三面 (右面青、左面白) 八臂、三眼、蛇装飾、展左、忿怒形、三面のうち、一面は笑面、右面は牙を持つ、虎皮の腰布、阿闍の化仏を付けた冠。

*Hayagrīvasādhana*, no. 260. 1165年までに成立。身色赤、面数臂数は不明だが、馬がいなく面を持つ、茶口髭、鼓腹短軀、牙を持つ、蛇装飾、髑髏首飾、展左、虎皮の腰布、阿弥陀の化仏を付けた冠’

該表は、関連する『成就法的大海』 (*Grub thabs rgya mtsho*. ‘*Grub thabs rgya tso*’ (p. 72) は、おそらく誤記であろう) に収録された他の成就法も一覧にしており、馬頭尊の図像上の特徴が種々知られる。

馬頭尊が、成就八部教 (*sgrub pa bka' brgyad/sgrub pa sde brgyad*) による分類において、蓮華口密成就部の寂靜相である無量寿仏 (*Tshe-dpag-med*) に対する忿怒相として知られることは、第2.2.5章 (『リンチェンテルズ』における成就八部教) において考察したとおりである。馬頭尊は、SAKUMA (佐久間) 2015 によれば、‘不死の靈藥 (アムリタ) もしくは不老不死の靈藥 (ラサーヤナ) と関わりが深く、生命に関して神秘的な力をそなえていると考えられていた’ (p. 152)。馬頭尊の起源は古く、ヴィシュヌ (*Viṣṇu*) やアシュヴィン (*Aśvin*) との関連が指摘されている。<sup>756</sup> 時に「馬頭明王」「馬頭観音」として勤修者を災難から守る他、人間の生命によく働きかけることで、甘露の鍊金藥 (*bcud len; rasāyana*) にも関わると考えられる。チベット大蔵経の密教部 (*rGyud*) には、馬頭尊に関わる成就法 (E.g. D 2142/ P 2995: *rTa mgrin gyi sgrub thabs. Hayagrīvasādhana*) が数種伝わる。<sup>757</sup> これらの資料が長寿成就法と同列に取り扱われる資料となり得るかについては、今後の学究に期したい。

### §3.2.2

§3.2.2 では、§3.2.1 において勤修者自身を馬頭尊として生起した、その胸部に (*thugs kar*) 無量寿仏 (*Tshe-dpag-med; Amitāyus*) を生起する次第が説かれる。

ここで禪定印を結んだ (*mnyam bzhag phyag*) 寂靜相として (*zhi ba'i tshul la*) 生起される無量寿仏の様相は、赤い (*dmar*) ルビー (*padmarāga*) 色を帯びた (*mdog*) 身体を、寂靜相の意匠によって (*zhi ba'i rgyan gyis*) 奇麗に莊嚴されており (*mdzes par brgyan*)、ここに、§2.3.1 において、三昧耶薩埵として生起された無量光仏 (*'Od-dpag-med; Amitābha*) との相似点が指摘し得る。<sup>758</sup>

<sup>756</sup> See MIYASAKA (宮坂) 1991:1: ‘ハヤグリーヴァ (*Hayagrīva, rta mgrin* 馬頭, *Hayaśiras*) は、ヒンドゥー教ではヴィシュヌ神の化身であり、密教では観音部のなかの忿怒尊として特異な存在である。『大日経』をはじめ多くの経軌に所説が認められる’; NAKAMURA (中村) 2004: 200–201: ‘密教においては、馬頭観音という異種な姿も成立した。[...] これに対応するものはインドのアシュヴィン (*Aśvin* 「馬に乗る神」の意) であろうか。アシュヴィン神は後代に馬頭観音の像を成立させる原型となった’。

<sup>757</sup> E.g. D 2142/P 2995, D 3053/P 3877, D 3054/P 3878, D 3055/P 3879, D 3056/P 3880, D 3057/P 3881, D 3058/P 3882, D 3277/P 4100, D 3390/P 4211, D 3621/P 4443, D 3622/P 4444, D 3623/P 4445.

<sup>758</sup> §2.3.1: [...] *'od dpag med:*  
*sku mdog dmar po skyil krung bzhugs:*  
*sprul sku'i cha byad dar chos mnabs:*  
*phyag gnyis mnyam bzhag tshe bum 'dzin:*  
*sku che yan lag hrag pa'i tshad:*

§3.2.2: [...] *tshe dpag med:*  
*zhi ba'i tshul la mnyam bzhag phyag:*  
*sku mdog padma rā ga dmar:*  
*zhi ba'i rgyan gyis mdzes par brgyan:*



### §3.2.3

§3.2.3には、密護のダーラニー (*bsrung ba'i sngags*) を念誦する (*bzla ba*) 次第が説かれる。このダーラニーは、先んじていえば、次の §3.2.4 において、ダーラニーの光として (*sngags kyi 'od du*) 発散し、勤修者 (馬頭尊≈無量寿仏) の中に密護 (*bsrung*) を収斂させるものである。当該 §3.2.3 では、その光源としての五色の光線を伴う粒滴 (*thig le mdog: 'od lnga'i zer dang bcas pa*) を、無量寿仏の胸部 (*thugs kar*) に生起、観想して、思索を深めてゆく (*bsgom*)。この光源としての粒滴 (*thig le*) は、従って、入れ子のように、馬頭尊の「胸部に」 (§3.2.2: *thugs kar*) 生起された無量寿仏の「胸部に」 (§3.2.3: *thugs kar*) 眩しく輝くものとなろう。

密護のダーラニーは、<sup>759</sup> 1文が8音節より成る3文構成で、各文の先頭に位置する種子「*om*」「*āḥ*」「*hūm*」に続く「*bhrūm vajrāyuṣe hūm āḥ*」が全3文に共通する。この内の「*bhrūm vajrāyuṣe*」は、第2節内なる成就法「チャッキドンポ」の §2.6.1 の終わりに記されたダーラニー「*āyurjñāna bhindu bhrūm. ṅrī bhrūm vajrāyuṣe om āḥ*」の内にも看取され、「*bhrūm vajrāyuṣe*」が、『チャッキドンポ』において重要な意義をもつダーラニーであることが知られる。

### §3.2.4

§3.2.4 では、§3.2.3 において唱えた3文構成の密護のダーラニー (*bsrung ba'i sngags*) が、ダーラニーの光 (*sngags kyi 'od du*) となって発散し (*'phros pa*)、その後、密護 (*bsrung*) を勤修者の中に収斂させる (*bstims*) 様子が観想される。

ダーラニーの光が帯びる、この白／赤／青という三色は、例えば、身口意の三密に相当するものとも解せようが、<sup>760</sup> 直前の §3.2.3 において唱えた3文構成の密護のダーラニーに、特には各文の先頭に位置する種子「*om*」「*āḥ*」「*hūm*」に、順に対応するものと想定される。密護のダーラニーは、光となって発散した後、密護を勤修者の中に収斂させるものであり、その結果として2つの利点を彼／彼女に齎すものである。その第一は、彼／彼女の内にある習気 (*bag chags*) や障礙 (*sgrib pa*) を清除すること (*sbyangs*) であり、その第二は、一連の金剛としてあらわれた (*rdo rje lu gu rgyud du gsal*) 他の如何ようなものによっても害われることがない (*mi tshugs*) 甲冑を、彼／彼女をして着用する (*bgo*) 状態にならしめるということである。

この甲冑が勤修者を堅固に防護、或いは降伏する対象は、彼／彼女の内にある習気や障礙であり、第1節外なる成就法において、勤修者が欺くところの「6つの死」 (§1.6.1: '*chi ba drug po*. E.g. 疫病による死)、といった外的要因ではない。種子 (*'bru*) に関わる密護の甲冑については、『キーラの火炎鬘』にも「無上なる空性の甲冑」 (*stong pa'i go cha bla*

<sup>759</sup> §3.2.3:

*om bhrūm vajrāyuṣe hūm āḥ |*

*āḥ bhrūm vajrāyuṣe hūm āḥ |*

*hūm bhrūm vajrāyuṣe hūm āḥ |*

<sup>760</sup> Cf. EVANS-WENTZ 1954:144: 'Overcome with joy and wonder, Mandārāvā and her followers swooned. Padma revived them by emanating red, white, and blue light rays'; 144n2: 'The red ray symbolizes the speech-principle; the white, the body-principle; the blue, the mind-principle'.

na med) という用例が看取され、勤修者はこれによって一切の相の対象を討ち滅ぼし (mtshan ma'i yul rnams kun bcom nas), 無所縁の界に寿命を隠す (mi dmigs dbyings su tshe sbas pa) とされる。<sup>761</sup>

勤修者を防護するために「一連の金剛としてあらわれた」(rdo rje lu gu rgyud du gsal)——と読解した——甲冑 (go cha; Skt. kavaca)<sup>762</sup>には、ニヤーサ (nyāsa) や<sup>763</sup>護符としての機能も、<sup>764</sup>ダーラニーに関連して注意される。lu gu rgyud は、字義通りには「羊の[群れ]の繋がり」とも訳され、rdo rje lu gu rgyud は「金剛の如き羊の[群れ]の連なり」或いは‘金剛鎖’ (HIRAMATSU (平松) 1982:61) という、教誡部 (man ngag sde) の実践における「トゥーガル」(thod rgal) の用語として知られる。<sup>765</sup> 当該の文脈においては、しかし、白色、赤色、青色という三色のダーラニーの光が、勤修者の中に密護となって数珠繋ぎに連続して収斂する様子を表現するものであろう。その結果、勤修者は、金剛によって間断なく仕立て上げられた、他の如何ようなものによっても害われることがない金剛製の甲冑を着用することになる。この頑丈さを趣意とする金剛 (rdo rje) は、秘密なる成就法の節名「虚空の金剛」(nam mkha'i rdo rje) 中に見出されるが、甲冑と馬頭尊 (§3.2.1: rta mgrin)

<sup>761</sup> Phur pa me lce'i 'phreng ba, 220,1:  
go cha'i sbyor bas 'od du zhu:  
'bru lnga'i yi ge 'bru gsum mam:  
'bru gcig mi dmigs dbyings su thim:  
stong pa nyid du gyur pa ni:  
stong pa'i go cha bla na med:  
mtshan ma'i yul rnams kun bcom nas:  
mi dmigs dbyings su tshe sbas pas:

Cf. BOORD 1993:211: '[...] this 'precept of longevity' is said to be an excellent activity which possesses the unexcelled armour (kavaca) of mahāsūnyatā, armour with the seal (mudrā) of protection against perverted views. The *Garland of Flames* says that, of all armours, knowledge of sūnyatā is supreme for it destroys all objective weapons. The yogin should therefore conceal his acquired lifespan within the sphere beyond imagination where obstructors and misleaders can do it no harm. [...] "By donning the indestructible vajra armour (one) is protected from the demons of mistaken ideas." OM VAJRAKAVACA HŪM'.

<sup>762</sup> See CHANDRA, s.v. go cha (p. 357): '(1) kañcuka, (2) kavaca, (3) daśana, [...]'.  
<sup>763</sup> 甲冑 (kavaca) に認められる身体を防護する機能がニヤーサ (nyāsa) と関連することは、SAKUMA (佐久間) 1993 に「身体の各部に真言を置くこと」(p. 226) として考察されている。SAKUMA (佐久間) 1993 の例示によれば、『サーダナマラー』(Sādhanaṃālā) に収録された「サプタークシャラ成就法」(Saptākṣarasādhana, Sādhanaṃālā, no. 251, vol. 2, pp. 490–495) では、「行者は六人の神々の本質をもつ真言でできた甲冑を既に本尊 (Vajradāka) となった自分自身に着せる。[...] 次に六人の神々の真言によって浄化された真言の甲冑を、妃である Vajravārāhī に着せる」(p. 227) とされている。

<sup>764</sup> See PADOUX 2011:101: 'We must also not forget the numerous uses of written mantras on amulets (kavaca) which, extremely frequent in modern times and nowadays, are in fact a very ancient use'.

<sup>765</sup> See HIRAMATSU (平松) 1982:61: '[...] 「金剛鎖」 rdo rje lu gu rgyud (「四顕現」のうちの第一の顕現) [...]'. See also YAMAGUCHI (山口) 1988:[16].

との類推も、実践的意義をもって長寿に関係するものと考えられる。<sup>766</sup> この点に関する具体的論究については、今後の学究に期したい。

§2.5.3 では、ダーラニー奉唱の所産であるダーラニーの光線が二世間を遍満し、鉄鉤の如く掻き集めた寿命と生命が勤修者の上に雨のように降り注いで彼／彼女の中に収斂する様子が観想された。当該 §3.2.4 にもこれに類似する、光の発散 (§§2.4.1, 3.2.4: *'phros*) と収斂 (§§2.5.3, 3.2.4: *bstims*) という広観斂観の構成が看取される。当該第3節秘密なる「虚空の金剛」は、ダーラニーの光 (§3.2.4: *sngags kyi 'od*) が発散した後、勤修者の中に収斂するまでの過程を叙述しないが、第2節内なる成就法「チャッキドンポ」におけるダーラニーの光線 (§2.5.1: *sngags kyi 'od zer*) の仕業をもって補えば、おそらく密護のダーラニーも、光となって二世間を遍満し、あらゆる災難から勤修者を守る (*bsrung ba*) 密護となって勤修者の中に収斂するものと想定し得るであろう。

### §3.2.5

§3.2.1 に開始された前行儀軌は、当該 §3.2.5 において「*om vajrayakṣa kavaci hūm bhrūm*」というダーラニーを読誦することにより、その密護が最勝となって (*bsrung ba'i mchog tu 'gyur*) 締め括られる。当該のダーラニーが、前の §3.2.4 において勤修者が着用した「一連の金剛としてあらわれた他の如何ようなものによっても害われることがない甲冑」 (§3.2.4: *rdo rje lu gu rgyud du gsal: gzhan gyis mi tshugs go cha*) と直接の連絡を持つことは、「金剛」(*vajra/rdo rje*) や「甲冑」(*kavaci/go cha*) といった用語から見て明らかであろう。この前行儀軌は、(1.) 日の入り、即ち、夕陽が沈む頃 (*nyi ma dmar thag chod ka*) と、(2.) 日の出、即ち、朝一番 (*skya rengs dang po shar dus*) という一日に二度、少なくとも一回は (*lan re*) 勤行するよう説示されている。何故なら、この次第は、あらゆる長寿成就法に通ずる前行 (*tshe sgrub kun gyi sngon 'gro*) だからである。

続く一文 *mgon po tshe dpag med kyi bsrung rdzogs so* には、密護のダーラニーに関わる異読が *bsrung* (CD\_A) と *gsungs pa* (CD\_B, CD\_C) との間に見在する。筆者が想定する読み (*em.*) は『心成就法ダクポツアルの法類』に基づき、これを「[密護のダーラニーに関する次第によって] 主である無量寿仏の密護は究竟に至る」と訳出したが、『リンチェンテルズ』所伝の読みでは「主である無量寿仏によって説かれたことが究竟に至る」即ち、ここに「説き終わる」ものと解せよう。『心成就法ダクポツアルの法類』では「[無量寿仏の] 密護」(*bsrung*) に相当するものを『リンチェンテルズ』では「[無量寿仏によって] 説かれたこと」(*gsungs pa*) と読むものであるから、何れにしても、当該次第が無量寿仏に関連することにおいて変わりはない。

前行儀軌の次第の最後に付加された誓言 (*sa ma ya≈samaya*) が、封印の言「*rgya rgya rgya*」共に、章／節末において既述の内容が真実であることを宣誓し、封印する働きを有することは、第0節の節末 (§0.3.1.3) の詳解において考察した通りである。従って、この

<sup>766</sup> See BABU 1990:155: 'In the *Kavaca* the protection for different parts of the body is sought for from the deity. In the end of this *Kavaca*, the praise of intended result of recitation of the *Kavaca* is given. It is said that the devotee who recites this *Kavaca* becomes Vāgīśvara (Hayagrīva) himself after his departure from the body and during this life-time he would get by the grace of Hayagrīva definitely without least doubt longevity, health, wealth and mastery over all branches of knowledge'.

直後に置かれたダーキニーの符牒，或いはウツディヤーナ語を記した文字<sup>767</sup>も，これに相当する説示を与えるものと想定される。

*samaya* (Tib. *dam tshig*)<sup>768</sup> は，三昧耶という音写語からよく知られるように，密教の勤修者にとって極めて重要な科範である。主である無量寿仏の密護が究竟に至って成就を得るには，これを堅持しなければならず，これを堅持しなければ，成就は得られない。チャンテルの心成就法 (*thugs sgrub*) におけるその具体的教証については，<sup>769</sup> しかし，今後の学究に期したい。

### §3.3. 秘密なる成就法の由来

#### §3.3.1

§3.3.1 には，第3節秘密なる成就法「虚空の金剛」の系譜，由来が，その具体的内容と共に説示されている。

当該成就法は，「私が」(*ngas*) という能格 (*ergative*)<sup>770</sup> が用いられているように，ウツディヤーナより来たるパドマサンバヴァ (*o rgyan padma 'byung gnas*) が，無量寿仏の御前で (*spyan sngar phyin*) 直々にお伺いした (*zhus*) 不可思議な (*bsam yas*) 長寿成就法 (*tshe yi sgrub pa*) であるとされる。ここで「不可思議な」と解釈，和訳した *bsam yas* は，『Schwieger目録』では異なった解釈，即ち「パドマサンバヴァはこの長寿成就法をサムエー (*bSam-yas*) において無量寿仏に請願した」(*'ein Tshe-sgrub-Ritual, das Padma 'byun-gnas in bSam-yas von Tshe-dpag-med erbeten haben soll'*, p. 152) という見解が，おそらくは当該部分に相当する独訳として，提出されている。

パドマサンバヴァが無量寿仏より『チャッキドンポ』を授かった場所は，当該成就法中に明記されていないものの，現在の東ネパールに比定されるマーラティカ洞窟だとする伝承が伝わることは，第2.5章(起源)において考察したとおりである。続く §3.3.2 に「由々しい秘密であるから秘匿するけれども」(*shin tu gsang nas gab pa yang*) と説示されるように，第3節秘密なる成就法「虚空の金剛」が伝える内容は，他の諸節に比して，より密やかと見做し得ることからしても，当該箇所の *bsam yas* は，長寿成就法 (*tshe yi*

<sup>767</sup> Cf. Appendix B, no. 13 (A 529,3; B 263,4; C 211,4).

<sup>768</sup> See 『蔵漢』 s.v. *'dam tshig* (p. 1248): '(1) <*samaya*> *'da' dka' rdo rje'i tha tshig ces ji ltar bcas pa las mi 'da' bar g.yar dam gnyan por khas blangs pa'i tha tshig [...]* (2) (*yul*) *'khon 'gras/ [...]* (3) (*yul*) *sha zhen dang/mdza' ba'i 'du shes srung sems'*.

<sup>769</sup> 密教の勤修者にとって三昧耶が極めて重要な科範であり，彼／彼女が成就を得るにはこれを堅持しなければならず，また，これを堅持しなければ成就は得られないということの教証としては，一般に，『サンヴァローダヤタントラ』(*Samvarodayatantra*) の灌頂品 (18.36cd-37) が知られる。

*Samvarodayatantra*, 18.36cd (p. 210):

*phyi nas man nāg ji bzhin du// dam tshig spyod pa la brtson pas// 36cd*  
*snod du byas paḥi rgyun gyis ni// 'khor lo la sogs sgom paḥi rim//*  
*yañ dag man nāg phun tshogs pas// dños grub hgyur gyi gzhan du min// 37*  
 For an English translation, see Tsuda 1974:299.

<sup>770</sup> See BEYER 1992:260.

sgrub pa) を修飾する「不可思議な」を意図するものと解釈する方が自然なのではないか。

パドマサンバヴァは、ここで、秘密なる成就法「虚空の金剛」の一切を (*kun la*), 前行 (*sngon 'gro*), 本行 (*dngos gzhi*), そして、後行 (*rjes kyi cho ga*) という3つの儀軌 (*cho ga gsum*) に分け、説き明かすという (*bshad*)。これは、具体的には、3つの成就法、即ち——(1.) 外なる成就法として (*phyi ltar*) 守護輪に関する修習 (*srung ba'i 'khor lo bsgom*), (2.) 内なる成就法として (*nang ltar*) 本尊に一心に思索を深めてゆく修習 (*lha yi ting 'dzin bsgom*), そして、(3.) 秘密なる成就法として (*gsang ba*) 風の養生術 (*rlung gi bcud len*)——を、その内容とするものと見受けられる。内なる成就法としてあげた一文 *nang ltar lha yi ting 'dzin bsgom*: は、校訂テキスト中に注記したように、『リンチェンテルズ』所伝の読みに見在しないこともあり、上にみた秘密なる成就法「虚空の金剛」の構成は、より慎重に検討する必要があると残されている。

### §3.3.2

§3.3.2 には、パドマサンバヴァの諸々の成就法 (*bla ma'i sgrub pa*; \**gurusādhana*) における秘密なる成就法「虚空の金剛」の位置付けが、彼の秘密の名前 (*gsang mtshan*) 「偉大なるグル・ダクポツアル」 (*ma hā gu ru drag po rtsal*) と共に説示されている。

*gsang mtshan* という用語は、当該箇所その他、第0節はしがきに「秘密の御名で「チャンドーリー女神」」 (§0.2.2: *gsang mtshan lha mo tsandha lī*) という用例がみとめられる。偉大なるグル・ダクポツアル (*ma hā gu ru drag po rtsal* ≈ Mahāguru Drag-po-rtsal) とチャンドーリー女神 (*lha mo tsandha lī* ≈ lHa-mo Caṇḍālī) とは、何らかのかたちで対をなすものであろう。ダクポツアルは、パドマサンバヴァの12変化身 (*rnam 'phrul bcu gnyis*) の一つに数えられる。<sup>771</sup> 彼のダクポ (*drag po*), 即ち勇猛/威猛は、<sup>772</sup> STEARNS 2007 が指摘するように、リクズイン・グウデムチェンが発掘したテルマとの関連が深く、<sup>773</sup> この点を鑑み

<sup>771</sup> See KUNSANG 2006:xviii: 'In this particular context, all the different classes of deities are embodied within the twelve manifestations of Guru Rinpoche, such as the eight herukas, the *mamos*, the peaceful and wrathful deities, Yamantaka, as well as Kilaya and Gongdü. These indispensable yidams in the Nyingma tradition are called *Ka*, *Gong*, and *Phur*, which represent Kabgye (*Eight Heruka Sadhanas*), Gongdü (Lama Gongdü, mind embodiment of the gurus), and Phurba (Vajra Kilaya). In the *Tuhdrub Barchey Künsel*, these twelve manifestations correspond to various emanations of Guru Rinpoche. Gyalwey Dzungtsen is Padma Gyalpo. Mawey Senge is Manjushri. Kyechok Tsülzang is Jambhala. Dükyi Shechen is Dorje Phurba. Dzamling Gyenchok is Vishuddha Heruka. Pema Jungney is Ugyen Dorje Chang. Kyepar Phakpey Rigdzin is Guru Rinpoche taming the dakas, dakinis, and spirits. Dzutrül Tuchen is Dorje Drollö. Dorje Draktsal is Guru Drakpo and Pema Heruka. Kalden Drendzey is all eight herukas together, especially Palchen Heruka. Raksha Tötrenge is Vajrapani. Dechen Gyalpo is Gongdü and Chakrasamvara'.

<sup>772</sup> See 『藏漢』 s.v. *drag po* (p. 1315): '(1.) ([1-1].) (*mngon*) ([1-1-1].) *lcags spre lo/* [...] ([1-1-2].) *lha dbang phyug chen po'i ming gi rnam grangs la ma skyes rkang gcig dang drag po sogs bcu gcig yod pas grangs bcu gcig mtshon/* [...] 1-2.) *drag po'i gzungs sngags/* [...] (2.) *zhi 'jam ma yin pa'i btsan shugs che ba'*, Mvy, no. 3128: *rudraḥ/ldrag po*, NEGI, s.v. *drag po* (p. 2354): '*ugra*', '*rudra*'.

<sup>773</sup> See STEARNS 2007:25: '*Dorjé Drakpotsel* is the terrible form of Padmasambhava found in Gökyi Demtruchen's treasure teachings'.

れば、Boord 1993 の論考に見られる「怒れる慈悲」(“wrathful compassion”, p. 225) という特別な表現が、ここで参照されよう。「怒れる慈悲」は、Boord 1993 に拠れば、ヴァジュラキーラ (Vajrakīla; rDo-rje-phur-pa; 金剛槩) の実践者が三毒 (貪瞋癡) を破壊する為に用いるものである。彼のダクポが破壊する対象は、しかし、究極的には「戲論」(‘prapañca’) に過ぎず、これを破壊し、一切有情の利益の為に正覺を得ることに、彼の「怒れる慈悲」の使途はあるとされる。<sup>774</sup> 当該箇所のだくポツアル (§3.3.2: drag po rtsal) には、このように、パドマサンバヴァの教令輪身<sup>775</sup> としての一面を認めることができるのではないであろうか。

秘密なる成就法「虚空の金剛」は、彼の成就法の中でも秘密なる成就法とされ、由々しい秘密であるから秘匿されるけれども、その秘密は明確に記されて安置されるものである。当該箇所には、後世の勤行者たるヨーガ行者 (phyi rabs rnal ’byor sgrub pa po) がこの秘法 (man ngag), 即ち、秘密なる成就法「虚空の金剛」と巡り会い (‘phrad nas), 悲心の懐にある弟子 (thugs rje ’i gdul bya) が増え広がるように (mtha’ rgyas shog)! という、彼らに対する豊祝ぎも看取される。この豊祝ぎは、既に彼らと巡り会って読誦されたものだと考えれば、後世の勤行者たるヨーガ行者をしてパドマサンバヴァの悲心の懐にある弟子たる事実を知らしめ、高揚せしめる効果もあるだろう。§3.3.2 の最後は、既述の内容が真実であることを宣誓し、封印する働きを有する誓言 (sa ma ya≈samaya) と封印の言「rgya rgya rgya」をもって結ばれている。

## §3.4. 風による長寿成就法「命の風」

### §3.4.1

§3.4. は、散文形式で叙述、説示されている。その冒頭 §3.4.1 は、主である無量寿仏への帰依 (skyabs ’gro) と最勝なる菩提への発心 (sems bskyed) に始まり、勤修者の臍の下に 𑖀 (ram) 字を觀想し、自身を清除する次第 (sbyangs par bsgom) が説かれる。

勤修者は、彼／彼女の臍の下に 𑖀 字 (yi ge ram zhig) を觀想し、思索を深めてゆく。すると、この 𑖀 字から火が眩しく輝き (’bar bas), 勤修者の内部にある、あらゆる (1.) 肉体的病氣 (nad), (2.) 精神的病魔 (gdon), そして (3.) 罪障 (sdig sgrib) を焼却する (bsregs)。その結果、勤修者はその内部がすっかり清除されたものと思案を深めてゆく (sbyangs par bsgom)。

<sup>774</sup> See Boord 1993:225: ‘[...] the Buddhist yogin entering the maṇḍala of Vajrakīla takes a vow of ‘wrathful compassion’ and strives to master the rites of the kīla by means of which his vow will be fulfilled when the world is liberated from evil. Outwardly, the rites are explained for the slaying of wrath. Inwardly, for the destruction of desire. Secretly, for the destruction of ignorance. These, however, are merely rites on the level of mental construct (prapañca). Ultimately, the yogin [sic] strives for the nail of the trikāya which is free of any such fabrication and, piecing the dhamadhātu, he slays all characteristics in their own place and realizes unbounded Buddhahood for the benefit of all beings’.

<sup>775</sup> See 『仏教語大辞典』s.v. 教令輪身 (p. 233): ‘教令輪を行なう身のこと。仏の教令を輪 (敵を破摧する武器) とする身の意。密教における明王などの忿怒相を表わしたものに名づける。剛強で強化しがたい衆生を導くために諸仏が方便として現わした身。威あり怒れるすがたを示す’.

ここで二語に分けて訳した *nad* と *gdon* には、異読が見在する。『リンチェンテルズ』所伝の読み (CD\_B, CD\_C) では、これを *nad gdon* と *dang* を入れずに一語で綴っており、このかたちは *graha* というサンスクリット対応語が知られるように<sup>776</sup>「病魔」という一熟語にした方が一般的かもしれない。ただここでは、𑄎字が発する火が、勤修者のあらゆる病魔を——肉体的にも精神的にも——焼尽滅却することを強調して、上のように三者に分けて訳出した。この過程で焼却されたこれら三者は、勤修者の鼻孔 (*sna bug*) から、風の毒 (*rlung gi dug*) となって三度にわたり排出される (*dbyung*) ことになる。この *rlung gi dug* には、続く §3.4.2 に *dbugs kyi dug* (息の毒) という類語が見られ、<sup>777</sup> 当該箇所 *rlung* は、従って、*dbugs* (息) の語義を有するものと想定される。*rlung* は、粗大な次元では、このように呼吸として表面化するが、微細な次元では、エネルギーとして識 (*rnam shes*; Skt. *vijñāna*) を支える程のものである。『五次第』 (*Rim lnga*; *Pañcakrama*) の冒頭に説示される「識の乗り物」 (*rnam shes bzhon pa*; Skt. *vijñāna-vāhana*) としての *rlung* (Skt. *vāyu*) は、これであろう。<sup>778</sup>

### §3.4.2

§3.4.2 には、先の 𑄎 (*ram*) 字による清除の次第 (§3.4.1) に続き、𑄎 (*hūm*) 字による「仏世尊、如來応供正遍知、[無量] 寿智、[善] 決定光明王」 (*bcom ldan 'das de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas tshe dang ye shes rnam par nges pa'i gzi brjid kyi rgyal po*) の生起次第が説かれる。

勤修者は、まず、一切法が空であること (*chos thams cad stong pa nyid*) について思索を深めてゆく。勤修者は、そのまま (*de'i ngang las*)、即ち、一切法が空であることについて思索を凝らしたまま、自心を蓮華台の上に載っている太陽と月の行相でありありと観想する (*bsam*)。太陽と月の上には、勤修者の心そのもの (*sems nyid*) が、𑄎字に転変して (*gyur pas*) 載っている。この観想の次第は、空性修習の状態から本尊を生起するにあたって、勤修者の心が完全に熟して、次の段階へ変化していくことを転変として段階づけるものである。

この 𑄎字は、さらに「仏世尊 (*bcom ldan 'das*)、如來応供正遍知 (*de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas*)、[無量] 寿智 (*tshe dang ye shes*)、[善]

<sup>776</sup> See JÄSCHKE, s.v. *nad gdon* (p. 267): 'graha', 『藏漢』 s.v. *nad gdon* (p. 1514): *nad dang gnod 'tshe byed mkhan gyi mi ma yin*'.

<sup>777</sup> See GERKE 2012: 'Breath (which is one of the meanings of the Tibetan term *rlung*, also sometimes called *dbug*; Skt. *prāṇa* or *vāyu*) has been related to vitality since very early times'.

<sup>778</sup> *Pañcakrama*, PK\_s I.3 (p. 1):  
*prāṇabhūtaś ca sattvānāṃ vāyv-ākhyāḥ sarvakarma-kṛt/  
vijñāna-vāhanaś caiṣa pañcātmā daśadhā punaḥ!*

PK\_t I.3 (p. 1):  
*sems can rnam kyi srog gyur pa//  
rlung zhes bya ba las kun byed//  
'di ni rnam shes bzhon pa ste//  
lnga yi bdag nyid bcu ming can//*

For a Japanese translation from the Tibetan, see SAKAI (酒井) 1974:178.

決定光明王 (*rnam par nges pa'i gzi brjid kyi rgyal po*) と呼称される者に転変する。<sup>779</sup> 字は、§1.2.2 において説示された五仏のダーラニー (*rigs lnga rgyal ba'i sngags*) 中に金剛薩埵 (*Vajrasattva*) の種子とされる点が、<sup>779</sup> ここで注意されよう。

当該 §3.4.2 に説示される「仏世尊，如來応供正遍知，[無量] 寿智，[善] 決定光明王」という呼称は、〈無量寿宗要経〉中に「無量寿智，善決定光明王，如來応供正遍知 (§8: *āparimitāyurjñānasuviniścitatejorājasya tathāgatasyārhatāḥ samyaksambuddhasya*)」或いは「仏世尊，無量寿智，善決定光明王，如來応供正遍知 (§11: *bhagavate aparimitāyurjñānasuviniścitatejorājāya tathāgatāyārhatē samyaksambuddhāya*)」，また，チベット語で「無量寿智，善決定光明王 (§10: *tshe dang ye shes dpag tu med pa shin tu rnam par nges pa gzi brjid kyi rgyal po*)」と呼び慣らさわれる如来の 108 個の名号 (*mtshan*) と多分に似通っていることが指摘される。その大要を、翻訳にあたり参照した漢訳も含め、下記表 (表20) に一覧にして表示してみたい。

表20: 〈無量寿宗要経〉中に説示される如来の 108 個の名号と §3.4.2 所説の名称一覧

	Loc.	Texts
1.	ApS_s1	§8: [...] <i>sattvās tasyāparimitāyurjñānasuviniścitatejorājasya tathāgatasyārhatāḥ samyaksambuddhasya nāmāṣṭottaraśatam</i> [...] §11: <i>om namo bhagavate aparimitāyurjñānasuviniścitatejorājāya tathāgatāyārhatē samyaksambuddhāya</i>
2.	ApS_t1	§10: [...] <i>sems can gang dag tshe dang ye shes [shes em.] ses dpag tu med pa shin tu rnam par nges pa gzi brjid kyi rgyal po'i mtshan brgya rtsa brgyad thos par gyur pa</i> [...] §13: <i>om na mo bha ga ba te a pa ri mi ta ā yur dznyā na su bi ni shtsi ta te dzo rā dzā ya ta thā ga tā ya a ra ha te saṃ myak saṃ bud dhā ya'</i>
3.	CD	§3.4.2: <i>bcom ldan 'das de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas tshe dang ye shes rnam par nges pa'i gzi brjid kyi rgyal po</i>
4.	ApS_c1	82a9: 號無量智決定王如來。阿耨多羅三藐三菩提現爲衆生開示說法。 82a16: 若有衆生。得聞是無量壽智決定王如來一百八名號者。
5.	ApS_c2	85a24: 有佛名無量壽決定光明王如來無上正等菩提。 85b9: 若有衆生聞是無量壽決定光明王如來名號。若能志心稱念一百八遍。

上の表20 を通覧して知られるように、当該 §3.4.2 所説の名称 (i.e. *bcom ldan 'das ... rgyal po*) は、〈無量寿宗要経〉のサンスクリット原典に対応する箇所が見出せる一方で、チベット語訳に見られない表現 (i.e. *bcom ldan 'das de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas*) を含むものである。〈無量寿宗要経〉には、ただし、第2.9章 (〈無量寿宗要経〉に比定されるダーラニー) において考察したように、リセクションの相違がその扱いにおいて大きな問題となるのであるから、限定された範囲でテキストの異同をあれこれ仔細することは、かえって毒となろう。ただ、上に指摘した両者の相似点は、『チャッキドンポ』が §2.4.2 において導入するダーラニーを、〈無量寿宗要経〉中に説示されるダーラニーに比定する筆者の想定を擁護するものではある。

<sup>779</sup> §1.2.2: *om badzra satwa hūm*:



𑖀字が転変するところのこの「仏世尊，如來応供正遍知，[無量] 寿智，[善] 決定光明王」と呼称される仏格は，(1.) 御身は白色，(2.) 一面二臂で (*zhal gcig phyag gnyis*) 禅定印を結び (*mnyam bzhas gi phyag rgya can*)，(3.) 様々な宝飾品によって荘厳されていて，(4.) 微かに笑みを浮かべている (*zhal 'dzum bag dang bcas pa*)，という特相をもって観想される。そして，勤修者は，「再び (*yang*)」即ち，𑖀字の次第 (§3.4.1) に続き，毒の息を三度排出する (*dbugs kyi dug lan gsum dbyung*)。

### §3.4.3

§§3.4.1–3.4.2 の諸次第によってあらゆる病魔，罪障を焼却した勤修者は，当該 §3.4.3 において，「命の風」(*srog gi rlung*)，即ち，「風によって寿命を成就すること」(*rlung la tshe sgrub pa*) を勤行する。

勤修者は，まず，彼／彼女の鉄のように頑丈な命脈に (*rtsa la*) 有情の身体 (*sems can gyi lus*) を生起する。この時，既に六度刷新された風 (*rlung 'khug pa drug*) が命脈に到達しているのので，この風は「命の風」(*srog gi rlung*) と呼称される。風が刷新された回数が六度を数えるのは，§3.4.1 と §3.4.2 に各三度，風／息 (*rlung/dbugs*) の毒を排出した (*dbyung*) 回数の合計であろう。§§3.4.1–3.4.2 の諸次第を経て命脈に到達した「命の風」は，寿命を回復させるものであるから (*gsos pas*) 寿命が自然と長くなるもの (*tshe ring bar 'gyur ba*) と説明される。

風 (*rlung*) については，周知の通り，チベットの伝統的医学に関わる「五風」(*rlung lnga*) 等の体系が知られる。<sup>780</sup> その術語でいえば，当該の「命の風」(*srog gi rlung*) は，「プラーナ」(*srog 'dzin*; Skt. *prāṇa*) に相当するかもしれない。「調気法」(‘breath control (*prāṇāyāma*)’，p. 45) は，WHITE 1996 が考察しているように，体内の命脈を開くものとして，人々の不死に関わってきた。<sup>781</sup> 古くはインドの医学書『チャラカ・サンヒター』(*Charaka-saṃhitā*) から，風を‘おさえておく’(NAGATOMO (長友) 2019:12) 等の知識は‘寿命を最高度にのぼすために役立つ’<sup>782</sup> とされている。<sup>782</sup> 「風によって寿命を成就すること」の源流を求めるとすれば，このようなインドの伝統的医学が，単なる理論的興味の対象としてではなく，実践的関心をもって求められるであろう。

<sup>780</sup> See 『蔵漢』 s.v. *rlung lnga* (p. 2737): ‘*sman rgyud sogs las bshad pa'i lus kyi rtsa ba'i rlung srog 'dzin dang/ thur sel/ gyen rgyu/ mnyam gnas/ khyab byed de lnga*'.

<sup>781</sup> WHITE 1996:45: ‘When the breath is stable, mind and semen are stabilized; but more important, when through breath control (*prāṇāyāma*) the base of the medial channel is opened, that same breath causes the reversal of mundane polarities. Rather than descending, semen, energy, and mind are now forced upwards into the cranial vault, effecting total yogic integration (*samādhi*), a reversal of the flow of time, immortality and transcendence over the entire created universe’.

<sup>782</sup> See NAGATOMO (長友) 2019:12: ‘ヴァールヨーヴィダ (*vāryovida*) は言った。もし風がきわめて強力で激しく迅速な (*śīghra*) 作用をし，緊急の (*ātyayika*) 対応を要するものであるということを知らなければ，突然激化した風に対応しなければならぬ医者は，どうして最初に死の恐れから〔患者を〕救うべく，前もってその風をおさえておくことができようか。また風をしかるべく賞賛すること (*stuti*) もまた，体力 (*bala*) や容色 (*varṇa* [sic]) の増進のため精力の増強と蓄積のため，知力の発揮のため，さらには寿命を最高度にのぼすために役立つのである’.

## §3.5. 本行儀軌

### §3.5.1

§3.5.1 には、§3.3.1 において秘密なる成就法「虚空の金剛」の一切を、前行 (*sngon 'gro*)、本行 (*dngos gzhi*)、そして、後行 (*rjes kyi cho ga*) という3つの儀軌 (§3.3.1: *cho ga gsum*) に分けた際の、本行が説示されている。

当該の勤行において勤修者は、身体を結跏趺坐にし (*lus skyil krung bcas te*)、両手は禪定印を結ぶ (*lag pa mnyam bzhag gi phyag rgya bcas*)。彼／彼女が眼にする虚空中に (*nam mkha' mthong ba'i sar*) 虚空を見定める (*nam mkha' la bltas*) という次第には、無意志動詞 (*heteronomous*) の *mthong* と意志動詞 (*autonomous*) の *bltas* という使い分けが看取されよう。ここで、口から息を吸い込むよう (*kha nas rngubs*) 注意されるのは、唾液 (*mchil ma*) の必要以上の分泌を抑える意図があつてのことかと推測される。

勤行の対象 (*dmigs pa*) は、外的な四大と一切虚空 (*phyi'i 'byung ba nam mkha' thams cad*) とされている。これは、或いは、五大 (*'byung ba lnga*)<sup>783</sup> と言い換え得るのかもしれない。虚空 (*nam mkha'*) は、一般には無為法であるから常であり、四大よりなる客塵の有為法と対概念となって、勤行の対象がこれら五大全てに及ぶことを表現したものと考えられる。勤修者は、こうした一切が、勤修者の臍輪に (*lte bar*) 集合した様子をありありと観想するのである (*bsam*)。おそらくはこれを事由とするものであろう、勤修者はできうる限りの間 (*thub tshad*) 息を止め (*bzung*)、息を止めることができなくなったところで (*mi thub pa dang*) ゆっくりと (*dal bus*) 息を吐き出す (*gtang*) ものと説示されている。このようにして勤修者の体外に吐き出された息が、また (*yang*) 虚空になっていく (*chod song bar*)<sup>784</sup> 様子を、ありありと観想するのである。

### §3.5.2

§3.5.2 には、秘密なる成就法の本行を勤行する回数、頻度、時刻、そしてこれを成就した証 (*rtags*) と功德が説示されている。本行の具体的次第は §3.5.1 に説示されたとおりであり、これを三度勤行すると (*lan gsum byas pas*)、「命の風」(*srog rlung*) は、母と子が出逢った証に (*ma bu 'phrod pa'i rtags*)、即ち、本行が成就した証として、噫気 (*sregs pa*) が自然と出る (*chil yong ste*) という。*ma bu* (母と子) という複合語 (*compound*) は、*ma bu'i 'phrod bsten* (よい結果をもたらすもの) という比喩的表現にみられるように、<sup>785</sup> 当該 §3.5.2 においては、本行が順調にすすんだ証果をよく表現するものであろう。従って、その証である噫気もまた、風／息 (*rlung/dbugs*) の毒に類するものとして、勤修者の体外に排出されるものと見做される。

本行を勤行する回数と頻度は、一日に少なくとも一度 (*nyi ma re la lan re*) とされ、これを成就した功德としては「寿命が尽きて死ぬことをも欺く」(*tshe zad pa'i 'chi ba'ang*)

<sup>783</sup> See 『蔵漢』 s.v. *'byung ba lnga* (p. 1982): '(1) *sa chu me rlung nam mkha' dang lnga'o/* [...] (2) *lcags dang shing chu me sa dang lnga'o*'.

<sup>784</sup> See JÄSCHKE, s.v. *chod pa* (p. 162): '1. to be cut off [...] 2. to be decided, settled, fixed [...]'].

<sup>785</sup> See 『蔵漢』 s.v. *ma bu'i 'phrod bsten* (p. 2046): '*ma dang bu gnyis ka'i lus bde thang yong ba'i thabs shes*'.

bslu'o)ということがあげられている。さらに、これを間断なく連続すれば (*rgyun du ma chag na*), その者の寿命 (*tshe*) は太陽と月に齊しく壮大なスケールになるものとされる。

本行を勤行する時刻については、陽が昇って暖かくなった朝方 (*dro gong tho rangs*) という規定があり、これは午前9時から正午頃までの、陽が昇って比較的暖かくなった時間帯を指すものであろう。<sup>786</sup> 前日食した古い腐食した夕食 (*dgongs mo zas rnying pa*) が消化し (*zhu*), 新しい食べ物 (*gsar pa*=朝食) を口にしない内 (*ma zos pa la*) とされる。この夕食 (*dgongs mo zas*) にかかる形容詞には、採用した読み「古い」(CD\_B, CD\_C: *rnying pa*) の他に「腐食した」(CD\_A: *snyigs ma*) という異読が見在するが、両者の間に齟齬はなく、従って、訳文には「[前日食した] 古い [腐食した] 夕食」という相補したかたちを提出した。

秘密なる成就法の本行は、当該箇所の上説、即ち、「寿命が尽きて死ぬことをも欺く」(*tshe zad pa'i 'chi ba'ang bslu'o*) という功德から知られるように、チル (*'chi blul'chi bslu*) と呼び慣らわされる欺死法、儀軌の一種と見做し得る。理論的興味の対象というよりは、実に実践的な生彩、意義をもって勤修者の心身に直にうったえるものであろう。もちろん、勤修者の命脈という生理を用い、風によって寿命を成就する (§3.4.3: *rlung la tshe sgrub pa*) 「命の風」は、主である無量寿仏への帰依 (*skyabs 'gro*) や最勝なる菩提への発心 (*sems bskyed*), また、一切法が空であること (*chos thams cad stong pa nyid*) について思索を深めてゆく次第がまずもって説示されるように (§§3.4.1–3.4.2), 理論的にも仏教の修道体系の中に位置付けられ得るものである。

「命の風」の目的は、しかし、その功德から知られるように、「寿命が尽きて死ぬことをも欺く」ことにあり、仏教の一修道体系を理論的に構築、整備することを目的とするものではない。この手法の解明には、調気法 (*prāṇāyāma*) の他に、道教の「気」との関わりも、今後大いに参照されるべきであろう。<sup>787</sup>

## §3.6. 後行儀軌

### §3.6.1

§3.6.1 には、前行 (*sngon 'gro*), 本行 (*dngos gzhi*), そして、後行 (*rjes kyi cho ga*) という3つの儀軌 (§3.3.1: *cho ga gsum*) の内の後行儀軌が説示されている。

その具体的内容としては、(1.) 一切有情の命 (*srog*) を切断しないこと (*mi gcod*), 即ち、彼らを殺めないことと、(2.) 勤修者の寿命 (*tshe*) や身界 (*[lus kyi] khams*) を損なう

<sup>786</sup> See JÄSCHKE, s.v. *dro* (p. 264): '1. the hot time of the day, from about 9 o'clock a.m. till 3 o'clock p.m. [...] 2. a meal taken about noon, lunch'.

<sup>787</sup> E.g. SAMUEL 2012b: 'On the Chinese side, a central concept here is *qi*, on the Indic and Tibetan *prāṇa* (Tibetan *rlung*). [...] The early forms of the Chinese practices, until fairly recently, were known primarily from a body of texts that might easily be categorised as 'religious', since they formed part of the complex current of Chinese thought and practice known as Daoism. [...] One important text which collected excerpts from early scriptures dating back to the 2nd Century CE is the *Yangsheng yaoji* 養生要集. Now lost, it is preserved in other texts, primarily the *Yangxing yanming lu* 養性延命錄, the *Zhubing yuanhou lun* 諸病源候論 and the *Ishinpō* 醫心方. [...] The ultimate aim was to purify the internal flows of *qi* 氣, which many considered to grant the state of a *xian* 仙, a transcendent immortal'.

食べ物 (*gnod pa'i zas*) を食さないこと、という 2点があげられている。この防遏は、翻つていえば、§1.4.2 に推奨された 2点の勤修内容、即ち——(1.) 放生等、他の生きものを利益する布施を行うこと、(2.) 食べ物を摂るなら、滋養のあるものを少しだけ摂ること——という 2点の勤修内容と相似する。当該 §3.6.1 では、積極的に放生や養生術を奨励するのではなしに、勤修者自身を含む一切有情の命を殺めないことという防遏があげられていることが注意されよう。

## §3.7. 埋蔵の趣意

### §3.7.1

§3.7.1 は、パドマサンバヴァが『チャッキドンポ』をリクズイン・グウデムチェンが発掘することを意図して秘匿したこと (*sbas*) を記すものである。この旨趣は、これまでの説示を通覧して知られるように、§§0.2.3, 1.3.2, 2.1.2 にも見出し得、当該の意義内容が『チャッキドンポ』中に一定して重きをおかれていることが知られる。§3.7.1 と先行する §§0.2.3, 1.3.2, 2.1.2 との間の相違点は、パドマサンバヴァが秘匿したテルマを §3.7.1 は「無量寿仏の成就法」(*tshe dpag med kyi sgrub pa*) と明言している点にあり、この点が注意される。

§3.7.1 は、風による長寿成就法「命の風」 (§3.4)、本行儀軌 (§3.5)、そして、後行儀軌 (§3.6) とは異なり、再び 7音節より成る頌文スタイルで記されており、その末尾は既述の内容が真実であることを宣誓し、封印する働きを有する誓言 (*samaya*) と封印の言「*rgya rgya rgya*」をもって結ばれている。

### §3.7.2

§3.7.2 はまた散文スタイルに戻り、上の誓言 (§3.7.1: *samaya*) に続く第二の誓言内容が同じく封印の言「*rgya rgya rgya*」と共に記されている。これは、長寿成就法『チャッキドンポ』と養生術の丸薬 (*bcud len gyi ril bu*) の両者を連続して用いれば (*rgyun du bcangs na*)、寿命 (*srog*) が人間にとっての百年まで延びるであろうことを誓うものであり、チャンダーリー女神の教誨 (*bka'*) だとされている。第3節秘密なる成就法中には、養生術の丸薬に関する説示がみられない。従って、この重要性を鑑みて、ここに養生術の丸薬の服用を付言した可能性もあろう。

## §3.8. コロフォン

### §3.8.1

§3.8.1 は、『チャッキドンポ』の発掘者であるリクズイン・グウデムチェンによって記された、秘密なる成就法「虚空の金剛」のコロフォンである。これによれば、当該成就法は、チャン地方 (Byang) のサンサンハダク (*Zang-zang-lha-brag*) の中腹から (*sked nas*)、そこに埋蔵された、南に位置する黄色をした金庫 (*lhor ser mdzod*) から、持明者グウキデムトゥチェン (*rgod kyi ldem 'phru can*) によって発掘されたものである。この金庫が、より詳しくは、中央／東／南／西／北の 5箇所に分けて埋蔵された内の、南に位置する

黄色をした金庫にあたることは、第2.7章(発掘)において、彼の伝記『照射する陽光』を参照し、確認したとおりである。

ここでリクズイン・グウデムチェンによって「発掘された」と訳出したところの *spyān drangs* について、短く触れたい。*drangs* には「引き出す／通じる」がその第一義としてみとめられるが、<sup>788</sup>これを「発掘する」と訳出すると、コロフォンの記述者であるリクズイン・グウデムチェンが、自らの行為に *spyān* という尊敬語を付して *spyān drangs* と記述することになる。この点については、パドマサンバヴァからの勧請を受けて発掘した、と補って理解すればよいようである。<sup>789</sup>こうした感覚的表現によっても、テルマとテルトウンの宗教的意義は深められていったことが伺われる。

### §3.9. 説示内容の要綱

#### §3.9.1

§3.9.1 は、これまでの説示内容を、(1.) 2つの因 (*rgyu gnyis*), (2.) 3つの縁 (*rkyen gsum*), (3.) 4つの不死なる甘露 ('*chi med bdud rtsi bzhi*) という用語のもとに整理し、その要綱を明示している。冒頭の「原文に [戻る] なら」(*ma phyi gcig na*) の「原文」<sup>790</sup>とは、既述の内容を指すもので、この部分は散文スタイルで記述されている。その後、頌文スタイルで「原文」を記述し、末尾に付された「——と、[上に説示] した」(*ces pa'ang 'dug go/ཅེ་པ་ཨང་འདུག་གོ*)<sup>791</sup> というフレーズをもって第3節秘密なる成就法を終えている。

まず、(3.) 4つの不死なる甘露は、第1節外なる成就法に説示された4つの甘露 (§1.2.1: *bdud rtsi bzhi*) をその原文とするものと想定される。当該 §3.9.1 は、4つの不死なる甘露の効能を4つの臓器(腎臓／心臓／肺／肝臓)に対応させているが、これは、4つの甘露が細説される §1.5.2 には見られない。当該箇所の説示内容は、従って、第1節のそれを補うかたちで付されるものと想定される。この想定によれば、第3節は、確かに第1節の後に記述、編成されたものと見做し得よう。

次の(1.) 2つの因と(2.) 3つの縁については、使用テキスト間に異読 (*rkyen gsum/rkyen gnyis*) が見在するが、2→3→4 (*rgyu gnyis rkyen gsum bdud rtsi bzhi*) という数字の増加 (*waxing*) が、おそらくは意識されているものと想定される。しかし、*rgyu gnyis* や *rkyen gsum/rkyen gnyis* は、当該箇所以外に用例が見在せず、もとより厳密なことはいえない。

<sup>788</sup> See 『蔵漢』 s.v. '*dren pa* (p. 1428): '(1) '*then pa* / [...] (2) '*khrid pa* / [...] (3) *bza' btung ster ba'am 'bul ba* / [...] (4) '*god pa*'.

See also BIELMEIER 2004:405: 'The various meanings listed for WT' WT denotes 'Written Tibetan' by the author, p. 401, '*dren, dran*s may be summarized as 'to draw, to pull, to lead' and also as 'to serve (food), to invite', a meaning which may be derived from the first one'.

<sup>789</sup> Cf. SCHWIEGER 1990:XXIX: 'Dennoch sind vor allem diejenigen Kolophone aus Sicht des Literaturhistorikers von Bedeutung, die uns über das sogenannte „Einladen“ (*spyān 'dren-pa*) der *gter-ma* aus ihrem Versteck berichten'; XXIXn10: 'Statt der respektvollen Umschreibung „Einladen“ wurde in der Übersetzung i.a. das die konkretere Bedeutung wiedergebende Wort „Hervorholen“ gewählt'.

<sup>790</sup> See 『蔵漢』 s.v. *ma phyi* (p. 2045): '*yig rigs sogs kyi rtsa ba'am phyi mo* / [...] *dpe cha bshus te ma phyi phyir bslogs pa*'.

<sup>791</sup> Cf. SCHWIEGER 1995:152: '[9<sup>v</sup>] *ces pa'an 'dug* [Z] *go : ithi :*'.

従って、2つの因は「不二なる生死」 (§2.6.1: *skye shi gnyis med*) に見出し得る「生」と「死」を、3つの縁は「3つの精髓」 (§2.7.4: *snying po gsum*) に見出し得る「財物」「ダーラニー」「禅定」を、それぞれ意図する可能性を指摘するにとどめたい。いずれにせよ、これらを内容を勤修する功德は量り知れない (*bsam mi khyab*) ということが、当該部分の主旨として知られる。

1 4.5. 第4節 長寿成就法『チャッキドンポ』より奥義なる成就法「Hrī一字」  
2 4.5.1. §4. 校訂テキスト

3 [A 533,1; B 259,3; C 207,3: 奥義なる成就法「Hrī一字」]

4 ཆོ་སྐྱབ་ལྷགས་ཀྱི་སྡོང་པོ་ལས་ལྷ་ཡང་གསང་རྒྱུ་གཅིག་མ་བཞུགས་སོ་<sup>792</sup>

5 [§4.1. 帰依と発心]

6 [§4.1.1] ལྷ་ལ་ལྷ་ལྷ་ལྷ་<sup>793</sup>

7 ལྷི་ནང་དབང་ལྷང་མན་ངག་རྫོགས་ལྷ་  
8 དད་བཙོན་ཤེས་རབ་སྣང་རྫོགས་ལྷ་ལྷ་  
9 ལས་དང་ལྷན་པའི་རྣལ་འབྱོར་པས་ལྷ་  
10 གནས་ལ་ངེས་མེད་གང་ཡང་རྩང་ལྷ་<sup>794</sup>  
11 ལྷས་གནད་ངེས་མེད་གང་བདེར་བྱུ་  
12 སྐྱབས་འགོ་ལེམས་བསྐྱེད་སྣང་རྫོགས་ལྷ་ལྷ་

13 [§4.2 パドマツェワンツェル (三昧耶薩埵) の観想]

14 [§4.2.1] དྲངས་པའི་ཚུ་ལ་ཉ་ལྷང་ལྷ་ལྷ་<sup>795</sup>  
15 ཚུ་ལས་ཚུ་སྐྱར་རྫོགས་བ་བཞིན་ལྷ་<sup>796</sup>  
16 སྐད་ཅིག་དན་པས་སྐྱང་བ་ལྷ་<sup>797</sup>  
17 ངག་ཏུ་རྒྱུ་ཞེས་བརྗོད་པ་ལིས་ལྷ་<sup>798</sup>  
18 བདག་ཉིད་སྐྱེ་ཆོ་དབང་ཚལ་ལྷ་

19 [§4.2.2] ཞལ་གཅིག་ཕྱག་གཉིས་སྐྱེ་མདོག་དམར་ལྷ་  
20 སྐྱེ་ཆོ་གདན་ལ་སྐྱེ་ལ་ལྷ་ལྷ་བཞུགས་ལྷ་

792 ཡང་གསང་རྒྱུ་གཅིག་° em.] ཡང་གསང་རྒྱུ་གཅིག་° A; གསང་སྐྱབ་རྒྱུ་གཅིག་° B; ལྷ་སྐྱབ་རྒྱུ་གཅིག་° C.  
793 Cf. Appendix B, no. 14 (A 534,1; B 259,3; C 207,3).  
794 གནས་°གང་° B, C] གནས་°གང་° → དུས་°ནམ་° A.  
795 དྲངས་པའི་° B, C] དང་མའི་° A.  
796 °ལས་°སྐྱར་རྫོགས་° C] °ལ་°སྐྱར་བརྗོད་° A; °ལས་°སྐྱར་རྫོགས་° B.  
797 °པས་° A] °པའི་° B, C.  
798 °རྒྱུ་° B, C] °རྒྱ་° A.

1	ཕྱག་གཉིས་བདུད་ཅིའི་ཐོད་པ་འདྲི་ནུ། <sup>799</sup>	1
2	ཟ་ལོག་བེར་དམར་སྐྱ་ལ་གསོལ། <sup>800</sup>	2
3	ཐོར་ཚུགས་དབུ་རྒྱན་ཅོད་པན་ཅན། <sup>801</sup>	3
4	ཞལ་འཇུ་མ་མཁའ་འགོས་བསྐྱོར་བར་བསྐོམ།	4
5	[§4.2.3] ཕྱགས་ཀར་པར་འདབ་བཞི་ཡི།	5
6	སྟེ་བར་ཉི་མའི་དགྲིལ་འཁོར་དབུས།	6
7	རྫོང་མར་ཚོག་བྲག་ལྗན་པར་བསྐོམ། <sup>802</sup>	7
8	རང་ལུས་སྐྱ་མར་གསལ་བ་ཡིན། <sup>803</sup>	8
9	མངོན་བྱང་ལྷ་དང་རྡོ་རྗེ་གསུམ།	9
10	ཚོག་བཞི་ཡིས་བསྐྱེད་མི་དགོས།	10
11	[§4.2.4] ཡིག་འབྲུ་མི་བསྐྱེད་རང་བྱུང་སྐྱ།	11
12	སྐད་ཅིག་མ་ལ་ཀུན་གསལ་བསྟན།	12
13	སྐྱེ་གི་རང་དག་རྗེ་མ་མེད།	13
14	འཁོར་དང་གཞལ་ཡས་སྤང་སྲིད་ཀུན།	14
15	ཡི་ནས་མ་བཅོས་ལྷན་གྱུབ་ཡིན།	15
16	[§4.3. 智慧薩埵の召喚]	16
17	[§4.3.1] ཡི་ཤེས་དགུག་གཞུག་དབང་བསྐྱར་དང་།	17
18	རྒྱས་འདེབས་མཚོད་པའི་བྱེ་བྲག་རྣམས།	18
19	ཡི་ནས་སྐྱོས་མེད་དམིགས་པ་བྲལ།	19
20	བྱུང་ཚེན་མཁའ་ལ་སྤྱིང་བ་ལྟར།	20
21	རྟེན་མེད་ས་ལེ་རྫིག་གེ་བུ། <sup>804</sup>	21
22	[§4.3.2] བསྐྱེད་རིམ་ལྟ་ཡི་འཕྲོ་འདུ་ཡིས།	22
23	ས་ལེར་ལོག་ཅིག་ལྟ་སྐྱ་ལ། <sup>805</sup>	23

799 འདྲི་འོ། B, C] འདྲི་འོ། A.  
 800 འདྲི་འོ། A, B] འདྲི་འོ། C.  
 801 འདྲི་འོ། B] འདྲི་འོ། A; འདྲི་འོ། C.  
 802 འདྲི་འོ། B, C] འདྲི་འོ། A.  
 803 འདྲི་འོ། B, C] འདྲི་འོ། A.  
 804 འདྲི་འོ། B, C] འདྲི་འོ། A.



1	བསྐྱོམ་མེད་འཕྱར་བར་མ་བཏང་བར་མུ་ <sup>806</sup>	1
2	ཐུན་མེད་ཡིངས་པ་མེད་པར་ཞོག་མུ་	2
3	བསྐྱེད་རིམ་ཚོལ་བ་མེད་པ་ལ་མུ་	3
4	འགག་མེད་དྲན་སྣང་རང་ཤར་བ་མུ་	4
5	[§4.3.3] ལྷ་མའི་སྐྱུ་ལ་གྲགས་སྣོང་ངག་མུ་ <sup>807</sup>	5
6	སྐྱི་ལྟམར་གྲངས་མེད་ཅི་རུས་བགྲང་མུ་ <sup>808</sup>	6
7	ལུས་ཀྱི་གཡོ་འགྲུལ་གང་སྣང་ཡང་མུ་ <sup>809</sup>	7
8	ལྷ་མའི་སྐྱུ་རུ་མ་ཡིངས་བལྟ་མུ་	8
9	[§4.3.4] དབུགས་དབྱུང་ངག་གི་སྐྱོར་བ་ཀུན་མུ་ <sup>810</sup>	9
10	སྐྱི་ལྟམར་འསྐོ་འདུ་བགྲང་བར་བྱུ་ <sup>811</sup>	10
11	ཡིད་ཀྱི་འདུ་འསྐོ་གང་ཤར་ཡང་མུ་	11
12	མ་བཅོས་ཡི་གདལ་ཆེན་པོར་བཞག་མུ་	12
13	ལུས་ངག་སྐྱུ་མའི་རོལ་པ་རུ་ <sup>812</sup>	13
14	མ་ཡིངས་སྐྱི་ལྟམར་ཅི་རུས་བགྲང་མུ་ <sup>813</sup>	14
15	[§4.4. <i>hrī</i> : を念誦する功德]	15
16	[§4.4.1.] མ་ཡིངས་ཞག་བདུན་བགྲངས་པ་ན་མུ་	16
17	ཡི་ཤེས་མཁའ་འགོ་དངོས་སུ་འདུ་མུ་	17
18	འཆི་ངེས་པ་ཡང་ལོ་བརྒྱ་ཐུབ་མུ་	18
19	ལུས་སེམས་བདེ་གསལ་གྱི་སྐྱེ་བདེ་མུ་	19
20	དགོས་འདོད་ཡིངས་སྐྱོད་ཆར་དུ་འབབ་མུ་ <sup>814</sup>	20

805 འེར་ཞོག་ཅིག་° B, C] འེ་བཞག་གཅིག་° A.  
 806 བསྐྱོམ་°འཕྱར་° *em.*] སྐྱོམ་°ཆལ་° A; བསྐྱོམ་°ཐུལ་° B, C.  
 807 འགགས་° B, C] འདྲན་° A.  
 808 སྐྱི་°བགྲང་° B, C] སྐྱི་°བགྲངས་° A.  
 809 འགྲུལ་° B, C] འགྲུལ་° A.  
 810 འག་°བ་° A, C] འདག་°ལ་° B.  
 811 སྐྱི་°བགྲང་° B, C] སྐྱི་°བགྲངས་° A.  
 812 མའི་° B, C] མར་° A.  
 813 སྐྱི་°བགྲང་° B, C] སྐྱི་°བགྲངས་° A.  
 814 འབབ་° B, C] འབབས་° A.

1	[§4.4.2]	མ་ཡེངས་རྒྱན་དུ་བགྱངས་པ་ནུཿ <sup>815</sup>	1
2		ལྷ་མ་རིག་འདིན་བྱིན་རྣམས་ཀྱིསུཿ <sup>816</sup>	2
3		འཁོར་བའི་ཚོས་ཀུན་རྒྱུ་མར་གོུཿ	3
4		ཞེན་ཆགས་འདོད་མེད་སྟོམ་དང་བུལུཿ	4
5		རང་འདོད་བདུད་ཀྱིས་བཅིངས་པ་ཕྱོལུཿ	5
6		ཟས་སྟོམ་འདོད་མེད་ཞེན་པ་རྒྱངུཿ <sup>817</sup>	6
7	[§4.4.3]	བདེ་བྱོད་རང་བྱུང་ལུས་ལ་འབརུཿ	7
8		ངག་རྒྱན་ཀུན་གྱིས་བསྐོ་བ་ཉནུཿ	8
9		རང་སེམས་འཆི་མེད་ཡེ་ཤེས་རྟོགསུཿ	9
10		སྟེ་འགག་སྤང་བ་ཚོས་སྤར་ཤརུཿ	10
11	[§4.4.4]	འདི་ཕྱིདི་སྤང་སྤང་རང་སར་ཕྱོལུཿ <sup>818</sup>	11
12		རེ་དོགས་འདིན་པ་གཉིས་དང་བུལུཿ	12
13		འབྱུང་བཞིདི་རྒྱུ་ལུས་མ་སྤངས་པརུཿ <sup>819</sup>	13
14		མཚོག་གི་དངོས་གྲུབ་ཐོབ་པར་འགྱུརུཿ	14
15	[§4.4.5]	མ་ཡེངས་རྒྱ་རྒྱད་ཡིད་ལ་སོགསུཿ <sup>820</sup>	15
16		རྒྱན་དུ་རྟུཿབགྱང་བྱིན་རྣམས་ཀྱིསུཿ <sup>821</sup>	16
17		རང་ལུས་སྤང་སྟོང་བྲ་མར་འགྱུརུཿ <sup>822</sup>	17
18		པརྒྱ་ཐོད་མེད་དངོས་སུ་མཐོངུཿ <sup>823</sup>	18
19		རང་ངག་དམ་ཚོས་དངོས་སུ་འཆརུཿ <sup>824</sup>	19
20		མི་དགེ་རྟུཿག་སྐྱིབ་ཀུན་དང་བུལུཿ <sup>825</sup>	20

815 °བགྱངས་པ་° B, C] °བགྱང་བ་° A.

816 °རྣམས་ཀྱིསུཿ B, C] °བརྣམས་ཀྱིུཿ A.

817 °སྟོམ་མེད་° B, C] °སྟོམས་བམེད་° A.

818 °སྤང་° B, C] °སྤངས་° A.

819 °པརུཿ A, B] °བརུཿ C.

820 °སོགསུཿ B, C] °དགོསུཿ A.

821 °རྟུཿབགྱང་° B, C] °རྟུཿབགྱངས་° A.

822 °བྲ་° B, C] °རྒྱུ་° A.

823 °མཐོང་° B, C] °འཐོང་° A.

824 °འཆརུཿ B] °ཆིང་° A; °འཆདུཿ C

1	དུས་གསུམ་སངས་རྒྱལ་སེམས་ལ་བརྟེན། <sup>826</sup>	1
2	རང་སེམས་ཚོས་སྐྱུར་སློབ་ཐབས་ཚོད།	2
3	ཕྱག་རྒྱ་ཚེན་པོའི་རིག་འཛིན་ཐོབ།	3
4	[§4.5. hrī: の定義]	4
5	[§4.5.1] མ་ཡིངས་རྣམས་ལ་གནས་པར་བརྒྱུ། <sup>827</sup>	5
6	རྣམས་ལིག་སློབ་སྐྱོང་ལ་དབུ་མེད། <sup>828</sup>	6
7	བཤང་དུ་མེད་ཀྱི་གངས་ཚེས་བུལ། <sup>829</sup>	7
8	བཞག་དུ་མེད་ཀྱི་སལ་ལེ་བུ། <sup>830</sup>	8
9	དངོས་པོ་མེད་ཀྱི་ཕྱ་ལེ་བུ། <sup>831</sup>	9
10	དངོས་མེད་མ་ཡིན་ཀྱི་གཤེན་པོ།	10
11	བསྐྱོམ་དུ་མེད་དེ་ཞེན་པ་ཐོང་། <sup>832</sup>	11
12	[§4.5.2] ཇི་སྐྱུར་སྐྱུང་བ་མ་འགགས་རྣམས་ལ།	12
13	བསམ་ལུལ་འགྲུབ་དུ་མེད་དོ་རྣམས་ལ།	13
14	སྐྱུང་དོར་དགག་སྐྱུང་མེད་དོ་རྣམས་ལ། <sup>833</sup>	14
15	འཛིགས་བྱ་གཉེན་པོ་མེད་དོ་རྣམས་ལ། <sup>834</sup>	15
16	ཐ་སྐྱོད་བརྗོད་དུ་མེད་དོ་རྣམས་ལ། <sup>835</sup>	16
17	བརྗོད་པོ་བསྐྱུང་དུ་མེད་དོ་རྣམས་ལ། <sup>836</sup>	17

825 འདྲ་འཇུག་ B, C] འཇུག་ A.

826 འཇུག་ལ་བརྟེན། A] འཇུག་རྟེན། B, C.

827 འཇུག་ལ་བརྒྱུ། B, C] འཇུག་ལ་བརྒྱུ། A.

828 འཇུག་ལ་བརྒྱུ། B, C] འཇུག་ལ་བརྒྱུ། A.

829 འགྲུབ་ལ་བརྒྱུ། A] འགྲུབ་ལ་བརྒྱུ། B; འགྲུབ་ལ་བརྒྱུ། C.

830 འཇུག་ཀྱི་སལ་ལེ་བུ། B, C] འཇུག་ཀྱི་སལ་ལེ་བུ། A.

831 དངོས་པོ་མེད་ཀྱི་ཕྱ་ལེ་བུ། B] om. A; དངོས་པོ་མེད་ཀྱི་ཕྱ་ལེ་བུ། C.

832 བསྐྱོམ་དུ་མེད་ལ་བརྒྱུ། B, C] བསྐྱོམ་དུ་མེད་ལ་བརྒྱུ། A.

833 འགྲུབ་ལ་བརྒྱུ། C] འགྲུབ་ལ་བརྒྱུ། A; འགྲུབ་ལ་བརྒྱུ། B.

834 འཇུག་ལ་བརྒྱུ། B, C] འཇུག་ལ་བརྒྱུ། A.

835 འཇུག་ལ་བརྒྱུ། B, C] འཇུག་ལ་བརྒྱུ། A.

836 འཇུག་ལ་བརྒྱུ། B, C] འཇུག་ལ་བརྒྱུ། A.

1	[§4.6. 授記]	1
2	[§4.6.1] རིག་འཛིན་སྣང་པོའི་ཐུགས་སྐྱབ་འདིཾ <sup>837</sup>	2
3	ཡེ་ནས་སློམ་མེད་ལྷུན་གྲུབ་ཡིནཾ <sup>838</sup>	3
4	ལས་ཅན་ཀུན་གྱིས་དེ་ལྟར་རྟོགསཾ <sup>839</sup>	4
5	སྐྱུ་ལྷས་མི་འདོར་རིག་འཛིན་ཐོབཾ <sup>840</sup>	5
6	ལས་ཅན་གཅིག་དང་འབྲུང་པར་ཤོགཾ <sup>841</sup>	6
7	[§4.6.2] བརྒྱ་ཐོད་མེད་ཚུལ་གྱི་ཚེ་དབང་ཐུགས་སྐྱབཾ <sup>842</sup> ix རྫིཾ་གཅིག་མ་འདི་ལ་ནམ་རྟོག་ཐོལ་ཉེ་བྱུང་	7
8	བ་དངཾ <sup>843</sup> རྫིཾ་ཞེས་པས་གཏད་མེད་ལྷུན་གྲུབ་ཏུ་སྐྱེལ་སྐྱུལ་གཏོང་བ་དངཾ <sup>844</sup> རྫིཾ་ཡི་སྐྱ་སྐྱད་ཅི་རིགས་པ་	8
9	ཡིད་གྱིས་ཀྱང་མ་ཡིངས་པར་བགྲང་དེཾ <sup>845</sup>	9
10	[§4.6.3] རྟོག་བྲལ་ཡེ་ཤེས་ཚེན་པོར་འདུག་ན་རྫིཾ་བགྲང་མི་དགོས་སོཾ <sup>846</sup> གཞག་བྱ་འཛོག་བྱེད་མེད་	10

ix ICags kyi sdong po'i las byang dbang chog dang bcas pa, 179,6:

ཡང་ཡང་གསལ་བའི་ཉིང་འཛིན་འཕོ་འདུ་ཡིས།  
 རིང་རིང་བསྐལ་པར་ཤོག་འཚོའི་བདུད་ཚིའི་རྒྱན།  
 ལྷུང་ལྷུང་ཚངས་པའི་བྱ་ག་ནས་བབས་པ།  
 འབྱིལ་འབྱིལ་སྣིང་གི་ཟ་མ་རྟོག་ཏུ་གཏམས།  
 རྒྱལ་མཚོག་བསྐྱོད་ཐོད་མེད་ [མེད་ em.] འཕྲེང་། ཐུགས་གསང་བརྒྱད།  
 བརྒྱད་གྱི་ཉིང་ཁུ་འཚེ་མེད་སྐྱབ་པའི་ཐབས།  
 ཐབས་མཁས་འཇའ་ལུས་ཡོངས་འགྲུབ་ཉེ་བའི་ལམ།  
 ལམ་བཟང་ཐེག་པ་ཀུན་གྱི་ཡང་ཚེར་སོན།  
 ཚོས་དཀར་འབྲས་སློན་སློན་གྲོལ་ཉམས་བརྟུར་བས།  
 རིང་པོར་མི་ཐོགས་ཐོགས་མེད་ཚེ་འདི་ལ།  
 འོད་གཟི་སྣོང་འབར་འབར་བ་མཚན་དཔེའི་སྐྱ།  
 མཛོན་གྱུར་འཕོ་ཀུན་ཀུན་བཟང་སར་འགོད་ཤོག།

837 འཛིན་ B] om. → འཛིན་ A; འཛིན་ C.  
 838 ཡེ་ཡིནཾ B, C] om. → ཡེ་ཡིནཾ A.  
 839 ལས་རྟོགསཾ B, C] om. → ལས་རྟོགསཾ A.  
 840 སྐྱུ་ཐོབཾ B, C] om. → སྐྱུ་ཐོབཾ A.  
 841 ལས་ཤོགཾ B, C] om. → ལས་ཤོགཾ A.  
 842 འཕྲེང་གྱི་ B, C] འཕྲེང་གྱིས་ A.  
 843 རྫིཾ་ B, C] རྫིཾ་ A.  
 844 རྫིཾ་པས་གྲུབ་ B] རྫིཾ་པའི་གྲུབ་ A; རྫིཾ་པས་འབ་ C.  
 845 རྫིཾ་ཡི་གྱིས་བགྲང་ B, C] རྫིཾ་ཡིས་གྱི་བགྲངས་ A.  
 846 རྫིཾ་ B, C] རྫིཾ་ A.

1	དོཾ <sup>847</sup> སྤྱན་མཚམས་མེད་དོཾ <sup>848</sup> རྩིཾའདིའི་རྣལ་འབྱོར་དང་མ་བྲལ་ནཾ <sup>849</sup> ལྷ་ལྷུས་འདི་མ་སྤངས་པར་	1
2	རིག་འཇིག་གྱི་ས་ནོན་པར་ཐེ་ཚོམ་མིད་དོཾ <sup>850</sup> ལས་ཅན་གཅིག་དང་འབྲུད་པར་ཤོགཾ ཀུན་ལ་མ་སྤེལ་	2
3	སྐོད་ལྡན་གཅིག་ལ་སྦྱིནཾ །རྣམས་ལ་ལྷ་སྦྱིནཾ <sup>851</sup>	3
4	[§4.7. コロフォン]	4
5	[§4.7.1] བྲག་རི་དུག་སྤྲུལ་སྤྲངས་འབྲེལ་སྐོད་ནསཾ རིག་འཇིག་ཚོད་གྱི་ལྷེམ་འབྲུ་ཅན་གྱིས་བཏོན་	5
6	པའོཾ <sup>852</sup>	6

<sup>847</sup> འཇོག་ཾ B, C] གཞོག་ཾ A.

<sup>848</sup> འོཾ B, C] འོ་ A.

<sup>849</sup> རྩིཾ B, C] རྩིཾ A.

<sup>850</sup> འོཾ་ས་ཾ C] འོཾ་ས་ཾ A, B.

<sup>851</sup> Cf. Appendix B, no. 15 (A 538,1; B 262,4; C 210,4).

<sup>852</sup> འབྲུ་ཾ B, C] འབྲུ་ཾ A.


## 4.5.2. §4. 翻訳

[A 533,1; B 259,3; C 207,3: 奥義なる成就法「*Hrī*一字」]

長寿成就法『チャッキドンポ』より

奥義なる [成就法] 「*hrī*: 一 [字]」 と名付く [節]

[§4.1. 帰依と発心]

[§4.1.1]  <sup>853</sup>

[勤修者は、] 外 [なる成就法と] 内 [なる成就法] に関する灌頂、口訣、教誡によって究竟に至る。

信心、精進、智慧、悲心を備えた

有縁者たるヨーガ行者には、

勝処に関する決まり事など無く、どこでもよい。

座し方に関しても決まり事など無く、好きにしてよい。

[ただ一心に] 帰依し、[最勝なる菩提へ] 発心し、悲心について思索を深めていく。

[§4.2 パドマツェワンツェル (三昧耶薩埵) の観想]

[§4.2.1] 透明な水中に魚が [自ずと姿を] 顕すように、

[或いはまた] 水中から水泡が [自ずと吹き] 出るように、

一刹那念じることにより顕現は [生じるもの] であるから

真言として「*hrī*:」とすることにより

[勤修者であるあなた] 自身は、[自ずと] パドマツェワンツェル (Padma-tshe-dbang-rtsal) [となる]。

[§4.2.2] [勤修者は自身をパドマツェワンツェルとして次のような様相をもって] 観想する。

[1.] 御身は赤色、

[2.] 一面二臂で

[3.] 蓮華台 [の上] に結跏趺坐にしていच्छり、

[4.] 御両手に甘露 [で満ちた] 頭蓋骨を擁し、

<sup>853</sup> Cf. Appendix B, no. 14 (A 534,1; B 259,3; C 207,3).

- [5.] 赤色の御身に絹緞の衣を身につけておられ、  
 [6.] 頭飾りとして頂鬘に宝冠を有し、  
 [7.] [お口元には] 笑みを [浮かべて]、  
 [8.] ダーキニーたちに囲まれていらっしゃる。

[§4.2.3] [パドマツェワンツェルの] お胸には、4枚の蓮華の花弁から成る  
 日輪の中央に、  
 ツェダク記号(「ḥṛī」)を備えた赤色の「hrī:」[という一種子]がある  
 ——という [様相について、勤修者であるあなたは] 思索を深めてゆく。  
 [勤修者であるあなた] 自身の身体が師 (パドマツェワンツェル) に [等しいこと  
 は既に] 現然としている。  
 [従って、勤修者であるあなたは] 五現等覚や三金剛、  
 [或いはまた] 四儀軌によって [自身を師 (パドマツェワンツェル) として] 生起  
 する必要はない。

[§4.2.4] [「hrī:」という] 種子は、[勤修者であるあなたが] 生起したのではなく、  
 自ら生じた貴いご身体であり、  
 一刹那に一切を現然と明示するものだ。  
 生死は自ずと清潔で無垢である。  
 眷属も、無量宮も、一切万物は  
 無始よりこのかた、無作為、任運無作である。

[§4.3. 智慧薩埵の召喚]

[§4.3.1] 智慧 [薩埵] を召喚して一体となり、灌頂を授けていただくために  
 称賛と諸々の供物を [捧げる]。  
 [しかし、すべては] 無始よりこのかた無戲論、離所縁で、  
 空中を駆け巡る大金翅鳥 (*garuda*) のように  
 無所依であることは、はっきりと明確である。

[§4.3.2] 本尊 [自身] の発散と収斂による生起次第が  
 画然としたものであるように！ 本尊の御身について  
 無思索が持ち上げられることなく  
 更 [という概念] が無い [程に生起次第が] 揺るぎないものであるように！  
 任運なる生起次第には

滅することが無く、思惟と顕現は自らあらわれる。

- [§4.3.3] 幻の御身に対しては、響けども語として空である  
 無数の赤色の *hrī*: [という一種子] を、[勤修者であるあなたは] できうる限り数える。  
 身体の動揺が何か現れたとしても、  
 師の御身として、揺るぎないものとして [勤修者であるあなたは] 観察する。
- [§4.3.4] 一切の呼吸と語との行いである  
 赤色の *hrī*: [という一種子] の発散と収斂を数える。  
 意識の収斂と発散によってどのようなものが現れたとしても、  
 大いなる無作為、無始無限なものとして置く。  
 幻である身体と語の権化として  
 揺るぎない、赤色の *hrī*: [字] をできうる限り数える。

[§4.4. *hrī*: を念誦する功德]

- [§4.4.1] [*hrī*: 字を] 揺るぎないものとして7日間数えると、[その結果]  
 智慧のダーキニーたちが直々に集会し  
 定められた死をも [欺くので、寿命] 百歳が叶う。  
 [勤修者であるあなたの] 身体と心は楽で、煌々とし、喉や舌 [も] 楽である。  
 要望する富が雨のように降る。
- [§4.4.2] [*hrī*: 字を] 揺るぎないものとして連続して数えると、[その結果]  
 持明者たる師の加持によって  
 [勤修者であるあなたは] 輪廻の内にある一切が幻だということを理解する。  
 嗜好、貪愛、戯論を離れ、  
 我欲という魔による縛から解脱する。  
 [その結果] 飲食に関する貪愛、貪欲が小さく [なる]。
- [§4.4.3] 楽と暖が自ら生じて [勤修者であるあなたの] 身体の内に眩しく輝き、  
 [あなたの] 言葉が心地よく響くので、あらゆる人が [あなたの] 言うことを聴く。  
 [あなたは、あなた] 自身の心が不死なる智慧 [そのものだということを] 理解する。  
 顕現する生滅は [すべて] 法身の現れ [に過ぎない]。



- [§4.4.4] [勤修者であるあなたは] 今世と来世に取捨し、そのまま解脱する。  
 [その結果] 期待と不安という二つの把持を離れる。  
 [地／水／火／風という] 四大が [構成する] 幻の身体を棄捨することなく、  
 至高の成就が成し遂げられよう。
- [§4.4.5] [本尊の任運自然な顕現が] 揺るぎないもの [であるよう] *hrī:* [という一種字] を  
 音声や意識等を [用いて] 連続して数えると、[持明者たる師の] 加持によって  
 [1.] [勤修者であるあなた] 自身の身体は、師の空なる顕現となり、  
 [あなたは] パドマトウテン [ツエル] (*Padma-thod-phreng[-rtsal]*) を目の当たり  
 にする。  
 [2.] [勤修者であるあなた] 自身の語は、正法が直々に現れたものとなり、  
 あらゆる不善や罪障を離れている [から]、  
 [あなたは] 三世諸佛の心に通じる。  
 [3.] [勤修者であるあなた] 自身の心は、法身として決心され、  
 [あなたは] マハームドラーに関する持明者の [位] となる。

[§4.5. *hrī:* の定義]

- [§4.5.1] 揺るぎないものとして *hrī:* [という一種字] に安住することだ。  
*hrī:* [という一] 種字に苦悩や疲労は無い。  
 [*hrī:* 字は] 数えられないから計算を離れており、  
 設置されないから純粹で、  
 実体が無いから円滑で、  
 実体が無いものでないから明瞭である。  
 [勤修者であるあなたは、*hrī:* 字を] 修習することなく、その貪欲を放棄せよ。
- [§4.5.2] *hrī:* [という一種字は] 顕現するがままで、滅することがない。  
*hrī:* [という一種字は] 観想の対象にならない。  
*hrī:* [という一種字には] 取捨という否定や肯定が無い。  
*hrī:* [という一種字には] 畏怖も対治も無い。  
*hrī:* [という一種字は] 世間の言葉では言い表わせない。  
*hrī:* [という一種字は] 象徴や喩えで明示できない。

## [§4.6. 授記]

- [§4.6.1] 持明者の精髓である、この心成就法は、

無始よりこのかた無戲論、任運無作である。

あらゆる有縁者は、このように承知しているので

幻身を捨離することなく持明者の[位が]成し遂げられよう。

[このパドマサンバヴァの心の成就法が]かの有縁者(リクズイン・グウデム  
チェン)と巡り会うように！

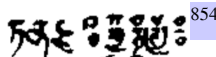
[§4.6.2] [以上が]パドマトウテンツェル (Padma-thod-phreng-rtsal) の心成就法 [に属する] 寿命に関する灌頂である。[以下に *hrī*: という一種子に関する 3点の要義をあげる。]

[1.] この *hrī*: という一 [種子は、] 虚妄分別を [自ら] 穿って生じたものであり、

[2.] 「*hrī*:」 ということは、不確かなものを任運無作に肝に据えることであり、

[3.] 「*hrī*:」 というあらゆる種類の音声は、[勤修者の] 意識によっても、揺るぎないものとして数えられるべきものである。

[§4.6.3] 分別を離れて大いなる智慧にある者は、「*hrī*:」 [という一種子] を数える必要はない。[これから] 置かれるものも、[いま] 置くもの [も] 無い。更という概念 [も] 無い。

「*hrī*:」 [という一種子] がこれを [修習する] ヨーガ行者と離れることがないなら、この幻の身体を棄捨することなく持明者の位が [ヨーガ行者によって] 到達されることに疑いはない。[このパドマサンバヴァの心の成就法が] かの有縁者と巡り会うように！ あらゆる者に [これを] 広めてはいけない。彼の器の者にのみ与える。 

#### [§4.7. コロフォン]

[§4.7.1] [このテルマ、即ち長寿成就法『チャッキドンポ』は、] 毒蛇の塊の如き岩山の中腹から、持明者グウキデムトゥチェンによって発掘されたものである。

<sup>854</sup> Cf. Appendix B, no. 15 (A 538,1; B 262,4; C 210,4).

### 4.5.3. §4. 詳解

本4.5.3章では、第4節奥義なる成就法「*Hrī* 一字」のテキスト、及び、翻訳に基づく考察を詳解として提出する。

## §4.1. 帰依と発心

### §4.1.1

第4節奥義なる成就法「*Hrī* 一字」の冒頭にあたる §4.1.1 は、ダーキニーの符牒、或いはウッディヤーナ語を記した文字<sup>855</sup>をもってその記述を開始する。もとより厳密なことは言えないが、その叙述箇所から想定して、帰敬文か、奥義なる成就法の節名に関わる内容が記述されているものと想定される。これに続く7音節より成る頌文は、先行する外なる成就法 (*phyi [sgrub]*) や内なる成就法 (*nang [sgrub]*) の功德を、これらに関する灌頂 (*dbang*)、口訣 (*lung*)、教誡 (*man ngag*) によって勤修者は究竟に至るもの (*rdzogs*) と謳い、これを成就した有縁者たるヨーガ行者 (*las dang ldan pa'i rnal 'byor pa*) が奥義なる成就法の勤修者、対告者であることを説示している。

彼／彼女は、外なる成就法や内なる成就法の修習によって、既に信心 (*dad*)、精進 (*brtson [ 'grus]*)、智慧 (*shes rab*)、悲心 (*snying rje*) を備えた者となっているから、奥義なる成就法を修習するにあたって勝処 (*gnas*) に関する決まり事など無く、<sup>856</sup> どこでもよい (*la gang yang rung*) とされる。これは、内なる成就法における勝処の規定「清浄、且つ、吉祥な土地で、寂然とした場所」 (§2.7.1: *sa gtsang bkra shis dben pa'i gnas*) と対比されてよいであろう。奥義なる成就法を修習する場所は、極端に言えば、市場でも墓場でも売春宿でも、もう構わないのである。

また、座し方 (*lus gnad*) に関しても特に決まり事は無く、好きにしてよいもの (*gang bder bya*) とされる。勤修者は、内なる成就法や秘密なる成就法においては、自身を無量光仏として (§2.3.1)、或いはまた、馬頭尊として (§3.5.1) 生起、観想する際に結跏趺坐の姿勢をとったが (*lus skyil krung bcas te*)、奥義なる成就法を修習する姿勢は、彼／彼女の好きにしてよいものとされている。勤修者にとって肝心なことは、ただ一心に帰依し (*skyabs 'gro*)、最勝なる菩提へ発心し (*sems bskyed*)、悲心について思索を深めていくこと (*snying rje bsgom*) であり、この点は先行する諸節にも強調されている。

## §4.2. パドマツェワンツェル (三昧耶薩埵) の観想

### §4.2.1

§4.2. には、後の §4.3. において「灌頂を授ける智慧薩埵をお招きして一体となる」という所説の前提として、勤修者がパドマツェワンツェル (*Padma-tshe-dbang-rtsal*) と無二一体と

<sup>855</sup> Cf. Appendix B, no. 14 (A 534,1; B 259,3; C 207,3).

<sup>856</sup> CD\_A の読みに従えば、勝処 (CD\_B, CD\_C: *gnas*) の他、時期 (*dus*) についても、勤修にあたっての決まり事はないものとされる。CD\_A の読みは、CD\_B、及び CD\_C の読みに訂正印「×」を施したものである点に注意したい。

なる三昧耶薩埵の觀想が説示される。この文脈において §4.2.1 は、*hrī:* という真言によってパドマツェワンツェル (≈三昧耶薩埵) が顕現する (*snang ba*) 仕方を、2つの比喩を用いて、それがいかに自ずと生じるか、ということを示す。パドマツェワンツェルは、ダクポツアル (§3.3.2: *Drag-po-rtsal*) や、後述するパドマトウテンツェル (§4.6.2: *Padma-thod-phreng-rtsal*) と同様、語尾に *-rtsal* を含み、パドマサンバヴァの変化身の一つ、中でも寿命の灌頂 (*tshe dbang*) に関わる尊格であると想定される。

*hrī:* という真言によって勤修者自身 (*bdag nyid*) が一刹那にパドマツェワンツェルとなる仕方は、一刹那念じることにより (*skad cig dran pas*)、即ち、真言として (*ngag tu*) 「*hrī:*」と言うことにより「顕現する」(*snang ba*) という自動詞がよく象徴している。この顕現の比喩としてあげられている2つの喩例、即ち、(1.) 魚 (*nya*) が透明な水中に (*dwangs pa'i chu la*) 突如すうっと姿を「顕す」(*ldang*) 様子にも、また、(2.) 水泡 (*chu lbur*) が水中から突如ぶくぶくと吹き「出る」(*rdol ba*) 様子にも、自動詞が用いられていることが看取されよう。

勤修者は後に「[「*hrī:*」という]種子は、[勤修者であるあなたが]生起するものではなく、自ら生じた貴いご身体である」 (§4.2.4: *yig 'bru mi bskyed rang byung sku*) と、注意される。その事由は、*hrī:* という真言によってパドマツェワンツェルが自ずと顕現するということを強調した、当該 §4.2.1 に求めることができよう。

## §4.2.2

§4.2.2 には、勤修者が自身をパドマツェワンツェルとして觀想する際の彼の様相が説示されている。ここに描写される様相、即ち——(1.) 赤色の身体、(2.) 一面二臂 (*zhal gcig phyag gnyis*) で、(3.) 蓮華台 (*padma'i gdan*) の上に結跏趺坐にしていらっしゃり (*skylil krung bzugs*)、(4.) 両手に甘露で満ちた頭蓋骨 (*bdud rtsi'i thod pa*) を擁し、(5.) 赤色の御身に絹緞の衣 (*za 'og ber*) を身につけ (*gsol*)、(6.) 頭飾り (*dbu rgyan*) として頂鬘 (*thor tshugs*)<sup>857</sup> に宝冠 (*cod pan*) を有し、(7.) 口元に笑みを浮かべ (*zhal 'dzum*)、(8.) ダーキニーたちに囲まれている——というパドマツェワンツェルの様相は、第2節内なる成就法「チャッキドンポ」において勤修者が自身を無量光仏として (§2.3.1)、また、第3節秘密なる成就法「虚空の金剛」においては馬頭尊として (§3.2.1)、それぞれ觀想する際の彼の様相と比較されよう。即ち、次に表示する如くである (表21)。

表21: 無量光仏／馬頭尊／無量寿仏 in 馬頭尊／パドマツェワンツェルの様相一覧

§	尊格名	色	台座	仏身／相	姿勢	持物	眷属
2.3.1	無量光仏	赤色	蓮華台	-	結跏趺坐	寿命を司る壺	-
3.2.1	馬頭尊	赤色	-	一面二臂	-	弓と矢	-
3.2.2	無量寿仏 in 馬頭尊	赤色	[蓮華台]	寂靜相	[結跏趺坐]	[寿命を司る壺]	-
4.2.2	パドマツェワンツェル	赤色	蓮華台	一面二臂	結跏趺坐	甘露で満ちた頭蓋骨	ダーキニーたち

<sup>857</sup> See 『藏漢』 s.v. *thor tshugs* (p. 1198): '*skra gyen du bcings pa'i gtsug tor ram/ thor cog*'.

パドマツェワンツェルの様相は、上の表(表21)によって知られるように、無量寿仏 (§3.2.2) と馬頭尊 (§3.2.1) と対比した場合には、前者の寂靜相に対する忿怒相として、後者馬頭尊の様相に近い。その詳細は、例えば、印相を参照し得る具体的用例の中に求められよう。寂靜相として生起される無量寿仏は、禪定印を結んでいるが (§3.2.2: *zhi ba'i tshul la mnyam bzhag phyag*), 馬頭尊やパドマツェワンツェルの印相については明らかではない。<sup>858</sup> 図像学的資料を含め、今後の学究に期したい。

### §4.2.3

§4.2.3 では、先の §4.2.1–4.2.2 において明確な顕現と慢を生起したパドマツェワンツェルの胸部に日輪を安置し、その中央に念誦すべき *hrī:* 字を布置する次第が説示される。

まずパドマツェワンツェルの胸部に4枚の蓮華の花弁から成る (*padma 'dab bzhi yi*) 日輪 (*nyi ma'i dkyil 'khor*) を生起する。そして、その日輪の中央に (*dbus*) ツェダク記号 (「g」) を備えた (*tsheg drag ldan par*) 赤色の *hrī:* 字があるものと、そのように思索を深めてゆく (*bsgom*)。

勤修者は、この *hrī:* 字を真言として発声したことで (§4.2.1: *ngag tu hrī: zhes brjod pa yis*) 一刹那にパドマツェワンツェルとなっている三昧耶薩埵という存在であるのだから、彼/彼女自身の身体 (*rang lus*) が師であること (*bla mar*), 即ち、パドマツェワンツェルに等しく彼と不二一体であることは、既に現然としている (*gsal ba yin*)。この段階では、パドマツェワンツェルと自己との両者が不二一体であるという慢が、既に決定しているという意味であろう。本尊生起にあたっては、従って、五現等覚 (*mngon byang lnga*) や三金剛 (*rdo rje gsum*), 四儀軌 (*cho ga bzhi*) は要しないものとされる。

五現等覚、三金剛、四儀軌は、金剛頂経系タントラの系統に思惟形式において連なる生起次第に関する用語を、数字によって組織立てた表現かと想定される。これらの具体的行法や、その背景となる理論の解明には、従って、インド語資料の持つ原典的形態の意義が認められよう。そこで問題となるのは、これらの行法に様々な流儀が知られる、という点である。例えば、『秘密集会タントラ』(*Guhyasamājantra*) の成就法における五現等覚の行法は、聖者流とジュニャーナパーダ流との間で相違することが知られる。<sup>859</sup> 三金剛は、本尊の身口意に象徴される三体の尊格が我生起の本尊の三部位に召入され、等味として行じる慢の行法かと想定されるが、<sup>860</sup> 尊格名や、これに対応する身体の具体的部位は不明である。四儀軌は、当該の文脈において本尊生起に関わる用語と見做す場合、ACHARD

<sup>858</sup> パドマツェワンツェルの印相については、参照し得る資料を見つけることができなかった。馬頭尊の印相については、OBA (大羽) 2008 に '8世紀のカルコータ朝時代 (600~853)' (p. 61) の作例として、'左手は胸の前で人差し指を立てる期剋印を結ぶ' 印相が参照される。期剋印は、'脅しを表し、多くの忿怒尊の印になっている [...] この像は寂靜の相を持つ馬頭と、忿怒形を表す馬頭の中間の位置に属すると見られる'。

<sup>859</sup> See SAITO (齋藤) 2013:362–363n291: '[...] ジュニャーナパーダ流の五現等覚は、『真実撰経』の五相成身観と、誦える真言がほぼ一致しており、観想内容も似たものとなっている。瑜伽タントラと共通する本尊生起法に、無上瑜伽タントラ独特の解釈を結びつけた行法といえるかもしれない。聖者流の五現等覚 [...] と比較すれば、それぞれの特色が鮮明になるだろう'。

<sup>860</sup> 当該の行法については、例えば、Tucci 1969 が三金剛に「身口意」を当て、「[勤修者が]自らを仏として再統合するために三種の金剛を再編成する」('[...] that of reintegrating himself as Buddha—the reconstitution of the Threefold Diamond', p. 88) という概論を与えている (p. 88f. For a Japanese translation, see Tucci

2003による「四儀軌」(‘*Cho ga bzhi – Les quatre rituels*’, p. 98)の考察, 即ち, (1.) 空性修習, (2.) 本尊の種子の生起, (3.) 本尊の仏身への転変, (4.) 五勇者の種子の布置, が参照されよう。<sup>861</sup> 何れにせよ, これらの用語を安易に一般化することが危険であることに変わりはない。今後の学究に期したい。

当該§4.2.3には, こうした一定の生起次第を要さずとも, *hrī:* 字を真言として発声したことで (§4.2.1: *ngag tu hrī: zhes brjod pa yis*) 一刹那に師パドマツェワンツェルに等しく彼と不二一体と成り得ることが説示されている。我生起の本尊の慢が自ずと頑固に現然としており, 行法が「単純であること」(*spros med*)<sup>862</sup> は, 先の §4.2.1 に挙げられた喩例, 即ち, 「透明な水中に魚が[自ずと姿を] 顕すように」或いはまた, 「水中から水泡が[自ずと吹き] 出るように」という喩例が, よく表現するものであろう。魚 (*nya*) や水泡 (*chu lbur*) のあり方, 顕われ方にも, 勤修者はよく学処を見出し得る。

## §4.2.4

当該 §4.2.4 には, §4.2.3 までに生起された *hrī:* 字について, 勤修者が思索を深めるにあたっての心得が説示されている。即ち, *hrī:* という種子 (*yig 'bru*) については, 勤修者が生起したのではなく (*mi bskyed*), 自ら生じた貴いご身体 (*rang byung sku*) として, 一刹那に一切を現然と明示するもの (*skad cig ma la kun gsal bstan*) と, このように思索を深めるよう表明されている。自分が生起したという行相を伴うことなく, 作意無く *hrī:* 字を縁ずる為の教誡であろう。生死 (*skye shi*) は自ずと清潔で (*rang dag*) 無垢である (*dri ma med*) とされている。

ここでいう「一切」(*kun*) とは, 眷属 (*'khor*) や無量宮 (*gzhal yas [khang]*)<sup>863</sup> 等の一切万物 (*snang srid kun*), 能依所依を包含した表現であろう。これらが無始よりこのかた無作為 (*ma bcos*), 任運無作 (*lhun grub*) であるとされるのは, 当該の生起次第において, 能依所依を包含する「一切」を所縁としつつ, その行相を作為的に把持しないよう戒める教誡であると考えられる。

1984:145f.)。

<sup>861</sup> See ACHARD 2003:98: ‘*Cho ga bzhi – Les quatre rituels*

1. la Vacuité (*stong pa nyid*);

2. la syllabe-germe (*sa bon*) émergeant en elle;

3. le développement complet du Corps de la divinité à partir de la syllabe-germe (*sa bon las sku yongs rdzogs bskyed pa*); et

4. l'établissement (*bkod pa* ou “inscription”) des cinq syllabes héroïques (*dpa' bo 'bru lnga*) dans les cinq sanctuaires du Corps de la divinité’.

<sup>862</sup> See 『藏漢』 s.v. *spros med* (p. 1693): ‘*rgyas pa med pa*’.

<sup>863</sup> See 『藏漢』 s.v. *gzhal yas khang* (p. 2416): ‘*rgyu dang rgya khyon sogs kyi tshad dang yon tan 'jal mi nus pa'i lha'i khang bzang*’, *Bod dbyin shan sbyar*, s.v. *gzhal med khang* (p. 232): ‘*Vimāna/ Inconceiv[a]ble mansion; celestial mansion; heaven*’.

## §4.3. 智慧薩埵の召喚

### §4.3.1

§4.3 には、智慧薩埵を召喚し、広観と斂観を修習する次第が説かれる。その冒頭、§4.3.1 には、智尊召入や授灌頂に際しての供養の意義が、大金翅鳥 (*garuḍa*) を喩例にして説示されている。

智尊召入、即ち、智慧薩埵を召喚して彼と一体となり (*dgug gzhus*)<sup>864</sup> 灌頂を授けていただくために (*dbang bskur dang*)、称赞 (*rgyas 'debs*) と諸々の供物 (*mchod pa'i bye brag rnams*) を捧げる。我生起によって、パドマツェワンツェルの明確な顕現と慢が生じた状態で供養を行うことは、凡俗の状態で行うよりも遙かに甚大な功德を積むことになる。本尊の立場でこうした方便の行を積むことは、成就法によって得られる厖大な悉地といえよう。

しかし、すべては無始よりこのかた (*ye nas*) 無戲論 (*spros med*)、離所縁 (*dmigs pa bral*) であり、空中を駆け巡る (*mkha' la lding ba*) 大金翅鳥 (*khyung chen; garuḍa*)<sup>865</sup> のように無所依であること (*rten med*) は、はっきりと明確である (*sa le hrig ge ba*)。これは、上にあげた供物を捧げる客体も、主体も、無始よりこのかた (1.) 無戲論、(2.) 離所縁、(3.) 無所依な存在であることが、はっきりと明確に、勤修者の心得として定めて求められるべきだということを示唆するものであろう。三輪清浄の布施、即ち、事物／主体／客体の三者の空性を了解した上での、執着を伴わない布施、となる如くだ。空中を駆け巡る大金翅鳥は、(1.) 無戲論、(2.) 離所縁、(3.) 無所依な存在の象徴として、ここに喩例とされているものと考えられる。

### §4.3.2

§4.3.2 には、本尊 (*lha*) を生起する次第、即ち「生起次第」(*bskyed rim*) に関する 2つの祈請が記されている。

第一には、本尊自身の発散と収斂による (*lha yi 'phro 'du yis*) 生起次第が画然としたものであるよう (*sa ler zhog cig*) 祈請する。本尊自身の「発散」(*'phro*) や「収斂」(*'du*) には、無意志動詞 (*heteronomous*) が用いられており、勤修者は本尊を観想するが、観想の対象たる本尊自身は、任運自在に発散、収斂、顕現するものである。ここに、勤修者が本尊を生起する (*bskyed*) ことのない、生起次第 (*bskyed rim*) だということが知られる。

<sup>864</sup> See 『蔵漢』 s.v. *dgug gzhus* (p. 444): 'ye shes pa spyan drangs te dam tshig par bstim pa'.

<sup>865</sup> *khyung* と *garuḍa* は、NAGANO (長野) 1985 によれば、'神の世界での機能や役割りも、たがいによく似ているが、ガルダがナーガを調伏するものと位置づけられているのに対し、キュンは調伏する特定の相手をもたない' (p. 9) として、区別される。また、'らい病除けのキュン' (*ibid.*) と名付けられたチベットの護符 (*srung bal'khor*) について、'もとは疫病一般からの厄除けだったが、仏教導入以後キュンはらい病を駆逐するというふうに機能が特定された' (*ibid.*) と解説している。*khyung* が有するこのような機能、性格は、長寿成就法に関連して注意されるべきであろう。

第二には、生起次第が揺るぎないものであるよう (*yengs pa med par zhog*)<sup>866</sup> 祈請する。勤修者によって無思索 (*bsgom med*) が持ち上げられることなく (*'phyar bar ma btang bar*)<sup>867</sup>, 即ち、彼／彼女が無思索でいることなく、本尊の御身について (*lha sku la: sgom*) 常に思索を深めているよう説示するものであろう。更 (*thun*) 即ち、勤修時間という概念が無い (*thun med*)<sup>868</sup> 程の思索によって、生起次第が揺るぎないものであるよう祈請されている。

以上2つの祈請は、「生起する」(*bskyed*) という他動詞に看取されるように、勤修者の思索 (*sgom*) に関わるが、本尊自身は彼／彼女によって生起されるものではなく、自ら生じた貴いご身体であることにかわりない。勤修者には本尊の御身について常に思索を深めているよう説示されるが、本来的には、任運なる生起次第には減することが無く (*'gag med*), 思惟と顕現 (*dran snang*) は自らあらわれるもの (*rang shar ba*) とされる。生起次第のこの「自らあらわれる」という形態の優位性は、動かしがたい。本尊の生起次第において勤修者が注意すべきことは、従って、本尊の任運自然な顕現が、画然としたものであるように、また、揺るぎないものであるように、と祈請することに尽きるのである。

### §4.3.3

§4.3.3 には、師の身体 (*bla ma'i sku*) と勤修者の身体 (*lus*) とが無二一体となった幻の御身 (*sgyu ma'i sku*) に対して、無数の *hrī:* 字を唱える次第が説示される。勤修者はここで、赤色の *hrī:* 字を、無数に (*grangs med*), できうる限り (*ci nus*) 数える (*bgrang*), 即ち、念誦する。*hrī:* 字は、師の身体と勤修者の身体とが無二一体となった幻身に対する一種子に相応しく、たとえ音声として響いたとしても (*grags*), 語 (*ngag*) としては空 (*stong*) だとされる。

勤修者が *hrī:* 字を繰り返して数多く念誦する過程で、彼／彼女の身体に動揺 (*g.yo 'gul*)<sup>869</sup> が何か現れた (*gang snang*) 際の心得としては、彼／彼女自身の身体を揺るぎないものとして (*ma yengs*)<sup>870</sup> あらためてよく観察する (*blta*) ことが求められる。勤修者の身体を師の身体と (*bla ma'i sku ru*) 見做せば、即ち、彼／彼女自身の身体が師パドマツェワンツェルの身体と不二一体であることにあらためて集中すれば、動揺することはないものであろう。

<sup>866</sup> See 『蔵漢』 s.vv. *yengs pa* (p. 2596): 'yeng ba'i 'das pa'; *yeng ba* (p. 2596): '(tha mi dad pa) yengs pa/ yeng ba// rig pa sor mi gnas par gzhan du 'phro ba'.

<sup>867</sup> See 『蔵漢』 s.v. *'phyar ba* (p. 1788): '(tha dad pa) phyar ba/ 'phyar ba/ phyor// gyen du sgreng ba'am slong ba', Jäschke, s.v. *'phyar ba* (p. 858): '1. to raise, to lift up [...] to hold aloft [...] to fan, to sift, to winnow [...] 2. to hoist [...] to hang up [...] 3. to show to represent, to excite, to waken'.

<sup>868</sup> See 『蔵漢』 s.vv. *thun* (p. 1170): '(1) dus kyi tshad dang/ sman gyi tshad [...] sngags brgyab pa'i yungs kar sogs'; *thun dngos gzhi* (p. 1170): 'mtshams thun dngos gzhi'am/ lte ba'.

<sup>869</sup> See 『蔵漢』 s.v. *g.yo 'gul* (p. 2628): 'gul skyod'.

<sup>870</sup> See JÄSCHKE, s.v. *gyeng ba* (p. 518): 'to move a thing softly to and fro, [...] to stream into, to overflow, [...] to rummage, turn over, [...] to turn off the attention, to disturb the mind, [...] diversion, pleasure, recreation'.



### §4.3.4

§4.3.4 は、*hrī:* 字の語 (*ngag*) としての響き (*grags*) を扱った §4.3.3 に続き、勤修者による *hrī:* 字の念誦を、呼吸 (*dbugs dbyung*)<sup>871</sup> の側面から説示している。勤修者が赤色の *hrī:* という一種子を念誦し、これが発散 (*'phro*)、収斂 (*'du*) するプロセスは、一切の吐息と語 (*ngag*) との行い (*sbyor ba*) であるので、この *hrī:* 字は数えられるべき、即ち、数多く念誦されるべきだとされる。

*hrī:* 字の念誦は、勤修者の呼吸が発散し、収斂する次第であると同時に、彼／彼女の意識 (*gid*) が収斂 (*'du*) し、発散する (*'phro*) 次第であり、従って、顕現を伴う。先に勤修者は「任運なる生起次第には減することが無く、思惟と顕現は自らあらわれる」 (§4.3.2: *bskyed rim rtsol ba med pa la: 'gag med dran snang rang shar ba*) と注意された。当該箇所では、「どのようなものが現れたとしても (*gang shar yang*)、大いなる無作為 (*ma bcos*)、無始無限なもの (*ye gdal*) として置く (*bzhag*)」ことが注意されている。

この後に続く「幻である (*sgyu ma'i*) 身体 (*lus*) と語 (*ngag*) の権化として (*rol pa ru*)、<sup>872</sup> 揺るぎない、赤色の *hrī:* [字] をできうる限り数える」とは、*hrī:* 字が、師の身体と勤修者の身体とが無二一体となった幻身の語、即ち、一種子として相応しいことを強調するものであろう。

## §4.4. *hrī:* を念誦する功德

### §4.4.1

§4.4 には、*hrī:* を念誦した結果、勤修者が得る功德が説示されている。その前提としては、*hrī:* 字を「揺るぎないものとして (*ma yengs*) 7日間 (*zhag bdun*) 数えたなら (*bgrangs pa na*)」とされており、7日間 *hrī:* 字を繰り返し数多く念誦することがあげられている。その結果、智慧のダーキニーたち (*ye shes mkha' 'gro*) が直々に集会し (*dngos su 'du*)、勤修者の定められた死をも (*'chi nges pa yang*) 欺くので、寿命百歳が叶う (*lo brgya thub*) ものとされる。

この他、勤修者が7日間 *hrī:* 字を繰り返し数多く念誦した結果得る功德には、彼／彼女の身体と心 (*lus sems*) は楽 (*bde*) で、煌々とし (*gsal*)、喉 (*gre [ba]*)<sup>873</sup> や舌 (*lce*) も楽である、ということもあげられている。これは、7日間 *hrī:* 字を繰り返し数多く念誦した勤修者の心身、特に彼／彼女の喉と舌を癒す効果をもとめるものであろう。また、その勤修者の上には、要望する富 (*dgos 'dod longs spyod*) が雨のように降る (*char du 'bab*) ともされる。

当該 §4.4.1 が提示する *hrī:* 字念誦の功德を纏めるならば、(1.) 勤修者定められた死をも欺き、寿命百歳を叶えること、(2.) 勤修者の心身を楽にすること、(3.) 勤修者が要望する富を雨のように降らせること——という3点があげられる。これらが何も世間的な願望

<sup>871</sup> See 『蔵漢』 s.vv. *dbugs dbyung* (p. 1945): '*dbugs 'byin pa dang 'dra*'; *dbugs 'byin pa* (p. 1945): '(1) *sems gso gtong ba*/[...] (2) *dbugs phar gtong ba*'.

<sup>872</sup> See 『蔵漢』 s.v. *rol pa* (p. 2729): '(1) *bkod pa*/[...] (2) *sprul pa*'.

<sup>873</sup> See 『蔵漢』 s.v. *gre ba* (p. 407): '*ol grong dang mid pa'i mgor gnas pa'i skad kyi gdangs dang/ dbyangs kyi 'gyur khug 'byung ba'i rten byed pa zhig*'.

を負うものであることについては、異論がないであろう。しかし、この願望の先には、究極の宿願である極楽世界への往生が、その視野に入っているものと想定される。

## §4.4.2

当該 §4.4.2 に説示される場所の、*hrī*: を念誦した結果、勤修者が得る功德は、§4.4.1 の所説に比し、出世間的である。当該箇所では、この一種子を「揺るぎないものとして (*mayengs*) 連続して (*rgyun du*) 数えると (*bgrangs pa na*)」即ち、*hrī*: 字を連続して数多く念誦し、本尊の任運自然な顕現が揺るぎないものであるよう祈請すると、持明者たる師 (*bla ma rig 'dzin byin*) の加持 (*rlabs kyis*) が得られ、その結果、勤修者は、輪廻の内にある一切 (*'khor ba'i chos kun*) が幻だということを理解する (*sgyu mar go*) ものとされるからである。

持明者たる師パドマツェワンツェルから授与された加持によって、勤修者は嗜好 (*zhen chags*)<sup>874</sup>、貪愛 (*'dod sred*)<sup>875</sup>、戲論 (*spros [pa]*)<sup>876</sup> を離れ、我欲 (*rang 'dod*)<sup>877</sup> という魔 (*bdud*; Skt. *māra*)<sup>878</sup> による縛 (*bcings pa*)<sup>879</sup> から解脱する (*grol*) ものとされる。その結果としてあげられている「飲食 (*zas skom*)<sup>880</sup> に関する貪愛、貪欲 (*zhen pa*)<sup>881</sup> が小さく [なる]」こと、即ち、飲食に関する少欲知足は、特に養生術 (*bcud len; rasāyana*) の実践において重要な意義がみとめられるのであるから、これを軽んずるべきではない。しかし、上にあげた離戲論等の功德に比すれば、甚だ限られた解脱であることは認めなければならないであろう。

## §4.4.3

§4.4.3 にも、*hrī*: を念誦した結果、勤修者が得る功德が説示されている。それによれば、持明者たる師の加持により、楽 (*bde*) と暖 (*drod*) とが自ら生じて、彼／彼女の身体の内には眩しく輝く (*'bar*)。と同時に、或いはその結果、勤修者の言葉は心地よく響くようになり (*ngag snyan*)、あらゆる人が彼／彼女の言うこと (*bsgo ba*)<sup>882</sup> を聴くようになるという。

<sup>874</sup> See 『蔵漢』 s.v. *zhen chags* (p. 2402): '*phangs sems sam brkam chags*'.

<sup>875</sup> See 『蔵漢』 s.v. *'dod sred* (p. 1420): '*'dod pa la shin tu chags pa*'.

<sup>876</sup> See 『蔵漢』 s.v. *spros pa* (p. 1693): '(1) *rgya che ba'i mtshan ma dang/ rtog pa*'.

<sup>877</sup> See 『蔵漢』 s.v. *rang 'dod* (p. 2648): '*rang gi 'dod pa'am mos pa*'.

<sup>878</sup> See 『蔵漢』 s.v. *bdud* (p. 1361): '(1) <*māra*> *sems can la gnod 'tshé dang dge ba la bar chad byed mkhan/ 'dod lha rigs drug gi nang gses shig [...]* (2) (*mngon*) *bdud la lha'i bu dang/ nyon mongs pa/ 'chi bdag chung po bcas bzhi yod pas grangs bzhi mtshon*'.

<sup>879</sup> See 『蔵漢』 s.vv. *bcings pa* (p. 752): '*'ching ba'i 'das pa*'; *ching ba* (p. 865): '*(tha dad pa) bcings pa/ bcing ba/ chings// sdom pa*'.

<sup>880</sup> See 『蔵漢』 s.v. *zas skom* (p. 2455): '*'bza' btung ste/ za rgyu dang 'thung rgyu gnyis bsdoms pa'i bsdus ming*'.

<sup>881</sup> See 『蔵漢』 s.v. *zhen pa* (p. 2402): '*(tha mi dad pa) dga' ba'am/ chags pa/ [...]'dod chags*'.

<sup>882</sup> See 『蔵漢』 s.v. *bsgo ba* (p. 632): '(1) *sgo ba'i ma 'ongs pa* (2) *bslab bya*'.

*ngag snyan* は、ここで語義通り「カッコウ (cuckoo)」のような鳴き声の妙音を意図しよう。<sup>883</sup>

ここに「暖」と訳出した *drod* は、*hrī:* を念誦した結果、勤修者の身体を楽にし、暖めるといふ素朴な表現であろう。幻身 (*sgyu lus*) と共にナーローの六法 (*Nā-ro-chos-drug/chos drug gi man ngag*) の一つとして知られる「内的火」(*gtum mo*),<sup>884</sup> 或いは「チャンドーリーの火」(*gtum mo'i me*)<sup>885</sup> といった用語を意図するようには思われぬ。勤修者の心が不死なる智慧そのものということ (*rang sems 'chi med ye shes*), また、顕現する生滅はすべて法身の現れに過ぎないということ (*skye 'gag snang ba chos skur shar*) を彼／彼女をして気付かしめる楽であり、暖なのである。これも、*hrī:* を念誦した結果、勤修者が得る功德の一つである。

#### §4.4.4

§4.4.4 には、勤修者が *hrī:* を念誦した結果、その幻身 (*sgyu lus*) をもって至高の成就 (*mchog gi dngos grub*), 即ち、解脱 (*grol*) が叶うという功德が説示されている。

自身の心が不死なる智慧そのもの (§4.4.3: *rang sems 'chi med ye shes*) であることを理解している勤修者は、今世と来世に取捨しそのまま (*rang sar*) 解脱するものとされる。具体的な断じる対象 (*spang [bar bya ba]*) や取る対象 (*blang [bar bya ba]*) は言及されておらず、「取捨」(*spang blang*)<sup>886</sup> という観念そのものから離れるものと解される。というのは、彼／彼女は、その結果、期待と不安 (*re dogs*)<sup>887</sup> という二つの把持 (*'dzin pa gnyis*) を離れる (*dang bral*), とされているからだ。この解脱、即ち、至高の成就是、地／水／火／風という四大が構成する幻の身体 (*'byung bzhi'i sgyu lus*), 即ち、異熟の肉体を棄捨することなく (*ma spangs par*), いまそのまま、成し遂げられる (*thob par 'gyur*) ものである。

当該 §4.4.4 に説示される幻の身体は、先の §4.4.3 において勤修者の心 (*sems*), 智慧 (*ye shes*) として生起された法身 (*chos sku*) の次に、実際に存在する勤修者の身体 (*lus*) と

<sup>883</sup> See 『蔵漢』 s.vv. *ngag snyan* (p. 642): '(mngon) khu byug'; *khu byug* (p. 231): 'dpyid dus skad snyan sgrog pa'i bya zhig [...] ming gi nam grangs la ngag snyan dang/ lnga pa'i dbyangs ldan/ 'dab ma'i theg pa/ 'dod pa'i tā la/ na tshod gnas/ nags dga'/ dpyid kyi pho nya/ dbyangs snyan/ dbyangs snyan sgrog mig mdzes/ gzhan gyis rgyas/ gzhan gyis gsos/ gzhan la sems bcas so'.

<sup>884</sup> See 『蔵漢』 s.v. *nā ro chos drug* (p. 1496): 'rgya gar gyi paṇ chen na ro ta [sic] pa nas brgyud pa'i gdams pa ste/ 'di la chos drug 'dren lugs gnyis las gcig ni/ gtum mo'i rnal 'byor dang/ 'od gsal/ sgyu lus/ bar do/ 'pho ba/ grong 'jug bcas drug yang gcig ni/ gtum mo dang/ 'od gsal/ sgyu lus/ zung 'jug 'pho ba/ grong 'jug ste drug'.

<sup>885</sup> See 『蔵漢』 s.v. *gtum mo* (p. 1046): '(tṣaṅḍālī) rdzogs rim gyi rtsa ba'i chos shi ste/ rtsa lung thig le gnad du bsnun pas lte ba'i a thung las bde drod sbar bas phung khams ma dag pa rnams sreg cing nyon mongs nam rtog thams cad 'joms pa gtum pa'i las byed cing/ lhan cig skyes pa'i ye shes myur du skyed par byed pa'o'.

<sup>886</sup> See 『蔵漢』 s.v. *spang blang* (p. 1652): 'spang bya dang blang bya gnyis kyi bsdu ming ste/ spang bya ni bsam sbyor ngan pa'i rigs dang/ blang bya ni bsam sbyor bzang po'i rigs so'.

<sup>887</sup> See 『蔵漢』 s.v. *re dogs* (p. 2716): 'byung na bsam pa'i re ba dang mi yong snyam pa'i dogs pa'.

して生起された幻身 (*sgyu lus*) を説くものであろう。解脱という至高の成就が成し遂げられる、即ち、成仏する身体に他ならない。法身と幻身は、対比されるにせよ、何れも信解作意によって生起された身体 (意生身) であると考えられる。もつとも、両者を作意無く縁ずることは、「大いなる無作為、無始無限なものとして置く」 (§4.3.4: *ma bcos ye gdal chen por bzhag*) 等と、既に注意されている通りである。

### §4.4.5

§4.4.5 では、*hrī*: 字念誦の結果として勤修者が授与される功德を纏めるかたちで、これを身口意に分けて説示している。本尊の任運自然な顕現が揺るぎないものであるよう、*hrī*: という一種字を音声や意識等 (*sgra skad yid la sogs*) を用いて連続して数えると、持明者たる師の加持によって、次の3つの功德が得られる。

まず第一の功德は、勤修者自身の身体 (*rang lus*) に関する功德である。彼／彼女の身体は、「師の空なる顕現」 (*snang stong bla ma*) となり、パドマトウテンツェル (*Padma-thod-phreng[-rtsal]*)<sup>888</sup> を目の当たりにする (*dngos su mthong*) ことが叶う。パドマトウテンツェルは、ダクポツェル (§3.3.2: *Drag-po-rtsal*) やパドマツェワンツェル (§4.2.1: *Padma-tshe-dbang-rtsal*) と同様、パドマサンバヴァの変化身の一つであることが想定され、SAMUEL 2014 によれば、『チメートクティク』 (*'Chi med srog thig*) にも言及がある。<sup>889</sup>

次に第二の功德は、勤修者自身の語 (*rang ngag*) に関する功德である。彼／彼女の語は、「正法が直々に現れたもの」 (*dam chos dngos su 'char*) となり、従って、あらゆる不善 (*mi dge*) や罪障 (*sdig sgrib*) を離れているから、三世諸佛の心 (*sems*) に相通じる (*brnyed*) ことが叶う。

最後に第三の功德は、勤修者自身の心 (*rang sems*) に関する功德である。彼／彼女の心は、「法身として決心される」 (*chos skur blo thag chod*) ので、マハームドラー (*Mahāmudrā*) に関する持明者の位となる (*phyag rgya chen po'i rig 'dzin thob*) ことが叶う。

*phyag rgya chen po* は、『チャッキドンポ』において当該箇所にもみ用例がみとめられる孤語 (*hapax legomenon*) である。「マハームドラーに関する持明者の位」 (*phyag rgya chen po'i rig 'dzin*) は、当該成就法の性格を勘案する上で、極めて重要な用語として提出されるべきであろう。

<sup>888</sup> §4.6.2: *padma thod phreng rtsal gyi tshe dbang thugs sgrub*.

<sup>889</sup> E.g. SAMUEL 2014:92: 'In the case of the *'Chi med srog thig*, the central deities are, as already implied, forms of Amitāyus, more specifically a male-female couple (*Padma Thod 'phreng [sic] rtsal* and consort). These are held to represent the specific forms of Amitāyus and of his consort Caṇḍalī that were realized by Padmasambhava and his consort, the Indian princess Mandārāvā, when they themselves achieved the long-life *siddhi*, an episode that was held to have happened at a location known as Māratika and today mostly identified with the Hindu-Buddhist cave shrine of Halase in Nepal'.

## §4.5. *hrī:* の定義

### §4.5.1

§4.5 には、*hrī:* という一種字の定義が、7音節より成る頌文中に *med* という否定句を多分に用いて説示されている。§4.5.1 は、その冒頭に、まず「揺るぎないものとして *hrī:* [という一種字] に安住することだ」(*ma yengs hrī: la gnas par bgyi*) と勤修者をして知らしめてから、*hrī:* 字の5つの特徴 (*nature*) を列挙している。

その第一は「*hrī:* [という一] 種字に苦悩や疲労は無い」(*hrī: yig skyo sun ngal dub med*) という特徴である。もとより厳密なことはいえないが、ここでいう苦悩 (*skyo sun*)<sup>890</sup> や疲労 (*ngal dub*)<sup>891</sup> は、*hrī:* 字の念誦にかかる肉体的苦勞を意図するものであるかもしれない。

第二の「[*hrī:* 字は] 数えられないから計算を離れている」(*bgrang du med kyi grangs rtsis bral*) という特徴は、勤修者が数える (*bgrang*)、即ち、念誦する (*bzla*) ところの *hrī:* 字が無数 (§4.3.3: *grangs med*) であって、数えられないことを意図するものであろう。

第三の「[*hrī:* 字は] 設置されないから純粹である」(*bzhag tu med kyi sal le ba*) という特徴は、単純にこれを換言すれば、設置されたものは純粹 (*sal le ba*)<sup>892</sup> ではない、ということになる。大いなる無作為 (§4.3.4: *ma bcos*) が *hrī:* 字の純粹性に関連付けて説明されている。

第四の「[*hrī:* 字は] 実体が無いから円滑である」(*dnegos po med kyi phyra le ba*) という特徴は、第五の特徴「実体が無いものでないから明瞭である」(*dnegos med ma yin hrig ge ba*) と明らかに対になっている。*dnegos po* (Skt. *bhāva/vastu*)<sup>893</sup> は、『チャッキドンポ』中に当該箇所にもみ用例が見在するばかりで、仮に「実体」として当該の文脈に当てはめてみると、「実体が無い」(*dnegos po med*) と「実体が無いものでない」(*dnegos po med ma yin*) という対の構図の中に、前者は円滑であること (*phyra le ba*)<sup>894</sup> の、後者は明瞭であること (*hrig ge ba*)<sup>895</sup> の事由になっていることが想定される。実体は、従って、相反する存在意義をもつことになり、*hrī:* 字は、決して実体によって一義的に定義付けされるものではなく、「円滑」であり、かつ「明瞭」である、という説示がここに看取される。

当該 §4.5.1 の最後に付された諫言「[*hrī:* 字を] 修習することなく、その貪欲を放棄せよ」(*bsgom du med de zhen pa thong*) の中には、3つの異読——(1.) *bsgom/sgom*, (2.) *de/do* (3.) *thong/mthong*——が見在し、決定しがたい。校訂テキスト中に採用したように、『リンチェンテルズ』所伝の読み (CD\_B, CD\_C) に従った場合は、文末の動詞 *thong*

<sup>890</sup> See 『蔵漢』 s.v. *skyo sun* (p. 167): ‘sems skyo ba dang mi bde ba’.

<sup>891</sup> See 『蔵漢』 s.v. *ngal dub* (p. 652): ‘dka’ las’.

<sup>892</sup> See JÄSCHKE, s.v. *sal le ba* (p. 572): ‘clear, bright, brilliant’.

<sup>893</sup> See MVy, nos. 4595: *abhāvaḥ/dnegos po med pa*, 2419: *vastukṛtaḥ (vāstukṛta) dnegos por byas pa’am rten tu byas pa*.

<sup>894</sup> See 『蔵漢』 s.v. *phyra le ba* (pp. 1731–1732): ‘ngos mnyam pa’i dbyibs te/ mtho dman dang ’bar ’bur med pa’.

<sup>895</sup> See 『蔵漢』 s.v. *hrig ge* (p. 3076): ‘gsal sing nge ba’.

(*gtong* の命令形)「放棄せよ」<sup>896</sup>が注目される。この文脈では、*hrī*: 字は念誦 (*bzla*) されても、修習 (*bsgom*) されるべきではなく、従って、修習された場合その所為は貪欲 (*zhen pa*) と見做される。これは放棄せられなければならない、と解せよう。

## §4.5.2

§4.5.2 にも *hrī*: という一種字の定義が、7音節より成る頌文中に *med* という否定句を多分に伴って説示されている。他の頌文と比較してみると、6つの頌文に対応する6つの *hrī*: 字の定義は、その文末にすべて *hrī*: 字を配置しており、念誦にあたって特別の配慮があるものと想定される。

当該 §4.5.2 に説示される *hrī*: という一種字が有する6つの特徴、即ち——(1.) 顕現するがままで、滅することがない (*ji ltar snang ba ma 'gags*), (2.) 観想の対象にならない (*bsam yul 'grub tu med*), (3.) 取捨<sup>897</sup>という否定や肯定<sup>898</sup>が無い (*blang dor dgag sgrub med*), (4.) 畏怖も対治も無い (*'jigs bya gnyen po med*), (5.) 世間の言葉では言い表わせない (*tha snyad brjod du med*), (6.) 象徴<sup>899</sup>や喩えで明示できない (*brda dpe bstan du med*)——という6つの特徴は、すべては無始よりこのかた無戲論 (*spros med*), 離所縁 (*dmigs pa bral*) であり、空中を駆け巡る大金翅鳥 (*khyung chen; garuḍa*) のように無所依であるという §4.3.1 の所説を受けたものとみられる。もとより、これは確実な論拠をもつわけではないが、漢字で示せば「無」や「離」となるこれら3つの特質に顕著な否定のかたちは、*hrī*: という一種字が有する特徴を説示するにあたって、*ma* や *med* を多分に伴う6つの頌文に展開していったものと想定される。

## §4.6. 授記

### §4.6.1

§4.6 には、このパドマサンバヴァ (パドマトウテンツェル) の心成就法、即ち、『チャッキドンポ』が、有縁者 (*las can*) と巡り会い、彼/彼女によって持明者 (*rig 'dzin*) の位が成し遂げられる旨が授記されている。その冒頭、§4.6.1 は、散文スタイルで記述された続く §§4.6.2–4.6.3 とは異なり、7音節より成る5つの頌文で構成されている。

持明者の精髓 (*rig 'dzin snying po*) である、この心成就法 (*thugs sgrub*) が、無始よりこのかた無戲論 (*spros med*), 任運無作 (*lhun grub*) であることは、既に説示された内容であり、あらゆる有縁者は、このことをよく承知している (*rtogs*) ものとされる。従って、彼/彼女は、幻身 (*sgyu lus*) を捨離することなく (*mi 'dor*)<sup>900</sup> 持明者の位が成し遂げられる (*rig 'dzin thob*) ものである。「持明者の位」 (§4.6.3: *rig 'dzin gyi sa*) という用語は、修行

<sup>896</sup> See 『藏漢』 s.vv. *thong* (p. 1194): ‘*gtong ba'i skul tshig*’; *gtong ba* (p. 1049): ‘[as a verb] (*tha dad pa*) *biang ba/ gtang ba/ thong//* (1) *ster ba'am byin pa/ [...]* (2) *'dor ba/ [...]* (3) *glod pa/ [...]* (4) *rgyag pa/ [...]* (5) *mngags pa/ [...]* (6) *kha lo sgyur ba/ [...]* (7) *byed pa/ [as a noun] sbyin pa*'.

<sup>897</sup> See 『藏漢』 s.v. *blang dor* (p. 1916): ‘*tshur blang bya dang phar dor bya*'.

<sup>898</sup> See 『藏漢』 s.v. *dgag sgrub* (p. 434): ‘*min pa dgag cing yin pa sgrub pa*'.

<sup>899</sup> See 『藏漢』 s.v. *brda* (p. 1483): ‘(1) *go byed/ [...]* (2) *yig thog gam/ ngag thog nas btang ba'i lan*'.

<sup>900</sup> See 『藏漢』 s.v. *'dor ba* (pp. 1422–1423): ‘(*tha dad pa*) *dor ba/ dor ba/ dor// skyur ba dang/ gtong ba/*

階梯における一つの境地 (*sa*; Skt. *bhūmi*) と見做し得る。当該 §4.6.1 でいえば、有縁者が、上にあげたこの心成就法に関する本領をよく承知していることを、その修行階梯における導因とし、持明者の位はその果報として位置付けられよう。

この心成就法、即ち、『チャッキドンポ』が、あらゆる有縁者 (*las can kun*) の中でも、「かの有縁者」(*las can gcig*) たるリクズイン・グウデムチェンと巡り会うよう (*'phrad par shog*) 授記されたことを受け、彼がこれを発掘したことは、第2.7章 (発掘) において考察したとおりである。

## §4.6.2

§4.6.2 には、当該の奥義なる成就法「*Hrī* 一字」が「パドマトウテンツェルの心成就法 [に属する] 寿命に関する灌頂」(*padma thod phreng rtsal gyi tshe dbang thugs sgrub*) であることが明言され、*hrī*: 字に関する3点の要義が散文スタイルで記述されている。「パドマトウテンツェルの心成就法」という名称は、ダライ・ラマ5世の『チャッキドンポの作法並びに灌頂儀軌法』(*lCags kyi sdong po'i las byang dbang chog dang bcas pa*) にも *rgyal mchog padma thod phreng thugs gsang bcud* というかたちで見在し、これは校訂テキスト中に提出した。

「*hrī*:」という一種子に関する第一の要義は、「この *hrī*: という一 [種子は、] 虚妄分別を [自ら] 穿って生じたものである」(*hrī: gcig ma 'di la rnam rtog thol te byung ba*) という点である。*thol* は『チャッキドンポ』中に当該箇所にもみ用例がみとめられる孤語であり、その語義を解明する為のめぼしい手がかりは見出せない。この動詞は、続く *byung ba* と助詞の *te* で繋がり、共に *hrī: gcig ma 'di* を主語としていることは、同じく助詞の *la* がよく示しており、<sup>901</sup> 以上の文脈で虚妄分別 (*rnam rtog*) を目的語とした場合、*rtol* (穿つ) の完了形<sup>902</sup> と見做すことはできないであろうか。筆者の試訳は上の想定による。

「*hrī*:」という一種子に関する第二の要義は、「「*hrī*:」ということは、不確かなものを任運無作に肝に据えることである」(*hrī: zhes pas gtad med lhun grub tu phyal phyal gtong ba*) という点である。まず、当該箇所の *pas* には *pa'i* という異読 (CD\_A) が注意される。*gtad* と *phyal phyal gtong ba* はいずれも孤語として見在する。*lhun grub* は、一切万物 (§4.2.4: *snang srid kun*) や心成就法 (§4.6.1: *thugs sgrub*) にかかる述語で、「無始よりこのかた、無作為、任運無作である」 (§4.2.4: *ye nas ma bcos lhun grub yin*) 或いはまた、「無始よりこのかた無戲論、任運無作である」 (§4.6.1: *ye nas spros med lhun grub yin*) と叙述されるように、内容的には無作為 (*ma bcos*) や無戲論 (*spros med*) に等しく説示されるから、これは第一の要義に言及される *rnam rtog* (虚妄分別) の対概念と見做し得

*spong ba/ 'bor ba*'.

<sup>901</sup> See BEYER 1992:278–279 (2.2.2 (The particle *-la* as topicalizer)): ‘A topic may also be placed in the setting slot of a proposition and be signaled with the locus particle *-la*. [...] This topicalizer, like *ni*'.

<sup>902</sup> See JÄSCHKE, s.vv. *thol ba* (p. 239): ‘pf. to *rtól-ba*, what has come forth, what has been raised, elevated (?)’; *rtol ba* (p. 215): ‘pf. *brtol* [...] to bore, to pierce, to bore into, [...] to bore through, to perforate, [...] to make an incision’; 『蔵漢』 s.vv. *thol* (p. 1198): ‘*tho le zhes pa'i bsdus ming ste*’; *rtol* (pp. 1080–1081): ‘(1) (*tha dad pa*) *brtol ba/ brtol ba/ rtol/ 'big pa'am phyung ba* [...] (2) (*tha mi dad pa*) *brtol ba/ brtol ba/ slebs pa*'.

る。*gtad med* は、従って、虚妄分別に類似した「不確かなもの」<sup>903</sup> という一概念が想定され得ようし、*phyal phyal gtong ba* には、その反対で、不確かなものを確かにする *hrī:* 字の機能が想定されよう。筆者の試訳「肝に据えること」<sup>904</sup> は、上の想定による。

「*hrī:*」という一種子に関する第三の要義は、「「*hrī:*」というあらゆる種類の音声は、[勤修者の]意識によっても、揺るぎないものとして数えられるべきものである」(*hrī: yi sgra skad ci rigs pa yid kyis kyang ma yengs par bgrang ngo*) という点である。*hrī:* という一種子が、一切の呼吸と語との行いである (§4.3.4: *dbugs dbyung ngag gi sbyor ba kun*) ことは既に説示されたとおりであり、これを「「*hrī:*」というあらゆる種類の音声」(*hrī: yi sgra skad ci rigs pa*) と換言したものであろう。*hrī:* 字は、また、本尊の任運自然な顕現が揺るぎないものであるよう祈請する音声や意識等を伴って、連続して念誦されるべきもの (§4.4.5: *ma yengs sgra skad yid la sogs: rgyun du hrī: bgrang*) として説示されていた。この心成就法 (*thugs sgrub*) において、勤修者の呼吸と語との行いである *hrī:* が、揺るぎないものとして、彼/彼女の意識によっても (*yid kyis kyang*) 念誦されるべきであるのは、パドマサンバヴァの御心 (*thugs*) に呼応する勤修者の意識 (*yid*) を問うものであろう。

### §4.6.3

§4.6.3 には、*hrī:* という一種子を念誦するヨーガ行者が幻の身体を棄捨することなく持明者の位を得る旨が、散文スタイルで授記されている。

その骨子の第一には「分別を離れて大いなる智慧にある者は、「*hrī:*」[という一種子]を数える必要はない」(*rtog bral ye shes chen por 'dug na hrī: bgrang mi dgos so*) ということがあげられている。これは、換言すれば、*hrī:* 字念誦の目途は、分別を離れて (*rtog bral*)、大いなる智慧にある (*ye shes chen por 'dug*) 位を得ることだ、という意味内容になろうが、当該の授記においては、対告者は既にこの位を得た、即ち、彼/彼女は分別を離れて、自身の心が不死なる智慧そのものだということを理解した (§4.4.3: *rang sems 'chi med ye shes rtogs*) ものとして叙述されている。

骨子の第二には「[これから]置かれるものも、[いま]置くもの[も]無い」(*gzhag bya 'jog byed med do*) ということがあげられている。簡潔であるだけに、構成からいって (1.) *gzhag bya* という未来形 *gzhag* を用いた「置かれるもの」と、(2.) *'jog byed* という現在形 *'jog* を用いた「置くもの」との対同を手がかりにし、両者の主語は第一骨子に通じ、分別を離れているから、両者が無いものと想定した。

骨子の第三には「更という概念[も]無い」(*thun mtshams med do*) ということが挙げられている。*thun mtshams* は、*thun so so'i bar mtshams* (各座間の合間) を意図するもので

<sup>903</sup> See 『藏漢』 s.v. *gtad med* (p. 1033): ‘*di yin 'di min gyi gtad so med pa'am/ cha 'jog byed mi rung ba*'.

<sup>904</sup> See 『藏漢』 s.vv. *phyal* (p. 1738): ‘*lto ba'am grod khog*'; *gtong ba* (p. 1049): ‘[as a verb] (*tha dad pa*) *btang ba/ gtang ba/ thong//* (1) *ster ba'am byin pa/ [...]* (2) *'dor ba/ [...]* (3) *glod pa/ [...]* (4) *rgyag pa/ [...]* (5) *mngags pa/ [...]* (6) *kha lo sgyur ba/ [...]* (7) *byed pa/ ... slob gso gtong ba/ ... bsam blo gtong ba/ ... 2. sbyin pa/ ...*'.



あろう。<sup>905</sup> やはり第一骨子に通じ、分別を離れているから、更 (*thun*)、即ち、勤修時間とそうでない時間との間の区別が無くなるものと想定した。

骨子の第四には「『*hrī:*』[という一種子]がこれを[修習する]ヨーガ行者と離れることがないなら、この幻の身体を棄捨することなく持明者の位が[ヨーガ行者によって]到達されることに疑いはない」(*hrī: 'di'i rnal 'byor dang ma bral na: sgyu lus 'di ma spangs par rig 'dzin gyi sa non par the tshom med do*)ということがあげられている。この意義内容は、続く「[このパドマサンバヴァの心の成就法が]彼の有縁者と巡り会うように！」(*las can gcig dang 'phrad par shog*)というパドマサンバヴァの言祝ぎを含め、§4.6.1の所説<sup>906</sup>に対応するものといってよいであろう。*hrī:* 字の念誦を通じヨーガ行者 (*rnal 'byor*)たる勤修者によって疑いなく (*the tshom med*) 到達されるころの (*non par*)<sup>907</sup> 持明者の位 (*rig 'dzin gyi sa*) は、幻の身体を棄捨することなく (§4.6.3: *ma spangs par*), 捨離することなく (§4.6.1: *mi 'dor*) 達成される、修行階梯における一つの境地 (*sa*) と見做し得る。

このような境地に達した彼の器の者にのみ (*snod ldan gcig la*), パドマサンバヴァはこれを与える (*sbyin*) ものであり、あらゆる者に (*kun la*) これを広めてはいけない (*ma spel*) と彼の授記を結んでいる。従って、続くダーキニーの符牒、或いはウッディヤーナ語を記した文字は、<sup>908</sup> これに類した内容を叙述しているものと想定される。

## §4.7. コロフォン

### §4.7.1

当該 §4.7.1 は、『チャッキドンポ』の発掘者であるリクズイン・グウデムチェンが叙述した第4節奥義なる成就法「*Hrī* 一字」のコロフォンにあたる。毒蛇の塊の如き岩山の中腹から、持明者グウキデムトゥチェンによって発掘されたものである。*btan pa* (発掘した) という過去形は、第1節外なる成就法「貴重な壺」のコロフォン (§1.8.1) にも見在する用例で、このコロフォンがテルマに付加されたことを諷示している。

テルマのコロフォンには、SCHWIEGER 1990 が注意を促しているように、パドマサンバヴァによって記された「架空のコロフォン」(‘*fingierten Kolophon*’)と、テルトゥンによって記されたコロフォンとが存在する。<sup>909</sup> こうした視座は、テルマの原初形態 (‘*Umstände*

<sup>905</sup> See 『蔵漢』 s.v. *thun mtshams* (p.1173): ‘(1) *dus mtshams/* [...] (2) *thun so so'i bar mtshams/* [...] (3) (*mngon*) *dgong mo*'.

<sup>906</sup> §4.6.1:  
*rig 'dzin snying po'i thugs sgrub 'di:*  
*ye nas spros med lhun grub yin:*  
*las can kun gyis de ltar rtogs:*  
*sgyu lus mi 'dor rig 'dzin thob:*  
*las can gcig dang 'phrad par shog:*

<sup>907</sup> See 『蔵漢』 s.v. *non pa* (p. 1530): ‘[as a verb] (1) (*tha mi dad pa*) (1) *spa 'khums pa'am zhum pa/* [...] (2) *chags pa'am zhen pa/* [as a noun] *zhon rta sogs*'.

<sup>908</sup> Cf. Appendix B, no. 15 (A 538,1; B 262,4; C 210,4).

<sup>909</sup> SCHWIEGER 1990:xxix: ‘Häufig besitzen die gTer-ma Texte zwei Kolophone: einen fingierten Kolophon

der Abfassung des Textes') を想定するにあたって、我々が決して忘れてはならないことだ。確かに、当該長寿成就法はパドマサンバヴァが「後世の」有縁者のために埋蔵し、リクズイン・グウデムチェンがその「後世」に発掘したとされるのであるから、コロフォンのみならず、『チャッキドンポ』は一貫してリクズイン・グウデムチェンの手に成ったものだという見方もある。

長寿成就法『チャッキドンポ』は、しかし、埋蔵者パドマサンバヴァとほぼ同年代に流行したことが知られる〈無量寿宗要経〉にその由来をある程度たどることができ、当該長寿成就法をして、リクズイン・グウデムチェンのまったく新しい構想であると思ふし得ないことも、また明らかである。当該長寿成就法において信 (emic) ということが極めて重要な位置を占めることは、本論文がこれまで考察を試みた中に述べてきたとおりであり、当該長寿成就法の由来は、リクズイン・グウデムチェンのパドマサンバヴァに対する信仰の中にこそ尋ねられるべきものではないかと思う。

---

des Padmasambhava, der die Unterweisung ursprünglich in Tibet verkündet haben soll, oder einer Person aus seiner unmittelbaren Umgebung, die den Text nach seinen Worten abgefaßt haben soll, und einen Kolophon desjenigen, der den *gter-ma* entdeckt haben will. Über die wahren Umstände der Abfassung des Textes geben uns die Kolophone ummittelbar keine Auskunft?.

# 付 録

## 付録1

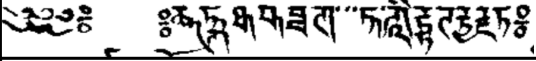
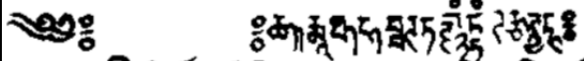
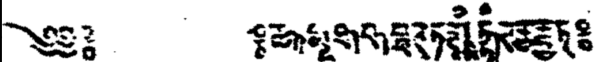
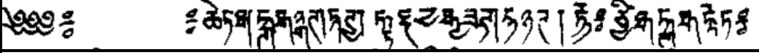

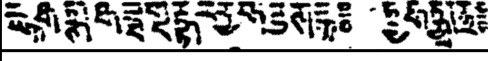
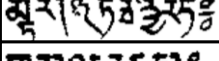

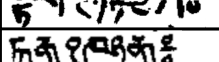

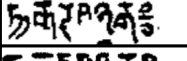
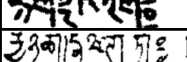
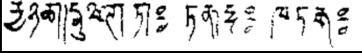
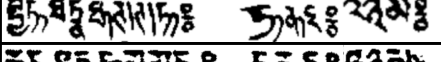
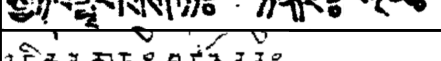
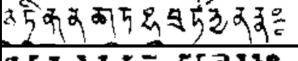
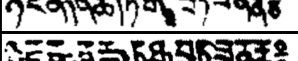
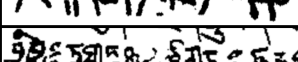
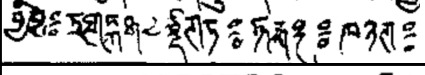

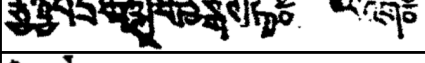
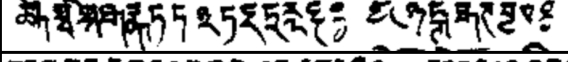
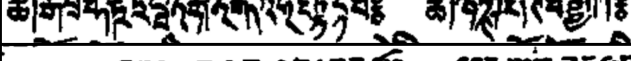
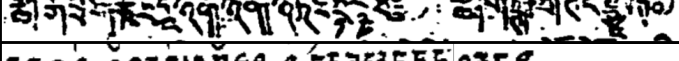

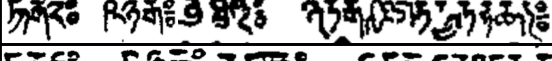
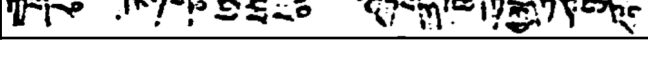
## 長寿成就法『チャッキドンポ』のシノプシス (§§0-4)

§	内容
0.	第0節長寿成就法『チャッキドンポ』のためのはしがき
0.1.	帰敬文の奉唱 (§0.1.1)
0.2.	埋蔵の趣意 (§§0.2.1-0.2.3)
0.3.	内容細目 (§0.3.1)
1.	第1節長寿成就法『チャッキドンポ』より外なる成就法「貴重な壺」
1.1.	帰敬文の奉唱 (§§1.1.1-1.1.2)
1.2.	9つの滋養物より成る甘露の調合とその功德 (§§1.2.1-1.2.4)
1.3.	相承 (§§1.3.1-1.3.3)
1.4.	前行 (§§1.4.1-1.4.2)
1.5.	本次第「不死なる甘露」 (§§1.5.1-1.5.5)
1.6.	本次第「不死なる甘露」成就の証 (§§1.6.1-1.6.4)
1.7.	テルマの守護 (§§1.7.1-1.7.2)
1.8.	コロフォン (§1.8.1)
2.	第2節 内なる成就法「チャッキドンポ」
2.1.	埋蔵の趣意 (§§2.1.1-2.1.2)
2.2.	発最勝菩提心 (§2.2.1)
2.3.	無量光仏(三昧耶薩埵)の観想 (§§2.3.1-2.3.2)
2.4.	極楽世界より智慧薩埵を勧請する (§§2.4.1-2.4.2)
2.5.	鉄鉤形の光線が二世間を遍満する (§§2.5.1-2.5.3)
2.6.	請願 (§2.6.1)
2.7.	寿命を司る壺に関する次第 (§§2.7.1-2.7.4)
2.8.	2つの功德 (§2.8.1)
2.9.	授記 (§2.9.1)
3.	第3節長寿成就法『チャッキドンポ』より秘密なる成就法「虚空の金剛」
3.1.	帰敬 (§3.1.1)
3.2.	前行儀軌 (§§3.2.1-3.2.5)
3.3.	秘密なる成就法の由来 (§§3.3.1-3.3.2)
3.4.	風による長寿成就法「命の風」 (§§3.4.1-3.4.3)
3.5.	本行儀軌 (§§3.5.1-3.5.2)
3.6.	後行儀軌 (§3.6.1)

- 
- 3.7. 埋蔵の趣意 (§§3.7.1–3.7.2)
  - 3.8. コロフォン (§3.8.1)
  - 3.9. 説示内容の要綱 (§3.9.1)
  - 4. 第4節長寿成就法『チャッキドンポ』より奥義なる成就法「*Hrī* 一字」
    - 4.1. 帰依と発心 (§4.1.1)
    - 4.2. パドマツェワンツェル (三昧耶薩埵) の観想 (§§4.2.1–4.2.4)
    - 4.3. 智慧薩埵の召喚 (§§4.3.1–4.3.4)
    - 4.4. *hrī:* を念誦する功德 (§§4.4.1–4.4.5)
    - 4.5. *hrī:* の定義 (§§4.5.1–4.5.2)
    - 4.6. 授記 (§§4.6.1–4.6.3)
    - 4.7. コロフォン (§4.7.1)

## 付録2

長寿成就法『チャッキドンポ』に見られる異体字の一覧

#1 §0.1.1	A 512,1	
	B 250,1	
	C 198,1	
#2 §1.1.1	A 516,1	
	B 251,3	
	C 199,3	
#3 §1.1.1	A 516,1	
	B 251,3	
	C 199,3	
#4 §1.1.2	A 516,3	
	B 251,5	
	C 199,5	
#5 §1.2.1	A 517,5	
	B 252,3	
	C 200,3	
#6 §1.3.2	A 518,2	
	B 252,6	
	C 200,6	
#7 §1.6.8	A 520,6	
	B 254,6	
	C 202,6	
#8 §2.1	A 521,1	
	B 255,1	
	C 203,1	
#9 §2.1.2	A 521,4	
	B 255,3	
	C 203,3	



## 付録3

## 長寿成就法『チャッキドンポ』に見られるダーラニーの一覧

No.	§	採用した読み	推定したサンスクリット表記
1.	0.1.1	ཨིནྱུ་ཡུ་ཏྲ་ར་བ་ཏ་བ་མུ།	<i>indrāyuhdharanaha nama</i>
2.	1.2.2	ཨོ་བཏྲ་སཏྲ་ཧྲཱི། རཏྲ་མུ་རླ་ཏྲཱི། ཨ་མི་རྟེ་མ་ཏྲཱི། ཀམ་བཏྲ་ཧྲཱི། བེ་ར་ཅ་བ་ཨོ།	<i>om vajrasattva hūm</i> [om] <i>ratnamudrā trāḥ</i> [om] <i>amidhewa hrī</i> [om] <i>karmavajra hūm</i> [om] <i>vairocana om</i>
3.	1.5.4	རཏྲཱི་ཧྲཱི་མོ།	<i>jaḥ hūm vaṃ hoḥ</i>
4.	2.4.2	ཨོ་ཨུམ་ཧྲཱི་བ་ཨོ་ཐུ་ག་མ་ཏེ། ཨ་པ་རི་མི་ཏ་ཨུ་ཡུ་རྫོ་བུ། སུ་བི་ནི་ཐི་ཏེ་རོ་རླ་རླ་ཡུ། ཏ་ཐུ་ག་ཏུ་ཡུ། ཨཏྲ་ཏེ་ སཏྲཱི་བཏྲཱི་ཡུ། ཏཏྲ་ཐུ། ཨོ་སམ་སི་སྐྱེ་ར་པ་རི་བཏྲཱི། རྟམ་ཏེ་ག་ག་བ་ས་ཐུ་དག་ཏེ། སུ་ཐུ་བ་བི་བཏྲཱི། མ་རླ་བ་ ཡ་པ་རི་མ་རི་སུ་རླུ། རྟཱི་བཏྲཱི་ཡུ་ཤེ་ཨུ་ཡུ་རྫོ་བ་སི་རྟཱི་ ཨུམ་ཧྲཱི།	<i>om namo bhagavate aparimitāyurjñāna- suviniścitatejorājāya tathāgatāyārhate samyaksāmbuddhāya    tad yathā    om sarva- saṃskārapariśuddhadharmate gagaṇa- samudgate svabhāvaviśuddhe mahānaya- parivāre svāhā    ṇrī bhrūm vajrāyuse āyurjñānasiddhi. āḥ bhrūm</i>
5.	2.6.1	ཨུ་ཡུ་རྫོ་བ་ཐི་བ་རླུ་ཧྲཱི། རྟཱི་བཏྲཱི་ཡུ་ཤེ་རྟཱི་ཨུམ།	<i>āyurjñāna bhindu bhrūm. ṇrī bhrūm vajrāyuse om āḥ.</i>
6.	3.2.3	ཨོ་ཐཱི་བཏྲཱི་ཡུ་ཤེ་རྟཱི་ཨུམ། ཨུམ་ཐཱི་བཏྲཱི་ཡུ་ཤེ་རྟཱི་ཨུམ། རྟཱི་བཏྲཱི་ཡུ་ཤེ་རྟཱི་ཨུམ།	<i>om bhrūm vajrāyuse hūm āḥ āḥ bhrūm vajrāyuse hūm āḥ hūm bhrūm vajrāyuse hūm āḥ</i>
7.	3.2.5	ཨོ་བཏྲཱི་ཡུ་ཀ་བ་ཅི་རྟཱི་ཧྲཱི།	<i>om vajrayakṣa kavaci hūm bhrūm</i>



## 付録4

『力倆類考究』における『チャッキドンポ』の相承系譜<sup>910</sup>

1.	無量寿仏
2.	チャンダリー女神 (Caṇḍālī)
3.	パドマサンバヴァ (fl. ca. 8c. BDRC#P4956)
4.	イエシエツオギヤル (b. 8c. BDRC#P7695)
5.	リクズイン・グウデムチェン (1337?-1406. BDRC#P5254)
6.	sNgags-'chang rDo-rje-dpal (b. 14c. BDRC#P10115)
7.	sNgags-'chang rDo-rje-mgon-po (b. 14c. BDRC#P10118)
8.	mTshan-ldan Byams-pa-bshes-gnyen (b. 14/15c. BDRC#P10116)
9.	mTshan-ldan Ngag-dbang-grags-pa
10.	Sangs-rgyas-dpal-bzang (b. 15c. BDRC#P10117)
11.	sNgags-'chang-chos-rgyal-bsod-nams
12.	sKu-sras bSod-nams-bkra-shis
13.	ドルジェダク・リクズイン 2世レクデンドルジェ (1512-ca. 1580. BDRC#P1701) <sup>911</sup>
14.	Sangs-rgyas-dpal-bzang (b. 15c. BDRC#P10117)
15.	Thugs-sras Nam-mkha'-rgyal-mtshan (b. 15c. BDRC#P5597)
16.	rGyal-sras-padma-chos-rgyal (b. 16c. BDRC#P2657)
17.	[チャンダク・タシトブゲル (1550-1603. BDRC#P646)]

<sup>910</sup> *mNga' dbang skor gyi mtha' dpyod*, 642,6: གཉིས་པ། རྒྱལ་པོའི་སྐྱེ་ཆེ་སྤྱིང་བའི་ཕྱིར་ཅུ་ཆེ་སྐྱེ་བ་ལྷགས་ཀྱི་སྤོང་པོ་བཞུགས་པ།  
 [... 643,5] དེ་ལྟར་ཡོངས་སུ་ཚང་བ་ཐེམ་མེད་རྣམས་ཅིག་མའི་སྐྱེ་བ་ཐབས་དང་བཅས་པའི་བརྒྱུད་པ་ནི། མགོན་པོ་ཆེ་དཔག་མེད།  
 ལྷ་མོ་ཅན་གྱི། འཆི་མེད་པ་རྣམས་འབྱུང་གནས། རྩོམ་ཡི་ཤེས་མཚོ་རྒྱལ། སྐལ་པའི་སྐྱེ་གཏེར་ལྷོན་རིག་འདྲིན་གློད་ལྷེ་ལ། ལྷགས་འཆང་རྩོ་  
 རྩོ་དཔལ་བ། ལྷགས་འཆང་རྩོ་རྩོ་མགོན་པོ། མཚན་ལྷན་བྱམས་པ་བཤེས་གཉེན། མཚན་ལྷན་དག་དབང་གཤམས་པ། ཆོས་རྩོ་སངས་རྒྱལ་  
 དཔལ་བཟང་། ལྷགས་འཆང་ཆོས་རྒྱལ་བསོད་ནམས། སྐྱེ་སྐྱེ་བསོད་ནམས་བཀྲ་ཤིས། ལྷ་བའི་སྐྱེ་མ་རིག་འདྲིན་མངའ་རིས་པ་ཆེན་པོ།  
 ཡང་སངས་རྒྱལ་དཔལ་བཟང་ནས། ལྷགས་སྐྱེས་ནམ་མཁའ་རྒྱལ་མཚན། ལྷ་བའི་སྐྱེ་མ་རིག་འདྲིན་མངའ་རིས་པ་ཆེན་པོ་དེ་ཉིད་དང་།  
 རྒྱལ་སྐྱེས་པ་རྣམས་ཆོས་རྒྱལ་ལས། བདག་དབང་པོའི་སྤེམ་ལེགས་པར་ལྷན་པ་སྟེ།

<sup>911</sup> For the identification with “rig ’dzin mnga’ ris pa chen po”, see *Rig ’dzin mnga’ ris pa chen po legs ldan bdud ’joms rdo rje’i rnam thar chen mo zhal gsung ma*. In: *Byang gter chos skor phyogs bsgrigs*, vol. 59, pp. 217-304.

## 付録5

## 『ダライ・ラマ5世の聴聞録』における『チャッキドンポ』の相承系譜

相承系譜1<sup>912</sup>

1.	無量寿仏
2.	チャンダーリー女神 (Caṅḍālī)
3.	パドマサンバヴァ (fl. ca. 8c. BDRC#P4956)
4.	イエシエツォギャル (b. 8c. BDRC#P7695)
5.	リクズイン・グウデムチェン (1337?-1406. BDRC#P5254)
6.	Sangs-rgyas-byams-bzang (b. 14c. BDRC#P10127)
7.	Se-ston Rin-chen-rgyal-mtshan (b. 14c. BDRC#P8343)
8.	sPyan-chab-pa mGon-po-zla-ba (b. 14c. BDRC#P10130)
9.	mNyam-med-nub-dgon-pa
10.	チャンダク・タシトブゲル (1550-1603. BDRC#P646)
11.	リクズイン・ンガギワンポ (1580-1639. BDRC#P639)
12.	[ダライ・ラマ5世ガワンロサンギャムツォ (1617-1682. BDRC#P37)]

相承系譜2<sup>913</sup>

1.-11.	相承系譜1に同じ
12.	Zur-ston Chos-dbyings-rang-grol (1604-1669. BDRC#P650)
13.	[ダライ・ラマ5世ガワンロサンギャムツォ (1617-1682. BDRC#P37)]

相承系譜3<sup>914</sup>

1.-5.	相承系譜1に同じ
6.	Se-ston mGon-po-bzang-po (b. 14c. BDRC#P10128)
7.-12.	相承系譜1に同じ
13.	[ダライ・ラマ5世ガワンロサンギャムツォ (1617-1682. BDRC#P37)]

<sup>912</sup> *Thob yig gangga'i chu rgyun*, vol. 3, 287,5: ལྷགས་སྤོང་མའི་དབང་བརྒྱད་ནི། མགོན་པོ་ཆེ་དཔག་མེད། ཆེད་ལྷ་མོ་ཅོ་རྒྱལ། འཆི་མེད་པ་རྣམས་འབྲུང་གནས། མཁའ་འགོ་ཡེ་ཤེས་མཚོ་ [མཚོ་] འཚོ་] རྒྱལ། གཏེར་སྟོན་རིག་ [རིག་] རིགས་] འདྲིན་ཆེན་པོ་རིག་ [རིག་] རིགས་] འདྲིན་སངས་རྒྱལ་བྱམས་བཟང་། སེ་སྟོན་རིན་ཆེན་ [ཆེན་] ཅེན་] རྒྱལ་མཚན། ཆོས་རྗེ་སྤྱན་ཆབ་པ། མཉམ་མེད་རྒྱལ་དགོན་པ། ཆོས་རྒྱལ་བཀྲ་ཤིས་སྟོབས་རྒྱལ། རིག་ [རིག་] རིགས་] འདྲིན་དག་གི་དབང་པོ། དེས་འཕྲིང་བར་སྟག་ཅེར་བརྒྱ་ཅའི་སྟོན་པ་ཁོ་པོ་རྗེས་སུ་བརྒྱུང་ངོ།

<sup>913</sup> *Thob yig gangga'i chu rgyun*, vol. 3, 287,6: ཡང་ན་དག་གི་དབང་པོ་ནས། ལུར་ཅ་བའི་སྤྲ་མ། དེས་བདག་ལའོ།

<sup>914</sup> *Thob yig gangga'i chu rgyun*, vol. 3, 288,1: ཡང་ན་གཏེར་སྟོན་ནས། སེ་སྟོན་མགོན་པོ་བཟང་པོ། སེ་སྟོན་རིན་ཆེན་ [ཆེན་] ཅེན་] རྒྱལ་མཚན་མན་གོང་ལྟར།

相承系譜4<sup>915</sup>

1.-5.	相承系譜1に同じ
6.	Ngo-chen Sangs-rgyas-bstan-pa
7.-12.	相承系譜1 (nos. 6.-11.) に同じ
13.	[ダライ・ラマ 5世ガワンロサンギャムツォ (1617-1682. BDR#P37)]

相承系譜5<sup>916</sup>

1.-5.	相承系譜1に同じ
6.	rDo-rje-mgon-po (b. 14c. BDR#P10118)
7.	mTshan-ldan Byams-pa-bshes-gnyen (b. 14/15c. BDR#P10116)
8.	Ngag-dbang-grags-pa
9.	Sangs-rgyas-dpal-bzang (b. 15c. BDR#P10117)
10.	Thugs-sras Nam-mkha'-rgyal-mtshan (b. 15c. BDR#P5597)
11.	ヨルモトウルク 1世シャーキャサンポ (b. 15c. BDR#P1698)
12.	ドルジェダク・リクズイン 2世レクデンドルジェ (1512-ca. 1580. BDR#P1701)
[13.]	[リクズイン・ンガギワンポ (1580-1639. BDR#P639)]
14.	[ダライ・ラマ 5世ガワンロサンギャムツォ (1617-1682. BDR#P37)]

相承系譜6<sup>917</sup>

1.-5.	相承系譜1に同じ
6.	sNgags-'chang rDo-rje-dpal (b. 14c. BDR#P10115)
7.	mTshan-ldan Byams-pa-bshes-gnyen (b. 14/15c. BDR#P10116)
8.	Ngag-dbang-grags-pa
9.	sNgags-'chang Chos-rgyal-bsod-nams (b. 15c. BDR#P10121)
10.	bSod-nams-chos-skyong-bkra-shis
11.	Tshar-chen Blo-gsal-rgya-mtsho (1502-1566/1567. BDR#P786)
12.	'Jam-dbyangs mKhyen-brtse'i-dbang-phyug-bstan-pa'i-rgyal-mtshan (1524-1568. BDR#P1089)
13.	rJe-dbang-rab
14.	bKa'-'gyur-ba
15.	Zur-chen

<sup>915</sup> *Thob yig gangga'i chu rgyun*, vol. 3, 288,1: ཡང་ན་གཏེར་སྟོན་ནས། རོ་ཆེན་སངས་རྒྱས་བསྟན་པ། སངས་རྒྱས་བྱམས་བཟང་མན་གོང་བཞིན་ལོ།།

<sup>916</sup> *Thob yig gangga'i chu rgyun*, vol. 3, 288,1: ཡང་ན་གཏེར་སྟོན་ནས། རོ་ཆེ་མགོན་པོ། བྱམས་པ་བཞེས་གཉེན། དག་དབང་གྲགས་པ། སངས་རྒྱས་དཔལ་བཟང་། རྣམ་མཁའ་རྒྱལ་མཚན། ཡལ་མོ་ཤུག་ [ཤུག] ཤུག། བཟང་། ལེགས་ལྷན་རྩེ་མན་གོང་ལྟོ།།

<sup>917</sup> *Thob yig gangga'i chu rgyun*, vol. 3, 288,2: ལྷགས་ལྟོང་མ་སངས་རྒྱས་སྟོང་གི་བསྐྱེད་ཚོག་ཡོད་པའི་བརྒྱུད་པ་ནི། གཏེར་སྟོན་ནས། རོ་ཆེ་དཔལ། བྱམས་པ་བཞེས་གཉེན། དག་དབང་གྲགས་པ། ཚོས་རྒྱལ་བསོད་ནམས། དེ་སྲས་བསོད་ནམས་ཚོས་སྟོང་བཟླ་ཤིས། ཚར་ཆེན་ཚོས་ཀྱི་རྒྱལ་པོ། འཇམ་དབྱངས་མཁའ་བཟེ། རྩེ་དབང་རབ། <<བཀའ་འགྱུར་བ། ལུང་ཆེན། དེས་བདག་གོ།>>

16. [ダライ・ラマ 5世ガワンロサンギャムツォ (1617-1682. BDRC#P37)]

## 付録6

『リンチェンテルズの目録と相伝』における『チャッキドンポ』の相承系譜<sup>918</sup>

1.	Kun-bzang
2.	五仏
3.	パドマサンバヴァ (fl. ca. 8c. BDRC#P4956)
4.	ナナムドルジドジョム (sNa-nam-rdo-rje-bdud-'joms. ca. 8c. BDRC#P4CZ10564)
5.	リクズイン・グウテムチェン (1337?-1406. BDRC#P5254)
6.	rNam-rgyal-mgon-po (1399-1424. BDRC#P10100)
7.	sNgags-'chang rDo-rje-dpal (b. 14c. BDRC#P10115)
8.	mTshan-ldan Byams-pa-bshes-gnyen (b. 14/15c. BDRC#P10116)
9.	Sangs-rgyas-dpal-bzang (b. 15c. BDRC#P10117)
10.	Chos-rgyal-bsod-nams (1442-1509)
11.	Chos-skyong-bsod-nams (ca. 16c.)
12.	Tshar-chen Blo-gsal-rgya-mtsho (1502-1566/1567. BDRC#P786)
13.	'Jam-dbyangs mKhyen-brtse'i-dbang-phyug-bstan-pa'i-rgyal-mtshan (1524-1568. BDRC#P1089)
14.	bSlab-gsum-rgyal-mtshan (1526-1577? BDRC#P1090)
15.	dBang-phyug-rab-brtan (1558-1636. BDRC#P792)
16.	Rin-chen-bsod-nams-mchog-grub (1602-1681. BDRC#P3510)
17.	Rin-chen-'jam-dpal
18.	Brag-rtsa-ba-blo-gsal-bstan-'dzin
19.	Kun-dga'-blo-gros
20.	Yongs-'dzin Kun-dga'-bkra-shis (BDRC#P9104)
21.	Ngag-dbang Kun-dga'-rin-chen (1794-1856. BDRC#P9102)
22.	ジャムヤンケンツェワンポ (1820-1892. BDRC#P258)
23.	[クントウル・ロドゥターイエ (1813-1899. BDRC#P264)]

<sup>918</sup> RT gyi dkar chag dang brgyud yig, 202,1: བྱང་གཉེར་གྲགས་སྐབ་ཚོས་ཚན་ཉེར་ལྔ་ལས། བརྟུ་དགུ་པ་ཚེ་དཔག་མེད་སྐུ་སྐུ་ལྷགས་སྦྲེང་མ་ལྷ་གཅིག་བྱམ་གཅིག་གི་དབང་། [... 202,3] ལྷ་མང་གི་དབང་བརྟུད་ནི། ཀུན་བཟང་། རིགས་ལྷ། སད་འབྱུང་། བདུད་འདྲིམས་རྩི་རྩེ། དངོས་ལྷུ་བ་མཚན། རྣམ་རྒྱུལ་མགོན་པོ། ལྷགས་འཆང་རྩི་རྩེ་དཔལ། བྱམས་པ་བཤེས་གཉེན། སངས་རྒྱུས་དཔལ་བཟང་། ཚོས་རྒྱུལ་བསོད་ནམས། ཚོས་སྦྲེང་བསོད་ནམས། ཚར་ཚེན་སློ་གསལ། འདམ་དབྱངས་མཁྱེན་བཟེ། བསྐྱབ་གསུམ་རྒྱུལ་མཚན། དབང་ལྷག་རབ་བརྟན། བསོད་ནམས་མཚོག་ལྷུ་བ། རིན་ཚེན་འདམ་དཔལ། བྲག་ཅ་བ་སློ་གསལ་བསྐྱུན་འདྲིན། ཀུན་དགའ་སློ་གོས། ཡོངས་འདྲིན་ཀུན་དགའ་བཟ་ཤིས། དག་དབང་ཀུན་དགའ་རིན་ཚེན། རྩི་སྐྱ་མ་མཁྱེན་བཟེའི་དབང་པོ། དེས་བདག་ལོ།

# 付録7

チャクサム流長寿成就法に関わる無量寿仏の図<sup>919</sup>



E 10 ཚེ་དཔག་མེད། / ཚེ་སྐྱེ་བ་ལྷག་མ་ལྷག་མ།  
Tshe-dpag-med/ Tshe-sgrub lCags-zam-lugs  
(Amitāyus/... Āyuhśādhana)

<sup>919</sup> From DAGYAB 1991:686.

# 文献一覽

## 一次文献<sup>920</sup>

- Abhidharmakośa* Vasubandhu. <俱舍論>  
P. Pradhan, (ed.). *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*.  
TSWS 8. Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1967.
- \**Amitābhaddhasūtra* \**Sukhāvativyūhanāmamahāyānasūtra*. <阿弥陀經>  
(AS\_c) 鳩摩羅什譯『佛說阿弥陀經』 T 366, vol. 12, 346b1–348b18.  
(AS\_s) See FUJITA 2011.  
(AS\_t) See ONODA (小野田) 2001.
- Aparimitāyusūtra* *Āryāparimitāyurjñānanāmamahāyānasūtra*. <無量寿宗要  
經>  
(ApS\_c1) 法成訳『大乘無量寿經』 T 936, vol. 19, 82a4–84c29.  
(ApS\_c2) 法天訳『佛說大乘聖無量寿決定光明王如来陀羅尼經』  
T 937, vol. 19, 85a6–86c11.  
(ApS\_s) See DUAN 1992:[132]–138.  
(ApS\_t) See DUAN 1992:[139]–149.
- \**Aparimitāyurjñānahṛdayanāmadhāraṇī*  
<無死鼓音声陀羅尼經>  
'*Phags pa tshe dang ye shes dpag tu med pa'i snying po zhes  
bya ba'i gzungs*. D 676, rGyud, *ba* 220b5–222b1; P 363,  
rGyud, *ba* 254a2–256a1.
- Atharvaveda(-Samhitā)* 『アタルヴァ・ヴェーダ』  
(AV) See ROTH/WHITNEY 1966.
- Bodhisattvabhūmi* <菩薩地>  
(BBh\_s1) See DUTT 1966.  
(BBh\_s2) See WOGIHARA 1971.  
(BBh\_c) 曇無讖訳『菩薩地持經』 T 1581, vol. 30, 888a6–959b14.
- Byang gter chos skor phyogs bsgrigs*  
*sNga 'gyur byang gter chos skor phyogs bsgrigs*. 『チャンネル  
法類集』 63 vols. [S.l.]: Byang-gter-dpe-sgrig-tshogs-chung,  
2015. [BDRC#W2PD17457]
- dBus gtsang gi gnas yig* The Third Kaḥ-thog-si-tu Chos-kyi-rgya-mtsho. *Gangs ljongs  
dbus gtsang gnas bskor lam yig nor bu'i zla shel gyi se mo do*  
= *An Account a Pilgrimage to Central Tibet during the Years  
1918 to 1920: being the Text of Gangs ljongs dbus gtsang  
gnas bskor lam yig nor bu zla shel gyi se mo do*. Tashijong:  
Sungrab Nyamso Gyunphel Parkhang, 1972. 1 vol. (539 p.)  
[BDRC#W9668]

<sup>920</sup> 書誌情報は必要最低限に留めた。

- \**Brahmajālasūtra* *Tshangs pa'i dra ba'i mdo.* <梵網經>  
D 352, mDo-sde, aḥ 70b2–86a2; P 1021, mDo-sna-tshogs, ke  
72b8–88b8.
- Byang gter lugs kyi rnam thar dang mang 'ongs lung bstan*  
(BNM) Gangtok, Sikkim: Sherab Gyaltzen and Lama Dawa, 1983.  
598 p. [BDRC#W27866]
- Byang gter phur pa'i skor* 1977  
Dalhousie: Damchoe Sangpo, 1977. 2 vols. [BDRC#W29251]
- Byang gter phur pa'i skor* 1984  
Darjeeling: Lama Dawa and Chopal Lama, 1984. 576 p.  
[BDRC#W27295]
- Byang gter thugs sgrub kyi skor*  
(BT) Darjeeling: Lama Dawa and Chopal Lama, 1984. 656 p.  
[BDRC#W27870]
- Byin rlabs rgya mtsho* Kong-sprul Blo-gros-mtha'-yas. *dPal ldan shangs pa bka' brgyud kyi do ha rdo rje'i tshig rkang dang mgur dbyangs phyogs gcig tu bsgrigs pa thos pa don ldan byin rlabs rgya mtsho.* 『加持大海』 In: DZ, vol. 12, pp. 463–559.
- bCud len gyi gdams pa* dGe-'dun-rgya-mtsho. *bCud len gyi gdams pa rim pa lnga pa.* 『鍊金薬の生成法に関する教え』 In: DZ, vol. 17, pp. 303–310.
- gCod rnam* Ngag-dbang-bstan-'dzin-nor-bu. *gCod yul nyon mongs zhi byed kyi bka' gter bla ma brgyud pa'i rnam thar byin rlabs gter mtsho.* Gangtok: Sonam Topgay Kazi, 1972. 315 p. [BDRC#W19811]
- 'Chi med grub pa'i zhal lung* bsTan-'dzin-ye-shes-lhun-grub. *Tshe sgrub nye brgyud kyi sgrub thabs 'chi med grub pa'i zhal lung.* 『不死を成就するための口伝』 In: GK, vol. 13, pp. 607–637.
- 'Chi med dpal ster* Grub-chen Thang-rgyal (ascribed). *Tshe sgrub lcags zam lugs 'chi med dpal gter du grags pa'i le'u tshan.* 『チメーパルテル』  
(CP\_A) In: GK, vol. 1, pp. 431–474.  
(CP\_B) In: RT\_A, vol. 93, pp. 185–195.
- 'Chi med dpal ster gyi sgrub thabs dbang chog man ngag* Ngag-dbang-kun-dga'-bkra-shis. *Nye brgyud tshe rta zung 'brel 'chi med dpal ster gyi sgrub thabs dbang chog man ngag dang bcas pa.* 『チメーパルテルに関する教誡』 In: GK, vol. 1, pp. 431–474.



- '*Chi med srog thig*                      bDud-'joms 'Jigs-bral-ye-shes-rdo-rje. *rDo rje phur pa yang gsang phrin las bcud dril las: tshe sgrub 'chi med srog thig.* 『チメートクティク』 In: DS, vol. 14, pp. 75–143.
- Chos 'byung rtsod bzlog*                Ratna-gling-pa. *Chos 'byung bstan pa'i sgron me rtsod zlog sengge'i nga ro.* 『ニンマ派の弁明』  
Palampur: Sungrab-nyamso-gyunphel-parkhang, 1972. 109 ff. [W1KG4849]
- Chos kyi dbang phyug mchog gi gsum 'bum*  
(CS)                                        Chos-kyi-dbang-phyug. *Kun mkhyen brag dkar ba chos kyi dbang phyug mchog gi gsum 'bum.*  
Kathmandu: Khenpo Shedup Tenzin, 2011. 13 vols. [BDRC#W1KG14557]
- lCags kyi sdong po*                        *Tshe sgrub lcags kyi sdong po.* 『チャッキドンポ』  
(CD\_A)                                      In: TD, vol. 2, pp. 511–543.  
(CD\_B)                                      In: RT\_A, vol. 29, pp. 249–268.  
(CD\_C)                                      In: RT\_B, vol. 19, pp. [197]–216.
- lCags kyi sdong po'i las byang dbang chog dang bcas pa*  
Ngag-dbang-blo-bzang-rgya-mtsho. *lHa brag gter byon nang sgrub lcags kyi sdong po'i las byang dbang chog dang bcas pa ganggā'i chu rgyun.* 『チャッキドンポの作法並びに灌頂儀軌法』 In: NS, vol. 25, pp. 167–180. [Tōhoku#5783]
- lCags sdong ma'i dbang chog gi lhan thabs*  
Ngag-dbang-blo-bzang-rgya-mtsho. *Byang gter lcags sdong ma'i dbang chog gi lhan thabs 'chi med bdud rtsi'i bum bzang.* 『チャッキドンポの灌頂に関する補遺』 In: NS, vol. 25, pp. 181–191. [Tōhoku#5781]
- '*Chi med grub pa'i sa bon\_A*  
Ngag-dbang-kun-dga'-blo-gros. *Byang gter lcags sdong ma tshar lugs kyi dbang chog 'chi med grub pa'i sa bon.* 『不死の成就の種子\_A』 In: KS, vol. 1, pp. 1–16.
- '*Chi med grub pa'i sa bon\_B*  
Ngag-dbang-kun-dga'-blo-gros. *Byang gter lcags sdong ma lha mang gi dbang chog 'chi med grub pa'i sa bon.* 『不死の成就の種子\_B』 In: RT\_A, vol. 29, pp. 269–294.
- lCags sdong ma'i rgyun khyer dge*  
Ngag-dbang-kun-dga'-blo-gros. 『チャクドンマ常用経軌』  
In: KS, vol. 6, pp. 319–326.
- lCags sdong ma'i tshe 'gugs*  
(CDT)                                        Mi-pham rNam-rgyal-rgya-mtsho. *Tshe sgrub lcags sdong ma'i tshe 'gugs.* 『チャクドンマの寿命召喚』

- In: MS, vol. 19, p. 645.
- mChog gling gter gsar* gTer-ston mChog-gyur-gling-pa. *mChog gyur bde chen gling pa yi zab gter yid bzhin nor bu'i chos mdzod chen mo.*  
(CT) Paro: Lama Pema Tashi, 1982–1986. 39 vols. [BDRC#W22642]
- bDe chen zhing gi sgrub* gNam-chos Mi-'gyur-rdo-rje. *gNam chos thugs kyi gter kha snyan brgyud zab mo'i skor las bde chen zhing gi sgrub thabs.*  
In: *gNam chos thugs kyi gter kha snyan brgyud zab mo'i skor*, vol. 1, pp. 14–22. Paro Kyichu, Bhoutan: Dilgo Khyentsey Rinpoche, 1983. 13 vols. [BDRC#W21578]
- bDud 'joms chos 'byung* bDud-'joms 'Jigs-bral-ye-shes-rdo-rje. *Bod snga rabs pa gsang chen rnying ma'i chos 'byung legs bshad gsar pa'i dga' ston gyi dbu 'dren gzhung don le'u'i ngos 'dzin.* 『ニンマ派仏教史』 3, 5, 9, 661 p. Khreng-tu'u: Si-khron-mi-rigs-dpe-skrun-khang, 1996. [BDRC#W20827]
- bDud 'joms gsung 'bum* bDud-'joms 'Jigs-bral-ye-shes-rdo-rje. *bDud 'joms 'jigs bral ye shes rdo rje'i gsung 'bum dam chos rin chen nor bu'i bang mdzod.*  
(DS) Kalimpong: Dupjung Lama, 1979–1985. 25 vols. [BDRC#W20869]
- Dhammapada* 『ダンマパダ』  
See VON HINÜBER/Norman 1994 (2003).
- Deb ther dmar po* Tshal-pa-si-tu Kun-dga'-rdo-rje. *Deb ther dmar po rnam kyid dang po hu lan deb ther.* 『紅史』  
Pe-cin: Mi-rigs-dpe-skrung-khang, 1981. 4, 2, 3, 478 p. [BDRC#W1KG5760]
- Deb ther sngon po* 'Gos-lo-tsā-ba gZhon-nu-dpal. 『青史』  
(DN\_A) Khreng-tu'u: Si-khron-mi-rigs-dpe-skrun-khang, 1984. 2 vols. [BDRC#W1KG5762]  
(DN\_B) See CHANDRA 1974.
- Drag po rtsal gyi dkar chag* *Byang gter thugs sgrub drag po rtsal gyi rtsa ba'i chos tshan gyi dkar chag thams cad mkhyen gzigs lnga pa'i gsan yig nas zur du bkol ba.* 『ダクポツァルの目録』 In: TD, vol. 1, pp. [1]–32.
- Drag po rtsal gyi pod gnyis pa'i dkar chag* *Byang gter thugs sgrub drag po rtsal gyi rtsa ba'i chos tshan pod gnyis pa'i dkar chag zur du bkol ba.* 『『ダクポツェル』第2巻の目録』 In: TD, vol. 2, [1a]–[3a].
- gDams ngag mdzod* Kong-sprul Blo-gros-mtha'-yas. *gDams ngag rin po che'i*

- mdzod*. 『ダムガクス』  
 (DZ) Delhi: Shechen Publications, 1999. 18 vols. [BDRC#W23605]
- rDo rje phur pa'i tshe sgrub* 『ヴァジュラキーラの長寿成就法』  
 (DT\_A) 4 folios. In: *Byang gter rdo rje phur pa'i chos skor*, pp. 145–152. Smarntsis Shesrig Spendzod, v. 73. 727 p. Leh: S. W. Tashigangpa, 1973. [BDRC#W23775]
- (DT\_B) 4 folios. In: *Phur-pa texts of the byañ-gter tradition*, v. 2, pp. 53–59. 2 vols. Dalhousie: Damchoe Sangpo, 1977. [BDRC#W29251]
- (DT\_C) 3 folios. In: *Byañ gter phur pa'i skor*, pp. 123–128. 576 p. Darjeeling: Lama Dawa and Chopal Lama, 1984. [BDRC#W27295]
- (DT\_D) 5 folios. In: *Compilation D*, vol. 12, pp. 183–191.
- dGongs pa zang thal gyi chos skor*  
 Rig-'dzin rGod-ldem-can. *rDzogs pa chen po dgongs pa zang thal dang ka dag rang byung rang shar*. 『ゴンパサンタルの法類』 5 vols. Smarntsis Shesrig Spendzod, vv. 60–64. Leh: S. W. Tashigangpa, 1973. [BDRC#W4CZ1100]
- dGongs pa zang thal gyi lo rgyus*  
 dKon-mchog-rgyal-mtshan. *Kun tu bzang po dgongs pa zang thal gyi lo rgyus rin po che'i phreng ba*. 『ゴンパサンタル史』  
 In: *rGyal ba kaḥ thog pa'i grub mchog rnams kyi nyams bzhes khrid chen bcu gsum*, vol. 5, pp. 1–89. [Kaḥ-thog]: [Kaḥ-thog-dgon-pa], [2004?]. 13 vols. [BDRC#W30199]
- Gu bkra'i chos 'byung*  
 Gu-ru-bkra-shis. *bsTan pa'i snying po gsang chen snga 'gyur nges don zab mo chos kyi byung ba gsal bar byed pa'i legs bshad mkhas pa dga' byed ngo mtshar gtam gyi rol mtsho*. 『グルタシ仏教史』  
 Pe-cin: Krung-go'i-bod-kyi-shes-rig-dpe-skrun-khang, 1990. 2, 2, 8, 1076 p. [BDRC#W20916]
- Grub chen thang stong rgyal po'i bka' 'bum*  
 (ThKB) Thimphu: National Library of Bhutan, 1984–1985. 3 vols. [BDRC#W23918]
- Grub pa'i sgra dbyangs*  
 Kong-sprul Blo-gros-mtha'-yas. 『成就の調べ』  
 In: DZ, vol. 12, pp. 432–435. As a part of: *U dumbara'i phreng ba* (vol. 12, pp. 389–448).
- Guhyasamājantra*  
 『秘密集会タントラ』  
 (GS\_s) See BHATTACHARYYA 1931.  
 (GS\_c) 施護譯 『佛說一切如來金剛三業最上祕密大教王經』  
 T 885, vol. 18, 469c17–511b18.

- (GS\_t) Śraddhākaravarman, Rin-chen-bzang-po (tr.). *rGyud phyi ma*. D 443, rGyud, ca 148a6–157b7.
- rGyal khams rig pa* *rGyal khams rig pas bskor ba'i gtam rgyud gser gyi thang ma*. 『黄金の平原』  
In: *dGe 'dun chos 'phel gyi gsung rtsom*, vol. 1, pp. 1–426.  
lHa-sa: Bod-ljongs-bod-yig-dpe-rnying-dpe-skrun-khang, 1990. 3 vols. [BDRC#W27313]
- rGyud bzhi* G.yu-thog-rnying-ma Yon-tan-mgon-po (ascribed). *bDud rtsi snying po yan lag brgyad pa gsang ba man ngag gi rgyud las rtsa ba'i rgyud dang bshad pa'i rgyud*. 『四部医典』 xix, 375 p. Dharamsala: Tibetan Medical & Astrological Institute of H. H. the Dalai Lama, 2008. [BDRC#W1KG2121]
- rGyud 'bum gyi dkar chag* Bu-ston Rin-chen-grub. 『十万タントラ目録』  
See EIMER 1989.
- rGyud sde spyi rnam* mKhas-grub-rje dGe-legs dPal-bzang. *rGyud sde spyi'i rnam gzhag*. 『タントラ概論』  
See LESSING/WAYMAN 1968 (1978).
- sGrub thabs kun btus* 'Jam-dbyangs mKhyen-brtse'i-dbang-po & 'Jam-dbyangs-blo-gter-dbang-po. 『成就法集成』
- (GK) Kangara, H.P.: Indo-Tibetan Buddhist Literature Publisher, Dzongsar Inst. for Advanced Studies, [19--]. 14 vols. [BDRC#W23681]
- sGrub thabs 'dod 'jo'i bum bzang* gTer-bdag-glin-pa 'Gyur-med-rdo-rje, sMin-gling Lo-chen Dharmaśrī. 『成就法如意宝瓶』
- (GB) Gangtok, Sikkim: Sherab-gyaltsen, 1977. 2 vols. [BDRC#W18]
- bKa' brgyad rang shar* Chos-kyi-dbang-phyug. *Byang gter bka' brgyad rang shar gyi khro bo rol pa'i man ngag lag len gsal byed dran pa'i me long*. 『八教説自照』 In: CS, vol. 8, pp. 141–173.
- Lo paṅ bka'i thang yig* O-rgyan-gling-pa. 『ローパンカータンイク』 In: *bKa' thang sde lnga*, pp. 303–423. Pe-cin: Mi-rigs-dpe-skrun-khang, 1997. 2, 8, 539 p. [BDRC#W17319]
- Kun gsal nor bu'i me long* Lo-chen 'Gyur-med-bde-chen. *dPal grub pa'i dbang phyug chen po lcags zam pa thang stong rgyal po'i rnam par thar pa ngo mtshar kun gsal me long gsar pa*. 『すべてを明らかにする宝鏡』
- (K\_A) [S.l.]: [s.n.], [n.d.] 181 fols. [BDRC#W4CZ1085]
- (K\_B) Bir, H.P.: Kandro, 1976. 350 p. [BDRC#W23929]
- (K\_C) Khreng-tu'u: Si-khron-mi-rigs-dpe-skrun-khang, 1982.

346, 2 p. [BDRC#W21690]

*sKyes mchog rim byon gyi rnam thar*

Rig-'dzin Kun-bzang-nges-don-klong-yangs. *Bod du byung ba'i gsang sngags snga 'gyur gyi bstan 'dzin skyes mchog rim byon gyi rnam thar nor bu'i do shal*. Dalhousie: Damchoe Sangpo, 1976. 106 p. [BDRC#W19708]

*Lam rim ye shes snying po*

Padmasambhava ascribed. *bLa ma'i thugs sgrub rdo rje drag rtsal las zhal gdams lam rim ye shes snying po*. 『智慧の精髓なる階梯』 In: CT, vol. 32, pp. 1–65.

*Bla ma brgyud pa'i rnam thar*

(GN)

*bKa' ma mdo dbang gi bla ma brgyud pa'i rnam thar*. [110] p. Leh: S.W. Tashigangpa, 1972. [BDRC#W21523]

*Mya ngan las 'das pa'i skor*

Kun-dga'-bsod-nams-grags-pa-dpal-bzang. *Grub thob chen po'i rnam thar phyi ma mya ngan las 'das pa'i skor*. 『涅槃のご様子』

In: STEARNS 2007, pp. 441–463.

*lNga pa chen po'i gsung 'bum*

(NS)

Ngag-dbang-blo-bzang-rgya-mtsho. *Gong sa lnga pa chen po'i gsung 'bum*. 『ダライ・ラマ 5世全集』

'Reproduced from Lhasa Edition (Xylograph preserved in SRIT)' [title page of vol. 1]. 25 vols. Gangtok: Sikkim Research Institute of Tibetology, 1991–1995. [BDRC#W294]

*mNga' dbang skor gyi mtha' dpyod*

*Byang gter mnga' dbang skor gyi mtha' dpyod byang ba gu ru ral ba can gyi legs bshad yod mchis*. 『力倆類考究』

In: RT\_A, vol. 80, pp. 635–646.

*Ngag gi dbang po'i rnam thar*

Ngag-dbang-blo-bzang-rgya-mtsho. *Byang pa rig 'dzin chen po ngag gi dbang po'i rnam par thar pa ngo mtshar bkod pa rgya mtsho*. 『リクズイン・ンガギワンポ伝』

In: GN, pp. 427–553.

*Ngo mtshar vaidūrya'i phreng ba*

Kun-bzang-'gro-'dul-rdo-rje. *Thub bstan rdo rje brag dgon gyi byung ba mdo tsam brjod pa ngo mtshar bai dū rya'i phreng ba*. 『稀有なる瑠璃鬘』

79 p. [S.l.]: [s.n.], 2004. [BDRC#W00KG03797]

*Ngo mtshar rgya mtsho*

La-stod-byang-pa Shes-rab-dpal-ldan. *rJe grub thob chen po lcags zam pa'i rnam par thar pa ngo mtshar rgya mtsho*. 『稀有なる大海』

In: ThKB, vol. 1, pp. 1–565.

*rNam thar gsol 'debs utpa la'i phreng ba*

Lo-chen 'Gyur-med-bde-chen. 『青蓮華鬘：伝記風祈願』 In: *dPal sa skya pa chen po sngags 'chang thams cad mkhyen pa ngag dbang kun dga' bsod nams kyi gsung 'bum*, vol. 19, pp. 431–434. As a part of: *dPal dus kyi 'khor lo'i zab pa dang rgya che ba'i dam pa'i chos byung ba'i tshul legs par bshad pa ngo mtshar dad pa'i shing rta* (vol. 19, pp. 1–532). [Kathmandu]: Sa-skya-rgyal-yongs-gsung-rab-slob-gnyer-khang, 2000. [BDRC#W29307]

*Pañcakrama*

(PK\_s)

Nāgārjuna. 『五次第』

See MIMAKI/TOMABECHI 1994:1–55.

(PK\_t)

See MIMAKI/TOMABECHI 1994:1–55.

*Phur pa me lce'i 'phreng ba*

*Phur pa me lce'i 'phreng ba'i le'u nyi shu pa khol du byung ba*. 『キーラの火炎鬘』

In: *Byang gter rdo rje phur pa'i chos skor*, pp. 211–220. Smanrtsis Shesrig Spendzod, v. 73. 727 p. Leh: S. W. Tashigangpa, 1973. [BDRC#W23775]

*Padmo'i dga' tshal*

'Jam-dbyangs mKhyen-brtse'i-dbang-po. *Gangs can bod kyi yul du byon pa'i gsang sngags gsar rnying gi gdan rabs mdor bsdus ngo mtshar padmo'i dga' tshal: Mkhyen-brtse on The History of The Dharma*. 『蓮華の花園』 1 v. (927 p.). Leh: S. W. Tashigangpa, 1972. [BDRC#W30136]

*Rab dkar shel gyi me long*

Rig-'dzin Padma-'phrin-las. *Padma 'phrin las kyi rang nyid kyi rtogs brjod rab dkar shel gyi me long*. 『白い水晶鏡』

Unpublished. [BDRC#W23811]

See VALENTINE 2013.

*Red mda' ba gzhon nu blo gros kyi rnam thar*

Ye-shes-rgyal-mtshan. *rJe btsun red mda' ba gzhon nu blo gros kyi rnam thar*. 『レンダーワ・シュンヌーロドゥ伝』

In: *Lam rim bla ma brgyud pa'i rnam thar*, pp. 891–905. lHa-sa: Bod-ljongs-mi-dmangs-dpe-skrun-khang, 1990.

*R̥gveda(-Samhitā)*

(RV)

『リグ・ヴェーダ』

See VIŚVABANDHU 1963–1966.

*Rin chen gter mdzod chen mo*

(RT\_A)

Kong-sprul Blo-gros-mtha'-yas (ed.). 『リンチェンテルズ』

111 vols. Paro: Ngodrup and Sherab Drimay, 1976–1980. [BDRC#W20578].

(RT\_B)

63 vols. [Khreng-tu'u]: [lHo-nub-mi-rigs-dpar-khang], [199?].

[BDRC#W1PD96185].

*RT gyi dkar chag dang brgyud yig*

*Rin chen gter gyi mdzod chen por ji ltar bzhugs pa'i dkar chag dang/ smin grol rgyab brten dang bcas pa'i brgyud yig dngos grub sgo brgya 'byed pa'i lde'u mig.* 『リンチェンテルズの目録と相伝』

In: RT\_A, vol. 2, pp. 49–617.

*gSal ba'i sgron me*

*dKon-mchog-dpal-bzang, bDe-ba-bzang-po. bLa ma thang stong rgyal po'i rnam thar gsal ba'i sgron me.* 『明灯』

In: ThKB, vol. 2, pp. 1–589.

*gSal byed nyi ma'i 'od zer*

*Se-ston Nyi-ma-bzang-po (Sūryabhadra). sPrul sku rig 'dzin rgod ldem 'phru can gyi rnam thar gsal byed nyi ma'i 'od zer.* 『照射する陽光』

(S\_A)

Paro: Lama Ngodrup and Sherab Drimey, 1985. [BDRC#W27603]

(S\_B)

In: BNM, pp. 49–147.

*gSang ba'i snying po de kho na nyid nges pa*

『秘密心髓真性決定』

D 834, rNying-rgyud, *kha* 198b1–298b7; P 457, rGyud, *wa* 197a7–299b7.

*gSang sngags rnying ma'i grub mtha' byung tshul*

*Thu'u-bkwan Blo-bzang-chos-kyi-nyi-ma. Grub mtha' thams cad kyi khungs dang 'dod tshul ston pa legs bshad shel gyi me long las/ Bod yul du bstan pa snga phyi dang gsang sngags rnying ma'i grub mtha' byung tshul.* 『一切宗義ニンマ派の章』

See HIRAMATSU (平松) 1982, pp. 187–207.

*gSol 'debs le'u bdun ma*

*bZang-po-grags-pa. O rgyan gu ru padma 'byung gnas gyi rdo rje'i gsung 'khrul pa med pa'i gsol 'debs le'u bdun ma lo rgyus dang bcas pa.* 『七章の祈願』

In: RT\_A, vol. 7, pp. 137–185.

*gSung 'bum: The Expanded Redaction of the Complete Works of 'Ju Mi-pham Series.*

(MS)

27 vols. Paro: Lama Ngodrup and Sherab Drimey, 1984–1993. [BDRC#W23468]

*Sa skya nad grol ma*

*Grub-chen Thang-rgyal. Grub chen thang stong rgyal po'i rdo rje'i gsungs sa skya nad grol mar grags pa'i smon lam byin rlabs can.* 『サキヤが病から回復するための祈願』 8 ff.

In: *sKabs bzhi ba'i bsdus don rgyal mkhan po grags pa rgyal mtshan pa la gnang ba sogs*, pp. [227]–[242]. [S.l.]: [S.n.], [n.d.] [BDRC#W1NLM1331]

- Sa skya pa kun dga' blo gros kyi bka' 'bum*  
(KS) 6 vols. [Kathmandu]: Sa-skya-rgyal-yongs-gsung-rab-slob-gnyer-khang, 2008. [BDRC#W1KG1880]
- Saddharmapuṇḍarīka*  
(SaddhP\_c) <妙法蓮華經>  
鳩摩羅什譯『妙法蓮華經』 T 262, vol. 9, 1a1–62b1.  
(SaddhP\_s) See KERN/NANJIO 1908–1912 (1977).  
(SaddhP\_t) D 113, mDo-sde, ja 1b1–180b7; P 781, mDo-sna-tshogs, chu 1a1–205a5.
- Sādhanamālā*  
Traditionally attributed to Abhyākaragupta. 『サーダナーマラー』  
Vol. 1. See *Bhattacharyya* 1925.  
Vol. 2. See *Bhattacharyya* 1928.
- Samvarodayatantra*  
『サンヴァローダヤタントラ』  
See TSUDA 1974.
- Sarvatathāgatatattvasaṃgraha*  
<真実撰経>  
See HORIUCHI (堀内) 1974, HORIUCHI (堀内) 1983.
- Shangs pa gser 'phreng*  
Karma-rang-byung-kun-khyab (ed.). 『シャンパカギユ派の祖師伝金鬘』  
[198] p. Smanrtsis Sherig Spendzod, vol. 15.  
Leh: Sonam W. Tashigang, 1970. [BDRC#W30112]
- Shes bya kun khyab*  
Kong-sprul Blo-gros-mtha'-yas. *Theg pa'i sgo kun las btus pa gsung rab rin po che'i mdzod bslab pa gsum legs par ston pa'i bstan bcos shes bya kun khyab*. Śata-piṭaka Series, v. 80.  
3 vols. in 1. New Delhi: International Academy of Indian Culture, 1970. [BDRC#W1KG12962]
- Srog sgrub kyi rig 'dzin brgyud pa'i gsol 'debs*  
Klong-gsal-snying-po. *rDo rje tshe'i skor las: gNam lcags rdo rje'i srog sgrub kyi rig 'dzin brgyud pa'i gsol 'debs*. 『長寿に関する持明者の相承の勧請』  
In: RT\_A, vol. 31, pp. 147–148.
- Sutta Nipāta*  
『スッタニパータ』  
See ANDERSEN/SMITH 1913.
- gTer ston brgya rtsa'i rnam thar*  
Kong-sprul Blo-gros-mtha'-yas. *Zab mo'i gter dang gter ston grub thob ji ltar byon pa'i lo rgyus mdor bsdu bskod pa rin chen baidūrya'i phreng ba*. 『百人のテルトウン伝』  
235 fols. In: RT\_A, vol. 1, pp. 291–759.
- Thugs sgrub drag po rtsal gyi chos skor*  
(TD) 『心成就法ダクポツアルの法類』



- 4 vols. Gangtok: Bari Longsal Lama, 1980. [BDRC#W23453]
- Tshe sgrub kun 'dus* Thub-bstan-legs-bshad-bzang-po (ed.). *Tshe sgrub kun 'dus*. 4 vols. sDe-dge-dgon-chen: sDe-dge-par-khang, 2000. [BDRC#W2DB4610]
- Thob yig gangga'i chu rgyun* Ngag-dbang-blo-bzang-rgya-mtsho. 『ダライ・ラマ 5世の聴聞録』  
4 vols. Delhi: Nechung and Lhakhar, 1970–1971. [BDRC#W30183]
- U dumbara'i phreng ba* Kong-sprul Blo-gros-mtha'-yas. *dPal ldan shangs pa bka' brgyud kyi ngo mtshar rin chen brgyud pa'i rnam thar la gsol ba 'debs pa u dumbara'i phreng ba*. 『優曇華鬘』  
30 fols. In: DZ, vol. 12, pp. 389–448.
- Visuddhimagga* Traditionally attributed to *Buddhaghosa*. 『清浄道論』  
See DAVIDS 1920–1921 (1975).
- Zangs gling ma* Myang-ral Nyi-ma-'od-zer. *Slob dpon padma 'byung gnas kyi skyes rabs chos 'byung nor bu'i phreng ba: rNam thar zangs gling ma*. 『サンリンマ』  
In: RT\_A, vol. 1, pp. 6–224.

## 二次文献

ACHARD, Jean-Luc

- 2003 “Contribution aux nombrables de la tradition Bon po: *L'Appendice de bsTan 'dzin Rin chen rgyal mtshan à la Sphère de Cristal des Dieux et des Démons de Shar rdza rin po che*”. In: RET, no. 4, pp. 78–146.

ALMOGI, Orna

- 2005 “Analysing Tibetan Titles: Towards a Genre-based Classification of Tibetan Literature”. In: *Cahiers d'Extrême-Asie*, 15, pp. 27–58.
- 2011 “[Book Review of] Schwieger, Peter, *Tibetische Handschriften und Blockdrucke*, Teil 13 (Die mTshur-phu-Ausgabe der Sammlung Rin-chen gter-mdzod chen-mo, nach dem Exemplar der Orientabteilung, Staatsbibliothek zu Berlin—Preussischer Kulturbesitz, Hs or 778, Bände 40–52). In: IJJ, vol. 54, pp. 178–184.
- 2019 “The Human Behind the Divine: An Investigation into the Evolution of Scriptures with Special Reference to the Ancient Tantras of Tibetan Buddhism”. In: Volker Caumanns, Marta Sernesi, Nikolai Solmsdorf (eds.), *Unearthing Himalayan Treasures: Festschrift for Franz-Karl Ehrhard*. Indica et Tibetica 59. Marburg: Indica et Tibetica Verlag, pp. 1–26.

ANDERSEN, Dines / SMITH, Helmer

- 1913 (Ed.) *The Sutta-nipāta*. London: published for the Pali Text Society by Henry Frowde.

- ARAMAKI, Tensyun (荒牧, 典俊) / HONJO, Yoshifumi (本庄, 良文) / ENOMOTO, Fumio (榎本, 文雄)  
 2015 『スッタニパータ [釈尊のことば]: 全現代語訳』 東京: 講談社.
- ARGUILLÈRE, Stéphane  
 2008 “Index des citations dans toutes les œuvres de Klong chen rab ’byams=An index of all quotations in the complete writings of Klong chen rab ’byams”. Rédigé par Stéphane Arguillère et publié depuis Overblog, 26 Juin 2008. [<http://www.arguillere.org/article-20779457.html>]  
 2018 “Histoire des manuels de pratique du dGongs pa zang thal”. In: RET, no. 43, pp. 196–255.
- BABU, D. Sridhara  
 1990 *Hayagrīva: The Horse-headed Deity in Indian Culture*. Tirupati: Sri Venkateswara University, Oriental Research Institute.
- BAILEY, Harold W.  
 1981 *Khotanese Buddhist Texts*. Revised Ed. University of Cambridge: Oriental Publications, no. 31. Cambridge: Cambridge University Press. First published in Cambridge Oriental Series, no. 3. London: Taylor’s Foreign Press, 1951.
- BARRON, Richard  
 2003 *The Autobiography of Jamgön Kongtrul: A Gem of Many Colors*. The Tsadra Foundation Series. Ithaca, N.Y.: Snow Lion Publications.
- BEER, Robert  
 1999 *The Encyclopedia of Tibetan Symbols And Motifs*. Boston: Shambhala.
- BENTOR, Yael  
 1996 *Consecration of Images and Stūpas in Indo-Tibetan Tantric Buddhism*. Brill’s Indological library, v. 11. Leiden: Brill.
- BEYER, Stephan  
 1973 *The Cult of Tārā: Magic and Ritual in Tibet*. Berkeley: University of California Press.  
 1992 *The Classical Tibetan Language*. Delhi: Sri Satguru Publications.
- BHARATI, Agehananda  
 1975 *The Tantric Tradition*. Revised American Paperback Ed. New York: Samuel Weiser. First published in 1965.
- BHATTACHARYYA, Benoytosh  
 1925 *Sādhanamālā*. Vol. 1. Gaekwad’s Oriental Series, no. 26. Baroda: Oriental Institute.  
 1928 *Sādhanamālā*. Vol. 2. Gaekwad’s Oriental Series, no. 41. Baroda: Oriental Institute.  
 1931 *Guhyasamāja Tantra or Tathāgataguhyaka*. Baroda: Oriental Institute.  
 1949 *Niṣpannayogāvalī of Mahāpaṇḍita Abhayākaragupta*. Baroda: Oriental Institute.

- 1968 *The Indian Buddhist Iconography: Mainly Based on the Sādhanamālā and Cognate Tāntric Texts of Rituals*. 2nd Ed., Rev. and Enl. Calcutta: Firma K. L. Mukhopadhyay.

Bhikkhu Bodhi

- 2017 *The Suttanipāta: An Ancient Collection of the Buddha's Discourses: Together with its Commentaries, Paramatthajotikā II and Excerpts from the Niddesa*. Somerville, MA: Pali Text Society, Wisdom Publications.

BIELMEIER, Roland

- 2004 "Shafer's Proto-West Bodish Hypothesis and the Formation of the Tibetan Verb Paradigms". In: Anju Saxena (ed.). *Himalayan Languages: Past and Present*, pp. 395–412. Berlin: Mouton de Gruyter.

BLONDEAU, A. M.

- 1971 "Le Lha-'dre bKa'-than". In: *Études tibétaines: dédiées à la mémoire de Marcelle Lalou*, pp. 33–126. Paris: Adrien-Maisonneuve.
- 1980 "Analysis of the biographies of Padmasāmbhava according to Tibetan tradition: classification of sources". In: HR, pp. 45–52.
- 1985 "Mkhyen-brce'i Dbañ-po: La biographie de Padmasāmbhava selon la tradition du Bsgrags-pa Bon, et ses sources". In: G. Gnoli et L. Lanciotti ed. *Orientalia Iosephi Tucci Memoriae Dicata*, pp. [111]–158. Rome: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.
- 1987 "Une polémique sur l'authenticité des Bka'-than au 17e siècle". In: Christopher I. Beckwith ed. *Silver on Lapis: Tibetan Literary Culture and History*, pp. 125–160. Bloomington: The Tibet Society.
- 1988 "La controverse soulevée par l'inclusion de rituels bon-po dans le *Rin-čhen gter-mjod*. Note préliminaire". In: Helga Uebach and Jampa L. Panglung ed. *Tibetan Studies, Proceedings of the 4th Seminar of the International Association for Tibetan Studies*, pp. 55–67. Munich: Kommission für Zentralasiatische Studien Bayerische Akademie der Wissenschaften.

BLOOMFIELD, Maurice

- 1897 (Tr.) *Hymns of the Atharva-veda*. Oxford: Clarendon Press.
- 1964 *A Vedic concordance: being an alphabetic index to every line of every stanza of the published Vedic literature and to the liturgical formulas thereof, that is an index to the Vedic mantras, together with an account of their variations in the different Vedic books*. Delhi: Motilal Banarsidass, 1964.

BOORD, Martin J.

- 1993 *The Cult of the Deity Vajrakīla: According to the Texts of the Northern Treasures Tradition of Tibet (Byang-gter phur-ba)*. Tring: Institute of Buddhist Studies.
- 2002 *A Bolt of Lightning from the Blue: The Vast Commentary on Vajrakīla that Clearly Defines the Essential points*. Berlin, Ed. Khordong.

- 2013 *Gathering the Elements: The Cult of the Wrathful Deity Vajrakīla according to the Texts of the Northern Treasures Tradition of Tibet (Byang-gter phur-ba)*. Berlin: Wandel Verlag.
- BRADBURN, Leslie  
1995 (Research, comp., and manuscript preparation by Leslie Bradburn and others) *Masters of the Nyingma lineage*. Berkeley, CA: Dharma Publishing.
- BUDDRUS, Georg  
1977 “Nochmals zur Stellung der Nuristan-Sprachen des afghanischen Hindukusch”. In: *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft*, vol. 36, pp. 19–38.
- BUFFETRILLE, K.  
1994 *The Halase-Maratika Caves (Eastern Nepal): A Sacred Place Claimed by both Hindus and Buddhists*. Pondichéry: Institut Français de Pondichéry.
- BURANG, Theodor  
1974 *Tibetische Heilkunde*. 3. revidierte Auflage. Zürich: Origo Verlag.
- BURNOUF, Eugène  
1925 *Le lotus de la bonne loi: traduit du sanscrit, accompagné d'un commentaire et de vingt et un mémoires relatifs au buddhisme*. 2 vols. Paris: Librairie Orientale et Américaine.
- CABEZÓN, José Ignacio  
1996 “Firm Feet and Long Lives: The *Zhabs brtan* Literature of Tibetan Buddhism”. In: *TLSG*, pp. 344–357.
- CANTWELL, Cathy  
2017 “Reflections on Rasāyana, Bcud len and Related Practices in Nyingma (Rnying ma) Tantric Ritual”. In: *History of Science in South Asia*, vol. 5-2, pp. 181–203.
- CANTWELL, Cathy / MAYER, Robert  
2010 “The Creation and Transmission of a Textual Corpus in the Twentieth Century : the '*Chi med srog thig*'”. In: Chayet, Anne (et al., eds.), *Edition, éditions. l'écrit au Tibet, évolution et devenir*, pp. [65]–83. München: Indus Verlag.
- CECH, Krystyna  
1993 “The Social and Religious Identity of the Tibetan Bonpos”. In: *ATH*, pp. 39–48.
- Lokesh CHANDRA  
1974 *The Blue Annals, completed in A.D. 1478 by Hgos-Lotsawa Gzhon-nu-Dpal*. Śata-Piṭaka Series: Indo-Asian literatures, v. 212. New Delhi: International Academy of Indian Culture. [BDRC#W7494]  
1982 *Indian Scripts in Tibet*. Śata-Piṭaka Series: Indo-Asian literatures, v. 297. New Delhi: Sharada Rani. [BDRC#W30268]
- CHANG, Yen-ch'ing (張, 延清) et al.  
2006 「敦煌研究院藏敦煌古藏文写經叙錄」 In: 『敦煌研究』 2006, 3, pp. 42–63.
- CLIFFORD, Terry  
1984 *Tibetan Buddhist Medicine and Psychiatry: The Diamond Healing*. York Beach:

- S. Weiser.  
 1993 中川和也訳『チベットの精神医学: チベット仏教医学の概観』東京: 春秋社.
- DAGYAB, Loden Sherap  
 1991 *Die Sādhanas der Sammlung sGrub-thabs 'Dod-'jo*. Asiatische Forschungen: Monographienreihe zur Geschichte, Kultur und Sprache der Völker Ost- und Zentralasiens, Bd. 114. Wiesbaden: O. Harrassowitz.
- DARGYAY, Eva M.  
 1979 *The Rise of Esoteric Buddhism in Tibet*. 2nd Rev. Ed. BTS, v. 32. Delhi: Motilal Banarsidass. First edition published in 1977.
- DASGUPTA, Shashi Bhushan  
 1958 *An Introduction to Tāntric Buddhism*. Calcutta: University of Calcutta.  
 1969 *Obscure Religious Cults*. 3rd edition of 1946. Calcutta: Firma K. L. Mukhopadhyay, 1969.
- DASH, Bhagwan  
 2007 “The Rgyud-bzhi and Their Basic Source”. In: PS, pp. 21–24.
- DAVIDS, Caroline A. F. Rhys  
 1975 (Ed.) *The Visuddhi-magga of Buddhaghosa*. London: Pali Text Society. First published vol. 1 in 1920, and vol. 2 in 1921, reprinted in one volume in 1975.
- DAVIDSON, Ronald M.  
 2009 “Studies in Dhāraṇī Literature I: Revisiting the Meaning of the Term Dhāraṇī”. In: JIP, vol. 37, pp. 97–147.
- DELEANU, Florin  
 2020 “Buddhist Meditation in South Asia: An Overview”. In: Karen O’Brien-Kop and Susanne Newcombe (ed.) *Routledge Handbook of Yoga and Meditation Studies*, pp. 80–101. London and New York: Routledge.
- De’u-dmar bsTan-’dzin-phun-tshogs (帝瑪爾・丹增彭措)  
 1986 毛繼祖等訳注. 『晶珠本草』上海: 上海科学技術出版社.
- DHARMACHAKRA, Translation Committee  
 2006 *Deity, Mantra, and Wisdom: Development Stage Meditation in Tibetan Buddhist Tantra*. New York: Snow Lion Publications.
- DIEMBERGER, Hildegard  
 2007 *When a Woman becomes a Religious Dynasty: the Samding Dorje Phagmo of Tibet*. New York: Columbia University Press.
- DILGOKHYENTSE Rinpoche / PALMO, Ani Jinba  
 1992 *Pure Appearance: Development & Completion Stages in the Vajrayana Practice*. Halifax: Vajravairochana Translation Committee.
- DORJE, Gyurme / KAPSTEIN, Matthew  
 1991 *The Nyingma School of Tibetan Buddhism: Its Fundamentals and History*, vol. 2. Boston: Wisdom Publications.

DUAN, Qing

- 1992 *Das khotanische Aparimitāyuhṣūtra*. Studien zur Indologie und Iranistik, Dissertationen ; Bd. 3. Reinbek: I. Wezler, Verlag für Orientalistische Fachpublikationen.

DUDJOM RINPOCHE, Jikdrel Yeshe Dorje / DORJE, Gyurme / KAPSTEIN, Matthew

- 1991 *The Nyingma School of Tibetan Buddhism: Its Fundamentals and History*, vol. 1. Boston: Wisdom Publications.

DOUGLAS, Nik

- 1978 *Tibetan Tantric Charms and Amulets: 230 Examples Reproduced from Original Woodblocks*. New York: Dover Publications.

DOWMAN, Keith

- 1988 *The Power-places of Central Tibet: The Pilgrim's Guide*. London: Routledge & Kegan Paul.

DOCTOR, Andreas

- 2005 *Tibetan Treasure Literature: Revelation, Tradition, and Accomplishment in Visionary Buddhism*. Ithaca, NY: Snow Lion Publications.

DUTT, Nalinaksha

- 1966 *Bodhisattvabhūmiḥ: Being the XVth Section of Asangapada's Yogacarabhūmi*. Patna: K.P. Jayaswal Research Institute.

EHRHARD, Franz-Karl

- 2002 *Life and Travels of Lo-chen bSod-nams rgya-mtsho*. Lumbini: Lumbini International Research Institute.

EIMER, Helmut

- 1989 *Der Tantra-Katalog des Bu ston im Vergleich mit der Abteilung Tantra des tibetischen Kanjur: Studie, Textausgabe, Konkordanzen und Indices*. Bonn: Indica et Tibetica Verlag.
- 1992 *Ein Jahrzehnt Studien zur Überlieferung des tibetischen Kanjur*. Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, vol. 28. Wien: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien, Universität Wien.

EINOO, Shingo

- 2005 "Mrtyumjaya or Ritual Device to Conquer Death". In: *Indische Kultur im Kontext: Rituale, Texte und Ideen aus Indien und der Welt*, pp. 109–119. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

EMMERICK, R. E.

- 1979 *A Guide to the Literature of Khotan*. Studia philologica Buddhica, Occasional paper series, 3. Tokyo: Reiyukai Library.

ENGLE, Artemus B.

- 2016 *The Bodhisattva Path to Unsurpassed Enlightenment: A Complete Translation of the Bodhisattvabhūmi*. Boulder: Snow Lion.

## ENGLISH, Elizabeth

- 2002 *Vajrayoginī: Her Visualizations, Rituals, & Forms: A Study of the Cult of Vajrayoginī in India*. Studies in Indian and Tibetan Buddhism. Boston: Wisdom Publications.

## EVANS-WENTZ, W. Y.

- 1954 *The Tibetan Book of the Great Liberation*. London: Oxford University Press.

## EVERDING, Karl-Heinz

- 2008 *Tibetische Handschriften und Blockdrucke, Teil 13: Die mTshur-phu-Ausgabe der Sammlung Rin-chen gter-mdzod chen-mo, nach dem Exemplar der Orientabteilung, Staatsbibliothek zu Berlin, Preussischer Kulturbesitz, Hs or 778, Bände 52-63*. VOHD, Bd. 11,14.

## FERRARI, Alfonsa

- 1958 *Mk'yen brtse's Guide to the Holy Places of Central Tibet*. Rome: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.

## FILLIOZAT, Jean

- 1953 [Chapter XI. Le Buddhisme §1929–2386]. In: Louis Renou & Jean Filliozat (eds.). *L'Inde classique: manuel des études indiennes*, §2331, t. 2, p. 569.

## FINCKH, Elisabeth

- 1978 *Foundations of Tibetan Medicine: According to the Book rGyud bñi*. Vol. 1. London: Watkins.

## FUJIEDA, Akira (藤枝, 晃)

- 1961 「吐蕃支配期の敦煌」 In: 『東方学報』, vol. 31, pp. 199–292.

## FUJIEDA, Akira (藤枝, 晃) / UYAMA, Daishun (上山, 大峻)

- 1962 「チベット訳『無量寿宗要経』の敦煌写本」 In: 『ビブリア』, vol. 23, pp. 345–356.

## FUJINAKA, Takashi (藤仲, 孝司) / NAKAMIKADO, Keikyo (中御門, 敬教)

- 2018 『インド・チベット浄土教の研究: 大乘菩薩道としての展開』 浦安: 起心書房.

## FUJITA, Kotatsu (藤田, 宏達)

- 1970 『原始浄土思想の研究』 東京: 岩波書店.  
 2001 『阿弥陀経講究』 京都: 真宗大谷派宗務所出版部.  
 2011 (Ed.) *The Larger and Smaller Sukhāvativyūha Sūtras*: 梵文無量寿経, 梵文阿弥陀経. Kyoto: Hozokan.  
 2015 (Tr.) 『新訂梵文和訳: 無量寿経阿弥陀経』 京都: 法蔵館.

## FUKUDA, Yoichi (福田, 精齋)

- 1926 『西藏古寫経』 京都: 福田精齋.

## FUSE, Jomyo (布施, 浄明)

- 2001 「『金剛頂瑜伽他化自在天理趣会普賢修行念誦儀軌』における四撰の印言について」 In: 『現代密教』 vol. 14, pp. 277–290.

## GERKE, Barbara

- 2012 *Long Lives and Untimely Deaths: Life-span Concepts and Longevity Practices among Tibetans in the Darjeeling Hills, India*. Brill's Tibetan studies library, v. 27. Leiden: Brill.

## GERMANO, David Francis

- 1994 "Architecture and Absence in the Secret Tantric History of the Great Perfection (*rdzogs chen*)". In: *JIABS*, 17-2, pp. 203–335.
- 1997 "Dying, Death, and Other Opportunities". In: *RTP*, pp. 458–493.
- 2007 "The Shifting Terrain of the Tantric Bodies of Buddhas and Buddhists from an Atiyoga Perspective". In: *PS*, pp. 50–84.

## GETTY, Alice

- 1962 *The Gods of Northern Buddhism: Their History, Iconography and Progressive Evolution Through the Northern Buddhist Countries*. Rutland: Tuttle.

## GÓMEZ, Luis Oscar

- 1968 *Selected Verses from the Gaṇḍavyūha: Text, Critical Apparatus and Translation*. Ann Arbor: University Microfilms International.

## GOTO, Toshifumi (後藤, 敏文)

- 2008 「インドのことばとヨーロッパのことば」 In: 阿子島香編『ことばの世界とその魅力』 pp. 118–163. 仙台: 東北大学出版会.
- 2009 「「業」と「輪廻」: ヴェーダから仏教へ」 In: 『印度哲学仏教学』 vol. 24, pp. 16–41.

## GRAFE, Jörg

- 2001 *Vidyādhara: Früheste Zeit bis zur Kaschmirischen Bṛhatkathā*. Frankfurt am Main [u.a.]: Lang.

## GYATSO, Janet B.

- 1980 "The Teachings of Thang-stong rGyal-po". In: *HR*, pp. 111–119.
- 1981 *The Literary Transmission of the Traditions of Thang-stong rGyal-po: A Study of Visionary Buddhism in Tibet*. Ph.D. dissertation. Berkeley: University of California, Berkeley, 1981.
- 1985 "The Development of the gCod Tradition". In: Barbara Aziz and Matthew Kapstein, eds., *Soundings in Tibetan Civilization*. Delhi: Manohar.
- 1986a "Thang-stong rGyal-po, Father of the Tibetan Drama: The Bodhisattva as Artist". In: Jamyang Norbu, ed., *Zlos-gar, The Tibetan Performing Arts: Commemorative Issue on the Occasion of the 25th Anniversary of the Founding of the Tibetan Institute of Performing Arts (1959-84)*, pp. 91–104. Dharamsala: Library of Tibetan Works and Archives.
- 1986b "Signs, Memory and History: A Tantric Buddhist Theory of Scriptural Transmission". In: *JIABS*, vol. 9, no. 2, pp. 7–35.
- 1991 "Thang-stong Rgyal-po" and "Ma-gcig Lab-sgron". In: John R. Hinnells (ed.), *Who's Who of Religions*, pp. 246, 405.
- 1992a "Genre, Authorship and Transmission in Visionary Buddhism: The Literary



- Traditions of Thang-stong Rgyal-po”. In: Steven D. Goodman & Ronald M. Davidson (eds.). *Tibetan Buddhism: Reason And Revelation*, pp. 95–106. Albany: State University of New York Press.
- 1992b “Autobiography in Tibetan Religious Literature: Reflections on Its Modes of Self-Presentation”. In: Ihara Shōren and Yamaguchi Zuihō (eds.). *Language, history and culture, Tibetan Studies: Proceedings of the 5th Seminar of the International Association for Tibetan Studies Narita 1989*, vol. 2, pp. [465]–478. Narita: Naritasan Institute for Buddhist Studies.
- 1993 “The Logic of Legitimation in the Tibetan Treasure Tradition”. In: *History of Religions*, v. 33/1, pp. 97–134.
- 1994 “Guru Chos-dbang’s gTer ’byung chen mo: An Early Survey of the Treasure Tradition and Its Strategies in Discussing Bon Treasure”. In: *Tibetan Studies: Proceedings of the 6th Seminar of the International Association of Tibetan Studies, Fagernes 1992*, pp. 275–287. Oslo: The Institute for Comparative Research in Human Culture.
- 1996 “Drawn from the Tibetan Treasury: The gTer ma Literature”. In: TLSG, pp. 147–169.
- 1997 “An Avalokiteśvara Sādhana”. In: RTP, pp. [266]–270.
- GYAMTSON, Yeshe  
 2011 (Tr.) *The Hundred Tertöns: A Garland of Beryl: Brief Accounts of Profound Terma and the Siddhas Who Have Revealed It by Jamgön Kongtrül Lodrö Taye*. New York: KTD Publications.
- HADANO, Hakuyu (羽田野, 伯猷)  
 1986–1988  
 『チベット・インド学集成』4 vols. 京都: 法蔵館.
- HALKIAS, Georgios T.  
 2006 “Pure-Lands and other Visions in Seventeenth-Century Tibet: A *Gnam chos sādhanā* for the Pure-land *sukhāvātī* Revealed in 1658 by Gnam chos Mi ‘gyur rdo rje (1645-1667)”. In: *Power, Politics, and the Reinvention of Tradition: Tibet in the Seventeenth and Eighteenth Centuries*. Brill’s Tibetan Studies Library, vol. 10. Leiden: Brill, pp. 103–128.
- 2013 *Luminous Bliss: A Religious History of Pure Land Literature in Tibet: with An Annotated English Translation and Critical Analysis of the Orgyan-gling Gold Manuscript of the Short Sukhāvātīvyūha-sūtra*. Pure Land Buddhist Studies. Honolulu: University of Hawai’i Press.
- HARA, Minoru (原, 実)  
 1973 「Gaṇḍa-vyūha 題名考」 In: 『インド思想と仏教』 pp. 21–36. 東京: 春秋社.
- HARIMOTO, Kengo  
 2011 “In Search of the Oldest Nepalese Manuscript”. In: *Rivista degli Studi Orientali*, Nuova Serie vol. 84, pp. [85]–106.

HARRISON, Paul

- 1990 *The Samādhi of Direct Encounter with the Buddhas of the Present: An Annotated English Translation of the Tibetan Version of the Pratyutpanna-buddha-saṃmukhāvasthita-samādhi-sūtra with Several Appendices Relating to the History of the Text.* Tokyo: International Institute for Buddhist Studies.

HASUIKE, Toshitaka (蓮池, 利隆)

- 1993 「Khotan 本『アパリミターユル陀羅尼經』について (1)」 In: 『印仏』 vol. 42, no. 1, pp. 411–409.  
1994 「Khotan 本『アパリミターユル陀羅尼經』について (2)」 In: 『印仏』 vol. 43, no. 1, pp. 313–311.

HELMAN-WAŻNY, Agnieszka

- 2014 *The Archaeology of Tibetan Books.* Leiden: Brill.

HERWEG, Jurgen Wilhelm

- 1994 *The Hagiography of Rig 'dzin Rgod kyi ldem 'phru can and Three Historic Questions Emerging from It.* M.A. thesis, University of Washington.

VON HINÜBER, Oskar

- 1986/1987  
“The Poṭola Śāhis of Gilgit: A forgotten Dynasty”. In: *Journal of Oriental Institute Baroda*, 36, pp. 221–229.  
2014 “The Gilgit Manuscripts An Ancient Buddhist Library in Modern Research”. In: Harrison Paul and Hartmann Jens-Uwe (ed.) *From Birch Bark to Digital Data: Recent Advances in Buddhist Manuscript Research: Papers Presented at the Conference Indic Buddhist Manuscripts: The State of the Field. Stanford, June 15-19 2009*, pp. 79–136. Wien: Austrian Academy of Sciences Press.

VON HINÜBER, O. / NORMAN, K. R.

- 2003 (Ed.) *Dhammapada.* Oxford: Pali Text Society. First published 1994; Reprinted with corrections 2003.

HIRAKAWA, Akira (平川, 彰)

- 1968 『初期大乘仏教の研究』 東京: 春秋社.

HIRAMATSU, Toshio (平松, 敏雄)

- 1982 『トゥカン『一切宗義』ニンマ派の章』 *Studia Tibetica*, 5. 東京: 東洋文庫.

HOERNLE, A. F. Rudolf

- 1910 “The “Unknown Languages” of Eastern Turkestan”. In: *JRAS*, pp. 834–838.  
1911 “The “Unknown Languages” of Eastern Turkestan II”. In: *JRAS*, pp. 447–477.

HORI, Kentoku (堀, 謙徳)

- 1971 『解説西域記』 東京: 国書刊行会. First published in 東京: 前川文榮閣, 1912.

HORI, Shin'ichiro (堀, 伸一郎)

- 2012 「『大方広仏華嚴經』: 題名とその原語」 In: GBS実行委員会編 『論集華嚴文化の潮流』 vol. 10, pp. 10–21. 奈良: 東大寺.

HORIUCHI, Kanjin (堀内, 寛仁)

- 1974 『遍調伏品・義成就品・教理分』初会金剛頂經の研究: 梵藏漢对照, 梵本校訂篇, 下卷.  
1983 『金剛界品・降三世品』初会金剛頂經の研究: 梵藏漢对照, 梵本校訂篇, 梵本校訂篇, 上卷.

HUANG, Wei-chung (黄, 維忠)

- 2012 「国家図書館敦煌藏文遺書 BD14286-BD14350 号解題目録」 In: 『中国藏学』2012, S1, pp. 141-162.

HUANG Wên-huan (黄, 文煥)

- 1982 「河西吐蕃卷式写經目録并后記」 In: 『世界宗教研究』1982年第1期, pp. 84-102.

HUMBACH, H.

- 1978 “Miθra in India and the Hinduized Magi”. In: *Études Mithriaques: Actes du 2e Congrès International, Téhéran, du 1er au 8 septembre 1975*, pp. [229]-253.

IKEDA, Chōtatsu (池田, 澄達)

- 1916 「梵本アパリミターユル陀羅尼經の校合」 In: *Journal of Religious Studies*, vol. 1-3, pp. 549-564.

IKEDA, On (池田, 温)

- 1975 「敦煌遺文」 In: 『書の日本史』vol. 1, pp. 82-88. 東京: 平凡社.

IMAEDA, Yoshiro (今枝, 由郎)

- 1998 “À propos du manuscrit Pelliot tibétain 999”. In: Paul Harrison and Gregory Schopen, ed. *Sūryacandrāya: Essays in Honour of Akira Yuyama on the Occasion of his 65th Birthday*, pp. 87-94. Swistal-Odendorf: Indica et Tibetica Verlag.

INAGAKI, Hisao

- 1994 *The Three Pure Land Sutras: A Study and Translation from Chinese*. Kyoto: Nagata Bunshodo.

ISHIGURO, Yachi (石黒, 彌致)

- 1936 『清淨道論』上. 東京: 東洋文庫.

ISHIHAMA, Juntarō (石濱, 純太郎)

- 1926 「敦煌古書雜考」 In: 東洋学報, vol. 15 (4), pp. 512-524.  
1927 「無量寿宗要經考補」 In: 東洋学報, vol. 16 (2), pp. 223-231.

ISHIHAMA, Juntarō (石濱, 純太郎) & YOSHIMURA, Shūki (芳村, 修基)

- 1958 「無量寿宗要經とその諸写本: 西紀八二二年を示す写本の基準」 In: 『西域文化研究』vol. 1, pp. 216-219. 京都: 法蔵館.

IWAMATSU, Asao (岩松, 浅夫)

- 1985 「敦煌のコータン語仏教文献」 In: 『講座敦煌』6, pp. 141-184. 東京: 大東出版社.

IWAO, Kazushi (岩尾, 一史)

- 2010 「古代王朝時代の諸相」 In: 『須弥山の仏教世界』 pp. [15]–43. 東京: 佼成出版社.
- 2012 “The Purpose of Sutra Copying in Dunhuang Under the Tibetan Rule”. In: Popova, Irina, Yi, Liu (eds.), *Dunhuang Studies: Prospects and Problems for the Coming Century of Research*. Saint Petersburg: Slavia, pp. 102–105.

JACKSON, David P. (abbr. JACKSOND)

- 1987 *The Entrance Gate for Wise (Section III): Sa-skyā Paṇḍita on Indian and Tibetan Traditions of Pramāṇa and Philosophical Debate*. 2 vols. WSTB, vol. 17.
- 1996 *A History of Tibetan Painting: the Great Tibetan Painters and Their Traditions*. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- 2006 瀬戸敦朗, 田上操, 小野田俊蔵共訳 『チベット絵画の歴史: 偉大な絵師達の絵画様式とその伝統』 東京: 平河出版社.

JACKSON, Roger (abbr. JACKSONR)

- 1997 “A Fasting Ritual”. In: RTP, pp. [271]–292.

JINPA, Thupten / LOPEZ, Donald S.

- 2014 *Grains of Gold: Tales of A Cosmopolitan Traveler*. Chicago: The University of Chicago Press.

KAJIHAMA, Ryoshun (梶濱, 亮俊)

- 2002 『チベットの浄土思想の研究』 永田文昌堂.

KAJIYAMA, Yūichi (梶山, 雄一)

- 1994 「解説(一)」 In: 『さとりにへの遍歴』 上巻, pp. 439–453. 東京: 中央公論社.

KANEKO, Eiichi (金子, 英一)

- 1976 「ニンマ派のテルマについて」 In: 『疑経研究』 pp. 369–386. 京都: 臨川書店.
- 1980 「ニンマ派における「心髄」の相承系譜」 In: 『大正大学研究紀要』, vol. 65, pp. 280–314.
- 1982 『古タントラ全集解題目録』 東京: 国書刊行会.

KAPSTEIN, Matthew

- 1980 “The Shangs-pa bKa'-brgyud: An Unknown Tradition of Tibetan Buddhism”. In: HR, pp. 138–144.
- 2004 “Pure Land Buddhism in Tibet? From Sukhāvātī to the Field of Great Bliss”. In: Richard K. Payne and Kenneth K. Tanaka (eds.), *Approaching the Land of Bliss: Religious Praxis in the Cult of Amitābha*, pp. 1–16. Honolulu: University of Hawai'i Press.

KATAYAMA, Ichiro (片山, 一良)

- 2009 『ダンマパダ: 全詩解説: 仏祖に学ぶひとすじの道』 東京: 大蔵出版.

KARMAY, Samten

- 1988 *The Great Perfection*. London: E.J. Brill.
- 2007 “A Most Pleasing Symphony: An Unknown Biography of the Fifth Dalai

Lama”. In: PS, pp. 130–137.

KERN, H.

1909 *The Saddharma-Pundarīka, or, The lotus of the true law*. Oxford: Clarendon Press.

KERN, H. / NANJIOO, Bunyiu (南条, 文雄)

1977 (Ed.) *Saddharmapuṇḍarīka*. Tokyo: Meicho-Fukyu-kai. First published in 1908–1912, reprinted in 1977.

KHETSUN SANGPO (ケツンサンポ)

1964 「ニムマパにおける九乗の宗義」 In: 『日本西藏学会々報』 vol. 11, p. 3.

1973 (Comp.) *The Rñin-ma-pa Tradition*. Pts. 1–2. Biographical Dictionary of Tibet and Tibetan Buddhism, vols. 3–4. Dharamsala: Library of Tibetan Works & Archives.

KIN, Bunkyo (金, 文京)

2010 『漢文と東アジア: 訓読の文化圏』 東京: 岩波書店.

KLEIN, Anne C. / SANGPO, Khetsun

1997 “Hail Protection”. In: RTP, pp. 538–547.

KOLMAŠ, Josef

1971 *Dpal-spungs Prints*. Asiatische Forschungen: A Facsimile Reproduction of 5,615 Book-titles Printed at the dGon-chen and dPal-spungs Monasteries of Derge in Eastern Tibet, pt. 2. Wiesbaden: O. Harrassowitz.

KONOW, S.

1916 “The Aparimitâyuh Sūtra: The Old Khotanese Version Together with the Sanskrit Text and the Tibetan Translation”. In: A. F. Rudolf Hoernle (ed.), *Manuscript Remains of Buddhist Literature Found in Eastern Turkestan*, pp. 289–356. Oxford: Clarendon Press.

SKAL-BZANG-MKHAS-GRUB

2006 *Grub chen thang stong rgyal po*. Pha yul phyogs bsgrigs deb phreng, vol. 33. Dharamsala, H.P.: Bod-gzhung-shes-rig-las-khungs.

VAN DER KUIJP, Leonard W. J.

2006 “The Earliest Indian Reference to Muslims in a Buddhist Philosophical Text of ‘circa’ 700”. In: JIP, vol. 34, no. 3, pp. 169–202.

KUNSANG, Erik Pema

1990 *Dakini Teachings: Padmasambhava’s Oral Instructions to Lady Tsogyal: Recorded and Concealed by Yashe Tsogyal, Revealed by Nyang Ral Nyima Oser and Sangye Lingpa*. Shambhala dragon Editions. Boston: Shambhala Publications.

1999 *The Lotus-Born: The Life Story of Padmasambhava*. Boston: Shambhala Publications.

2006 *Dispeller of Obstacles: The Heart Practice of Padmasambhava*. Boudhanath: Rangjung Yeshe Publications.

Kvaerne [KVDRNE], Per

- 2005 “On the Concept of Sahaja in Indian Buddhist Tantric Literature”. In: BCCRS, vol. 6, pp. 162–208.

LAW, BIMALA CHURN

- 1976 *Historical Geography of Ancient India*. Delhi: Ess Ess Publications.

LAMOTTE, Étienne

- 1988 Sara Webb-Boin, under the supervision of Jean Dantinne (tr.). *History of Indian Buddhism: From the Origins to the Śaka Era*. Louvain-La-Neuve: Université catholique de Louvain, Institut orientaliste.

LESSING, F. D. / WAYMAN, A.

- 1978 *Introduction to the Buddhist Tantric Systems: Translated from Mkhas grub rje's Rgyud sde spyi'i rnam par gźag pa rgyas par brjod with Original Text and Annotation*. Second edition of 1968. Delhi: Motilal Banarsidass.

LEUMANN, Ernst

- 1912 *Zur nordarischen Sprache und Literatur: Vorbemerkungen und vier Aufsätze mit Glossar*. Schriften der Wissenschaftlichen Gesellschaft in Straßburg. vol. 10. Straßburg: Trübner.

LI, An-che

- 1949 “Rñiñ ma pa: The Early Form of Lamaism”. In: *Journal of the Royal Asiatic Society*, vol. 60, 3-4, pp. 142–163.

LI, Mengyan

- 2018 *Origination, Transmission, and Reception of the Phur-pa Cycle: A Study of the rDo-rje-phur-pa Cycle of Tantric Teachings in Tibet with Special Reference to Sog-bzlog-pa Blo-gros-rgyal-mtshan's (1552–1624) Phur pa'i lo rgyus*. PhD dissertation. Hamburg: Universität Hamburg, 2018.

LODRÖ SANGPO, Gelong

- 2012 *Abhidharmakośa-Bhāṣya of Vasubandhu: The Treasury of The Abhidharma And Its (Auto) Commentary*. 4 vols. Delhi: Motilal Banarsidass.

MAETANI, Akira (前谷, 彰)

- 2010 「仏教における死の意味概念」 In: 日本佛教学会編『仏教の生死観』 pp. 51–68. 京都: 平樂寺書店.

MARTIN, Dan

- 1997 *Tibetan Histories: A Bibliography of Tibetan-Language Historical Works*. London: Serindia.
- 2001 *Unearthing Bon Treasures: Life and Contested Legacy of a Tibetan Scripture Revealer, with a General Bibliography of Bon*. Leiden: Brill.

MATKO, Marta / VAN SCHAİK, Sam

- 2014 *Scribal colophons in the Tibetan manuscripts at the British Library (Prajñāpāramitā and Aparimitāyus sūtras)*. London: International Dunhuang Project. 1st electronic ed. was made in 2013. New ed. with corrections from

Lewis Doney and Brandon Dotson made in September 2014. [[http://idp.bl.uk/database/oo\\_cat.a4d?shortref=Matko\\_vanSchaik\\_2013;random=2546](http://idp.bl.uk/database/oo_cat.a4d?shortref=Matko_vanSchaik_2013;random=2546)]

MATSUDA, Kazunobu

1996 *Two Sanskrit Manuscripts of the Daśabhūmikasūtra: Preserved at the National Archives, Kathmandu*. Tokyo: Centre for East Asian Cultural Studies for Unesco, Toyo Bunko.

MATSUMOTO, Bunzaburo (松本, 文三郎)

1914 『佛典乃研究』 東京: 丙午出版社.

MATSUNAGA, Yukei (松長, 有慶)

1980 『密教經典成立史論』 京都: 法藏館.

2000 『秘密集会タントラ和訳』 京都: 法藏館.

MAYRHOFER, Manfred

1983 “Lassen sich Vorstufen des Uriranischen nachweisen?”. In: Rüdiger Schmitt (hg.). *Ausgewählte kleine Schriften*, Bd. 2, pp. 380–386. Wiesbaden: Reichert.

MEI, Ching Hsuan (梅, 静軒)

2018 「西藏寧瑪派伏藏文獻之長壽, 療癒與解脫」 In: 『正觀』 vol. 84, pp. 153–203.

MENGELE, Irmgard

2010 “Chilu (’Chi bslu): Rituals for “Deceiving Death””. In: José Ignacio Cabezón (ed.) *Tibetan Ritual*, pp. 103–129. New York: Oxford University Press.

MILLARD, Colin

2007 “Tibetan Medicine and the Classification and Treatment of Psychiatric Disorders”. In: STM, pp. 247–283.

MIMAKI, Katsumi (御牧, 克己)

1984 「大乘無量寿宗要経」 In: 『敦煌と中国仏教』 講座敦煌, vol. 7, pp. 167–172. 東京: 大東出版社.

MIMAKI, Katsumi / TOMABECHI Tōru

1994 *Pañcakrama: Sanskrit and Tibetan Texts Critically Edited with Verse Index and Facsimile Edition of the Sanskrit Manuscripts*. Tokyo: Centre for East Asian Cultural Studies for Unesco.

MIYAKE, Shin’ichiro (三宅, 伸一郎)

2005 「チベットの歌舞劇アチェ・ラモ概観: その舞台と歴史」 In: 『仏教学セミナー』 vol. 82, pp. 51–81.

MIYASAKA, Yusho (宮坂, 宥勝)

1991 「HAYAGRĪVA考」 In: 牧尾良海博士喜寿記念論集刊行会編 『儒・佛・道三教思想論攷: 牧尾良海博士喜寿記念』 pp. 1–15. 東京: 山喜房佛書林.

MIYASAKA, Yusho (宮坂, 宥勝) / KUWAMURA, Masazumi (桑村, 正純)

1981 『タントラ仏教入門』 京都: 人文書院.

MORGENSTIERNE, Georg

1973 *Irano-dardica*. Wiesbaden: Dr. Ludwig Reichert Verlag.

MULLIN, Glenn H.

- 1985 *Selected Works of the Dalai Lama II: Tantric Yogas of Sister Niguma*. Teachings of the Dalai Lamas. Ithaca, N.Y.: Snow Lion.
- 1986 *Death and Dying: the Tibetan Tradition*. Boston: Arkana.

MURAKAMI, Shinkan

- 2006 “Vyūha: A Characteristic of the Creation of the Mahāyāna Scriptures”. In: 望月海淑編『法華経と大乘經典の研究』 pp. 93–152. 東京: 山喜房佛書林.

NAGAI, Yuto (永井, 悠斗)

- 2019 「インド文献に現れる宗教者「マガ」: 先行研究と関連文献の整理」 In: 『宗教学・比較思想学論集』 vol. 20, pp. 39–58.

NAGANO, Yasuhiko (長野, 泰彦)

- 1985 「護符に息づくミチュ」 In: 『月刊みんぱく』 vol. 9, no. 12, pp. 8–9.

NAGANO, Yasuhiko (長野, 泰彦) / TACHIKAWA, Musashi (立川, 武蔵)

- 1989 *The Deities of the Dharmadhātu Mandala*. 国立民族学博物館研究報告別冊, vol. 7. 吹田: 国立民族学博物館.

NAGATOMO, Taijun (長友, 泰潤)

- 2019 「ブラフマーストラのプラーナ説: チャラカ・サンヒターの風説との比較考察」 In: 『南九州大学研究報告』 vol. 49, pp. 11–18.

NAKAMURA, Hajime (中村, 元)

- 1965 『東西文化の交流』 中村元選集, 第9巻. 東京: 春秋社.
- 2004 『密教經典・他』 現代語訳大乘仏典, 第6巻. 東京: 東京書籍.

NAKASHIMA, Konomi (中島, 小乃美)

- 2018 「西チベット・ラダック地方の葬送儀礼にみる命 (1): zhikhro の儀軌と無量寿如来の関係について」 In: 『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』 vol. 14, pp. 1–23.

NATTIER, Jan

- 1991 *Once Upon A Future Time: Studies in A Buddhist Prophecy of Decline*. Berkeley: Asian Humanities Press.

NEBESKY-WOJKOWITZ, René de

- 1975 *Oracles and Demons of Tibet: The Cult and Iconography of the Tibetan Protective Deities*. Graz: Akademische Druck- u. Verlagsanstalt. First published 1956; reprinted with an introduction by Per Kværne 1975.

NEUJAHR, Matthew

- 2012 *Predicting the Past in the Ancient Near East: Mantic Historiography in Ancient Mesopotamia, Judah, and the Mediterranean World*. Brown Judaic Studies, no. 354. Providence, Rhode Island: Brown Judaic Studies.

NISHIDA, Tatsuo (西田, 龍雄)

- 1962 「天理図書館蔵西夏文『無量寿宗要経』について」 In: 『ビブリア: 天理図書館報』 vol. 23, pp. 357–366.



NISHIOKA, Soshu (西岡, 祖秀)

1984 「ペリオ蒐集チベット文「無量寿宗要経」の写経生・校勘者一覧」  
In: 『印仏』 vol. 33-1, pp. 320–314.

1985 「沙洲における写経事業: チベット文『無量寿宗要経』の敦煌写本を中心として」 In: 『敦煌胡語文献』講座敦煌, vol. 6, pp. 379–393. 東京: 大東出版社.

NORMAN, K. R.

2004 *The Word of the Doctrine: Dhammapada*. Oxford: Pali Text Society.

OBA, Emi (大羽, 恵美)

2008 「馬頭尊のイメージに関する一考察」 『北陸宗教文化』 21, pp. 57–80.

ONODA, Shunzo (小野田, 俊蔵)

2001 「蔵訳阿弥陀経校合表」 In: 香川孝雄先生古稀記念会編『佛教学浄土学研究: 香川孝雄博士古稀記念論集』 pp. 65–93. 京都: 永田文昌堂.

OSADA, Toshiki / ONISHI Masayuki

2012 (Ed.) *Language Atlas of South Asia: Indus Project, Research Institute for Humanities and Nature, Kyoto*. Cambridge, Massachusetts: Dept. of South Asian Studies, Harvard University.

OSto, Douglas

2009 “The Supreme Array Scripture: A New Interpretation of the Title ‘*Gaṇḍavyūhasūtra*’”. In: JIP, vol. 37-3, pp. 273–290.

ŌTSUKA, Nobuo (大塚, 伸夫)

2013 『インド初期密教成立過程の研究』 東京: 春秋社.

OTSUKA, Norihiro (大塚, 紀弘)

2009 「七寺一切経中の北宋新訳仏典」 In: 『いとくら』 5, pp. 5–6.

PADOUX, André

2011 *Tantric Mantras: Studies on Mantrasastra*. London: Routledge.

PAYNE, Richard K.

2007 “Aparimitāyus: ‘Tantra’ and ‘Pure Land’ in Medieval Indian Buddhism?”. In: *Pacific World: Journal of the Institute of Buddhist Studies*, 3rd Series, no. 9, pp. 273–308.

PELLIOT, Paul

1914 “Notes à propos d’un catalogue du Kanjur”. In: *Journal Asiatique*, 11-4, pp. [111]–150.

POZDNEEV, A. (Позднеев, А.)

1908 Учебник тибетской медицины. СПб.: Тип. Императорской Академии наук.

RAY, Priyadarajan

1967 “Origin and Tradition of Alchemy”. In: *Indian Journal of the History of Science*, vol. 2, pp. 1–12.

- ROERICH, George N.  
1949 *The Blue Annals*. 2 vols. Calcutta: Royal Asiatic Society of Bengal.
- ROESLER, Ulrike  
2018 “Rgya gar skad du: “in Sanskrit”? Indian Languages as Reflected in Tibetan Travel Accounts”. In: *Saddharmāmṛtam: Festschrift für Jens-Uwe Hartmann zum 65. Geburtstag*, pp. 351–368. Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, Heft 93.
- ROLOFF, Carola  
2009 *Red mda’ba, Buddhist Yogi-scholar of the Fourteenc: The Forgotten Reviver of Madhyamaka philosophy in Tibet*. Contributions to Tibetan Studies, v. 7. Wiesbaden: Reichert.
- ROTH, Rudolph / WHITNEY, William Dwight  
1966 *Atharvavedasāṃhitā*. Bonn: Ferd. Dümmler.
- SAITO, Yasutaka (齋藤, 保高)  
1998 『ツォンカパのチベット密教: 『真言道次第広論 (ガクリム・チェンモ)』全十四品解説と第十二品「生起次第」和訳』東京: 大蔵出版.
- SAKAI, Yukio (酒井, 真典)  
1974 『チベット密教教理の研究: 秘密集会龍樹系』東京: 国書刊行会.
- SAKUMA, Ruriko (佐久間, 留理子)  
1993 「『サーダナ・マーラー』におけるニヤーサ」 In: 『印仏』 82-41-2, pp. 225–228.  
2011 『インド密教の観自在研究』東京: 山喜房佛書林.  
2015 『観音菩薩: 変幻自在な姿をとる救済者』東京: 春秋社.
- SAKURABE, Hajime (櫻部, 建)  
1997 「「華嚴」という語について」 In: 『佛教語の研究』増補版, pp. 88–98. 京都: 文栄堂書店.
- SAKURAI, Munenobu (桜井, 宗信)  
2009 「〈五相現等覚〉ノート: Jnanapada 流成就法を中心に」 In: 『智山学報』 58, pp. B37–B53.
- SAMUEL, Geoffrey  
1993 “Shamanism, Bon and Tibetan Religion”. In: ATH, pp. 318–330.  
2008 *The Origins of Yoga and Tantra: Indic Religions to the Thirteenc*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.  
2012a “Amitāyus and the Development of Tantric Practices for Longevity and Health in Tibet”. In: István Keul (ed.). *Transformations and Transfer of Tantra in Asia and Beyond*, pp. 263–286. Berlin: Walter de Gruyter.  
2012b “Editorial”. In: *Asian Medicine*, vol. 7-1, pp. i–xiv.  
2014 “Panentheism and the Longevity Practices of Tibetan Buddhism”. In: Loriliai Biernacki and Philip Clayton (eds.), *Panentheism Across the World’s Traditions*, pp. 83–99. New York: Oxford University Press.

SANDERSON, Alexis

- 2007 “The Śaiva Exegesis of Kashmir”. In: *Mélanges tantriques à la mémoire d’Hélène Brunner*. Pondicherry: Institut français d’Indologie / École française d’Extrême-Orient. Collection Indologie, v. 106, pp. [231]–442; pp. [551]–582 (bibliography).

SAVITSKY, L. S. (САВИЦКИЙ, Л. С.)

- 1984 “Tunhuang Tibetan Manuscripts in the Collection of the Leningrad Institute of Oriental Studies”. In: Louis Ligeti (ed.). *Tibetan and Buddhist Studies : Commemorating the 200th Anniversary of the Birth of Alexander Csoma de Körös*, vol. 2, pp. 281–290. Budapest: Akadémiai Kiadó.

SCHAEFFER, Kurtis R.

- 2002 “The Attainment of Immortality: From Nāthas in India To Buddhists in Tibet”. In: *JIP*, vol. 30-6, pp. 515–533.

VAN SCHAİK, Sam

- 2007 “Manuscript Numbers in the Stein Collection”. In: earlytibet.com. [<https://earlytibet.com/about/numbers/>]

VAN SCHAİK, Sam / HELMAN-WAŻNY, Agnieszka / NÖLLER, Renate

- 2015 “Writing, Painting and Sketching at Dunhuang: Assessing the Materiality and Function of Early Tibetan Manuscripts and Ritual Items”. In: *Journal of Archaeological Science*, 53, pp. 110–132.

SCHNEIDER, Johannes

- 2006 ---  
2010 *Vāgiśvarakīrtis Mr̥tyuvañcanpadeśa, eine buddhistische Lehrschrift zur Abwehr des Todes*. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.

SCHUH, Dieter

- 1973 *Untersuchungen zur Geschichte der tibetischen Kalenderrechnung*. Wiesbaden: Franz Steiner. (Repr.) In: SCHUH 2012, pp. 69–477.  
1976 *Gesammelte Werke des Koñ-sprul Blo-gros mtha’-yas*. Tibetische Handschriften und Blockdrucke, Teil 6. VOHD, Bd. 11,6.  
2012 (Ed.) *Contributions to the History of Tibetan Mathematics, Tibetan Astronomy, Tibetan Time Calculation (Calendar) and Sino-Tibetan Divination*. 4 vols. Andiastr: International Institute of Tibetan and Buddhist Studies.

SCHULZE, Wilhelm

- 1966 *Kleine Schriften*. 2., durchgesehene Aufl. mit Nachträgen. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

SCHWIEGER, Peter

- 1990 *Tibetische Handschriften und Blockdrucke, Teil 10: Die mTshur-phu-Ausgabe der Sammlung Rin-chen gter-mdzod chen-mo, Bände 1 bis 14*. VOHD, Bd. 11,10.  
1995 *Tibetische Handschriften und Blockdrucke, Teil 11: Die mTshur-phu-Ausgabe*

*der Sammlung Rin-chen gter-mdzod chen-mo, nach dem Exemplar der Orientabteilung, Staatsbibliothek zu Berlin - Preussischer Kulturbesitz, Hs or 778, Bände 14 bis 34. VOHD, Bd. 11,11.*

1999 *Tibetische Handschriften und Blockdrucke, Teil 12: Die mTshur-phu-Ausgabe der Sammlung Rin-chen gter-mdzod chen-mo, nach dem Exemplar der Orientabteilung, Staatsbibliothek zu Berlin - Preussischer Kulturbesitz, Hs or 778, Bände 34 bis 40. VOHD, Bd. 11,12.*

2009 *Tibetische Handschriften und Blockdrucke, Teil 13: Die mTshur-phu-Ausgabe der Sammlung Rin-chen gter-mdzod chen-mo, nach dem Exemplar der Orientabteilung, Staatsbibliothek zu Berlin, Preussischer Kulturbesitz, Hs or 778, Bände 40-52. VOHD, Bd. 11,13.*

SEYFORTH RUEGG, David

1966 *The Life of Bu ston Rin po che*. Serie Orientale Roma, 34. Rome: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.

1992 “Notes on Some Indian and Tibetan Reckonings of the Buddha’s Nirvāṇa and the Duration of His Teaching”. In: Heinz Bechert (ed.). *The Dating of the Historical Buddha=Die Datierung des historischen Buddha*, pt 2, pp. 263–290. Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht.

SHAFER, ROBERT

1974 *Introduction to Sino-Tibetan*. Wiesbaden, Harrassowitz.

SHINGA, Kanako

2016 “Thang-stong-rgyal-po as A Mental Emanation (thugs sprul) of Guru Padmasambhava”. In: *TJ*, vol. 41-2, pp. 103–116.

2017a “Laying Bridge Foundations: the Roots of Thang-stong-rgyal-po’s Lineage”. In: 『日本西藏学会々報』, v. 62, pp. 41–54.

2017b “The Theory and Practice of ICags-kyi-sdong-po in the Northern Treasure Branch of rNying-ma School”. In: *Sengokuyama Journal of Buddhist Studies*, vol. 9, pp. 41–87.

SHIRASAKI, Kenjo (白崎, 顕成)

1981 「Jitāri と śāntideva と Prabhākarakīrti」 In: 『印仏』 vol. 58, pp. 80–84.

SHIZUKA, Haruki (静, 春樹)

2004 「仏教タントリストが口にするもの: 飲食による「即身成仏」について」 In: 『京都精華大学紀要』 26, pp. 63–84.

SILK, Jonathan

2004 “A Sūtra for Long Life”. In: Donald S. Lopez Jr. (ed.), *Buddhist Scriptures*, pp. 423–429. London: Penguin Books.

2008 “Putative Persian Perversities: Buddhist Condemnations of Zoroastrian Close-Kin Marriage in Context”. In: *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, vol. 71, no. 3, pp. 433–464.

2019 “Dreaming Dharma’s Decline: An Indian Buddhist Vaticinium ex eventu”. In: Paper Read at Komazawa University, Tokyo, Monday, May 20, 2019.

SKORUPSKI, Tadeusz

- 1982 “The Cremation Ceremony According to the Byang-Gter Tradition”. In: *Kailash*, vol. 9-4, pp. 361–376.
- 1983 *Tibetan amulets*. Bangkok: White Orchid Press.
- 1994 “A Prayer for Rebirth in the Sukhāvati”. In: *The Buddhist Forum, Vol. III. Papers in Honour of Prof. David Syfort Ruegg*, pp. 375–409. London: School of Oriental and African Studies.
- 2001 “Funeral Rites for Rebirth in the Sukhāvati Abode”. In: *The Buddhist Forum*, VI, pp. 137–172. Tring: The Institute of Buddhist Studies

SMITH, E. Gene

- 1970 “Introduction”. In: *Kongtrul’s Encyclopaedia of Indo-Tibetan Culture*, pp. 1–78. Edited by Lokesh Chandra. New Delhi: International Academy of Indian Culture.
- 2001 *Among Tibetan Texts: History and Literature of the Himalayan Plateau*. Boston: Wisdom.

SNELGROVE, D. L.

- 1959 *The Hevajra Tantra: A Critical Study*. 2 vols. London: Oxford University Press.

STABLEIN, William

- 1976 “Tibetan Medical-Cultural System”. In: Dawa Norbu (ed.). *An Introduction to Tibetan Medicine*, pp. 39–51.

STEARNS, Cyrus

- 2007 *King of the Empty Plain*. Ithaca, NY: Snow Lion.

STEIN, R. A.

- 1962 *La civilisation tibétaine*. Paris: Dunod.
- 1993 山口瑞鳳, 定方晟訳 『チベットの文化』 決定版. 東京: 岩波書店.

SUGIKI, Tunchiko (杉木, 恒彦)

- 2011 「“不死”のインド宗教史: 密教の成就者たちの“不死”の死生観」 In: 『死生学年報』 2011, pp. 203–226.

TACHIKAWA, Musashi (立川, 武蔵)

- 1987 『トゥカン『一切宗義』カギユ派の章』 *Studia Tibetica*, 13. 東京: 東洋文庫.
- 2015 『マンダラ観想と密教思想』 東京: 春秋社.

T’AI, Hui-li (邵, 惠莉) / FAN, Chün-shu (範, 軍澍)

- 2006 「蘭山範氏藏敦煌写経目録」 In: 『敦煌研究』 2006, 3, pp. 79–85.

TAKATA, Ninkaku (高田, 仁覚)

- 1978 『インド・チベット真言密教の研究』 高野町: 密教学術振興会.

THOMAS, F. W.

- 1951 *Tibetan Literary Texts and Documents Concerning Chinese Turkestan*, pt. 2: Documents. London: Luzac.

THONDUP, Tulku Rinpoche

- 1986 *Hidden Teachings of Tibet: An Explanation of the Terma Tradition of the*

*Nyingma School of Buddhism*. London: Wisdom.

THURMAN, Robert A. F.

1984 *Tsong Khapa's Speech of Gold in the Essence of True Eloquence: Reason and Enlightenment in the Central Philosophy of Tibet*. Princeton, N.J.: Princeton University Press.

TOGANŌ, Shōun (桐尾, 祥雲)

1931 「延命法の史的考察」 In: 『密教研究』 vol. 43, pp. 1–28.

TRINLAE, Bhikshuni Lozang

2017 *Kun-mkhyen Pad-ma Dkar-po's Amitāyus Tradition of Vajrayāna Buddhist Transformative Care: Contemplative Text, Phenomenological Experience, and Epistemological Process*. Berlin: Lit Verlag.

TSĒNG, Hsüeh-mei (曾, 雪梅)

2003 「甘肅省図書館蔵敦煌藏文文献叙録」 In: 『敦煌研究』 Vol. 5, pp. 70–76.

TSERING, Tashi

2007 “On the Dates of Thang stong rgyal po”. In: PS, pp. 268–278.

TSUDA, Shinichi (津田, 真一)

1973 「四輪三脈の身体観」 In: 『インド思想と仏教: 中村元博士還暦記念論集』 pp. 293–308. 東京: 春秋社.

1974 *The Saṃvarodayatantra: Selected Chapters*. Tokyo: Hokuseido Press.

TSUJI, Naoshiro (辻, 直四郎)

1974 『サンスクリット文法』 東京: 岩波書店.

1979 『アタルヴァ・ヴェーダ讃歌: 古代インドの呪法』 東京: 岩波書店.

TSUKAMOTO, Keishō (塚本, 啓祥) / MATSUNAGA, Yūkei (松長, 有慶) / ISODA, Hirohumi (磯田, 熙文)

1989 『密教経典篇』 梵語仏典の研究, vol. 4. 京都: 平楽寺書店.

TSUMAGARI, Shin'ichi (津曲, 真一)

2003 「チベット人の死生観: 死を欺く儀式と三つの生命」 In: 『死生学研究』 2, pp. 56–73.

TUCCI, Giuseppe

1949 *Tibetan Painted Scrolls*. 3 vols. Roma: Libreria dello Stato.

1969 Tr. from the Italian by Alan Houghton Brodrick. *The Theory and Practice of the Maṇḍala: With Special Reference to the Modern Psychology of the Subconscious*. London: Rider & Company.

1984 ロルフ・ギーブル訳 『マンダラの理論と実践』 東京: 平河出版社.

TULKU TSULTRIM ZANGPO

2001 *A Commentary on the Boundless Vision of Dzogchen*. Buddhayana Foundation Series, 9. [Boston?]: [Shambhala?].

TURPEINEN, Katarina Sylvia

2015 *Vision of Samantabhadra: The Dzokchen Anthology of Rinzin Gödem*. Ph.D. dissertation. [Charlottesville]: University of Virginia, 2015.

UEKI, Masatoshi (植木, 雅俊)

2008 『法華経: 梵漢和対照・現代語訳』 上下巻. 東京: 岩波書店.

UEYAMA, Daishun (上山, 大峻)

1963 「敦煌出土法成訳『菩薩律儀二十頌』並に『八転声頌』について」 In: 『印度学仏教学研究』 Vol. 22, pp. 337–343.

1988 「吐蕃の寫經事業と敦煌」 In: 唐代史研究會 (編) 『中國都市の歴史的研究』 pp. 190–198.

2012 『敦煌佛教の研究』 増補版. 京都: 法藏館.

UPASAK, C. S.

1990 *History of Buddhism in Afghanistan*. Sarnath, Varanasi: Central Institute of Higher Tibetan Studies.

VALENTINE, Jay

2013 *Lords of the Northern Treasures: The Development of the Tibetan Institution of Rule by Successive Incarnations*. Ph.D. dissertation. [Charlottesville]: University of Virginia.

2018 “The Great Perfection in the Early Biographies of the Northern Treasure Tradition: An Introduction to and Translation of *The Life of Nam mkha' rgyal mtshan*”. In: RET, no. 43, pp. 95–133.

VIŚVABANDHU

1963–1966

(Ed.) *R̥gveda with the Padapāṭha and the Available Portions of the Bhāṣya-s by Skandasvāmin and Udgītha, the Vyākhyā by Venkaṭa-Mādhava and Mudgala's Vṛtti Based on Sāyaṇa-Bhāṣya*. 8 vols. Hoshiarpur: Vishveshvaranand Vedic Research Institute.

VOSTRIKOV, A. I.

1970 Translated from the Russian by Harish Chandra Gupta. *Tibetan Historical Literature*. Soviet Indology Series, no. 4. Calcutta: Indian Studies, Past & Present.

WADDELL, L. Austine

1958 *The Buddhism of Tibet or Lamaism*. 2nd Ed. Cambridge: W. Heffer.

WALLESER, Max

1916 *Aparimitāyur-jñāna-nāma-mahāyāna-sūtram: nach einer nepalesischen Sanskrit-Handschrift mit der tibetischen und chinesischen Version*. Heidelberg: Carl Winter's Universitätsbuchhandlung.

WALTER, Michael L.

1980 “Preliminary Results From A Study of Two Rasāyana Systems in Indo-Tibetan Esoterism”. In: HR, pp. 319–321.

2000 “Cheating death”. In: David Gordon White, ed. *Tantra in practice*, pp. [605]–623. Princeton: Princeton University Press.

- WANG, Nan-nan (王, 南南) / HUANG, Wei-chung (黄, 維忠)  
 2003 「甘肅省博物館所藏敦煌藏文文獻叙錄」 In: 『中国藏学』 2003, 4, pp. 68–82.
- WANG, Sen (王, 森)  
 1997 『西藏佛教发展史略』 修订第1版. 北京: 中国社会科学出版社. First published in 1983.  
 2016 三好祥子翻譯, 田中公明監訳 『チベット仏教發展史略』 東京: 科学出版社.
- WANG, Yao (王, 堯)  
 1999 「藏漢佛典對勘積讀之三: 大乘無量壽宗要經」 In: 『西藏研究』 汉文版, 1990-2, pp. 101–106.
- WANGCHUK, Dorji  
 2008 “Review [of Jörg Grafe, Vidyādhara: Früheste Zeit kaschmirischen Bṛhatkathā. Frankfurt am Main; Berlin; Bern; Bruxelles; New York; Oxford; Vienna: Peter Lang, Europäischer Verlag der Wissenschaften, 2001]”. In: *Tantric Studies*, 1, pp. 220–222.  
 2018 “On the Etymology of “bdud rtsi”. In: *Philologia Tibetica*. [<https://philologia-tibetica.blogspot.com/2018/07/on-etymology-of-bdud-rtsi.html>]
- WARDER, A. K.  
 1980 *Indian Buddhism*. 2nd Rev. Ed. Delhi: Motilal Banarsidass. First published in 1970.
- WAYMAN, Alex  
 1973 *The Buddhist Tantras: Light on Indo-Tibetan Esotericism*. New York: S. Weiser.
- WEST, Andrew  
 2011 “Proposal to Encode the Marchen Script in the SMP of the UCS”. <http://std.dkuug.dk/JTC1/SC2/WG2/docs/n4032.pdf>.
- WHITE, David Gordon  
 1996 *The Alchemical Body: Siddha Traditions in Medieval India*. Chicago: University of Chicago Press.
- WHITNEY, William Dwight  
 1905 *Atharva-veda Samhitā*. 2 vols. Harvard Oriental Series, vv. 7-8. Cambridge: Harvard University.
- WILLIS, J. D.  
 1985 “On the nature of Rnam-thar: Early Dge-lugs-pa Siddha Biographies”. In: Barbara Nimri Aziz [and] Matthew Kapstein (eds.). *Soundings in Tibetan Civilization*, pp. [304]–319. New Delhi: Manohar.
- WOGIHARA, Unrai (荻原, 雲来)  
 1971 *Bodhisattvabhūmi: A Statement of Whole Course of the Bodhisattva*. Tokyo: Sankibo Buddhist Book Store.  
 1972 「華嚴經題目の研究」 In: 『荻原雲来文集』 pp. 482–493. 東京: 山喜房仏書林.
- WU, Chi-yü (吳, 其昱)  
 1984 「大蕃国大徳・三蔵法師・法成伝考」 In: 牧田諦亮, 福井文雅責任編集 『敦煌と



中国仏教』 pp. 383–414. 東京: 大東出版社.

WYLIE, T. V.

1959 “A Standard System of Tibetan Transcription”. In: *Harvard Journal of Asiatic Studies*, vol. 22, pp. 261–267.

YABUKI, Keiki (矢吹, 慶輝)

1980 『鳴沙餘韻: 敦煌出土未傳古逸佛典開寶』 京都: 臨川書店. First published in 1933.

YAMADA, Tomoki (山田, 智輝)

2017 「ヴェーダ文献における金属関連語」 In: 『印仏』 65-2, pp. 277–281.

YAMAGUCHI, Shinobu (山口, しのぶ)

2010 「ネパール仏教の死者儀礼」 In: 日本佛教学会編 『仏教の生死観』 pp. 99–111. 京都: 平楽寺書店.

YAMAGUCHI, Susumu (山口, 益) / FUNABASHI, Issai (舟橋, 一哉)

1955 『世間品』 俱舍論の原典解明. 京都: 法蔵館.

YAMAGUCHI, Zuiho (山口, 瑞鳳)

1980 「吐蕃支配時代」 In: 『敦煌の歴史』 pp. [195]–232. 東京: 大東出版社.

1982 「チベット史料の年次計算法」 In: 『東洋学報』 vol. 63-3/4, pp. 135–163.

1985 「官文書と公文書」 In: 『敦煌胡語文献』 pp. 491–504. 東京: 大東出版社.

1987 『チベット』 上. 東京: 東京大学出版会.

1988 「チベット古派密教と「性瑜伽」」 下. In: 『UP』 vol. 191, pp. [16]–21. 東京: 東京大学出版会.

1990 「チベット暦置閏法定数の意味と歴史的閏月年表」 In: 『成田山仏教研究所紀要』 vol. 13, pp. 1–48. (再録) In: SCHUH 2012, pp. 1095–1146.

2004 『チベット』 下. 改訂版. 東京: 東京大学出版会.

YASUDA, Akinori (安田, 章紀)

2017 『ニンテイクの研究: ロンチェンパの思想を中心に』 浦安: 起心書房.

YONEZAWA, Yoshiyasu (米澤, 嘉康)

2012 「大乘仏教の呼称をめぐって: sūtra の用例を中心に」 In: 『経典の成立と展開受容』 (経典とは何か, 2), pp. 93–107. 京都: 平楽寺書店.

YOSHIMURA, Shūki (芳村, 修基)

1954 「西域出土の法成師文献」 In: 『印仏』 vol. 5, pp. 296–298.

1957 「龍大西域資料中のチベット醫學文献の残葉」 In: 『印仏』 vol. 9-5-1, pp. 200–203.

1961 「チベット醫學文献の残葉: <<bDud-rtsi sñiñ-po yan-lag-brgyad-pa gsañ-ba man-ñag-gi rgyud>> <<壽命藏八科 [醫] の教説奥義>>, 残葉の譯註」 In: 『西域文化研究』 vol. 4, pp. [255]–316.

ZANGPO, Ngawang

2002 (Tr.) *Guru Rinpoché: His Life and Times*. Ithaca, N.Y.: Snow Lion Publications.

2003 (Tr.) *Timeless Rapture: Inspired Verse of the Shangpa Masters*. Ithaca, N.Y.: Snow Lion Publications.

ZLA-BA-TSHE-RING

1999 *Yig gzugs sna brgya'i phyi mo zhal bshus*. Pe-cing: Mi-rigs-dpe-skrun-khang.